

もり まち  
森 町

# 倉知川右岸遺跡

— 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査報告書 —

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

もり まち  
森 町

# 倉知川右岸遺跡

— 北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財調査報告書 —

平成 15 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺構集中範囲調査状況 SE →



遺構集中範囲完掘（人の立っている所が、プラスチック状ビット） SE →



配石遺構 SE →



P-51 SW →



P-20 SE →



P-87 NW →



赤彩土器 (図 V-37-145)



赤彩土器 (図 V-46-220)



石冠様石器 (図 IV-6 H-1 5)



III群 A-3類土器



IV群 A 類土器

## 例 言

1. 本書は、日本道路公団北海道支社がおこなう北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事にもない、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成14年度に発掘調査を実施した、森町倉知川右岸遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（第196集）である。
2. 発掘調査および報告書の作成は、第1調査部第2調査課が行った。
3. 本書の執筆は菊池慈人、新家水奈、坂本尚史、福井淳一、柳瀬由佳、藤井 浩がおこない、文責は文末に記載した。全体の編集は坂本尚史、柳瀬由佳が担当した。
4. 現地での写真撮影および遺物の写真撮影は菊池慈人が担当した。
5. 土壌理化学分析、炭化種子選別・同定はバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
6. 放射性炭素年代測定は株式会社地球科学研究所に依頼した。
7. 溜め糞と推測した灰状堆積物の分析は、酪農学園大学獣医学部寄生虫学教室（野生動物学）および酪農学園大学野生動物医学センターに依頼した。
8. 「ヒスイ」製遺物の産地分析は、京都大学原子炉実験所に依頼した。
9. 動物遺体の同定は金子浩昌氏に御教授いただいた。
10. 整理作業は、一次整理を新家・福井・柳瀬、二次整理・データ管理を坂本・柳瀬が担当した。
11. テフラ層および土石堆積物の鑑定は、第1調査部第1調査課花岡正光が行った。
12. 報告書刊行後、遺物および図面・台帳は森町教育委員会が、写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターが保管する。
13. 調査にあたっては、下記の機関および諸氏の御指導、御協力をいただいた（順不同、敬称略）。

北海道教育庁生涯学習部文化課、森町教育委員会 藤田登・佐藤稔・荻野幸男・八重柏誠・本山志郎・山田あや子・渡部明美・鎌田しのぶ、森町立鷺ノ木小学校、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一・吉田力、七飯町教育委員会 石本省三(故人)・山田央、長万部町教育委員会、函館市教育委員会 田原良信・野村祐一、市立函館博物館 長谷部一弘、市立函館博物館五稜郭分館 佐藤智雄、南茅部町教育委員会 阿部千春・福田祐二・小林貢、南茅部町埋蔵文化財調査団 坪井睦美・輪島慎二・野月寿彦、松前町教育委員会 久保泰・前田正憲・谷岡康孝・天方直仁・竹内友香、福島町教育委員会 小柳リラコ、知内町郷土資料館 高橋豊彦、木古内町教育委員会 菅野文二・大矢内愛史・木元豊・三上英則、上磯町教育委員会 森端裕・安西雅希、戸井町教育委員会 鈴木正昭、泊村教育委員会 田部淳、上ノ國町教育委員会 松崎水穂・斉藤邦典・三浦秀俊・松田輝哉・塚田直哉、乙部町教育委員会 森山樹・藤田巧、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉・青野修宏、奥尻町歴史民俗資料館 木村哲朗、今金町教育委員会 寺崎康史・宮本雅道、厚沢部町教育委員会 石井淳平、虻田町教育委員会 角田隆志、岩内町教育委員会 野辺地初雄、千歳市教育委員会 田村俊之・松田淳子・豊田宏良、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一・森秀之、厚真町教育委員会 乾哲也・小野哲也、平取町教育委員会 森岡健治・長田佳宏、浦幌町教育委員会 後藤秀彦、苫小牧市博物館 赤石慎三、苫小牧市 工藤肇、北海道開拓記念館 山田悟郎・平川善祥・右代啓視・小林幸雄・鈴木琢也、秋田県埋蔵文化財センター 河田弘幸・五十嵐一治・小林聡幸・宇田川浩一・菅野美香子・小島朋夏、鹿島町教育委員会 佐野一絵・榎本剛治、青森市教育委員会 児玉大成、青森県埋蔵文化財調査センター 成田滋彦・神康雄、坂本真弓、青森県立郷土館 鈴木克彦、森田村教育委員会 佐野忠史、北上市立埋蔵文化財センター 稲野裕介、岩田貴之、鹿角市教育委員会 藤井安正・花海義人、栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 吉田吾・藤田直也、北海道考古学研究所 横山英介、帝京大学 阿部朝衛、東北町教育委員会 古屋敷則雄、国際縄文学会 関俊彦



## 記号等の説明

1. 遺構の表記には、本文および図表中では次の略号を使用した。発掘区名と区別するため、「H-1」、「SP-2」のように、アルファベットとアラビア数字の間にはハイフンを挿入した。

H：竪穴住居跡 P：土坑 S：石組炉 SP：柱穴状ピット F：焼土  
遺構内の施設に関しては以下の略号を用いた。

HP：竪穴住居跡内の土坑 HF：竪穴住居跡内の焼土 PP：土坑内の土坑 PF：土坑内の焼土

2. 実測図、拓影図の縮尺は、原則として次のとおりである。図にはスケールを付した。

基本土層断面図・土石流土層断面図 1：50 遺構平面・土層断面図 1：40

柱穴状ピット平面・土層断面図 1：50

土器 1：3 剥片石器・石斧類・土製品・石製品 1：2 礫石器 1：4

3. 調査区の設定は道路公団の工事事設計図を基にした。これは函館を基点にしたもので、そのため作成した図面は「北が上」の体裁をとっていない。

4. 基本土層図、遺構の土層堆積図に表記した数字は標高(単位m)を示す。

5. 本文および表中で、遺構の規模は次の要領で計測値を示した(単位m)。なお一部破壊されているもの等については、現存長を(丸括弧)で示した。

・住居・土坑：(確認面の長軸長/床・坑底面の長軸長)×(確認面の短軸長/床・坑底面の短軸長)×確認面からの最大深

・柱穴状ピット：(確認面の長軸長/床・坑底面の長軸長)×確認面からの最大深

・石組炉：(確認面の長軸長/石組内の長軸長)×(確認面の短軸長/石組内の短軸長)(焼土長軸×短軸×層厚)

・焼土：確認面の長軸長×短軸長×層厚

6. 遺構の遺物出土状況図における遺物のシンボルマークは次のとおりである。なお、床面・坑底面出土は塗り潰し、覆土出土は白抜きとしている。

土器：●(床面・坑底面出土)○(覆土出土) 礫：■(床面・坑底面出土)□(覆土出土)

石器：▲(床面・坑底面出土)△(覆土出土) その他：★(床面・坑底面出土)☆(覆土出土)

7. 土層の表記は、基本土層はローマ数字、遺構外で基本土層に該当しないものは小文字アルファベットで、遺構内の層位はアラビア数字で示した。土層の色調表現は、『新版標準土色帖 2002版』を使用した。粘度、土性分析の観察方法は、『土壤調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984)を参考にした。また、土層の混在状態を、基本土層記号などを用いて以下のように表す場合がある。

A+B：AとBがほぼ同量混じる A>B：AにBが微量混じる

A>B：AにBが少量混じる A≈B：AとBはほぼ同質である

8. 石器にみられた光沢、すり痕は、図中では網掛けで平面範囲を示した(図III-7)。スクレイパー・つまみ付きナイフの光沢と、台石・石皿のすり面は、強弱等の状況に応じてトーンの種類を変えている。付着物については塗潰しで表現している。

9. 石器の断面、側面等の表現で、敲打痕はV-V、すり痕は|ー|で範囲を示した。節理面は実線と破線を組み合わせたもので表現した。

# 目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	

<b>I 調査の概要</b>	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査結果の概要	4
5 VII層の欠失範囲と「造成土」	14
6 土石流堆積物	14
<b>II 遺跡の立地と周辺の遺跡</b>	
1 遺跡の位置と周辺の環境	19
2 周辺の遺跡	24
<b>III 調査の方法</b>	
1 調査区の設定	25
2 基本層序	25
3 調査の方法	27
4 遺物の分類	36
<b>IV 遺構と遺構出土の遺物</b>	
1 概要	41
2 配石遺構	41
3 竪穴住居跡	45
4 土坑	87
5 石組炉	178
6 焼土	184
7 柱穴状ピット	190
8 その他	201
<b>V 包含層出土の遺物</b>	
1 概要	205

2	土器	205
3	石器	265
4	土製品	294
5	石製品	296

## VI 自然科学的手法による分析結果

1	放射性炭素年代測定	309
2	土壌理化学分析、種実遺体選別・同定	312
3	「ヒスイ」製遺物の産地分析	323
4	北海道森町倉知川右岸遺跡のタヌキ溜糞と推定された灰状堆積物から検出された小哺乳類の同定および寄生蠕虫類虫卵検査について	329

## VII 成果と課題

1	遺構	333
2	土器	347
3	石器	352
4	アスファルト付着遺物について	360
5	自然科学的分析結果について	360
	付編 八雲町野田生1遺跡における「環状を成す可能性のある礫群」について	363

## 引用・参考文献

一覧表

写真図版

報告書抄録

奥付

# 挿図目次

## I章 調査の概要

図 I-1	遺跡の位置	2
図 I-2	調査範囲	3
図 I-3	遺構位置図	6
図 I-4	遺構位置図(集中範囲)	7
図 I-5 (1)	遺構位置図 (後期前葉の遺構集中範囲 1)	8
図 I-5 (2)	遺構位置図 (後期前葉の遺構集中範囲 2)	9
図 I-6 (1)	礫分布図(配石遺構周辺 1)	10
図 I-6 (2)	礫分布図(配石遺構周辺 2)	11
図 I-7	礫分布図	12
図 I-8	掘上土分布図	13
図 I-9	V層欠失範囲と「造成土」分布範囲	13
図 I-10	III層上面の地形と土石流堆積物分布範囲	16
図 I-11	土石流堆積物土層断面	17

## II章 遺跡の立地と周辺の遺跡

図 II-1	民家関連遺物	19
図 II-2	周辺の地形(1)	20
図 II-3	周辺の地形(2)	21
図 II-4	周辺の遺跡	22

## III章 調査の方法

図 III-1	グリッド設定と調査区内の呼称	28
図 III-2	土層断面の位置と基本土層模式図	29
図 III-3	土層断面(1)	30
図 III-4	土層断面(2)	31
図 III-5	土層断面(3)	32
図 III-6	土層断面(4)	33
図 III-7	石器の計測位置と部分名称	39

## IV章 遺構と遺構出土の遺物

図 IV-1	配石遺構(1)	42
図 IV-2	配石遺構(2)	43
図 IV-3	配石遺構(3)	44
図 IV-4	H-1(1)	46
図 IV-5	H-1(2)	47
図 IV-6	H-1(3)	48
図 IV-7	H-2(1)	51
図 IV-8	H-2(2)	52
図 IV-9	H-2(3)	53
図 IV-10	H-2(4)	54
図 IV-11	H-2(5)	55
図 IV-12	H-2(6)	56
図 IV-13	H-3	59
図 IV-14	H-5(1)	60
図 IV-15	H-5(2)	61
図 IV-16	H-5(3)	63

図 IV-17	H-5(4)	64
図 IV-18	H-5(5)	65
図 IV-19	H-6(1)	67
図 IV-20	H-6(2)	68
図 IV-21	H-6(3)	69
図 IV-22	H-6(4)	70
図 IV-23	H-6(5)	71
図 IV-24	H-6(6)	72
図 IV-25	H-6(7)	74
図 IV-26	H-6(8)	75
図 IV-27	H-8(1)	77
図 IV-28	H-8(2)	78
図 IV-29	H-8(3)	79
図 IV-30	H-7(1)	81
図 IV-31	H-7(2)・H-9(1)	83
図 IV-32	H-9(2)	84
図 IV-33	H-10	86
図 IV-34	P-1・2	88
図 IV-35	P-3・4	90
図 IV-36	P-5・6・7	92
図 IV-37	P-8・9・10	94
図 IV-38	P-11・12・13	96
図 IV-39	P-14・16	98
図 IV-40	P-15	100
図 IV-41	P-17(1)	102
図 IV-42	P-17(2)	103
図 IV-43	P-18・19(1)	105
図 IV-44	P-19(2)	106
図 IV-45	P-20(1)	107
図 IV-46	P-20(2)	108
図 IV-47	P-21(1)	111
図 IV-48	P-21(2)	112
図 IV-49	P-21(3)	113
図 IV-50	P-21(4)	114
図 IV-51	P-22・27・28(1)	117
図 IV-52	P-27・28(2)・P-23	118
図 IV-53	P-24・25	121
図 IV-54	P-26・30(1)	122
図 IV-55	P-30(2)・31・32	124
図 IV-56	P-33・34(1)	126
図 IV-57	P-34(2)	127
図 IV-58	P-35(1)	129
図 IV-59	P-35(2)	130
図 IV-60	P-36・68(1)	132
図 IV-61	P-36・68(2)・37	133
図 IV-62	P-38・39・40(1)	135
図 IV-63	P-40(2)	137
図 IV-64	P-41・42・43(1)	139

図Ⅳ-65	P-43 (2).....	140	図Ⅴ-9	包含層の土器 (6).....	218
図Ⅳ-66	P-44・45 .....	142	図Ⅴ-10	包含層の土器 (7).....	219
図Ⅳ-67	P-46・47 .....	143	図Ⅴ-11	包含層の土器 (8).....	220
図Ⅳ-68	P-48・49 (1)・50.....	145	図Ⅴ-12	包含層の土器 (9).....	221
図Ⅳ-69	P-49 (2).....	147	図Ⅴ-13	包含層の土器 (10).....	222
図Ⅳ-70	P-51 (1).....	148	図Ⅴ-14	包含層の土器 (11).....	223
図Ⅳ-71	P-51 (2).....	151	図Ⅴ-15	包含層の土器 (12).....	224
図Ⅳ-72	P-51 (3)・52・53 (1) .....	152	図Ⅴ-16	包含層の土器 (13).....	227
図Ⅳ-73	P-53 (2).....	154	図Ⅴ-17	包含層の土器 (14).....	228
図Ⅳ-74	P-54・55 .....	156	図Ⅴ-18	包含層の土器 (15).....	229
図Ⅳ-75	P-56・57・58・59 .....	158	図Ⅴ-19	包含層の土器 (16).....	230
図Ⅳ-76	P-60・61・62・63・64・66・74 .....	161	図Ⅴ-20	包含層の土器 (17).....	231
図Ⅳ-77	P-67・69・71・72 .....	164	図Ⅴ-21	包含層の土器 (18).....	232
図Ⅳ-78	P-70 .....	166	図Ⅴ-22	包含層の土器 (19).....	233
図Ⅳ-79	P-75・76・77・78 .....	168	図Ⅴ-23	包含層の土器 (20).....	234
図Ⅳ-80	P-79・84・87 (1).....	170	図Ⅴ-24	包含層の土器 (21).....	235
図Ⅳ-81	P-87 (2).....	172	図Ⅴ-25	包含層の土器 (22).....	236
図Ⅳ-82	P-87 (3).....	173	図Ⅴ-26	包含層の土器 (23).....	237
図Ⅳ-83	P-88・89 (1).....	175	図Ⅴ-27	包含層の土器 (24).....	238
図Ⅳ-84	P-89 (2).....	176	図Ⅴ-28	包含層の土器 (25).....	239
図Ⅳ-85	P-90 .....	177	図Ⅴ-29	包含層の土器 (26).....	241
図Ⅳ-86	S-1・2・11 .....	179	図Ⅴ-30	包含層の土器 (27).....	245
図Ⅳ-87	S-3・4・5・6・7 .....	181	図Ⅴ-31	包含層の土器 (28).....	246
図Ⅳ-88	S-8・9・10・12・13・14・15 .....	183	図Ⅴ-32	包含層の土器 (29).....	247
図Ⅳ-89	F-1・2・3・4 .....	185	図Ⅴ-33	包含層の土器 (30).....	248
図Ⅳ-90	F-5・6・7・8・11 .....	187	図Ⅴ-34	包含層の土器 (31).....	249
図Ⅳ-91	F-9・10 .....	189	図Ⅴ-35	包含層の土器 (32).....	250
図Ⅳ-92	柱穴状ビット (1).....	191	図Ⅴ-36	包含層の土器 (33).....	251
図Ⅳ-93	柱穴状ビット (2).....	192	図Ⅴ-37	包含層の土器 (34).....	252
図Ⅳ-94	柱穴状ビット (3).....	193	図Ⅴ-38	包含層の土器 (35).....	253
図Ⅳ-95	柱穴状ビット (4).....	194	図Ⅴ-39	包含層の土器 (36).....	254
図Ⅳ-96	柱穴状ビット (5).....	195	図Ⅴ-40	包含層の土器 (37).....	255
図Ⅳ-97	柱穴状ビット (6).....	196	図Ⅴ-41	包含層の土器 (38).....	256
図Ⅳ-98	柱穴状ビット (7).....	197	図Ⅴ-42	包含層の土器 (39).....	257
図Ⅳ-99	柱穴状ビット (8).....	198	図Ⅴ-43	包含層の土器 (40).....	258
図Ⅳ-100	柱穴状ビット (9).....	199	図Ⅴ-44	包含層の土器 (41).....	259
図Ⅳ-101	柱穴状ビット (10).....	200	図Ⅴ-45	包含層の土器 (42).....	260
図Ⅳ-102	掘上土.....	202	図Ⅴ-46	包含層の土器 (43).....	261
図Ⅳ-103	X-1 .....	203	図Ⅴ-47	包含層の土器 (44).....	263
<b>V章 包含層出土の遺物</b>					
図Ⅴ-1	出土状況 (1)Ⅳ層の遺物.....	206	図Ⅴ-48	包含層の土器 (45).....	264
図Ⅴ-2	出土状況 (2)Ⅲ群A類土器.....	207	図Ⅴ-49	包含層の石器 (1).....	267
図Ⅴ-3	出土状況 (3)Ⅲ群土器.....	208	図Ⅴ-50	包含層の石器 (2).....	269
図Ⅴ-4	包含層の土器 (1).....	210	図Ⅴ-51	包含層の石器 (3).....	271
図Ⅴ-5	包含層の土器 (2).....	211	図Ⅴ-52	包含層の石器 (4).....	272
図Ⅴ-6	包含層の土器 (3).....	215	図Ⅴ-53	包含層の石器 (5).....	275
図Ⅴ-7	包含層の土器 (4).....	216	図Ⅴ-54	包含層の石器 (6).....	276
図Ⅴ-8	包含層の土器 (5).....	217	図Ⅴ-55	包含層の石器 (7).....	277
			図Ⅴ-56	包含層の石器 (8).....	279

図 V-57	包含層の石器 (9).....	280
図 V-58	包含層の石器 (10).....	282
図 V-59	包含層の石器 (11).....	283
図 V-60	包含層の石器 (12).....	285
図 V-61	包含層の石器 (13).....	287
図 V-62	包含層の石器 (14).....	289
図 V-63	包含層の石器 (15).....	290
図 V-64	包含層の石器 (16).....	291
図 V-65	包含層の石器 (17).....	292
図 V-66	包含層の石器 (18).....	293
図 V-67	包含層の土製品.....	295
図 V-68	包含層の石製品.....	297
図 V-69	出土分布 (1).....	298
図 V-70	出土分布 (2) 土器 1.....	299
図 V-71	出土分布 (3) 土器 2.....	300
図 V-72	出土分布 (4) 石器 1.....	301
図 V-73	出土分布 (5) 石器 2.....	302
図 V-74	出土分布 (6) 石器 3.....	303
図 V-75	出土分布 (7) 石器 4.....	304
図 V-76	出土分布 (8) 石器 5.....	305
図 V-77	出土分布 (9) 石器 6.....	306
図 V-78	出土分布 (10) 石器 7・土製品・石製品.....	307
図 V-79	折れ接合資料分布状況.....	308

## VI章 自然科学的手法による分析結果

### 1 放射性炭素年代測定

## 表目次

### I章 調査の概要

表 I-1	検出遺構数.....	5
-------	------------	---

表 I-2	出土遺物総計.....	5
-------	-------------	---

### II章 遺跡の立地と周辺の遺跡

表 II-1	周辺の遺跡一覧.....	23
--------	--------------	----

### V章 包含層出土の遺物

表 V-1	接合資料器種別点数.....	308
-------	----------------	-----

### VI章 自然科学的手法による分析結果

#### 1 放射性炭素年代測定

表 VI-1-1	<sup>14</sup> C年代測定結果.....	310
----------	----------------------------	-----

表 VI-1-2	<sup>14</sup> C年代測定試料一覧.....	311
----------	------------------------------	-----

#### 2 土壌理化学分析、種実遺体選別・同定

図 VI-2-1	土壌理化学分析結果.....	315
----------	----------------	-----

表 VI-2-2 (1)	.....	320
--------------	-------	-----

表 VI-2-2 (2)	.....	321
--------------	-------	-----

#### 3 「ヒスイ」製遺物の産地分析

表 VI-3-1	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 (1).....	327
----------	---------------------------	-----

表 VI-3-2	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 (2).....	327
----------	---------------------------	-----

表 VI-3-3	倉知川右岸遺跡出土の「ヒスイ」製石弁の元素分析値と比重の結果.....	327
----------	-------------------------------------	-----

図 VI-1-1	<sup>14</sup> C年代の暦年代校正 (1).....	310
----------	----------------------------------	-----

図 VI-1-2	<sup>14</sup> C年代の暦年代校正 (2).....	311
----------	----------------------------------	-----

#### 2 土壌理化学分析、種実遺体選別・同定

図 VI-2-1	高嶺とリン酸の相関図.....	315
----------	-----------------	-----

図 VI-2-2	分析用サンプル採取地点.....	316
----------	------------------	-----

#### 3 「ヒスイ」製遺物の産地分析

図 VI-3-1	ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材使用分布図.....	327
----------	------------------------------	-----

図 VI-3-2	分析試料.....	327
----------	-----------	-----

図 VI-3-3	ヒスイ原石と石弁の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布図.....	328
----------	--	-----

図 VI-3-4	ヒスイ原石と石弁の元素比値 Ca/Si 対 Sr/Fe の分布および分布図.....	328
----------	--	-----

図 VI-3-5	ヒスイ原石と石弁の元素比値 Na/Si 対 Mg/Si の分布および分布図.....	328
----------	--	-----

## VII章 成果と課題

図 VII-1	倉知川右岸遺跡から見た日昇.....	336
---------	--------------------	-----

図 VII-2	立石を伴う炉をもつ住居 (1).....	340
---------	----------------------	-----

図 VII-3	立石を伴う炉をもつ住居 (2).....	341
---------	----------------------	-----

図 VII-4	立石を伴う炉をもつ住居の分布.....	341
---------	---------------------	-----

図 VII-5	後期前葉の遺構集約.....	346
---------	----------------	-----

図 VII-6	倉知川右岸遺跡出土 V 群 A 類土器.....	350
---------	--------------------------	-----

図 VII-7	八雲町浜松 5 遺跡 8 号住居址出土土器.....	351
---------	----------------------------	-----

図 VII-8	石器の形態分類と観察結果.....	359
---------	-------------------	-----

図 VII-9	環状を成す可能性のある環群の分布状況 (八雲町野田生 1 遺跡).....	364
---------	---------------------------------------	-----

表 VI-3-4	倉知川右岸遺跡出土の「ヒスイ」製石弁の原材産地分析結果.....	327
----------	----------------------------------	-----

## VIII章 成果と課題

表 VII-1	立石を伴う炉をもつ住居報告例一覧.....	341
---------	-----------------------	-----

表 VII-2	フラスコ状土坑属性一覧.....	346
---------	------------------	-----

表 VII-3	スクレイパーの平面形態と刃部加工の関係.....	359
---------	--------------------------	-----

表 VII-4	石弁の平面形態と刃部の関係.....	359
---------	--------------------	-----

表 1	遺構一覧.....	370
-----	-----------	-----

表 2	遺構出土遺物一覧.....	374
-----	---------------	-----

表 3	包含層出土遺物層別数・分類別一覧.....	380
-----	-----------------------	-----

表 4	遺構出土石器石材別点数・重量一覧.....	381
-----	-----------------------	-----

表 5	包含層出土石器石材別点数・重量一覧.....	382
-----	------------------------	-----

表 6	遺構出土縄紋復原土器一覧.....	383
-----	-------------------	-----

表 7	遺構出土縄紋破片土器・土製品一覧.....	386
-----	-----------------------	-----

表 8	遺構出土土器・石製品一覧.....	392
-----	-------------------	-----

表 9	包含層出土縄紋復原土器一覧.....	394
-----	--------------------	-----

表 10	包含層出土縄紋破片土器一覧.....	401
------	--------------------	-----

表 11	包含層出土土器・石製品一覧.....	409
------	--------------------	-----

表 12	包含層出土縄紋土製品一覧.....	412
------	-------------------	-----

表 13	包含層出土石器接合資料一覧.....	412
------	--------------------	-----

## 写真図版目次

### VI章 自然科学的分析

#### 2 土壤理化学分析、種実遺体選別・同定

##### 図版VI-2-1 種実遺体

#### 4 灰状堆積物から検出された小哺乳類の同定

および寄生線虫類虫卵検査

##### 図版VI-4-1 倉知川右岸遺跡の灰状堆積物から

検出された小哺乳類の遺物

### 写真図版

#### 図版1 調査状況(1)

火山灰除去後 E→

25%調査開始 N→

#### 図版2 調査状況(2)

調査状況 SE→

調査状況

(工事用道路切り替え後) SE→

#### 図版3 調査状況(3)

遺構集中範囲調査状況 W→

遺構集中範囲調査状況 SE→

#### 図版4 H-1(1)

確認面 SW→

土層断面 W→

土層断面 S→

#### 図版5 H-1(2)

遺物出土状況 NE→

埋塞炉 NE→

石冠椽石櫛 NE→

#### 図版6 H-2(1)

覆土遺物出土状況 N→

土層断面 SE→

土層断面 NW→

#### 図版7 H-2(2)

完掘 SW→

炉断面 NE→

HP-3断面 SW→

HP-10断面 SW→

HP-12断面 SE→

#### 図版8 H-3

土層断面 SE→

土層断面 S→

完掘 SE→

#### 図版9 H-5

土層断面 SE→

遺物出土状況 E→

HP-1断面 SW→

HP-3断面 NW→

#### 図版10 H-6

遺物出土状況 N→

土層断面 SE→

HP-12断面 SE→

HP-18断面 SW→

#### 図版11 H-7

土層断面 NE→

土層断面 NW→

HP-1断面 W→

完掘 SW→

#### 図版12 H-8

炭化材出土状況 NE→

土層断面 NW→

HP-5断面 N→

HP-1断面 NE→

#### 図版13 H-9

土層断面 NE→

完掘 NE→

#### 図版14 H-10

土層断面 SE→

完掘 N→

炉断面 NW→

HP-1断面 N→

#### 図版15 P-2・4・7・8・10・11

P-2遺物出土状況 SW→

P-4土層断面 W→

P-7遺物出土状況 SW→

P-8遺物出土状況 SW→

P-10遺物出土状況 NW→

P-11土層断面 NE→

#### 図版16 P-12・15・17・22・24

P-12遺物出土状況 SW→

P-15土層断面 S→

P-17遺物出土状況 NE→

P-22土層断面 SE→

P-24土層断面 SE→

#### 図版17 P-20・21

P-20土層断面 W→

P-20遺物出土状況 SE→

P-20完掘 NE→

P-21土層断面 SW→

P-21遺物出土状況 S→

P-21完掘 S→

#### 図版18 P-23・26・27

P-23土層断面 NW→

P-23完掘 NW→

P-26土層断面 SW→

P-26完掘 SW→

P-27土層断面 NE→

P-27完掘 N→

#### 図版19 P-30・34・35

P-30土層断面 SW→

P-30遺物出土状況 SW→

P-34土層断面 SE→

- P-34遺物出土状況 SE→  
 P-35土層断面 NE→  
 P-35完掘 NE→  
 図版20 P-36・37・40・43・44・49  
 P-36土層断面 SE→  
 P-37土層断面 SE→  
 P-40土層断面 SE→  
 P-43遺物出土状況 E→  
 P-44遺物出土状況 NW→  
 P-49土層断面 SW→  
 図版21 P-51・53  
 P-51土層断面 SW→  
 P-51完掘 SW→  
 P-53土層断面 S→  
 P-53遺物出土状況 E→  
 P-53完掘 SE→  
 図版22 P-54・59・61・68・70  
 P-54土層断面 SE→  
 P-59土層断面 NE→  
 P-61土層断面 E→  
 P-68土層断面 E→  
 P-70土層断面 S→  
 P-70遺物出土状況 SW→  
 図版23 P-84・87・89  
 P-84土層断面 W→  
 P-87遺物出土状況 NW→  
 P-87完掘 NW→  
 P-89土層断面 SW→  
 P-89完掘 NW→  
 図版24 SP-12・21・23・31・128・160・231  
 SP-12断面 W→  
 SP-21断面 S→  
 SP-23・128断面 S→  
 SP-31断面 SW→  
 SP-160断面 SE→  
 SP-231断面 W→  
 図版25 F-1・2・3・4・8・9・10・11  
 F-1断面 SW→  
 F-2断面 NW→  
 F-3断面 E→  
 F-4断面 SE→  
 F-8断面 SW→  
 F-9断面 SE→  
 F-10断面 SW→  
 F-11断面 S→  
 図版26 S-1・2・4・6・9  
 S-1 N→  
 S-2 NE→  
 S-4 S→  
 S-6 SE→  
 S-9 NW→
- 図版27 S-7・8・10・11・13・15  
 S-7 NW→  
 S-8 N→  
 S-10 SW→  
 S-11 NE→  
 S-13 N→  
 S-15 SW→  
 図版28 配石遺構 S→  
 図版30 配石遺構  
 配石遺構土層断面 SW→  
 配石遺構土層断面 SE→  
 図版31 遺物出土状況(1)  
 土製品(図V-67-2) N→  
 土器(図V-26-85) SE→  
 フレイク集中 SE→  
 土器(図V-25-78) N→  
 図版32 遺物出土状況(2)  
 土器(図V-16-47) W→  
 土器(写真掲載12) NW→  
 図版33 遺物出土状況(3)  
 土器(図V-32-121) NW→  
 土器(図IV-65-1、V-18-54) S→  
 無名の沢斜面遺物出土状況 NE→  
 図版34 遺物出土状況(4)  
 土器 SW→  
 土器(図V-34-129) NW→  
 石斧(図V-57-118・119) E→  
 土器(図V-32-118) E→  
 図版35 遺物出土状況(5) 早期  
 遺物出土状況 W→  
 土器 E→  
 土器 E→  
 遺物出土状況 N→  
 図版36 土層断面・土石流堆積物  
 Nライン土層断面 W→  
 15ライン土層断面 NW→  
 土石流堆積物土層断面 S→  
 土石流堆積物土層断面 S→  
 土石流堆積物土層断面 SW→  
 図版37 X-1・完掘  
 X-1断面 NW→  
 遺構集中範囲完掘 SE→  
 図版38 遺構の土器(1) H-1・2・5  
 図版39 遺構の土器(2) H-5  
 図版40 遺構の土器(3) H-5・6  
 図版41 遺構の土器(4)  
 H-9、P-1・2・16・19  
 図版42 遺構の土器(5) P-20・21  
 図版43 遺構の土器(6) P-21・26・27・34  
 図版44 遺構の土器(7) P-34・35・43  
 図版45 遺構の土器(8) P-53・70・87・89



- 図版46 遺構の土器 (9)  
包含層の土器 (1) I群A類
- 図版47 包含層の土器 (2) III群A類
- 図版48 包含層の土器 (3) III群A類
- 図版49 包含層の土器 (4) III群A類
- 図版50 包含層の土器 (5) III群A類
- 図版51 包含層の土器 (6) III群A類
- 図版52 包含層の土器 (7) III群A類
- 図版53 包含層の土器 (8) III群A類
- 図版54 包含層の土器 (9) III群A類
- 図版55 包含層の土器 (10) III群A類
- 図版56 包含層の土器 (11) III群A類
- 図版57 包含層の土器 (12) III群A類
- 図版58 包含層の土器 (13) III群A類
- 図版59 包含層の土器 (14) III群A類
- 図版60 包含層の土器 (15) III群A類
- 図版61 包含層の土器 (16) IV群A類
- 図版62 包含層の土器 (17) IV群A類
- 図版63 包含層の土器 (18) IV群A類
- 図版64 包含層の土器 (19) IV群A類
- 図版65 包含層の土器 (20) IV群A類
- 図版66 包含層の土器 (21) IV群A類
- 図版67 包含層の土器 (22)  
IV群A類・IV群C類
- 図版68 包含層の土器 (23)  
IV群B類・IV群C類
- 図版69 遺構の土器 (10) H-1・2
- 図版70 遺構の土器 (11) H-3・5・6
- 図版71 遺構の土器 (12) H-6・7・8・9・10
- 図版72 遺構の土器 (13)  
P-5・16・17・19・20
- 図版73 遺構の土器 (14) P-21
- 図版74 遺構の土器 (15)  
P-25・26・28・30・32・34・35
- 図版75 遺構の土器 (16)  
P-36・39・40・43
- 図版76 遺構の土器 (17)  
P-44・46・48・49・51・53・54
- 図版77 遺構の土器 (18)  
P-55・69・70・76・87・89  
SP-21・22・156・214
- 図版78 包含層の土器 (24)  
I群A類・II群B類・III群A類
- 図版79 包含層の土器 (25) III群A類
- 図版80 包含層の土器 (26) III群A類
- 図版81 包含層の土器 (27) III群A類
- 図版82 包含層の土器 (28) III群A類
- 図版83 包含層の土器 (29) III群A類
- 図版84 包含層の土器 (30)  
III群B類・IV群A類
- 図版85 包含層の土器 (31) IV群A類
- 図版86 包含層の土器 (32) IV群A類
- 図版87 包含層の土器 (33) IV群A類
- 図版88 包含層の土器 (34) IV群A類
- 図版89 包含層の土器 (35) IV群A類
- 図版90 包含層の土器 (36)  
IV群A類・IV群C類・VI群
- 図版91 遺構の石器 (1) 配石遺構、H-1
- 図版92 遺構の石器 (2) H-2
- 図版93 遺構の石器 (3) H-5
- 図版94 遺構の石器 (4) H-6
- 図版95 遺構の石器 (5) H-6
- 図版96 遺構の石器 (6) H-7・8・9、P-4
- 図版97 遺構の石器 (7) P-4・7・10・14・16
- 図版98 遺構の石器 (8) P-15・17・18
- 図版99 遺構の石器 (9) P-19・20・21・25
- 図版100 遺構の石器 (10)  
P-27・30・34・35・36・40・43・49
- 図版101 遺構の石器 (11) P-44・51・53
- 図版102 遺構の石器 (12)  
P-54・68・70・76・87
- 図版103 遺構の石器 (13)  
P-89、S-3・4、SP-33・60・77・97
- 図版104 包含層の石器 (1)  
石鏃、石槍、両面調整石器
- 図版105 包含層の石器 (2)  
つまみ付きナイフ (1)・(2)
- 図版106 包含層の石器 (3)  
錐形石器、ピエス・エスキュー、  
スクレイパー (1)
- 図版107 包含層の石器 (4)  
スクレイパー (2)、石核
- 図版108 包含層の石器 (5) 石弁
- 図版109 包含層の石器 (6) 蔽石
- 図版110 包含層の石器 (7)  
ナリ石 (1)・(2)
- 図版111 包含層の石器 (8) 扁平打製石器
- 図版112 包含層の石器 (9)  
北海道式石冠 (1)
- 図版113 包含層の石器 (10)  
北海道式石冠 (2)
- 図版114 包含層の石器 (11) 砥石 (1)
- 図版115 包含層の石器 (12) 砥石 (2)
- 図版116 包含層の石器 (13) 台石・石皿 (1)
- 図版117 包含層の石器 (14) 台石・石皿 (2)
- 図版118 包含層の石器 (15) 接合資料
- 図版119 包含層の土製品
- 図版120 包含層の石製品

## I 調査の概要

### 1 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査
委託者	日本道路公団北海道支社
受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	倉知川右岸遺跡（北海道教育委員会登録番号B-15-25）
所在地	茅部郡森町栗ヶ丘7、11-1・2
調査面積	9,350m <sup>2</sup>
発掘期間	平成14年5月7日～10月31日
整理期間	平成14年11月1日～平成15年3月30日 平成15年4月1日～平成16年3月31日

### 2 調査体制

平成14年度調査体制	平成15年度整理体制
理事長 大澤 満（～平成14年5月） 森重 循一（平成14年6月～）	理事長 森重 循一
専務理事 宮崎 勝	専務理事 宮崎 勝
常務理事 畑 宏明（平成14年6月～） （第1調査部長兼務）	常務理事 畑 宏明 （第1調査部長兼務）
第2調査課長 種市 幸生	第2調査課長 種市 幸生
主任 菊池 慈人 藤井 浩 新家 水奈（発掘担当者） 坂本 尚史 福井 淳一	主任 柳瀬 由佳（発掘担当者） 第1調査部第4調査課 主任 福井 淳一 第2調査部第3調査課 主任 新家 水奈 （発掘担当者） 坂本 尚史
文化財保護主事 柳瀬 由佳（発掘担当者）	第2調査部第4調査課 主任 菊池 慈人

### 3 調査にいたる経緯

北海道縦貫自動車道（函館～名寄間）は、函館市を起点として室蘭・苫小牧・札幌市を經由し、名寄市に至る総延長488kmの路線で、このうち国縫IC～和寒IC間359kmはすでに供用開始されている。七飯～長万部間の路線については平成2年4月に日本道路公団札幌建設局（当時）から北海道教育委員会へ埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた道教委は平成2年4月に所在確認調査を、平成5年に北側の長万部町から順次範囲確認調査（試掘調査）を開始した。森町内の試掘調査は平成7年から実施され、平成15年の段階で18遺跡の発掘調査が実施された（図II-4）。

倉知川右岸遺跡については、範囲確認調査が平成8年4月、平成13年10、11月に実施され、協議区域内のうち、発掘調査の必要な面積9,350m<sup>2</sup>が提示された。北海道教育委員会と道路公団との協議により、計画変更は不可能なことから、発掘調査を実施することとなった。（新家・坂本）

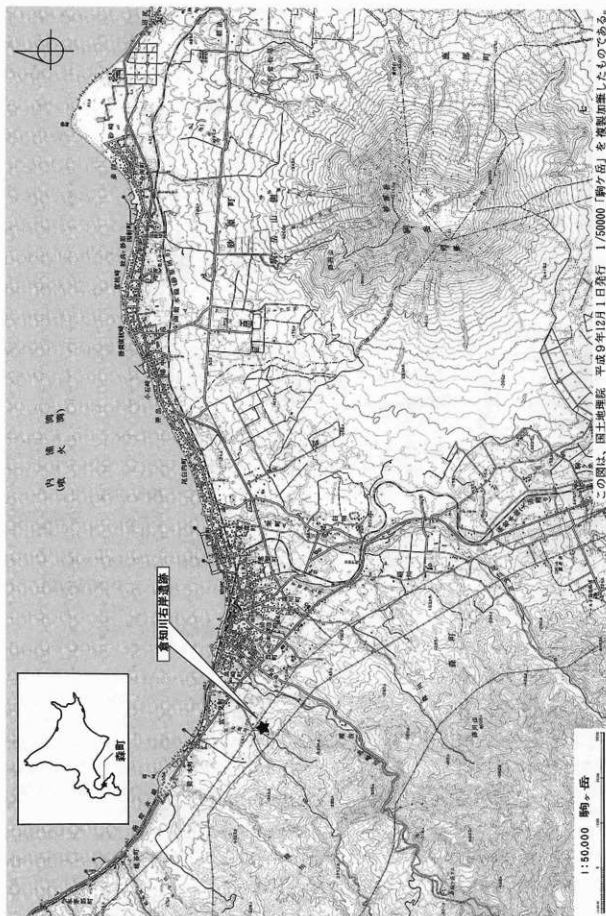


図1-1 遺跡の位置

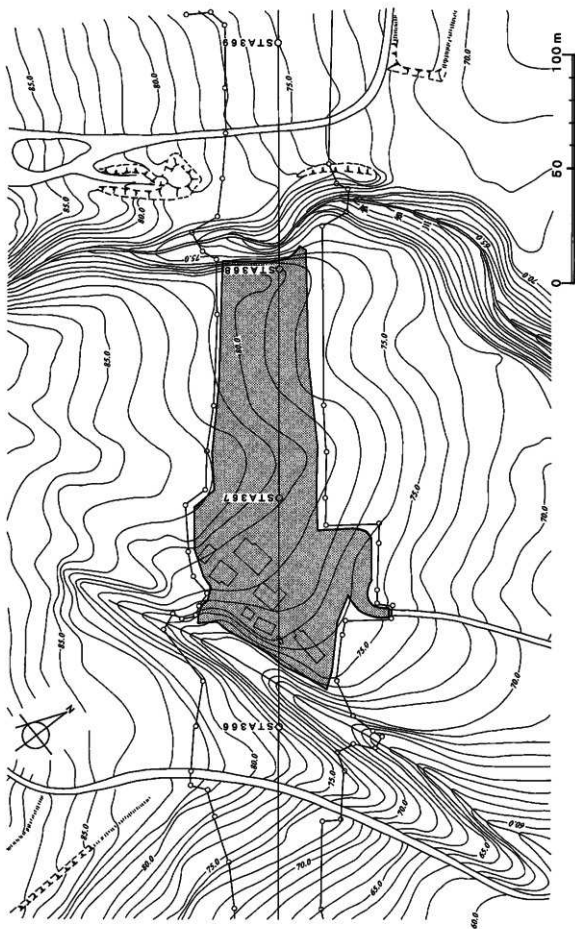


図 I - 2 調査範囲

#### 4 調査結果の概要 (図 I-3~10、表 I-1)

今回の調査では、縄文時代早期~後期の遺構・遺物が検出された。遺跡周辺の現況は畑であるが、Ko-dが厚く堆積していたため、遺構と遺物包含層の残存状況は良好であった。ただし、旧倉知邸にあたる範囲、工事用道路範囲では、若干削平・攪乱を受けた部分があった。

遺構・遺物の大半は、縄文時代中期前半と後期前葉の2つの時期に属するものである。遺構の内訳は、配石遺構1基、竪穴住居跡9軒、土坑81基、石組炉15基、焼土11か所、柱穴状ピット230基である。

縄文時代中期前半と考えられる遺構は、竪穴住居跡7軒(H-1・3・5~9)、土坑22基、焼土2か所、柱穴状ピット16基である。円筒土器上層式やサイベ沢Ⅷ式土器、北海道式石冠、扁平打製石器、台石・石皿などをともなっている。

竪穴住居跡は、無名の沢に面する急斜面の東側(H-1)と西側(H-7)、尾根状地形南東側(H-5・6・8)に主に分布している。後者は、調査区の南側に広がることが予測される。平面形態は、円形もしくは楕円形で、規模は長径3~5mである。柱穴は伴うものと伴わないものがある。明瞭な炉跡はH-1でのみ確認されている。土坑や焼土の分布は、無名の沢に面した斜面、斜面際の遺構集中範囲、尾根状地形部分にまぎらわれて、これより倉知川際まで散在している。

縄文時代後期前葉と考えられる遺構は、無名の沢に面する斜面際に集中している。配石遺構1基、竪穴住居跡2軒(H-2・10)、土坑45基、石組炉13基、焼土4か所、柱穴状ピット197基がある。伴う土器はトリサキ式が主である。

配石遺構は、長さ40~60cm、重さ8~45kgの大型礫14個が約5×2mのコ字状に配列されていた。周辺には、大きさ・形状が配石を構成するものと類似した礫が散在し、これらは本来配石であったものが人為的に移動された可能性がある。配石遺構が位置する調査区I13付近はその周辺に比べ、遺物分布が極端に少ない。竪穴住居跡は平面円形・楕円形で、規模は長径4m以下である。掘り込みが20cm前後と浅く、壁に沿って柱穴が巡り、立石を伴う炉が設置される。フラスコ状土坑は、径と深さが1m前後のものが多く、覆土中から30cm前後の大型礫が出土するものが特徴的にみられる。石組炉は遺構集中範囲の外側に分布する傾向がある。

後期の遺構が集中する無名の沢際の区域、特に配石の周辺では、Ko-gが確認できない部分があること、人為的に攪乱されたとみられる層が認められることなどから、配石遺構構築前に造成がおこなわれた可能性がある。

倉知川に面した範囲では、B-Tm降灰(10世紀)以前に発生した土石流による堆積物が確認された。土石流堆積物はVa層中にみられ、厚い部分は1mほどであった。土砂の様相は、濁川カルデラ起源の軽石・火山灰、黒色土、ロームなどが、大形のブロックで、あるいは攪拌された状態で混在するものであった。同様の堆積は、森川の氾濫原に立地する森川2遺跡・上台1遺跡でも検出されている。森川2遺跡は倉知川遺跡の南東側、直線で2kmの距離に位置する。

遺物は土器67,466点、土製品145点、石器5,552点、石製品29点、礫7,353点、合計80,547点が出土した。この内、遺構出土は土器4,809点、土製品110点、石器522点、石製品3点、礫710点の計6,154点、包含層・その他出土は土器62,657点、土製品35点、石器5,030点、石製品26点、礫6,643点、合計74,393点である(表I-1)。

土器は縄文時代中期前半(円筒土器上層式、サイベ沢Ⅷ式など)と後期前葉(主にトリサキ式)のものが大多数を占める。土器の分布は、中期前半では、円筒土器上層式が無名の沢側の急斜面に(図III-1、I-2・3区)、サイベ沢Ⅷ式・見晴町式が同時期の住居跡が分布する尾根状地形南東側に(図

表 I-1 検出遺構数

	配石遺構	竪穴住居跡	土坑	(うちフラスコ状土坑)	石組炉	焼土	柱穴状ピット
縄文時代			2				
縄文時代早期						1	4
縄文時代中期		7	22	(1)		2	16
縄文時代中期あるいは後期			8	(1)			7
縄文時代後期	1	2	47	(16)	15	7	203
縄文時代前～後期			1				
縄文時代後～晩期			1				
10世紀(B-Tm)前後						1	
合計	1	9	81	(18)	15	11	230

表 I-2 出土遺物総計

	土器										土製品								
	I A	II B	III A	III B	IV A	IV B	V C	V	不明	計	焼成 粘土製	ヒートアップ 土器	土玉	磨石 土製品	土偶	三角砂 土製品	土製品	計	
配石遺構																			
竪穴住居			1883		452					2335	89		2						81
土坑			776		1814			1		2291	4		1	1					6
石組炉					66					66									
焼土			12							12	13								13
柱穴状ピット	35		24		46					105									
遺構計	35		2695		2078			1		4909	106		3	1					110
包含物・その他	172	284	30968	71	30784	43	332	1	2	63657	13	1	4	4	5	2	6	35	
総計	207	284	33663	71	32862	43	332	1	3	67466	119	1	7	5	5	2	6	145	

	石器																		
	石鏃	石槍	阿波式 石鏃	フタナリ ナイフ	鹿形石鏃	スクレレ パー	ピエス・エ ス・エ	スフレイク	Uフレイク	フリック	石鏃	原石	石斧	磨石 片	石磨	たたら石	ナリ石	磨石 石鏃	
配石遺構																			
竪穴住居	5	4	1	2	3	10	3	17	2	333	6	1	8			10	3	11	
土坑	2	1	1	1		12	1	7	1	111	2		1			6		8	
石組炉										21							1		
焼土		1					1	1		35			1						
柱穴状ピット						3				10			1						
遺構計	7	6	2	3	3	25	5	25	3	310	8	1	11			17	3	19	
包含物・その他	107	7	20	40	16	156	36	184	13	3466	65	5	152	1	1	172	35	182	
総計	114	13	22	43	19	181	41	209	16	3776	73	6	163	1	1	189	38	201	

	石器								石製品			磨			縄文時代	総計	
	磨石打製 石鏃	北島式 石鏃	北島式 石鏃	砥石	台石・石鏃	加工済の ある磨	不明	計	石製 石鏃	石製品	計	磨	磨片	計			
配石遺構					3	1		4					16	2	18		22
竪穴住居	1	15	2	1	7	1		246	1		1	179	19	198			2871
土坑		6		1	28	2		191	2	2		298	16	314			2804
石組炉					2	1		25				151	1	152			243
焼土								39					12	2	14		78
柱穴状ピット					3			17					12	2	14		136
遺構計	1	21	2	2	43	5		522	1	2	3	668	42	710			6154
包含物・その他	33	179	3	20	78	48	11	9030		26	26	8109	534	6643	2		74393
総計	34	200	5	22	121	53	11	9552	1	28	29	6777	576	7353	2		80547

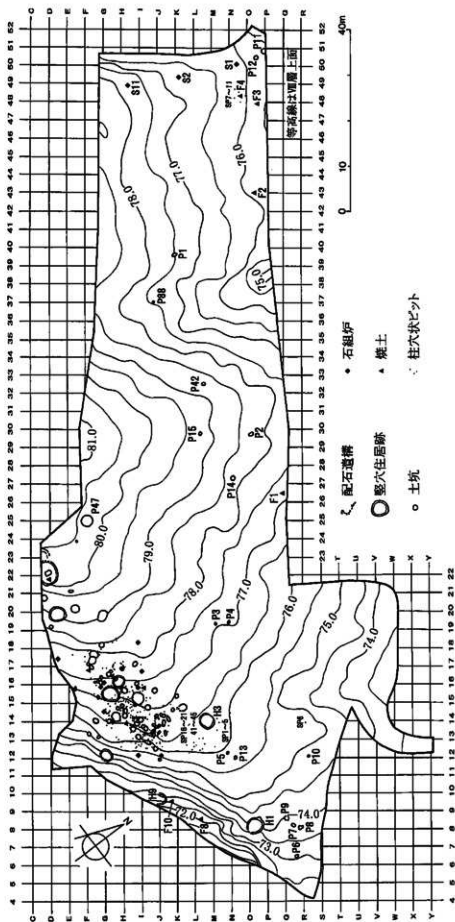


図1-3 遺構位置図

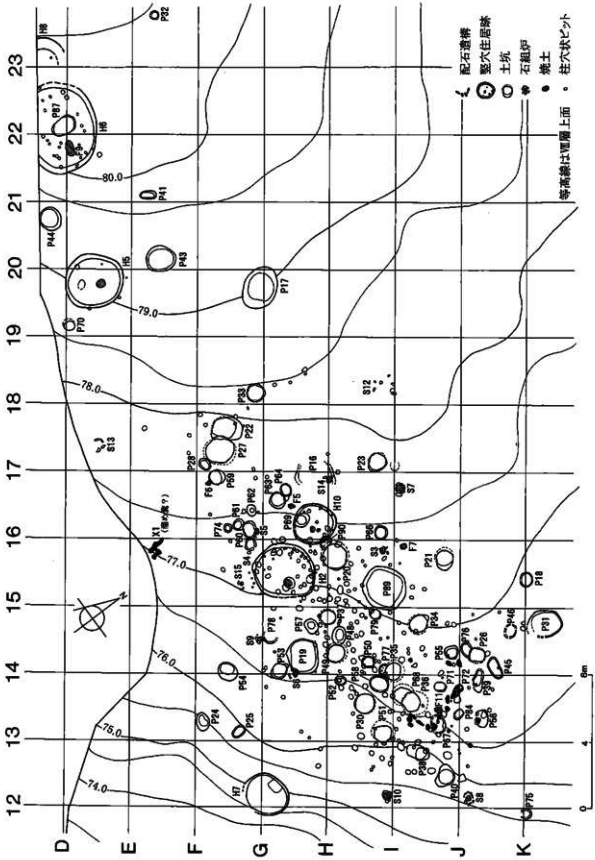


図 I-4 遺構位置図 (集中範囲)



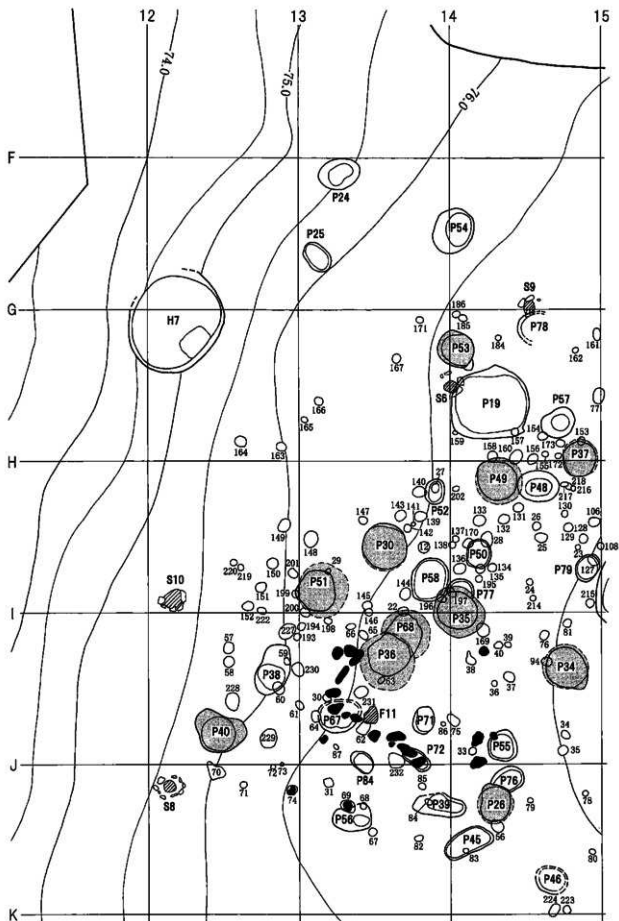


図 I - 5 (1) 遺構位置図 (後期前葉の遺構集中範囲 1)

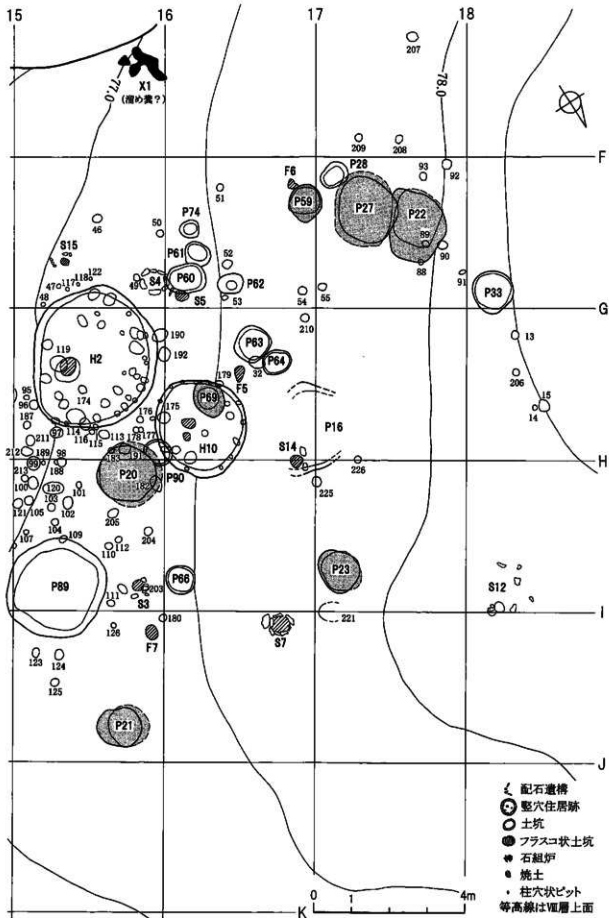
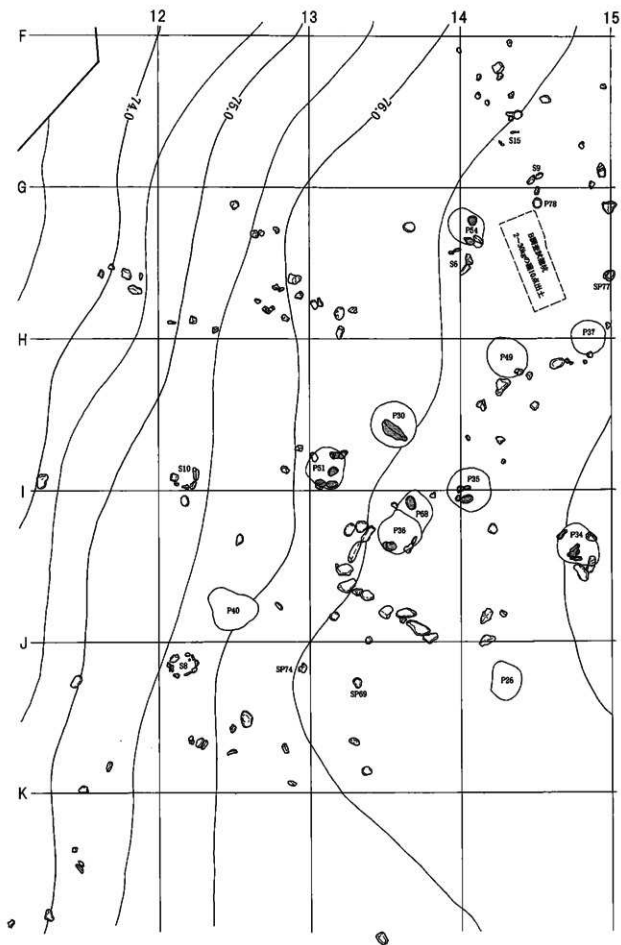


図 I - 5 (2) 遺構位置図 (後期前葉の遺構集中範囲 2)



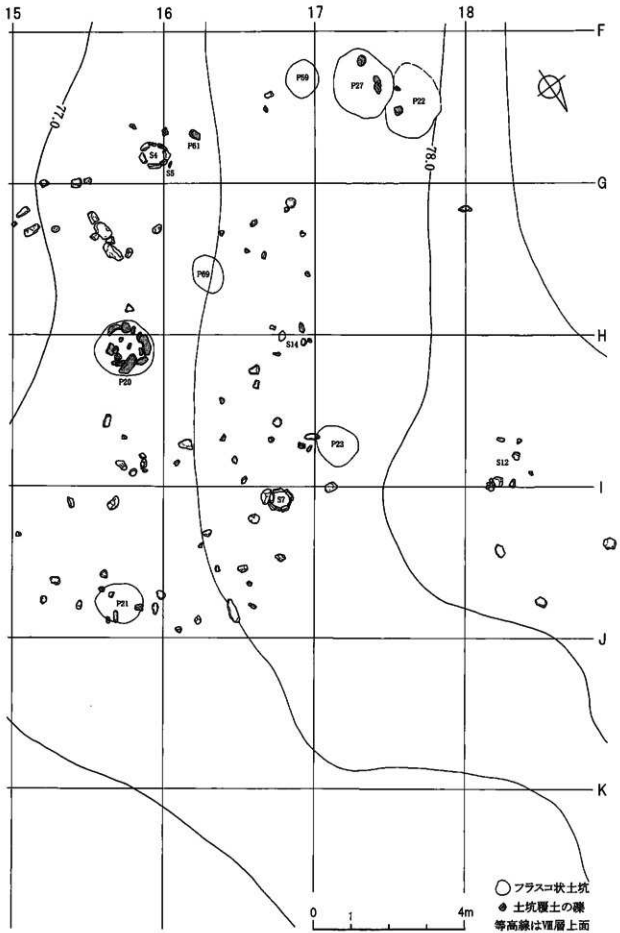


図 I-6 (2) 礫分布図 (配石遺構周辺 2)

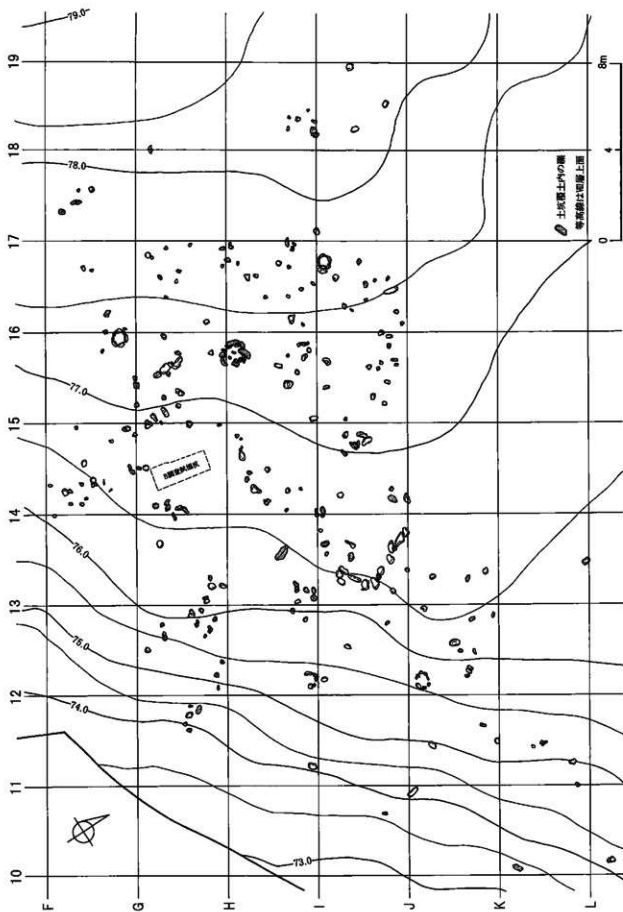


図1-7 礫分布図

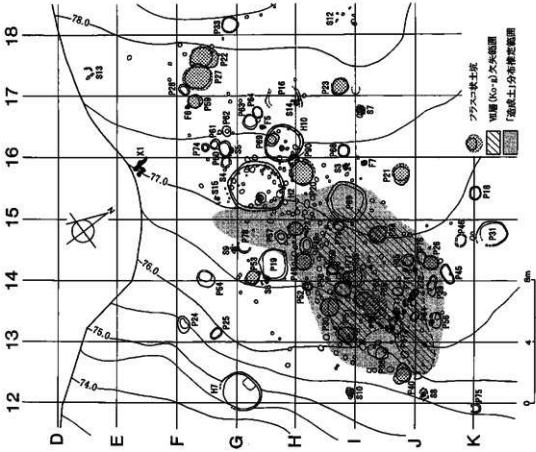


図 I-9 VI層欠失範囲と「遺成土」分布範囲

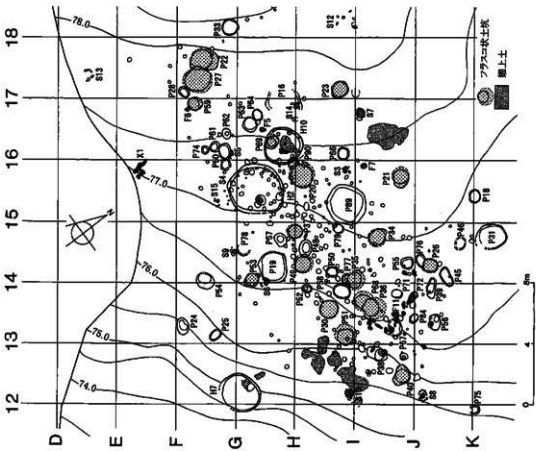


図 I-8 掘上土分布図

Ⅲ-1、Ⅱ-1区)、後期前葉のものが無名の沢斜面際の遺構集中範囲から西側の急斜面にかけてに(図Ⅲ-1、Ⅰ-1・2区)集中してみられた。

また、少数ではあるが、縄文時代早期前半の貝殻文土器が無名沢に続く斜面際のⅧa層から、縄文時代後期後葉の堂林式に相当する土器が倉知川に面した範囲から出土している。その他、前期前半の円筒土器下層式、中期後半の榎林式、後期中葉の手稻式も少数出土している。

石器は、剥片石器では石鎌、つまみ付きナイフ、スクレイパー、礫石器では敲石、扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿が多くみられる。また、石斧の破片が多数出土している。早期の包含層であるⅧa層から出土した石器では、石鎌、つまみ付きナイフ、断面三角形のすり石などがある。

土製品は土偶の脚部、土偶とみられる板状製品、鐔形土製品、三角形土製品、ミニチュア土器、土玉、焼成粘土塊などがある。

石製品は軽石製石製品(軽石を研磨したもの)が多くみられ、後期前葉の遺構群の周辺から出土している。また、H-1の覆土からは、石冠様石器が完形で出土している。

自然科学分析は放射性炭素年代測定、土壌理化学分析、炭化種子同定、動物遺存体同定などを実施し、詳細はⅥ・Ⅶ章に記載した。(新家・坂本)

## 5 Ⅶ層の欠失範囲と「造成土」(図Ⅰ-9、Ⅲ-5・6)

無名の沢側の遺構集中範囲内で、Ⅶ層:Ko-gが欠失する範囲および「造成土」と考えられる土層の分布を確認した。これらの欠失と分布は、遺構集中範囲内でも配石遺構側に偏っており、配石遺構や配石遺構周辺の遺構の構築に関わるものと考えられる。

Ⅶ層の欠失部分は、配石遺構周辺の南北6m、東西8mほどの範囲で確認した。ここでは、基本土層でⅦ層の上位にみられるⅧ層が欠失し、Ⅷ層の上位に直接的に攪乱されたとみられる土層が堆積していた。調査区内では、Ⅶ層は急斜面を含む全面で認められる。そのため、自然状態において、この範囲でのみⅦ層が面的に欠失するとは考え難く、人為的な「造成」が行われたものと判断した。

「造成土」は、Ⅶ層の欠失範囲よりもやや広い範囲で認められた。土層は、おおむね黒色～黒褐色で、Ko-gやローム粒が混入する部分が多い。Vb層・Vc層と比較して色調が明るく、混入物が多い傾向が認められたがその差は明瞭ではなく、当初はVb層と考えて調査を進めた。調査の過程で、メインセクションベルトや遺構セクション面の土層観察によって造成土の存在を確認したため、平面的な分布は正確には捉えられなかった。図Ⅰ-9に示した範囲は、これらの土層断面の観察から分布範囲を推定したものである。造成土の分布範囲から判断して、造成はⅦ層の欠失範囲よりも広範囲に及んでいたと推測できる。

遺構と造成土の関係については、配石遺構は造成土中に構築されていること、フラスコ状土坑には造成土の上面付近から掘り込まれているものと、造成土中から掘り込まれているものがあることが確認されている。また、配石遺構の外側の造成土には遺物が多く含まれているのに対し、配石遺構内側の造成土には極端に遺物が少ない。これらについてはⅦ章で詳しく検討している。(柳瀬)

## 6 土石流堆積物(図Ⅰ-10・11、図Ⅲ-3、図版36)

調査区北西側の倉知川に面した範囲で、土石流による堆積物を検出した。

Ⅱ層:Ko-dを重機で除去した段階で、倉知川に面する範囲において、高低差1m以上、倉知川に沿って延びる土手状の地形を確認した。人為的な盛土の可能性を想定し、トレンチ調査によって堆積状況を確認した。引き続き、Mラインより北東側について、トレンチに沿ったベルトを設定し、地形

測量後、面的な調査を行った。

調査によって得られた堆積物の主な特徴は以下のとおりである。

- (1) 堆積物の上位にはⅣ層：B-TmとⅤa層の上半部が堆積している。
  - (2) 堆積物の下位にはⅤa層下部～Ⅴb層が堆積しており、縄文時代後期後葉の遺物が出土する。
  - (3) 堆積物の内容は以下のようなものである。
    - ① 堆積物を構成するのは黒色土・ローム・Ko-gなどである。
    - ② 土層には、①のうちの1種類からなるものと、これらが混合するものがある。
    - ③ ②の土層は、ブロック状や層状を呈する(図Ⅰ-10・11、図Ⅲ-3、図版36)。
    - ④ ①のほか、Ⅸ層：Ngの軽石・火山灰、拳大～人頭大で垂円～垂角の安山岩礫などが含まれる。軽石は、2cm以下のものが多く、垂円～円礫である。
  - (4) 部分的に、水の影響によるラミナ構造がみられる。
  - (5) 下位のⅤ層との境界は極めて明瞭である。
  - (6) 土器・石器等の遺物はほとんど含まない。出土したのは、磨耗が著しいⅥ群の土器片1点で、恵山式に相当する。(図Ⅴ-48-241)。
- (4)から、この堆積物は水の影響を受けたものと考えられる。堆積物のうち、図Ⅲ-3 上段 土層4などは、土石流堆積物の特徴と一致する。
- 一方、この堆積物を人為的なものと推測した場合、以下のような解決すべき事柄が生じる。
- (A) Ngが混入するためには、その供給源として、Ⅸ層まで掘り込んで構築された多数の遺構の存在が想定されるが、調査区内では、数基の土坑が該当するのみである。
  - (B) 黒色土やロームのブロックは、セクション面に現れた最大のもので幅1.5m、厚さ35cmである。この大きさを保ったまま、脆弱な土壌のブロックを人力で運搬することは難しいと想定される。調査区周辺においては、以下のことを確認した。
    - (a) 土手状の地形は南西側の調査区域外に続いている。北東側の調査区域外は畑地のために削平されたようで、土手状の地形は確認できなかった。
    - (b) 調査区に隣接する、倉知川の谷壁斜面の断面を観察したところ、兩岸に、土石流によると想定される堆積物を確認した。

以上のことを総合し、この堆積物は土石流によるものと判断した。こうした結論をもとに、Mラインより南西側については、「土石流堆積物」をⅡ層とともに重機で除去することとした。

「土石流堆積物」が形成された時期については、(1)上位はB-Tmに覆われていること、(2)下位は縄文時代後期後葉の遺物を含むⅤb層が堆積していることから、層位的に縄文時代後期後葉から10世紀までの間と判断できる。さらに、(6)堆積物中から恵山式に相当するⅥ群土器が出土したことから、堆積物の少なくとも一部については、形成時期を縄文時代から10世紀までの間に限定できる。(柳瀬)



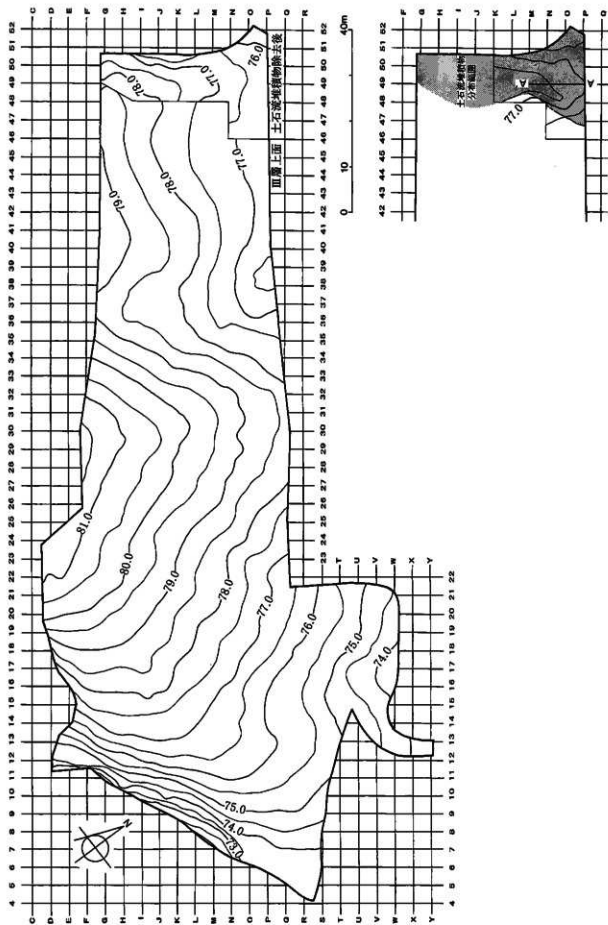


図1-10 皿層上面の地形と土石流堆積物分布範囲



## II 遺跡の立地と周辺の遺跡

### 1 遺跡の位置と周辺の環境 (図 I-1・2、II-1~3)

遺跡の所在する森町は、渡島半島の中央部に位置する。町の南西側は標高800~1200mの渡島山地が、南東部には活火山である駒ヶ岳の山麓が広がり、北東側は噴火湾(内浦湾)に面している。

森町の地形は一般に丘陵性で、渡島山地から続く緩斜面地形が末端で台地状を呈し、海岸段丘を経て内浦湾に至る。倉知川右岸遺跡周辺の地形の基盤は、約1万2千年前に噴火した濁川火砕流により形成された火砕流台地である。

倉知川右岸遺跡は、現在の海岸線から約2km内陸、南西側の山地から続く標高約74~82mの緩斜面上に立地する。森町市街からは西方約2.5kmに位置する。遺跡からは、内浦湾と駒ヶ岳を展望でき、晴天の日には対岸の羊蹄山や室蘭市も遠望できる。

遺跡周辺は北西側を倉知川、南東側を無名の沢に開析された台地状の地形で、中央部には南西から北東方向に続く尾根状地形がみられる。川との高低差は両者とも約5mである。無名の沢は調査区から数十mさかのぼると湧水点に達する。流域長100m弱の小沢である。水量は少ない。遺跡名の由来となっている倉知川は、流域長約2kmの小河川である。遺跡から1.3kmほど上流に源を発生し、0.7kmほど下流で鳥崎川に合流する。流水の幅は50cm~1m程度で、水量は無名の沢より多く、長径30~40cm以上の大形の礫がところどころでみられる。

これら二つの川の流路は、1948年撮影の航空写真や、大正4年測量・昭和38年修正の1/25000地形図では上記のように読み取れる。しかしその後、民家や畑地の広がりとともに地形の改変がなされたようで、現在では流路が変化している。特に倉知川は、遺跡から数百m下流の民家のあたりが暗渠となっており、その先が確認できなくなる。再び地上に現れる地点も確認できなかったが、畑地の脇の水路化された流路が倉知川にあたるようである。

調査区内の無名の沢淵、遺構・遺物の集中区域と重なるあたりには、工事中工前まで、倉知川の名称の由来になった民家が所在していた。この民家は、大正4年測量・同6年製版の1/50000地形図には



図II-1 民家関連遺物



図11-2 周辺の地形(1)



図II-3 周辺の地形(2)



図II-4 周辺の遺跡

表II-1 周辺の遺跡一覧

登録番号	名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
1	廻川1遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳132-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	
2	廻川2遺跡	遺物包含地	字駒ヶ岳17-216、-217、-6	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	
3	白川遺跡	遺物包含地	字白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文晩期・縄文(恵山)	貝塚あり
4	森川貝塚遺跡	貝塚	森川町76~79ほか	低位河岸段丘	13~15	縄文前期-縄縄文(恵山)・縄文・中近世	
5	森川1遺跡	遺物包含地	森川町69-2ほか	低位河岸段丘	15~18	縄文前(円筒下層b)・中期、縄縄文(恵山)	1982「森川A遺跡」森町教委
6	森川2遺跡	遺物包含地	字蘆台34-1、35-2	台地	80~100	縄文中~晩期・縄文	2002森町教委発掘調査
7	本内川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b・ノゾブII)・後期(天祐寺)	2003「森町本内川右岸遺跡」北壇調報182
8	茂無部川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中~後期	
9	尾白内貝塚遺跡	貝塚	字尾白内926、929-1ほか	低位河岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A')・縄縄文(恵山)	1981「尾白内」、1993「尾白内2」森町教委
10	島崎遺跡	遺物包含地	島崎31-1、字富士見町13ほか	海岸段丘	15~30	縄文後期	1975「島崎遺跡」森町教委
11	鏡谷遺跡	遺物包含地	字鏡谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	1971森町教委発掘調査
12	赤井川1遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175~195	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
14	赤井川3遺跡	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウツ遺跡	集落跡	字上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早(東新路III)~中期(円筒上層)	1977「森町オニウツ遺跡発掘調査報告書」
16	御幸町遺跡	遺物包含地	字御幸町132-2、字清澄3-1ほか	低位河岸段丘	8~20	縄文中期(円筒上層)	1985「御幸町」、1994「御幸町2」森町教委
17	清澄遺跡	遺物包含地	字清澄27、29-2	海岸段丘	33~39	縄文中期(円筒上層)	
18	鷺ノ木1遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2遺跡	台場跡	字鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷺ノ木3遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘	40~45	縄文中期(円筒上層)-縄縄文(恵山)	
21	鷺ノ木4遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木506~510	河岸台地	45~50	縄文中(円筒上層)-晩(タシネットウシ)-縄縄文(恵山)	2001、-02、-03森町教委発掘調査
22	堀川左岸遺跡	集落跡	字石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層)-中期、縄縄文(恵山)	2003「森町堀川左岸遺跡」北壇調報190
23	本茅部1遺跡	遺物包含地	字本茅部町205、272~274、294	海岸段丘	80~85	縄文前(円筒下層)・中(円筒上層-見晴町)・晩期(大洞C2)	2003「森町本茅部1遺跡」北壇調報191、2004「森町本茅部1遺跡(2)」北壇調報199
24	栗ヶ丘1遺跡	遺物包含地	字栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文中・後期	2001、-02森町教委発掘調査
25	倉知川右岸遺跡	集落跡	字栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文中(円筒上層・サイベ沢町)・後期(トリサキ)	2004「森町倉知川右岸遺跡」北壇調報196(本報告)
26	森川3遺跡	集落跡	字森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前・中期-縄縄文(恵山)	2002、-03遺埋文発掘調査
27	上台1遺跡	遺物包含地	字上台33-1、42-1、364	丘陵	90	縄文後期	2003遺埋文発掘調査
28	鷺ノ木5遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文後期	2003森町教委発掘調査
29	石倉1遺跡	遺物包含地	字石倉町395~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文中・後期	2002、-03遺埋文発掘調査
30	森川4遺跡	遺物包含地	字森川町317-18	低位河岸段丘	90	縄文前・中・後・晩期	2003遺埋文発掘調査
31	上台2遺跡	集落跡	字上台町326-5	河岸段丘~緩斜面	90~100	縄文中~後期	2003遺埋文発掘調査
32	石倉2遺跡	集落跡	字石倉町146、623-1・3・4、624-1、306	高位河岸段丘	60~75	縄文中・晩期	2004「森町石倉2遺跡」北壇調報197
33	石倉3遺跡	遺物包含地	字石倉町482、483、490	河岸段丘	65~75	縄文後期(余市・トリサキ)	2004「森町石倉3遺跡-石倉5遺跡」北壇調報205
34	石倉4遺跡	遺物包含地	字石倉町511、520、521	河岸段丘	60	縄文後期	
35	鷺ノ木6遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木505、511	河岸段丘	60	縄文後期	
36	石倉5遺跡	遺物包含地	字石倉町512、513、519	河岸段丘	55~60	縄文中期	2004「森町石倉5遺跡-石倉5遺跡」北壇調報205
37	三次郎川右岸遺跡	遺物包含地	字石倉町513、516	河岸段丘	40~47	縄文後期	2003 遺埋文発掘調査
38	三次郎川左岸遺跡	遺物包含地	字石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文後期	2003 遺埋文発掘調査
39	鷺ノ木7遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木町397-1ほか	尾根	60	縄文	
40	鷺ノ木川右岸遺跡	遺物包含地	字鷺ノ木町396	台地	60	縄文	
41	鏡谷2遺跡	遺物包含地	字鏡谷町281	台地	80	縄文	

すでに記載されており、遅くとも大正6年ころにはあったようである。調査区内において、この民家に関わる攪乱が数か所で見つかり、その中から王冠式の牛乳ビンや、表裏に模様の入った板状のガラス製品が出土した。ガラス製品は、表（凸面）には刀を持ったちょんまげ頭の人物が浮き彫りで、裏面（平坦面）には桃の実が沈線描で描かれている。作業員に対して聞き取り調査を行ったところ、50代前後の複数の人から、子供のころに遊び道具にしていた、という話を聞くことができた。

遺跡周辺の現況は主に畑地で、沢沿いにはトチ・クリ・コナラ・オオウバユリなどが自生している。また、キツネやタヌキは直接、クマ・シカ・ウサギなどは足跡を確認した。特にクマは、調査区から20mほどの畑地で足跡が見つかり、調査に慎重を期することとなった。

森町周辺は各時代を通じて、駒ヶ岳の噴火の影響を強く受けてきた環境である。表土直下には1640年降下の駒ヶ岳火山灰d降下軽石堆積物（Ko-d）が厚く堆積し、数多くの遺跡が状態良く残されていると考えられる。現在、調査区周辺の台地・緩斜面は、とうもろこし、小豆、大豆、かぼちゃ畑、牧草地として利用されている。

（新家・坂本・柳瀬）

## 2 周辺の遺跡（図Ⅱ-4、表Ⅱ-1）

噴火湾（内浦湾）岸には、大小多くの河川が渡島山地を源に海岸線に直交し、伏流水などの湧出による小さな沢が幾筋も発達している。これらの河川や沢の間に形成された段丘や台地上は、遺跡の立地としては好条件で、前述のように厚い火山灰に覆われた下には、未だ発見・確認されていない多くの遺跡が分布していると考えられる。

森町内で確認されている遺跡は41か所で、平成15年度までに24遺跡の発掘調査が行われている。この内18か所は北海道縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘調査が行われている。

北海道縦貫自動車道建設に伴う調査遺跡は、鷲ノ木4遺跡、鷲ノ木5遺跡、栗ヶ丘1遺跡、森川2遺跡（森町教育委員会）と、本内川右岸遺跡、三次郎川右岸遺跡、三次郎川左岸遺跡、石倉1遺跡、石倉2遺跡、石倉3遺跡、石倉5遺跡、濁川左岸遺跡、本茅部1遺跡、倉知川右岸遺跡、上台1遺跡、上台2遺跡、森川3遺跡、森川4遺跡（財団法人北海道埋蔵文化財センター）である。

森町内の各遺跡の内容については、「本茅部1遺跡」（北埋調報191）、「石倉3遺跡・石倉5遺跡」（北埋調報205）に詳しく記載されている。なお、トリサキ式土器の標識遺跡である「鳥崎川遺跡」は、鳥崎遺跡（図Ⅱ-4および表Ⅱ-1の10）にあたる考えられている（北海道開拓記念館 1980）。

また、今回の調査では唯一のⅦ群土器が土石流堆積物から出土したことから、倉知川の上流に未登載の縄文時代の遺跡が存在する可能性がある。

（新家・坂本・柳瀬）



## III 調査の方法

### 1 調査区の設定 (図III-1)

倉知川右岸遺跡の調査区は、北海道縦貫自動車道工用地内の基準杭 STA.366 と STA.368 を結んだ直線を南東-北西方向ラインの基線とし、STA.366 を基準点として基線に直交する南西-北東方向のラインを設定した。調査区画は 4 m 四方とし、区画 (グリッド) の名称は、基線と平行する南東-北西方向ラインにアルファベット、南西-北東方向のラインにアラビア数字を用い、それぞれ交差する地点に調査杭を打設した。基準点 STA.366 を M 0 に設定し、アルファベットは北東方向に N・O・P…、南西方向に L・K・J… と、数字は北西方向に 1・2・3… と進行することとした。南側交点はそのグリッドの名称で、アルファベットと数字を組み合わせ「H13」のように表記した。アルファベットと数字の間にはハイフンを入れず、遺構名と区別した。また、このアラビア数字で示す直線は、真北に対して 36°02'28" 東偏する。基準点の平面直角座標系の座標値は下記のとおりである。

日本測地系第 XI 系

STA.366 X=-211269.26540 Y=25093.02355

STA.368 X=-211151.59245 Y=24931.30440

世界測地系第 XI 系

STA.366 X=-211012.8128 Y=24799.7235

STA.368 X=-210895.1470 Y=24638.0195

なお、世界測地系の値は、国土地理院が提供している世界測地系への座標変換プログラム「TKY2JGP」で、日本測地系の座標から変換したものである。 (坂本・柳瀬)

### 2 基本層序 (図III-2～6)

#### (1) 観察方法

基本層序、遺構の土層の観察には『新版標準土色帖 2002版』および『土壌調査ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984) を参考に、主に以下①～④の項目について観察・記載した。⑤・⑥については必要に応じておこなった。

- ① 色調 : 色相、明度、彩度を記号および数値で表す方法を採用した。
- ② 土性区分 : 砂土、砂壤土、壤土、シルト質壤土、埴壤土、埴土に分けられる。
- ③ 粘性性 : なし、弱、中、強
- ④ 堅密度 : すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結
- ⑤ 混入物 : 主に混入の割合 (%)、混入物の種類と大きさについて記載。混入物が礫の場合は、大きさ、形状、風化度合いを観察項目とした。なお、大きさについては極小 (径 1 mm 以下)・小 (径 1～2 mm)・中 (径 2～5 mm)・大 (径 5～10 mm) に区分した。
- ⑥ 層界 : 明瞭性 (明瞭・判然・漸変・散漫)、起伏 (平坦・波状・不規則・不連続)

#### (2) 基本層序

I 層 : 表土・耕作土

II 層 : 駒ヶ岳 d 降下軽石堆積物 (Ko-d)

灰白色軽石層。粒径数 mm～5 cm 程度。1640 年降下。

層厚 150 cm 前後。

III 層 : 黒色土

據文時代～中・近世の遺物包含層に相当するが、今回は遺構・遺物は検出されていない。

層厚 1～3 cm。

IV層：黒～黒褐色土

粘性が強く、粒子が細かい。

白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm) を含み、B-Tm が明瞭な地点では、a～c に分層した。

IVa層：B-Tm より上位の黒褐色土。層厚 1～3 cm 程度。

IVb層：白頭山苫小牧火山灰 (B-Tm)

黄褐色火山灰。

調査区のほぼ全域で、斑状に検出される。10世紀降下。

層厚 1～5 cm 程度。

IVc層：B-Tm より下位の黒褐色土。層厚 1～3 cm 程度。

V層：黒～黒褐色土

縄文時代早期～據文時代の遺物包含層。今回の調査では縄文時代前期～後期の遺物が出土した。

a・b に分層し、部分的に Vc 層が認められる。

Va層：粘性がやや強く、粒子が細かい。混入物を含まない。乾燥するとクラックが入る。

主に縄文時代後期の遺物を含む。

層厚 5～10 cm。

Va'層：褐色土。Va層と比較して灰色が強い。

明瞭な部分では褐色を呈するが、不明瞭な部分では Va 層よりやや灰色がかかる程度。

土質は Va 層に近く、乾燥するとクラックが著しく入る。

凹地形などの Va 層中に散在的に認められ、土石流堆積物の分布範囲では、不明瞭ながら連続して確認された。未確認の火山灰の可能性はある。

Vb層：粒子が Va 層よりやや粗く、駒ヶ岳 g 降下軽石堆積物 (Ko-g) の軽石が 5～10% 程度混入する。

縄文時代前期～後期の遺物包含層。

層厚 20～40 cm。

Vc層：Vb層に類似するが、色調がやや明るく、Ko-g の混入が多い。

部分的に、Vb層の下位に認められる。

層厚 10～30 cm。

なお、土石流堆積物の分布する範囲では、土石流堆積物より上位の黒色土を V0 層、それより下位の黒色土を V1 層とした部分がある。V0 層は Va 層上半に、V1 層は Va 層下半と Vb 層に相当する。

VI層：暗褐色土。漸移層。

暗褐色土のほか、Ko-g に少量の黒色土が均一に混入するものなど、VII層から V層への漸移層と捉えられる土層を含めた。

調査区内に断続的に分布する。

層厚 5～10 cm。

VII層：駒ヶ岳 g 降下軽石堆積物 (Ko-g)

明黄褐色軽石層。粒径数 mm～2 cm 程度。5000～6000年前に降下したとされる。

層厚は 5～30 cm で、20 cm ほどの部分が多く、欠落する部分もある。また、沢地形などの窪んだ部分には厚く堆積している。

上位の VI 層や V 層との層界は比較的明瞭であるが、凹凸が著しい。このため遺構との判別が困

難な場合も多い。この凹凸は、降下後から腐植土の発達中にかけて、風・流水・動物などの自然営力により表面が擾乱されたものと考えられる。

#### Ⅷ層：にぶい黄褐色ローム層

粘性・堅密度ともに強い。

確認できた部分では、層厚60～100cm。

部分的に a・b に分層した。

#### Ⅶa 層：Ko-g と思われる黄褐色軽石が混入する。

縄文時代早期の遺物包含層。

層厚 5～10cm。

#### Ⅶb 層：混入物を含まない。

#### Ⅵ層：濁川カルデラ火砕流堆積物及び火砕サージ堆積物 (Ng)。

上位の火砕流堆積物、下位の火砕サージ堆積物からなり、前者を a、後者を b とした。

層厚は、確認できたのは 1 m までである。11000～13000年前噴火とされる。

#### Ⅴa 層：明黄褐色軽石層。

黄褐色粘質土 (ローム質土)・砂が少量、均質に混入する。

確認できた部分では、層厚50cm程度。

#### Ⅴb 層：灰色火山灰層。

砂粒～シルト大粒子の火山灰の互層。

確認できた部分では、層厚80cm以上。

なお、Ⅴa層については、森川流域の上台1遺跡・上台2遺跡などでも類似の土層が確認されており、未確認の火山灰の可能性が考えられている。現在当センターにおいて分析中で、結果は平成16年度刊行予定の上台1遺跡調査報告書に掲載される予定である。  
(新家・柳瀬)

## 3 調査の方法

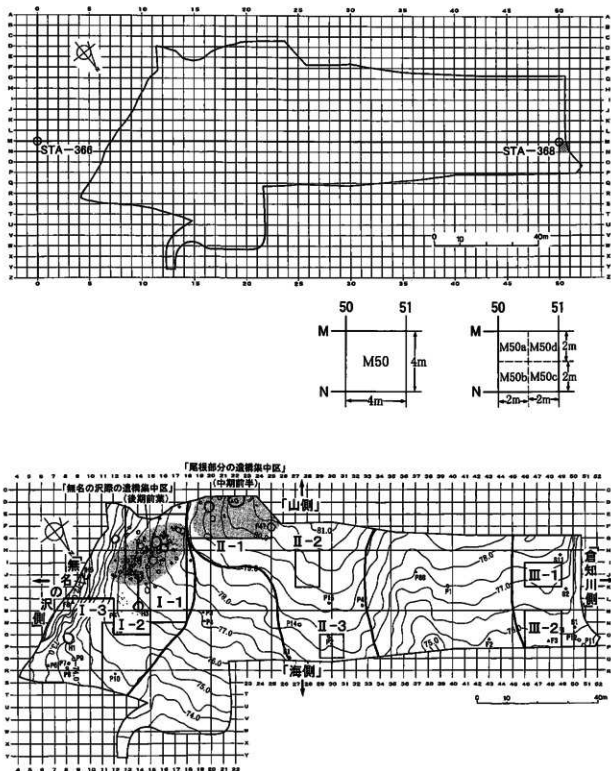
### (1) 発掘調査 (図III-1)

調査区南西側 (山側) の幅10～20m の範囲は、調査開始前から工用道路が設置されていた。よって調査は北東側 (海側) 部分を先行して行い、終了後、工用道路を切り替えてから、山側部分を行った。そのため、多数の遺構・遺物の出現が予想された、無名の沢に面した西側の範囲については8月以降に着手することとなった。また、工用道路切り替え後も、隣接する畑地への進入路を収穫終了まで確保したため、この部分に関しては10月上旬からの着手となった。

Ⅱ層の Ko-d は厚さ1.5m 程で、除去後の調査区縁辺部との高低差は1.5m 以上、包含層を掘りきると深さ2.5m 以上になると予想された。そのため安全性を考慮し、火山灰や土砂等の崩落を防ぐための保護シートを発掘区域全体の法面に施した。

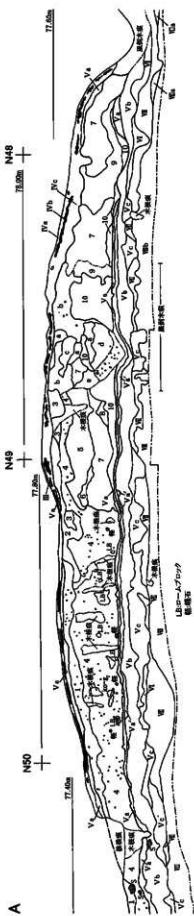
遺跡周辺は例年ヒグマが多く出没する地域である。安全対策として電気柵を設置し、また害獣駆除資格をもつ猟師による定期的な見回りを行った。8月には調査区からわずか20m ほどのデントコン畑で、雄ヒグマの成獣の足跡を発見し、さらに注意を要することとなった。

調査の大きな工程は、①重機によるⅠ・Ⅱ層除去、②調査杭の設定、③Ⅲ層上面での地形測量、④25%調査、⑤包含層調査、⑥遺構調査、⑦Ⅳ層上面での地形測量である。報告書中に掲載した地形測量図はⅦa層上面で計測したものである。排土は、調査区両端の倉知川と無名の沢に設置されたカルバート上に運搬した。

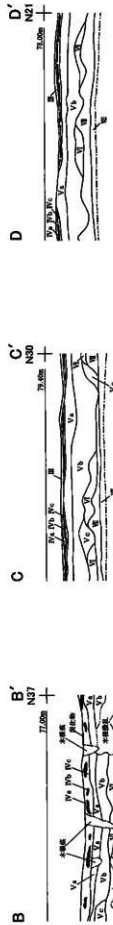
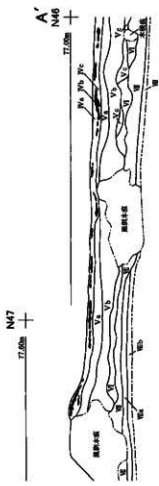


図III-1 グリッド設定と調査区内の呼称



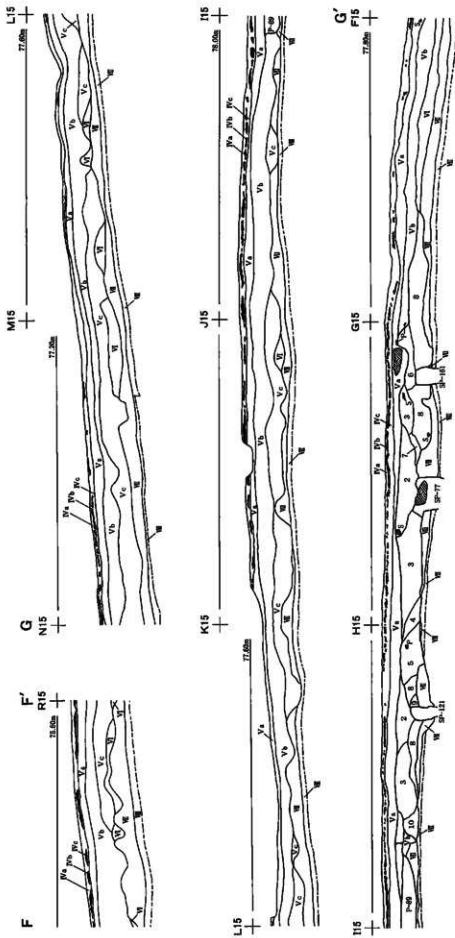


地点	土層	層別	説明	備考
1	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
2	1000/1/0-2/2	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
3	1000/1/1/1	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
4	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
5	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
6	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
7	1000/1/1	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
8	1000/1/1	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
9	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
10	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
11	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
12	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
13	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000
14	1000/0/0	砂土	なし	掘削後、掘削範囲外に1000



図III-3 土層断面(1)



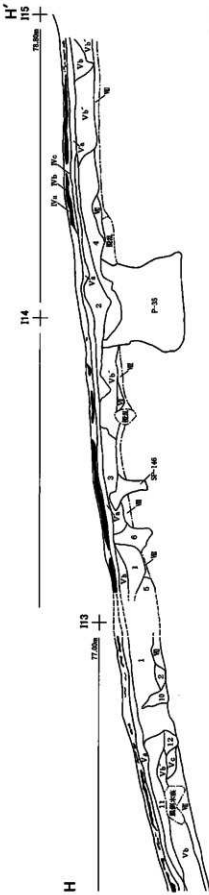


1~10は遺成土

土名	土色	構成	層厚	備考
1 層	10B00/1	暗黒土	中	遺成土 1~10
2 層	10B00/1	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz, Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
3 層	10B00/1	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
4 層	2.5B01/1	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
5 層	2.5B01/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
6 層	10B00/1	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
7 層	10B00/1	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
8 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
9 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
10 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
11 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
12 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz
13 層	10B00/2	暗黒土	中	Va, Vb, Vc, Vd, Ve, Vf, Vg, Vh, Vi, Vj, Vk, Vl, Vm, Vn, Vo, Vp, Vq, Vr, Vs, Vt, Vu, Vv, Vw, Vx, Vy, Vz

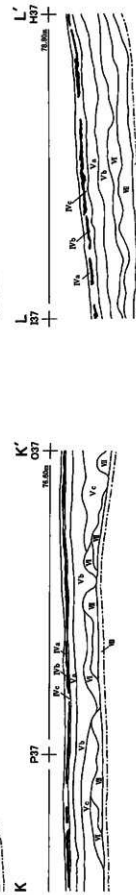
図III-5 土層断面 (3)





1~10, Vc, Vd は造成土

土質		土質		土質		土質		土質		土質		土質		土質	
層	厚	層	厚	層	厚	層	厚	層	厚	層	厚	層	厚	層	厚
6	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
7	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
8	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
9	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
10	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
11	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5
12	1000/1	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5	硬粘土	11.5



図III-6 土層断面 (4)

25%調査では遺構・遺物の分布状況を把握することにつとめた。結果、Va・Vb・VIIa層が遺物包含層と判断され、また遺構・遺物が倉知川、無名の沢の両河川付近、尾根状地形部分に多く分布することを確認した。III・IV層は遺構・遺物検出の可能性が低いと判断し、ジョレン、スコップを併用して掘り下げた。Va・Vb・VI層は遺構・遺物分布の濃淡に応じ、移植コテとジョレン、スコップを併用して掘り下げた。VIIa層は1×4mのトレンチ調査を各グリッドで実施し、遺物が出土した場合にグリッド全体を掘り下げた。VIIa層は土が硬質なため、移植コテとスコップを併用して掘り下げた。また、調査区北西端、倉知川の縁辺部では土手状の堆積物を確認したため、トレンチ調査と平面調査をおこない、土石流堆積物であることを確認した。遺構調査は検出面、土層堆積状況、遺構構造の確認につとめた。また、遺構内の特徴的な土層、焼土・炭化物集中等の土壌は、出土状況等を記録した上でサンプル採取し、フローテーション作業を行った。

遺物の取り上げは、包含層については当初出土地点計測を行ったが、出土量の増加にともない小グリッド単位での取り上げ方法を用いた。出土地点計測は、各グリッドの基準杭を原点とした2方向の距離の組み合わせ（X軸アルファベットライン・Y軸数字ライン）、標高を記録した。小グリッド単位での取り上げは、1つのグリッドを2×2mの小グリッドに4分割し、グリッド基準杭から反時計回りに、小グリッドをa・b・c・dと呼称し、小グリッドと層別別にまとめた。遺構遺物の取り上げは、全て出土地点計測を行った。原点は遺構が位置するグリッドの基準杭とした。

地点計測した遺物については、調査区名、層位、調査区・遺構ごとの通し番号である遺物番号、出土地点、日付、点数、遺物名（土器・石器・礫等）を記録し、取り上げ台帳を作成した。

調査状況や遺構等の内容（確認状況、断面、平面、遺物出土状況等）は、図化作業と写真撮影により記録した。使用した写真フィルムは、6×7判リバーサル・モノクロ、35mm判リバーサルで、必要に応じて4×5判を用いた。

調査区の基本土層観察は、北西-南東に長い調査区全体を横断するMラインと、それに直交するラインを地形を考慮して15、29、37、49の4か所に設定し、計5か所でおこなった（図III-2）。

調査区は地形によってI～IIIに区分した。内容は、I区：無名の沢に続く斜面と斜面の際、II区：尾根状地形部分、III区：倉知川に続く斜面際である。更に、各区に分布する遺構と土器の内容によって以下のように細区分した（図III-1）。

- I-1区：無名の沢に続く斜面際の際の西側の範囲。縄文時代後期前半を主とする土坑群、配石遺構の分布とIV群A類土器が多量にみられる。
- I-2区：無名の沢に続く斜面の西側部分である。III群A類とIV群A類の大量の土器が折り重なるように出土しており、斜面への投げ棄て行為が推測される範囲である。
- I-3区：無名の沢に続く斜面の東側部分である。III群A類土器と、中期前半に属する遺構のまとまった分布がみられる。
- II-1区：尾根状地形の南東側部分、調査区内で最も高位な範囲である。縄文時代中期中葉の遺構群とIII群A類土器がまとまって分布している。
- II-2区：尾根状地形中央部分である。III群A類土器がまとまって出土している。
- II-3区：尾根状地形北側部分である。III群A類土器がまとまって出土している。
- III-1区：倉知川に面する範囲の南側部分である。石組炉、IV群A類土器のまとまりが認められる。
- III-2区：倉知川に面する範囲の北側部分である。焼土遺構、石組炉、IV群C類土器のまとまりが認められる。

（新家・坂本）

## (2) 整理の方法

## ① 一次整理

遺物の一次整理は全て現地で行う予定であったが、調査期間後半に遺構・遺物の調査が集中したため発掘作業を優先し、一次整理は11月以降江別市の作業所に引き継いで行った。一次整理の工程は、①水洗、②分類・属性観察、③台帳記録、④注記である。また、採取した土壌サンプルのフローテーション作業もおこなった。

地点計測遺物については、水洗・乾燥後、分類名を取り上げ台帳に追記、石器はこの時点で石材と被熱の観察、重量計測をおこなった。小グリッド単位で取り上げた遺物については、水洗・乾燥後、分類ごとに遺物番号を付し、台帳に記載した。遺物番号は小グリッドごとの通し番号とした。石器については地点計測遺物と同様の観察をおこなった。これら手書き台帳の情報はコンピューターにデータ入力した。

注記は、原則として礫以外の全ての遺物におこなった。内容は遺跡名の略称「クラ」、遺構名もしくは調査区名、出土層位、遺物番号である。小破片にもできるだけグリッド・遺物番号など優先的な情報は注記するように努めた。

クラ H8c V b108 (包含層出土小グリッド単位。小グリッドは調査区名の後に記号追加)

クラ H-8 フク 1-108 (遺構出土)

## ② 二次整理

図面類については、実測図面の整理、遺跡全体図・地形図の作成、トレース図作成を行った。

遺物については、再・細分類、遺物台帳と遺物の照合、台帳の補正、集計、表作成、土器・石器の接合・復原作業、遺物属性観察、報告書掲載遺物の実測・拓影図とトレース図作成を行った。

写真については、現地撮影フィルムの整理・収納と台帳作成と遺物撮影、報告書掲載図版の作成をおこなった。遺物の整理については、詳細を土器と石器に分けて説明する。 (新家・坂本)

## 土器の整理

土器の二次整理は、遺構出土のものは遺構ごとに、包含層出土のものは分類ごと、グリッドごとに作業を行った。

接合作業は、遺構内・遺構間・周辺包含層・遠隔包含層、あるいはグリッド内・周辺グリッド間と、順次対象を広げて行った。遺構・包含層ともに比較的離れた位置との接合が認められたため、まとまった個体については広範囲を対象とした接合作業に努めた。

接合作業後、残存状況の良いなもの、特徴的なものを対象に、復原・実測を行った。破片資料は、時期や文様の明瞭なもの、器形のわかるものを中心に拓影図及び断面図の作成を行った。掲載遺物のすべてについて写真撮影を行った。掲載遺物は連番の個体番号を付し、個体別台帳を作成して属性観察を行った。復原・補強にはセメダインCや赤褐色バイサムを使用した。

掲載遺物の帰属については、遺構間の破片が接合した場合は、より伴件の可能性の高い遺構を優先した。遺構と包含層の破片が接合した場合は、接合関係から土壌の動きを明らかにできる可能性を考え、遺構出土の破片のほうが少数であっても原則的に遺構を優先した。また、復原した個体の一部は写真および一覧表のみを掲載したものもある。 (柳瀬)

## 石器の整理

石器は分類後、遺構出土と包含層出土に分け、遺構は遺構単位で、包含層は分類別に管理した。フレイクに関しては、更に石材別に細分した。製品(ツール)に関しては付着物の有無、欠損状況の確認(Rフレイク・Uフレイクを除く)をおこなった。また、必要に応じて各器種の属性観察をおこ

なった。

石材ごとに接合作業をおこなった。ただし、安山岩のフレイクについては接合作業をおこなっていない。接合資料については、個々の遺物名と剝離工程を記録した接合台帳を作成し、各資料に母岩・接合番号を付した。また、接合状況の空間分布図を作成した。

報告書掲載遺物は、遺構・包含層から、残存状態が良好で器種特徴を良く示す典型的なもの、特徴的な形態のものなどを選択し、図化・撮影作業をおこなった。

掲載石器については「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」の計測をおこない、結果を掲載遺物一覧表に示した。 (坂本)

### (3) 記録類、遺物の収納・保管

発掘調査および整理作業で撮影した写真フィルムは北海道立埋蔵文化財センターにて保管する。

出土遺物、遺物台帳、発掘調査で作成した図面は、森町教育委員会が保管する。出土遺物の収納方法は以下のとおりである。

出土遺物はまず報告書掲載のものと未掲載のものに分けた。掲載遺物は遺構と包含層に分け、さらに土器・土製品、石器・石製品、その他遺物に分けて収納した。基本的に掲載遺物については掲載番号順に収納した。未掲載遺物は遺構出土のものと包含層出土のものに分けた。遺構遺物は遺構単位ごとにコンテナに収納し、さらに器種分類ごとに分けた。包含層遺物は分類ごとに分け、さらに調査区・遺物番号の若い順にコンテナに収納した。これらのコンテナには通し番号をつけ、収納台帳を作成した。 (新家・坂本)

## 4 遺物の分類

### (1) 土器

土器は便宜的に、縄文時代早期をⅠ群、前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群、統縄文時代をⅥ群、擦文時代をⅦ群と分類した。この各群にそれぞれアルファベットの大文字を組み合わせ、前半をA類・後半をB類、あるいは前葉をA類・中葉をB類・後葉をC類と細分した。

#### Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群

A類 貝殻文が施されるもの。

B類 縄文、捺糸文、絡糸体丘痕文、組紐丘痕文等が施されるもの。(今回は出土していない)

#### Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

A類 縄文の施された、尖底・丸底を特色とするもの。(今回は出土していない)

B類 円筒下層式に相当するもの。

#### Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

A類 円筒上層式に相当あるいは並行するもの、またはその系譜を引くもの。

(円筒上層 a~c 式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式にそれぞれ相当あるいは並行するもの)

なお、掲載遺物については、必要に応じて以下の細分類を用いている場合がある。

A-1類 円筒上層 a 式に相当あるいは並行するもの。

A-2類 円筒上層 b・c 式に相当あるいは並行するもの。

A-3類 サイベ沢Ⅶ式・見晴町式に相当あるいは並行するもの。

B類 榎林式、大安在 B 式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当あるいは並行するもの。

#### Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群

A類 天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津Ⅶ群、白板 3 式及び十腰内 I 式に相当あるいは

並行するもの。

B類 ウサクマイC式、手稻式、甕調式に相当あるいは並行するもの。

C類 堂林式、三ツ谷式に相当あるいは並行するもの。

V群 縄文時代晩期に属する土器群（今回は出土していない）

VI群 統縄文時代に属する土器群

（今回は、土石流堆積物中から恵山式に相当するものが1点出土した）

VII群 縄文時代に属する土器群（今回は出土していない）

（柳瀬）

## （2）石器（図Ⅲ-7）

石器は遺跡内で出土したものに対し、その器種名称と定義を述べることにする。また図Ⅲ-7には部分名称と計測位置を示した。石器計測で欠損部分があるものは、残存長の数値を丸括弧（）でくくった。「重さ」の数値は2kg未満のものについては小数点第1位まで、2kgを超えるものは1gを最小単位とする数値で示した。なお、石製品は特異な形態を呈するものを分類した。

### 石鏃

押圧剥離や平坦剥離により両面調整された、尖頭形を呈す5cm未満のもの。

### 石槍

押圧剥離や平坦剥離により両面調整された、尖頭形を呈す5cm以上のもの。

### つまみ付きナイフ

剥片を素材とし、ノッチ状の加工により端部につまみ部が作り出されたもの。

### 錐形石器

端部に錐状の突出部が作り出されたもの。

### スクレイパー

剥片を素材とし、調整剥離面が側縁に10面以上連続して加えられたもの。

### 両面調整石器

剥離が素材の両面に施されるが尖頭形でないもの。

### ビエス・エスキーユ

剥片もしくは礫を素材とし、対向する小剥離が素材の両端部にあるもの。また、いわゆる両極剥離打法により発生する各種の割れの特徴を持つもの。

### Rフレイク（二次加工ある剥片）

剥片を素材とし、10面未満の不規則で散漫な剥離が加えられた不定形のもの。

### Uフレイク

剥片を素材とし、明瞭な加工はないが、微細剥離や光沢などの使用痕跡が認められるもの。

### フレイク

石核、石器（ツール）、剥片などから剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

### 石核

剥片もしくは礫を素材とし、石器（ツール）の素材となりえる大きさ・形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

### 原石

剥片石器・石斧の素材を供給する石材の礫のうち、素材剥片の剥離がおこなわれていないか、もしくは不明瞭なもの。石器の原材料とみられるもの。

## 石斧

剣片もしくは礫を素材とし、敲打・打欠き・研磨により整形され、斧状の刃部があるもの。

## 擦切り残片

擦切り技法により発生した、整形されない切り取られ部。

## 敲石

礫を素材とし、敲打痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

## すり石

礫を素材とし、擦り痕があるものの内、能動的と考えられるもの。

## 扁平打製石器・扁平打製石器原材

礫を素材とし、周囲もしくは端部を打ち欠き、楕円・半円・長方形を呈するもので、下縁に幅の狭いすり痕跡面(すり面)を有するもの。すり面がなく、下縁が両面調整により、鋭い縁辺を呈すものは原材とした。

## 北海道式石冠・北海道式石冠原材

分厚い礫を素材とし、打ち欠き、敲打により、石冠様の形状に整形されたもので、下面に幅広い擦痕を有する。器体中央部には敲打による帯状の凹みが回る。すり痕跡がないものは原材とした。

## 砥石

礫に被加工物を擦り付けた様な状態の擦り痕を有すもの。

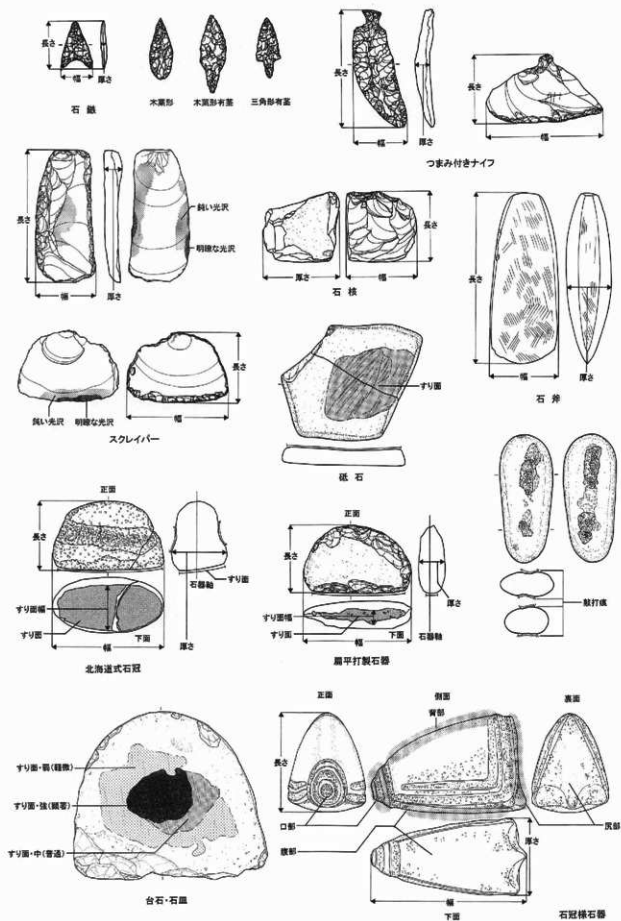
## 台石・石皿

礫を素材とし、擦り痕もしくは敲打痕があるものの内、受動的と考えられるもの。(坂本)

### (3) その他

土器・石器以外の遺物では、炭化材、炭化種子、動物遺存体、赤色顔料等がある。これらは遺構等から採取した土壌サンプルのフローテーション作業で検出を試みた結果、微細遺物として回収されたものを含んでいる。

いずれも出土場所、層位、日付、採取質量等を記載した整理台帳を作成し、一部については自然科学的分析をおこなった。分析結果の詳細については、第Ⅵ・Ⅶ章に示した。(新家)



図III-7 石器の計測位置と部分名称

## IV 遺構と遺構出土の遺物

### 1 概要

遺跡は北西側を倉知川、南東側を無名の沢に開析された台地状の地形にある。川との高低差は両側とも約5mである。中央部には南東から北西方向に続く尾根状地形がみられる。遺構は無名の沢の斜面、尾根状地形、倉知川付近の3か所にみられ、とりわけ無名の沢へ続く斜面西側に集中する。

確認された遺構は、配石遺構1基、竪穴住居跡9軒、土坑81基、石組炉15基、焼土11か所、柱穴状ピット230基である。多くの遺構は縄文時代中期前半のサイベ沢Ⅶ式期、後期前葉のトリサキ式期に属すると判断される。

中期前半の遺構は、竪穴住居跡7軒（H-1・3・5・6・7・8・9）、土坑22基（P-2・5~7・9・10・15・17・18・22・25・31・32・43・44・47・63・64・70・74・87・89）、焼土2か所（F-9・10）、柱穴状ピット16基がある。これらは無名の沢へ続く斜面東側と尾根状地形南東側に主にみられる。竪穴住居跡は長径3~6mほどの円形・楕円形を呈し、掘り込みが50cm以上認められる。炉は地床炉・土器埋設炉がある。土坑には浅皿状のもの、竪穴状（P-17・89）のものがあり、後者は堆積状況から判断して基と推測できる。

後期前葉の遺構は、配石遺構1基、竪穴住居跡2軒（H-2・10）、土坑45基（P-8・16・20・21・23・24・26~28・30・33~40・45・46・48~53・55~58・60~62・66~69・71・72・76~79・84・90）、石組炉13基（S-3~15）、焼土4か所（F-5~7・11）、柱穴状ピット197基である。これらは無名の沢に続く斜面に集中する。配石遺構は40~60cm大の礫を5×2mのコ字状に配置したものである。周囲には同程度の大きさの礫が多数みられた。また、配石が位置する範囲周辺はKo-gの欠失と造成土が認められ、配石遺構構築前に土地の造成が行われた可能性を指摘できる。竪穴住居跡は長径4m以下の円形・楕円形を呈し、掘り込みが20cm程度である。炉は立石を伴う地床炉である。土坑は径・深さが1mほどのプラスコ状のもの（P-20・21・23・26・27・30・34~37・40・49・51・53）が14基あり、これらは覆土の堆積状況や遺物出土状況から判断して基と推測できる。また、覆土上位や中位に、30cm前後の礫を用いた配石を伴うことが特色として指摘できる。石組炉は遺構集中範囲の外側に分布する傾向がある。

早期前半の遺構は柱穴状ピット4基（SP-16・18・19・21）で、K・L12・13区にまとまる。長方形の建物跡を形成すると推測される。

後期前葉~後葉に属すると思われる遺構は、倉知川沿いの範囲に分布し、土坑（P-11・12）、石組炉（S-1・2）、焼土（F-3・4）、柱穴状ピット（SP-7~11）がある。

なお、「石組炉」は「石皿炉」と同義であるが、報告した遺構の内、部分的に礫が欠落するものがみられたこと、道南地域の報告例では「石皿炉」の場合が多いことから「石組炉」の名称を用いた。

(坂本)

### 2 配石遺構（図Ⅳ-1~3、図版28~30・91）

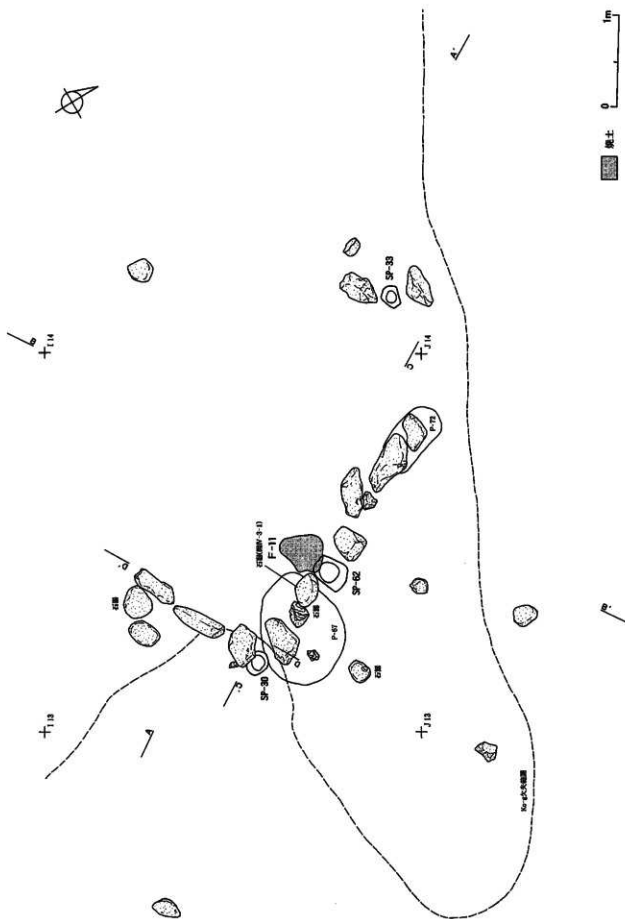
位置 I・J13・14 規模（5/3.6）×（2/1.4）平面形態 コ字形

立地地形 無名の沢に続く急斜面の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 Va層掘り下げ時に配石によって確認。方形を呈すると仮定し、長軸と短軸の中央にベルトを残し、それに沿ってトレンチを入れ土層を確認した。

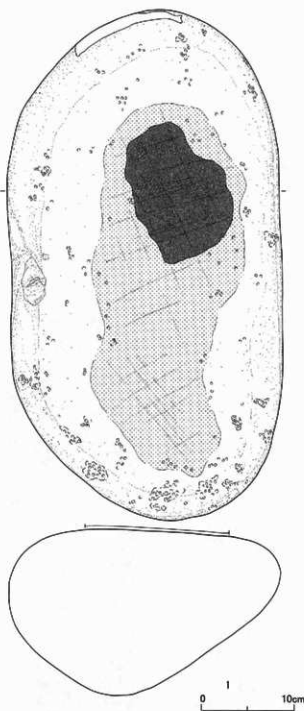
覆土 配石周辺の土層は、自然堆積層のVb層・VI層・VII層がみられず、Vb層に軽石粒やローム粒を





図IV-1 配石遺構(1)





図Ⅳ-3 配石遺構(3)

で、確認面のⅧ層から50cm近くあり、造成土から掘り込んだ場合さらに20cmほどの深さが加算される。土層を見ると直径10cmほどの棒状のものを立てた後、ロームブロックを多く含む土層で根固めをしている。このことから配石に伴い木柱が立てられていた痕跡とみることができる。さらにSP-62の西側に隣接するようにF-11が見られた。なお、類似した小柱穴にSP-85があり、配石の長軸の配置が切れた部分近くに位置する。配石の周囲に見られた今挙げた以外の小柱穴については配石との関係は捉えきれなかった。

**遺物出土状況** 礫12点、礫片2点、台石・石皿3点、加工痕のある礫1点からなる。

(福井)

多く含む土層が確認された。この土層は、配石構築前にⅧ層まで耕すように擾乱し、造成したものとみられる。また、周囲のⅤb層には多くの遺物が含まれていたが、配石の位置するI13区からは小片以外の遺物は出土しなかった。したがって造成の際にⅤb層に包含されていた遺物を極力除去していたものと推測される。配石は造成土に穴を掘り据えられていたとみられるが、その掘り込みは造成土内で取束して明瞭でないことから、一部でしか確認できなかった。なお、造成は配石付近にとどまらず、遺構集中区で広く行われている。

**構造** 西側に開くコ字形に礫を配した配石遺構。長軸には角柱状の礫を11~66°の開きがある角度で東側に傾斜するように配置した立石が6個、角柱状の礫を配置したものが2個ある。南北の両短軸には角柱状の礫を配置したものが各軸に2個ずつ、扁平で円形の平面形を呈する礫を水平に配置したものが南側短軸に2個、北側短軸に1個ある。

このほかにコ字形の配石から東側に約2mの地点に水平配置礫が3個、立石が1個、西側に約3mの地点に横位立石が1個みられた。I14・15、H14・15、G15区で確認された礫も関連がみるとみられる。

コ字形配石に重複した土坑にP-67・72がある。いずれも楕円形を呈し、確認面のⅧ層上面からの深さは20cm弱と浅い。これと類似した土坑はP-38・39・45・46・55・56・71・76・84とI12・13・14、J13・14区に分布している。ほとんどがⅧ層上面で検出したものだが造成土に由来するとみられる覆土が堆積していることから、配石と何らかのかかわりをもった土坑と推測される。

コ字形配石に重複した小柱穴にSP-30・33・62があったが、特にSP-62は立石に挟まれる位置

### 掲載遺物

石器 1は石皿である。石材は安山岩である。礫の平坦面に平滑なすり面が観察されるものである。正面上部の不整形の範囲が顕著に平滑化しており、周囲に軽微なすり面が連続している。また、平坦面縁辺付近には敲打痕が散発的にみられる。(坂本)

時期 直接伴う遺物はないが、周囲の遺構の遺物から縄文時代後期前葉の配石遺構とみられる。周囲の土坑とは緊密な関連性を持つものとみられるが、具体的には捉えきれなかった。(福井)

## 3 竪穴住居跡

H-1 (図IV-4~6、図版4・5・38・69・91)

位置 N・O7・8 規模 (3.46/3.20)×(3.19/2.80)×0.50 平面形態 円形

立地地形 調査区東側、無名の沢に続く急斜面上に立地する。

確認・調査 調査区O8でのVb層下部までの掘削作業時、平面楕円形を呈する黒〜黒褐色土のまとまりを検出した。黒〜黒褐色土プランに、傾斜方向及び傾斜の直交方向に土層観察用の十字ベルトを設定し、ベルトに沿ってトレンチ調査を先行しておこなった。トレンチ調査によって、覆土の堆積状況を確認、床面、壁の立ち上がり、炉跡を検出して竪穴住居跡と判断した。覆土は大まかな堆積順序を理解し、層位毎に掘り下げ、遺物取り上げをおこなった。床面検出後、柱穴状ピット、炉などの付属施設の調査をおこなった。

覆土 14層に分層したが、①〜④の堆積単位にまとめられる。なお、遺物取り上げ層位は「覆土1」(1・2層)、「覆土2」(3〜8・11・12層)、「覆土3」(9〜10層)に分けている。

- ① 上位の堆積。黒色土1・2層で構成。覆土中央部の窪んだ範囲に主に堆積していた。自然堆積層と考えられる。
- ② 中位の堆積。オリブ褐色土4・5層で構成。斜面上部側壁付近に主に堆積していた。ロームブロックが多く含有されることから、斜面上部側に盛られた掘上土が流入したと考えられる。
- ③ 中位の堆積。黒褐色土3・6・7・7層で構成。ロームの含有は若干である。20〜30cmの厚い堆積であることから、短期間に埋め戻された可能性がある。
- ④ 下位の堆積。オリブ褐色〜黒褐色土9〜12層で構成。主に、斜面上部側の壁面から床面直上にみられ、遺構廃絶直後に流入した三角堆積土と考えられる。

構造 床面はⅣ層のロームまで掘り込まれ、ほぼ水平・平坦に構築されている。

壁は急斜度に立ち上がる部分が多いが、斜面上部側は比較的緩やかであった。

炉は住居の中央部に1基確認された。土器埋設炉で、口縁部の欠損した深鉢が利用されていた。土器の開口部周辺が焼土化し、上部に炭化物粒、焼土粒を含有する黒褐色土の堆積が確認された。

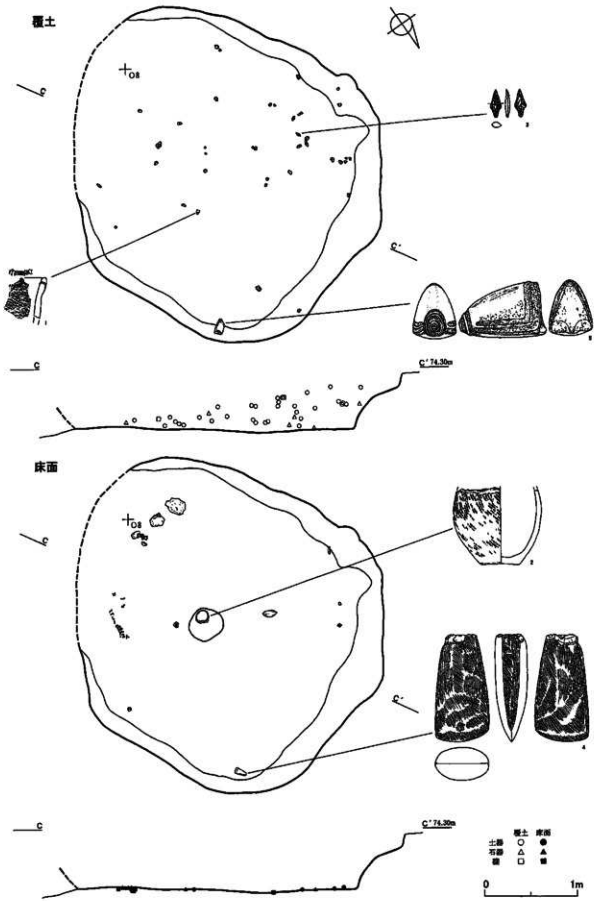
柱穴状ピットは3基確認された(HP-1〜3)。住居中心軸上付近、斜面上部側と下部側の壁際に各1基(HP-1・2)、西側壁外に1基(HP-3)配置されており、主柱穴と考えられる。柱穴はいずれも深さ20cm未満の浅い小規模なものである。

住居の北側及び西側の壁外には、壁から続く浅い掘り込みがみられた。住居構築時には暗褐色の堅くしまった土が堆積し、住居の壁を形成していたと考えられる。

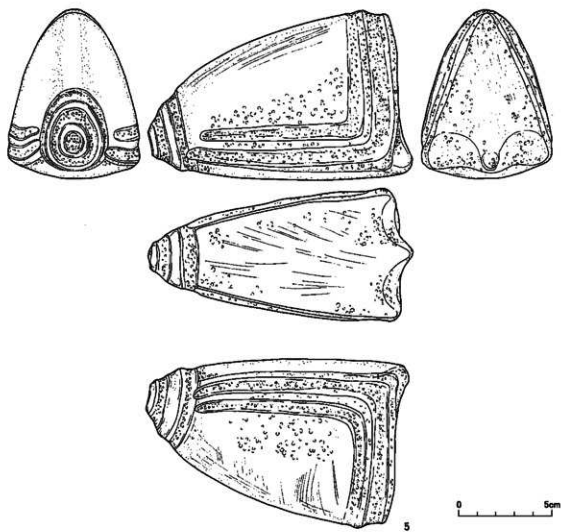
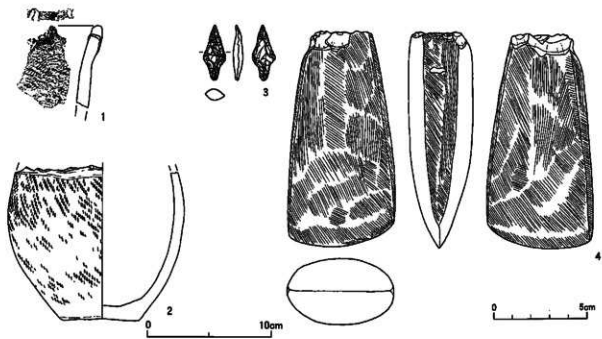
遺物出土状況 土器111点、石器19点、石製品1点、礫等を含めれば計137点出土している。内、床面・床面直上土、付属施設からは土器(Ⅲ群A類65点)、石器(石鏃1点、スクレイパー1点、Rフレイク3点、フレイク7点、石斧1点)が出土している。

土器は床、覆土ともⅢ群A類のみが出土している。特徴的な出土状況では、覆土2から石冠椀石器が





図IV-5 H-1 (2)



図IV-6 H-1 (3)

出土している。

(坂本)

#### 掲載遺物

**土器** 2点を図示した。1は覆土から出土したもの、2は床面の埋設土器。いずれもⅢ群A-3類。

1は斜行縄文のみが施される突起部の破片で、口唇には縄による縦位の刻みが施される。胎土には海绵骨針・小礫が多い。2は口縁部を欠失する。胴部に影らみをもつ器形。斜行縄文が施され、現存する上端部では磨り消される。二次焼成を受けて外・内面ともに劣化が著しく、縄文の不明瞭な部分が多い。上端の割れ面は磨耗している。内面下半は黒色を呈し、煤が付着する。

なお、床面から出土したⅢ群A-2類1点が、包含層Q10区付近のものと接合している。埋設土器がⅢ群A-3類であることから判断して、Ⅲ群A-2類は混入であると推測されたため、包含層の遺物として扱った(図V-6-15)。

(柳瀬)

**石器** 2点を図示した。3は覆土、4は床面から出土した。石材は3が頁岩、4が緑色泥岩である。

3は石鏃である。体部が木葉形でカエシが不明瞭な有茎鏃である。尖頭部が正面側に反り返っている。4は石斧である。両刃で、刃部平面形は偏刃で緩やかな弧状を呈す。全身を入念に研磨している。基部末端は正面および右側縁方向から剝離・折断され、その末端平坦面を打面として正面と左側面に剝離が施されている。

**石製品** 5は覆土から出土している。石材はカンラン岩の可能性がある。説明のため便宜的に、図Ⅲ-7に示したように各部分を呼称する。全体の形状はアイロンに似ている。横断面は辺に影らみを有す三角形で、背腹側面は張りを持つ面で構成されている。口部周囲には、敲打による2本の沈帯が形成した1本の隆起帯が巡っている。口部末端は敲打により、円形に浅く凹んでいる。側面には、尻部辺から下端經由の先端部にかけて、2本の沈帯により形成された1本の隆起帯が、L字および逆L字状に施されている。L字、逆L字の隆起帯は先端部の隆起帯よりも新しく施されている。尻部末端の面には三角形の極めて浅い凹みが認められ、尻部下端の左右中央部には3つの突起が形成されている。突起部は中央部のものが最も突出している。背部は緩やかな弧状を呈し、この部分が最も滑らかに研磨されている。表面観察から、整形は敲打と研磨を繰り返しおこなったとみられる。

**時期** 床面出土遺物及び炉に埋設された土器から、縄文時代中期中葉の住居址と判断できる。炉跡から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定をおこない、4350yBP±40(補正年代)の結果が得られた。

(坂本)

#### H-2 (図Ⅳ-7~12、図版6・7・38・69・92)

**位置** F・G15 **規模** (3.80/3.20)×((3.24)/2.78)×0.20 **平面形態** 不整円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面隙遺構集束範囲の中央部に位置する。周囲にはH-10、フラスコ状土坑、配石遺構などがまとまって確認されている。

**確認・調査** 調査区G15でのVb層までの掘削作業時、黒〜黒褐色土のまとまりを検出した。黒〜黒褐色土プランに、土層観察用の十字ベルトを設定し、ベルトに沿ってトレンチ調査をおこなった。ベルトの断面観察により堆積状況を確認したが判断することができず、ベルト部分を残り周囲をVb層下部からVI層まで掘り下げて不整円形のプランを検出し、竪穴状の遺構であることを確認した。覆土は大まかな堆積順序を理解して層位毎に掘り下げ、順次遺物取り上げをおこなった。また、覆土中の同一面から40~60cm大の多数の礫が検出され、配石遺構に関係するものと判断した。壁面の立ち上がりは、ロームをあまり掘り込んでいないこと、遺構覆土と遺構外堆積の変化が漸移的であることで確認が困難であった。床面検出後、柱穴状ピット、炉などの付属施設の調査をおこなった。



覆土 覆土は9層に分層したが、後述するように貼り床(9~11層)が認められたため、併せて記述する。覆土の堆積は①~④の堆積単位にまとめられる。なお、遺物取り上げ層位は、「覆土」(1~6・8層)、「床面直上」(7層)に分けている。

- ① 最上位の堆積。黒褐色土1層で構成。覆土中央部の狭い範囲に主に堆積していた。周辺遺構の掘上土と考えられる。
- ② 上位の堆積。黒色土2・3層で構成。ほぼ全面に厚く堆積していた。Vb層に類似することから、自然堆積層と考えられる。
- ③ 下位の堆積。黒色土2<sup>a</sup>・4・5・8層で構成。ロームの含有は極微量である。20~40cmの厚い堆積であることから、短期間に埋め戻された可能性がある。また、③の上面には40~60cm大の礫が多数配置されていた。
- ④ 最下位の堆積。黒色土6層、にぶい黄褐色土7層で構成される。主に西側壁面から床面直上にみられ、遺構廃絶直後に流入したと考えられる。
- ⑤ 貼り床の構成土。脆弱なⅦ層(Ko-g)の直上にしまりの弱い黒色土(10・11層)が堆積し、その上部にロームを主体にしたやや硬い9層がみられる。10・11層はH-2の構築よりも古い時期に堆積した可能性がある。

構造 床面を構成する土は部分的に異なる。中央部はローム主体のにぶい黄褐色土により貼り床されている。東側床面は黒色土を、西側は地山のロームを利用している。床面全体はほぼ水平・平坦に構築されている。

壁は掘り込みが浅く、比較的緩やかな立ち上がりを呈していた。また、南東側の壁は確認することができなかった。

炉は住居の中央部東側よりに1基確認された。立石を伴う地床炉である。立石は立方体状のものが炉の東側に配置されており、被熱している。立石は10cmほどの深さで埋め込まれ、床面から上部へは15cmほどが露出する状態であった。立石の上端は折断により平面となっていた。風化状況から折断は住居構築以前に施されたものと判断した。炉の焼土化した範囲は40~50cmほどで、上部に炭化物粒、焼土粒を含有する黒褐色土の堆積が確認された。

柱穴状ピットは30基確認された(HP-1~2・4~31)。柱穴状ピットは住居の壁沿いを巡るように配置され、多くが北西側に構築されている。

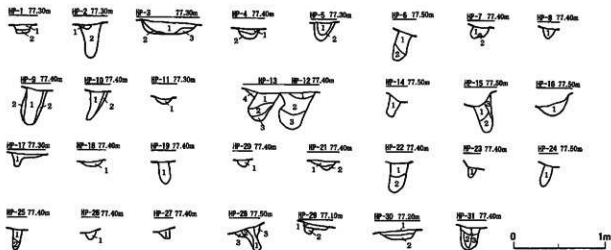
深さが30cmを越えるものは8基、20~30cmのものは7基で、これらは住居長軸より西側、斜面の高い側に配置されていた。これら壁沿いに深く構築されたピットの多くは、内側に傾くように形成されている。

深さが10~20cmのものは壁全体を巡るように配されるが、ピットの径が20cmを越える大型のものが南東側、径が20cm未満の小型のものが北西側に偏って設けられている。ただし、南西側壁外には径10cm前後、深さ10~20cm前後のSP4基(SP-48・117・118・122)が、壁ライン沿いに構築されている。これらSPがH-2に伴うのであれば、小型のものは南東側を除く壁沿い、全体の4分の3ほどの範囲に配置されていることとなる。

また、深さ10cm未満の浅皿状のものは、北西側壁から30cm以上中央側の範囲に、住居を半周するように配置されている。

これら付属施設の状態をまとめると、次のように捉えられる。柱穴状ピットは斜面地形の高い側の壁に、内側へ傾く深いピットが巡り、その内側に近接して浅いピットが配置され、斜面地形の低い側の壁にやや浅いピットがまばらに巡る構造である。よって斜面の高い側の床にはピットが密集する。





HP	層	土質	土層	形状	深さ	埋入物	その他
HP-1	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-2	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-3	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-4	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-5	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-6	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-7	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-8	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-9	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-10	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-11	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-12	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-13	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-14	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-15	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-16	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-17	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-18	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-19	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-20	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-21	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-22	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-23	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-24	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-25	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-26	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-27	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-28	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-29	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-30	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-31	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	

HP	層	土質	土層	形状	深さ	埋入物	その他
HP-10	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-11	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-12	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-13	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-14	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-15	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-16	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-17	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-18	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-19	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-20	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-21	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-22	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-23	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-24	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-25	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-26	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-27	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-28	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-29	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-30	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	
HP-31	1	黒褐色	粘壤土	中	約0.5m	縄文土	

図IV-8 H-2 (2)

主柱穴はHP-2・9・12・17の4基と捉えられる。

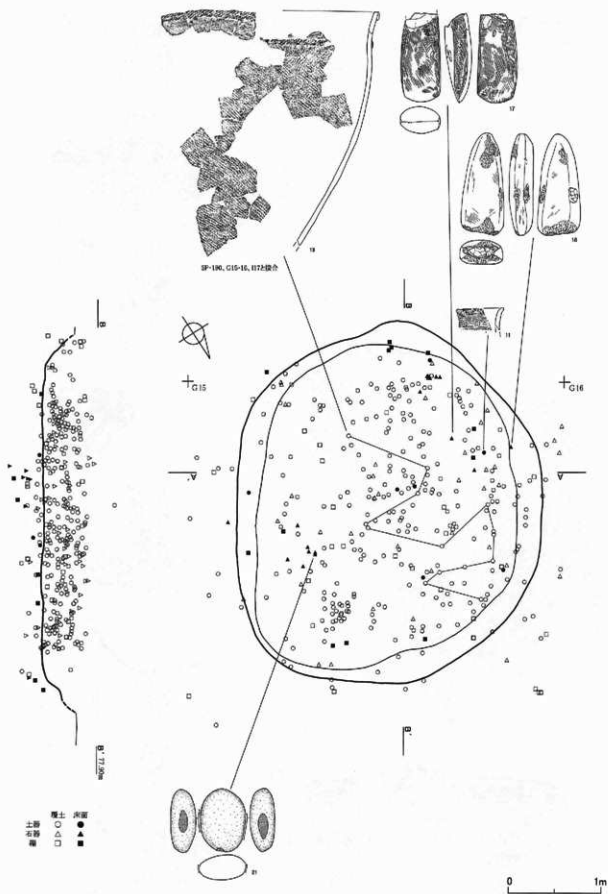
炉は斜面の低い側寄りに配置され、立石も同方向側に配されている。入り口構造を示す明確な痕跡はみられないが、柱穴状ピットの配置が疎である南東側（斜面の低い側）に位置することが考えられる。柱穴状ピットと炉の配置、炉の構造などでH-10と共通点がある。

遺物出土状況 土器466点、石器67点、礫等を含めれば計579点出土している。内、床面・床面直上土、付属施設からは土器（Ⅳ群A類25点）、石器（Rフレイク4点、フレイク9点、石核1点、石斧2点、敲石2点、すり石1点）が出土している。（坂本）

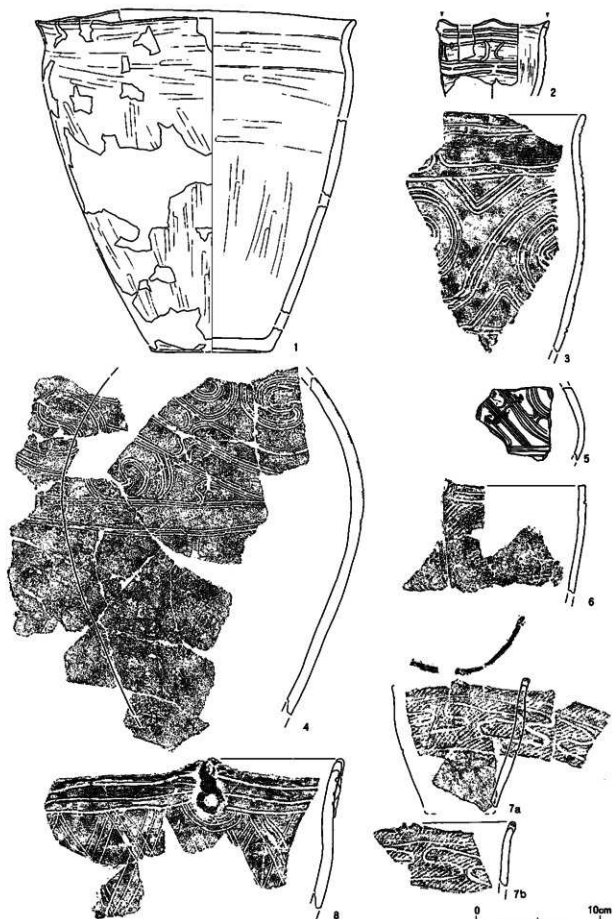
掲載遺物

土器 13点を図示した。11は床面直上から、1～10・12は覆土およびⅤa層・Ⅴb層から出土したもの。いずれもⅣ群A類。

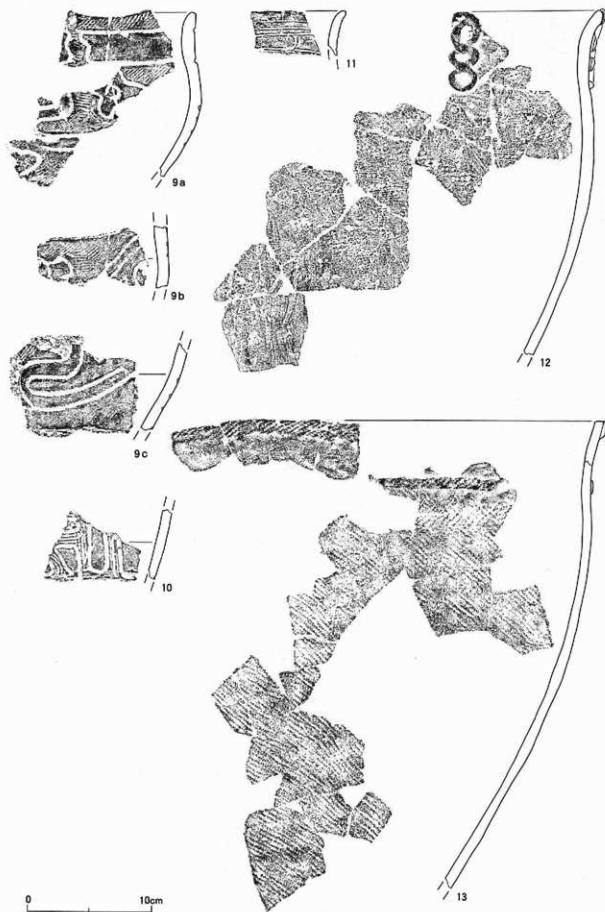
1は無文のもの。覆土と包含層G15区の破片が接合しており、同一個体ではあるが未接合の破片が床面から出土している。外・内面ともによく磨かれる。2～8は沈線が施されるもの。2は口縁部付



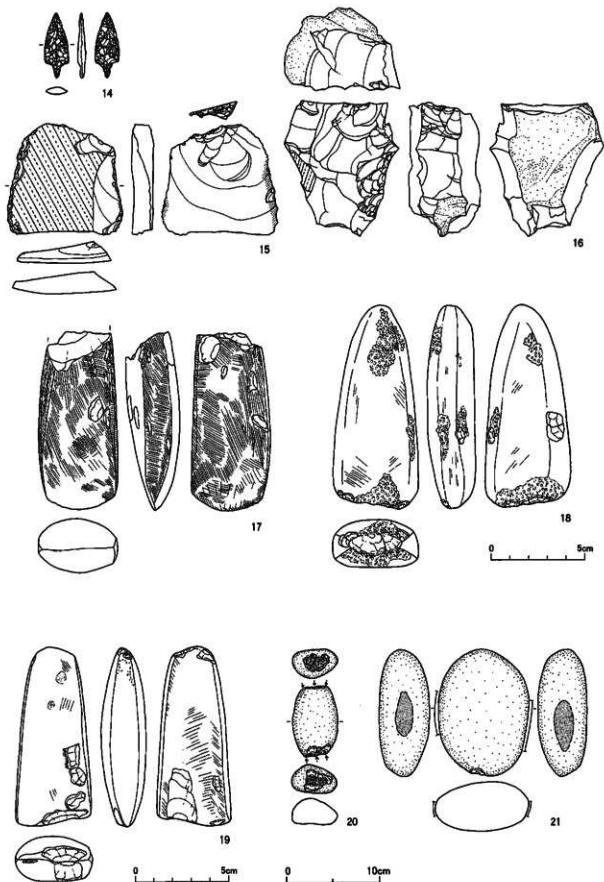
図IV-9 H-2 (3)



图IV-10 H-2 (4)



図IV-11 H-2 (5)



図IV-12 H-2 (6)

近にのみ沈線が施されるもの。2段の3本組沈線の間に)状沈線が加えられる。3~5は3本組沈線で渦巻状文が描かれるもの。3は渦巻状文の間に山形文が加えられるもの。沈線はやや太めで深い。4・5は壺の胴部破片。4は覆土の1点が主に包含層I17区のものと同接合した。30mほど離れたK8区のものとも接合している。渦巻状文は4か所と思われる。胎土には砂粒が多く含まれ、外面には炭化物が付着する。内面調整は粗い。5は最大径付近の破片で、上半では内面の凹凸が顕著。アミの薄い部分は赤色顔料が付着する範囲、濃い部分は赤色顔料が黒変している範囲である。黒変は被熱のためと考えられる。4・5とも沈線は細く、浅い。6は突起下に器面を4区画する2本組の沈線が垂下するもの。無節の斜行縄文がまばらに施される。7は覆土のものと同接合層のものが接合した。4か所の突起をもち、突起上には竹管状工具による刺突が3か所加えられる。胴部には無節の斜行縄文地に、横方向に連続する蛇行沈線が施される。8は格子目状沈線が施されるもの。突起部に8の字状貼付が加えられる。沈線は3本組。

9は磨消縄文が施されるもの。縄文は無節で、縁取りの沈線は太い。口唇は角形で丁寧に磨かれる。文様は横位に不規則に展開するようである。10は櫛歯状沈線が施されるもの。縁取りの沈線は太い。11は沈線が施される口縁部。12は縄文のみが施されるもの。覆土の1点と周辺包含層の破片が接合した。平縁で、8単位の8の字状貼付が加えられる。胴部には横走気味の細かい縄文がまばらに施される。胎土に砂粒を多く含む。同一個体の未接合破片は25mほど離れた範囲の包含層およびP-21・34(図N-49-9)から出土している。

13はタガ状の貼付帯をもつもの。H-2の覆土と、重複するSP-190の覆土、および周辺包含層の破片が接合した。口縁部に2本の貼付帯が横環し、貼付帯間は無文となる。縄文は同一原体を用い、貼付帯上は横回転、胴部は縦回転として羽状に施している。(柳瀬)  
石器 9点を図示した。出土層位は17・18・21が床面・付属施設、他が覆土である。石材は14~16が頁岩、17・19が緑色泥岩、18が閃緑岩、20・21が安山岩である。

14は石鎌である。ややカエシの明瞭な有茎鎌で、茎部は細く作り出されている。

15はスクレイパーである。左側縁の調整が入念で急角度である。腹面側の縁辺部には鈍い光沢が観察され、左側縁側腹面の方が光沢の発達範囲が広い。光沢の範囲は長さ4.5cm、幅0.5cm程である。素材打面部には背面側から加工が施されている。

16は石核である。上面及び右側面を打面として、正面側に主な作業をおこなっている。上設打面からは右側面に剥離作業がおこなわれている。また、左側面の剥離面から下端面を剥離している。作業面を固定し、打面を転移しながら剥片剥離をおこなったことが理解できる。

17~19は石斧である。17はやや刃に近い両刃、円刃のもので、刃縁には微細な潰れが観察できる。形態は短冊形で、全面を入念に研磨している。末端部は裏面側からの加撃により破損している。18・19は刃部が作出されてないものである。両者とも撥形を呈する。18は裏面が平坦面となっている。19の本来刃縁となる部分には研磨により平坦面が形成されている。また下端方向からの加撃により、正裏両面に剥離が生じている。

20は敲石である。掌に収まる小ぶりな楕円形礫を素材とし、長軸の上下両端に敲打痕が観察される。

21はすり石である。楕円形礫の長軸方向の上下縁辺に平坦なすり面が観察できる。やや厚手の素材だが、扁平打製石器に類するものと考えられる。

時期 床面及び炉出土の土器から、縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。住居廃絶後に、配石遺構に関連するとみられる礫が配されているが、住居と配石遺構の新旧関係は判断できなかった。炉跡から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定をおこない、4990yBP±40(補正年代)の結果



が得られた。出土遺物から判断される時代からH-10の測定結果と同程度の年代値を推測したが、上記した測定結果の値とは符合していない。  
(坂本)

### H-3 (図IV-13、図版8・70)

位置 L13・14 規模 (3.03/2.47)×(2.66/2.32)×0.18 平面形態 隅丸方形

立地地形 調査区南東側無名の沢にいたる緩斜面上に位置する。

確認・調査 試掘溝がかかっているが、範囲確認調査時には認識されなかった。調査区L13・14の包含層調査中、Ⅶ層上面で径3mほどの円形を呈する黒～黒褐色土を確認した。円のほぼ中央を通るように2本のベルトを直交させて設定し、土層観察をおこなった。比較的平坦な床面と明瞭な壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と判断した。

覆土 3層に分層した。いずれもⅦ層を含み、自然堆積と考えられる。生活面の確認はできなかった。また、掘上土も確認できなかった。

構造 床はⅦ層中で構築されており、非常に軟らかいが、ほぼ平坦で水平である。掘り込み面はⅤb層中と考えられ、比較的浅い住居である。壁の立ち上がりは、Ⅶ層中では明瞭であるが、Ⅴ層中では平面の輪郭同様判然としない。

床面調査後、住居全体と周辺を数回掘り下げたが、柱穴等は見つかっていない。

遺物出土状況 土器(Ⅲ群A類)9点、石器1点、鏃等1点、計11点出土している。  
(新家)

掲載遺物

土器 1は覆土から出土したⅢ群A-3類。結束羽状縄文のみが施される突起部。  
(柳瀬)

時期 出土遺物から縄文時代中期と考えられる。  
(新家)

### H-5 (図IV-14~18、図版9・38~40・70・93)

位置 D19・20 規模 (3.40/3.10)×(3.26/2.08)×0.51 平面形態 円形

立地地形 調査区南西側の平坦地。切り合いはないが、同時期と思われるH-6・8が北西側に隣接する。

確認・調査 調査区D19の包含層調査で、Ⅶ層まで掘り下げたところ、径3mほどの円形を呈する黒～黒褐色土を検出した。D20区側に土層観察用のベルトを設定した(断面図A-A')。さらにこれに平行・直交する2本のベルトを追加して掘り下げた結果、平坦な床面と明瞭な壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡と判断した。

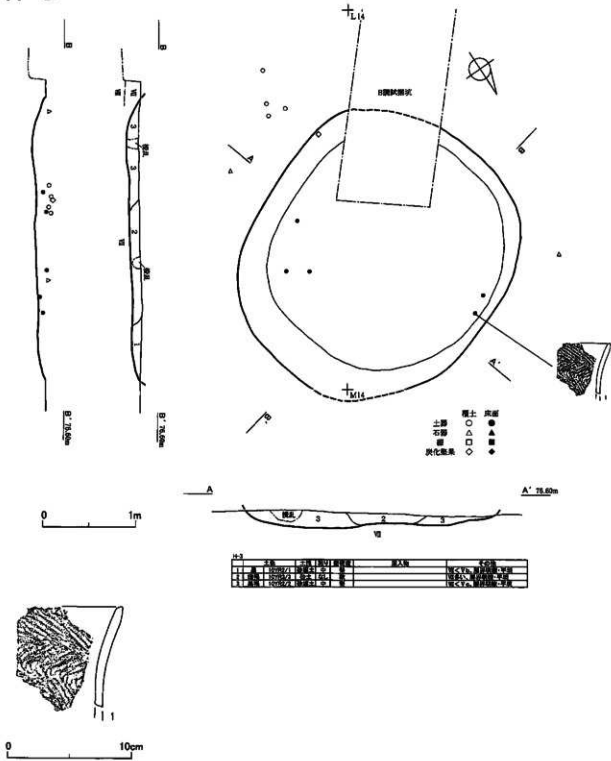
覆土 5層に分層した。覆土1層は包含層Ⅴb層主体、2層は包含層Ⅶ層主体の層で、自然堆積と考えられる。3～5層は、土壌の混ざり具合や堆積状況から、人為的な埋土とみられる。構築床面より10cmほど高い位置の覆土5層中から遺物が多く出ており、このレベルが生活面であったと考えられる。掘上土は確認できなかった。

構造 床面はⅦ層上面のローム(Ⅶa)層まで掘り込まれて構築されている。ほぼ水平・平坦である。掘り込み面はⅤb層中で、北側の壁の方がやや垂直気味に立ち上がっている。

また、焼土1か所と住居に伴うと考えられる小ピット6基が検出された。うちHP-2～6は柱穴状ピットである。

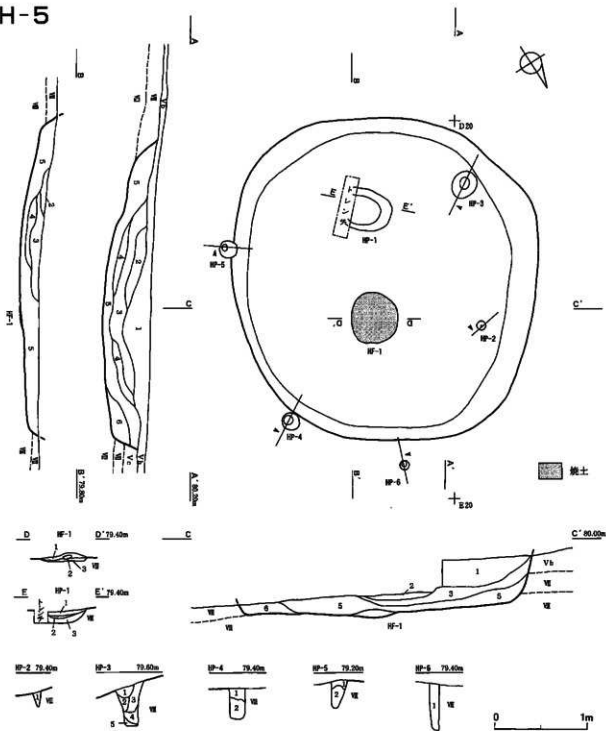
焼土 住居の生活面と思われる5層を下げている途中で、住居中央よりやや北東側からHF-1を検出した。生活面より若干低いレベルにあり、この住居に伴うものかは判断できなかった。焼土の範囲は長径約55cmの楕円形である。被熱している層厚は10cm。3層に分層した。1層は住居の覆

H-3



図IV-13 H-3

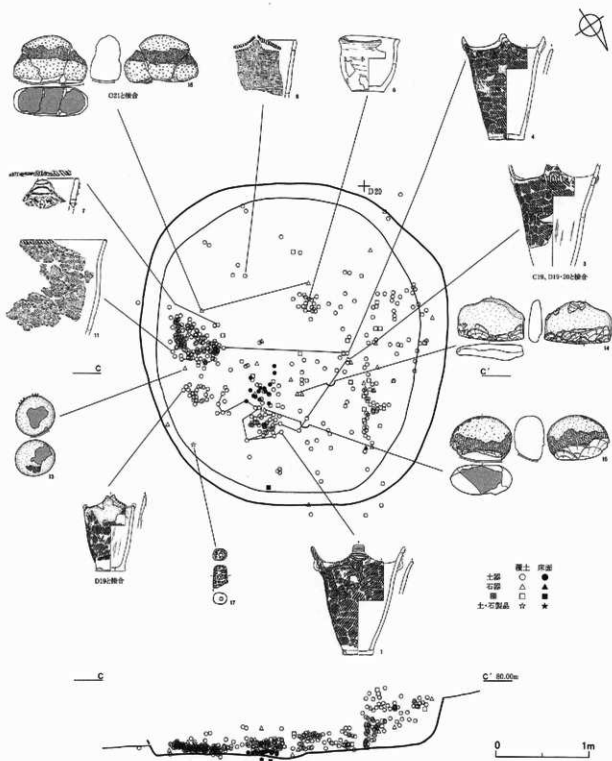
H-5



HP-1	層	土層	土質	形状	用途	備考
HP-1	1	10YR5/1	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR4/9	粘砂土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
	3	10YR4/9	粘砂土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-1	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-2	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-4	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-5	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-6	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	溝跡(深さ不明) Vb, (粘土)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)

HP-1	層	土層	土質	形状	用途	備考
HP-1	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	Vb, 溝跡(深さ不明)
	2	10YR4/9	粘砂土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
	3	10YR4/9	粘砂土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-2	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	Vb, 溝跡(深さ不明)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-4	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	Vb, 溝跡(深さ不明)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-5	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	Vb, 溝跡(深さ不明)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)
HP-6	1	10YR5/3	粘土	壁	溝	Vb, 溝跡(深さ不明)
	2	10YR5/3	粘土	中	溝	溝跡(深さ不明) 溝口(深さ不明)

図IV-14 H-5 (1)



図IV-15 H-5 (2)

土5層が焼けたものである。2層は最も明るく被熱痕跡が顕著だが、不連続な焼土塊と観察され、その場で焼けたものかは断定できなかった。3層はⅣa層が被熱したと考えられる。

小ピット(HP-1~6) HP-1は、覆土5層調査中住居南西側に褐色土のまとまりを確認、トレンチを設定後、土層観察の結果、小ピットと断定した。輪郭を明瞭にするためⅣa層まで下げて記録をおこなった。長径40cm以上の楕円形を呈した浅い皿状のピットである。その他のHPは、覆土5層の調査終了後、構築床面・壁・住居外を数回精査し、検出した黒色土の落ち込みを全て半截した結果、直径10~30cm、深さ16~51cmの5基の柱穴状ピットを壁際および壁外で検出したものである。HP-2と5は先細るタイプである。覆土はⅤb層を主体とするものが多い。

遺物出土状況 土器885点、石器26点、土玉1点、焼成粘土塊1点、鏝等19点、計932点出土している。土器は全て縄文時代中期前半のⅢ群A類土器である。一部まとまって出土し、7個体が復原された。垂直分布図にも表れているように、出土遺物のほとんどが覆土5層に集中しており、復原された土器個体もこの層からのものが多い。この面が生活面であったと考えられる。(新家)

#### 掲載遺物

土器 12点図示した。1・3~9・11・12は主に覆土5から、2・10は覆土1~3から出土したのもの。すべてⅢ群A-3類。

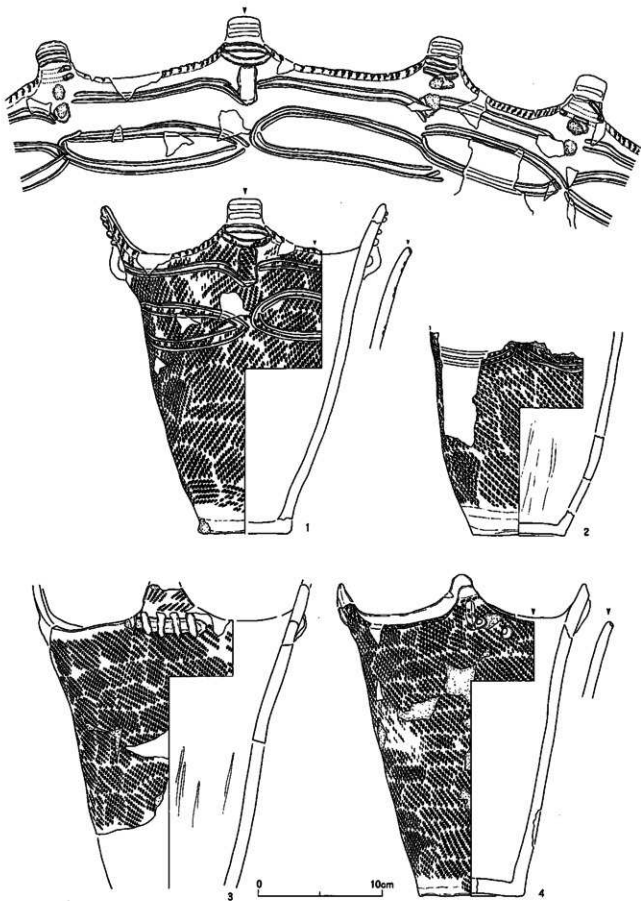
1・2・7・8は沈線による文様が施されるもの。1・7は突起周辺にのみ貼付が加えられる。1は覆土5の破片が接合したもので、突起先端以外ほぼ全体が残存する。突起下には縦位の橋状貼付が施される。口唇端部には縄による縦位の刻みが加えられる。胴部上半に2本組の沈線でレンズ状の文様が描かれる。7は突起部。突起下に貫通孔をはさんで一对の円形貼付が加えられる。貫通孔には炭化物と思われる黒色の固形物がつまっている。口唇には篋状工具による縦位・斜位の刻みが加えられ、突起頂部にも及ぶ。2は複節の斜行縄文地に、3本組沈線によるレンズ状の文様が描かれる。8は半截竹管状工具による直線的な沈線が施される。口唇端部には縄による縦位の刻みが加えられる。

3・4・9・10は突起周辺にのみ貼付が加えられるもの。3は覆土3・5、HP-1および周辺包含層の破片が接合した。大部分は覆土5の破片である。底部付近と突起先端以外のほとんどが残存する。突起下に縦・横の貼付が加えられ、これより上では原体の回転方向を変え、羽状縄文としている。口唇には斜位の刻みと思われる痕跡が認められるが、磨耗して不明瞭である。4・10は突起下に縦位の貼付が加えられ、口唇に縄文が回転施文されるもの。4は覆土5の破片が接合したもので、ほぼ完形である。突起は先端が薄くつぶされ、貼付の上端に横位の縄圧痕が加えられる。10の地文はRL斜行縄文で、突起下の部分では回転方向を変えて羽状としている。9は覆土5の1点と周辺包含層の破片が接合したもの(図Ⅴ-2下段)。突起下には貫通孔と、弧状および縦の橋状の貼付が施され、貼付には縄線が加えられる。口唇直下外面に縄の刻みが施される。5・11は縄文のみが施されるもの。5は覆土5の接合したもので、ほぼ完形である。突起は4か所、3種類の形態がある。図の左右の突起は球形に近い。11は結束第2種羽状縄文が施される。口唇は外傾する角形で、縄の刻みが加えられる。胎土には小礫が多い。6は無文のもの。覆土5の破片が接合した。鉢形で、頸部がややくびれ口縁は外反する。器壁が厚く、胎土には砂粒が多い。12は口唇直下に横位の粘土紐が貼付され、貼付と口唇の間に沈線が加えられるもの。口唇断面はやや内傾する切出状。(柳瀬)

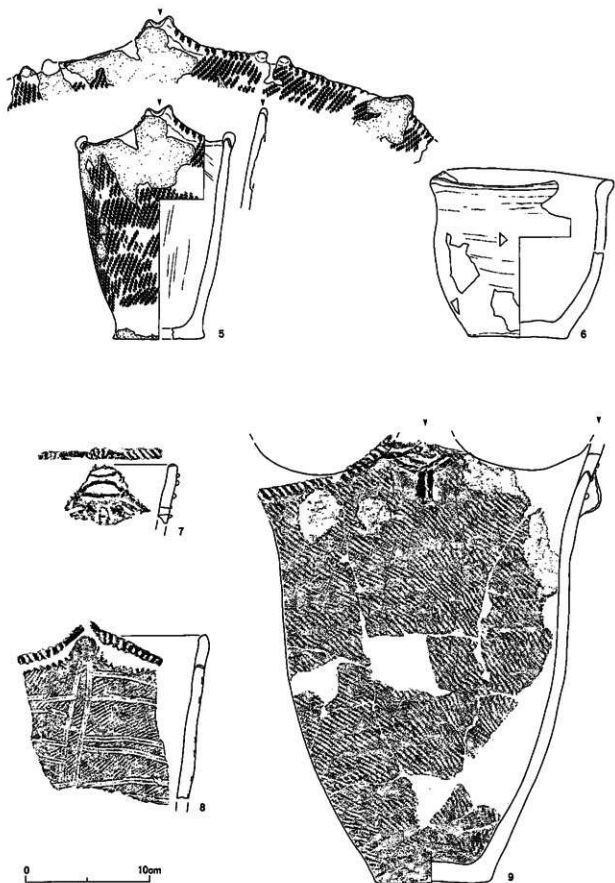
石器 4点を図示した。全て覆土出土遺物である。石材は全て安山岩である。

13はすり石である。拳大の円礫を素材としている。正面と下端に、不整形なすり面が認められる。また、上下両端には敲打痕が観察され、複合的機能を有した石器と考えられる。

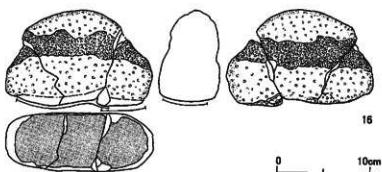
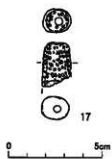
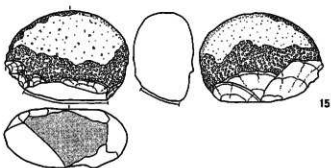
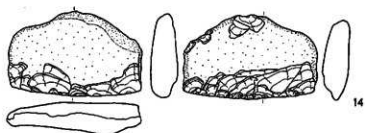
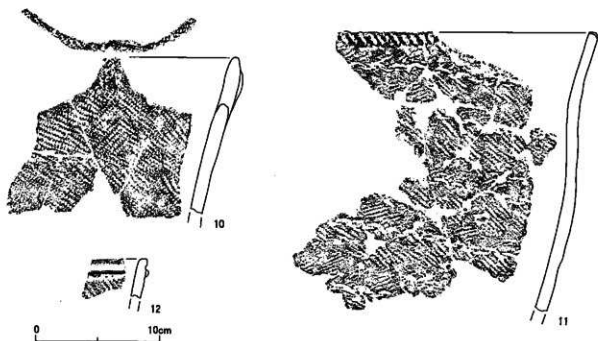
14は扁平打製石器原材である。扁平礫を素材としている。側縁は自然面で、下縁に対し直交方向に



図IV-16 H-5 (3)



図IV-17 H-5 (4)



図IV-18 H-5 (5)



設定されている。加工は主に下縁の両面に連続的に施されている。これにより形成される下縁の後縁は、側面及び下面から観察した場合、概ね直線的である。また中央部を除き、断面がV字状を呈す。中央部のみは複数回の加撃の痕跡があるものの、剥離には至らずに厚さを残し、断面形がU字状を呈す。断面V字形の目的形状に至らなかったことが原因として、原材料のまま遺棄された可能性がある。

15・16は北海道式石冠である。15の体部の整形敲打は軽微であるが、16は全身敲打により、石冠状に整形している。15はすり面が著しく正面側に傾き、鉾巻状の加工部まで食い込んでいる。すり面の縦断面は強く湾曲している。すり面縁辺には、幅4cmを超える大型の剥離面が観察される。下方からの加撃が原因し、裏面の下端すり面から右側縁にかけて大きく欠損している。16は左右両端の欠損部が接合している。右接合部のすり面に対し、本体と左接合部すり面は連続して磨り減りが進行し、右接合部との間に段差が生じている。右接合部が破損した後も続けて使用され、左側部の破損が原因して廃棄されたことが考えられる。本体及び左接合部は、右接合部に比べ、より、すり面が湾曲し、正面側に偏っている。(板本)

土製品 17は土玉。正面観は長方形を呈し、断面はやや扁平。長軸方向に貫通孔をもつ。全面に刺突が施される。

なお、焼成粘土塊としたものはH-6などから出土しているものと同様の、軽石に類似するものである。H-6の項で詳述している。(柳瀬)

時期 出土遺物、周辺の遺構等から縄文時代中期中葉と考えられる。(新家)

H-6 (図IV-19~26、図版10・40・70・71・94・95)

位置 C・D21・22 規模 ((5.80)/(5.10))×((4.50)/(4.00))×0.49 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南西側の平坦面に位置する。5m東側にはH-5がある。住居南西側は調査区外におよんでいる。H-6北西側で、ほぼ同規模と思われる住居跡H-8を切っている。2軒の切り合い関係は、H-6北側の風倒木による攪乱のため明確に把握できなかったが、調査区境界線の土層観察により、新旧を断定した(図IV-19)。またこのH-6と平面上重なる焼土F-9、土坑P-87はH-6より新しいものである。

確認・調査 調査区C21・22のⅦ層調査中に丸く大きな黒色土を検出した。土層観察用のベルトを設定し、周囲を掘り下げ、平坦な床面と明瞭に立ち上がる壁を確認し、住居跡と判断した。

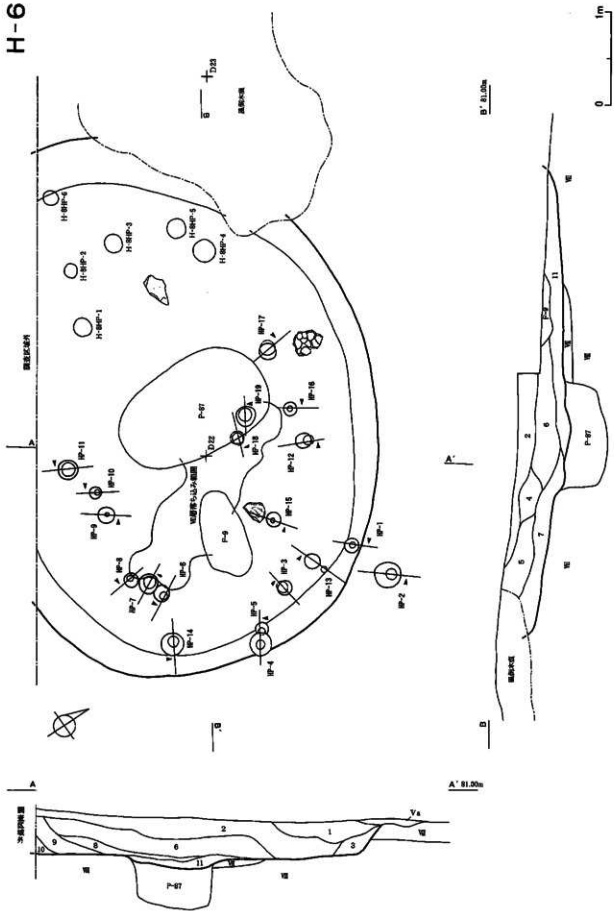
覆土 11層に分層した。Ⅴ層主体のものが多く、F-9は6層の上に位置する。11層はP-87の覆土1と対応する。

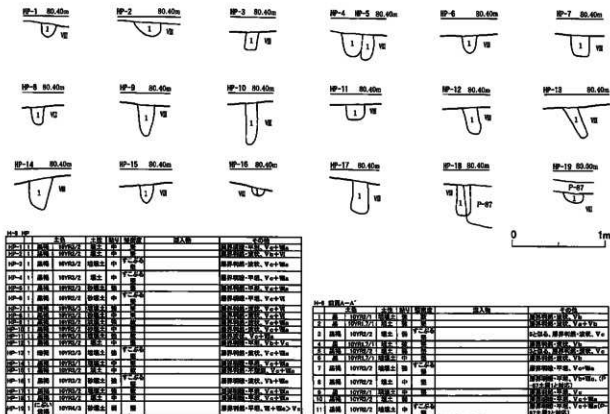
構造 床は水平かつ平坦である。住居東側でⅦ層が周囲より落ち込んでいる部分があり、ここではⅦ層を掘りきらずに床面が作られている。この落ち込みは、住居よりも古い風倒木に起因する自然地形と考えられる。掘り込み面はⅤb層中である。

伴う炉や焼土はなかったが、住居より新しいと考えられるP-87の覆土に焼土様の層があり、この住居の焼土が混ざりこんだ可能性がある。

小ピット (HP-1~19) 覆土調査終了後、構築床面・壁・住居外を数回精査し、黒色土の落ち込みを全て半截して断面を観察した。その結果19基の柱穴状ピットを確認した。覆土はいずれも1層で、Ⅴ層とⅦ層が混ざり合った褐色土である。HP-18・19はP-87に切られている。住居内南西側の柱穴はH-8と重なっており、どちらの住居に伴うか判断しきれなかったが、H-8で扱った。

遺物出土状況 土器768点、石器97点、土玉1点、焼成粘土塊88点、礫等113点、計1,067点出土している。縄文時代中期前半のⅢ群A類土器が、覆土・床・付属施設から766点出土し、大多数を占める。床





図IV-20 H-6 (2)

面で取り上げた土器片にはP-87の覆土から出土した土器片と接合したものもある。どちらの遺構に伴うものかは判断し兼ねた。ただP-87付近以外のH-6の床面からは、まとまった土器片の出土はあまり見られなかったので、両遺構間で接合した土器はP-87で掲載した。これらの遺物は、H-6とP-87がほぼ同時に埋没した際に流れ込んだ可能性もある。また、覆土と床から多数の焼成粘土塊が出土している。

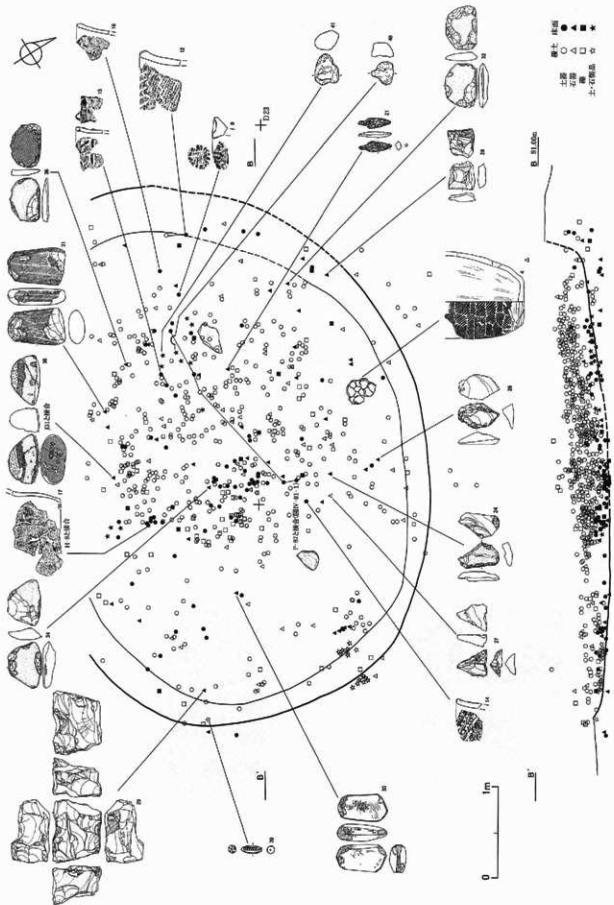
(新家)

## 掲載遺物

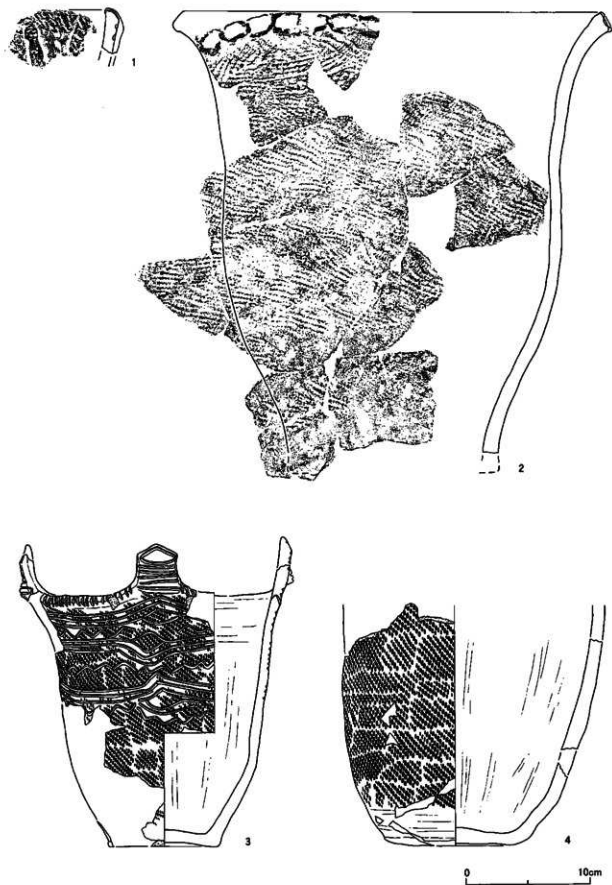
土器 17点図示した。1・4・9・12~17は主に床面から、2・3・5~8・10・11は主に覆土から出土したもの。1・2はⅢ群A-2類、3~17はⅢ群A-3類である。

1は突起部の破片。口唇は外傾する切出状で縞糸疔痕が加えられる。縞糸疔痕が加えられる縦位の貼付間に、半截竹管状工具による押しが施される。出土層位は床面であるが、他の床面出土遺物がⅢ群A-3類であることから判断すると、混入の可能性はある。2は底部間近まで残存する。外傾する切出状の口唇に、横に連続する鎖状の粘土紐が貼付される。地文は斜行縄文で、口縁直下などで不規則な羽状をなす部分がある。

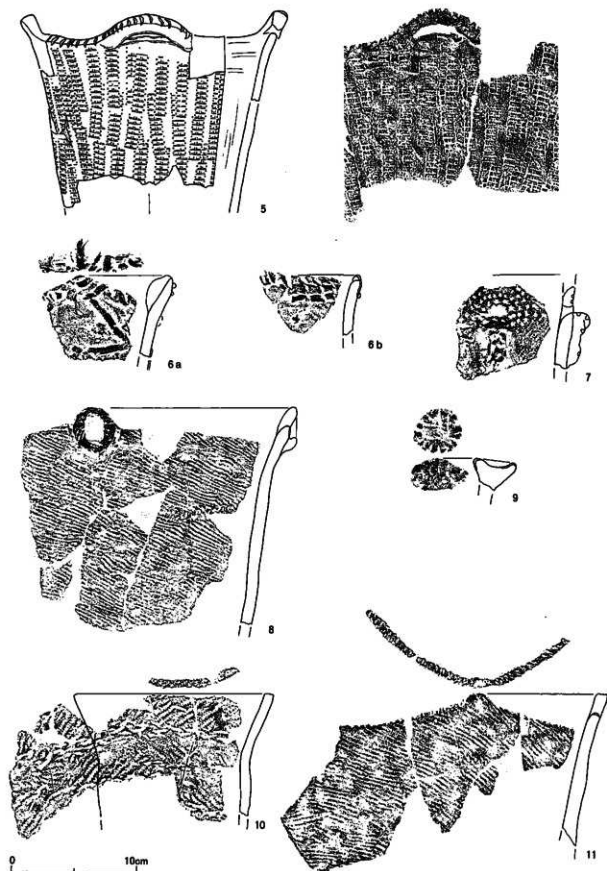
3は沈線が施されるもの。覆土の1点と主に周辺包含層のものが接合した。40mほど離れた包含層N23区のものとも接合した。突起は先端が平たくつぶされ、基部には横位の貼付が加えられる。口唇はやや角形で外傾し、篋状工具の縦位の刻みが加えられる。胴部には横環する3本組の沈線と波状の沈線が3段施され、突起下の位置では3本組沈線に1~2本の沈線が加わって菱形をなす。6~8は貼付が施されるもの。6は無文の粘土紐による文様が施されると思われるもの。6bは50m以上離れた包含層112区の破片と接合した。同一個体ではあるが、未接合の破片が床面から出土している。波頂部付近の貼付は内面にまで及び、内面にはさらにつまみ状の貼付が加えられる。波頂部から右下にか



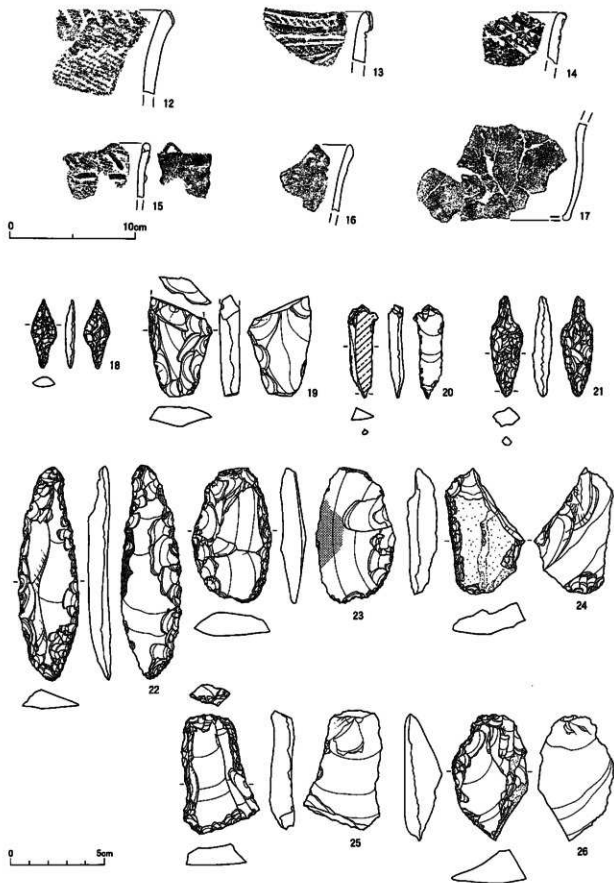
図IV-21 H-6 (3)



図IV-22 H-6 (4)



図IV-23 H-6 (5)



图IV-24 H-6 (6)

けて、J字形の貼付が剥落した痕がある。口唇には粘土紐が貼付された痕跡が明瞭で、縄による斜位の刻みが加えられる。7は突起部の破片で、貫通孔の下位に縦・横の貼付が施され、貫通孔周辺と貼付上に刺突が加えられる。8は突起部に環状の貼付が加えられる。地文はRL斜行縄文で、貼付上にも施される。9は突起先端部。上面視は円形で、周縁に擦糸圧痕が施される。

4・10~12は縄文のみが施されるもの。4は床面からまとも出土したものと覆土3のものが接合した。胴部下半から底部付近で、ゆがみが著しい。10はP-87と接合している。角形の口唇に縄文が回転施文される。結束第2種羽状縄文が施される。11は丸形の口唇端部に縄の縦位の刻みが加えられる。12は肥厚し外傾する口唇端部に縄の斜位の刻みが施される。

13は口唇部に2条の粘土紐が貼付されるもの。貼付間には縄の斜位の刻みが加えられる。斜行縄文地に沈線が施される。14は平行沈線間に半截竹管状工具によると思われる押しが施されるもの。口唇断面は角形で、磨耗して不明瞭であるが縦位の刻みが加えられる。

5は魚骨回転文が施されるもの。覆土の5点と、H-5覆土および主に20m範囲の包含層のものと接合した。60mほど離れたM9区のものとも接合している。口縁の4か所に把手状の貼付が施される。口唇は外傾する角形で、篋状工具の縦位の刻みが加えられる。原体はニシンタイプより大きく、サケタイプより小さいものようである。

15~17は小形のものでいずれも床面から出土している。15は縄文地に貼付が施されるもの。突起は貼付で成形され、内面には三角形の隙間が残る。16・17は無文のもので、16は突起部、17は胴部~底部である。

(柳瀬)

石器 21点を図示した。出土層位は21・24・26~32・34・36・38が床面で、他は覆土である。石材は18・20~29が頁岩、19が玄武岩、30・31が緑色泥岩、32~38が安山岩である。

18は石鏃である。体部が木葉形を呈する有茎の鏃で、カエシが不明瞭である。

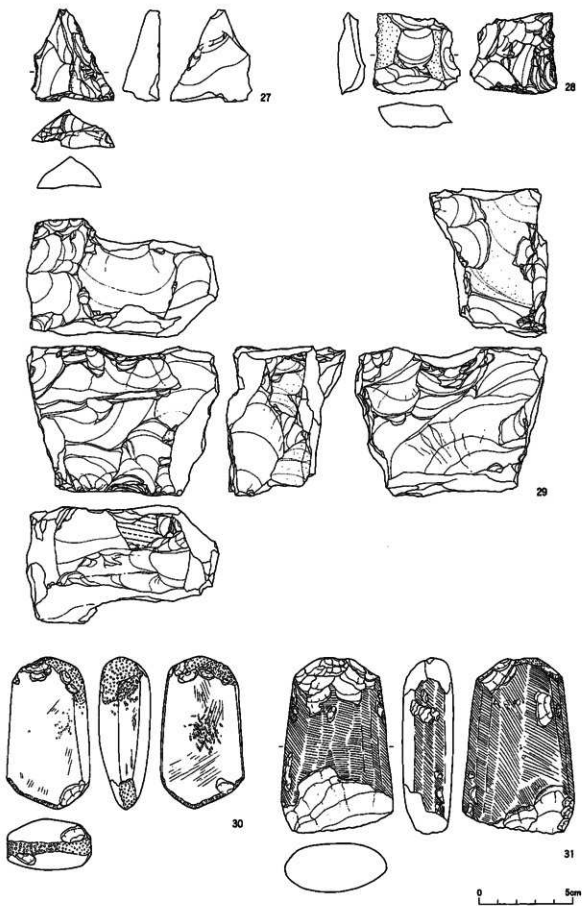
19は石槍である。やや細手で厚手の形態である。H-8の石槍(図IV-29-4)と同一母岩で、このほか同一母岩視される調整剥片が、床面、覆土などから6点、石槍の基部破片がP-87から1点出土している。

20・21は錐形石器である。20は素材の突出した末端部に軽微な調整を加え錐状尖頭部を形成している。尖頭部末端は磨耗により平坦化している。21は有茎石鏃の形態を呈するが、尖頭部が磨耗しているため錐形石器と分類した。横断面は分厚い凸レンズ状を呈す。

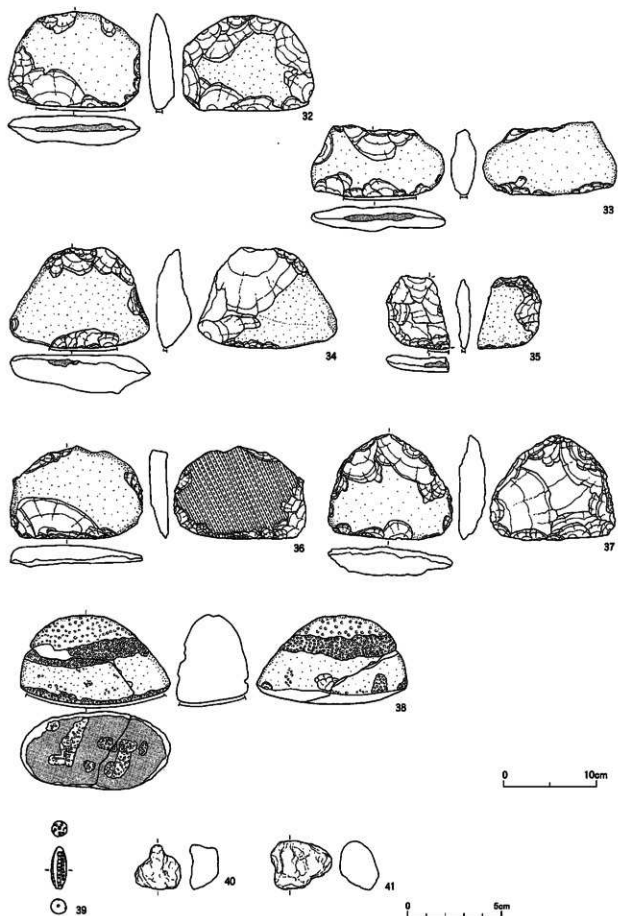
22~27はスクレイパーである。22~25は片側縁に連続的な小型剝離調整が施され、対する片側縁に大型で粗雑な両面調整が加えられるものである。連続的な調整を受けた側縁は、側面から観察すると直線的である。また、22・23の裏面には光沢が認められ、刃部として機能したことが考えられる。対する粗い加工を受けた縁は横断面がV字状に整形されており、器体調整と考えられる。25は平面短冊形で、連続的な縁調整が施されるものである。26・27は不規則で粗雑な調整剝離により縁辺が加工されるものである。26の加工縁辺平面は外湾形を呈し、中央部の最も突出する範囲に小剝離がまとも観察される。27の左側縁には微細剝離が連続し、縁辺平面は内湾している。また、下面折れ面に剝離を施し、さらに剝離面を打面として右側縁を剝離している。

28・29は石核である。28は裏面を主な作業面として、周囲から求心的に剝離した後、裏面を打面として、周囲に剝離作業をおこなうものである。裏面の作業面は、周囲縁辺からの平坦剝離、もしくは周囲に設定された平坦面打面からの剝離と考えられるが、全てのネガティブパルプが失われている。29は主に上下両設打面から正・裏面に作業をおこなうものである。節理が多く入るが、正面側が比較的良好に作業が進行している。側面には正・裏面を打面とした剝離が観察される。また、側面の自然





圖IV-25 H-6(7)



図IV-26 H-6 (8)

面から亜角礫素材と推測される。

30・31は石斧である。30は刃部が作出されていない石斧原材である。上下両端及び裏面中央部に敲打痕が観察される。31は両端が欠損しているが、基部側は剥離と敲打により丸みを帯びた形状に、刃部側は裏面末端側からの複数回の剥離により刃部状の縁辺に整形している。再生を目的としたことが推測される。

32～35は扁平打製石器、36・37は扁平打製石器原材である。素材は32～34が扁平礫、36が節理割れによる剥片である。35・37は剥片素材とみられる。32～35のすり面は断面・側面方向からみて、おおむね平坦且つ直線的に捉えられる。特に33・34のように、部分的にすり面が形成されたものを観察すると、すり面部が直線であるのに対し、非すり面部（調整縁辺部）は湾曲している。つまり、平坦面に掘えた場合、すり面部のみが接地する状況である。36・37の下縁は連続的な調整により、断面V字形の鋭利な稜が形成されている。下縁はすり面同様、側面方向からみて、おおむね直線的に捉えられる。平面形態は大まかに半円形で捉えられるが、台形に近いもの（32・33・36）、正三角形に近いもの（34・37）がある。

38は北海道式石冠である。形状は正面からみて、左右非対象なアイロン形を呈する。すり面は裏面側に傾いており、縦断面でみると外湾している。また、すり面は細かな凹凸が激しく、擦り作業はあまりおこなわれていないと考えられる。器体は左側縁中部から右側すり面にかけて、袈裟切りされたように斜めに破損している。（坂本）

土製品 3点図示した。39は覆土から、40・41は床面から出土したもの。

39は土玉。紡錘形で、貫通孔は長軸方向。長軸方向に並ぶ刺突が施される。40・41は焼成粘土塊としたもの。土器の胎土と同様な砂粒が含まれるため焼成粘土塊としたが、空隙が多いこと、形状に人の手のような痕跡が認められないことから、軽石などの可能性もある。なお、出土した土製品としたもののうち39の土玉以外は全て同様の「焼成粘土塊」である。また同様のものは、重複あるいは近接するH-5、P-87、F-9からも出土している。（柳瀬）

時期 出土遺物、周辺の遺構・遺物から、縄文時代中期中葉と考えられる。覆土堆積状況から、住居廃棄後すぐにP-87が掘られたと思われる。（新家）

H-8（図IV-27～29、図版12・71・96）

位置 C22・23 規模  $(2.36)/(1.72) \times ((1.90) \times (1.18)) \times 0.60$  平面形態 楕円形

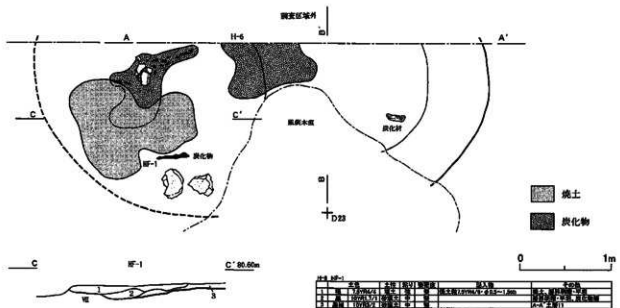
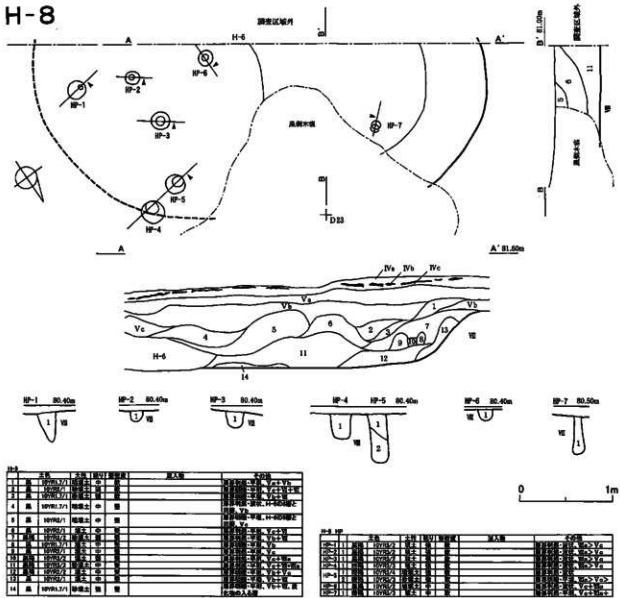
立地地形 調査区南西側の平坦面に位置する。南西側半分は調査区外に延びている。東側半分はH-6に切られている。北側の風倒木攪乱により、明瞭な切り合いが観察できなかったが、調査区境界線の土層観察から、H-6より古いと判断した。

確認・調査 H-6調査中、調査区の境界線の壁際に別の住居と思われる床面を検出した。床面直上で炭化物がH-6の輪郭外まで続いで出土しており、焼失した住居の可能性もある。風倒木により住居の輪郭と床面のほとんどが壊されていたが、調査区境界線に沿って北西にトレンチを伸ばし、また包含層をⅧ層まで下げて、立ち上がりとおおよその輪郭をつかんだ。土層観察の記録は、調査区外の法面と、これに直交するベルトでおこなった。

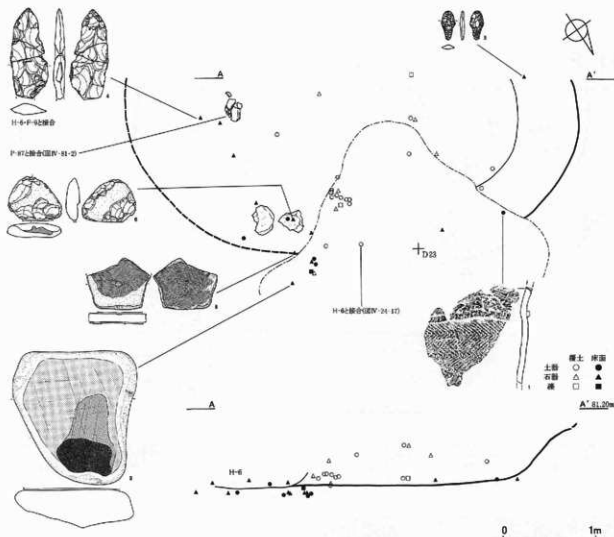
覆土 14層に分層した。Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ層で混成されており、堆積状況から判断すると、ある程度人為的に埋め戻されたものである。4層はH-6の6層と、5層はH-6の9層とそれぞれ同層である。14層は床面の炭化物層である。

構造 床面はほぼ水平で平坦である。Ⅷ層まで掘り込んで作られている。壁は緩やかに立ち上がる。

H-8



図IV-27 H-8 (1)



図IV-28 H-8 (2)

掘り込み面はVb層の下である。

また、焼土1か所と柱穴状ピット7基を検出した。

**焼土 (HF-1)** 住居東側床面に炭化材とともに焼土を検出した。2層に分層した。図中の焼土1層は、H-8の覆土11層にφ0.5~1.5cmの焼土粒が混入しているもので、その場で焼けたとは考えにくい。

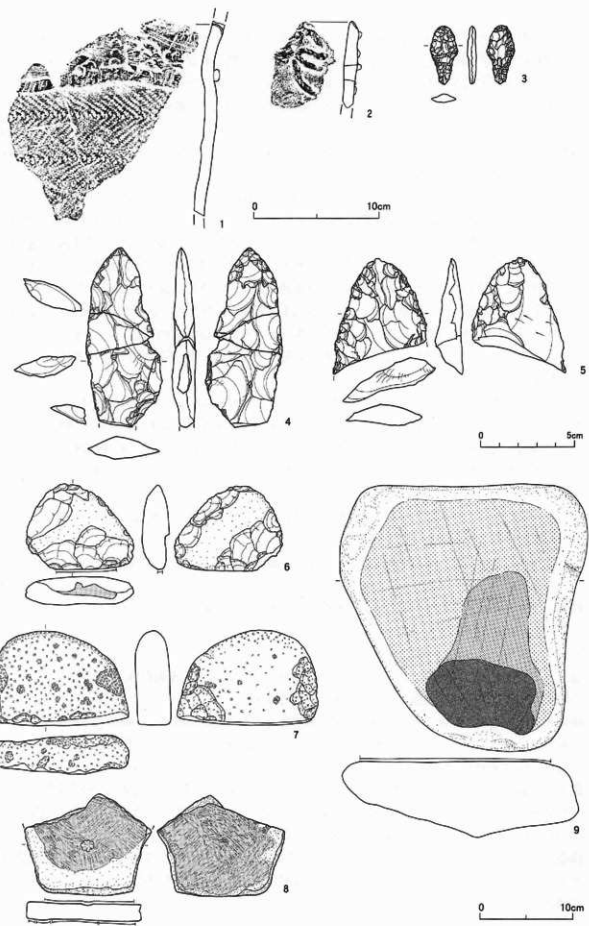
**小ピット (HP-1~7)** 住居床面までの調査終了後、構築床面・壁・住居周辺を数回精査し、柱穴の可能性のある落ち込みをすべて半截して断面を観察した。その結果、床面および壁面に7本の柱穴を確認した。住居床面の大部分がH-6と重複しており、輪郭が不明瞭な点から、H-6の柱穴の可能性もある。HP-5の覆土は2層、それ以外は1層に分層した。いずれもⅧ層とⅤc層が主体の黒〜暗褐色土である。

**遺物出土状況** 土器44点 (全てⅢ群A類)、石器22点 (台石・石皿が5点)、礫等4点、計70点出土している。炭化物は調査区境界線の床面からまともに出て、調査区外へ続いていた。焼土や炭化材の上から出土した遺物の中にはP-87出土の遺物と接合したものもあり (図IV-81-2)、住居埋没時の流れ込みとみられる。

(新家)

**掲載遺物**

**土器** 2点図示した。1は床面、2は風倒木痕から出土したもの。1はⅢ群A-2類、2はⅢ群A-



図IV-29 H-8 (3)

## 3類。

1は馬蹄形圧痕が加えられるもの。無文地に、撚糸圧痕が加えられる貼付による文様が施される。出土層位は床面であるが、他の床面出土土器はⅢ群A-2類であることから判断すると、混入の可能性はある。2は突起部の破片で、P-70坑底出土のもの（図Ⅳ-78-2）と同一個体である。貫通孔と、縄線の加えられる貼付が施される。口唇は外傾する切出状で、縄の斜位の刻みが加えられる。

(柳瀬)

石器 7点を図示した。出土層位は4・6・8・9が床面で、他は覆土である。石材は3・5が頁岩、4が玄武岩、6・7・9が安山岩、8が砂岩である。

3は石鎌である。有茎でカエシが不明瞭なもので、先端部は丸みを帯びている。

4・5は石槍である。4は複数の遺構（H-6・8、F-9）から出土した3点の破片が「折れ面」で接合し、また調整剥片が2点接合する。破損は、潜在割れ及び右側縁中央部からの剝離が器体に入り込んだことが原因と推定できる。加工は幅2cm以上の大型でやや粗い平坦剝離を主とし、連続的な小剝離は先端部に観察される。遺構内もしくは遺構付近での、若干の剝離作業が想定されるが、大まかな整形途中で破損したと推測される。H-6出土の石槍（図Ⅳ-24-19）と同一母岩で、このほか同一母岩視される調整剥片が、H-6の床面、覆土から6点、石槍の基部破片がP-87から1点出土している。5は剥片を素材としている。折れ面に接する右側縁下部の階段状剝離の加撃が器体に入り込み欠損している。

6は扁平打製石器である。扁平礫を素材としている。周縁を加工し、三角形状を呈する。すり面は、断面・側面方向からみて、おおむね平坦且つ直線的である。すり面幅は1cm前後と広い。

7は北海道式石冠原材である。下面は敲打により平坦に整形されている。扁平礫素材で、鉢巻状加工部が不明瞭のため、扁平打製石器にも類似するが、下面に幅3cmを超える平坦面を設定することから北海道式石冠の原材と判断した。

8は砥石である。石質は緻密で、すり面は非常に滑らかである。すり面は若干の凹凸はあるが、おおむね平坦である。

9は石皿である。すり面が平滑なものである。下部末端から6cmほどの範囲が最もすり痕が顕著で、上部に向かい徐々に弱くなる。

(坂本)

時期 出土した遺物および周辺の遺構と遺物から、縄文時代中期中葉と判断される。

(新家)

## H-7（図Ⅳ-30・31、図版11・71・96）

位置 F・G11・12 規模 (2.76/2.54)×((2.38)/2.14)×0.42 平面形態 楕円形

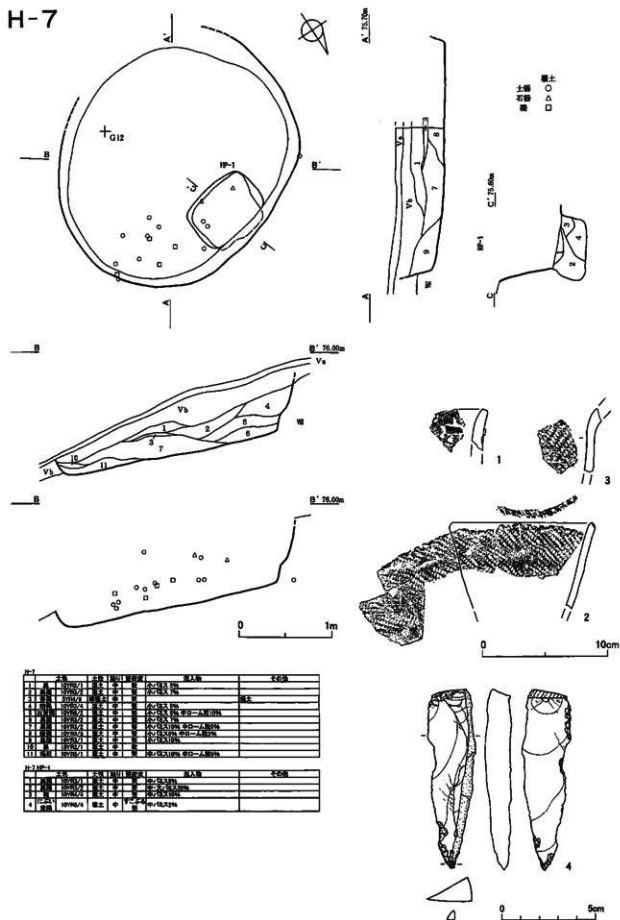
立地地形 調査区東端、無名の沢に続く急斜面に位置する。

確認・調査 調査区F12でVb層の調査中、黒褐色土のまとまりを確認し、斜面下方向及び直交する土層観察用のベルトを設定し、ベルトに沿ってトレンチ調査をおこなった。床面と壁の立ち上りを確認し、竅穴住居跡と判断した。

覆土 11層に分層した。主体は軽石・ローム粒の混入する黒色土・黒褐色土である。斜面下側の7~11層が堆積した後、斜面上側の1~6層が堆積しているため、埋め戻しの可能性がある。また竅穴のほぼ中央、覆土中位にレンズ状に薄く焼土（3層）が堆積する。

構造 床面は北西側でⅣ層を約50cm掘り込み、斜面下に向かって傾斜している。壁は急斜度に立ち上がる。柱穴は検出しなかったが、北壁際の床面において、隅丸方形で北側がオーバーハングする深さ約30cmのピット（HP-1）を検出した。

H-7



図IV-30 H-7 (1)



**遺物出土状況** 遺物は土器17点、石器5点、礫3点の計25点出土している。覆土の分類別出土点数は、土器(Ⅲ群A類16点)、石器(扁平打製石器1点、北海道式石冠1点、加工痕のある礫1点)で、床面では土器(Ⅲ群A類1点)、石器(石錐1点、Rフレイク1点)である。(菊池)

#### 掲載遺物

**土器** 3点図示した。3は床面から、1・2は覆土から出土したもの。1はⅢ群A-2類、2はⅢ群A-3類、3はⅢ群A類である。

1は無文の粘土紐と半截竹管状工具の押引が施されるもので、包含層J9区付近から同一個体が出土している(図V-14-42)。2・3は縄文のもの。2は覆土と、包含層K9区・G16区のものが接合した。丸形の口唇端部に縄の縦位の刻みを加えられる。3は羽状縄文が施される頸部の破片。(柳瀬)

**石器** 3点を図示した。出土層位は4が床面で、ほかは覆土である。石材は4が頁岩、5・6が安山岩である。

4は錐形石器である。縦長剥片を素材とし、末端部に軽微な調整を加えて、突出部を形成している。

5は扁平打製石器である。扁平礫を素材とし、上下縁辺を主に整形している。すり面は断面・側面方向からみて、おおむね平坦且つ直線的に捉えられる。下面からみると、下縁右側が裏面側に湾曲しており、湾曲部はすり面が発達していない。また、すり面縁辺には小剝離が観察される。作業の進行とともに加えられた調整、もしくは作業によって剝落したものと考えられる。

6は北海道式石冠である。器体がほぼ中心軸で半割するように欠損している。右側部のすり面が、左側部に比べ、著しく裏面側に偏っており、破損後も右側部を継続使用したことが考えられる。また、裏面側に施された鉢巻状加工部が、破損部を境に右側まで及んでいない。鉢巻状加工の途中で破損したことが考えられ、使用開始後も、鉢巻状加工を含めた器体調整が必要に応じておこなわれたと推測される。(坂本)

**時期** 出土遺物より縄文時代中期前半の竪穴住居跡と考えられる。(菊池)

#### H-9 (図IV-31・32、図版13・41・71・96)

**位置** I・J9 規模(2.46/2.18)×(-/-)×0.70 平面形態 円形または楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面の下部に位置する。無名の沢に近接。

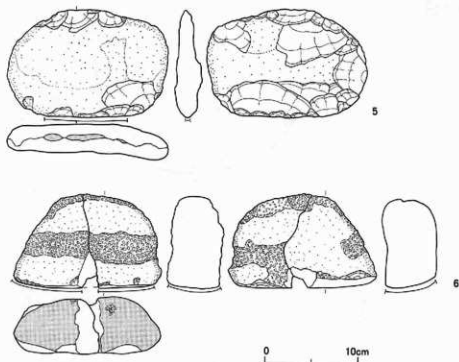
**確認・調査** J9区に先行して行ったI9区の包含層調査終了後、J9区との境界の土層断面により掘り込みの可能性を確認した。J9区を注意深く掘り下げたところ、Ⅶ層上面付近で、黒色土のまとまりと、1mほど離れた場所にF-10を検出した。黒色土は斜面の上方では境界が明瞭であったが、斜面の下方では不明瞭であった。I9区との境界に沿ってベルトを設定し、覆土の掘り下げを行った。床面が地形の傾斜よりも明らかに水平に近く、台石・石皿が出土したことから、土層7が床面を覆っているものと推測し、竪穴住居跡と判断した。

**覆土** 主にⅤb層主体の黒色～黒褐色土で、自然堆積である。

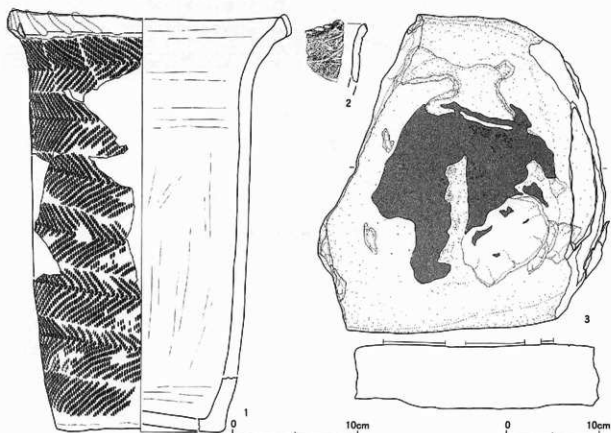
**構造** 床面は、斜面上方ではⅦ層、下方ではⅤb層相当の土層b・Ⅶ層を掘り込んで構築され、斜面と同方向にやや傾斜している。立ち上がりは緩やかで、壁はやや開く。竪穴外で柱穴状ピットが1基検出され、周辺に他の遺構が分布していないことから、H-9に伴うものと判断した。炉は検出されていない。

**遺物出土状況** 土器16点、石器4点、礫2点、計22点出土した。内訳は、覆土のものは土器7点(Ⅲ群A類)、石器1点(フレイク)、床面出土のものは土器9点(Ⅲ群A類)、石器3点(石皿1点、フレ

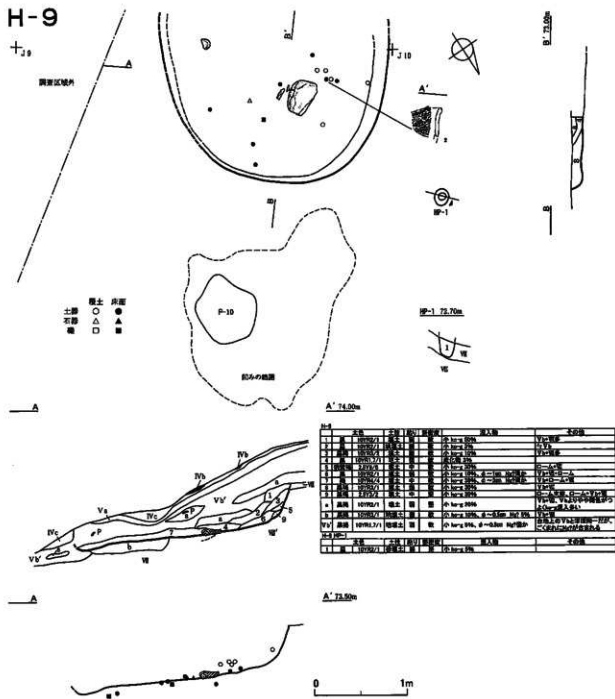
## H-7の遺物



## H-9の遺物



図IV-31 H-7 (2)・H-9 (1)



図IV-32 H-9 (2)

イク2点)、礫2点である。床面出土のフレイクは台石・石皿に接合する。

#### 掲載遺物

土器 2点図示した。1は覆土、2は床面から出土したもの。1はⅢ群A-2類、2はⅢ群A-3類。

1は覆土の1点と周辺包含層の破片が接合したもの。結束羽状縄文が施される。口唇は肥厚して外形する角形で、斜位の貼付が施される。貼付には捺糸圧痕が加えられるが、無文の部分もある。2は浅い沈線による文様が施されるもの。口唇は外傾する切出状で、棒状工具による斜位の刻みが加えられる。(柳瀬)

石器 3は台石・石皿である。出土層位は床面、石材は安山岩である。盤状礫片を素材とし、自然面側の平坦面中央部に滑らかなすり面が認められる。すり面は素材の形状に影響され、若干の凹凸が観察されるが、平滑な面として認められる。(坂本)

時期 縄文時代中期前半の竪穴住居跡である。(柳瀬)

#### H-10 (図IV-33、図版14・71)

位置 G15・16、H16 規模 (2.70/2.37)×(2.48/2.20)×0.10 平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際遺構集中範囲の北西側に位置する。周囲にはH-2、プラスチック状土坑、配石遺構などがまとめて検出されている。

確認・調査 調査区G16でのVb層までの掘削作業時、暗褐色土のまとまりを検出した。暗褐色土プランに、土層観察用のベルトを設定し、ベルトに沿ってトレンチ調査をおこなった。ベルトの断面観察により、堆積状況、Ⅳ層上面に形成された焼土(炉)と柱穴状ピットを確認した。ベルト部分を残し周囲をⅣ層まで掘り下げて円形のプランを検出し、竪穴状の遺構であることを確認した。床面検出後、柱穴状ピット、炉などの付属施設の調査をおこなった。

覆土 覆土は5層に分層した。覆土の堆積は①～③の堆積単位にまとめられる。なお、遺物取り上げ層位は、「覆土」で一括している。

- ① 上位の堆積。暗褐色土1層で構成。覆土中央部の狭い範囲に主に堆積していた。周辺遺構の掘上土と考えられる。
- ② 上位から下位の堆積。黒色土2～4で構成。3層は20cm前後のやや厚い堆積である。Ko-gやロームブロックの含有は少量で、自然堆積と考えられる。
- ③ HP-16直上に堆積する黒褐色土5層で構成。HP-16の覆土の可能性があり、堆積時期は覆土4層より新しく、3層よりも古い。

構造 床面はⅣ層のロームまで掘り込まれ、南側半分が高く、北側半分が低く構築されている。南北床の高低差は5cmほどで、両者の床面はほぼ、水平、平坦に作られている。壁は掘り込みが浅く、比較的緩やかな立ち上がりであった。

炉は住居の中央部東側寄りに近接して2基確認された(炉1・2)。炉1は地床炉、炉2は立石を伴う地床炉である。立石は立方体状のものが炉の東側に配置されていた。立石は5cmほどの深さで埋め込まれ、床面から上部へは15cmほどが露出する状態であった。立石の上端は折れにより平面となっていた。風化状況から、折断は住居構築時以前に施されたものと判断した。焼土化した範囲は炉1が25cm、炉2が40cmほどである。両者の上部には、炭化物粒と焼土粒を含有する灰褐色土の堆積が50～70cmほどの範囲で確認された。炉1・2は同時期に並存し使用されたものと考えられる。

柱穴状ピットは19基確認された。柱穴状ピットは住居の壁沿いを巡るように配置されている。径10cm前後の小型のものは12基あり(HP-4～15)、南北軸に対し西側の壁面を主範囲として、連続的に



構築されている。径20cmを越える大型ものは3基あり(HP-1~3)、東側と西側の床面に配置されている。また、径10~20cmのものは2基あり(HP-17・19)、それぞれ大型のものに近接するように配置されている。

柱穴状ピットで、深さが20cmを越えるものは5基、10~20cmのものは7基で、多くは住居南西側(斜面地形の高い側)に位置していた。この内、壁沿いに構築された小型ピットのほとんどは、内側に傾くように形成されている。深さが10cm前後のものは東側(斜面地形の低い側)に位置している。HP-16は住居の中心付近に位置するが、住居埋没後に覆土から構築されたものである。

これら付属施設の状況は次のようにまとめられる。柱穴状ピットは斜面高位側の壁を主範囲に、内側へ傾く深いピットが半周以上に巡る。また、斜面高位側の床面に深いピットが形成される。そして斜面低位側の床にやや浅く大型のピットが配置される。よって斜面高位側の壁沿いにはピットが連続し、低位側の壁沿いにはピットはみられない。主柱穴はHP-1~3の3基と判断した。炉は斜面の低い側寄りに配置され、立石も同方向側に位置する。出入口を示す明確な痕跡はみられないが、柱穴状ピットの配置が疎である東側(斜面低位側)に位置するものと推測できる。HP-18は細長い形状で、壁から壁外にかけて構築されている。あるいは、出入口施設に関連するものかもしれない。

周辺地形に対する柱穴状ピットと炉の配置の関係、炉の構造などで、H-2と共通性が認められる。遺物出土状況 土器19点、石器5点、礫等を含めれば計28点が出土している。床面・付属施設からは土器(N群A類7点)、石器(両面調整石器1点、フリイク1点)が出土している。(坂本)

#### 掲載遺物

土器 2点図示した。1は炉と覆土の破片が接合したものの、2は覆土から出土したものの。いずれもN群A類。

1は主に3本組沈線による文様が施される。2本組の部分もある。平縁で、口縁部にはS字状の沈線と平行沈線が施される。2は重複するP-69から出土したものと同一個体(図IV-77-1)である。破片の上端に2本の沈線が施される。胎土には砂粒が非常に多い。(柳瀬)

時期 床面及び炉出土の土器から、縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。炉跡から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定をおこない、3620yBP±40(補正年代)の結果が得られた。

(坂本)

## 4 土坑

P-1(図IV-34、図版41)

位置 J・K39 規模 (1.05/0.87)×(0.64/0.40)×0.42 平面形態 楕円形

立地地形 調査区北西側寄りの緩斜面上に位置する。

確認・調査 包含層V層を調査中、N層(B-Tm)が長径約80cmのリング状に検出された。トレンチを入れて断面観察したところ、V層の上位から掘り込まれた土坑であり、V層が10cmほど掘り込まれていることがわかった。

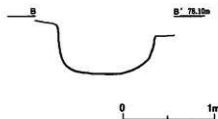
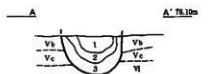
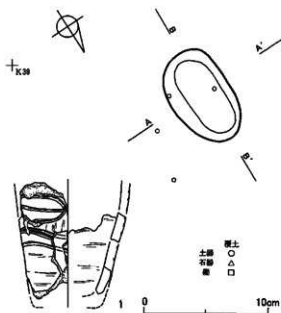
覆土 3層に分層した。下からVa層、IV層の順に半円状に落ち込み、さらにIV層のくぼみにIII層が堆積していた。このことから、埋め戻しのなかった、人為的な土坑と判断した。

遺物出土状況 坑底近くからは出土していない。覆土と周辺からN群A類の土器片が6点出土している。覆土のものは流れ込みと考えられる。(新家)

#### 掲載遺物

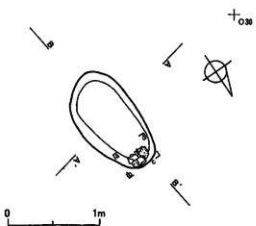
土器 1は覆土と周辺包含層が接合したN群A類。小形のものの底部付近で、沈線が主に横位に施さ

P-1

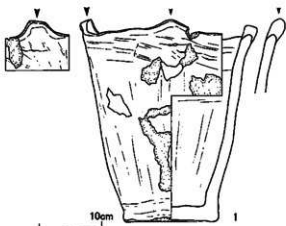
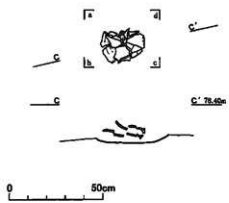


層	土質	出土品	備考	調査者	その他
1	砂	土器片			
2	砂	土器片			
3	砂	土器片			

P-2



層	土質	出土品	備考	調査者	その他
1	砂	土器片			
2	砂	土器片			
3	砂	土器片			



図IV-34 P-1・2

れる。胎土に小礫が多い。 (柳瀬)  
 時期 掘り込み面から、縄文時代後～晩期に作られたものであろう。 (新家)

#### P-2 (図IV-34、図版15・41)

位置 O29 規模  $(1.14/0.96) \times (0.62/0.44) \times 0.14$  平面形態 楕円形

立地地形 調査区中央部の尾根状地形上に位置する。同尾根上にP-15がある。

確認・調査 VII層上面で、Vb層と類似する黒色土の楕円形のまとまりを検出した。遺構と想定してトレンチ調査を行ったが、黒色土はVII層上面までであること、VI・VII層が黒色土と同様に窪んでいることなどから遺構ではないと判断し、O29区を平面的に掘り下げた。10cmほど掘り下げた段階で、黒色土のまとまりの北端で、土器が1個体つぶれた状態で出土したことから、改めて遺構と判断した。

覆土 主にVb層に類似する黒色土からなる。自然堆積と思われる。

構造 検出できたのは坑底付近のみで、浅い皿状である。坑底はVII層中～VIII層上面に構築されており、やや凹凸があり、皿状に窪む。立ち上がりは緩やか。

遺物出土状況 III群A類土器45点が出土した。うち5点は覆土から出土したもので、40点は坑底でまともに出土したものである。

#### 掲載遺物

土器 1は坑底からまともに出土したIII群A-3類。突起1か所を欠損する。無文で、4か所の突起をもつ。残存する3か所突起のうち、図正面の1か所は山形のもの、図左右の2か所は棒状で、上面が平坦に整形されるもの。口縁付近には輪積み痕が顕著に残る部分がある。外・内面と突起の破損面に炭化物が付着する。

時期 坑底出土の遺物から、縄文時代中期前半のものである。土坑と判断したが、上記の通り土層からは土坑と認定しがたいことから、風倒木痕などの落ち込みに、土器を安置あるいは廃棄したものであろう。 (柳瀬)

#### P-3 (図IV-35)

位置 M19 規模  $(0.65/0.48) \times (0.59/0.46) \times 0.20$  平面形態 円形

立地地形 調査区やや東寄りの緩斜面上に位置する。

確認・調査 VII層を調査中、径約60cmの円形の黒色土を検出した。断面の観察により、VII層が15cmほど掘り込まれた中にV、VI、VII層が混在して落ち込んでいることがわかった。

覆土 3層に分層した。黒色土1層の中に暗褐色土の塊である2層と3層が混在する。それぞれの層界は判然としている。人為的に埋め戻されたと推測できる。

遺物 出土していない。

時期 縄文時代に属する可能性がある。 (新家)

#### P-4 (図IV-35、図版15・96・97)

位置 M・N19 規模  $(0.65/0.48) \times (0.56/0.38) \times 0.21$  平面形態 楕円形

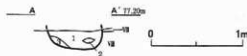
立地地形 調査区やや東寄りの緩斜面上、P-3のすぐ北側に位置する。

確認・調査 VII層を調査中、大きさが20cmほどの礫の一部を検出。VII層上面まで下げたところ、その周りにさらに2点の礫が出土し、礫の周囲に径約50cmの範囲で黒色土がみつかった。この時点で半截し断面を観察した。壁の立ち上がりは比較的明瞭で、VII層が20cmほど掘り込まれていた。



P-3

†M19



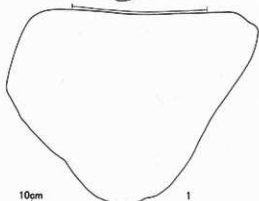
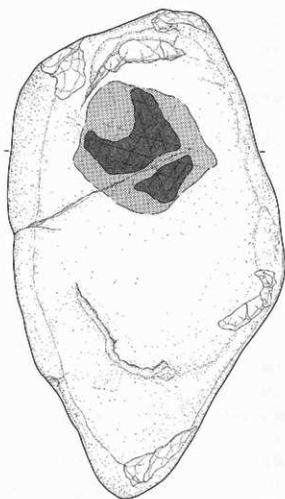
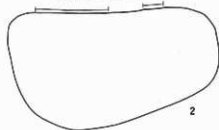
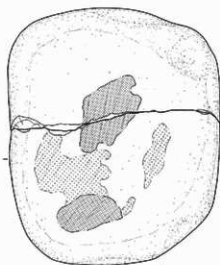
P-3		土質		M19		埋没層		埋入層		COP	
1	層	10V92/1	砂壤土	GL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5
2	埋没層	7A792/4	粘土	SL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5
3	埋没層	10V92/4	粘土	SL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5

P-4

†N19



P-4		土質		M19		埋没層		埋入層		COP	
1	層	10V92/1	砂壤土	GL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5
2	埋没層	7A792/4	粘土	SL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5
3	埋没層	10V92/4	粘土	SL	埋						埋没層の埋没層 75.20m +0.5



図IV-35 P-3・4

覆土 2層に分層した。両層間の層界は明瞭で、自然堆積の可能性もある。

遺物出土状況 坑底から安山岩の台石・石皿片が3点出土している。 (新家)

掲載遺物

石器 3点、2個体を図示した。両者とも、出土層位は坑底、石材は安山岩である。

1・2は石皿である。1は厚手の歪角礫を素材としている。正面上部に径14cmほどの不整形のすり面が観察され、特に中央部付近は滑らかとなっている。2のすり面付近の表面には若干の凹凸が認められるが、それに影響され、すり面は複数の小範囲に分かれて発達している。すり面は平滑なものとして捉えられる。 (坂本)

時期 周辺の遺構・遺物から、縄文時代中～後期と考えられる。 (新家)

P-5 (図IV-36、図版72)

位置 M12 規模 (0.62/0.50)×(0.58/0.46)×0.29 平面形態 円形

立地地形 無名の沢寄りの緩斜面に位置する。

確認・調査 Ⅶ層上面で検出、半載して土坑と判断した。

覆土 Ⅶb層に類似する黒色土。土層1・2の差はわずかで、埋め戻しの可能性がある。

構造 竪穴状の土坑である。坑底はⅦ層を掘り込んで構築され平坦。立ち上がりは急で、壁は垂直に近い。

遺物出土状況 覆土からⅢ群A類土器が2点出土している。

掲載遺物

土器 1は覆土から出土したⅢ群A類の底部。

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。 (柳瀬)

P-6 (図IV-36)

位置 Q6 規模 (0.74/0.51)×(0.66/0.48)×0.16 平面形態 円形

立地地形 調査区東端、無名の沢に続く緩やかな斜面に立地する。無名の沢までの距離は8mほどで、比高は約4mであった。付近にはP-7～9が隣接する。

確認・調査 調査区Q6のⅦ層上面検出作業時に、暗褐色の円形の落ち込みを検出した。半載掘削により、覆土堆積状況を確認しながら坑底まで掘り下げ、浅い土坑であることを確認した。

覆土 3層に分層した。上位にKo-gを主体とする暗褐色土の1層、中位にKo-gが若干まじる黒褐色土の2層、下位にロームブロック主体の3層が堆積する。P-6周辺の土層は、Ⅲ層からⅦ層までが混在する、暗褐色から黒褐色土の斜面堆積となっている。1層は人為的埋め戻し土、2・3層は人為的埋め戻し、もしくは流入土と推測される。

構造 坑底は平坦で、やや斜面下側に傾斜している。掘り込みは浅く、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

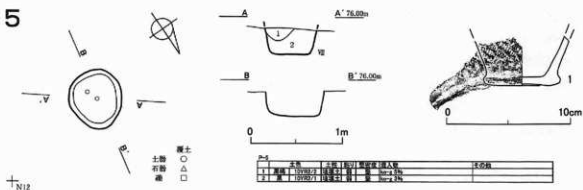
時期 周囲の遺構と遺物から、縄文時代中期前半の可能性はある。 (坂本)

P-7 (図IV-36、図版15・97)

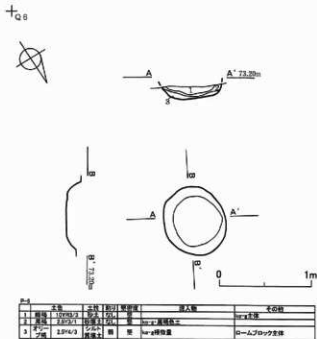
位置 Q8 規模 ((1.10)/0.69)×(0.62/0.31)×(0.18) 平面形態 楕円形

立地地形 調査区東端の無名の沢に続く緩やかな斜面に立地する。P-6～9と隣接する。

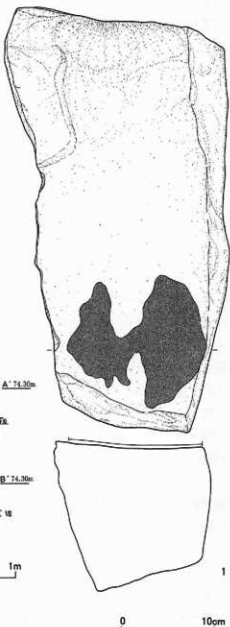
P-5



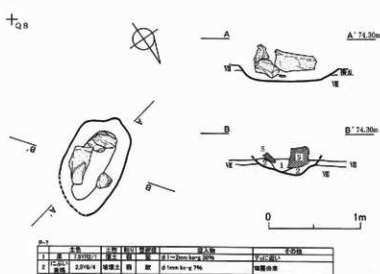
P-6



P-7の遺物



P-7



図IV-36 P-5・6・7

確認・調査 VII層上面で礫と黒色土のまとまりにより確認。半載法で調査した。

覆土 黒色の1層、におい黄色の2層に分層した。土層1はVc層に近いもので、自然堆積層とみられる。

構造 浅く掘り込んだ後、土層2で形状を整え、礫を据えたものと考えられる。坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 土器1点(Ⅲ群A類)、石器2点(台石・石皿)、礫2点が覆土から出土。礫は直角礫で、台石を含め全て土層2上面から出土。(福井)

#### 掲載遺物

石器 1は台石・石皿である。石材は安山岩である。半割した角礫を素材としている。すり面は、正面の中でも凹凸が少なく平坦な部分に限定される。すり面の範囲は幅14cmほどで、平滑なものと思えられる。(坂本)

時期 遺物から縄文時代中期前半の土坑とみられる。(福井)

#### P-8 (図IV-37、図版15)

位置 Q 8 規模 (0.84/0.58)×(0.62/0.54)×0.26 平面形態 不整形

立地地形 調査区東端の無名の沢に続く緩やかな斜面に立地する。P-6~9と隣接する。

確認・調査 VII層上面で黒色土のまとまりにより確認。半載法で調査した。

覆土 最下層の土層3にはロームブロックが多く含まれ、人為堆積である。土層2は自然堆積とみられるが、大形礫が含まれていた。

構造 坑底がやや南側に傾斜している。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 土器1点(IV群A類)、石器1点(フレイク)、礫1点が覆土から出土。

時期 縄文時代後期前葉の土坑とみられる。(福井)

#### P-9 (図IV-37)

位置 P・Q 8 規模 (0.92/0.36)×((0.38)/0.35)×0.66 平面形態 円形

立地地形 調査区東側、無名の沢に続く急斜面上に位置し、P-6・7・8に隣接する。

確認・調査 調査区Q 8でV層調査中、断面において覆土の堆積を確認した。半載して掘り下げ、坑底と壁の立ち上がりを確認した。

覆土 6層に分層した。1・2・5・6層はVb層の流入、3・4層は壁の崩落である。

構造 坑底はVII層を約20cm掘り込み、ほぼ平坦である。壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周辺の遺構より縄文時代中期前半と考えられる。(菊池)

#### P-10 (図IV-37、図版15・97)

位置 R11・12 規模 (0.40/0.32)×(0.36/0.22)×0.16 平面形態 円形

立地地形 調査区東側の緩斜面上に位置し、P-6~9に隣接する。

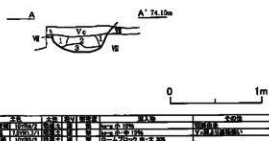
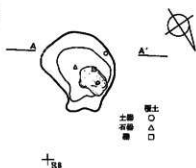
確認・調査 VII層上面において黒褐色土のまとまりを確認し、北側を半載した。

覆土 黒褐色土1層である。

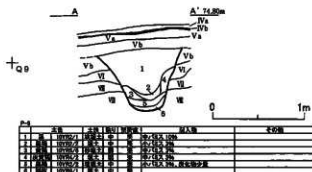
構造 坑底はVII層下位まで掘り込まれ平坦である。壁は東西方向にやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況 覆土から北海道式石冠と北海道式石冠原材の2点が出土した。(菊池)

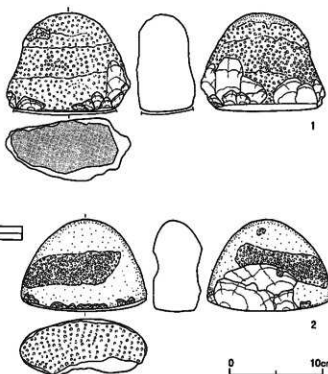
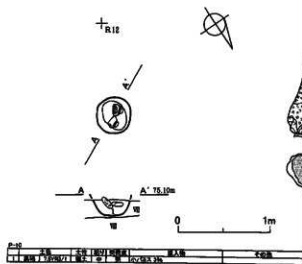
P-8



P-9



P-10



図IV-37 P-8・9・10

## 掲載遺物

石器 2点を図示した。両者とも出土層位は覆土、石材は安山岩である。

1は北海道式石冠、2は北海道式石冠原材である。1のすり面は若干裏面側に傾いている。右側のすり面縁辺には小型・中型の剝離がまとまってみられる。2は鉢巻状加工部が、正・裏面で独立している。裏面は下方からの加撃により、大きく剝離されている。また、正面側下縁には小型剝離が連続している。 (坂本)

時期 出土遺物、周辺の遺構から縄文時代中期前半と考えられる。

(菊池)

## P-11 (図IV-38、図版15)

位置 O50 規模  $(1.04/0.92) \times ((0.92)/0.86) \times 0.42$  平面形態 円形

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 VII層上面で、礫を含んだ黒色～褐色土のまとまりとして、P-12とともに検出。トレンチ調査により土坑と確認した。壁を掘り過ぎてしまったため、北半の形態は不明である。

覆土 主に黒色～褐色土。ロームやKo-gが混入する。礫が安置されていることから、埋め戻しの可能性がある。

構造 竪穴状の土坑。坑底はVII層を掘り込んで構築されており、ほぼ平坦。立ち上がりは急で、壁は垂直に近い。南半では坑底付近がややオーバーハングする。坑口付近で、検出面よりも15cmほど上位で礫が1点出土しており、P-11に伴うものと判断した。掘り込み面はこの礫の出土位置付近と考えられる。

遺物出土状況 礫が2点出土している。検出面および坑口付近からそれぞれ1点ずつ出土した。

時期 周辺より出土した遺物から、縄文時代後期前葉あるいは後葉と思われる。埋め戻しの可能性があることと、礫が安置されていることから土坑墓の可能性はある。 (柳瀬)

## P-12 (図IV-38、図版16)

位置 O・P50 規模  $(1.14/0.97) \times (-/-) \times 0.66$  平面形態 円形または楕円形

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 VII層上面で、黒～黒褐色土のまとまりとして、P-11とともに検出した。トレンチ調査により土坑と確認した。北東側は調査区域外となっているため、全体の形態は不明である。

覆土 主に黒色～黒褐色土からなり、部分的にKo-gが多く混入する土層が堆積する。覆土上面付近に礫が安置されており、埋め戻しの可能性がある。

構造 竪穴状の土坑。坑底はVII層中に構築されており、皿状にやや窪む。立ち上がりは概して急であるが、東側では緩やか。壁は垂直に近い。坑底付近はややオーバーハングする部分がある。

遺物出土状況 礫が3点出土している。うち図左側の1点は土層5上面から、右側の2点は覆土上面よりわずかに上位のVb層(取り上げ層位はV1層)から出土した。

時期 周辺から出土した遺物と掘り込み面から、縄文時代後期前葉あるいは後葉と考えられる。埋め戻しの可能性があることと、礫が安置されていることから土坑墓の可能性はある。 (柳瀬)

## P-13 (図IV-38)

位置 N11・12 規模  $(0.85/0.49) \times (0.84/0.48) \times 0.31$  平面形態 円形

立地地形 無名の沢側急斜面の上の台地上に位置する。



**確認・調査** 包含層Vb層調査中、Vb層よりも黒い土が径約80cmの円形に検出され、その中から土器片数点が出土した。円形プランのほぼ中央を通るラインで半載して断面の観察をおこなった。立ち上がりは明瞭で、掘り込み面はV層中、Ⅷ層が20cm弱掘り込まれていた。

**覆土** 4層に分層した。いずれの層も主体は黒色土のV層である。各層の層界は判然とし、また、ほぼ平坦に堆積しており、自然堆積と思われる。

**遺物出土状況** 覆土上部から土器(Ⅲ群A類7点)、礫1点が出土している。

**時期** 掘り込み面や周囲の遺構・遺物から、縄文時代中～後期に作られたものであろう。(新家)

#### P-14 (図IV-39、図版97)

**位置** N27 規模 (1.10/0.65)×(1.05/0.60)×0.41 平面形態 円形

**立地地形** 調査区のほぼ中央の台地上に位置する。

**確認・調査** VI層調査後、Ⅷ層上面で径約1mの黒色土の円形プランを検出。半載して断面を観察したところ、Ⅷ層までの掘り込みと、明瞭な壁の立ち上がりを確認した。掘り込み面はV～VI層中と考えられる。

**覆土** 4層に分層した。1・2層は黒色土のV層主体、3層は壁のVI層が崩落したか、または埋め戻されたものと考えられる。4層はⅧ層が主体で、これも埋め戻しと考えられる。

**遺物出土状況** 覆土から北海道式石冠1点、礫1点が出土している。

(新家)

#### 掲載遺物

**石器** 1は北海道式石冠である。石材は安山岩である。やや扁平な板状礫を素材としている。すり面は裏面側に傾いている。すり面中央部には敲打による凹みが観察される。

(坂本)

**時期** 掘り込み面や出土遺物から、縄文時代中～後期と思われる。

(新家)

#### P-16 (図IV-39、図版41・72・97)

**位置** G・H16・17 規模 (2.41/0.80)×((1.32)/(0.76))×0.18 平面形態 不明

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北西端に位置する。周囲にはH-10、P-64、S-14、F-5などが隣接する。

**確認・調査** 調査区G17のⅧ層検出作業時に、楕円形を呈する黒色土プランを検出した。調査区G16に黒色土が残存していたため、17ラインに土層観察用のベルトを設定し、プランの範囲を確認した。また、G16・17のⅧ層上面で検出した黒色土を掘削し、2～5cmほどの浅い卵形の掘り込みを確認した。

**覆土** 5層に分層し、①～④の堆積単位に区分した。なお、遺物取り上げ層位は全て「覆土」とした。

- ① 上位の層。Vb層とa層で構成される。遺構埋没からある程度の時間が経過した後、堆積したものと捉えられる。a層はローム粒を多く含むことから、隣接遺構の掘上土の可能性はある。
- ② 中位から下位の層。黒色土1層で構成される。遺構内の広範囲に厚く堆積し、粘性が強い。
- ③ 下位の層。楕円形の浅い掘り込みの覆土及びその周囲に堆積する土で、黒色土1層で構成される。
- ④ 壁際の層。黒褐色土2・3層で構成される。崩落、流入土と考えられる。

**構造** 坑底は、Ⅷ層を1～3cmほど掘り込んで構築されている。坑底には長径1.1mほどの卵形を呈す浅い掘り込みがみられる。壁はやや緩やかに立ち上がる。

**遺物出土状況** 土器103点(Ⅲ群A類6点、Ⅳ群A類97点)、石器8点(フレイク7点、敲石1点)、礫21点、計132点出土している。縄文時代後期前葉の土器が多く認められる。遺物は全て覆土から出土し





ている。 (坂本)

#### 掲載遺物

土器 6点図示した。いずれも覆土から出土したIV群A類である。

1～3は沈線が施されるもの。1は渦巻状の沈線が施される。覆土と周辺包含層が接合し、同一個体ではあるが未接合の破片も多く出土している。2は口縁に8の字になるとと思われる貼付が加えられる。3は口唇の外・内面にまたがる楕円形の環状と直線状の貼付が加えられる。4は磨消縄文が施されるもの。小形の鉢の破片と思われる。5は櫛歯状沈線が施されるもので、突起部の口唇に指頭圧痕が加えられる。包含層J11区・O10区のものと同接合した。6は台部分。3か所の切れ込みが加えられる。 (柳瀬)

石器 7は敲石である。石材は安山岩である。上端部および右側縁部に敲打痕がみられる。下部が欠損しているが、棒状跡が素材と考えられる。

時期 遺物出土状況から、縄文時代後期前葉と考えられる。 (坂本)

#### P-15 (図IV-40、図版16・98)

位置 L29 規模 (0.78/0.50)×(0.71/0.53)×0.32 平面形態 円形

立地地形 調査区中央部の尾根状地形上に位置する。同尾根上にP-2がある。

確認・調査 VII～VIII層で黒褐色～暗褐色土のまとまりとして検出した。トレンチ調査で、土坑であること、台石・石皿の出土を確認した。

覆土 主に黒色～暗褐色土からなり、土層3～5は台石・石皿埋納の際の、土層1・2は石皿埋納後の埋め戻しと思われる。

構造 竪穴状の土坑。坑底はVIII層を掘り込んで構築され、やや凹凸がある。立ち上がりは緩やかで、壁はやや開く。

遺物出土状況 土器1点、石器2点、計3点出土している。土器は覆土から出土したが、小片であるため分類は不明である。石器はともに坑底から出土した台石・石皿である。いずれも使用面を上に向けた状態で、下の台石・石皿(図IV-40-1)は坑底に食い込むように、上の台石・石皿(同2)は裏面の窪みが下の台石・石皿の角に組み合うようにして出土した。人為的に埋納されたものと考えられる。 (柳瀬)

#### 掲載遺物

石器 2点を図示した。両者とも出土層位は坑底、石材は安山岩である。

1・2は台石・石皿である。両者とも、盤状跡の広い平坦面の中央部にすり面が観察される。1のすり面は楕円形を呈しており、平滑なものである。周囲には敲打痕が散発的にみられる。2は滑らかで僅かに凹む顕著な円形すり面が中央部付近にみられ、平坦なすり面が左側縁に続いている。(坂本)

時期 周辺から出土している遺物から、縄文時代中期前半の遺構である。台石・石皿の埋納を目的とした土坑である。 (柳瀬)

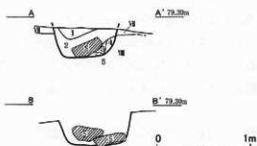
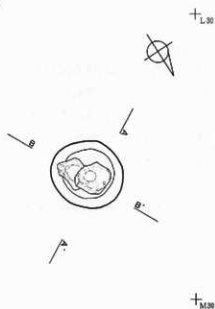
#### P-17 (図IV-41・42、図版16・98)

位置 F・G19・20 規模 (2.68/1.62)×(1.98/1.58)×0.74 平面形態 楕円形

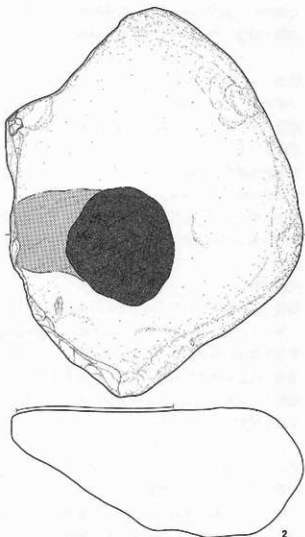
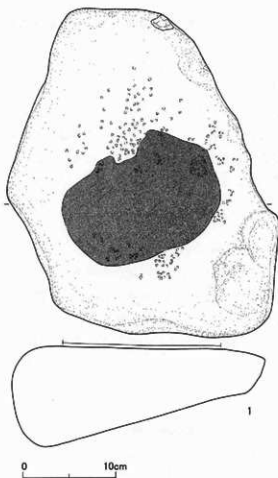
立地地形 調査区南側、尾根部分の遺構集中区の東側に位置する。

確認・調査 調査区G19でVb層調査中、黒褐色土のまとまりを検出し、Gラインに沿ってベルトを設定し掘り下げた。黄褐色土上に炭化物集中を検出し坑底と考えたが、さらにベルトに沿ってトレンチ

P-15



P-15		土層	土質	厚さ	層厚	層位	層名	層高
1	表層	10000/2	黄砂	10cm	10cm	1	表層	100cm
2	表層	10000/2	黄砂	10cm	10cm	2	表層	100cm
3	表層	10000/2	黄砂	10cm	10cm	3	表層	100cm
4	表層	10000/2	黄砂	10cm	10cm	4	表層	100cm
5	表層	10000/2	黄砂	10cm	10cm	5	表層	100cm



図IV-40 P-15

調査をおこなったところ、約20cm下位に堅く締まったロームを確認し、これを坑底と判断した。

覆土 19層に分層されたが、大きく2つに分けられる。

- ① 上位の堆積 1層～12層でVb層の流入と考えられる黒褐色土主体の堆積  
 ② 下位の堆積 13層～19層でⅧ層の人為的埋め戻しと考えられる黄褐色土主体の堆積

構造 坑底はⅧ層を40～50cm掘り込み、ほぼ平坦である。長軸方向にベンチ状の段が造られており、南東側の段にステップ状の掘り込みがある。坑底の壁際に沿って炭化物集中と焼土を検出し、炭化種子同定の結果、多量のクリを検出した(Ⅵ章2節)。また②の上面に広範囲の炭化物集中を検出した。

遺物出土状況 遺物は土器15点、石器5点、礫1点の計21点が出土している。覆土の分類別出土点数は、土器(Ⅲ群A類13点)、石器(スクレイパー1点、フリイク1点、扁平打製石器1点、台石・石皿2点、礫1点)で、坑底では土器(Ⅲ群A類2点)である。台石・石皿(図Ⅳ-42-5)のすり面の直上に扁平打製石器(図Ⅳ-41-3)が乗った状態で出土した。(菊池)

#### 掲載遺物

土器 2点図示した。いずれも覆土から出土したもので、Ⅲ群A-3類と思われる。

1は沈線が施されるもの。2は縄文のみの口縁部。口唇は角形で縄文が回転施文される。(柳瀬)  
 石器 3点を図示した。全て出土層位は覆土、石材は安山岩である。

3は扁平打製石器である。不整楕円形の扁平礫を素材とし、長軸方向の両端を打ち欠いている。すり面は断面・側面方向からみて、おおむね平坦且つ直線的に捉えられるが、右側で極僅かに外湾曲する。すり面縁辺には小剝離が不規則にみられる。すり面幅は1cmを超える広いもので、右側外湾曲部では2cm以上を測る。

4・5は石皿である。両者とも、礫の広い平坦面に楕円形に凹むすり面が形成されている。すり面は、平坦面と直交するように接する左側面付近に位置し、側面縁辺に対しすり面の長軸は直交方向になっている。縁辺側に接する方が緩やかにせり上がり、反対側は深く強くせり上がる。すり面は中央から深い側にかけてが、最も滑らかな範囲となっている。また楕円形すり面の周囲には平坦なすり面が観察される。4は正裏両面に4か所の楕円形すり面が形成されている。(坂本)

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と考えられ、また坑底の炭化物集中の放射性炭素年代測定より4370±40yBP(補正年代)の結果が得られた。土坑墓の可能性がある。(菊池)

#### P-18(図Ⅳ-43、図版98)

位置 J・K15 規模 (0.86/0.74)×(0.74/0.62)×0.28 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢原の遺構集中区より北側に位置し、P-31・46に隣接する。

確認・調査 調査区K15でⅧ層上面において、黒色土のまとまりを確認し、北東側を半載した。

覆土 4層に分層された。黒色土(1層)、暗褐色土(2層)はVb層の流入、黄褐色土(3層)と褐灰色土(4層)は崩落と考えられる。

構造 坑底はⅧ層を20～30cm掘り込み、平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。

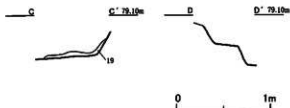
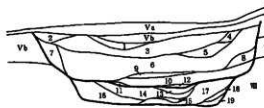
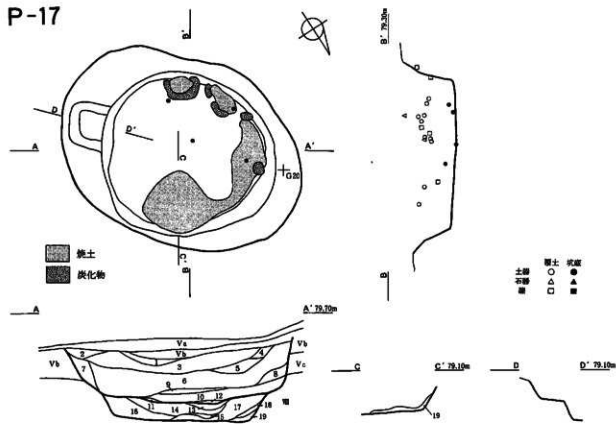
遺物出土状況 遺物は覆土で土器(Ⅲ群A類2点)、坑底で台石・石皿と礫が各1点ずつ出土している。(菊池)

#### 掲載遺物

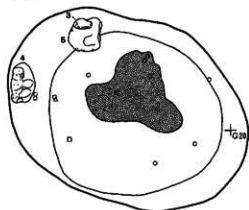
石器 1は石皿である。出土層位は坑底、石材は安山岩である。礫平坦面の中央部付近に、不整円形の平滑なすり面が観察される。すり痕は顕著で非常に滑らかである。(坂本)

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。(菊池)

P-17

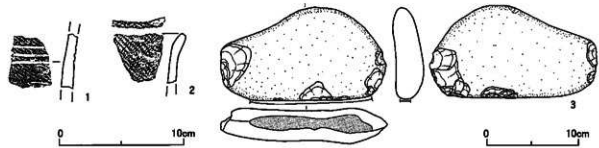


覆土

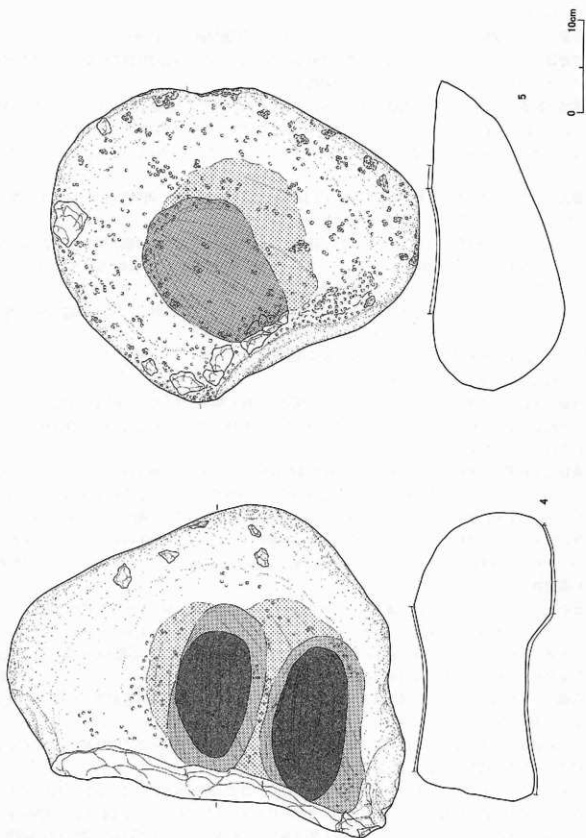


層	土層	土質	厚さ	炭化物	その他
1	10V10/1	粘土	中	中-大粒 30%	
2	10V10/2	粘土	中	中-大粒 30%	
3	10V10/3	粘土	中	中-大粒 30%	
4	10V10/4	粘土	中	中-大粒 30%	
5	10V10/5	粘土	中	中-大粒 30%	
6	10V10/6	粘土	中	中-大粒 30%	
7	10V10/7	粘土	中	中-大粒 30%	
8	10V10/8	粘土	中	中-大粒 30%	
9	10V10/9	粘土	中	中-大粒 30%	
10	10V10/10	粘土	中	中-大粒 30%	
11	10V10/11	粘土	中	中-大粒 30%	
12	10V10/12	粘土	中	中-大粒 30%	
13	10V10/13	粘土	中	中-大粒 30%	
14	10V10/14	粘土	中	中-大粒 30%	
15	10V10/15	粘土	中	中-大粒 30%	
16	10V10/16	粘土	中	中-大粒 30%	
17	10V10/17	粘土	中	中-大粒 30%	
18	10V10/18	粘土	中	中-大粒 30%	
19	10V10/19	粘土	中	中-大粒 30%	

炭化物  
覆土  
土層  
石層



図IV-41 P-17 (1)



図IV-42 P-17 (2)

P-19 (図IV-43・44、図版41・72・99)

位置 G14 規模 (2.04/1.88)×(2.22/1.49)×0.46 平面形態 隅丸方形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の中央部南側に位置し、P-49・53・57、S-6などが隣接する。

確認・調査 B調査試掘坑で遺構の存在が確認されていた。南西-北東方向にベルトを設定し、Ⅶ層上面まで周囲を掘り下げて楕円形のプランを検出、土坑であることを確認した。ベルト観察により、覆土堆積状況と構築面を確認後、覆土の掘り下げをおこない、坑底を検出した。坑底には2基の柱穴状ピットを確認した。

覆土 10層に分層した。覆土は①～③の堆積単位にまとめられる。なお、遺物取り上げ層位は、「覆土」(1～6・8層)、「覆土3」(9層)、「床面直上」(7層)に分けている。

- ① 上位の層。暗褐色～黒色土の1～6層で構成。流入土などを含む自然堆積、掘り上土などの投げ込みが考えられる。壁際に分布するもの(3～6層)と中央部にレンズ状に堆積するもの(1・2層)があり、前者から後者への堆積過程が推測される。
- ② 中位の層。黒褐色～黒色土の6'～8層で構成される。6'・7層は壁際に、8層は遺構全体を覆うように厚く堆積している。短期間に埋め戻されたものと考えられる。
- ③ 坑底直上に薄く堆積する9層で、坑底を全体的に覆っていた。ロームブロックを多く含み、人為的に堆積したものと考えられる。

構造 坑底はほぼ水平な平坦面になっている。壁はやや緩やかに立ち上がり、西側では坑口が広がる。付属施設は2基の柱穴状ピットが坑底の中央部と南東側に構築されていた。ピットは径10～20cmで、深さは、10cm未満と浅い。

遺物出土状況 土器68点(Ⅲ群A類31点、Ⅳ群A類37点)、石器8点(石核1点、フレイク4点、石斧1点、台石・石皿1点、加工痕ある礫1点)、礫3点、計79点出土している。土器はいずれも覆土上位から中位上面の出土で、中位以下に包含されていた遺物は石斧(坑底)と礫のみであった。また、B調査試掘坑内から、層位不明の礫10点が出土した。重量は2～4kgのものが6点、7～9.1kgが2点、14kgが1点、30kgが1点である。P-19に関係する可能性がある。(坂本)

#### 掲載遺物

土器 4点図示した。いずれも覆土から出土したもので、1はⅢ群A類、2～4はⅣ群A類。

1は小形のもので、結束のない粗雑な羽状縄文が施される。包含層K・L16区と接合した。2は沈線が施される壺形土器の口縁。平行沈線間に、( )状沈線が加えられる。3は縄文のみのもの。縄文は横走気味で、粒は不明瞭。4は無文の底部である。(柳瀬)

石器 3点を図示した。出土層位は6が坑底直上で他は覆土である。石材は5が頁岩、6が緑色泥岩、7が安山岩である。

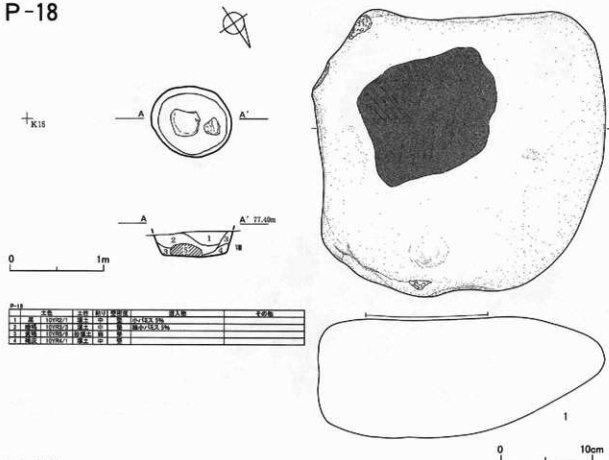
5は石核である。剥片を素材とし、腹面側に3回程度の剥離を施している。素材剥片剥離以前に素材を生産した石核から剥離された剥片が2点接合している。

6は石斧である。両刃直刃でやや偏刃となっている。器体上半部が欠損しているが、短冊形を呈したとみられる。折れ面縁辺部の一部は、敲打と研磨により潰されており、再生を試みたと理解される。

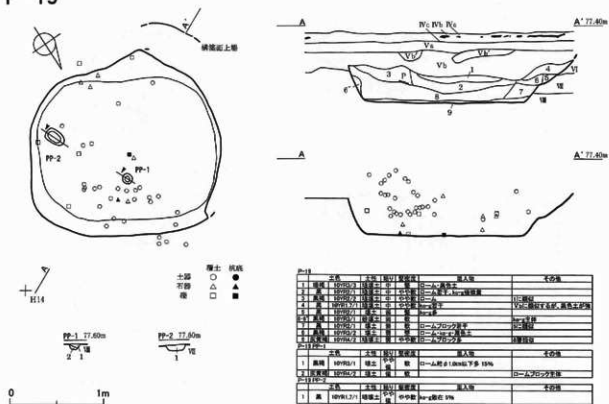
7は台石・石皿である。膨らみを有す正面側に敲打痕が観察される。敲打痕は、頂部が最も顕著である。

時期 縄文時代中期前半もしくは後期前葉と考えられる。土坑墓の可能性もある。(坂本)

P-18

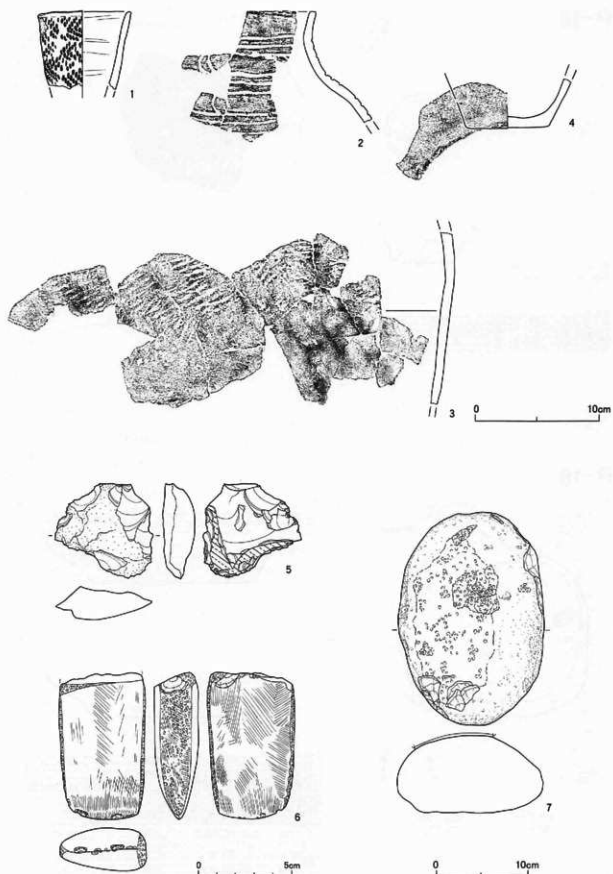


P-19



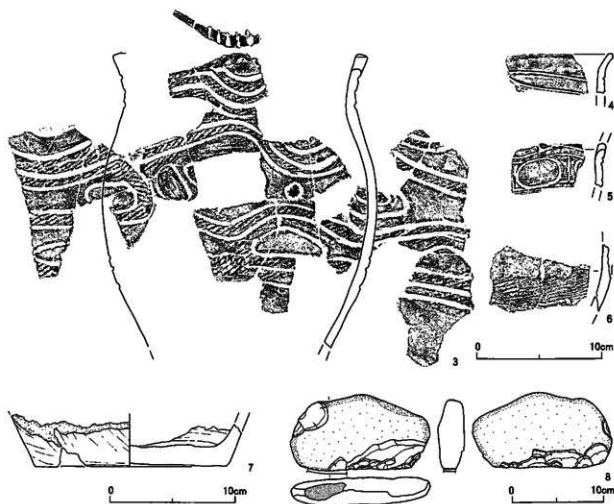
図IV-43 P-18・19 (1)





図IV-44 P-19 (2)





図Ⅳ-46 P-20 (2)

P-20 (図Ⅳ-45・46、図版17・42・72・99)

位置 G・H15 規模 (1.56/1.58)×(1.50/1.69)×1.34 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の中央部に位置し、H-2・10、P-66・89、S-3などが隣接する。また、P-90と切り合い関係を持つ。

確認・調査 Vb層下部からⅦ層掘削時に、円形を呈する黒色土のまとまりを検出した。北西-南東方向で半載掘削を開始し、覆土中に焼土、大形礫の配置を確認した。堆積状況を確認後、層位毎に遺構全体を坑底まで掘り下げた。

覆土 覆土は15層に分層したが、①～④の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は、覆土1(1～10層)、覆土2(11～15層)及び「覆土」に分けた。「覆土」は「覆土1」と「覆土2」に分層する前の取り上げ層位で、両層位の遺物が含まれている。

① 上位の層。黒色～黒褐色土1～10層で構成される。厚さ5～20cmの土層がレンズ状に堆積している。壁崩落土を伴う流入土などの自然堆積層と考えられる。また、2層の上面では焼土(PF-1)が検出されている。

② 中位の層。黒色土11・12層で構成される。11層はロームブロックを若干含有する20～30cmの厚い堆積で、12層上面で確認した礫を覆っている。12層はローム粒を多く含有する30～40cmの厚い堆積で、上面には10～60cm大の礫が環状に配置されていた。両者とも短期間になされた、人為的埋め戻し堆積と考えられる。

- ③ 下位の層。黒色～黒褐色土13・14層で構成される。14層中にはロームブロックがラミナ状にみられ、14層の堆積はさらに細かく3分層される。
- ④ 坑底直上の層で、いよいよ黄褐色土15層で構成される。下部には黒色土の混じりがみられる。壁崩落土の可能性もあるが、壁面周囲にへばりつくように検出されたため、人為的に貼り付けられたことも考えられる。

構造 フラスコ状のピットである。坑底は、ほぼ水平、平坦に作られている。壁はオーバーハングするように立ち上がり、中場を形成して広い開口部へ続く。

坑底壁際にロームを貼り付けた可能性がある。また、埋め戻し行為の後、大型礫を現状に配置し、再び埋め戻しをしている。坑口付近の覆土中には焼土がみられるが、埋め戻し・礫配置と一連の行為であるかは判別できなかった。

遺物出土状況 土器134点(Ⅲ群A類14点、Ⅳ群A類120点)、石器16点(Rフレイク1点、フレイク13点、扁平打製石器1点、台石・石皿1点)、礫31点、計181点出土している。坑底からは被熱した安山岩製のフレイクが1点出土している。(坂本)

#### 掲載遺物

土器 7点図示した。いずれも覆土から出土したⅣ群A類。

1・2・4・5は沈線が施されるもの。1は小形で、4か所の突起上に棒状工具の斜位の刻みが増えられる。胴部には、2段の並行沈線間に、対向する弧状の沈線が増えられる。沈線は2本組。2は覆土と周辺包含層が接合した壺形土器。4・5は口縁部破片。5は突起部の破片で、突起は剥落する。3は磨消縄文が施されるもの。覆土の1点と周辺包含層が接合した。突起部口唇には棒状工具による刻みが増えられる。磨消縄文には無節LとLRの2種の原体が用いられ、縁取りの沈線は太い。6は縄文のみの胴部。横走気味の無節の縄文が施される。7は無文の底部である。(柳瀬)

石器 8は扁平打製石器である。出土層位は「覆土2」、石材は安山岩である。下面左側のすり面は左側でせり上がるように若干湾曲している。下面右側は不規則な調整により稜が形成されているが、ジグザグとしている。

時期 覆土2の出土遺物から、縄文時代後期前葉の土坑墓と考えられる。(坂本)

P-21 (図IV-47~50、図版17・42・43・73・99)

位置 I15 規模 (1.73/0.98)×(1.22/1.10)×1.04 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北側に位置している。

確認・調査 調査区I15のVb層掘削中に、暗褐色の不整なプランと20~30cmの礫を検出した。遺構の存在が予測されたためトレンチ調査をおこない、土坑の存在を確認した。南東-北西方向にベルトを設定して周囲をⅧ層まで掘り下げ遺構プランを検出した。

土坑はベルトに沿って半截掘削し、覆土の堆積状況を確認した。覆土中からは、白色粘土塊、ベンガラ状赤色粒子、焼骨片や個体土器のまとまりなどを順次確認した。

覆土 20層に分層した。①~④の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は、「覆土」及び、「覆土1」(1~5・6・8~10層)、「覆土2」(5'・7・7'層)、「覆土3」(11~15層・16層の一部)、「床直上」(16層の一部・17層)に分けた。「覆土」は覆土1~3に分層する前の取り上げ層位で、各層位の遺物が含まれている。

① 上位の層。黒色土1~3層で構成される。2・3層中からは炭化物粒が検出された。レンズ状の

堆積であり、自然堆積層と判断できる。

- ② 坑口部壁際の層。黒～黒褐色土 6・8～10層で構成される。ロームブロックや Ko-g を多く含有し、壁面崩落を含む自然堆積層と判断できる。
- ③ 中位の層。黒色土 4～5'・7・7'層で構成される。土層断面図には記録されていないが、4・5層上面には、厚さ 3cm ほどの白色粘土の層がみられ、同じ堆積単位にまとめられる。特徴的な含有物として、4層ではベンガラ状赤色粒子が散在し、5・7層では、魚類、小動物などの焼骨片が多くみられた。3個体のまとまった土器は、4・5層の上面で出土している。③の堆積は特徴的な土層を含む人為的堆積と推定される。
- ④ 下位の層。11～15層で構成される。11・13～15は、ロームブロック、Ko-g を多量に含有し、壁崩落土、埋め戻し土などが考えられる。
- ⑤ 床面直上の層。16・17で構成される。17は流入土とみられる。

構造 フラスコ状のピットである。坑底は、ほぼ水平、平坦に作られている。壁はオーバーハングするように立ち上がり、広い開口部へ続く。坑口は南東方向へ広がり、同方向には、階段状の中場が形成されている。

埋め戻し土上部には焼骨片がみられ、ニシン・サケの椎骨、アビくらの大きさの鳥類の骨であった。被熱、複数種が混在した状態から、何らかの加工を受けていたと推測される。坑口上部には、ベンガラ状赤色粒子が散布され、更にその上部に白色粘土が蓋のように位置する。

遺物出土状況 土器274点(Ⅲ群A類13点、Ⅳ群A類261点)、土製品3点(焼成粘土塊2点、鐔形土製品1点)、石器26点(スクレイパー2点、Rフレイク2点、フレイク22点)、石製品1点、礫22点、計326点出土している。完形に近い土器(Ⅳ群A類)が、覆土1(白色粘土直下、4・5層上面)で2個体、覆土3(13層)で1個体出土した。また、床面直上からⅣ群A類土器が1点出土している。石器・土製品・石製品は全て覆土からの出土である。石製品は軽石製で、板状に加工されたものである。

(坂本)

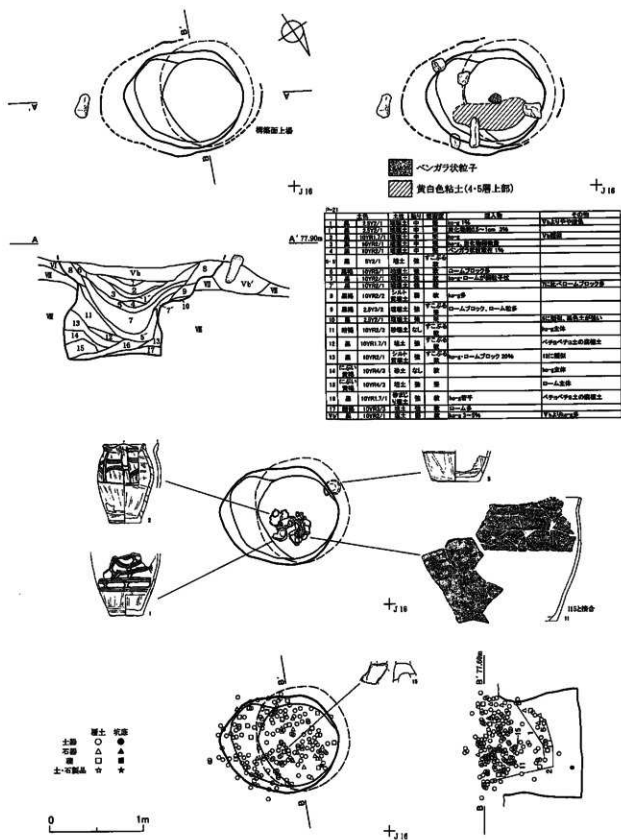
#### 掲載遺物

土器 13点図示した。すべて覆土から出土したⅣ群A類で、他遺構や周辺包含層と接合したものもある。

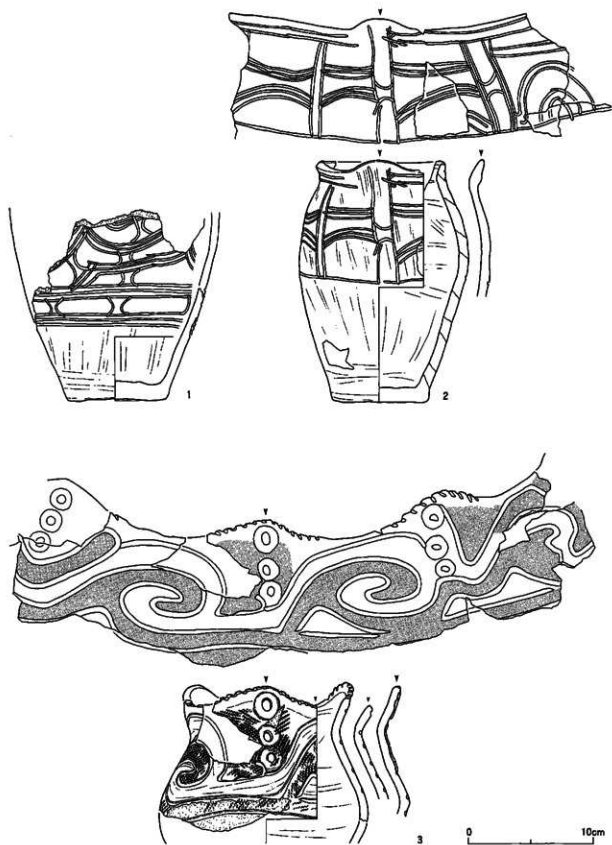
1・2・7・8は沈線が施されるもの。1は3本組沈線による渦巻状の文様が施されるもの。2は2か所の突起をもつと思われる壺形土器。胴部上半には、2本組の縦位の沈線で区画した間を弧状の3本組沈線で結ぶ文様が施されるが、やや不規則である。7は頸部が強く屈曲する小形の鉢の破片。胴部には3本組沈線で横位に展開する文様が施される。3は磨滑縄文が施されるもの。覆土から出土した4点と、P-35覆土の1点および周辺包含層のものと接合した壺形土器。3か所の突起をもち、突起部口唇には棒状工具による刻みに加えられる。突起下には円環状貼付が3つ縦に並ぶ。展開図のAミ部分は縄文が施される部分。8は口縁部文様帯のみのもの。

9は縄文地に8の字状の貼付に加えられるもの。H-2から出土したもの(図Ⅳ-11-12)と同一個体である。覆土の2点と、P-34覆土の3点および周辺包含層のものと接合した大形の深鉢。平縁で、貼付は8か所と思われる。縄文は細かく、横走気味。胎土には砂粒が非常に多い。10～12は縄文のみのもの。10は小形土器の口縁部。11は棒状工具による刻みに加えられる突起をもつ。全体に磨耗しており縄文は不明瞭だが、無節で、部分的に不規則な羽状をなす。下半は無文。12は口縁部に複数段の折り返しをもつ。無節の縄文が横走気味に施され、角形の口唇端部には縄文が回転施文される。覆土の3点と周辺包含層が接合し、25mほど離れたO14区のものとも接合している。

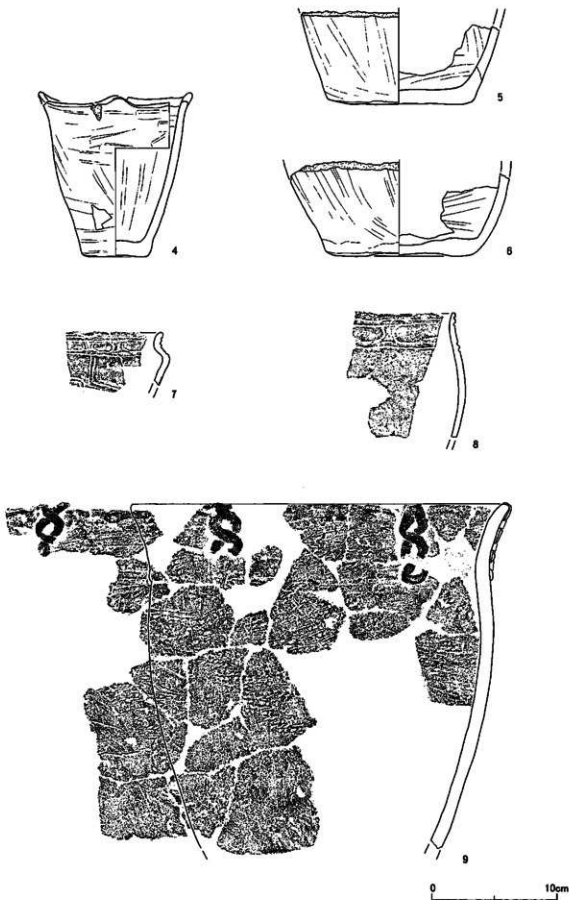
P-21



図IV-47 P-21 (1)

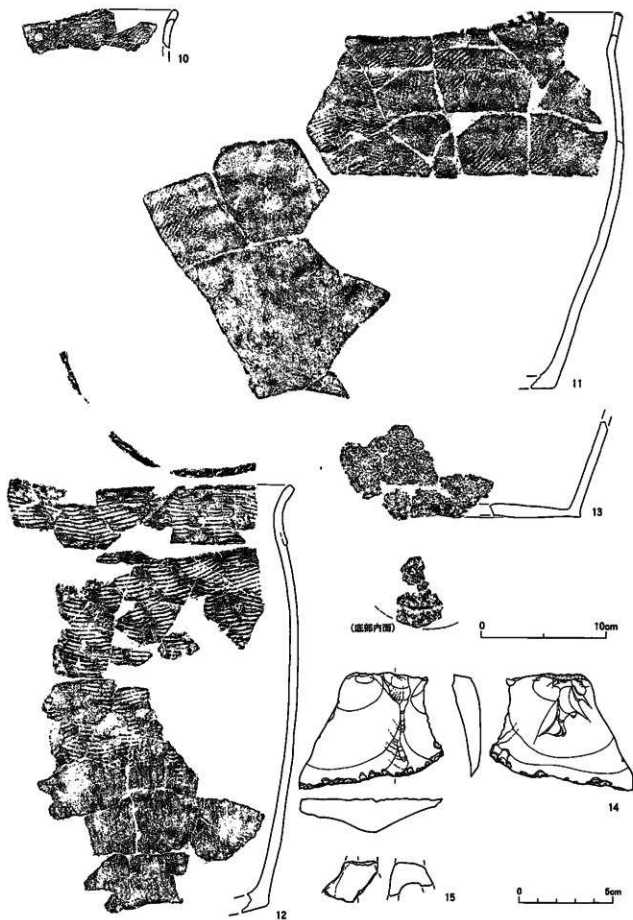


圖IV-48 P-21 (2)



図IV-49 P-21 (3)





图IV-50 P-21 (4)

4は無文のもの。小形で、4か所の突起をもつ。5・6・13は無文の底部。6の胎土には小礫が多い。13の底部内面には、渦巻状をなすと思われる沈線が描かれる。胎土には小礫が多い。(柳瀬)

石器 14はスクレイパーである。出土層位は覆土、石材は頁岩である。剥片末端の縁辺両面に、不連続的で軽微な剝離が施されている。使用により生じた剝離の可能性もある。(坂本)

土製品 15は覆土から出土した鐔形土製品である。鋸部付近の破片。(柳瀬)

時期 覆土堆積状況を含む構造的特徴と遺物出土状況から、縄文時代後期前葉の土坑墓と考えられる。また、坑口の白色粘土から採取した炭化物を試料として放射性炭素年代測定をおこない、3650yBP±40(補正年代)の結果が得られた。(坂本)

## P-22(図IV-51、図版16)

位置 F17 規模 (1.88/1.48)×(1.43/1.10)×1.16 平面形態 不整楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西端に位置している。P-27と切り合い関係を持ち、また、P-28・59が隣接する。

確認・調査 B調査試掘坑で遺構の存在が確認されていた。灰黄褐色～黄褐色のプランが隣接したため、これにまたがるようにベルトを設定し、トレンチ調査をおこなった。土層の堆積状況から、B調査検出遺構を含め、3基の土坑が確認された(P-22・27・28)。このうちプラスコ状を呈する2基(P-22・27)が切り合い関係を有していた。ベルト観察により、覆土堆積状況と構築面を確認後、遺構周囲をVI層上面まで掘り下げて土坑のプランを検出した。半截掘削により層位毎の覆土の掘り下げをおこない、坑底を検出した。

覆土 覆土は14層に分層した。図IV-51の13～26層がP-22の覆土である。①～③の堆積単位にまとめられる。取り上げ層位は、坑口部のVb層を「坑口」とし、他はすべて覆土とした。

- ① 上位の堆積。13～16層で構成される。14層がロームブロック主体のにおい黄褐色土、13・15・16層が黒～黒褐色土である。流入土および掘上土の投げ込み堆積と推測される。
- ② 中位の堆積。17～22層で構成される。17～20は大形のロームブロックを含む黒～黒褐色土で、18・19はローム主体のにおい黄褐色土である。主に天井部、壁の崩落による堆積と考えられる。
- ③ 下位の堆積。23～26層で構成される。23・25はロームブロックを含有する黒色土、24はロームブロック主体土、26はKo-g主体の土である。埋没開始直後の流入土とみられる。

①・②の堆積はP-27の覆土に切られており、P-27がP-22の一部を破壊して構築されたと捉えられる。よって両者の新旧関係はP-22が古くP-27が新しいと判断できる。

構造 プラスコ状の土坑である。坑底は、ほぼ水平・平坦に作られている。壁はオーバーハングするように立ち上がり、上部から坑口部で広がりみせる。坑口は北側へ広がり、同方向には、階段状の中場が形成されている。覆土には崩落土とみられる分厚い堆積があり、本来は壁のオーバーハングが強くなり出し、天井部を形成していたと推測される。

遺物出土状況 土器11点(Ⅲ群A類5点、Ⅳ群A類6点)、石器5点(フレイク4点、加工痕ある礫1点)、礫4点、計20点が出土。堆積単位③以下に包含されていた土器はⅢ群A類のみである。

時期 遺物出土状況から縄文時代中期前半と判断される。自然堆積により埋没していることから貯蔵穴等と考えられる。(坂本)

## P-27(図IV-51・52、図版18・43・100)

位置 F17 規模 (1.74/2.00)×(1.56/1.49)×1.07 平面形態 不整楕円形

**立地地形** 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西端に位置している。P-22と切り合い関係を持ち、また、P-28・59が隣接する。

**確認・調査** 調査区F17のVb層掘削中に灰黄褐色～にぶい黄褐色のプランが検出された。これにまたがるようにベルトを設定しトレンチ調査をおこなった。B調査検出遺構を含め3基の土坑が確認された(P-22・27・28)。このうちプラスチック状を呈する2基(P-22・27)が切り合い関係を有していた。ベルト観察により覆土堆積状況と構築面を確認後、周囲をVI層まで掘り下げ土坑のプランを検出した。半載掘削により層位毎の覆土の掘り下げをおこない、坑底検出後遺構全体を掘り下げた。

**覆土** 8層に分層した。図IV-51の5～12層がP-27の覆土である。①～③の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は、坑口部のVb層を「坑口」とし、他はすべて覆土とした。

- ① 上位の堆積。オリーブ褐色～にぶい黄褐色土5～7層で構成される。ロームブロックが多量、Ngブロックが若干含有されていた。6～7層中にはPF-1～3が検出された。各焼土は間層を挟んだ層位的な上下関係があり、ある程度の時間差をもって形成されたと理解できる。
- ② 下位の堆積。褐色～にぶい黄褐色土8～11層で構成される。ロームブロックが密集し、Ngブロックが若干含有される。
- ③ 坑底直上の堆積。黒色土12層で構成される。

①・②は壁・天井部の崩落、もしくはローム主体土が黒色土を介せず分厚く堆積することから、短期間になされた人為的埋戻し土の可能性もある。①の堆積は4層に切られ、さらにP-28は4層を掘り込んで構築されている。よって両者の新旧関係はP-27が古く、P-28が新しいと判断でき、P-22を含めた三者の関係は、古いほうからP-22→P-27→P-28と捉えられる。

**構造** プラスチック状の土坑である。坑底は、ほぼ水平・平坦に作られている。壁はオーバーハング、もしくは垂直に立ち上がり、上部から坑口部で広がりを見せる。坑口は北西側へ広がる状況が確認できた。本来は壁のオーバーハングが強くなり出し、天井部が形成されていたと推測される。

**遺物出土状況** 土器22点、石器6点、礫4点、計32点出土している。土器の出土は坑口・堆積単位①のみで、Ⅲ群A類(7点)とⅣ群A類(15点)がある。また、焼土PF-1～3からは、Ⅳ群A類土器が出土している。石器は覆土からフレイク3点、台石・石皿1個体、坑底からはスクレイパーが1点出土している。図示していないが、石皿は平坦なすり面を持つものである。(坂本)

#### 掲載遺物

**土器** 2点図示した。いずれも覆土から出土したもので、1はⅢ群A-2類、2はⅢ群A-3類。

1は無文の粘土紐による文様が施され、半載棒状工具による押引が加えられるもの。覆土の1点と、40mほど離れた包含層K9区周辺のものとは接合した。P-27から出土した破片のみ磨耗が激しい。平縁で、外傾する切出状の口唇には、無文の斜位・楕円形の貼付と半載棒状工具による押引が加えられる。貼付には捺糸圧痕が加えられる部分もある。文様帯下端は波状の貼付により区画される。2は無文の底部である。(柳瀬)

**石器** 3はスクレイパーである。出土層位は坑底、石材は頁岩である。背面両側縁に連続的な調整を施している。腹面側縁には微細刻離痕が観察できる。末端部側が欠損しているが、これは素材剥離段階の潜在割れが原因している。

**時期** 縄文時代後期前葉の可能性もある。切り合い関係からP-22よりも新しいと判断できる。PF-1～3は後期前葉以降であろう。土坑墓もしくは貯蔵穴と推測される。(坂本)





## P-28 (図IV-51・52、図版74)

位置 F17 規模 (0.76/0.57)×(0.62/0.42)×0.32 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西端に位置している。P-22・27・59が隣接する。

確認・調査 調査区F17のVb層掘削中に黒褐色のプランが検出された。トレンチ調査をおこない土坑と判断した。覆土堆積状況確認後、半載掘削により坑底まで検出し、遺構全体を掘り下げた。

覆土 3層に分層した。1～3層はいずれも黒褐色土でKo-gを含有している。壁崩落、流入などの自然堆積と考えられる。遺物取り上げ層位はすべて「覆土」とした。

構造 坑底は緩やかに窪んでいる。壁は急斜な立ち上がりである。

遺物出土状況 覆土からIV群A類土器が2点出土している。 (坂本)

## 掲載遺物

土器 1は覆土から出土したIV群A類。縄文地に沈線が施される。 (柳瀬)

時期 出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。また、土層の切り合い関係からP-27より新しいと判断できる。 (坂本)

## P-23 (図IV-52、図版18)

位置 H17 規模 (1.17/1.20)×(0.96/0.94)×0.62 平面形態 不整形円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北西端に位置している。

確認・調査 調査区H17のⅧ層上面精査時、オリブ褐色～黒褐色のまとまりを検出した。半載掘削により覆土の堆積状況を確認し、坑底まで検出した。覆土中に構築された柱穴状ピットの調査の後、遺構全体の覆土を掘りあげた。

覆土 1～10層に分層。①～③の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は全て「覆土」とした。

- ① 上位の層。オリブ褐色土1層で構成。ローム主体土で、掘り土の投げ込みと推定される。
- ② 中位の層。黒褐色～褐色土2～5層で構成される。各層にはロームブロックが多く含有され、人為的投げ込み、もしくは流入土の可能性もある。
- ③ 下位の層。暗オリブ褐色～黄褐色土6～10層で構成される。8～10層は薄い水平堆積である。各層ともローム主体の土で人為的埋め戻し土とみられる。

構造 遺構上部(坑口部)が削平されているが、フラスコ状土坑と捉えられる。坑底は、およそ水平・平坦に作られている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北～西側ではオーバーハングしている。また、覆土1層より上位から構築された、径15cm、深さ約30cmの柱穴状ピットがみられた。土坑埋め戻し後の付属施設であるかは不明である。

遺物出土状況 遺物は覆土中から燧2点が出土している。

時期 時期を判断できる出土状況はみられないが、隣接するフラスコ状土坑群と同様に縄文時代後期前葉の土坑墓と推測される。 (坂本)

## P-24 (図IV-53、図版16)

位置 F13 規模 (1.08/0.69)×(0.75/0.45)×0.42 平面形態 楕円形

立地地形 調査区無名の沢側の急斜面上部に位置する。

確認・調査 Ⅶ層調査後、Ⅶ層上面に黒色土の楕円形のプランを検出。半載して断面を観察した。壁

の明瞭な立ち上がりでⅣ層が30cm近く掘り込まれている様子を確認した。  
 覆土 4層に分層した。各層の層界はほぼ平坦で、自然堆積と考えられる。  
 遺物出土状況 覆土から土器2点(Ⅳ群A類)、礫が1点出土している。  
 時期 出土した遺物から、縄文時代後期前葉と考えられる。

(新家)

## P-25 (図Ⅳ-53、図版 74・99)

位置 F13 規模 (0.86/0.76)×(0.58/0.50)×0.13 平面形態 楕円形

立地地形 調査区無名の沢側の急斜面上部に位置する。2m北東にはP-24がある。

確認・調査 Ⅳ層上面まで掘り下げた際、長さ40cm強の石皿と、長さ約30cmの礫が斜面上に並んで検出された。石皿の周辺の土が黒色土だったので半載したところ、黒褐色土が約6cmの厚さで平坦に落ち込んでいた。礫石器の配置や、坑底が平坦な点などから、人為的な土坑であると判断した。

覆土 Ⅳ層主体の1層。埋め戻されたものかは不明。

遺物出土状況 土器2点(Ⅲ群A類)、石器2点(敲石1点、台石・石皿1点)、礫1点が出土している。石器は坑底から出土している。

(新家)

## 掲載遺物

土器 1は覆土から出土したⅢ群A類。複節の斜行縄文が施される。

(柳瀬)

石器 2点を図示した。両者とも、出土層位は坑底、石材は安山岩である。

2は敲石である。石質はやや緻密である。礫の突出した端部に、まとまった敲打痕が観察される。

3は石皿である。素材平坦面に楕円形に凹むすり面が2面形成されている。すり面は左側面に近接し、側面縁辺に対しすり面の長軸は直交方向になっている。すり面は、左側縁に近接する方が緩やかにせり上がり、反対側はやや急にせり上がる。急にせりあがるすり面は、緩やかに立ち上がる平坦なすり面へと連続する。下位すり面は上位に比べ強く凹んでいる。すり面は中央から深い側にかけてが、最も滑らかな部分となっている。楕円形すり面の周囲には平坦なすり面が観察される。

(坂本)

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と推測される。

(新家)

## P-26 (図Ⅳ-54、図版18・43・74)

位置 J14 規模 (0.91/0.95)×(0.74/0.92)×0.88 平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。P-76より新しい。SP-56との新旧関係は判断できなかった。

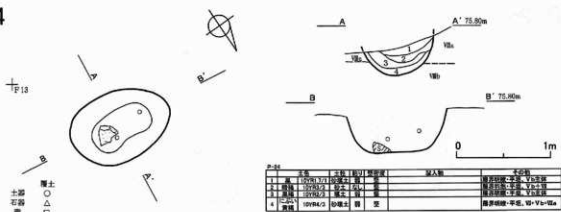
確認・調査 周辺に広く分布する造成土の下位で、円形の黒色土のまとまりとして検出した。トレンチ調査によって土坑と確認後、トレンチに沿ったベルトを設定し、平面形を確認するために周囲を5cmほど掘り下げた。造成土を切って構築されている。

覆土 ロームブロック・Ko-gが多く混入する黒褐色土。土層1・2の差異はわずかで、ほぼ単層の埋め戻しと考えられる。遺物の取り上げ層位は、「覆土」(Ⅴb層)、「覆土2」(土層1・2)である。

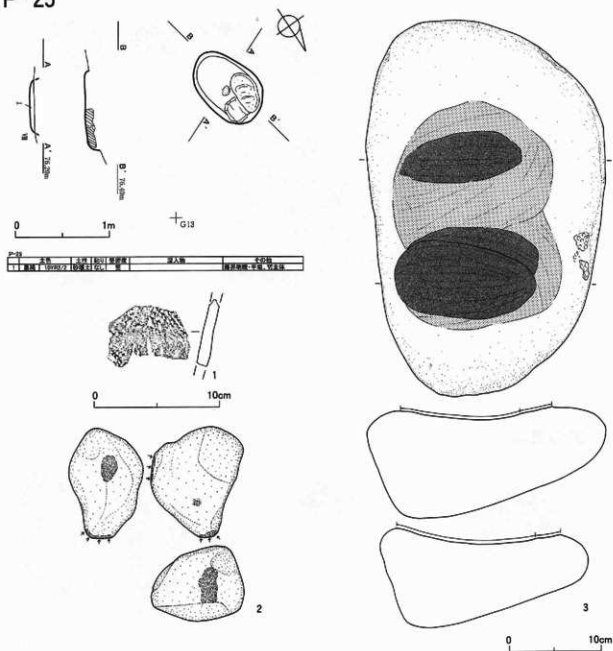
構造 円形のプラスチック状土坑。坑底はⅤ層中に構築されており、ほぼ平坦で、円形を呈する。坑口は崩落のためか、ややゆがんだ楕円形。立ち上がりは急な部分と丸みをもつ部分があり、壁はオーバーハングし、坑口付近では開く。

遺物出土状況 土器32点(Ⅲ群A類4点、Ⅳ群A類28点)、石器2点(フレイク)、礫・礫片2点、計36点出土した。すべて覆土から出土したものである。「覆土2」(土層1・2)上面から小形土器が出土した。図示した2点以外は埋め戻し時の混入と思われる細片である。

P-24



P-25

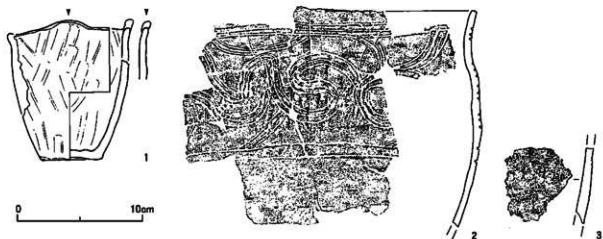
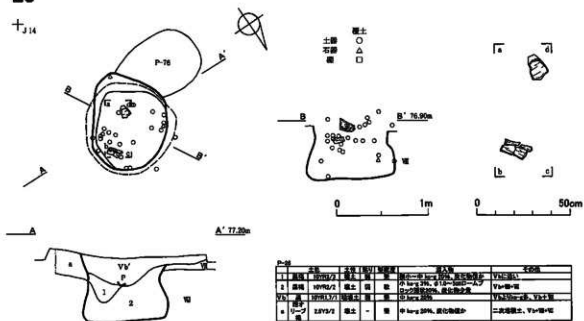


図IV-53 P-24・25

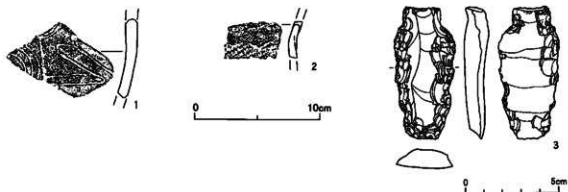


P-26

十<sub>14</sub>



P-30の遺物



図IV-54 P-26・30 (1)

## 掲載遺物

土器 3点図示した。1は覆土2上面、2・3は覆土から出土したもの。いずれもIV群A類。

1は突起をもつ無文の小形土器である。2・3は沈線が施されるもの。2は3本組沈線により、S字状あるいは波状の不規則な文様が施される。覆土と周辺包含層が接合し、同一個体ではあるが未接合の破片も多い。3は非常に細い2〜3本組の沈線が縦横に施される。P-35・39から同一個体が出土している(図IV-59-4・図IV-62-1)。

時期 出土した遺物から、縄文時代後期前葉の遺構である。覆土が埋め戻しであることと土器の出土状況から、土坑墓と考えられる。(柳瀬)

P-30(図IV-54・55、図版19・74・100)

位置 H13 規模(1.26/1.22)×(1.16/1.16)×0.84 平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、東寄り南端に位置する。

確認・調査 Vb層下位で、軽石を多く含むにぶい黄褐色土と黒褐色土のまとまりとして検出。土坑を想定して半載した。半載の結果土坑墓と想定されたことから、セクション面で試料を採取し、リン酸・カルシウム含有量に関する土壌理化学分析を行った(VI章2節)。

覆土 土層1〜4は色調がやや明るい、にぶい黄褐色〜黒褐色の土層、土層5〜8は黒色の土層で、いずれもKo-gやローム粒が多く混入する。埋め戻しと考えられる。検出時に目安となったのは土層1〜4層。4層はその断面形態から、木柱であった可能性もある。遺物の取り上げ層位は、「覆土1」(土層1・2)、「覆土2」(土層4)、「覆土3」(土層5〜8)である。

構造 円形のフラスコ状土坑である。坑底はⅧ層中に構築され、やや凹凸がある。立ち上がりは急な部分と丸みを帯びる部分がある。壁はオーバーハングし、坑口付近で開く。

遺物出土状況 土器135点(Ⅲ群A類37点、Ⅳ群A類98点)、石器3点(つまみ付きナイフ1点、フレイク2点)、礫64点、計202点出土している。すべて覆土から出土したもの。礫のうち57点は、1個体の礫がひび割れたものである。長径78cm、重さ48.3kgで、土層8上面から出土した。ひび割れ部が密着した状態であったことから、土坑の埋め戻し後に劣化したものである。これ以外の遺物は、埋め戻し時の混入と思われる。

## 掲載遺物

土器 2点図示した。いずれも覆土から出土したIV群A類。

1は渦巻状の沈線が施されると思われる胴部破片。2は突起部が剥落した口縁部破片である。折り返し口縁で、縄文が施される。(柳瀬)

石器 3はつまみ付きナイフである。出土層位は覆土、石材は頁岩である。素材打面側につまみ部を作り出している。縁辺の加工は大・小型の剝離が混在する不規則なもので、縁辺は粗雑な鋸歯状である。裏面側縁辺には、平坦剝離が不連続に認められるが、すべてのネガティブバルブが背面側の縁辺調整により除去されている。(坂本)

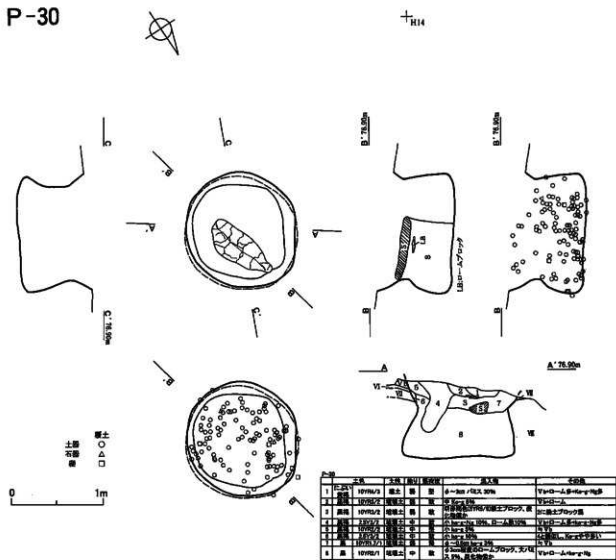
時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉の遺構である。覆土が埋め戻しであることと礫の出土状況から、土坑墓と考えられる。(柳瀬)

P-31(図IV-55)

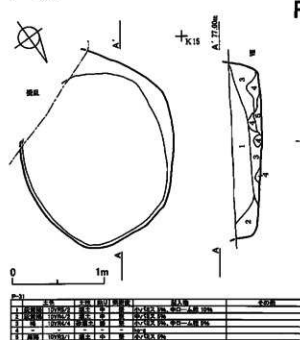
位置 K14 規模(2.08/1.82)×(1.62/1.50)×0.32 平面形態 不整形円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢際の遺構集中区より北側に位置し、P-18・46に隣接する。

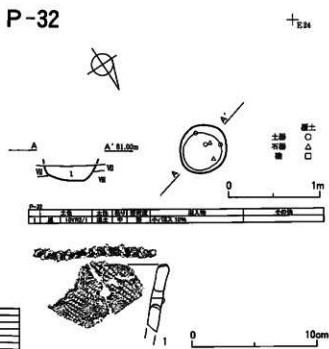
P-30



P-31



P-32



図IV-55 P-30 (2)・31・32

**確認・調査** 調査区K14でⅧ層上面において、灰黄褐色土のまとまりを確認し、北西側を半載した。  
**覆土** 5層に分層された。主体は灰黄褐色土(1・2層)とKo-gがブロックで混入した褐色土(3層)であり、人為的埋め戻しによる堆積と考えられる。  
**構造** 坑底はⅧ層を20~30cm掘り込み、平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。南側の一部が住居の基礎による攪乱を受けている。  
**遺物出土状況** 出土していない。  
**時期** 周辺の遺構から縄文時代中期前半と考えられる。(菊池)

## P-32 (図IV-55、図版74)

**位置** E23 規模  $(0.54/0.42) \times (0.48/0.38) \times 0.16$  平面形態 円形  
**立地地形** 調査区南端の尾根部分の遺構集中区に位置し、H-6・8に隣接する。  
**確認・調査** 調査区E23でⅧ層上面において、黒色土のまとまりを確認し、北側を半載した。  
**覆土** 少量の軽石が混入した黒色土1層である。  
**構造** 坑底はⅧ層を約10cm掘り込み、東側でやや上がる。壁は急斜度で立ち上がる。  
**遺物出土状況** 遺物は覆土で土器(Ⅲ群A類4点)、フレイク2点の計4点が出土した。(菊池)  
**掲載遺物**  
**土器** 1は覆土から出土したⅢ群A-3類。突起部の破片で、丸形の口唇に縄による縦位・斜位の刻み加えられる。貫通孔がある。(柳瀬)  
**時期** 出土遺物と周辺の遺構から縄文時代中期前半と考えられる。(菊池)

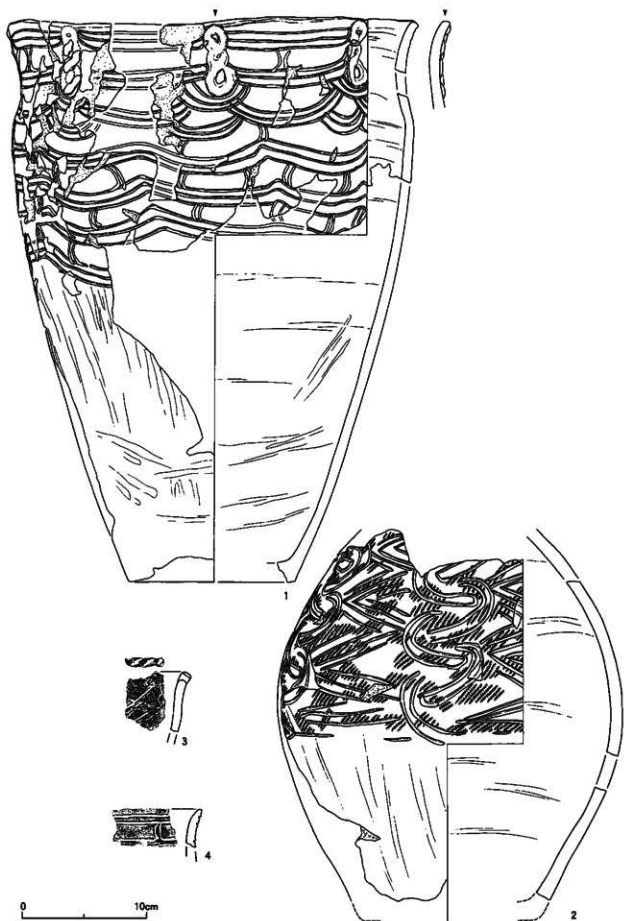
## P-33 (図IV-56)

**位置** F18 規模  $(1.10/0.96) \times (1.06/0.94) \times 0.10$  平面形態 円形  
**立地地形** 調査区南東側、無名の沢際の遺構集中区の西端に位置し、P-22・27に隣接する。  
**確認・調査** 調査区F18でⅧ層上面において、褐色土のまとまりを確認し、北東側を半載した。  
**覆土** 少量の炭化物と軽石が混入した褐色土(1層)と灰黄褐色土(2層)である。  
**構造** 坑底はⅧ層を浅く掘り込み、平坦である。  
**遺物出土状況** 出土していない。  
**時期** 周辺の遺構から縄文時代後期前葉の可能性がある。(菊池)

## P-34 (図IV-56・57、図版19・43・44・74・100)

**位置** I14 規模  $(1.26/1.18) \times (0.99/1.16) \times 0.88$  平面形態 円形  
**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の中央北東側に位置する。  
**確認・調査** 造成土掘り下げ後円形の黒色土のまとまりとして確認。西側半分がベルトとして残っていたため、それに沿って半載した。  
**覆土** 土層1~6までは軽石粒を含み、配石に伴う造成土と類似しているため自然堆積とみられるが、土層6は上下層と比較して黒味が強く、有機質に富む状況であった。土層7・8は色調は異なるもののロームブロックの混入などから人為堆積とみられる。  
**構造** 坑底はほぼ平坦で、円形を呈する。坑口は崩落のためかややゆがんだ楕円形。壁面は底部にいくに従い広がるいわゆるフラスコ状土坑。構築前に周囲はⅧ層まで達するような造成がなされ、その後造成面より掘り込まれている。





図IV-57 P-34 (2)

**遺物出土状況** 土器165点、石器6点、礫・礫片23点が出土。土器・石器のほとんどが、上層のVb層からの出土である。覆土から出土したのは土器(Ⅲ群A類7点、Ⅳ群A類21点)、石器(フレイク)3点、礫・礫片20点。Vb層出土石器にはスクレイパー1点、石皿1点が含まれる。Vb層出土としたⅣ群A類の土器はほぼ1個体で、石皿・大形礫とともに坑口北側から出土しており、この土坑に伴うものとした。覆土中の礫は、覆土中位より下位から出土している。(福井)

#### 掲載遺物

**土器** 4点図示した。いずれも覆土あるいはVb層から出土したⅣ群A類。他遺構や周辺包含層と接合したものがあがる。

1～3は沈線が施されるもの。1は覆土およびVb層から出土したものと、P-39覆土の1点および周辺包含層のものが接合した。40mほど離れたP11区のものとも接合している。口縁から胴部上半はほぼ全体が、胴部下半から底部は一部のみ残存している。大形の深鉢。平縁で、8か所に8の字状の貼付が加えられる。胴部には3本組沈線により、上段では弧状に重なる、下段では波状に横環する文様が描かれ、波状沈線間には2本組の()状沈線が加えられる。2は覆土から出土した1点と、H-6・P-36覆土および周辺包含層のものが接合した壺形土器。胴部～底部付近の半分程度が残存している。縄文地に沈線が施される。文様は8単位程度と思われる、2本組沈線による横U字を組み合わせてS字状とした文様を8か所程度配し、その間は羽状の沈線で充填される。沈線は太めで浅い。縄文は沈線が描かれる範囲のみに施される。胎土には小礫が多い。3は突起付近の破片で、口唇端部に棒状工具による刻み加えられる。胴部には2本組沈線で、格子目と思われる文様が施される。

4は沈線が施される口縁部。SP-214からも同一個体が出土している(図Ⅳ-101-4)。なお、覆土の3点がP-21のものと接合しており、H-2からも同一個体が出土している(図Ⅳ-11-12、同49-9)。(柳瀬)

**石器** 5は石皿である。石材は安山岩。すり面は素材礫の平坦面全面に広がる平滑なものであるが、下部付近と上部右側の欠損部付近には緩やかな凹みが認められる。被熱している。(坂本)

**時期** 縄文時代後期前葉で、人為的に埋められていることから土坑墓と推測される。(福井)

P-35 (図Ⅳ-58・59、図版19・44・74・100)

**位置** H・I13・14 規模 (1.14/1.39)×(1.11/1.32)×1.10 平面形態 円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

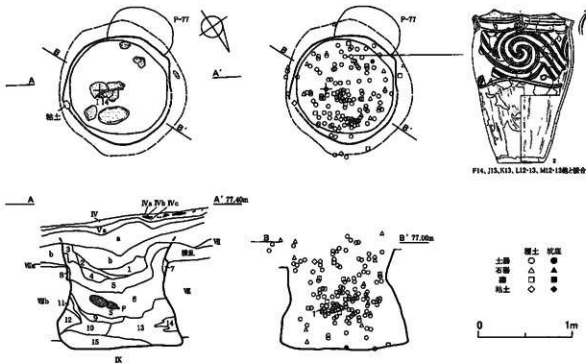
**確認・調査** 造成土掘り下げ後円形の黒色土のまとまりとして確認。南半分がベルトとして残っていたため、それに沿って半載した。

**覆土** 土層1～3は、配石に伴う造成土が自然に流れ込んだもの。土層4・5は、黄褐色を呈するもので、土坑埋積時に意図的に散布したものとみられる。土層6・7は土層1～3に類似するが、土層4・5の存在から人為堆積土と考えられる。土層8・9はロームブロックを主とするもので、坑口を補強するために貼り付けたものであろう。土層12はⅦ層のブロック。土層13・15はⅧ層のブロック。土層10・11・14・16は黒褐色～黄褐色を呈すが、軽石の粒径が大きいものも多く人為堆積土とみられる。

**構造** 坑底はほぼ平坦で、円形を呈する。坑口もほぼ円形。壁面は底部にいくに従い広がるいわゆるフラスコ状土坑。構築前に周囲はⅦ層まで達するような造成がなされ、その後造成面より掘り込まれたとみられる。

**遺物出土状況** 土器154点(Ⅲ群A類35点、Ⅳ群A類119点)、石器18点(Rフレイク1点、フレイク14

P-35



F14, J15, K13, L12-13, M12-13 編土被合

点番	土器	土質	形状	出土層	出土位置	出土状況
1	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
2	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
3	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
4	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
5	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
6	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
7	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土

点番	土器	土質	形状	出土層	出土位置	出土状況
8	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
9	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
10	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
11	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
12	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
13	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
14	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土
15	III群A-2類	硬粘土	中	F14	ハズレ部中央 25%	覆土

図IV-58 P-35 (1)

点、北海道式石冠1点、扁平打製石器1点、台石・石皿1点)、礫・礫片17点が覆土から出土。礫は主に覆土中位から出土している。また坑底付近から白色粘土の塊も出土した。(福井)

#### 掲載遺物

土器 7点図示した。いずれも覆土から出土したもので、周辺包含層と接合したものもある。1はIII群A-2類、2~7はIV群A類。

1は無文の粘土紐による文様が施されるもの。平縁で、切出状の口唇に、糞糸圧痕が加えられる波状の貼付が施される。

2~6は沈線が施されるもの。2は覆土の2点と、包含層F14・K13区などやや広範囲のものが接合した。25mほど離れたD16・19区とも接合している。大形の深鉢。2/3ほどが残存する。5か所の突起には8の字状の貼付が加えられ、貼付は内面にまたがる。胴部上半には三本組沈線により大きな渦巻状の文様が描かれ、隙間に三角形文と円形文が充填される。渦巻状文の位置は突起に対応する。3~6はいずれも小形のものと思われる。3はK10区から同一個体が出土している(図V-38-151)。2本組沈線による渦巻状の文様が施される。口唇には刻みが加えられる。4はP-26・39から同一個体が出土している(図IV-54-3、同62-1)。沈線は非常に細い。5は折り返し口縁部の破片。折り返し上に沈線が施される。6は格子目状の沈線が施される。7は櫛歯状沈線が施されるもの。鉢の破片と思われる。なお、覆土の1点がP-21のものと同接合している(IV-48-3)。(柳瀬)





圖IV-59 P-35 (2)

石器 8は扁平打製石器である。石材は安山岩である。下面左側がすり面、右側が加工稜線となっているが、下縁辺は連続した直線状を呈する。すり面は断面・側面方向からみて、おおむね平坦且つ直線的である。すり面縁辺には連続的な小剝離が認められる。(坂本)

時期 縄文時代後期前葉、人為的に埋められていることから土坑墓とみられる。(福井)

P-36 (図IV-60・61、図版20・75・100)

位置 I 13 規模  $(1.04/1.49) \times ((0.95)/1.45) \times 1.32$  平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の際遺構集中範囲の北東側に位置する。P-68より新しい。

確認・調査 造成土掘り下げ後不整形の黒色土のまとまりとして確認。南側にベルトがあったため長軸を基準にできなかったため、ほぼ南北方向の線を基準に半載したところ、2基の土坑が重複したものであることが分かった。

覆土 土層1～3は、配石に伴う造成土が自然に流れ込んだもの。土層5はロームブロック、軽石が多く含まれ、土坑埋積時に散布されたものとみられる。土層6～8・11・16・20・23は黒色～黒褐色、土層9・10・12～15・17～19・21・22・24はロームブロックを多く含む層で、互層となっていることから人為堆積土とみられる。ただ、土層20・24はP-68覆土の流れ込みも含まれる可能性がある。

構造 坑底はほぼ平坦で、円形を呈する。坑口もほぼ円形。壁面は底部にいくに従い広がっていくゆるなフラスコ状土坑。構築前に周囲はVII層まで達するような造成がなされ、その後造成面より掘り込まれたとみられる。

遺物出土状況 土器45点(III群A類9点、IV群A類36点)、石器3点(Uフレイク1点、石核1点、敲石1点)、礫・礫片13点が覆土から出土。(福井)

#### 掲載遺物

石器 2点図示した。いずれも覆土から出土したIV群A類。

1は3本組沈線による渦巻文様が施されるもの。2は沈線が施される口縁部。なお、覆土の1点がP-34のものと接合している(図IV-57-2)。(柳瀬)

石器 2点を図示した。石材は3が頁岩、4が安山岩である。

3は石核である。不規則に打面と作業面を転移しているが、主に上下の打面から剝離している。

4は敲石である。鶏卵状の礫を素材とし、下端部に最も顕著でまとまった敲打痕がある。(坂本)

時期 縄文時代後期前葉で、人為的に埋められていることから土坑墓とみられる。(福井)

P-68 (図IV-60・61、図版22・102)

位置 I 13 規模  $(0.92/1.34) \times ((0.64)/0.90) \times 1.11$  平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の際遺構集中範囲の北東側に位置する。P-36より古い。SP-22との関係は判別できなかった。

確認・調査 造成土掘り下げ後不整形の黒色土のまとまりとして確認はしていたが、P-36と同一と考えた。南側にベルトがあり長軸を基準にできなかったため、P-36側をほぼ南北方向の線を基準に半載したところ、2基の土坑が重複したものであることが判明した。P-68はP-36調査後、南側のベルトに沿うように半載した。

覆土 土層1は、配石に伴う造成土が自然に流れ込んだもの。土層2より下位は人為堆積土とみられるが、土層2～7は黄褐色～褐色、土層10は黒色、土層11・12はロームブロックを主とする土層。

構造 坑底はほぼ平坦で、円形を呈する。坑口は崩落のためか歪んだ隅丸方形を呈する。壁面は底部





にいくに従い広がるいわゆるフラスコ状土坑。構築前に周囲はⅦ層まで達するような造成がなされ、その後造成面より掘り込まれたとみられる。

遺物出土状況 覆土より土器(Ⅳ群A類)24点、石器5点(フレイク1点、扁平打製石器3点、石皿1点)が覆土中位から出土している。(福井)

#### 掲載遺物

石器 3点を図示した。石材は全て安山岩である。

1～3は扁平打製石器である。裏面を覆い尽くすように加工している。1は左側欠損部が、無名沢側斜面出土の破片と接合している。接合破片部下面は幅の狭いすり面と加工稜線で構成され、使用開始間もない段階で破損したと考えられる。接合部と本体部ではすり面に8mmほどの段差が生じており、左側部欠損後も継続使用されたと理解できる。2は両側縁をノッチ状に加工している。すり面は断面・側面方向からみて、平坦且つ直線的である。すり面縁辺の小剝離は裏面側のみに観察される。3は下面調整縁辺に部分的に小型すり面が認められる。器体破損などが原因し、使用頻度が低い段階で廃棄された可能性がある。(坂本)

時期 縄文時代後期前葉、人為的に埋められていることから土坑墓とみられる。(福井)

#### P-37 (図Ⅳ-61、図版20)

位置 G・H14 規模 (0.92/0.92)×(0.87/0.83)×0.68 平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近に位置する。SP-153と重複し、これより新しい。

確認・調査 Ⅶ層上面で、ロームのまとまりとして検出した。西半部が15ラインのメインセクションベルトにかかっていたため、それに沿ってトレンチ調査を行い、土坑を確認した。メインセクションベルトをセクション面とし、半載した。半載の結果土坑墓と想定されたことから、セクション面で試料を採取し、リン酸・カルシウムの含有量に関する土壤理化学分析を行った(Ⅵ章2節)。

覆土 若干の色調の違いがあるが、すべてローム主体で、埋め戻しである。遺構外の土層a～a'は、遺構集中範囲内に分布する造成土である。

構造 円形のフラスコ状土坑である。坑底はⅦ層中に構築され平坦。立ち上がりは急で、壁はオーバーハングし、坑口付近は開く。埋土の状況から短時間で埋め戻されたと判断できること、上場・中場・下場の形状がいずれもほぼ円形で、均整がとれていることから、崩落等はなく、構築時の形態を保っているものと考えられる。周辺には造成土が分布し、P-37はこの中位から掘り込まれている。

遺物出土状況 出土していない。

時期 掘り込み面と周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の遺構である。覆土が埋め戻しであることから、土坑墓と考えられる。(柳瀬)

#### P-38 (図Ⅳ-62)

位置 I12 規模 (1.41/0.86)×(0.57/0.77)×0.41 平面形態 楕円形

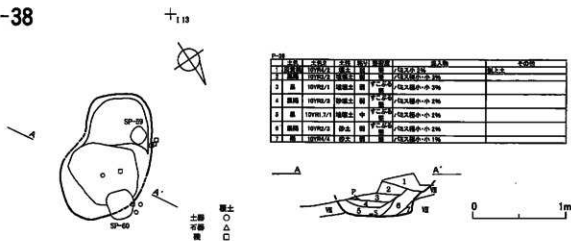
立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。SP-59・60より古い。

確認・調査 Ⅶ層上面で黒色土のまとまりとして確認。半載法で調査した。

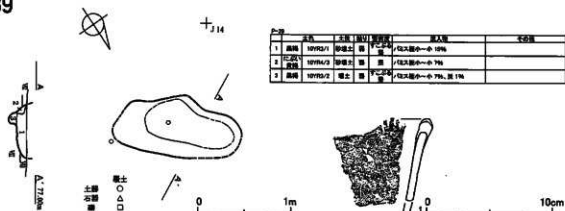
覆土 土層1は他の土坑の掘上土とみられる土層。土層2・3は配石に伴う造成土が自然に流れ込んだもの。土層4・7は褐色、土層5・6は黒色の土層が堆積している。自然堆積と思われる。

構造 平面形や掘り込みは明瞭ではない。

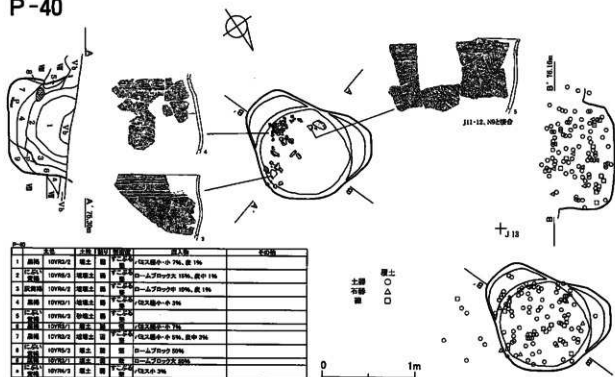
## P-38



## P-39



## P-40



図IV-62 P-38・39・40 (1)

遺物出土状況 土器3点(Ⅲ群A類1点、Ⅳ群A類2点)、礫5点が覆土から出土。

時期 縄文時代後期前葉の土坑とみられる。

(福井)

P-39 (図Ⅳ-62、図版75)

位置 J13・14 規模  $(1.32/0.94) \times (0.64/0.39) \times 0.19$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 Ⅶ層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う造成土が堆積しているが、堅く、人為堆積の可能性がある。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 覆土よりⅣ群A類の土器4点が出土している。

(福井)

掲載遺物

土器 1は覆土から出土したⅣ群A類である。P-26・35から同一個体が出土している(図Ⅳ-54-3、同59-4)と同一個体。突起には筥状工具による刻みを加えられる。胴部には細い沈線が縦横に描かれる。なお、覆土の1点がP-34のものと接合している(図Ⅳ-57-1)。

(柳瀬)

時期 縄文時代後期前葉の土坑とみられる。

(福井)

P-40 (図Ⅳ-62・63、図版20・75・100)

位置 I12 規模  $(1.04/0.91) \times (1.00/0.88) \times 0.73$  平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 Vb層調査時に黒色土のまとまりとして確認。半截法で調査。

覆土 土層1は軽石粒を含み、配石に伴う造成土と類似しており自然堆積とみられる。土層2は黄褐色の土層がU字形を描くように堆積し、土坑埋積時に散布したものとみられる。土層3以下はロームブロックの混入などから人為堆積土とみられる。

構造 坑底はほぼ平坦で、円形を呈する。坑口もほぼ円形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物出土状況 土器246点(Ⅲ群A類19点、Ⅳ群A類227点)、石器9点(スクレイパー1点、フレイク7点、台石・石皿1点)、礫15点が覆土から出土している。いずれも覆土中位からの出土。特に土器は土層2から多く出土している。

(福井)

掲載遺物

土器 5点図示した。いずれも覆土から出土したⅣ群A類。

1・2は渦巻状の沈線が施されるもの。1は壘形土器の肩部。2は3本組沈線による渦巻状文様が施される。3・4は口縁～頸部にのみ沈線が施されるもの。3は、横溝する2段の3本組沈線の間に、短い縦位の3本組沈線が加えられる。沈線は太い。4は同一個体片が多く出土したが、破片の磨耗が著しく接合できなかった。頸部に平行沈線とそれを縦断する蛇行沈線が描かれる。全面に横走気味の縄文が施される。5は縄文のみのもの。覆土の1点と周辺包含層のものとが接合した。折り返し口縁で、縄文は折り返し部より下位に施される。突起は上端が平坦に整形され、8の字状貼付が剥落した痕跡がある。複節縄文が斜行～横走気味に不規則に施される。

(柳瀬)

石器 6はスクレイパーである。石材は頁岩である。素材は背面が平坦で腹面が膨らみを持つ剥片である。腹面側末端部を調整し、外湾形を呈す鋭利な縁辺を作出している。背面側縁辺の中央部には小剥離がまとまって認められる。

(坂本)

時期 縄文時代後期前葉で、人為的に埋められていることから土坑墓とみられる。

(福井)



図IV-63 P-40 (2)



P-41 (図IV-64)

位置 E21 規模  $(1.02/0.85) \times (0.51/0.43) \times 0.10$  平面形態 楕円形

立地地形 調査区やや南側緩斜面上のH-6付近に位置する。

確認・調査 VII層を調査中、黒色土の細長いプランを検出した。半載の結果、厚さ5cmほどの黒色土の落ち込みであるとわかった。底は平坦で、人為的な土坑と判断した。

覆土 V層主体の1層。

遺物出土状況 坑底から炭化物と土器(Ⅲ群A類)1点、礫1点が出土した。焼土等は検出しておらず、この場で焼けたものではないと考えられる。

時期 周辺の遺構・遺物より、縄文時代中期前半～後期前葉と考えられる。(新家)

P-42 (図IV-64)

位置 L32 規模  $(0.84/0.54) \times (0.72/0.33) \times 0.30$  平面形態 楕円形

立地地形 調査区ほぼ中央の緩斜面上に位置する。

確認・調査 VII層調査後、VIII層上面に黒色土の円形プランが検出された。半載し、断面を観察したところ、VIII層が20～30cm程掘り込まれているのが確認できた。

覆土 2層に分層した。黒色土主体の1層にVI・VII層起源の2層が若干混在する。

遺物 出土していない。

時期・性格 周辺に遺構はないので明らかではないが、周囲の包含層出土の遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉の可能性はある。(新家)

P-43 (図IV-64・65、図版20・44・75・100)

位置 E19・20 規模  $((1.68)/(1.51)) \times (1.60/1.34) \times 0.24$  平面形態 円形

立地地形 調査区ほぼ中央の緩斜面上、H-5の北に位置する。北側の一部が攪乱を受けている。

確認・調査 VII層調査中、大きな礫が3点まとまって出土し、その周辺に径1.5m程の円形のプランも検出された。礫が断面にかかるように半載し、断面を観察。底が平坦で壁の立ち上がりが見えない人為的な掘り込みであると判断した。

覆土 黒色土主体の1層。VIII層を10cmほど掘り下げている。

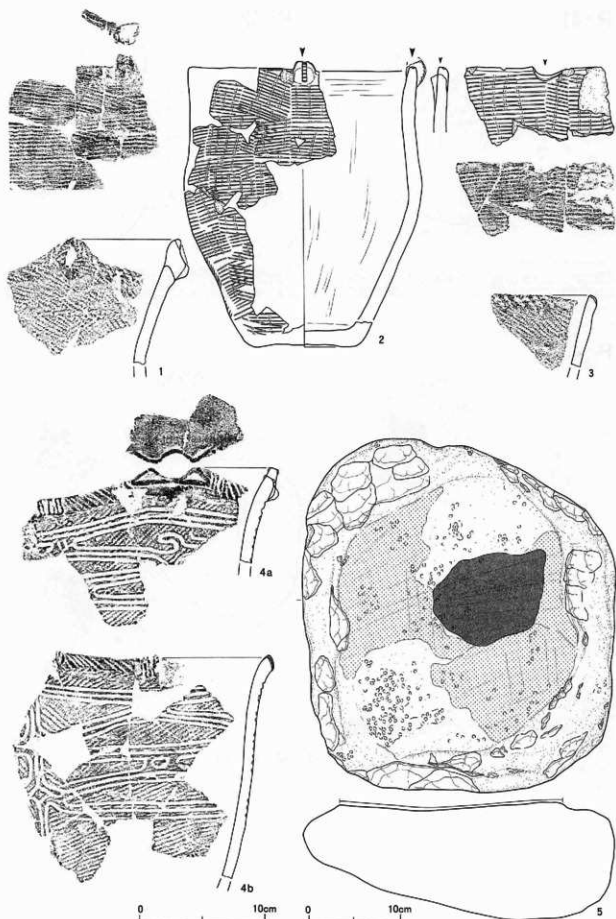
遺物出土状況 土器は覆土から27点、坑底から8点出土している。全てⅢ群A類である。覆土中、土坑内東南寄り、大礫1点と石皿2点が重なって出土した。(新家)

掲載遺物

土器 4点図示した。3・4は床面から、1・2は覆土から出土したもので、他遺構や包含層と接合したものもある。いずれもⅢ群A-3類。

2は魚骨回転文が施されるもの。覆土から出土した2点と周辺包含層のものとは接合した(図V-2 下段)。同一個体で未接合の破片は30mほどのやや広範囲から出土している。胴部中ほどが張り出し、頸部がややくびれる深鉢。外面に張り出す棒状の突起をもち、縁位の魚骨圧痕が加えられる。口唇は角形で、端部に細い沈線様の文様が加えられる。魚骨の回転による可能性もある。図右は接合しない口縁部破片で、片口状の凹みをもつ。口唇直下から底部付近までニシンタイプの魚骨回転文が施される。1・3は縄文のみのも。1は突起部に楕円形の環状貼付が加えられ、貼付上にも縄文が施される。3は突起が剝落した口縁部。1・3ともに口唇は外傾する切出状で、縄による斜位の刻みが加えられ、胴部には斜行縄文が施される。4は坑底から出土した1点と、P-47覆土および周辺包含





图IV-65 P-43 (2)

層のものが接合した。沈線による文様が施されるもの。突起の形状に沿って細い粘土紐が外・内面に貼付され、突起下には横位の隆起帯が加えられる。口唇は外傾する切出状で燃糸による斜位の刻みが施され、突起の両脇および突起間の中間点に、燃糸の圧痕が加えられた縦位の貼付が2～3本組で加えられる。胴部には主に3本組沈線による直線的な文様が施される。地文はLR斜行縄文で、部分的にRL斜行縄文がみられる。(柳瀬)

石器 5は石皿である。石材は安山岩である。素材礫の平坦面に、すり面と敲打痕が観察される。周囲は打ち欠き整形されている。すり面は、平坦面中央部付近に平滑化した顕著な範囲が認められ、その周囲に比較的軽微なものが広がる。敲打痕は下部左側に主にまとまっている。(坂本)

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。(新家)

P-44 (図IV-66、図版20・76・101)

位置 C20 規模  $(1.37/1.11) \times (1.28/1.09) \times 0.33$  平面形態 円形

立地地形 調査区ほぼ中央の緩斜面上、調査区外付近のH-5とH-6の間に位置する。

確認・調査 VII層調査中、黒色土の円形プランを検出した。半載して断面を観察した結果、底が平坦で両脇の立ち上がりが明瞭な土坑であると判断した。

覆土 2層に分層した。いずれも黒色土主体である。覆土とV層が似ており、V層中での遺構の確認ができなかったが、掘り込み面はV層中であつたと考えられる。VII層を10cmほど掘り下げている。

遺物出土状況 土器27点(Ⅲ群A類26点、Ⅳ群A類1点)と台石・石皿1点が出土している。Ⅲ群A類土器は覆土と坑底から出土している。台石・石皿は「覆土2」から出土している。(新家)

掲載遺物

土器 2点図示した。1は坑底と覆土のものが接合したⅢ群A-2類、2は覆土から出土したⅢ群A-3類。1は馬蹄形圧痕が加えられるもの。口唇は丸みをもつ切出状で燃糸圧痕が加えられる。口縁部には無文地に燃糸圧痕と馬蹄形圧痕が施され、燃糸圧痕が加えられる貼付帯で区画される。2は丸形の口唇に縄による斜位の刻みが加えられる。胴部は無文地に3本組の平行沈線が施される。(柳瀬)

石器 3は台石・石皿である。石材は安山岩である。器体を大きく欠損している。扁平礫の平坦面に、散発的な敲打痕と軽微なすり面が広がっている。(坂本)

時期 出土遺物から縄文時代中期前半と考えられる。(新家)

P-45 (図IV-66)

位置 J13・14 規模  $((1.30)/1.22) \times (0.64/0.59) \times 0.22$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 VII層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う造成土が堆積しているが、堅く、人為堆積土の可能性はある。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 P-39と構造が類似しており、縄文時代後期前葉の土坑とみられる。(福井)

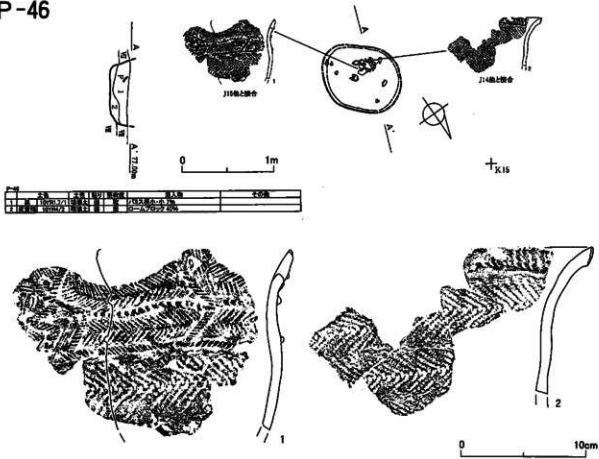
P-46 (図IV-67、図版76)

位置 J14 規模  $((0.84) \times (0.74)) \times (0.69/0.64) \times 0.21$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

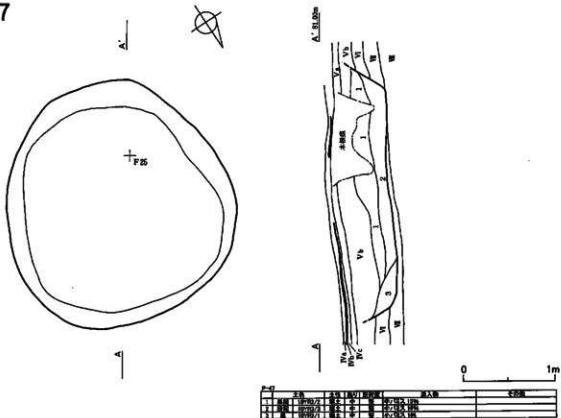


P-46



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

P-47



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

図IV-67 P-46・47

**確認・調査** VII層上面で黒色土のまとまりとして確認。

**覆土** 配石に伴う造成土と類似した土層が堆積しているが、しまりが弱く、自然堆積か人為堆積かは判別できなかった。

**構造** 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

**遺物出土状況** 土器23点(Ⅲ群A類21点、Ⅳ群A類2点)、石器2点(フレイク)が覆土から出土している。(福井)

**掲載遺物**

**土器** 2点図示した。いずれも覆土から出土したⅢ群A-2類で、周辺包含層と接合している。

1は主に捺糸圧痕による文様が施される。突起の頂部には三角形の環状貼付とその内側に捺糸圧痕が加えられ、そこから粘土紐の貼付が垂下する。丸みをもつ切出状の口唇から胴部にかけて捺糸圧痕が矢羽状に施されており、横環する貼付帯で区画される。文様帯内に横位に施される貼付には馬蹄形圧痕が、他の貼付には捺糸圧痕が加えられる。2は結束羽状縄文のみが施される。肥厚し外傾する口唇には縄の縦位の刻みが加えられる。(柳瀬)

**時期** 縄文時代中期前葉の土坑とみられる。(福井)

P-47 (図IV-67)

**位置** E・F24・25 規模 (2.66/2.18)×(2.16/2.14)×0.46 平面形態 不整形

**立地地形** 調査区南東側、尾根部分の遺構集中区西端に位置する。

**確認・調査** 調査区F25でVb層調査中、軽石の混入した黒褐色土のまとまりを検出した。25ラインに沿ってベルトを設定しトレンチ調査をおこない、坑底と壁の立ち上がりを確認した。

**覆土** 黒褐色土、暗褐色土、黒色土の3層に分層され、Vb層の流入による自然堆積である。

**構造** 坑底はVII層下位に造られ、北側にやや傾斜している。壁は急斜度で立ち上がる。

**遺物出土状況** 覆土よりⅢ群A類1点が出土している。なお、覆土の1点がP-43のものと接合している(図IV-65-4)。

**時期** 周辺の遺構より縄文時代中期前半と考えられる。(菊池)

P-48 (図IV-68、図版76)

**位置** H14 規模 (1.08/0.70)×(0.85/0.51)×0.25 平面形態 楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近に位置する。P-49と近接し、直接の重複関係はないが、検出状況の観察からP-49より新しいと判断した。

**確認・調査** VII層上面付近で黒褐色土のまとまりとして、P-49とともに検出。土坑と想定し、P-49との新旧関係を確認後、半載して確認した。

**覆土** 全般にVb層主体で、Ko-gが多く混入する。周辺に分布する造成土の流れ込みと思われ、自然堆積である。

**構造** 楕円形で皿状の土坑。坑底はVII層中に構築され、平坦。立ち上がりは緩やかで、壁は開く。

**遺物出土状況** 覆土から土器が3点(Ⅲ群A類1点、Ⅳ群A類2点)出土している。

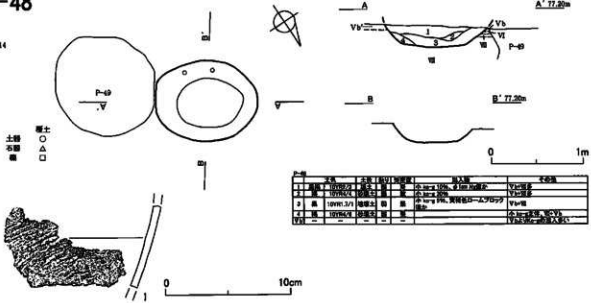
**掲載遺物**

**土器** 1は覆土から出土したⅣ群A類。横走気味の縄文が施される。

**時期** 出土遺物から、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。(柳瀬)

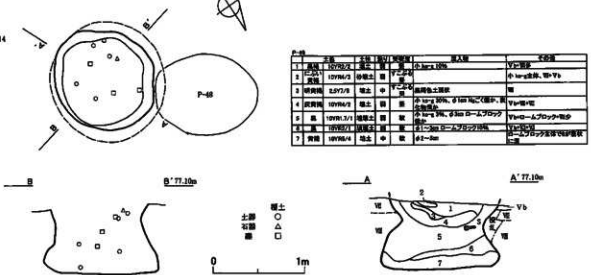
## P-48

+H14

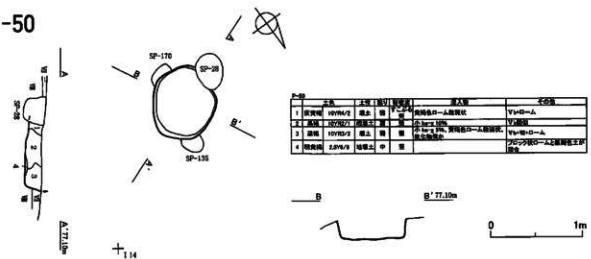


## P-49

+H14



## P-50



図IV-68 P-48・49(1)・50



P-49 (図IV-68・69、図版20・76)

位置 G・H14 規模  $(1.24/1.25) \times (1.03/1.23) \times 0.77$  平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近南寄りに位置する。P-48と近接し、検出状況の観察からP-48より古いものと判断した。

確認・調査 Ⅶ層上面で、主に黒〜灰黄褐色土のまとまりとして、P-48とともに検出した。土坑と想定して半載し、確認した。

覆土 土層1は造成土に類似する。覆土の上位の土層2〜4はローム主体あるいはロームが多く混入するためやや明るい色調を呈し、覆土の中位の土層5は黒色でロームブロックを含む。覆土の下位の土層6・7は坑底付近のローム主体の土層で、その差異は黒色土とロームの比率の差のみである。土層1は流れ込み、土層2以下は埋め戻された土層と考えられる。遺物の取り上げ層位は、「覆土」(土層1〜4)、「覆土5」(土層5)である。

構造 ほぼ円形のフラスコ状土坑。坑底はⅦ層中に構築され平坦。立ち上がりは丸みをもつ部分と、急な部分がある。壁はオーバーハングし、坑口付近は開く。坑口ではやや楕円形を呈するが、坑口と壁の屈曲部の形態が対応していることから、構築時の形態をほぼ保持しているものと思われる。

遺物出土状況 土器5点(Ⅲ群A類1点、Ⅳ群A類4点)、石器1点(スクレイパー)、鏝3点、計9点出土している。いずれも土層5より上位から出土した。埋め戻し時の混入と思われる。

## 掲載遺物

土器 2点図示した。1は覆土と包含層が接合したⅢ群A-2類、2は覆土から出土したⅣ群A類。1は覆土の1点と、30mほど離れた包含層M13区周辺の破片が接合した。2/3以上の破片が残存し、接合した。捺糸圧痕の加えられる粘土紐と、それに沿った捺糸圧痕、および馬蹄形圧痕が施される。2は覆土から出土したⅣ群A類。無文の底部付近。(柳瀬)

石器 3はスクレイパーである。石材は頁岩である。背面側右側縁にやや軽微な調整が認められる。(坂本)

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉の遺構である。土坑墓と考えられる。(柳瀬)

P-50 (図IV-68)

位置 H14 規模  $(0.78/0.71) \times (0.67/0.64) \times 0.24$  平面形態 やや不整な卵形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、やや東寄りに位置する。SP-28・135・170と重複する。SP-28より古く、SP-135・170との新旧関係は不明である。

確認・調査 Ⅶ層上面で主に黒褐色土のまとまりとして、SP-28とともに検出した。当初1基の土坑と想定し半載したところ、SP-28と重複し、これより古い土坑と確認した。

覆土 ロームやKo-gを多く含む土層1・3・4と、Vb層に類似する土層2からなる。層界が不規則なため、埋め戻しの可能性がある。

構造 不整卵形を呈する、堅穴状の土坑。坑底はⅦ層中に構築され、平坦。立ち上がりは急で直角に近く、壁は垂直に近い。

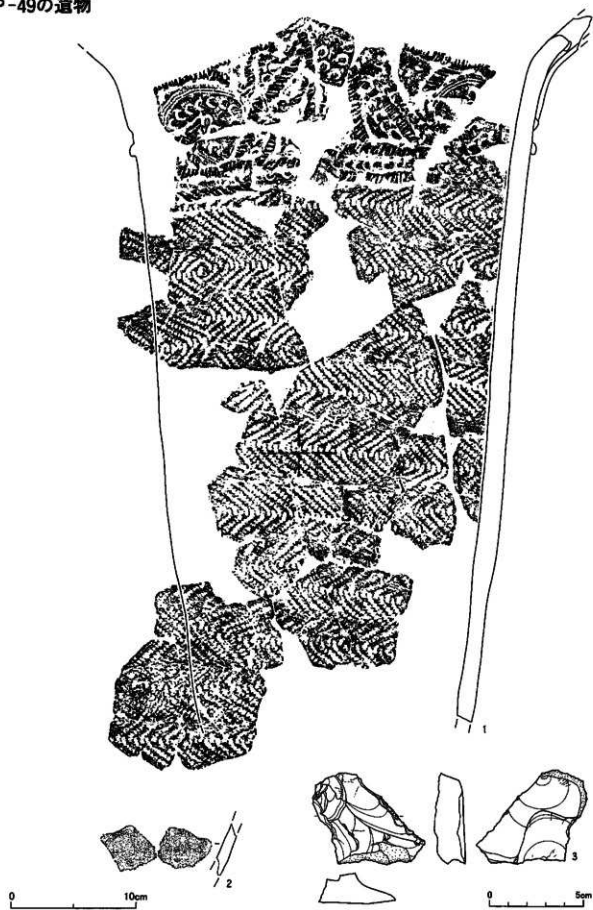
遺物出土状況 覆土からⅣ群A類土器3点が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。(柳瀬)

P-51 (図IV-70~72、図版21・76・101)

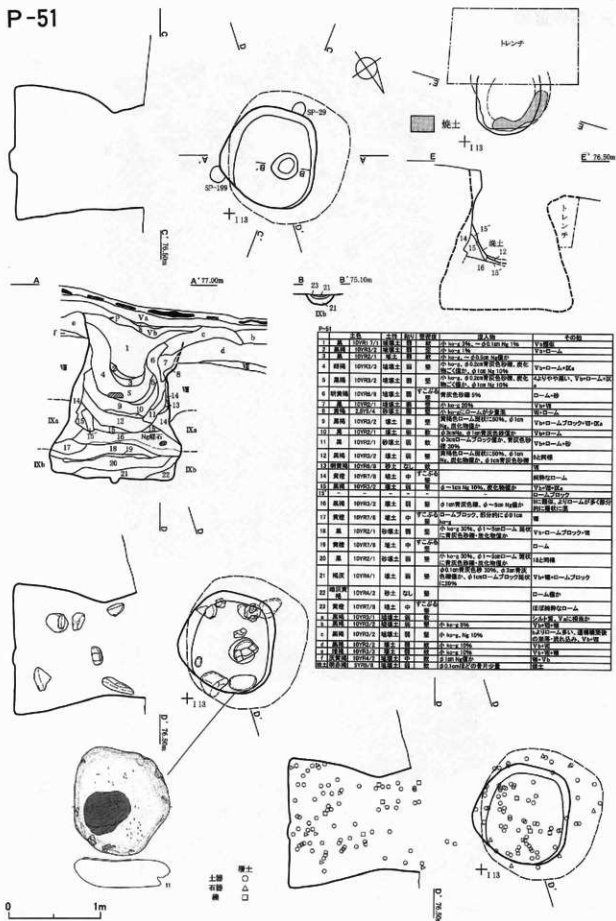
位置 H12・13 規模  $(1.04/1.36) \times (1.02/1.26) \times 1.77$  (坑底ピットを含め1.84)

## P-49の遺物



図IV-69 P-49 (2)

P-51



図IV-70 P-51 (1)

### 平面形態 隅丸長方形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、南東側に位置する。SP-29・199と重複し、新旧関係は不明。

**確認・調査** Va層調査後の造成土の上面で、黒色土のまとまりとして検出し、土坑と想定した。北半が、Iラインに沿って設定したメインセクションベルトにかかっていたため、これに沿って土坑のセクションラインを設定し、平面形を確認するため南半を平面的に掘り下げた。周辺には造成土が厚く堆積しており、これをほぼ掘りきったVII層上面付近で平面形を確認した。半載して南半の覆土を掘り下げたところ、坑口は狭く、深さが1.5m近くあり、作業が困難であった。そのため、南半部の坑口の平面形、遺物出土状況、および重複するSP-29の記録をとった後、南半部を広げる形で0.8×1.4mほどの作業用のトレンチを設定した。トレンチの深さはIXa層であるNgの軽石層上面とした。トレンチの底としたIXa層上面でロームの平面形が確認され、覆土には混入物を含まないロームの土層が存在することを確認した。

半載した段階で、土坑墓であることが想定されたため、セクション面で試料を採取し、リン酸・カルシウムの含有量に関する土壌理化学分析を行った（VI章2節）。試料採取後、北半部のメインセクションベルト部分を南半部と同レベルまで掘り下げた後、北半部覆土を掘り下げた。土層15上面で不明瞭な焼土を検出した。焼土周辺では肉眼で焼骨片が確認できたため、土壌ごと採取してフローテーション処理を行ったところ、多数の炭化材片と、鳥類・魚類の焼骨片が検出された（VI章2節、VII章5節）。また、この炭化材を試料として放射性炭素年代測定を行った（VI章1節）。坑底から、小ピット状の窪みが検出された。

**覆土** 23層に分層した。大きく以下のように分けられる。

- ① 土層1～3 造成土に類似した土層。流れ込みの可能性がある。
- ② 土層4・5 混入物の多い黒褐色～暗褐色土。
- ③ 土層6～8 主にローム主体で、縦方向に堆積する土層。
- ④ 土層9～12・15・16・18・20 混入物の多い黒～黒褐色土。土層9と土層12は同一内容。
- ⑤ 土層13・14・17・19 混入物を含まないKo-gおよびローム。
- ⑥ 土層21～23 坑底付近を覆うロームおよびNg火山灰主体層。

②～⑥では、混入物の多い黒～黒褐色の土層と、混入物を含まないロームやKo-gの層が互層をなしており、埋め戻しと考えられる。

土層14・17は混入物を含まないロームである。IX層を掘り込んでいる部分では明瞭に確認できるが、VII層を掘り込んでいる部分では、わずかに遺構覆土のほうがしまりが弱い程度の差異しかなく、ほとんど区別できない。また、土層15上面の焼土は他から持ち込まれたものと推測される。

なお、遺物の取り上げ層位は、「覆土1」（土層1～3）、「覆土2」（土層4・5）、「覆土3」（土層7・8）、「覆土4」（土層9以下）である。

**構造** 隅丸長方形のフラスコ状土坑である。坑底は、VII層およびIXa層を掘り抜き、IXb層中に構築されている。IXb層が火山灰層であるためやや不安定だが、非常に平坦である。立ち上がりは急で、壁はオーバーハングし、坑口付近でやや開く。坑口は不整な隅丸長方形で、東側は崩落した可能性がある。坑底で小ピット状の窪みが検出された。覆土は土坑自体の覆土から続くものであったため、柱穴などではなく、土坑と同時に埋められたものと考えられる。また、土層14・15は壁に貼り付くように堆積している混入物を含まないロームであること、これらに続く15層上面から焼土が検出されたことから、埋め戻しの過程で意図的に、土層14を壁、土層15上面を坑底とする土坑状の形態に整形された

可能性がある。これを想定した場合の平面図を図IV-70上段右端に示した。

**遺物出土状況** 土器101点(Ⅲ群A類13点、Ⅳ群A類88点)、石器10点(石鏃1点、スクレイパー1点、Rフレイク1点、フレイク4点、敲石1点、台石・石皿2点)、礫・礫片18点、計129点が覆土から出土している。台石・石皿と礫の一部以外は埋め戻し時の混入と思われる。人頭程度の礫は、主に土層10~17から出土している。また11の石皿は、土坑上部の壁際から、使用面を内側に向け、壁に立てかけられたような状態で出土した。埋め戻しの過程で形成された「土坑」に伴う可能性がある。

#### 掲載遺物

**土器** 6点図示した。いずれも覆土から出土したもので、包含層と接合したものもある。1はⅢ群A-2類、2~6はⅣ群A類。

1は突起部の破片で、つまみ状の貼付と貫通孔が施される。丸形の口唇直下に沿うように粘土紐が貼付され、口唇端部から粘土紐にかけて斜位・波状の貼付が加えられる。突起下に粘土紐と擦糸圧痕による文様が施されるようである。貼付には擦糸圧痕が加えられる。周辺包含層から突起部を含む未接合破片が多く出土している。

2~4は沈線が施されるもの。2は覆土から出土した1点と主に周辺包含層のものとは接合した。30mほど離れた包含層P9・11区のものとも接合している。折り返し口縁で、折り返し部に沈線が加えられる。口唇は角形、突起には縦位の棒状貼付が加えられる。文様は2本組の沈線で描かれ、突起から垂下する沈線間が弧状の沈線で結ばれる。3は覆土から出土した1点と主に周辺包含層が接合した。25mほど離れた包含層N12区のものとも接合しており、同一個体であるが未接合の破片はさらに広範囲から出土している。壺形土器の口縁部と胴部。無文地に、横位に展開する波状沈線が描かれる。4は口縁部付近で、縄文地に縦位の蛇行沈線が描かれる。5は口縁部で、縄文地に並行沈線とそれを縦断する蛇行沈線が描かれ、斜位の平行沈線もみられる。6は無文の鉢形土器。口縁がやや内湾する。

(柳瀬)

**石器** 5点を図示した。出土層位は7が「覆土2」、8・10が「覆土5」、9が「覆土4」、11が「覆土3」である。石材は7~9が頁岩、10・11が安山岩である。

7は石鏃である。三角形有茎で、カエシが明瞭である。

8はスクレイパーである。背面側両側縁にやや不規則な調整を加えている。腹面側左側縁には部分的に剝離が認められ、側縁は不整な波形となっている。

9はRフレイクである。背腹両面の側面と打面側に粗い剝離が認められる。石核の可能性もある。

10は敲石である。楕円形礫の長軸両端に敲打痕が観察される。

11は台石・石皿である。扁平礫の平坦面に浅く凹んだ楕円形すり面が観察される。すり面は左側縁に近接し、すり面の側縁側は緩やかに縁辺に続き、反対の中央部側は、比較的明瞭な立ち上がりを見せる。すり面長軸は左側縁に対しおおよそ直角方向である。

(坂本)

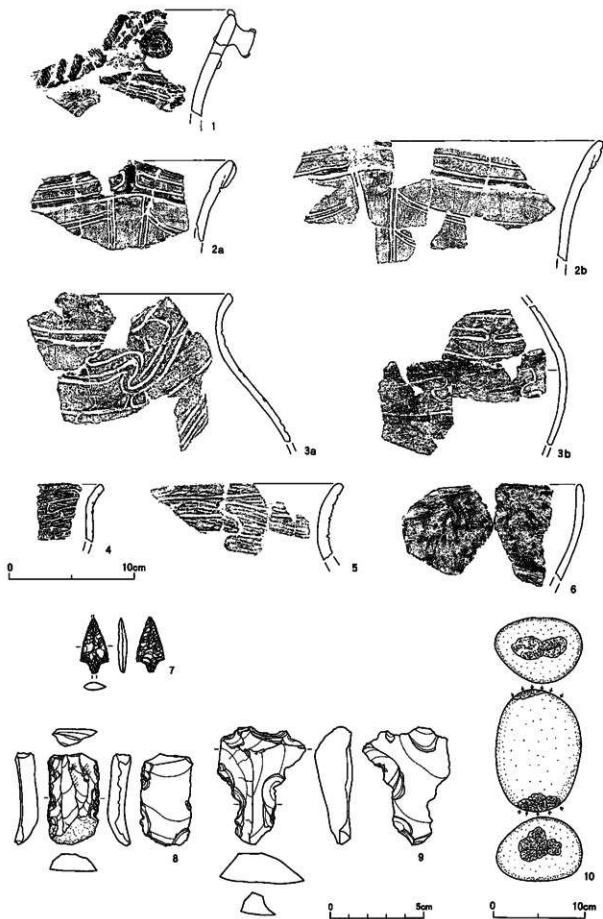
**時期** 出土遺物から縄文時代後期前葉、覆土が埋め戻しであることなどから土坑墓と考えられる。覆土の状況から、埋め戻し際に再び土坑として整形された可能性がある。なお、土層15上面の焼土から採取した炭化物を試料とした放射性炭素年代測定では、補正年代で3630±40yBPの値が得られた。

(柳瀬)

P-52 (図IV-72)

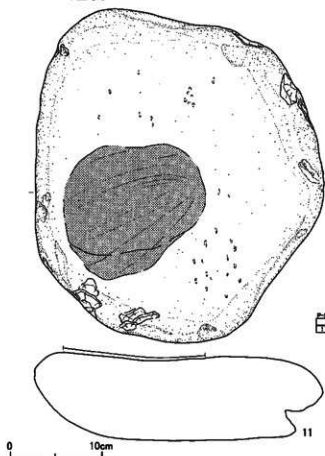
**位置** H13 規模 (0.65/0.57)×(0.50/0.35)×0.13 平面形態 楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近南側に位置する。SP-27と重複し、こ

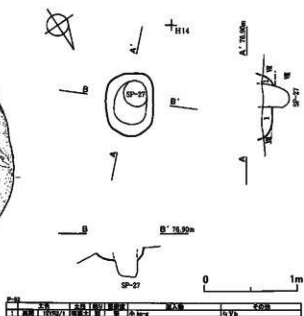


図IV-71 P-51 (2)

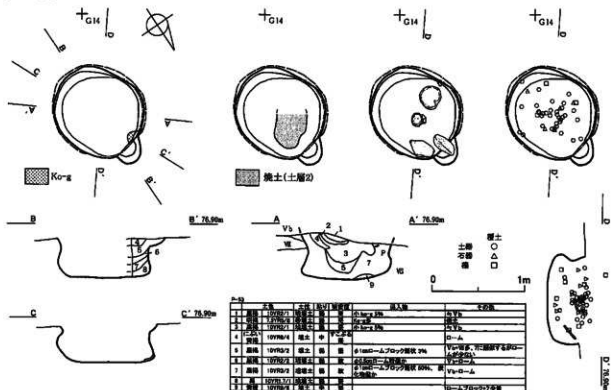
P-51の遺物



P-52



P-53



図番	品名	年代	出土層	出土位置	出土状況	出土層	出土位置
1	土器	1979/1	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
2	土器	1979/2	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
3	土器	1979/3	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
4	土器	1979/4	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
5	土器	1979/5	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
6	土器	1979/6	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
7	土器	1979/7	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
8	土器	1979/8	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層
9	土器	1979/9	土層	20m x 30m	土層	20m x 30m	土層

図IV-72 P-51 (3)・52・53 (1)

れより古い。

**確認・調査** VII層上面で、黒褐色土のまとまりとしてSP-27とともに検出した。当初1基の土坑と想定し半載したところ、SP-17に切られる土坑と確認した。

**覆土** Vb層に類似しており、自然堆積と思われる。

**構造** 楕円形の皿状の土坑。坑底はVIII層をわずかに掘り込んで構築されており平坦。立ち上がりは緩やかで、壁は開く。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性がある。(柳瀬)

P-53 (図IV-72・73、図版21・45・76・101)

**位置** G13・14 規模 (0.98/0.83)×(0.85/0.79)×0.50 平面形態 楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、西寄り南端に位置する。

**確認・調査** VII～VIII層上面で、ローム・焼土層を含む黒褐色土のまとまりとして検出。黒褐色土範囲の北側には、扁平な円形の礫が立っていた。土坑を想定して半載し、土坑と確認した。断面の記録後、完掘作業中に立石の下位付近で、セクション面では見られなかった湿入物を含まない土層8が検出された。遺体層の可能性を想定し、試料を採取してリン酸・カルシウム含有量に関する土壌理化学分析を行った(Ⅵ章2節)。さらに、この黒色土の下位で、坑底上に純粋なKo-gが検出された。橙色を意識し、意図的に置かれたものと考えられる。

**覆土** 9層に分層した。土層1は流れ込みの可能性があるが、土層2以下は埋め戻しと考えられる。主に黒褐色土からなり、断面図B-B'では湿入物の多い土層と少ない土層が互層をなしている。上層では焼土・ロームがそれぞれ層状に堆積している。焼土はKo-g主体層が焼けたもので、これに覆われて出土した土器底部が二次焼成を受けていないことから、他から持ち込まれたものと考えられる。ロームは白色味が強く、VIII層とは異なるものと推測される。いずれも意図的に堆積されたものと考えられる。遺物の取り上げ層位は、「覆土1」(土層1)、「覆土2」(土層2)、「覆土3」(土層3)、「覆土4」(土層5以下)である。なお、焼土層を採取しフローテーション処理を行ったところ、多数の炭化材片とサクと思われる椎骨片が検出された(Ⅵ章2節、Ⅶ章5節)。またこの炭化材を試料として、放射性炭素年代測定を行った(Ⅵ章1節)。

**構造** 楕円形を呈し、坑口に立石を伴うフラスコ状土坑。坑底はVIII層中に構築され、やや丸みがある。立ち上がりは緩やかで丸みがある部分が多く、壁はおおむねオーバーハングし、坑口付近で開く。全体に不均整な形態である。北側に浅い張り出しが検出され、立石を設置するためのものと推測される。立石は張り出しの西側に沿うように設置される。

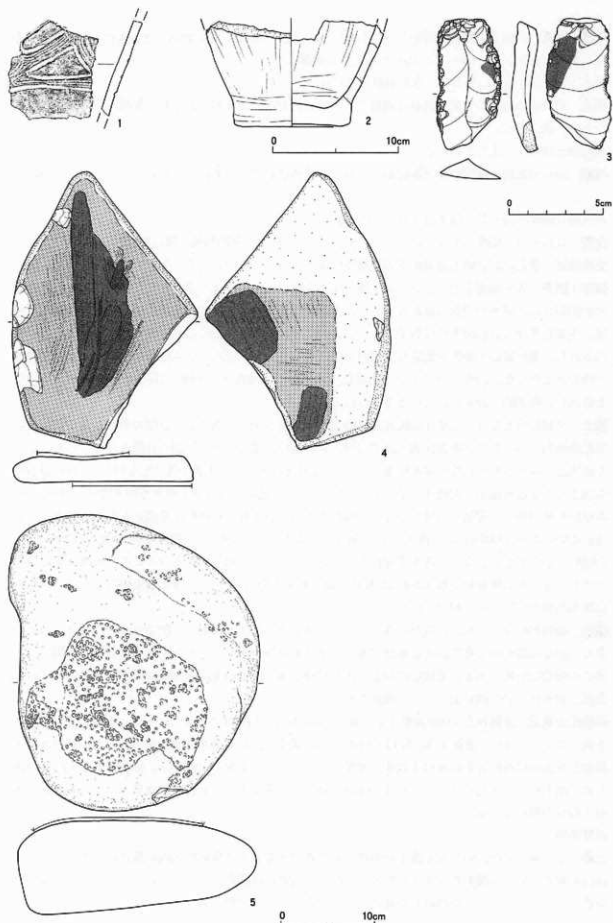
**遺物出土状況** 土器70点(Ⅲ群A類1点、Ⅳ群A類69点)、石器10点(スクレイパー1点、Rフレイク2点、フレイク5点、砥石1点、台石・石皿1点)、礫7点、計87点が覆土から出土した。Ⅳ群A類土器のうち26点は底部付近のみの1個体(図IV-73-2)で、土層3上層から、焼土である土層2に覆われて出土した。スクレイパー(同3)・砥石(同4)・礫の1点は土層7から出土した。立石には台石・石皿を用いている。

**掲載遺物**

**土器** 2点図示した。いずれも覆土から出土したⅣ群A類。1は櫛歯状沈線が施されるもの。2は底部付近のみ。焼土に覆われて出土したもののだが、二次焼成は認められない。(柳瀬)

**石器** 3点を図示した。石材は3が頁岩、4が砂岩、5が安山岩である。





3はスクレイパーである。右側縁平面は外湾形を呈する。調整縁辺は鋭利である。背面の右側縁および腹面の両側縁に光沢が観察される。光沢は右側縁中央部付近に顕著である。背面側の光沢は、調整剝離面の外側に認められる。

4は砥石である。正面側は縦方向に走る線状痕・条痕が連なっており、中央部付近が最も凹んでいる。裏面側は平坦なすり面で、左側縁付近には顕著に平滑化した範囲が認められる。

5は台石・石皿である。扁平稜のやや膨らみを有す平面に、顕著な敲打痕がまとまって認められる。敲打痕は素材の平面部をほとんど覆う。 (坂本)

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉の遺構である。立石を伴うこと、覆土が埋め戻しであることと遺物の出土状況から、土坑墓と考えられる。なお、覆土上位の焼土から採取した炭化物を試料とした放射性炭素年代測定では、補正年代で3550±40yBPの値が得られた。 (柳瀬)

P-54 (図IV-74、図版22・76・102)

位置 F13・14 規模 (1.14/0.98)×(1.06/0.69)×0.66 平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面の縁に位置する。

確認・調査 F13区Ⅷ層上面で、F14区に続く黒色土のまとまりを検出した。F13・14区の境界に沿ってトレンチ調査を行ったところ、検出時の黒色土範囲よりも小さい土坑と確認した。トレンチに沿ったベルトを設定し、平面形の確認のためF14区を掘り下げたのち、半載して調査を行った。

覆土 主に混入物の多い黒色～暗褐色土からなり、Ko-gやローム主体層が部分的に見られる。埋め戻しと考えられる。a～dはいずれもVb層よりKo-gやロームを多く含んでおり、斜面堆積あるいは遺構掘り出しなどの二次堆積と考えられる。遺構集中範囲で見られる「造成土」とは分布が離れていることから、別の堆積物と考えられる。

構造 竪穴状の土坑。坑底はⅧ層中に構築されており、丸みを帯びる。立ち上がりは、東側はやや急、西側はやや緩やか。壁はやや開くが、西側ではオーバーハングする部分がある。周辺に見られる二次堆積土を切って構築されている。

遺物出土状況 土器31点(Ⅲ群A類27点、Ⅳ群A類4点)、石器1点(スクレイパー)、礫2点、計34点出土した。坑底から出土した礫2点以外は、覆土から出土したものである。坑底の礫2点は、被熱して赤化していた。

掲載遺物

土器 2点図示した。いずれも覆土から出土したⅢ群A類。1は底部近くの破片。上半に斜行縄文が施される。2は張り出しの強い底部破片。 (柳瀬)

石器 3はスクレイパーである。石材は頁岩である。調整縁辺は鋭利で、平面・側面形は直線的である。腹面側に微細剝離が不連続的に観察される。 (坂本)

時期 覆土から出土した遺物から、縄文時代後期前葉の可能性があるが、Ⅳ群A類土器のうち3点までが覆土上面付近からの出土であり、縄文時代中期前半の可能性もある。 (柳瀬)

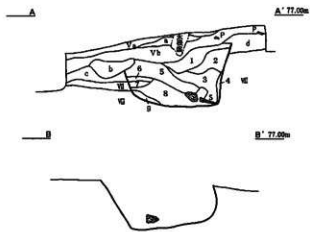
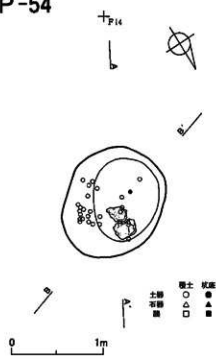
P-55 (図IV-74、図版77)

位置 I14 規模 (0.83/0.64)×(0.72/0.57)×0.51 平面形態 楕円形

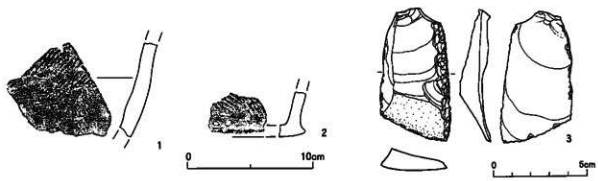
立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。SP-76との関係不明。

確認・調査 Vb層調査時に黒色土のまとまりとして確認。配石遺構の精査用に設定したベルトにかかっていたので、それに沿って半載した。

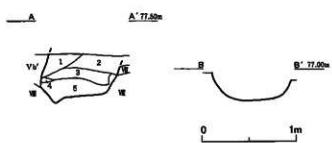
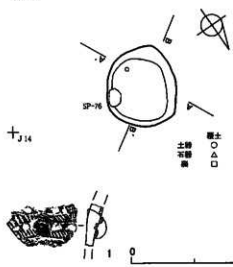
P-54



層	土名	土質	土層厚	土層底	土層頂	土層底	土層頂	土層底	土層頂
1	10192/1	硬土	0.5	77.00	77.05	77.00	77.05	77.00	77.05
2	10192/2	硬土	0.5	77.05	77.10	77.05	77.10	77.05	77.10
3	10192/3	硬土	0.5	77.10	77.15	77.10	77.15	77.10	77.15
4	10192/4	硬土	0.5	77.15	77.20	77.15	77.20	77.15	77.20
5	10192/5	硬土	0.5	77.20	77.25	77.20	77.25	77.20	77.25
6	10192/6	硬土	0.5	77.25	77.30	77.25	77.30	77.25	77.30
7	10192/7	硬土	0.5	77.30	77.35	77.30	77.35	77.30	77.35
8	10192/8	硬土	0.5	77.35	77.40	77.35	77.40	77.35	77.40
9	10192/9	硬土	0.5	77.40	77.45	77.40	77.45	77.40	77.45
10	10192/10	硬土	0.5	77.45	77.50	77.45	77.50	77.45	77.50
11	10192/11	硬土	0.5	77.50	77.55	77.50	77.55	77.50	77.55
12	10192/12	硬土	0.5	77.55	77.60	77.55	77.60	77.55	77.60
13	10192/13	硬土	0.5	77.60	77.65	77.60	77.65	77.60	77.65
14	10192/14	硬土	0.5	77.65	77.70	77.65	77.70	77.65	77.70
15	10192/15	硬土	0.5	77.70	77.75	77.70	77.75	77.70	77.75
16	10192/16	硬土	0.5	77.75	77.80	77.75	77.80	77.75	77.80
17	10192/17	硬土	0.5	77.80	77.85	77.80	77.85	77.80	77.85
18	10192/18	硬土	0.5	77.85	77.90	77.85	77.90	77.85	77.90
19	10192/19	硬土	0.5	77.90	77.95	77.90	77.95	77.90	77.95
20	10192/20	硬土	0.5	77.95	78.00	77.95	78.00	77.95	78.00



P-55



層	土名	土質	土層厚	土層底	土層頂	土層底	土層頂	土層底	土層頂
1	10193/1	硬土	0.5	77.50	77.55	77.50	77.55	77.50	77.55
2	10193/2	硬土	0.5	77.55	77.60	77.55	77.60	77.55	77.60
3	10193/3	硬土	0.5	77.60	77.65	77.60	77.65	77.60	77.65
4	10193/4	硬土	0.5	77.65	77.70	77.65	77.70	77.65	77.70
5	10193/5	硬土	0.5	77.70	77.75	77.70	77.75	77.70	77.75
6	10193/6	硬土	0.5	77.75	77.80	77.75	77.80	77.75	77.80
7	10193/7	硬土	0.5	77.80	77.85	77.80	77.85	77.80	77.85
8	10193/8	硬土	0.5	77.85	77.90	77.85	77.90	77.85	77.90
9	10193/9	硬土	0.5	77.90	77.95	77.90	77.95	77.90	77.95
10	10193/10	硬土	0.5	77.95	78.00	77.95	78.00	77.95	78.00
11	10193/11	硬土	0.5	78.00	78.05	78.00	78.05	78.00	78.05
12	10193/12	硬土	0.5	78.05	78.10	78.05	78.10	78.05	78.10
13	10193/13	硬土	0.5	78.10	78.15	78.10	78.15	78.10	78.15
14	10193/14	硬土	0.5	78.15	78.20	78.15	78.20	78.15	78.20
15	10193/15	硬土	0.5	78.20	78.25	78.20	78.25	78.20	78.25
16	10193/16	硬土	0.5	78.25	78.30	78.25	78.30	78.25	78.30
17	10193/17	硬土	0.5	78.30	78.35	78.30	78.35	78.30	78.35
18	10193/18	硬土	0.5	78.35	78.40	78.35	78.40	78.35	78.40
19	10193/19	硬土	0.5	78.40	78.45	78.40	78.45	78.40	78.45
20	10193/20	硬土	0.5	78.45	78.50	78.45	78.50	78.45	78.50
21	10193/21	硬土	0.5	78.50	78.55	78.50	78.55	78.50	78.55
22	10193/22	硬土	0.5	78.55	78.60	78.55	78.60	78.55	78.60
23	10193/23	硬土	0.5	78.60	78.65	78.60	78.65	78.60	78.65
24	10193/24	硬土	0.5	78.65	78.70	78.65	78.70	78.65	78.70
25	10193/25	硬土	0.5	78.70	78.75	78.70	78.75	78.70	78.75
26	10193/26	硬土	0.5	78.75	78.80	78.75	78.80	78.75	78.80
27	10193/27	硬土	0.5	78.80	78.85	78.80	78.85	78.80	78.85
28	10193/28	硬土	0.5	78.85	78.90	78.85	78.90	78.85	78.90
29	10193/29	硬土	0.5	78.90	78.95	78.90	78.95	78.90	78.95
30	10193/30	硬土	0.5	78.95	79.00	78.95	79.00	78.95	79.00
31	10193/31	硬土	0.5	79.00	79.05	79.00	79.05	79.00	79.05
32	10193/32	硬土	0.5	79.05	79.10	79.05	79.10	79.05	79.10
33	10193/33	硬土	0.5	79.10	79.15	79.10	79.15	79.10	79.15
34	10193/34	硬土	0.5	79.15	79.20	79.15	79.20	79.15	79.20
35	10193/35	硬土	0.5	79.20	79.25	79.20	79.25	79.20	79.25
36	10193/36	硬土	0.5	79.25	79.30	79.25	79.30	79.25	79.30
37	10193/37	硬土	0.5	79.30	79.35	79.30	79.35	79.30	79.35
38	10193/38	硬土	0.5	79.35	79.40	79.35	79.40	79.35	79.40
39	10193/39	硬土	0.5	79.40	79.45	79.40	79.45	79.40	79.45
40	10193/40	硬土	0.5	79.45	79.50	79.45	79.50	79.45	79.50
41	10193/41	硬土	0.5	79.50	79.55	79.50	79.55	79.50	79.55
42	10193/42	硬土	0.5	79.55	79.60	79.55	79.60	79.55	79.60
43	10193/43	硬土	0.5	79.60	79.65	79.60	79.65	79.60	79.65
44	10193/44	硬土	0.5	79.65	79.70	79.65	79.70	79.65	79.70
45	10193/45	硬土	0.5	79.70	79.75	79.70	79.75	79.70	79.75
46	10193/46	硬土	0.5	79.75	79.80	79.75	79.80	79.75	79.80
47	10193/47	硬土	0.5	79.80	79.85	79.80	79.85	79.80	79.85
48	10193/48	硬土	0.5	79.85	79.90	79.85	79.90	79.85	79.90
49	10193/49	硬土	0.5	79.90	79.95	79.90	79.95	79.90	79.95
50	10193/50	硬土	0.5	79.95	80.00	79.95	80.00	79.95	80.00

図IV-74 P-54・55

**覆土** 配石に伴う造成土の下位に、黒色のしまりの弱い土層が堆積していた。

**構造** 坑底はほぼ平坦で、壁は曲線を描きながら立ち上がる。

**遺物出土状況** Vb層よりⅢ群A類の土器1点が出土している。(福井)

**掲載遺物**

**土器** 1はVb層から出土したⅢ群A-2類。突起部の破片で、貫通孔、捺糸圧痕の加えられる粘土紐・円形貼付、竹管状工具の刺突が施される。(柳瀬)

**時期** 出土した遺物は縄文時代中期前半だが、周囲の遺構の時期から後期前葉の土坑とみられる。

(福井)

#### P-56 (図IV-75)

**位置** J13 規模  $(1.02/0.41) \times (0.75/0.27) \times 0.41$  平面形態 楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。SP-69との新旧関係は捉えられなかった。

**確認・調査** VI層上面で黒色土のまとまりとして確認。配石遺構の精査用に設定したベルトにかかっていたので、それに沿って半載した。

**覆土** 土層1・2・5は配石に伴う造成土に類似する。土層3及び土層4の上部にはロームブロックが見られ、その下位は堅く、人為堆積の可能性がある。

**構造** 小柱穴状の掘り込みと浅皿状の掘り込みからなる。

**遺物出土状況** 覆土より礫が1点出土している。

**時期** 周囲の遺構の遺物から縄文時代後期前葉の土坑とみられる。(福井)

#### P-57 (図IV-75)

**位置** G14 規模  $((0.81)/0.40) \times (0.92/0.26) \times 0.44$  平面形態 円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近南寄りに位置する。

**確認・調査** VII層上面で、黒～黒褐色土の不明瞭なまとまりとして検出。土坑を想定して、セクション面を設定した後、南半部を10cmほど掘り下げて平面形を確認した後、半載した。

**覆土** 主にKo-gが多く混入する黒～褐色土からなる。ほぼ純粋なKo-gからなる土層4が上位にあることから、埋め戻しと考えられる。

**構造** 椀状の土坑。坑底はVIII層中に構築され小さく平坦。立ち上がりは緩やかで、壁は直線的な部分が多く、開く。東側にやや段がある。南半部は掘り下げてあるが、本来的には坑口も円形を呈するものと考えられる。

**遺物出土状況** 出土していない。

**時期** 周囲の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性がある。(柳瀬)

#### P-58 (図IV-75)

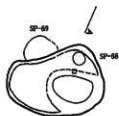
**位置** H13 規模  $(1.10/1.04) \times (0.97/0.89) \times 0.21$  平面形態 楕円形

**立地地形** 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、南東寄りに位置する。

**確認・調査** 造成土調査後のVIII層上面で、黄褐色土のまとまりとして、隣接するP-77などとともに検出した。土坑と想定して半載したところ、地形に沿って傾斜する坑底を検出した。VIII層との境界が明瞭であること、覆土が基本土層とは異なることから、土坑と判断した。

P-56

+J13



礎土  
土層  
石層  
溝

○  
△  
□

A A' 77.00m

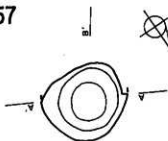


0 1m

P-56

層	土質	土層	厚さ	特徴	取土層	取土層
1	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
2	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
3	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
4	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
5	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
6	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m

P-57



A' 77.10m B' 77.10m



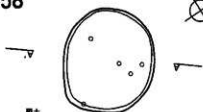
0 1m

+H15

P-57

層	土質	土層	厚さ	特徴	取土層	取土層
1	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
2	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
3	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
4	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
5	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
6	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
7	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m

P-58



A A' 77.00m



0 1m

礎土  
土層  
石層  
溝

○  
△  
□

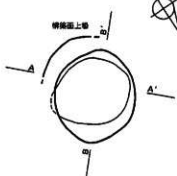
+I14

P-58

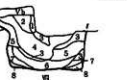
層	土質	土層	厚さ	特徴	取土層	取土層
1	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
2	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m

P-59

+F17



A A' 78.30m



B' 78.20m

0 1m

P-59

層	土質	土層	厚さ	特徴	取土層	取土層
1	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
2	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
3	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
4	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
5	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
6	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
7	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m
8	10YR5/2	礎土	溝	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m	溝幅約1.5m

図IV-75 P-56・57・58・59

**覆土** ローム主体で、埋め戻しと考えられる。

**構造** 坑底はⅧ層中に構築され、やや傾斜するが平坦。立ち上がりは急で、壁はやや開く。

**遺物出土状況** 覆土から、土器7点(Ⅲ群A類3点、Ⅳ群A類4点)が出土している。

**時期** 覆土出土の遺物と、周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性がある。

(柳瀬)

P-59 (図Ⅳ-75、図版22)

**位置** F16・17 規模  $(0.99/0.60) \times (0.98/0.79) \times 0.54$  平面形態 円形

**立地地形** 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西端に位置している。P-22・27・28、F-6が隣接する。

**確認・調査** 調査区F16のⅧ層上面精査時に、暗褐色～黒褐色の円形のまとまりを検出した。半截掘削により、覆土堆積状況を確認して掘り下げた。坑底を検出し土坑であることを確認した。両側では構築面の一部を確認することができた。

**覆土** 8層に分層した。①～③の堆積単位にまとめられる。

① 上位の堆積。黒色土1・2層で構成される。自然堆積土と捉えられる。

② 中位～下位の堆積。暗褐色土Ko-g主体の3層と、黒褐色土4～6層で構成される。前者は壁などの崩落土、後者は人為的投げ込み土と捉えられ、投げ込みは3層を間に挟み、複数回おこなわれたと考えられる。

③ 下位、壁際の層。7・8層で構成される。坑底直上の壁際を巡るように分布する。壁崩落土、もしくは人為的に設置された可能性がある。

覆土の堆積過程は、次のように理解できる。坑底壁際にローム主体土が設置される、もしくは、壁が全体的に崩落する。人為的投げ込み土が複数回に渡り堆積する。その後、流入土などの自然堆積により土坑が埋没する。

**構造** フラスコ状土坑である。坑底は、ほぼ水平、平坦に作られている。壁は垂直もしくは急角度で立ち上がり、部分的にオーバーハングする。本来は壁全体がオーバーハングしていた可能性がある。

**遺物出土状況** 遺物は出土していない。

**時期** 構築面から縄文時代中～後期に作られたと推測される。焼土F-6より古いと判断できる。

(坂本)

P-60 (図Ⅳ-76)

**位置** F16 規模  $(1.26/0.84) \times (0.76/0.52) \times 0.26$  平面形態 楕円形

**立地地形** 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。P-61・62・74、S-4が隣接し、P-61とは切り合い関係を有する。

**確認・調査** 調査区F16のⅧ層掘削中に黒褐色～暗褐色の不整形プランを検出した。プランの長軸にベルトを設定し、Ⅷ層まで周囲を掘り下げ、複数の円形・楕円形プランを検出した。各プランに必要なベルトを補い、ベルト部分を残して掘削をおこなった。結果、土坑4基(P-60～62・74)を確認した。内、東側に位置する楕円形の土坑をP-60として認定した。

**覆土** 9層に分層した。図Ⅳ-76上段の土層断面図1の1～5層と、土層断面図3の1～5層がP-60覆土である。断面図1の5層と断面図3の1層は同一層である。覆土の堆積は①・②にまとめられる。

- ① 上位の堆積。断面図1の1～4層である。若干Ko-gが混じる黒褐色土で構成され、自然の流入土と考えられる。
- ② 中位から下位の堆積。断面図3の1～5層で構成される。ローム主体の土で、短時間でなされた人為的埋め戻し土と推測される。

構造 坑底は、ほぼ水平、平坦に作られている。壁は急角度で立ち上がる。

遺物出土状況 1層から被熱礫が1点出土している。

時期 P-61・62より新しいと判断できるため、縄文時代後期前葉以降と考えられる。 (坂本)

#### P-61 (図IV-76、図版22)

位置 F16 規模 (0.62/0.38)×(0.64/0.54)×0.40 平面形態 不整形円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。P-60・62・74、S-4が隣接し、P-60とは切り合い関係を有する。

確認・調査 調査区F16のVb層掘削中に黒褐色～暗褐色の不整形プランを検出した。プランの長軸にベルトを設定し、Ⅷ層まで周囲を掘り下げ、土坑4基(P-60～62・74)を確認した。内、中央部に位置する円形の土坑をP-61として認定した。

覆土 4層に分層した。土層断面図1の7・9～11が該当する。①・②の堆積単位にまとめられる。

- ① 上位の層。黒色土7層で構成される。P-61がP-74と同時に破壊された後に堆積した、自然堆積土と考えられる。
- ② 中～下位の層。灰黄褐色土9・10層、にぶい黄褐色土11層で構成される。短時間でなされた人為的埋め戻し土と考えられる。

構造 坑底は緩やかに窪んでいる。壁は比較的緩やかな立ち上がりである。

遺物出土状況 土坑中央部、坑底直上から、長さ30cmを越える大形礫が出土している。

時期 縄文時代後期前葉の可能性はある。P-60より古いと判断できる。 (坂本)

#### P-62 (図IV-76)

位置 F16 規模 (0.68/0.21)×(0.62/0.22)×0.64 平面形態 不整形円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。P-60・61・74、S-4が隣接し、P-60とは切り合い関係を有する。

確認・調査 調査区F16のVb層掘削中に黒褐色～暗褐色の不整形プランを検出した。プランの長軸にベルトを設定し、Ⅷ層まで周囲を掘り下げ、土坑4基(P-60～62・74)を確認した。内、北側に位置する円形の土坑をP-62として認定した。

覆土 6層に分層した。土層断面図1の6層、土層断面図2の1～6層がP-62覆土である。①～③の堆積単位にまとめられる。なお、断面図1の6層と断面図2の4層は同一層である。遺物取り上げ層位は「坑口」と「覆土」に分けた。土層の説明は断面図2を用いた。

- ① 上位の堆積。黒～黒褐色土1・2層で構成。Ko-gが若干混じる。自然堆積と考えられる。
  - ② 中位の堆積。黒褐色土3・4層で構成される。4層は写真で確認すると、径1～2cmのロームブロックが混じる土とKo-gが若干混じる土に分層でき、自然と人為の堆積があるとみられる。
  - ③ 下位の堆積。にぶい黄褐色～褐色土5・6層で構成。ローム主体土で、埋め戻し土と捉えられる。
- 構造 中場を持つ、柱穴状の土坑である。坑底は径20cmほどと狭く、壁は急角度に立ち上がる。南側に中場平坦面が広がり、坑口に向かいやや緩やかに立ち上がる。





遺物出土状況 1・2層から、礫とⅣ群A類土器が1点ずつ出土している。

時期 縄文時代後期前葉の柱穴と考えられる。P-60より古いと判断できる。

(坂本)

P-74 (図Ⅳ-76)

位置 F16 規模 (0.49/0.37)×(0.49/0.26)×0.14 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。P-60～62、S-4が隣接する。

確認・調査 調査区F16のⅤb層掘削中に黒褐色～暗褐色の不整形プランを検出した。プランの長軸にベルトを設定し、Ⅴ層まで周囲を掘り下げ土坑4基(P-60～62・74)を確認した。内、南側に位置する円形の土坑をP-74とした。

覆土 土層断面図1の8層が覆土である。ロームブロックが多く混じる土で、人為堆積と考えられる。

構造 坑底は平坦である。壁は比較的緩やかに立ち上がる。上部はP-61と同時期に破壊されたと考えられる。

遺物出土状況 覆土中からⅢ群A類土器1点、礫1点が出土している。

時期 縄文時代中期前半の可能性はある。

(坂本)

P-63 (図Ⅳ-76)

位置 G16 規模 (0.94/0.78)×(0.86/0.74)×0.30 平面形態 隅丸方形

立地地形 調査区南東側、無名の沢際の遺構集中区西側に位置する。P-64に隣接し、SP-32に切られている。

確認・調査 調査区G16でⅤ層上面において、黒褐色土のまとまりを確認した。SP-32を調査後、北側を半載した。

覆土 5層に分層された。Ⅴb層を起源とする炭化物・ローム粒が混入した黒色土系(1・2・4層)とⅤ層を起源とする黄褐色土系(3・5層)で、周囲の掘上土の流入による堆積と考えられる。

構造 坑底はⅤ層を約30cm掘り込み、平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。

遺物出土状況 覆土からⅢ群A類1点が出土している。

時期 周辺の遺構から縄文時代中期前半の可能性が強い。

(菊池)

P-64 (図Ⅳ-76)

位置 G16 規模 (0.78/0.72)×(0.70/0.60)×0.14 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢際の遺構集中区西側に位置する。P-63に隣接し、SP-32に切られている。

確認・調査 調査区G16でⅤ層上面において、黒褐色土のまとまりを確認した。SP-32を調査後、北側を半載した。

覆土 黒褐色土(1層)、黒色土(2層)、Ko-g(3層)の堆積である。1層は周囲の掘上土の流入による堆積、2・3層は崩落である。

構造 坑底はⅤ層を浅く掘り込み、東側にやや傾斜している。壁は急斜度で立ち上がる。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周辺の遺構より縄文時代中期前半の可能性が強い。

(菊池)

## P-66 (図IV-76)

位置 H16 規模  $(0.78/0.68) \times (0.76/0.66) \times 0.16$  平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢際の遺構集中区北側に位置する。

確認・調査 調査区H16でⅧ層上面において、黒色土のまとまりを確認し、北東側を半載した。

覆土 5層に分層される。下位よりローム粒が混入した黒褐色土(5層)・暗褐色土(4層)、中位にローム粒が混入したぶい黄褐色土(3層)、上位に暗褐色土(2層)・黒色土(1層)の堆積であり、周囲の掘土土の流入による堆積と考えられる。

構造 坑底はⅧ層を10~20cm掘り込み、ほぼ平坦である。壁は急斜度で立ち上がる。

遺物出土状況 覆土からⅣ群A類3点が出土した。

時期 出土遺物、周辺の遺構から縄文時代後期前葉と考えられる。(菊池)

## P-67 (図IV-77)

位置 I13 規模  $(1.17/1.09) \times ((0.64)/(0.44)) \times 0.19$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 Ⅷ層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う造成土と類似した土層が堆積しているが、硬い部分と軟らかい部分があり、自然堆積か、人為堆積か判別できなかった。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 覆土よりⅣ群A類の土器2点が出土している。

時期 縄文時代後期前葉の土坑とみられる。(福井)

## P-69 (図IV-77、図版77)

位置 H15 規模  $(1.12/0.62) \times (0.87/0.62) \times 0.50$  平面形態 不整形円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。H-10の床面内、南西壁際に位置する。

確認・調査 H-10の床面精査時に黒色土の円形のプランを検出した。半載掘削をおこない、覆土の堆積を確認しながら坑底を検出し、土坑であることを確認した。H-10覆土中からの掘り込みは確認できなかったが、H-10床面と同レベルのP-69覆土の堅密度は軟であった。そのため、同覆土がH-10の床面を形成していたとは考え難く、H-10廃絶後にP-69が構築されたと判断した。

覆土 5層に分層した。①・②の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は「覆土1」(1~3層)、「覆土2」(4~5層)に分けた。

① 上位の層。黒色土を主体とした1~3層で構成される。自然堆積土と考えられる。

② 中位~下位の層。暗褐色土4層で構成される。ロームブロックを多量に含有する土で、30cmを超える厚い堆積である。短期間でなされた人為的埋め戻し土と推測される。

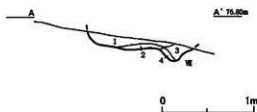
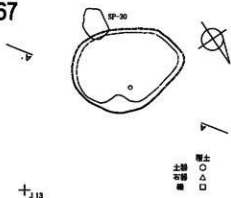
構造 ビーカー状の土坑でフラスコ状土坑に類する。坑底は平坦で、およそ水平である。壁は急角度で立ち上がり、上部で大きく広がる。

遺物出土状況 覆土1、覆土2上面でⅣ群A類の土器が2点出土している。また、覆土2からは両面調整石器が1点出土している。(坂本)

## 掲載遺物

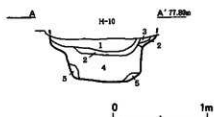
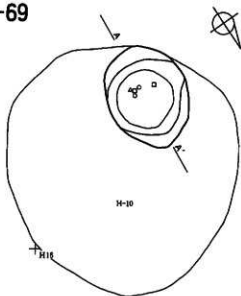
土器 1は無文の底部近くの破片。胎土には砂粒が非常に多い。H-10から同一個体が出土している

P-67



層	土質	厚さ	出土品	説明
1	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
2	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
3	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層

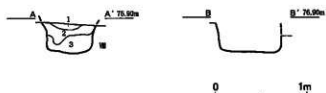
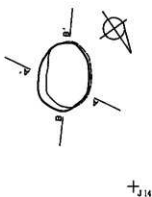
P-69



層	土質	厚さ	出土品	説明
1	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
2	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
3	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
4	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
5	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層

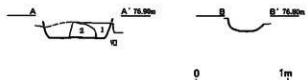
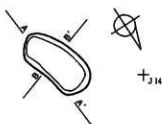


P-71



層	土質	厚さ	出土品	説明
1	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
2	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層

P-72



層	土質	厚さ	出土品	説明
1	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層
2	黄砂	約10cm	土器片	黄砂層

図IV-77 P-67・69・71・72

(図IV-33-2)。

(柳瀬)

時期 縄文時代後期前葉以降と考えられる。土坑墓の可能性はある。

(坂本)

P-71 (図IV-77)

位置 I 13 規模 (0.72/0.74)×(0.53/0.47)×0.30 平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 VII層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 ロームブロックを多く含む硬い土層で、人為堆積土とみられる。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 周囲の遺構の遺物から縄文時代後期前葉とみられる。

(福井)

P-72 (図IV-77)

位置 I・J13 規模 (0.81/0.71)×(0.38/0.29)×0.16 平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 VII層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う造成土と類似した土層が堆積しているが、堅く、人為堆積土の可能性はある。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 周囲の遺構の遺物から縄文時代後期前葉の土坑とみられる。

(福井)

P-70 (図IV-78、図版22・45・77・102)

位置 C・D19 規模 (0.64/0.75)×(0.58/0.72)×0.42 平面形態 円形

立地地形 調査区ほぼ中央の緩斜面上に位置する。H-5に近接する。

確認・調査 VII層まで掘り下げたところで土器が2/3個体ほどまとまって出土した。またその周囲に黒色土が円形に検出された。半載して断面を観察したところ、VII層が30cmほど掘り込まれ、底が平坦で壁も明瞭に立ち上がることから、人為的土坑と判断した。

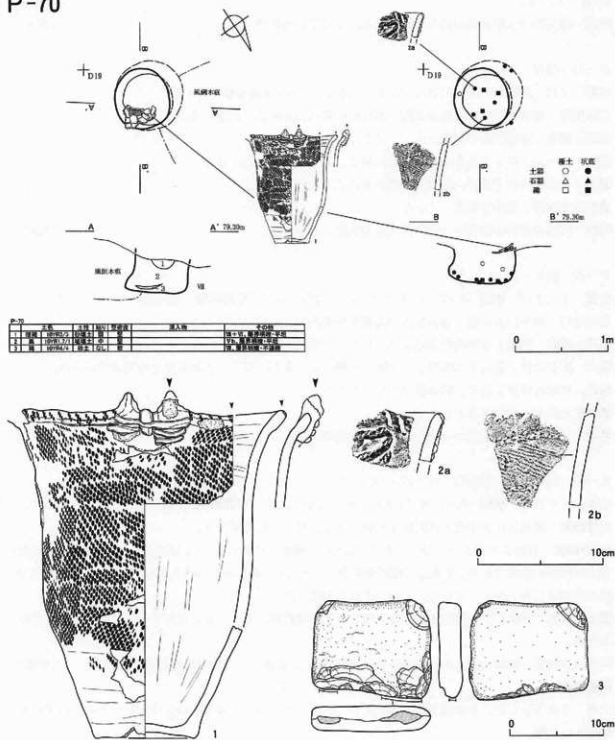
覆土 3層に分層した。黒色土主体の2層にVI・VII層起源の1・3層が混在する。埋め戻しの可能性がある。

遺物出土状況 坑底・覆土から土器91点(Ⅲ群A類)、石器1点(扁平打製石器)が出土。(新家)掲載遺物

土器 2点図示した。1は覆土からまとまって出土したもの、2は坑底から出土したもの。いずれもⅢ群A-2類。

1は突起周辺にのみ貼付が施されるもの。口縁付近の3/4ほどを欠失する。突起は1か所のみ残存。外傾する切出状の口唇には縄による線位の刻みが加えられる。胴部～底部にかけて磨耗が著しい。内面は底部以外全面に煤が付着する。2は突起付近に貼付が加えられるもの。H-8から同一個体が(図IV-29-2)、H-6から同一個体であるが未接合の破片が出土している。胎土が非常に脆く、拓影作成が不可能であった1点は写真のみ掲載した(図版77 2c)。貫通孔と、その周囲には縄の圧痕が加えられる粘土紐の貼付が施される。地文は結束第2種羽状縄文。2cは突起部の破片で、縄の圧痕が加えられる環状の貼付が施される。内面には、図IV-81-1に類似する貼付がある。(柳瀬)

P-70



図IV-78 P-70

石器 3は扁平打製石器である。石材は安山岩である。折断・敲打等により、長方形に整形している。下面中央部は内湾する調整縁辺で、両側がすり面となっている。(坂本)

時期 出土した遺物から縄文時代中期前半と思われる。(新家)

## P-75 (図IV-79)

位置 I・J11 規模  $((0.66)/(0.50)) \times (0.60/0.41) \times 0.20$  平面形態 楕円形  
立地地形 無名の沢に続く急斜面上に位置する。

確認・調査 I11のⅧ層を調査後、J11のⅦ層を下げた際、Ⅷ層上面で、数点の遺物と黒褐色の円形のプランが検出された。I11はこれより先にⅧ層最終面まで下げてしまっており、プランの南西部分を欠いてしまった。断面観察により立ち上がりを確認し、人為的な土坑と判断した。

覆土 黒褐色土主体の1層。掘り込み面は上部を殆ど掘り下げてしまったため判別できなかった。

遺物出土状況 覆土から土器6点(Ⅲ群A類3点、Ⅳ群A類3点)、石器2点(スクレイパー1点、北海道式石冠1点)、礫2点が出土している。

時期 出土遺物や周辺の遺構・遺物から、縄文時代中期前半～後期前葉と考えられる。(新家)

## P-76 (図IV-79、図版77・102)

位置 J14 規模  $((0.66)/(0.60)) \times (0.64/0.55) \times 0.20$  平面形態 楕円形  
立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。P-26より古い。

確認・調査 Ⅷ層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う造成土が堆積しているが、硬く、人為堆積土の可能性はある。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 土器2点(Ⅲ群A類1点、Ⅳ群A類1点)、石器1点(石鏃)が覆土から出土した。(福井)

## 掲載遺物

土器 1は覆土から出土したⅣ群A類。小形で、無文の底部破片。(柳瀬)

石器 2は石鏃である。石材は頁岩である。長身細身の三角形有茎のものである。(坂本)

時期 縄文時代後期前葉の土坑とみられる。(福井)

## P-77 (図IV-79)

位置 H14 規模  $(0.70/0.64) \times ((0.44)/(0.40)) \times 0.12$  平面形態 楕円形?  
立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、南東寄りに位置する。P-35と重複し、これより古い。

確認・調査 造成土調査後のⅧ層上面で黄褐色土のまとまりとして、隣接するP-58などともに検出した。土坑と想定して半載し、調査を行った。

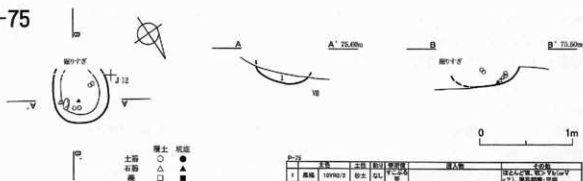
覆土 ローム主体の1層である。埋め戻しと考えられる。

構造 坑底付近のみの検出で、かつP-35に切られている。楕円形あるいは円形を呈する竪穴状の土坑と思われる。坑底はⅧ層中に構築されており、平坦。立ち上がりはやや急。

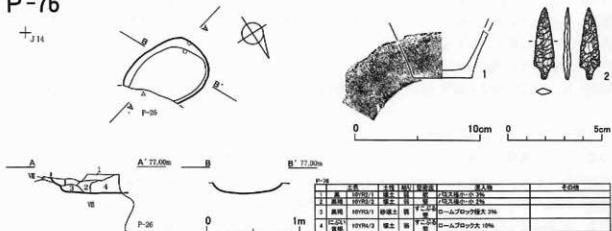
遺物出土状況 出土していない。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性はある。(柳瀬)

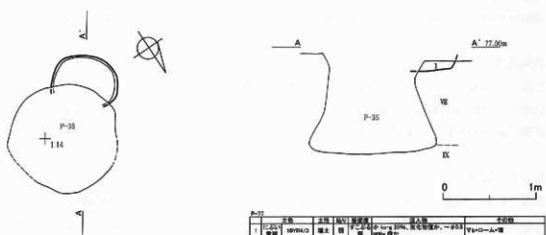
P-75



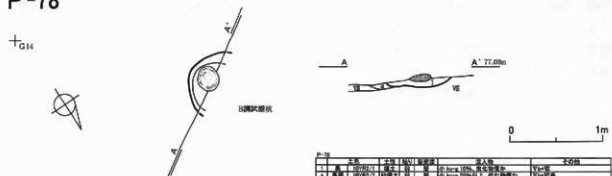
P-76



P-77



P-78



図IV-79 P-75・76・77・78

## P-78 (図IV-79)

位置 G14 規模  $((0.70)/(0.51)) \times (-/-) \times 0.11$  平面形態 不明

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、南西寄りに位置する。

確認・調査 VII層下位～VIII層上面で検出した。西側をB調査時の試掘坑に切られていたため、その壁面をセクション面とした。掘り込みがVIII層上面までであること、覆土がVb層に類似することから自然地形である可能性もあるが、坑底付近にあたる検出面で扁平礫が水平に出土したことから、土坑と認定した。

覆土 Vb層に類似する1層。

構造 坑底はVIII層上面に構築されている。

遺物出土状況 坑底付近にあたる検出面から、礫が1点出土している。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性がある。 (柳瀬)

## P-79 (図IV-80)

位置 H14 規模  $(0.68/0.61) \times (0.56/0.49) \times 0.08$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、中央付近に位置する。

確認・調査 VIII層上面でSP-127とともに検出した。当初1基の土坑を想定して半載したところ、SP-127に切られることを確認した。

覆土 ロームの混入が多く、埋め戻しと考えられる。

構造 坑底はVIII層上面に構築され、平坦である。

遺物出土状況 出土していない。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の可能性がある。 (柳瀬)

## P-84 (図IV-80、図版23)

位置 I・J13 規模  $(0.65/0.54) \times (0.46/0.36) \times 0.18$  平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 VIII層上面で黒色土のまとまりとして確認。

覆土 配石に伴う硬い造成土が堆積しており、人為堆積土の可能性がある。

構造 坑底はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

時期 周囲の遺構の遺物から縄文時代後期前葉の土坑とみられる。 (福井)

## P-87 (図IV-80～82、図版23・45・46・77・102)

位置 C21、C・D22 規模  $(1.66/1.46) \times (1.02/1.00) \times 0.54$  平面形態 楕円形

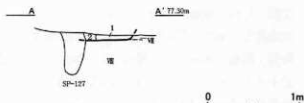
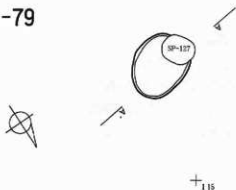
立地地形 調査区南西側の平坦面、H-6の覆土中に位置する。

確認・調査 H-6調査中、床面に黒色土の長径1m以上の楕円形のプランを検出した。半載して断面を観察した結果、H-6の床面を50cm程掘り込んで作られた土坑であることがわかった。またP-87の坑底面からH-6のものと思われる柱穴様の小ピットが1基検出された(HP-19)。

覆土 12層に分層した。1・2層はH-6の覆土8・11層と同層と考えられる。5層の焼土はH-6の炉の焼土が混ざり込んだものかもしれない。また、微量の炭化物が9層下と12層下に薄く筋状に入っているのが見られた。土層観察の結果P-87は、H-6の廃棄後H-6が埋没する前に床面を掘り込

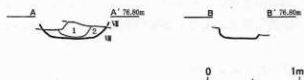
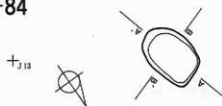


P-79



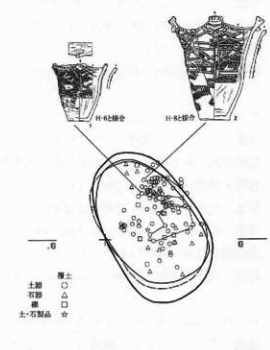
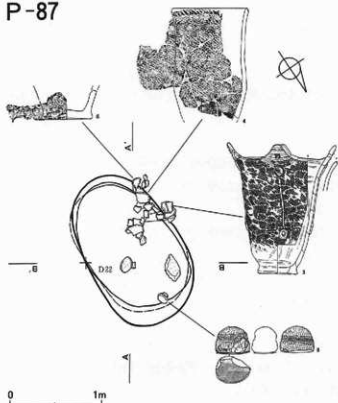
P-79		土層	土質	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚
1	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
2	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱

P-84



P-84		土層	土質	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚
1	表層	10YR5/2	砂壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
2	底層	10YR5/2	砂壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱

P-87



厚土 ○  
 土層 △  
 石跡 □  
 土-石製品 ☆

P-87		土層	土質	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚	層位	層厚
1	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
2	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
3	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
4	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
5	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
6	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
7	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
8	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
9	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
10	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
11	表層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱
12	底層	10YR5/2	壤土	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱	弱

図IV-80 P-79・84・87(1)

んで構築されたと思われる。

**遺物出土状況** 土器199点(Ⅲ群A類)、焼成粘土塊2点、石器15点(石槍1点、ピエス・エスキュー1点、フレイク8点、敲石2点、扁平打製石器1点、北海道式石冠1点、台石・石皿1点)、礫13点が出土している。図示した土器のほとんどは覆土の上位から出土したのもや、H-6の床面から取り上げたもので、P-87が埋没する際にまとまって流れ込んだ可能性もある。(新家)

#### 掲載遺物

**土器** 6点図示した。いずれも覆土から出土したもので、近接・重複するH-5・6・8の破片と接合したのもある。すべてⅢ群A-3類。覆土の上・中・下位にわたって接合している。

1～3は粘土紐による文様が施されるもの。いずれも縄文地に粘土紐が貼付される。1は粘土紐に縄線が加えられるもの。覆土中～下位と、H-6床面および覆土のものが接合した。突起内面には横丁字形の貼付が施される。丸形の口唇には縄による縄の刻みが加えられる。胴部には粘土紐による弧状の文様が施され、縄線が加えられる。胎土には海綿骨針が含まれる。

2・3は粘土紐が無文のもの。2は覆土上～中位とH-8床面のまとまりが接合した。上面が円形を呈する棒状突起をもつ。突起上面は中央を窪めて環状に整形され、周縁に捺糸圧痕が加えられる。突起下には横位の貼付が施され、無文のものに捺糸圧痕が加えられるものがある。外傾する切出状の口唇に、捺糸による縦位の刻みが加えられる。3は覆土上～中位とH-6覆土のものが接合した。突起下に垂下する貼付が施されるもの。突起は山形で、半截竹管状工具による貫通孔がある。5条ほどの横位の粘土紐が剥落した痕跡があり、貼付の際についたものと思われる爪の圧痕がみられる。丸形の口唇には縄による斜位の刻みが施される。突起下に垂下する粘土紐の上下端には環状貼付が加えられる。粘土紐には縄線が加えられるものと無文のものがある。底部は張り出しが大きい。

4・5は縄文のみのも。4は覆土上位のまとまりと、H-5・6覆土のものが接合した。胴部下半がやや張り出す器形。外傾する切出状の口唇に縄の斜位の刻みが加えられる。口縁部は結束羽状縄文、胴部は斜行縄文。5は丸形の口唇外面直下に捺糸の斜位の刻みが加えられる。

6は張り出しの明瞭な底部破片。なお、覆土出土の焼成粘土塊としたものは、H-6のものなどと同様、軽石等の可能性がある。(柳瀬)

**石器** 3点を図示した。石材は7が玄武岩、8・9が安山岩である。

7は石槍である。尖頭部側が欠損している。調整はやや粗雑で、側縁は波形となっている。H-6出土の石槍(図IV-29-4)と同一母岩である。

8は扁平打製石器である。器体の半分ほどが欠損している。縁辺調整により、下端部の厚みを大きく減じており、すり面は幅が狭く細長いものとなっている。

9は北海道式石冠である。長幅に対し厚さが大きく、すり面幅も広い。すり面は若干裏面側に傾いている。正面側右側縁下端が、下方からの加撃により大きく剝離している。(坂本)

**時期** 掘り込み面および出土遺物から、縄文時代中期前半と考えられる。(新家)

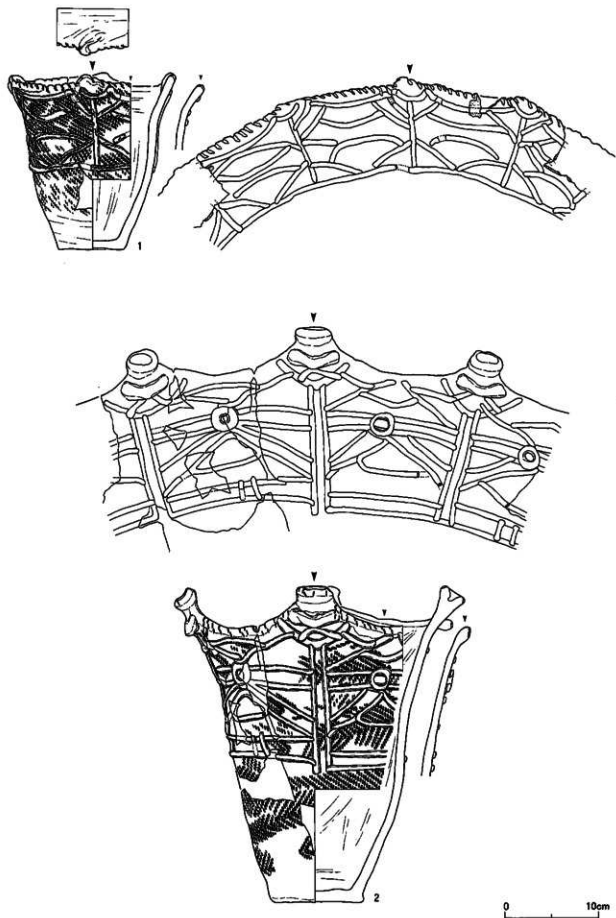
#### P-88 (図IV-83)

**位置** I36 **規模** (0.70/0.50)×(0.64/0.47)×0.35 **平面形態** 円形

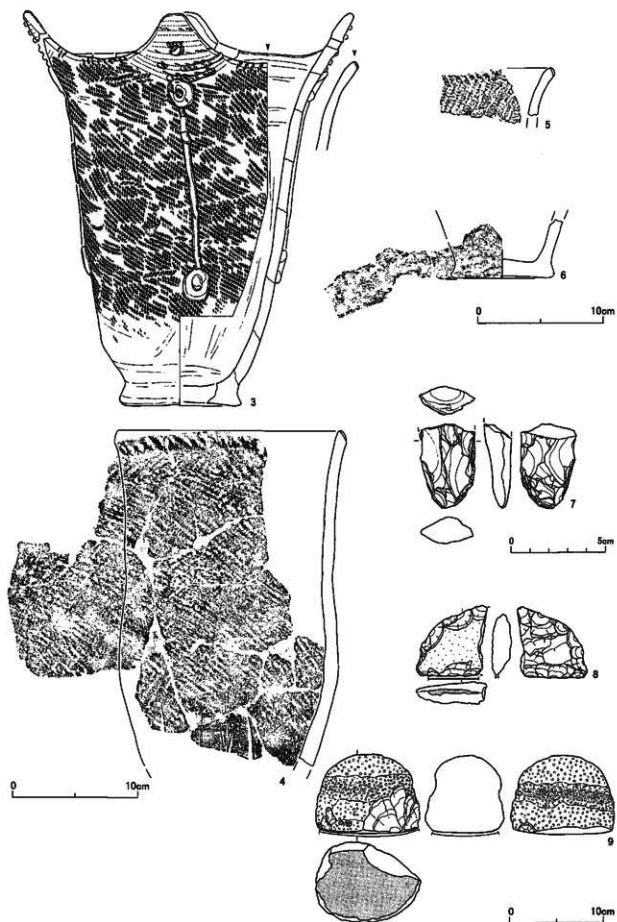
**立地地形** 調査区中央よりやや倉知川寄りの緩斜面上に位置する。

**確認・調査** Ⅶ層を調査後、Ⅷ層上面に黒～暗褐色の径50cm強の円形プランを確認。半載して断面観察したところ、Ⅷ層を30cmほど掘り込んだ土坑であるとわかった。

**覆土** 5層に分層した。いずれもⅤ・Ⅶ層が起源である。



圖IV-81 P-87 (2)



図IV-82 P-87 (3)

遺物出土状況 坑底から礫が1点出土している。

時期 縄文時代に属すると推測される。

(新家)

P-89 (図Ⅳ-83・84、図版23・45・77・103)

位置 H・I 14・15 規模 (2.70/2.07)×(2.52/2.00)×0.64 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北西端に位置し、P-20・34・79、S-3などが隣接する。

確認・調査 調査区I 15のVb層掘削作業時、黒褐色のプランを確認した。遺構の存在が予測されたため、Iライン方向にベルトを設定し、トレンチ調査をおこなった。堅穴状の掘り込みと、遺構範囲、堆積状況を確認した後、遺構全体を床面直上まで掘り下げた。当初は住居として調査をすすめたが、規模が2m程度で小さいこと、P-17に構造が類似すること、炉跡が存在しないことから、土坑として認識した。床直上土では土坑墓の検討を目的とした、リン酸およびカルシウム含量測定のための土壌試料採取をおこなった。また、床面からは炭化物ブロックが検出されたため、サンプルを採取し、フローテーション作業をおこなった。

覆土 11層に分層した。①～④の堆積単位にまとめられる。遺物取り上げ層位は、「覆土」、「覆土1」（1層）、「覆土2」（2～6層）、「覆土3」（7～10層）に分けた。「覆土」は覆土1～3に分層する前の取り上げ層位で、覆土1・2層の遺物が含まれている。

- ① 上位の層。黒褐色土1層で構成される。自然もしくは人為的な堆積と考えられる。
- ② 中位層上面の焼土に関する堆積。褐色～暗褐色土2～4層で構成される。
- ③ 中位の層。暗褐色～黒褐色土5～6層で構成される。各層とも20cmを越える厚い堆積で、ロームとKo-gのブロックが含まれている。人為的な埋め戻し土と推測される。
- ④ 下位の層。ふい黄褐色～暗オリーブ褐色土7～10層で構成される。床面直上土の8層はやや暗色であった。ロームやKo-gを主体とする土で、短期間になされた人為的な埋め戻し堆積と推測される。

後述するように、遺構の時期は縄文時代中期前半と考えられ、また覆土3（堆積単位④）出土の土器はⅢ群A類のみであった。①～③（1～6層）には後期前葉の土器が包含されていることから、後期以降の堆積と判断できる。よって、④は中期前半になされた埋め戻し、③は後期前葉以降の人為的堆積、②は後期前葉以降に、P-89の埋没過程の窪みを利用して形成された焼土、①は後期以降の堆積と理解することができる。

構造 坑底はほぼ水平・平坦に構築されている。壁は垂直に近い急斜な立ち上がりで、中部から坑口にかけて広がる。遺構構築面はVb層の中位に認められる。

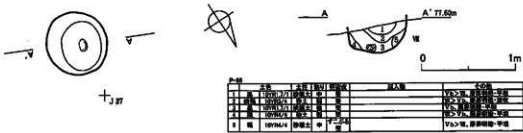
北壁には径20cm前後、深さ25cm前後の柱穴状ピットが2基（PP-1・2）隣接して構築されている。PP-2は縄文時代中期前半より、新しい時期に構築された可能性がある。また、壁外30cmほどの範囲に、柱穴状ピット9基（SP-107～111・123・124・127・215）が、周囲を巡るように位置するが、P-89に関係するものかは判別できなかった。

遺物出土状況 土器165点（Ⅲ群A類82点、Ⅳ群A類83点）、石器8点（スクレイパー1点、フレイク5点、台石・石皿2点）、土玉1点、石製品1点、礫10点、計185点出土。覆土3（堆積単位④）出土の土器はⅢ群A類のみである。覆土2からは石皿（図Ⅳ-84-5）が出土し、ほぼ同層順で検出された焼土と関係する可能性がある。土玉、石製品は坑口付近から出土している。

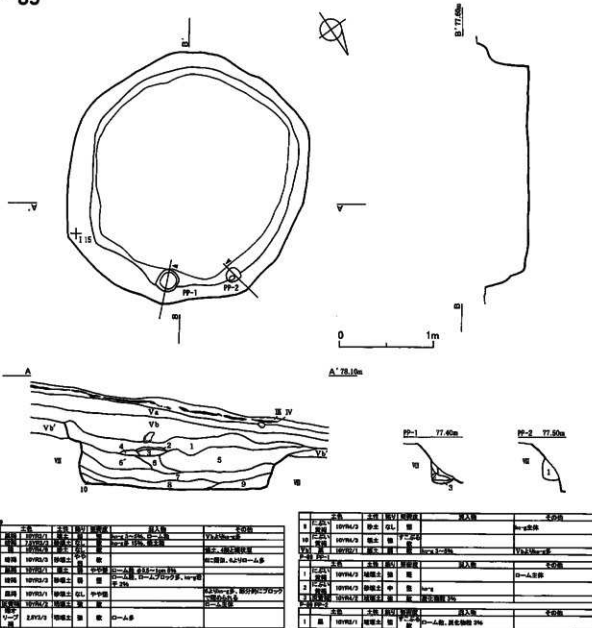
(坂本)

掲載遺物

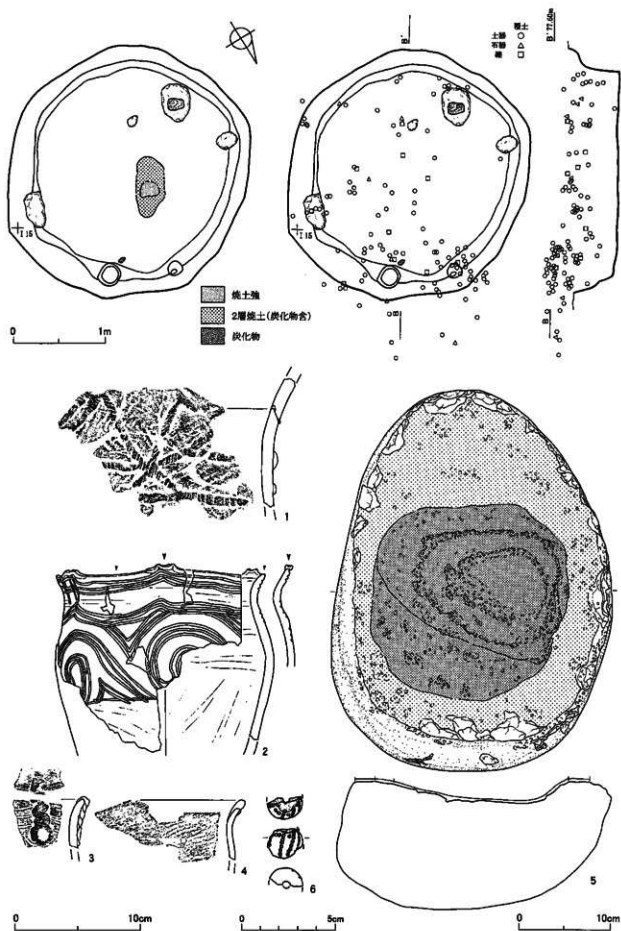
P-88



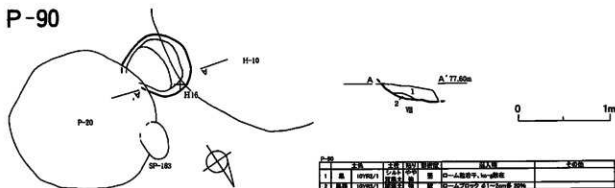
P-89



図IV-83 P-88・89 (1)



P-90



図IV-85 P-90

土器 4点図示した。1・2は覆土2から、3・4は覆土から出土したもの。1は同一個体の未接合破片が覆土1からも出土している。1はⅢ群A-2類、2～4はⅣ群A類。

1は縄文地に粘土紐による文様が施されるもの。外傾する切出状の口唇には粘土紐が貼付される。胴部の粘土紐の交点には円形貼付が加えられ、ともに燃糸圧痕が加えられる。2は渦巻状の文様が施されるもの。6か所の突起をもち、突起頂部には指頭状の圧痕の加えられる貼付が施される。胴部には、渦巻状の文様とその隙間を埋める三角形文が3本組沈線で描かれる。3は8の字状の貼付が施される口縁部破片。貼付は内面にまたがる。4は小形土器の突起部。無節の縄文が横走気味に施される。

(柳瀬)

石器 5は台石・石皿である。石材は安山岩である。礫の平坦面に楕円形に凹むすり面を有すもので、すり面は平坦面中央部の左側面寄りに、長軸が側面と直交する方向で位置している。すり面は左側面側で緩やかに、反対側ではやや急角度に立ち上がる。楕円形すり面の周囲には平坦なすり面が広がっている。

(坂本)

土製品 6は覆土から出土した土玉。球形で、竹管状工具による刺突列が施される。包含層から出土したもの(図V-67-3・4)と類似する。

(柳瀬)

時期 覆土3から出土した遺物をもとに判断すると、縄文時代中期前半である。坑底から採取した炭化物を試料におこなった放射性炭素年代測定では、4460yBP±40(補正年代)の結果が得られている。覆土の堆積状況から、土坑墓と推測される。

(坂本)

P-90(図IV-85)

位置 G・H15・16 規模 (0.69/0.54)×((0.56)/(0.46))×0.19 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北西端に位置し、H-10、P-20と切り合い関係を有する。

確認・調査 H-10、P-20の壁精査中に黒色土のまとまりを検出した。調査区I15をⅦ層まで掘り下げて円形プランを検出し、土坑であることを確認した。

覆土 2層に分層した。ローム粒、Ko-gが散在する黒色土が主体で、自然堆積と考えられる。

構造 坑底は東側に向かって緩やかに傾斜している。壁の立ち上がりも緩やかである。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

性格 縄文時代後期前葉以前と考えられる。切り合い関係からH-10、P-20よりも古いと判断できる。

(坂本)



## 5 石組炉

S-1 (図IV-86、図版24)

位置 N49 規模  $(1.14/-) \times (-/-) (1.23 \times 0.61 \times 0.06)$  平面形態 不整楕円形

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 Vb層上面付近で、列状に並ぶ礫を検出。その脇に周囲よりわずかに赤味がかかる土壌を検出し、不明瞭ながら焼土と判断した。礫は扁平な角～亜角礫を用いている。焼土付近からは堅果類とみられる炭化物が肉眼で確認された。1mほど離れて炭化物の集中範囲が検出され、S-1に伴うものと判断した。この土壌についてフローテーション処理を行い、焼土周辺の堅果類とみられるものとともに、選別および同定を行った (VI章2節)。

時期 周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期後葉の可能性が高い。 (柳瀬)

S-2 (図IV-86、図版24)

位置 K49 規模  $(0.62/0.46) \times (-/-) (0.32 \times 0.16 \times 0.04)$  平面形態 円形?

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 Va'～Vb層上面で、半円形に巡る礫を検出。その内側に、若干赤味があった土壌が分布しており、不明瞭ながら焼土と判断した。礫は、角～亜角礫を用い、扁平なものと厚みのあるものがある。

時期 周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期後葉の可能性が高い。 (柳瀬)

S-11 (図IV-86、図版25)

位置 H48 規模  $(0.64/0.39) \times (0.54/0.40)$  平面形態 コ字形

立地地形 調査区西端、倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 調査区H48でVb層上部を調査中に、10～30cmの被熱礫のまとまりを検出した。盤状の礫5点が西側に開いたコ字形に配置され、やや北側に傾斜して埋め込まれていた。

時期 構築面、周辺の遺構と出土遺物から縄文時代後期前葉と考えられる。 (菊池)

S-3 (図IV-87、図版103)

位置 H15 規模  $(0.82/0.45) \times ((0.54)/(0.37)) (0.36 \times 0.31 \times 0.05)$  平面形態 円形?

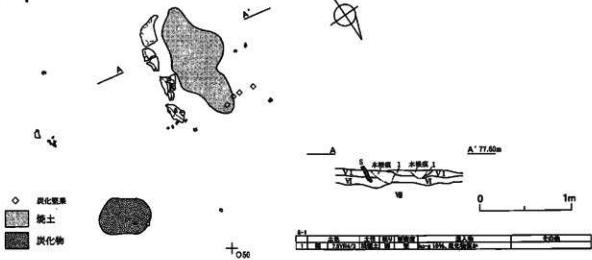
立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の中央部北側に位置している。P-66・89、F-7が隣接する。

確認・調査 Va層下部からVb層上部を掘削中、大きさ20cm前後の被熱礫のまとまりを検出した。礫6点が半円状に配置されており、内側からは焼土が検出された。礫は円・亜角礫を用いている。埋め込まれた礫の上部7cmほどが被熱しており、被熱範囲が使用当時地面から露出していた部分と推定される。また、南東側の礫が横倒しで確認されたことから、南側は礫が抜き取られたと考えられる。遺物出土状況 石組に台石・石皿が1点利用されていた。

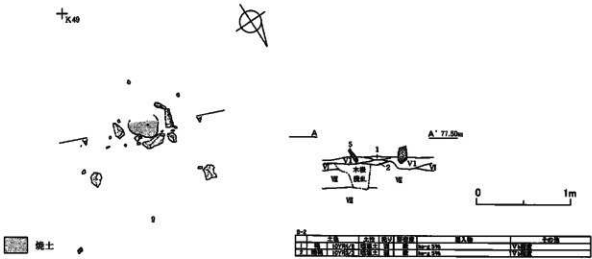
掲載遺物

石器 1は台石・石皿である。石材は安山岩である。石組に利用されていたもので、上下両端が折断されている。上部折れ面の縁辺はすり面と連続するように磨耗しており、石器としての利用時に折断整形した可能性が高い。すり面は右側縁側にみられ、上部には若干半円形に凹んだ顕著なすり痕範囲が認められる。

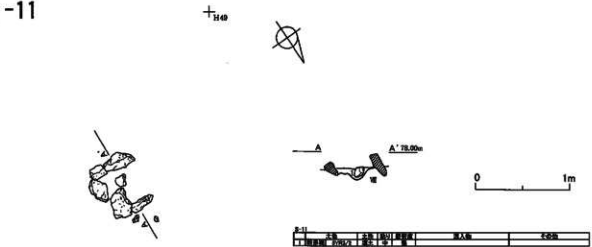
S-1



S-2



S-11



図IV-86 S-1・2・11

時期 周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属すると推定される。 (坂本)

S-4 (図IV-87、図版24・103)

位置 F15・16 規模 (0.83/0.48)×(0.70/0.46) 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。H-2、P-60・61・74、S-5が隣接する。

確認・調査 調査区F15のVa層下部からVb層上部を掘削中に、大きさ20~40cmの被熱礫のまとまりを検出した。台石・石皿1点と礫7点が、楕円形に配置されており、内側径40cmほどの範囲からは、炭化物粒が検出された。礫は主に盤状、柱状の亜角礫を用いている。埋め込まれた礫の上部5~10cmほどが被熱しており、この範囲が使用当時地面から露出していた部分と推定される。

遺物出土状況 石組に台石・石皿が1点利用されていた。

掲載遺物

石器 1は台石・石皿である。石材は安山岩である。器体は大きく欠損している。石質は多孔質なもので、孔の径が5mm前後のものが顕著である。すり面は著しく凹んでいる。

時期 周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属すると推定される。 (坂本)

S-5 (図IV-87)

位置 F-16 規模 (0.54/0.50)×(0.26/—)(0.35×0.26×—) 平面形態 不明

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置している。H-2、P-60・61・74、S-4が隣接する。

確認・調査 調査区F15のVa層下部からVb層上部を掘削中に、被熱礫1点と焼土を検出した。礫は焼土の南東側に直立した状態で確認され、焼土側に被熱痕跡がみられたことから、石組炉と判断した。また、検出層度もS-4と同じである。本来配置されていた礫の多くは抜き取られたものと推測される。

時期 構築面、周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属すると考えられる。 (坂本)

S-6 (図IV-87、図版24)

位置 G13・14 規模 (0.73/0.49)×(—/—)(0.29×0.30×0.12) 平面形態 円形?

立地地形 無名の沢に続く急斜面の際の遺構集中範囲、中央付近南端に位置する。P-19と重複し、これより新しいと思われる。

確認・調査 Vb層中位で、半円形に巡る礫と、その内側の焼土粒が少量分布する範囲を検出した。礫は亜角~亜円礫で、厚みのあるものである。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉のものと思われる。 (柳瀬)

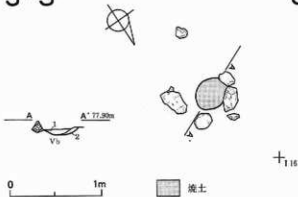
S-7 (図IV-87、図版25)

位置 I16 規模 (0.67/0.47)×(0.63/0.44)(—×—×0.06) 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北側に位置している。P-23が隣接する。

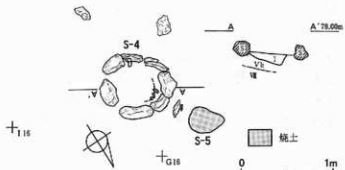
確認・調査 調査区I16のVa層下部からVb層上部を掘削中に、大きさ20~30cmの礫のまとまりを検出した。礫7点が環状に配置され、部分的に弧状の礫が利用されている。石組の内側からは焼土P

S-3



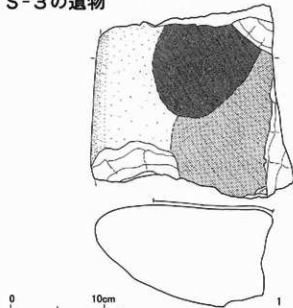
図名	平面	北緯	東経	縮尺	調査者	調査年	調査場所
S-3	1	35°41'N	139°41'E	1:1000	佐藤 隆夫	1978	茨城県水戸市

S-4・S-5

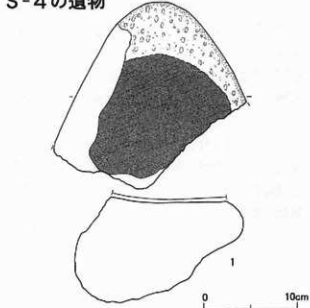


図名	平面	北緯	東経	縮尺	調査者	調査年	調査場所
S-4	1	35°41'N	139°41'E	1:1000	佐藤 隆夫	1978	茨城県水戸市

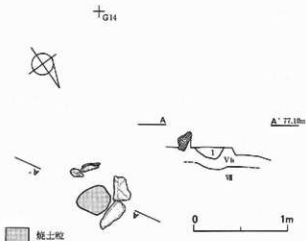
S-3の遺物



S-4の遺物

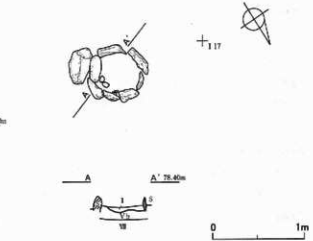


S-6



図名	平面	北緯	東経	縮尺	調査者	調査年	調査場所
S-6	1	35°41'N	139°41'E	1:1000	佐藤 隆夫	1978	茨城県水戸市

S-7



図名	平面	北緯	東経	縮尺	調査者	調査年	調査場所
S-7	1	35°41'N	139°41'E	1:1000	佐藤 隆夫	1978	茨城県水戸市

図IV-87 S-3・4・5・6・7

ロックと炭化物粒が検出された。礫は盤・柱状の角礫、亜角礫、円礫を用いている。埋め込まれた礫の上部5~10cmほどが被熱しており、この範囲が使用時地面から露出していた部分と推測される。  
時期 周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉とみられる。 (坂本)

S-8 (図IV-88、図版25)

位置 J12 規模 (0.84/0.57)×(0.58/0.42) (0.34×0.31×0.04) 平面形態 楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の北東側に位置する。

確認・調査 Vb層上面で焼土と礫により確認。焼土の周囲に14点の礫が巡る、石組炉。フレイク1点が伴う。

時期 周辺の遺構の遺物から判断して縄文時代後期前葉の石組炉とみられる。 (福井)

S-9 (図IV-88、図版24)

位置 F・G14 規模 (-/-)×(-/-) (0.38×0.26×0.09) 平面形態 不明

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲、西寄り南端に位置する。P-78と重複し、これより新しいと思われる。

確認・調査 造成土と思われる土層の中位で礫と焼土を検出。礫は亜角~亜円礫で、被熱している。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉のものと思われる。 (柳瀬)

S-10 (図IV-88、図版25)

位置 H12 規模 (0.73/0.42)×(-/-) (0.42×(0.24)×0.18) 平面形態 円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲から、南東側にやや外れた斜面に位置する。

確認・調査 Iラインに沿って設定したメインセクションベルトの掘り下げ中、造成土あるいは斜面堆積土の上位で、ほぼ円形にめぐる礫と、内側の焼土を検出した。礫は亜角~亜円礫で、若干被熱している。

この周辺は緩斜面がやや急斜面に変化する部分で、掘上土が散在していた。S-10は、北側をローム主体の掘上土に直接覆われており、また焼土である土層1は、下位の土層aとは異なる、ローム質の土壤が被熱したものである。このことから、S-10は、掘上土を切って構築され、別の掘上土に覆われているものと推測される。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の遺構と思われる。 (柳瀬)

S-12 (図IV-88)

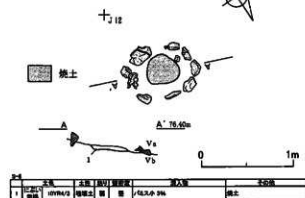
位置 H・I18 規模 (1.32/-)×(1.24/-) 平面形態 不整形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面際の上部、狭い平坦部に立地する。斜面際遺構集中範囲の北西側に位置している。

確認・調査 調査区I16のVa層下部からVb層上部を掘削中に、大きさ10~30cmの礫まとまりを1.2mほどの範囲で検出した。不規則な配置であったが、被熱礫であることから石組炉が破壊されたものと判断した。

時期 検出面、周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属すると推定される。 (坂本)

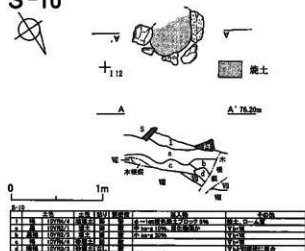
S-8



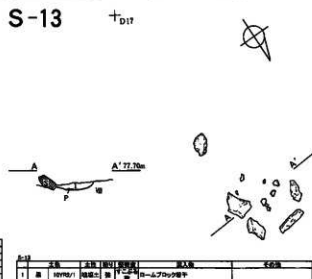
S-9



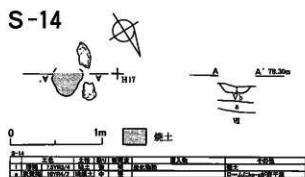
S-10



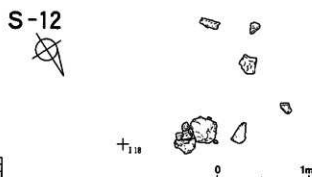
S-13



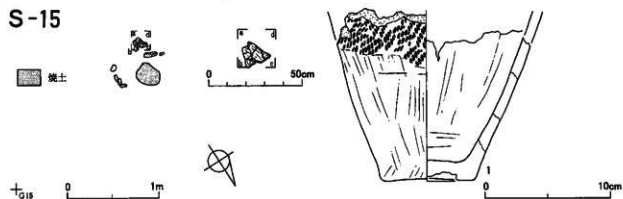
S-14



S-12



S-15



図IV-88 S-8・9・10・12・13・14・15

S-13 (図IV-88、図版25)

位置 D17 規模  $(0.82)/(0.46) \times ((0.68)/(0.56))$  平面形態 円形?

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の上部付近に立地する。斜面際遺構集中範囲から南西側に6mほど離れて位置している。

確認・調査 調査区D17のVb層上部を掘削時に、大きさ20~30cmの礫まとまりを検出した。礫4点が半円形に配置されていた。斜面地形の影響により、Vb層下位はⅧ層となっており、礫はローム中に埋め込まれていた。石組の内側からは、ロームブロックを含有する土が検出された。南側部分は礫が抜き取られたと推測される。

時期 周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属するとみられる。 (坂本)

S-14 (図IV-88)

位置 G・H16 規模  $(0.58)/(0.46) \times ((0.50)/(0.36))$   $(0.30 \times 0.28 \times 0.10)$  平面形態 不明

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の北西端に位置し、H-10、P-16などが隣接する。P-16とは層位的上下関係を持つ。

確認・調査 調査区H16のVb層上面精査時に被熱礫2点を検出した。Vb層上部を掘り下げると、礫の南東側に径30cmほどの焼土を検出したため、石組炉と判断した。

時期 P-16より新しいと判断できる。検出面、周辺の遺構と出土遺物から、縄文時代後期前葉に属すると考えられる。 (坂本)

S-15 (図IV-88)

位置 F15 規模  $(0.58/0.49) \times (0.28/0.18)$   $(0.25 \times 0.21 \times 0.04)$  平面形態 不整形

立地地形 無名の沢に続く急斜面の際の遺構集中範囲の南西側に位置する。

確認・調査 Vb相当層で焼土と礫により確認。半完形の土器が見られたことから、半載したところ、Ⅶ層上面で黒色土のまとまりがみられた。P-29として調査したが、Ⅶ層からの掘り込みは北西側で浅く、Vb相当層での掘り込みも明瞭でなかった。 (福井)

掲載遺物

土器 1はS-15に隣接して出土したⅣ群A類。胴部下半から底部付近で、上部に斜行縄文が施される。 (柳瀬)

時期 縄文時代後期前葉の石組炉としたが、土坑の可能性もある。 (福井)

## 6 焼土

F-1 (図IV-89、図版26)

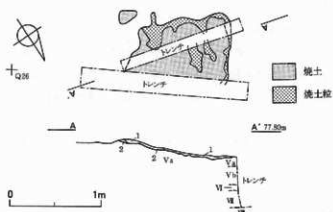
位置 P・Q26 規模  $1.24 \times \dots \times 0.04$  平面形態 不明

立地地形 調査区中央付近北東側、尾根状地形からやや下った緩斜面に位置する。

確認・調査 Ⅳ~Ⅴa層上面付近で検出した。北東側は調査区域外に広がっている。この周辺にはB-Tmの明瞭な堆積がみられなかったため、直接の対比はできなかったが、ほぼ同じ層順にあると推測した。中央付近が若干窪んでいたため、下位に遺構の存在を想定しトレンチ調査を行ったが、遺構は検出されず、風倒木による攪乱を確認した。焼土層下位の境界が明瞭なため、風倒木根の窪みに廃棄されたものと推測される。

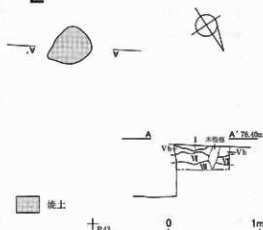
時期 検出層位から判断すると、B-Tm降下の10世紀前後の可能性がある。 (柳瀬)

## F-1



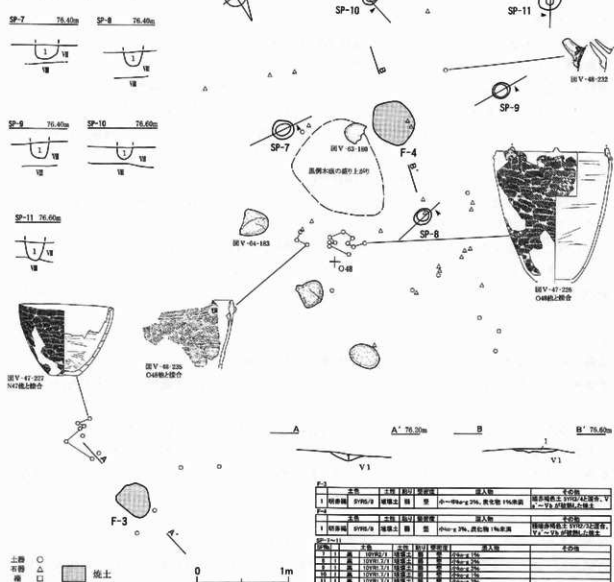
F-1	名称	土質	形状	埋没深	埋入物	C20k	
						層	内容
1	埋没溝	砂質土	溝	-	土、V、骨、瓦、土器、土器片、土器片、土器片	1	埋没溝
2	-	-	-	-	V1、V2、V3、V4、土器片、土器片	2	埋没溝

## F-2



F-2	名称	土質	形状	埋没深	埋入物	C20k	
						層	内容
1	埋没溝	砂質土	溝	-	土、V、骨、瓦、土器、土器片、土器片	1	埋没溝
2	-	-	-	-	V1、V2、V3、V4、土器片、土器片	2	埋没溝

## F-3・F-4



土器 ○  
石器 △  
溝 □

F-3	名称	土質	形状	埋没深	埋入物	C20k	
						層	内容
1	埋没溝	砂質土	溝	-	土、V、骨、瓦、土器、土器片、土器片	1	埋没溝
2	-	-	-	-	V1、V2、V3、V4、土器片、土器片	2	埋没溝

SP-7	名称	土質	形状	埋没深	埋入物	C20k	
						層	内容
1	埋没溝	砂質土	溝	-	土、V、骨、瓦、土器、土器片、土器片	1	埋没溝
2	-	-	-	-	V1、V2、V3、V4、土器片、土器片	2	埋没溝

図IV-89 F-1・2・3・4



F-2 (図IV-89、図版26)

位置 O42 規模 0.47×0.37×0.07 平面形態 卵形

立地地形 調査区の北西側、倉知川寄りの平坦面に位置する。

確認・調査 Vb層上面付近で検出した。焼土の色調は明褐色を呈する。O42区は周辺グリッドと比較して、つまみ付きナイフ・Rフレイク・フレイクなどの剥片石器類や敲石が多く出土しており、また、隣接するO43区からは大形の石皿(図V-65-185)が出土している。F-2はこれらと関係がある可能性がある。

時期 周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期前葉あるいは後葉の可能性が高い。(柳瀬)

F-3 (図IV-89、図版26)

位置 O47 規模 0.38×0.34×0.09 平面形態 不整楕円形

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 Va'~Vb層上面で、F-4とともに検出。焼土の色調は明赤褐色を呈する。

時期 周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期後葉の可能性が高い。(柳瀬)

F-4 (図IV-89、図版26)

位置 N48 規模 0.47×0.45×0.04 平面形態 楕円形

立地地形 倉知川に続く斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 Va'~Vb層上面で、F-3とともに検出。焼土の色調は明赤褐色を呈する。周辺からは、N群C類土器や敲石、すり石、石皿、石斧の破片や、石斧製作に関係する緑色泥岩のフレイクなどがややまとまって出土した。焼土を残しながらVb層の掘り下げを行ったところ、VI層上面で、F-4を囲んで、正方形に配置されそうな柱穴状ピット3基(SP-8~10)が検出された。掘り込みの存在を想定し、隣接していた土石流堆積物の調査のためにNライン・49ラインに沿って設定されたベルトの壁面を観察したが、掘り込みは確認されなかった。このベルトをVII層上面まで掘り下げたところ、さらに2基の柱穴状ピットが検出され、柱穴状ピットがF-4を中心とした正方形をなす4基と、そこから西に張り出す1基からなることを確認し、位置関係からF-4とSP-7~11が伴うものと判断した。掘り込みを伴わない建物が存在していたものと考えられる。

時期 周辺の遺物出土状況から、縄文時代後期後葉の可能性が高い。(柳瀬)

F-5 (図IV-90)

位置 G16 規模 0.40×0.28×0.05 平面形態 不整楕円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西側に位置し、H-10、P-16・63~65・69が隣接する。

確認・調査 Vb層掘り下げ時に検出した。半載掘削により堆積状況を確認した。焼土粒が細かく混じる状態で、堅密度はやや軟であった。北側にはベンガラ状粒子のまとまりがみられた。

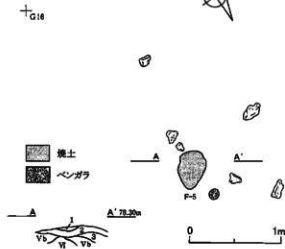
時期 周辺の遺構と出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性が高い。(坂本)

F-6 (図IV-90)

位置 F16 規模 0.28×0.20×0.04 平面形態 不整楕円形

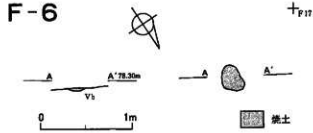
立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の西端に位置

F-5

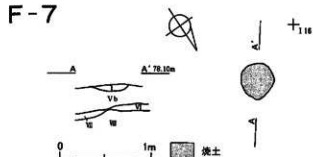


層	名称	土質	厚さ	形状	位置	出土品	その他
1	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-5	焼土、破片	焼土層上部に焼土塊あり
2	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-5	焼土、破片	焼土層下部に焼土塊あり

F-6

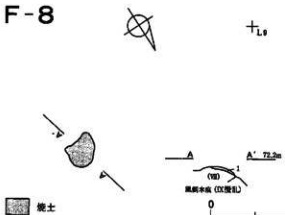


F-7



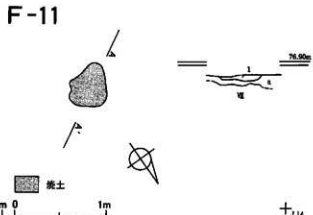
層	名称	土質	厚さ	形状	位置	出土品	その他
1	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-7	焼土、破片	焼土層上部に焼土塊あり
2	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-7	焼土、破片	焼土層下部に焼土塊あり

F-8



層	名称	土質	厚さ	形状	位置	出土品	その他
1	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-8	焼土、破片	焼土層上部に焼土塊あり
2	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-8	焼土、破片	焼土層下部に焼土塊あり

F-11



層	名称	土質	厚さ	形状	位置	出土品	その他
1	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-11	焼土、破片	焼土層上部に焼土塊あり
2	焼土	赤褐色	約10cm	円形	調査区F-11	焼土、破片	焼土層下部に焼土塊あり

図IV-90 F-5・6・7・8・11

している。P-28・59が隣接し、P-59とは層位的上下関係がある。

確認・調査 Va層下部からVb層上部掘り下げ時に検出した。F-6下部には、Vb層を挟んでP-59が構築されている。

時期 堆積順序からP-59よりも新しいと判断され、縄文時代後期前葉とみられる。(坂本)

F-7 (図IV-90)

位置 I15 規模 0.38×0.34×0.07 平面形態 円形

立地地形 調査区南東側、無名の沢に続く急斜面の際に立地する。斜面際遺構集中範囲の中央部北側に位置している。P-66・89、S-3が隣接する。

確認・調査 調査区I15のVb層上部面精査時に検出した。焼けしまった焼土ブロックが、堅密度軟の黒褐色土中に多く含有される状態であった。焼土が形成された後、人為的攪乱を受けたことが考えら

れる。

時期 周辺の遺構と出土遺物から縄文時代後期前葉の可能性がある。 (坂本)

F-8 (図IV-90、図版26)

位置 L8 規模 0.36×0.30×0.03 平面形態 不整形

立地地形 無名の沢に続く急斜面上に位置する。

確認・調査 VII層上面で焼土を確認。サブトレンチを入れて断面を観察した。

特徴 焼土はVII層が被熱したもの。風倒木の根が盛り上げたVII層の盛り上がり頂部に位置する。

時期 層位から判断すると、早期の可能性が高い。 (福井)

F-11 (図IV-90、図版26)

位置 I13 規模 0.49×0.42×0.07 平面形態 不整形楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の遺構集中範囲の中央付近東側、配石遺構の内側に位置する。配石遺構の礫に隣接している。

確認・調査 周辺に広く分布している造成土の中位付近で検出した。Ko-gが多く混入している周辺の造成土よりも若干赤味が強い程度である。配石遺構と何らかの関係があると推測される。

時期 周辺の遺構・遺物の検出状況から、縄文時代後期前葉の遺構と考えられる。 (柳瀬)

F-9 (図IV-91、図版26)

位置 C・D21 規模 0.95×0.48×0.08 平面形態 楕円形

立地地形 調査区南西側の平坦面にあるH-6の覆土中に位置する。

確認・調査 H-6の覆土を調査中に暗褐色土のまとまりを検出した。最初H-6にともなう炉等の施設を想定したが、断面の観察により、H-6の床面あるいは生活面よりも高いレベルに位置することがわかった。H-6が自然に埋没していく過程で、この場で火が使用された痕跡と推測される。

遺物出土状況 土器小片5点(Ⅲ群A類)、焼成粘土塊13点、石器4点(石槍1点、フレイク2点、石斧1点)、礫14点が出土している。なお、焼成粘土塊としたものは、H-6のものと同様、軽石などの可能性がある。

時期・性格 層位的にH-6より新しいことから、縄文時代中期前半以降と考えられる。 (新家)

F-10 (図IV-91、図版26)

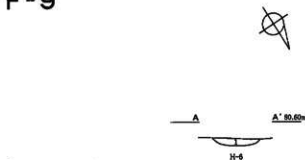
位置 J9 規模 0.74×0.66×0.09 平面形態 不整形楕円形

立地地形 無名の沢に続く急斜面に位置する。H-9と隣接する。

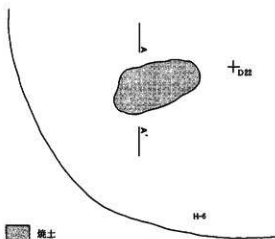
確認・調査 VI層相当面で、H-9とともに検出。周辺には他に遺構が存在しないため、互いに関連する可能性がある。F-10周辺はわずかに凹んでおり、自然地形の凹みを利用したものと思われる。

時期 隣接するH-9の時期から、縄文時代中期前半の可能性が高い。 (柳瀬)

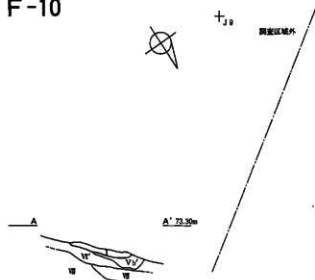
F-9



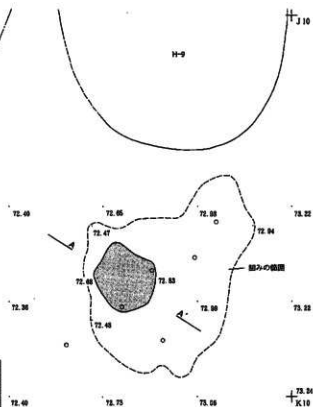
F-9	名称	土質	形状	用途	埋入層	説明
1	溝	2.0/2.4	掘土	溝		溝幅約1.5m、V字、V字幅0.1m、深さ約1.5m、埋入層あり



F-10



F-10	名称	土質	形状	用途	埋入層	説明
1	溝	0.9/0.2	掘土	溝		溝幅約1.5m、深さ約0.2m、埋入層あり、溝底は焼土で覆われている
2	溝	1.0/0.1	掘土	溝		溝幅約1.0m、深さ約0.1m、埋入層あり、溝底は焼土で覆われている
3	溝	2.0/0.2	掘土	溝		溝幅約2.0m、深さ約0.2m、埋入層あり、溝底は焼土で覆われている



図IV-91 F-9・10

## 7 柱穴状ピット (図Ⅳ-92~101、図版27・77・103)

## 概要

柱穴状ピットは230基検出された。このうち208基は、調査区南東側、無名の沢側の遺構集中範囲に分布している。

遺構集中範囲に分布するものの大部分は、他の遺構同様に後期前葉に属し、配石遺構をはじめとする遺構群と関係があると推測される。配石遺構・竪穴住居跡・フラスコ状土坑などに近接するものには、遺構に伴う木柱・柱穴・基標などに使用された、あるいは裸の抜けた痕跡などと想定されるものもある。このほかに建物をなすような、明瞭な配置を判別することはできなかった。覆土は、ロームやKo-gが多く混入することから埋め戻しと判断されるものや、Ⅷ層とは異なる色調のロームが認められるものがある。また、造成土やVb層に類似するものもみられる。

遺構集中範囲以外では、K~M12~14区に16基、N48区付近に5基がまとまって分布し、R13区に1基が位置する。L12・13区に位置するSP-16・18・19・21の4基は早期前半、N48区周辺の5基は後期後葉のものである。この2か所のまとまりは、建物を構成していたと推測される。

以下、各柱穴状ピットの特徴的な内容について述べることにする。(柳瀬)

SP-5…土器Ⅲ群A類13点出土。

SP-7~11…7~10が方形に、11が西側にやや外れて配置される。F-4に伴う(図Ⅳ-89)。

SP-12…覆土上層は純粋な粘土。地山であるⅧ層のロームとは異なる。粘土で蓋をするように埋め戻された可能性がある。

SP-16・18・19・21…覆土がローム質であること、SP-21覆土と周辺のⅦa層からI群A類がまとまって出土していることから判断して、早期前半に属するものである。方形に配置される。

SP-27…P-52を切って構築。覆土の上層はローム主体層で、ロームで蓋をするように埋め戻された可能性がある。

SP-28…P-50を切って構築。

SP-30…配石と重複する。関係不明。

SP-37…覆土下半埋積土の様相。

SP-38…柱アタリの土層1と根固めの土層2・3からなる。

SP-40…SP-39を切る。

SP-48…H-2の南壁に沿って分布しており、同遺構の付属施設の可能性がある。

SP-56…P-26と関係があるが、新旧は不明。覆土は造成土と類似。P-26の基標の可能性がある。

SP-62…立石に挟まれる位置で、掘り込みも存在を確認したⅧ層から50cm近くあり、造成土からの掘り込んだ場合さらに20cmほどの深さが加算されることとなる。土層を見ても直径10cmほどの棒状のものを立てるために小穴を掘り込んだ後、ロームブロックを多く含む土層で根固めをしているように考えられることから、配石に伴い木柱が立てられていた痕跡とみることができ。

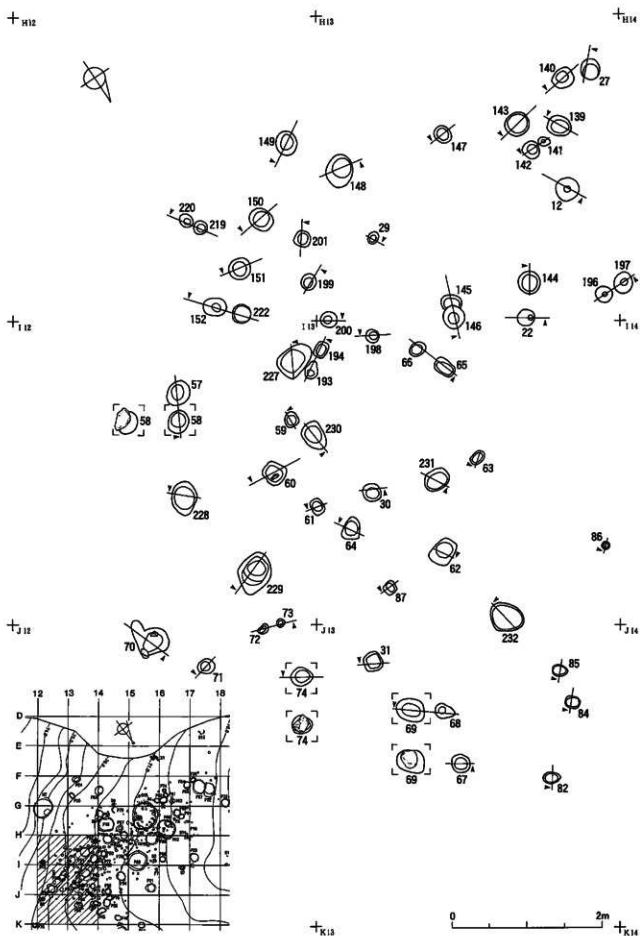
SP-30・34~36・39・40・57~61・63~76・

78~84・86・87・94・193・227・228・231・232…覆土は造成土と類似。

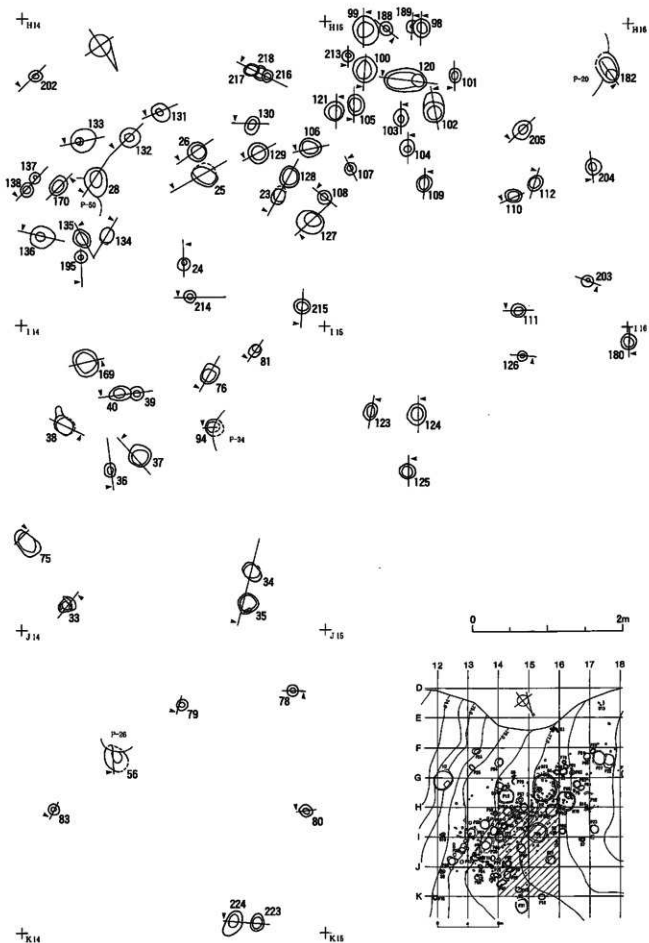
SP-58・69・70…上位に裸。

SP-63…P-36の基標の可能性。

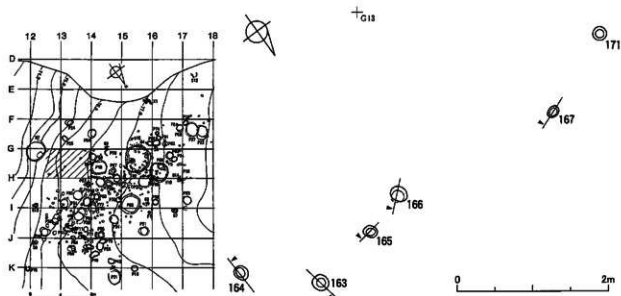
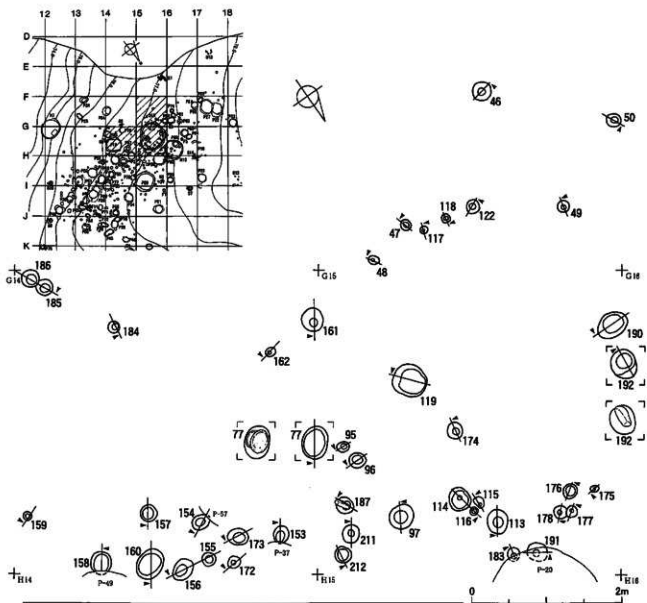
SP-74…立石を伴う。立石は台石・石皿。



図IV-92 柱穴状ビット (1)

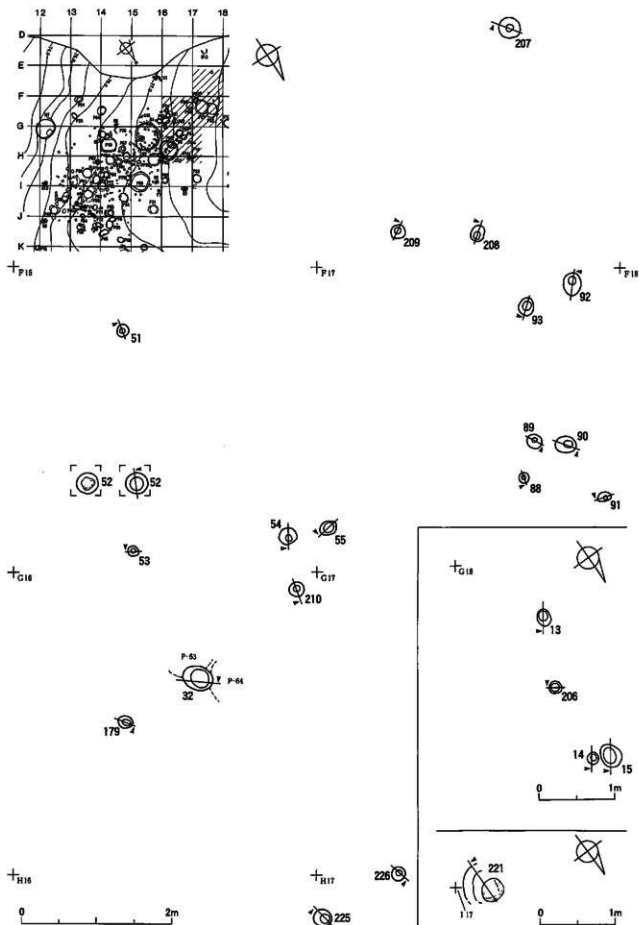


図IV-93 柱穴状ビット (2)

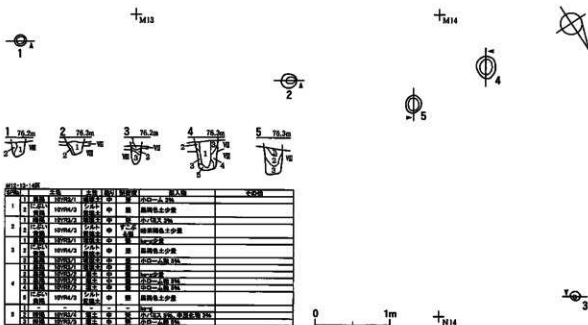
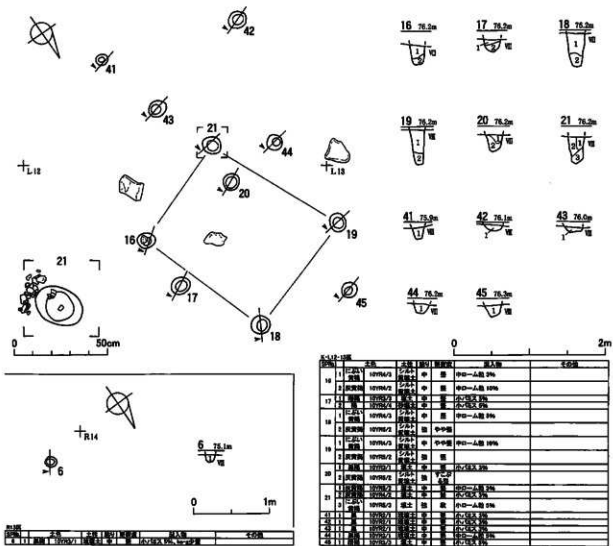


図IV-94 柱穴状ビット (3)





図IV-95 柱穴状ピット(4)



図IV-96 柱状ピット (5)



## G15区(2)



## G16区



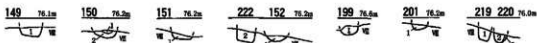
## G17区



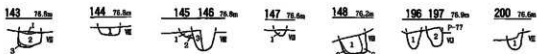
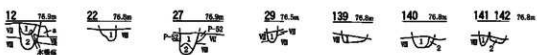
## G18区



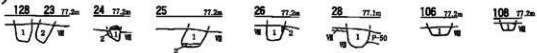
## H12区



## H13区



## H14区(1)



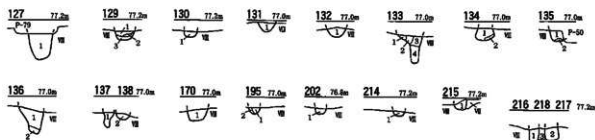
0 2m

区画	坑	深	形状	出土品	備考	
G15区(2)	190	77.5m	U			
	191	77.4m	U			
	192	77.7m	U			
	211	77.3m	U			
G16区	32	78.0m	U			
	179	77.7m	U			
	210	78.0m	U			
	206	78.6m	U			
G17区	226	78.1m	U			
	G18区	13	78.7m	U		
		14	78.7m	U		
		15	78.7m	U		
206		78.6m	U			
H12区	149	76.1m	U			
	150	76.2m	U			
	151	76.2m	U			
	222	76.2m	U			
	152	76.2m	U			
	199	76.6m	U			
	201	76.2m	U			
	219	76.6m	U			
	220	76.6m	U			
	H13区	12	76.5m	U		
22		76.5m	U			
27		76.5m	U			
29		76.5m	U			
139		76.5m	U			
140		76.5m	U			
141		76.6m	U			
142		76.6m	U			
143		76.5m	U			
144		76.5m	U			
H14区(1)	128	77.2m	U			
	23	77.2m	U			
	24	77.2m	U			
	25	77.2m	U			
	26	77.2m	U			
	28	77.1m	U			
	106	77.2m	U			
	108	77.2m	U			

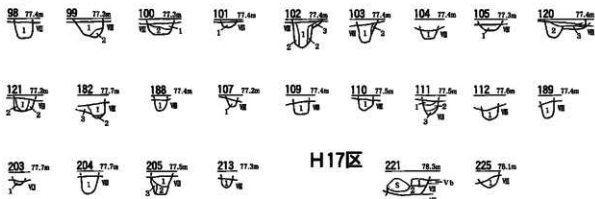
区画	坑	深	形状	出土品	備考
H12区	149	76.1m	U		
	150	76.2m	U		
	151	76.2m	U		
	222	76.2m	U		
	152	76.2m	U		
	199	76.6m	U		
	201	76.2m	U		
	219	76.6m	U		
	220	76.6m	U		
	H13区	12	76.5m	U	
22		76.5m	U		
27		76.5m	U		
29		76.5m	U		
139		76.5m	U		
140		76.5m	U		
141		76.6m	U		
142		76.6m	U		
143		76.5m	U		
144		76.5m	U		
H14区(1)	128	77.2m	U		
	23	77.2m	U		
	24	77.2m	U		
	25	77.2m	U		
	26	77.2m	U		
	28	77.1m	U		
	106	77.2m	U		
	108	77.2m	U		

図IV-98 柱穴状ビット(7)

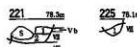
H14区(2)



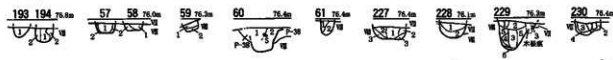
H15区



H17区



I12区

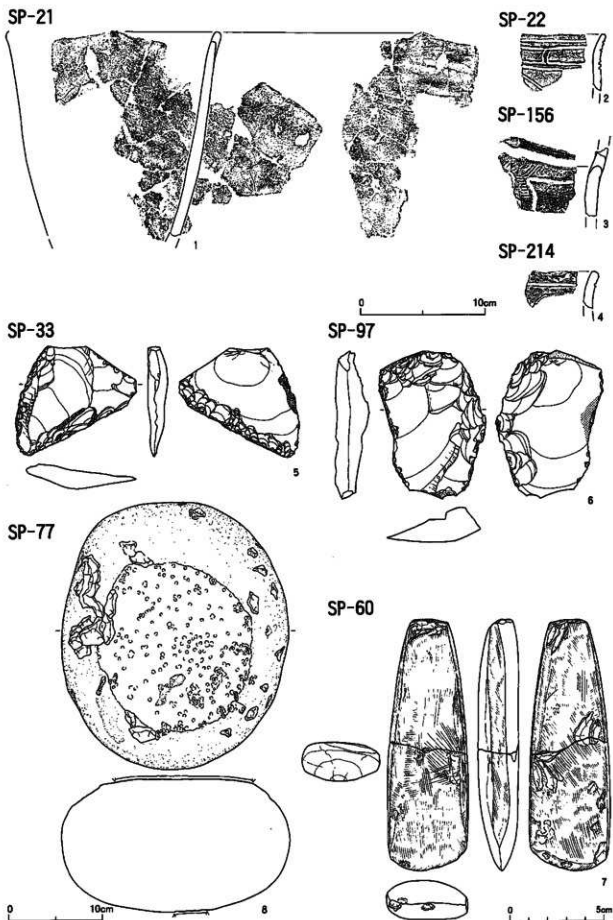


区画	層	地層	柱状ピット	深さ	形状	備考
127	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
129	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
130	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
131	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
132	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
133	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
134	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
135	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
136	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
137	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
138	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
170	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
195	1	1000/2	1	77.0m	円形	穴口径約10cm
202	1	1000/2	1	76.8m	円形	穴口径約10cm
214	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
215	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
216	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
218	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
217	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
98	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
99	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
100	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
101	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
102	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
103	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
104	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
105	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
120	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
121	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
182	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
188	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
107	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
109	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
110	1	1000/2	1	77.5m	円形	穴口径約10cm
111	1	1000/2	1	77.5m	円形	穴口径約10cm
112	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
189	1	1000/2	1	77.4m	円形	穴口径約10cm
203	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
204	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
205	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm
213	1	1000/2	1	77.3m	円形	穴口径約10cm

区画	層	地層	柱状ピット	深さ	形状	備考
221	1	1000/2	1	76.3m	円形	穴口径約10cm
225	1	1000/2	1	76.1m	円形	穴口径約10cm
193	1	1000/2	1	76.8m	円形	穴口径約10cm
194	1	1000/2	1	76.8m	円形	穴口径約10cm
57	1	1000/2	1	76.0m	円形	穴口径約10cm
58	1	1000/2	1	76.0m	円形	穴口径約10cm
59	1	1000/2	1	76.3m	円形	穴口径約10cm
60	1	1000/2	1	76.8m	円形	穴口径約10cm
61	1	1000/2	1	76.4m	円形	穴口径約10cm
227	1	1000/2	1	76.4m	円形	穴口径約10cm
228	1	1000/2	1	76.1m	円形	穴口径約10cm
229	1	1000/2	1	76.3m	円形	穴口径約10cm
230	1	1000/2	1	76.4m	円形	穴口径約10cm

図IV-99 柱状ピット(8)





図IV-101 柱穴状ビット (10)

SP-77…台石・石皿2点出土。

SP-85…コ字形配石の長軸の配置が切れた部分近くに位置する。掘り込みも存在を確認したⅣ層から50cm近くあり、造成土からの掘り込んだ場合さらに20cmほどの深さ加算されることとなる。土層を見ても直径10cmほどの棒状のものを立てるために小穴を掘り込んだ後、ロームブロックを多く含む土層で根固めをしているように考えられることから、配石に伴い木柱が立てられていた痕跡とみることができる。

SP-94…P-34との関係不明。P-34の基標の可能性はある。

SP-107～111・123・124・127・215…P-89の壁周囲に分布し、同遺構の付属施設の可能性はある。

SP-117・118・122…H-2の南壁に沿って分布し、同遺構の付属施設の可能性はある。

SP-127…P-79を切って構築。

SP-193・227…人為堆積土と判断される。

SP-216・217・218…SP-218が古く、216・217が新しい。

SP-229…直径10cmほどの棒状のものを立てるために小穴を掘り込んだ後、ロームブロックを多く含む土層で根固めをしているように考えられることから、木柱が立てられていた痕跡とみることができる。

#### 掲載遺物

土器 4点図示した。1はSP-21とその周辺のⅣ層から出土したI群A類。4か所の突起をもつ平底土器と思われる。突起下はやや肥厚し、縦位の棒状をなす。内面調整は貝殻条痕によると思われる。

2～4はIV群A類。2はSP-22から出土。3はSP-156から出土したもので、H-2から同一個体が出土している(図Ⅳ-11-9)。磨消縄文が施される突起付近の破片で、口唇上に指頭状の圧痕が加えられる。4はSP-214から出土した口縁部。P-34から同一個体が出土(図Ⅳ-57-4)。(柳瀬)

石器 4点を図示した。5はSP-33、6はSP-97、7はSP-60、8はSP-77から出土している。

5・6はスクレイパーである。石材は頁岩である。5の調整縁辺は鋭利に加工され、裏面側には明瞭な光沢が発生している。背面右側縁には不規則な平坦剥離がみられるが、腹面側の連続的な調整により背面側剥離面のネガティブバルブが切られている。6は背面左側縁に軽微な剥離が連続し、対する右側縁にやや大型で粗雑な調整が加えられるものである。左側縁の背面と腹面のなす角度は30度前後と鋭角で、腹面側には光沢も観察される。右側縁のやや粗い加工部縁辺は、断面がくの字状を呈する。

7は石斧である。石材は緑色泥岩である。両刃、円刃に近い偏刃で、平面は撥形を呈す。横断面は、正面側が丸みを帯び裏面側が平坦な半円状となっている。刃部には衝撃剥離痕とみられる長軸方向からの小剥離が3枚程度観察され、全て磨耗している。器体は、正面側からの力により、ほぼ中央部で破損している。

8は台石・石皿である。石材は安山岩である。素材側の平面部に敲打痕が円形にまんべんなく広がる。敲打面は平坦になっている。上半部が被熱している。(坂本)

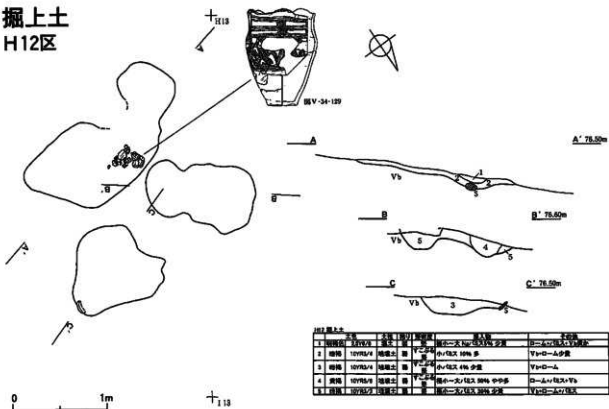
## 8 その他

### 掘上土(図Ⅳ-102)

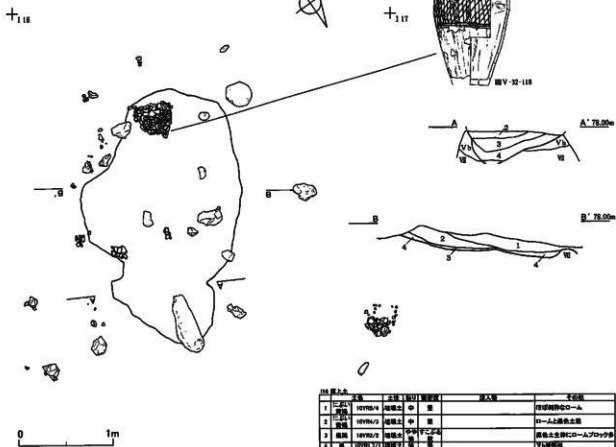
遺構集中範囲付近で11か所の掘上土を確認した。おもに遺構集中範囲の外縁に位置しており、緩斜面から急斜面に変化するあたりに多い。ローム質で、規模は大きいもので長さ3mほど、小さいものは長さ数十cmである。厚さは最大で20cmになる部分がある。このうちH12区およびI16区のもの



### 掘上土 H12区

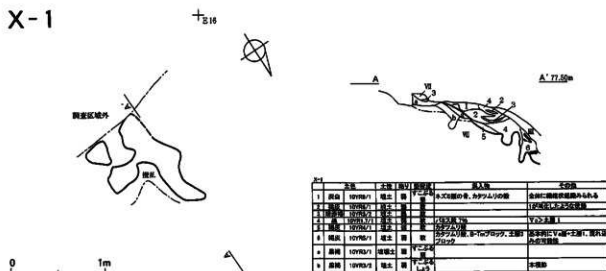


### I 16区



図IV-102 掘上土

X-1



図IV-103 X-1

図示した。

H12区の掘上土からは1個体のIV群A類土器と土偶の破片が出土しており、またI12区の掘上土のわずかに上位からは、IV群A類土器がつぶれた状態で出土している。このことから掘上土の所属時期は、遺構集中区の遺構と同様に、後期前葉と判断される。また、遺構集中区の外縁に分布することから、掘上土は集中区の遺構構築に伴って形成されたものと推測される。(柳瀬)

X-1 (図IV-103、図版37)

位置 D16 規模 (1.17/0.80)×0.19

立地地形 無名の沢に続く急斜面際の平坦面に位置する。

確認・調査 III層掘り下げ後、乳白色の灰状の堆積物として確認した。範囲を確認し、地形に沿うように半載し、堆積状況を確認した。また、層毎にサンプルを採取した後、堆積物を水洗選別した。

覆土 灰状の堆積物は、III層とV層の間にみられた。上位からネズミ類の骨、陸棲貝類を多量に含み繊維状の構造が見られる灰白の土層、褐色色を呈する土層、赤褐色を呈する土層、褐色で陸棲貝類を含む土層に分けられた。また斜面側に二次堆積した部分ではIV層(B-Tm)のブロックが見られた。灰状堆積物の下位には木根の痕跡が確認されたことから、この堆積物は木の洞か、根腐の凹みのようなところに形成されたとみられる。

時期 時期はB-Tm降灰以前のV層上部が堆積した時期とみられる。①ネズミ類の骨が多く含まれる点、②急斜面際の見晴らしのよい立地にある点から動物の糞の集積とみられる。糞を集積する動物はタヌキ以外に考えられない。調査期間中に調査区周辺を踏査した際、現在のタヌキのため糞を観察した。その状況とも近似していた。(福井)

## V 包含層出土の遺物

### 1 概要

包含層出土遺物は総数74,393点で、土器62,657点、石器5,030点、土製品35点、石製品26点がある。土器は縄文時代中期前半の円筒上層式～サイベ沢Ⅶ式のⅢ群A類が30,968点、後期前葉のトリサキ式を中心とするⅣ群A類が30,784点出土し、大多数を占めている。この他にも早期前半Ⅰ群A類、前期後半Ⅱ群B類、後期中葉Ⅳ群B類、後期後葉Ⅳ群C類が出土している。

石器は石鏃、スクレイパー、敲石、扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿が多数出土し、その多くが中期前半もしくは後期前葉に遺されたものと考えられる。

各分類・器種の分布範囲の説明には、地形および土器の分布状況によって便宜的に区分された地区名称（Ⅰ-1～Ⅲ-2区）を用いて説明することとする（図Ⅲ-1）。

遺物の分布は主に、Ⅰ区：無名の沢に続く斜面と斜面の間、Ⅱ区：尾根状地形部分、Ⅲ区：倉知川に続く斜面間の、大きく三つの範囲にまとまる。とりわけⅠ-1区（無名の沢側斜面間）、Ⅰ-2区（無名の沢側斜面）、Ⅱ-1区（尾根状地形南東側）に多数が分布する。Ⅰ-2区には後期前葉、Ⅱ-1区には中期前半の遺構群が検出されており、包含層遺物はこれら遺構群を形成した集団が主に遺したことが考えられる。また、Ⅰ-2区ではⅢ群A類とⅣ群A類が、折り重なるように混在した状態で出土しており、無名の沢斜面への廃棄行為が考えられる。（坂本）

### 2 土器

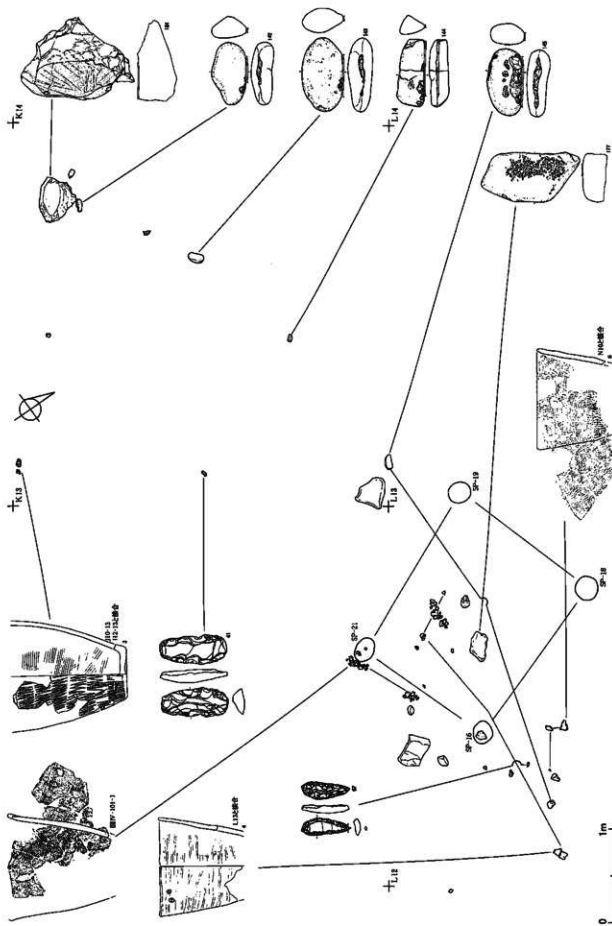
包含層からは、表面採集等を含めて62,657点の土器が出土している。内訳は、縄文時代早期のⅠ群では、A類：貝殻文が施されるものが172点、前期のⅡ群では、B類：円筒土器下層式が284点、中期のⅢ群では、A類：前半のものが30,968点、B類：後半のものが71点、後期のⅣ群では、A類：前葉のものが30,784点、B類：中葉のものが43点、C類：後葉のものが332点、統縄文時代のⅥ群は1点、分類不明が2点である。Ⅲ群A類・Ⅳ群A類がそれぞれ出土点数の5割近くを占めている。Ⅵ群の1点は土石流堆積物から出土したものである。

土器の分布は、遺物全体の分布と同様調査区のほぼ全域に及ぶが、なかでもⅠ～Ⅲ区に偏っている。特にⅠ-1・2区およびⅡ-1区に集中しており、遺構の集中範囲と共通する。Ⅰ区ではⅢ群A類・Ⅳ群A類が多量に出土しており、Ⅰ-1区ではⅣ群A類が、Ⅰ-3区ではⅢ群A類が多い。Ⅰ-2区ではⅢ群A類・Ⅳ群A類が混在している。

Ⅱ区ではⅢ群A類が多く出土する。特に同時期の遺構が分布するⅡ-1区に集中している。Ⅱ区のうち25～33ラインは出土点数が少ないが、Ⅱ-2・3区に集中がみられる。Ⅱ-2区とⅡ-3区の間ではⅡ群B類がややまとまっている。また、Ⅱ区とⅢ区の間沢状地形部分は遺物の分布の少ない範囲だが、Ⅱ群B類がややまとまって出土している。

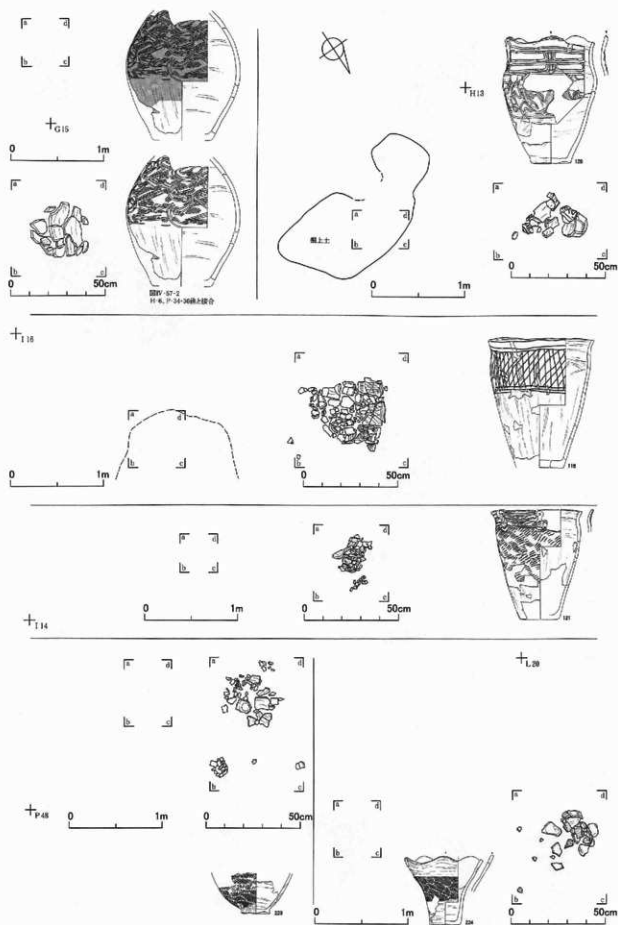
Ⅲ区ではⅢ群A類・Ⅲ群B類・Ⅳ群A類・Ⅳ群C類が出土している。南西側ではⅢ群A類・Ⅳ群A類が多く、Ⅲ群B類も少数出土している。Ⅲ-1区ではⅣ群A類が集中する。北西側のⅢ-2区の周辺ではⅣ群C類が多く出土している。

分類ごとには以下のような濃淡を示している。Ⅲ群A類・Ⅳ群A類はともに多量に出土しており、Ⅲ群A類はⅠ-2区の斜面とⅡ-1区に特に集中するが、調査区のほぼ全域で多く出土している。Ⅳ群A類も調査区のほぼ全域で出土するが、Ⅰ-1・2区に集中する割合が強い。Ⅰ群A類・Ⅱ群B類・



図V-1 出土状況(1)Ⅵ層の遺物





図V-3 出土状況(3) IV群土器

Ⅲ群B類・Ⅳ群B類・Ⅳ群C類は、少数が比較的狭い範囲にまとまって出土している。

#### I群 (図V-1、V-4-1~8、V-70、図版46・78)

**概要** 172点出土した。すべてA類：貝殻文が施されるもの。個体数は10個体程度。貝殻腹縁による文様が施されるもの、無文のもの、条痕文が施されるものがある。このうち4個体の器形を復原し、これを含めた8個体を図示した。底部が確認できたのは平底1個体であるが、尖底土器と共通する文様をもつ個体もみられることから、尖底になるものもあると推測される。層位別には、Va層から1点、Vb層から13点、VIIa層から157点、排土・表採のもの1点である。I群A類土器の本来的な包含層はVIIa層であるため、Va層およびVb層から出土したものは、木根などによる自然攪乱や遺構構築により掘り上げられた混入と推測される。なお、以下に使用するI群A類の文様等の表記は、中野B遺跡Ⅳ(北埋調報130)に拠った。

**分布状況** 調査区南東側のI-1・2区にまたがった範囲、無名の沢へ続く斜面の際に沿って分布する。

**掲載土器** 1・2・5は貝殻の「腹縁の一部分を幅狭く緻密な間隔で連続押捺した「連続移動文」が施されるもの、3・6は貝殻の「腹縁部の曲線を利用してロッキング移動した「連続波状文」が施されるもの、4・7・8は無文あるいは条痕文が施されるものである。

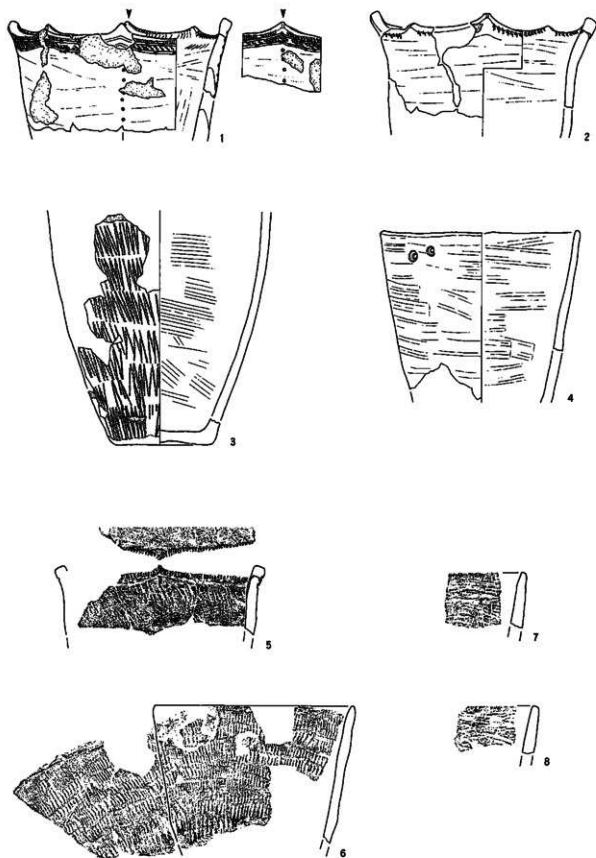
1・2・5は角形の口唇の外・内面の角に刻み状の、貝殻腹縁の連続移動文が加えられる。いずれも底部は欠失するが、尖底と推測される。1は波状口縁で、波頂部にやや小さい副突起が設けられる「副突起付波状口縁」。口縁部には口縁の形態に沿った並行沈線が描かれ、その上から棒状工具を器面に対して直角に突き刺す「円形刺突」が加えられる。棒状工具は断面円形である。並行沈線間には斜位の連続移動文が充填される。波頂部からは円形刺突の列点が垂下する。口縁内面には、連続移動文施文時に押捺されたと推測される「爪痕」がみられる。胎土には砂粒が多く含まれ、緻密。外・内面とも丁寧に調整される。割れ目には、外傾する輪積み痕が顕著にみられる部分がある。内面には煤が付着する部分がある。2も副突起付波状口縁である。口縁～胴部は無文。胎土には砂粒が多い。調整はやや粗雑で、凹凸が残る。内面には貝殻条痕がみられる部分がある。5は4か所の突起をもつ波状口縁。口唇直下に口縁の形態に沿った沈線が横環し、円形刺突が加えられる。沈線の直下には連続波状文が施される。

3・6は貝殻腹縁の連続波状文が施されるもの。3は胴部～底部で、平底である。全面に密に連続波状文が施される。腹縁部の背面あるいは内面を研磨して櫛目状にした原体を用いている。胎土はキメ細かく、砂粒を含む。内面には貝殻条痕が顕著である。6は平縁で、口唇は先細りの丸形。口唇直下から連続波状文が施される。胎土には砂粒が多い。3と同様平底になると推測される。

4は無文のもの。平縁で、口唇は先細りの丸形。外・内面に条痕がみられる。胎土はキメ細かく、砂粒を含む。6と口唇形態が共通しており、平底と推測される。7・8は明瞭な条痕がみられるもの。貝殻による可能性もある。内面にも条痕が認められる。口唇はいずれも角形。胎土には砂粒を含む。

#### Ⅱ群 (図V-5-9~13、V-70、図版78)

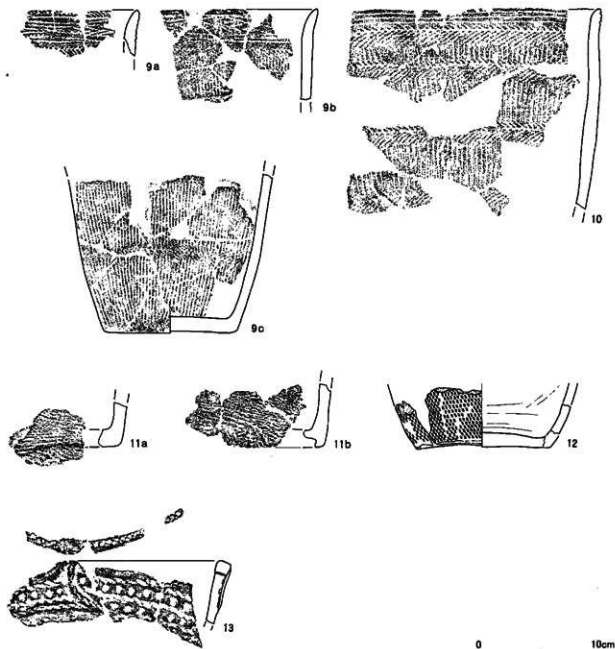
**概要** 284点出土した。すべてB類：円筒下層式に相当するもの。個体数は10個体前後である。縦位や斜位の撚糸文が施される平縁のものが大部分で、多軸結条体が施されるものも1個体みられる。また、これらとは異なる、突起をもち、J字形の貼付と縄端の圧痕などが施されるものが1個体ある。層位別には、Va層から6点、Vb層から273点、VI層から3点、VII層から2点である。このうち1個体の



0 10cm

図V-4 包含層の土器(1)





図V-5 包含層の土器(2)

器形を復原し、これを含む5個体を図示した。図示したものと同一個体は合計で250点ほどで、点数としては大半を占める。

**分布状況** 調査区中央の尾根状地形部分、II-2・3区の間付付近と、II区とIII区間の沢状地形部分に分布する。N37区の140点、L37区の26点は、それぞれ大部分が同一個体であった。

**掲載土器** 9・11は撚糸文が施されるもの、10は単節縄文が施されるもの、12は多軸絡条体が施されるもの、13は突起をもち、J字形の貼付が施されるもの。

9・10は口縁部の狭い範囲に縄線による文様を加えられるもの。9は胴部に縦位の撚糸文が施され、口唇断面は先細りの丸形。沢状地形部分のN37区でまとまって出土したが、胎土が脆く磨耗していたため接合が困難で、器形の復原はできなかった。10は胴部に結束第1種羽状縄文と縦走する単節縄文が施される。口縁部には3条の縄線が横環する。内面は磨かれる。11は横走気味の撚糸文が施される

底部。11aには底面にも捺糸文が施される。12は多軸絡条体が施される底部。内面・底面は磨かれる。9～12はいずれも胎土に繊維を多量に含む。

13は突起をもち、貼付が施されるもの。突起の上面は平坦に整形される。口唇は角形で、突起上面を含めて縄文が回転施文される。縄線が加えられたJ字形の貼付が突起から垂下する。口縁部には縄線と縄端圧痕列が横位に施される。口縁部文様帯は肥厚することで胴部と区画される。

### Ⅲ群 (図V-2、V-6～29-14～108、V-70・71、図版47～60・78～84)

31,039点出土した。内訳は、A類：前半のものが30,968点、B類：後半のものが71点である。A類にはA-2類：円筒上層b・c式に相当するものと、A-3類：サイベ沢Ⅷ式・見晴町式に相当するものがある。B類としたものは、捺糸文や櫛歯状工具による条痕文が縦位に施されるものである。

### Ⅲ群A類 (図V-2、V-6～28-14～101、V-70、図版47～60、78～83)

概要 30,968点出土した。出土土器の5割近くを占める。A-2類：円筒上層b・c式に相当するものと、A-3類：サイベ沢Ⅷ式・見晴町式に相当するものがある。このうち、A-2類32個体、A-3類25個体の器形を復原し、これらの大半を含むA-2類32個体、A-3類57個体を図示した。細分の対象としたものは掲載遺物のみである。そのため出土点数の比較はできないが、復元できた個体数から判断すると、A-2類がより多く出土しているものと推測される。なお、復原したもののうち、図示していない、A-2類の11個体、A-3類の4個体については、写真および掲載土器一覧表に記している。

分布状況 Ⅲ群A類の分布は調査区のほぼ全域に及ぶが、特に、I-2・3区およびⅡ区に集中している。掲載土器から判断すると、A-2類とA-3類では分布傾向が異なる。A-2類はそのほとんどがI-1・2区の周辺に集中しており、Ⅱ区とⅢ区間の沢状地形からも少数出土している。A-3類はⅡ区に多くみられ、特にⅡ-1・2・3区に集中している。調査区南東側、無名の沢へ続く斜面からも少数出土している。

掲載土器 14～46はⅢ群A-2類、47～101はⅢ群A-3類である。

### Ⅲ群A-2類 (図V-2、V-6～15-14～46、図版47～55、78～80)

Ⅲ群A-2類には、捺糸圧痕が加えられた粘土紐による文様、粘土紐に沿って施される縄線、馬蹄形圧痕やそれに類する半截竹管状工具などによる刺突・押しなどが施される。口唇には、捺糸圧痕が刻み状に施されるものと、捺糸圧痕が加えられる波状の粘土紐が貼付されるものが多い。文様は無文地に施されるものが多いが、縄文地に施されるものもある。地文は結束第1種羽状縄文が圧倒的多数を占め、結束第1種斜行縄文、縦位の結束第1種羽状縄文が少数みられる。地文のみのものや、口唇の捺糸圧痕・貼付のみのもの、無文のものも少数みられる。口縁は4か所の弁状突起をもつ波状口縁が多く、平縁もある。器形は、多くが直線的な筒形で口縁が大きく外反するが、胴部がやや張り出すものや、器高が低く頸部が強くくびれる壺形に近いものもある。底部はやや張り出すものが多い。脚付のものが2個体ある。胎土は繊維を含むものが多いが、ほとんど含まないものもある。他に砂粒・軽石粒・海綿骨針などを含むこともある。内面は丁寧に磨かれるものが多い。

14・15は突起の先端がM字形を呈し、一条の粘土紐で文様帯が区画されるもの。いずれも馬蹄形圧痕と縄線が施される。14は口唇が角形で、口唇端部から口唇直下にかけて羽状の捺糸圧痕が加えられる。15は地文に縦位の結束第1種羽状縄文が施される。突起間の中央の口唇上には、楕円形の環状貼付が加えられ、口唇と同様に羽状の捺糸圧痕が施される。

16～19・22・34～37は口唇に刻み状の捺糸圧痕が施されるもの。16・17・19・22・34・35は、捺糸

丘痕のある粘土紐による文様と、馬蹄形丘痕あるいはそれに類する文様が施されるもの。16・17・22は粘土紐の貼付が突起周辺に限られるもの、19・34は横位にも展開するもの。16は狭い文様帯内に屈曲の緩い馬蹄形丘痕が施される。17は、図には現れていないが、突起の1か所に馬蹄形丘痕が加えられている。22は馬蹄形丘痕と、二種類の半載竹管状工具による刺突が施される。馬蹄形丘痕が施されるのは図の正面のみ。突起下の文様構成は、正面と、正面以外の3か所では異なる。突起は図右側の1か所のみ弁状、他は山形。突起間の中央の口唇に山形の貼付が加えられる。35は非常に小形で平縁のもの。粘土紐の貼付とそれに沿った縄線、馬蹄形丘痕が施される。地文は縦位の結束第1種羽状縄文。36は縄線による文様のみが施されるもの。突起部口唇の捺糸丘痕は3本組みで、文様帯の縄線と同じ原体を用いていると推測される。18・37は縄文のみのもの。18は器高72cmを測る大形のもの。突起上端に粘土紐の貼付が加えられる。37は口唇が尖り気味で外面に肥厚し、肥厚部に刻み状の捺糸丘痕が施される。

20・21・23～27・38～41・43は口唇に波状などの貼付が加えられるもので、20・21・23～25・38～41は貼付に捺糸丘痕などが加えられるもの。41・43以外は、捺糸丘痕が加えられる粘土紐による文様と、馬蹄形丘痕あるいはこれに類する半載竹管状工具・笥状工具などによる刺突・押しが施される。粘土紐による文様は横位に展開するものが多い。文様帯は横環する2本の貼付帯で区画されるものも多く、21・23・27はその下位にさらに波状を基調とする貼付帯が加えられる。26・27・43は貼付が無文のものである。

20・21・23は、粘土紐とそれに沿った縄線、馬蹄形丘痕あるいはそれに類する文様が施されるもの。20・21は馬蹄形丘痕が施される、小形のもの。21は底部が小さく胴部が張り出し、頸部がくびれる器形。突起には貫通孔がある。馬蹄形丘痕を施す際の爪痕と推測される痕跡がみられる。23は半載竹管状工具による刺突が施される。突起には貫通孔があり、上端の左右はつまみ状に肥厚する。胎土には小礫が多い。

24・25・38～40は、捺糸丘痕などが加えられる粘土紐と、馬蹄形丘痕あるいは半載竹管状工具の刺突が施されるもの。縄線は施されない。24は平縁で、口縁直下につまみ状の貼付が加えられる。馬蹄形丘痕が施される。粘土紐上の捺糸丘痕は燃りの異なる2本組で、矢羽根状を呈する。25は器形がゆがんでいるため、図の正面側が背面側よりも極端に低い。突起には貫通孔がある。2種類の半載竹管状工具による刺突・押しが施され、施文の際の爪痕が見られる。口唇の貼付は緩やかな波状で、突起間中央ではさらに弧状の貼付が加えられて、楕円形を呈する。38～40は半載竹管状工具による押しが施される。38の粘土紐には爪による刻みが加えられる。突起には貫通孔と、その左右につまみ状の貼付が施される。文様帯には粘土紐が主に横位に施され、その間に半載竹管状工具による押し引列が加えられる。39は大形のものの破片。口唇には捺糸丘痕が加えられる斜位の貼付が施される。突起の左右端には縦位の把手状の貼付が施される。文様帯の粘土紐には、捺糸丘痕の加えられる部分と、無文の部分がある。粘土紐間に半載竹管状工具による押し引列が加えられる。40は切出状の口唇端部の下端に、捺糸丘痕が加えられる粘土紐が貼付される。口唇端部には半載竹管状工具による押しが加えられる。突起下の粘土紐交点には縦位の橋状貼付が施される。41は縄文のみのもの。口唇端部に、捺糸丘痕が加えられる鎖状の貼付が施される。上部が二股の橋状貼付が加えられ、その上端が突起となる。

26・27・43は粘土紐が無文のもの。26は底部が小さく、胴部が強く張り出し頸部がくびれる、壺形に近い器形。口縁内面の2か所に、対向する横U字形の貼付が加えられる。半載竹管状工具による押しが施される。地文は結束のない羽状縄文。27は器形がゆがんでいるため、上から見ると楕円形を呈し、図の正面側と背面側で突起の位置がずれている。突起には貫通孔があり、上端中央に貼付が脱落

した痕跡がある。篋状工具による押引が施される。貼付は剝落部分が多い。43は文様帯をもたないもの。口唇に無文の波状貼付が施される。突起に貫通孔と、その左右につまみ状の貼付がある。

42は無文面に、無文の粘土紐と半載竹管状工具による押引が施されるもの。口唇には捺糸圧痕や貼付は施されない。H-7から同一個体が出土している(図V-30-1)。

44・45は縄文地に粘土紐による文様が施されるもの。44は平縁で、縄文が施される口唇端部に鎖状の貼付が加えられる。文様帯には弧状を基調とした粘土紐による文様が施され、貼付にはいずれも縄文が施文される。貼付は剝落部分が多い。地文は結束第1種羽状縄文で、重複して施すことにより、一見結束第1種斜行縄文風となる。底部付近は無文となる。45の貼付には捺糸圧痕が加えられる。突起には貫通孔がある。口唇は、直下に粘土紐が貼付されることにより肥厚し、角形を呈する。地文は結束第1種羽状縄文。

46は縄文のみのもの。平縁で、口唇端部には縄文が回転施文される。全面に結束第1種羽状縄文が施され、底部付近のみ無文となる。

28は4か所の橋状貼付をもつもの。平縁で、貼付上端が突起をなす。橋状貼付には、横位の馬蹄形圧痕と半載竹管あるいは棒状工具による斜位の刺突が2つずつ、縦に並べて施される。口唇断面は切出状で、半載竹管状工具による押引列が加えられる。胴部には結束第1種羽状縄文が施され、底部付近は無文となり、底部はやや張り出す。底面には網代と思われる圧痕が認められる。胎土には海綿骨針を多く含む。

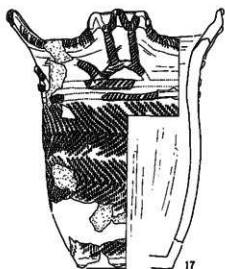
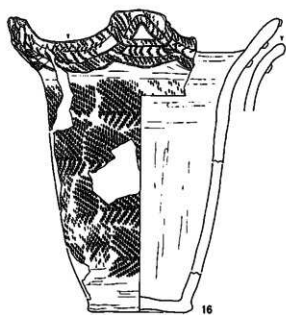
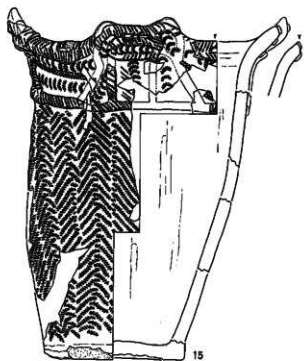
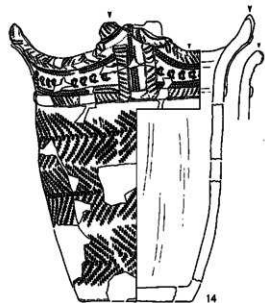
29~31は無文のもの。30は手捏ねの小さな碗形のもの。31は皿状を呈するものである。口縁部に6か所、円形の貫通孔が施される。調整がやや粗雑で、輪積み痕の残る部分がある。口唇調整の際の粘土が外面にかぶさっている。

32・33は脚付のもの。32は三脚付の深鉢。胴部には結束第1種羽状縄文が施され、不規則ながら脚部にも続く。脚は3本で、下端で環状に結ばれる。33は脚部の下端が板状である。板は方形を呈すると思われ、その四隅と中央に計5本の脚があるものと推測される。四隅に位置する脚のうちの2本と中央の脚の基部が残存する。四隅の脚の外面には、一方には縄文地に棒状工具による圧痕が、他方には2本組の捺糸による圧痕が施される。脚上端の剝落状況から、32と同様の丸底の本体がのものと推測される。

写真掲載としたものは、おもに地文のみが施されるものである。①・②は口唇に捺糸圧痕が施されるもの。①は口唇に羽状の捺糸圧痕が施され、その直下に馬蹄形圧痕が加えられる。②は縄文のみのもので、平縁に、刻み状の2本組捺糸圧痕が施される。③~⑥は口唇に、捺糸圧痕が加えられる波状の貼付が施されるもの。③は突起をもち、無文地に、捺糸圧痕のある粘土紐とそれに沿った縄線、半載竹管状工具による押引が施される。橋状貼付をもつ。④~⑥は縄文のみのもの。⑥の粘土紐の圧痕は篋状工具による。⑦・⑧は切出状の口唇に縄文が回転施文されるもの。⑨・⑩は先細りの口唇間際まで縄文が施されるもの。⑪は無文のもの。

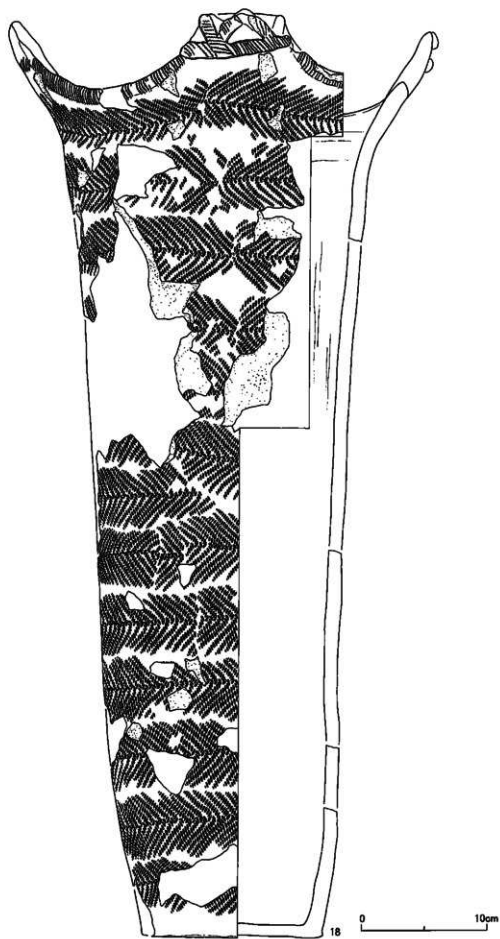
Ⅲ群A-3類(図V-2、V-16~28-47~101、図版55~60・80~83)

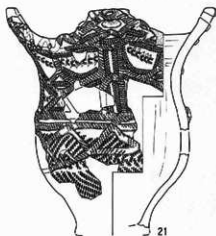
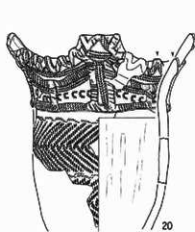
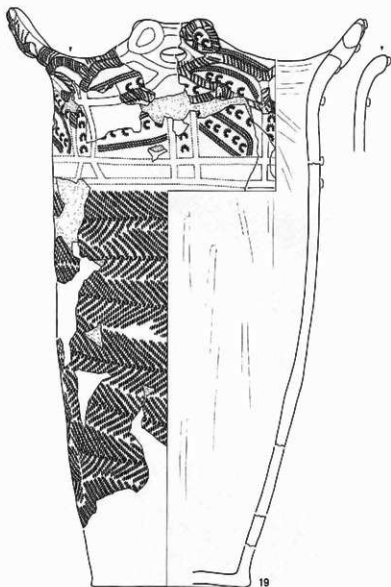
Ⅲ群A-3類には、無文の貼付による文様をもつものと、沈線による文様をもつものがある。どちらも縄文地に施される。4か所の突起をもつものが多く、平縁のものは少ない。突起の形状には棒状のもの、山形ものが多いが、形状の異なる二対の突起をもつものもある。突起周辺には貼付が加えられることもある。口唇は丸形・外傾する切出状などで、端部に縄や棒状工具による刻み加えられるものが多い。また、口唇直下に貼付帯を加えることにより切出状に形成するものが複数みられる。地文は結束のない斜行縄文が多く、縄端の結目による圧痕がみられるものがある。また、少数ではある



0 10cm

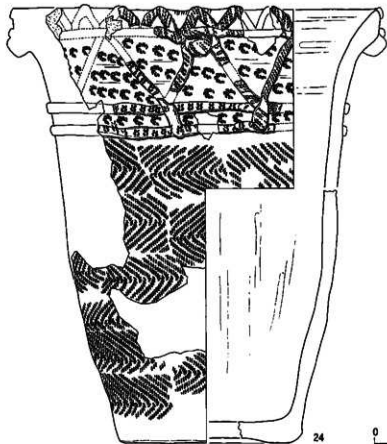
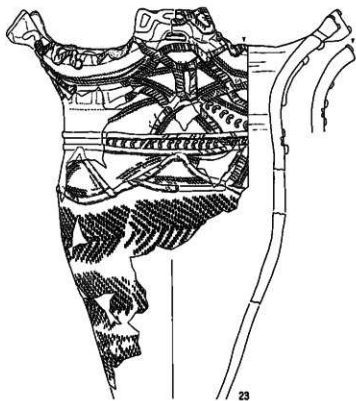
図V-6 包含層の土器(3)





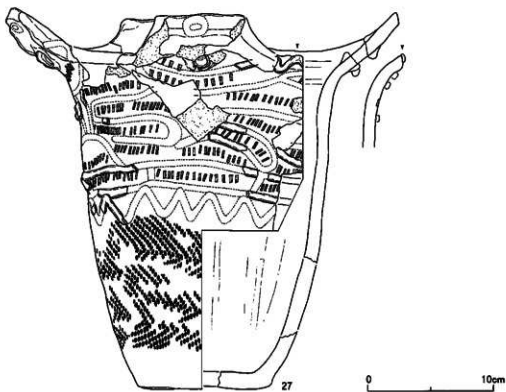
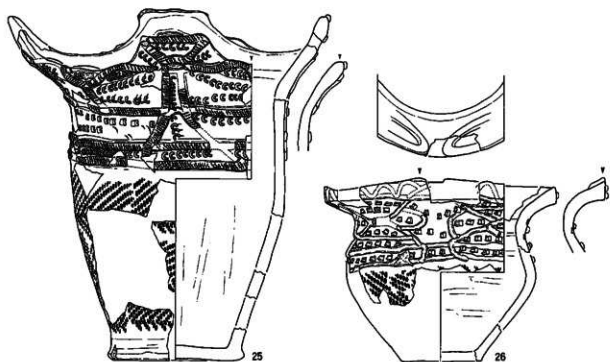
0 10cm

図V-8 包含層の土器(5)

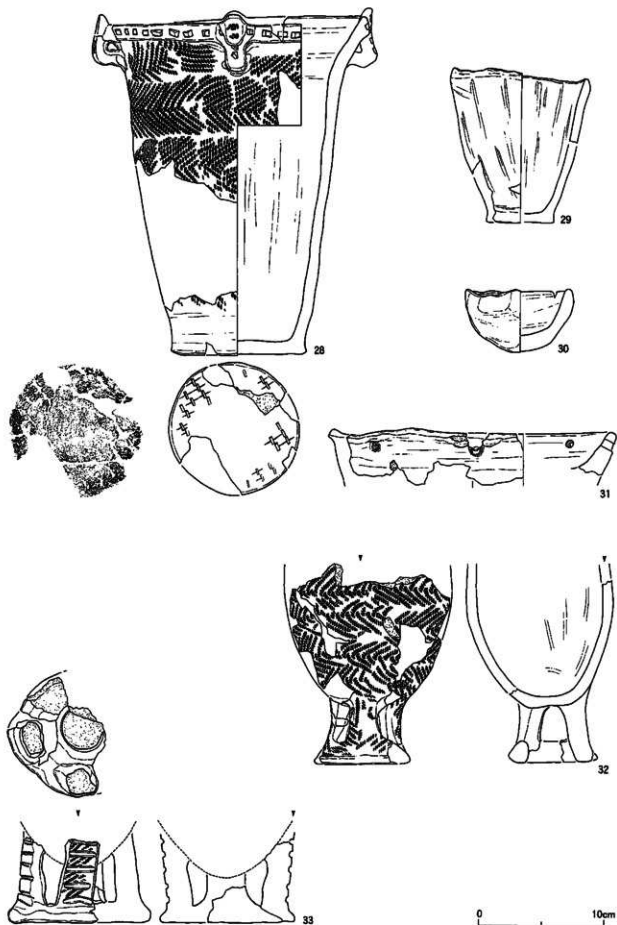


図V-9 包含層の土器(6)

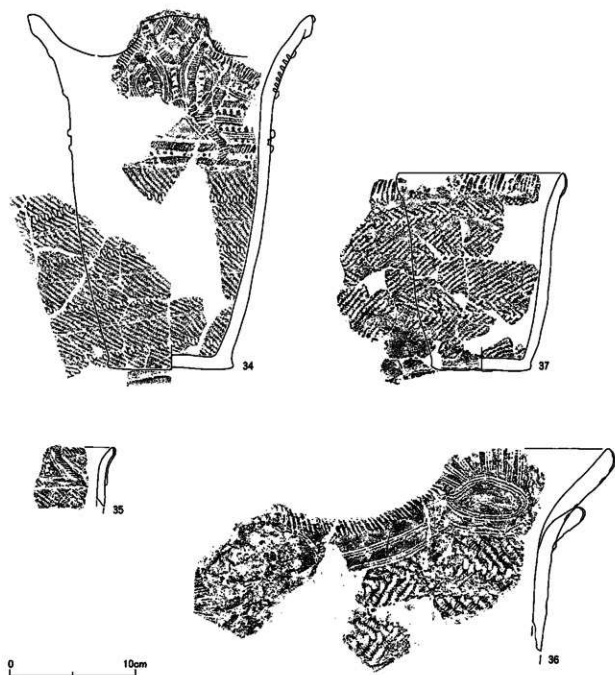




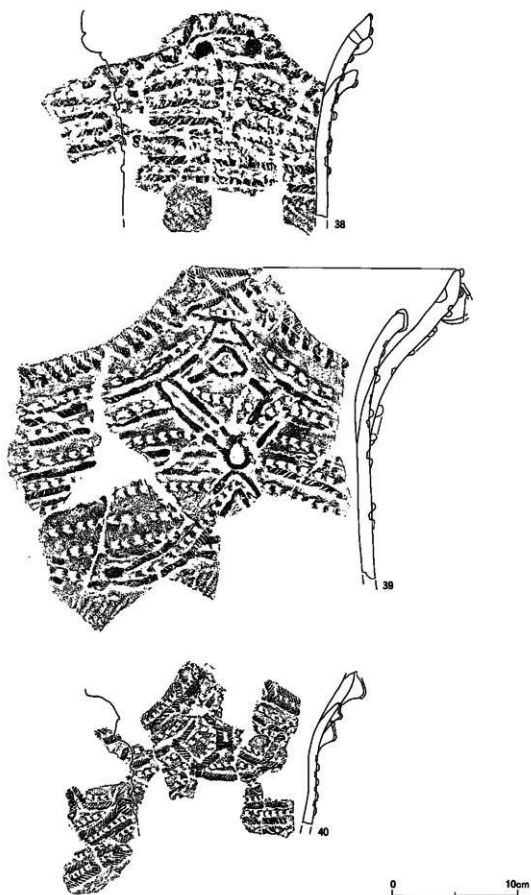
図V-10 包含層の土器(7)



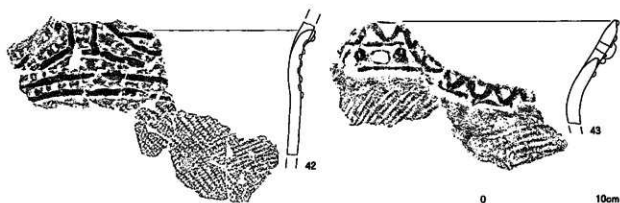
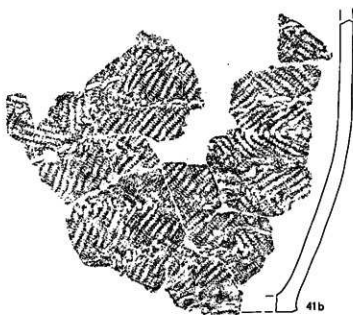
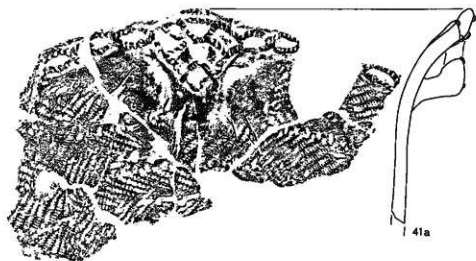
図V-11 包含層の土器(8)



図V-12 包含層の土器(9)



図V-13 包含層の土器 (10)



図V-14 包含層の土器 (11)

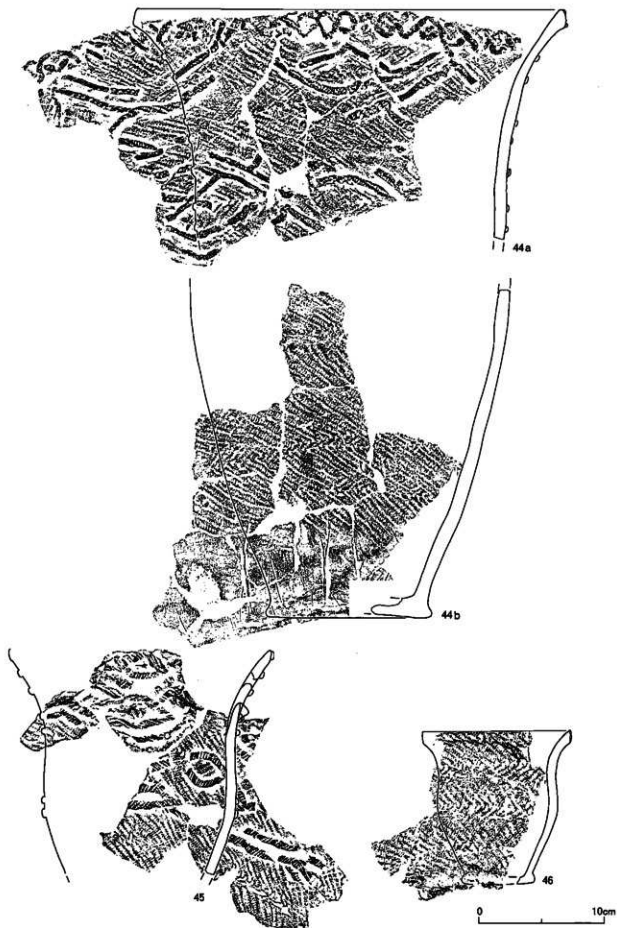


図 V - 15 包含層の土器 (12)

が、結束のある縄文や、結節部の回転がみられるものもある。魚骨回転文も少数みられる。底部はやや張り出すものが多い。器形は胴部がやや張り出し、頸部が若干くびれるものが多いが、直線的なものもある。胎土には少量の繊維、砂粒を含むものが多い。海綿骨針や軽石粒などを含む場合もある。また、東北地方の影響を強く受けたと推測されるものが2個体出土している(図V-21・22-66・67)。

47・48・68~70は粘土紐の貼付による文様が施されるもの。地文には結束や結節がみられる。47はまとまって出土したものである(図V-2 2段目)。大形で、口縁部を欠失する。文様は4単位で、そのうちの1か所では、貼付間を埋めるような沈線が施され、底部付近まで続いている。他の部分では地文の縄文が密に施されているが、沈線が施される部分では無文の部分が広くみられる。48・69・70は2本組の粘土紐により凸レンズ状の文様が施されるもの。48・70は口唇直下に貼付帯が加えられる。48は棒状突起1か所のみが残存している。口唇の貼付帯上には沈線が加えられ、それと交差するやや斜位の擦糸による刻みが施される。突起には横位の擦糸圧痕が施される。69の突起は先端を欠失するが、弁状と推測される。突起下に橋状貼付が剥落した痕跡がある。丸形の口唇に、2本組の擦糸による縦の刻みが加えられる。70は山形突起が1か所残存する。口唇直下に、文様を構成するものより太い貼付帯が加えられる。口唇は角形で、口唇端部と口唇直下の貼付帯に、縄による斜位の刻みが加えられる。突起直下と文様帯の下位に、貼付の剥落した痕跡がある。68は縦位の鋸歯状と、それを結ぶ横位の貼付が施される。口唇は丸形で、縄の縦の刻みが加えられる。

49~55・71~78は沈線による文様が施されるもの。50・53・71・72の地文には、結束・結節あるいは縄端の結目がみられる。

49・50・71~74は2~3本組の凸レンズ状沈線が施されるもの。49・72は棒状突起、73は山形突起、50は二重二対の突起をもつ。49は突起に横位の粘土紐が巻きつけられる。突起先端は欠失する。口唇は角形で、突起周辺では粘土紐が貼付され、肥厚する。口唇端部と肥厚部には縄文が回転施文される。胴部には凸レンズ状の沈線と、その下位に十字形の変形したような沈線が施される。地文には条の端部がU字形に繋がった部分があり、原体の端部を屈曲させて施文したと推測される。50は緩やかな山形突起と大小4つの小突起からなる突起をもつ。突起の下位には擦糸圧痕が加えられる貼付が施される。山形突起には貫通孔がある。口唇は、直下に貼付帯が加えられることにより段をもつ明瞭な切出状をなし、端部に擦糸による縦の刻みが施される。図の左右の突起では、突起上にも擦糸圧痕が施される。71は「三つ山」と思われる突起をもつ。突起下には左右一対の貼付が剥落した痕跡がある。口唇は、直下に貼付帯が加えられることにより肥厚する角形をなす。端部には縄の斜位の刻みが加えられる。72は棒状突起の上面が環状に整形され、外周に刻みが加えられる。突起には粘土紐が横位に巻きつけられ、突起下に橋状貼付が加えられる。口唇は、直下に貼付帯が加えられることにより段をもつ明瞭な切出状をなす。寛状工具により、口唇端部には縦に、貼付には斜位に刻みが加えられる。胴部の沈線は半截竹管状工具による。73は小形のもの。突起下に貼付の剥落痕がある。角形の口唇に縄文が回転施文される。74は外傾する切出状の口唇に縄による斜位の刻みが加えられる。地文は結束第1種羽状縄文。

51・52・75・76は直線的な沈線が施されるもの。51・52は山形突起をもち、突起下に弧状の貼付が加えられる。51は突起に貫通孔がある。口唇直下に貼付帯が加えられ、丸形の口唇には縄による斜位の刻みが、口唇直下と突起下の貼付には寛状工具による斜位の刻みが加えられる。波状沈線と多条の平行沈線が描かれる。地文は結束第1種斜行縄文。52は接合していない口縁部について図上で復原した。口唇は角形で寛状工具による斜位の刻みが加えられる。半截竹管状工具による2本組の沈線が施

される。地文は結束のある斜行縄文。底部は明瞭に張り出す。75は半截竹管状工具による2本組の沈線で、方形区画が描かれる。突起は剝落している。丸形の口唇には縄による縦の刻みが施される。突起下の沈線交点には高さのない貼付が加えられる。全体の3/4以上が残存している。76は小形で、口縁部に並行沈線が施されるもの。切出状の口唇に篋状工具による斜位の刻みが加えられる。

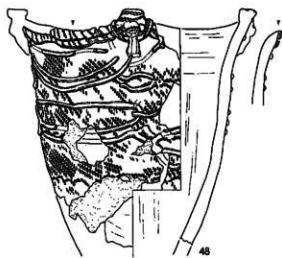
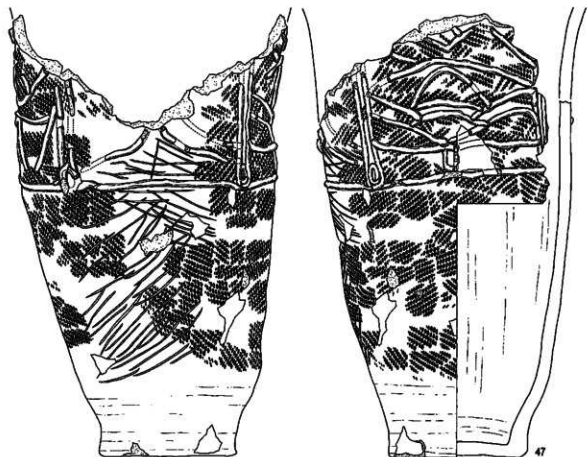
53は図上の正面でのみ不規則な沈線が施される。突起は、把手状の貼付により緩やかな山形をなす。突起下には横位の貼付が加えられ、図上の正面では刻みが加えられる。口唇は、直下に貼付が加えられることで肥厚し、角形を呈する。口唇端部には篋状工具による縦の刻みが施される。地文は斜行縄文で、縄端の結目の圧痕がみられる。器表面は剝落部分が多い。54は魚骨回転文の土器、北海道式石冠などとともにとまって出土したもの(図V-2 下段)で、突起先端以外のほぼ全体が残存する。突起部下に刻みのある横位の貼付とそれを囲む凸レンズ状沈線が施される。口唇は丸形で縄の縦の刻みが加えられる。55は不規則な凸レンズ状の沈線が施される。山形突起2か所が残存し、一方には縄文と沈線の加えられる橋状貼付が、他方には縄線に加えられる横位の棒状貼付が施される。文様帯は上下を3本組の横線沈線で区画され、横に並ぶ凸レンズ状沈線が2段施される。下段は弧状沈線となる部分もある。地文は斜行縄文で、突起部のみ回転方向を変えることで、羽状をなす。

77は斜行縄文地に木葉形の沈線が施される胴部破片。78は斜面の風倒木痕の窪みから1個体がとまって出土したものだが(図V-2 3段目)、胎土が脆弱で磨耗が著しかったため接合が困難で、器形の復原はできなかった。山形突起と「二つ山」の突起をもち、山形突起には縦位の貼付が加えられる。口唇は角形で、棒状工具による斜位の刻みが施される。口縁に沿った2本組の沈線が横環する。

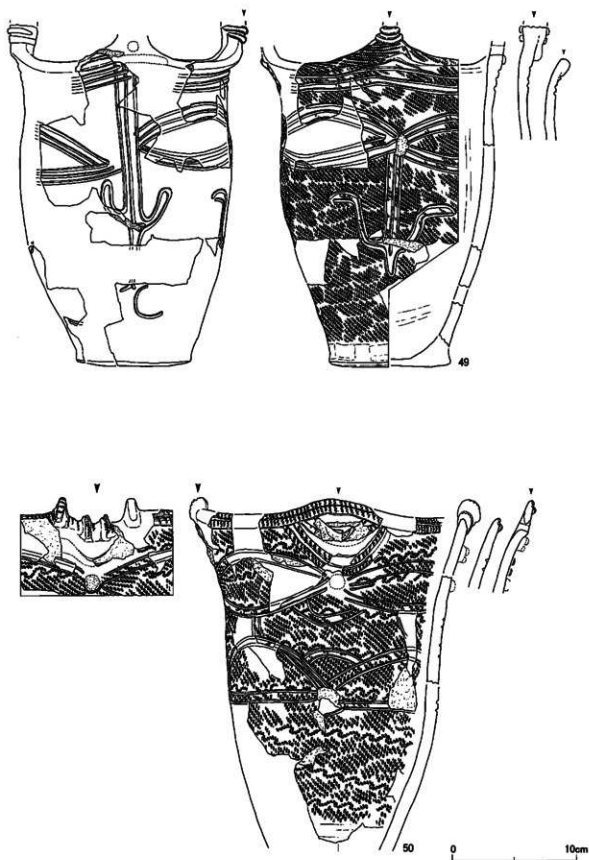
56~60・79~82は縄文のみのもので、突起周辺に貼付が加えられるもの。56・80は平縁の4か所に環状貼付を加えることにより突起状をなすもの。56は切出状の口唇に縄文が回転施文され、一部に圧痕となる部分もある。80はやや肥厚する切出状の口唇に縄による斜位の刻みが加えられる。57は二種二対の突起をもつ。棒状突起は肥厚し、上面が楕円形の環状に整形される。突起下にボタン状の貼付が加えられる。口唇は丸形で、縄による斜位の刻みが加えられ、突起部にも及ぶ。58は2か所の棒状突起が残存する。胴部下半が張り出す器形。突起上端は平坦に整形される。突起下に横位の貼付と橋状貼付が加えられる。口唇直下に突起下貼付に続く貼付帯が加えられることにより、口唇断面は肥厚する切出状を呈する。口唇端部には縄文が回転施文され、貼付上や突起上面にも施される。81は「二つ山」の突起下に、擦糸圧痕が加えられる環状貼付が施される。口唇端部は切出状で、縄による斜位の刻みが加えられる。82は3本の粘土紐を、口唇の外・内面にまたがって貼付することで突起をなすもの。下位に横位の貼付が加えられる。口唇は角形で、図の左半では回転縄文が、右半では篋状工具による縦の刻みが加えられる。59・60・79は山形突起の周辺に貼付が加えられるもの。59・79は貼付に縄線が加えられる。59の口唇は丸みのある切出状で、縄による縦の刻みが施される。60は突起部に貫通孔とボタン状突起が施される。口唇は角形で、篋状工具による縦・斜位の刻みが加えられる。図の正面では、口縁が片口状に外傾する。79は貼付を変えることで二種二対の突起をなすと推測されるもの。図の右の突起には凸レンズ状、左の突起には9の字状と並行する2条の貼付が施される。角形の口唇に縄による縦の刻みが加えられる。地文は複節の斜行縄文で、貼付上および口唇にも同一原体が用いられる。

61~65・83~85は縄文のみのもので、83は貫通孔のある弁状突起をもつ。84は丸形の口唇に半截竹管状工具による押引が加えられる。85は斜面で1個体がとまって出土したもの(図V-2 上段右)。丸形の口唇に縄による縦の刻みが施される。61は器面に無節の結節部分のみが回転施文される。Lの斜行縄文が部分的にみられる。口唇は切出状で、篋状工具による縦の刻みが加えられる。器形のゆ

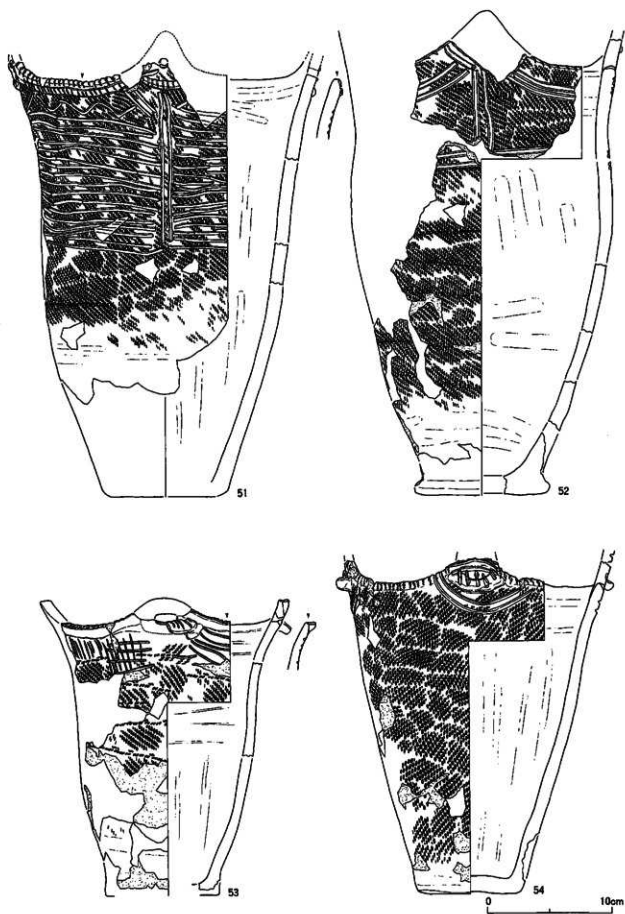




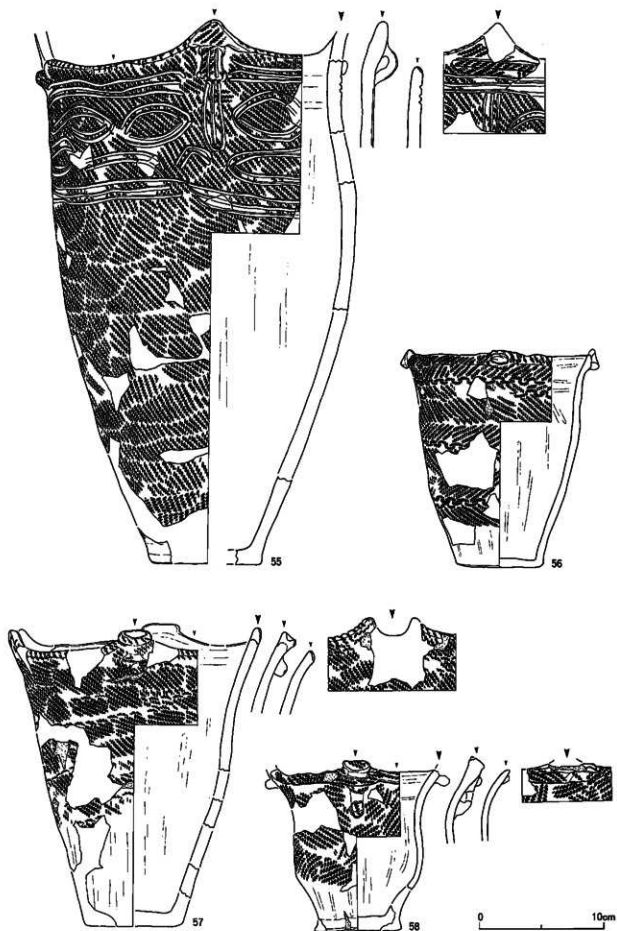
図V-16 包含層の土器 (13)



図V-17 包含層の土器 (14)



図V-18 包含層の土器 (15)



図V-19 包含層の土器 (16)



図V-20 包含層の土器 (17)

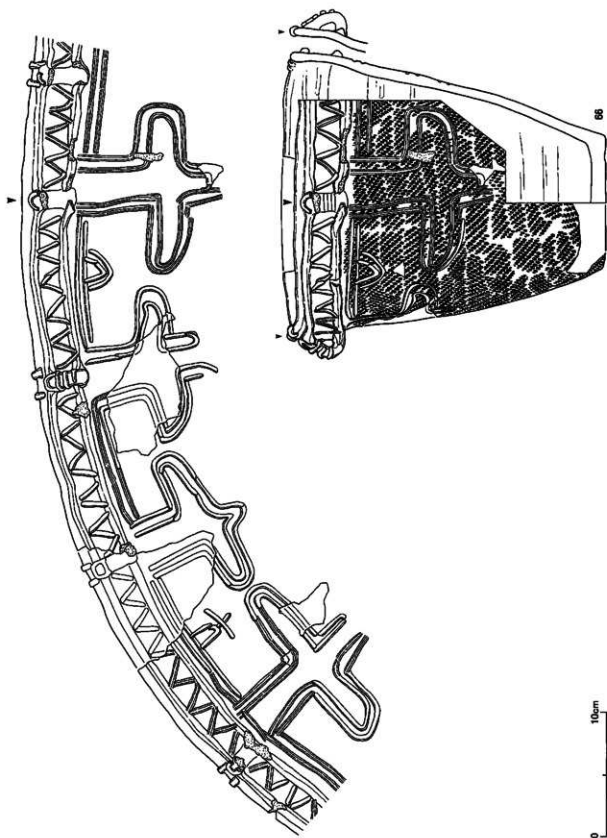


図 V-21 包含層の土葬 (18)

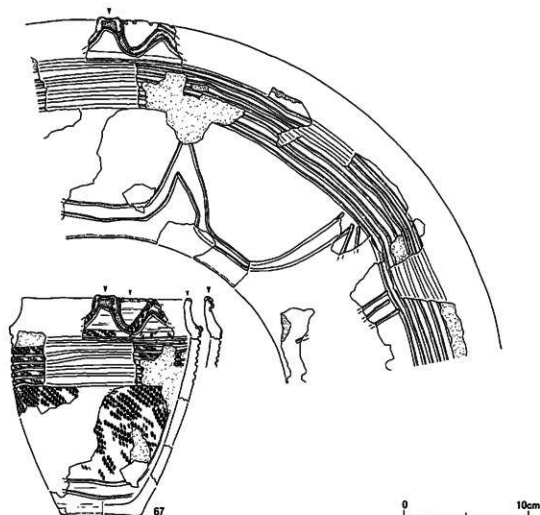
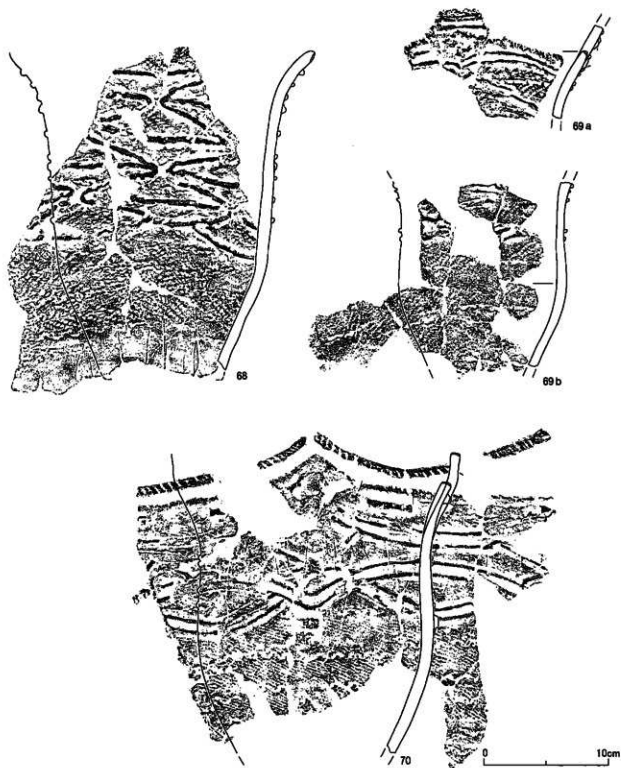


図 V-22 包含層の土器 (19)

がみが著しい。62～65は縄文のみが施される小形のもの。62は突起が3か所のもの。口唇には縄による斜位の刻みが加えられる。突起部の縄文は胴部と回転方向を変えることにより、羽状をなす。63の縄文はやや横走気味。口唇は角～切出状で、縄による縦～斜位の刻みが加えられる。64・65は斜行縄文のみが施される。65の口唇は角形で、縄文が回転施文される。

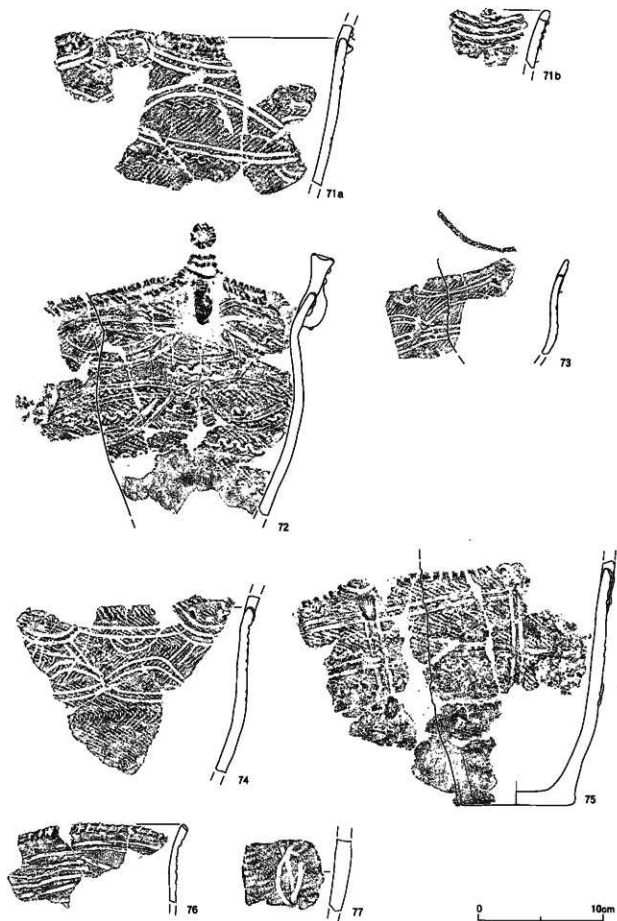
86～89は魚骨回転文が施されるもの。86は口縁部に沿って1cmほどの幅で魚骨回転文が施される。突起部には縦位の貼付が加えられる。口唇は角形で、端部に沈線様の文様を加えられる。この沈線様の文様も魚骨によるものの可能性もある。胴部には斜行縄文が施される。87・88は地文として魚骨回転文が施されるもの。87は切出状の口唇端部に半截竹管状工具による押引が加えられる。88は底部間際まで魚骨回転文が施される。89 a～eは同一個体のもの。口縁部から胴部上半に魚骨回転文が、胴部下半には斜行縄文が施されるが、重複する部分もある。胴部上半には沈線文が描かれる。口唇は切出状で、篋状あるいは棒状工具による斜位の刻みが加えられる。

90～93は貼付が施される突起部分の破片。90の突起は著しく肥厚する。上面には縄文地に平行沈線が施され、周縁には縄による刻みが加えられる。突起下は縦位のつまみ状の貼付と、それに直行する横位の貼付が施される。91の突起上面の貼付には縄線が加えられる。92は突起上端の左右に楕円形の環状貼付が施される。貫通孔がある。93は環状の貼付を組み合わせ、立体的な花卉のような形をなす。貫通孔が上下2か所ある。



図V-23 包含層の土器 (20)





図V-24 包含層の土器 (21)

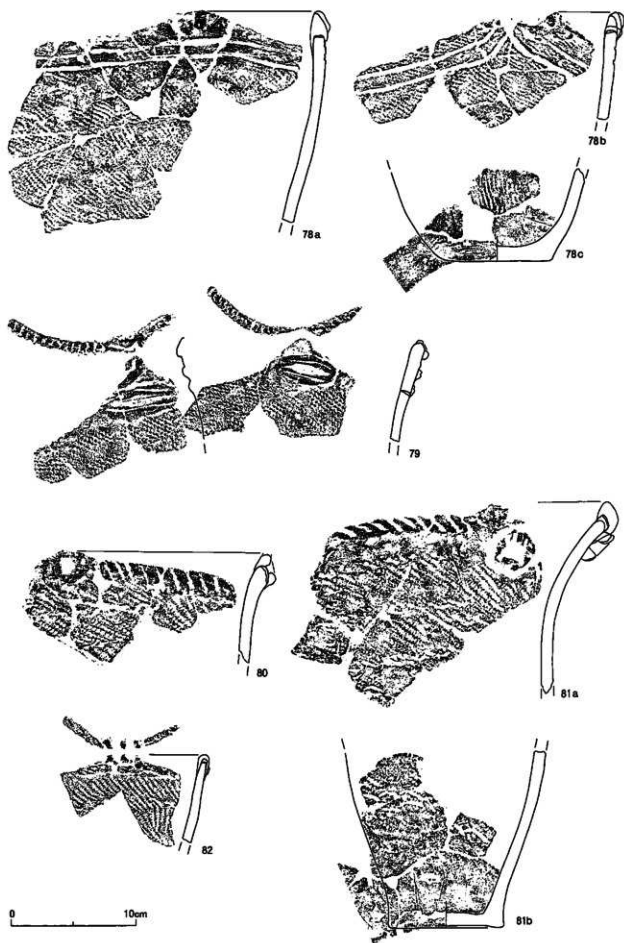
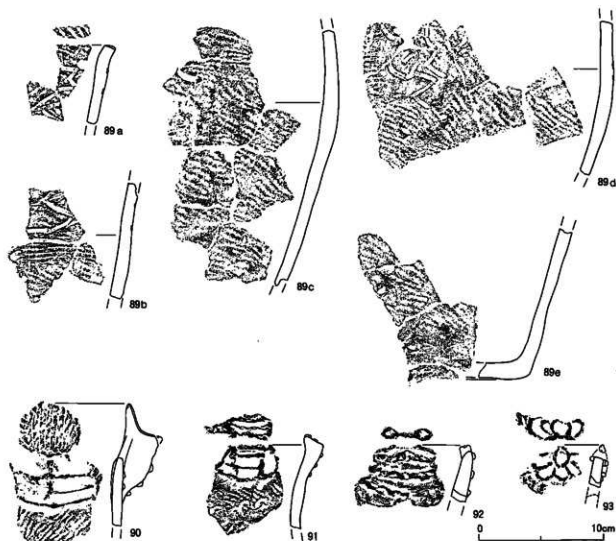


図 V-25 包含層の土器 (22)



図V-26 包含層の土器 (23)

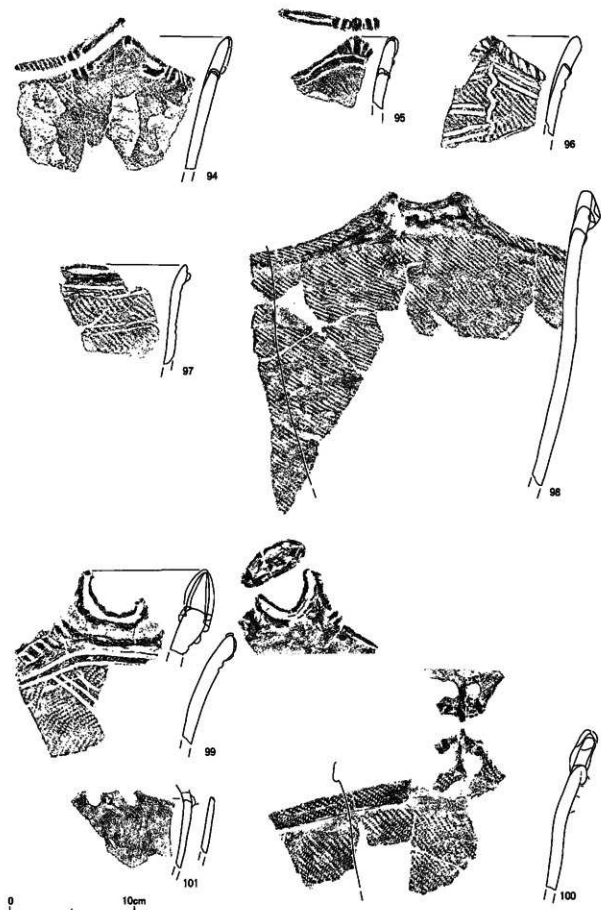


図V-27 包含層の土器 (24)

94～99は口唇に沿った細い貼付が施されるもの、およびそれに類するもの。94・95は口唇に貼付が施されるもの。94は山形の突起に沿った貼付と、突起の両脇に外・内面にまたがる貼付が施される。口縁は丸形で、篋状工具による斜位の刻みを加えられる。貼付は剝落部分が多い。95は突起頂部の左右口唇に長楕円形の粘土紐が貼付される。頂部には外・内面にまたがる貼付が加えられる。口唇直下にも粘土紐が貼付される。96は沈線が施されるもの。口唇は切出状で、太い棒状工具による斜位の刻みを加えられる。97は口唇端部に、口唇に沿った沈線が加えられるもの。胴部には沈線が施される。98は突起部の口唇が強く肥厚し、端部に太い沈線が加えられる。99は大きな三日月形の突起をもつもの。突起の形状に沿った貼付が外・内両面に施される。突起下には横位の貼付が加えられ、その両端は外・内面にまたがる突起両脇の貼付と繋がる。切出状の口唇の上下端に口唇に沿って粘土紐が貼付され、その間に縄の斜位の刻みを加えられる。胴部には斜行縄文地に沈線が施される。

100は口唇直下に折り返しあるいは貼付帯が巡る。平縁で、貼付により成形された突起をもつ。突起には左右一対の貫通孔があり、外・内面にまたがる貼付が加えられる。突起下にも貼付の剝落した痕跡がある。地文は斜行縄文で、折り返し・貼付上にも施される。

101は無文のもの。突起部の破片で、左右一対の貫通孔がある。口唇は丸形で、篋状工具による斜位の刻みを加えられる。



図V-28 包含層の土器 (25)

66・67は東北地方の影響を強く受けていると推測されるもの。同一グリッドから出土している。双方とも平縁で、口縁部はいわゆるキャリパー形あるいはそれを模したような形態を呈し、鋸歯状の文様が施される。66は直線的な器形で、口縁部の器壁がやや薄く、いわゆるキャリパー形を模したような形態である。口縁部には2条の粘土紐が横環し、その間に鋸歯状の沈線が加えられる。2条の粘土紐を結ぶような橋状突起が5か所に施される。橋状貼付には横位と山形の粘土紐が加えられ、突起上部の口唇上には外・内面にまたがる貼付が施される。胴部には斜行縄文地に、2本組沈線で十字形が描かれる。沈線は半截竹管状工具の内・外面を併用していると推測される。67はやや胴部がふくらみ、口縁部はいわゆるキャリパー形を呈する。平縁で、無文の口縁部に鋸歯状の貼付が施される。貼付には縄線が加えられ、沈線で縁取られる。鋸歯状の頂部にさらに貼付が加えられる部分があり、突起状を呈する。口唇は角形で、棒状工具による斜位の刻みが加えられる。胴部には斜行縄文地に、平行沈線と、胴部をほぼ半周するようなU字形の沈線が施される。66・67とも内面調整は丁寧で、胎土には砂粒を多く含む。

写真掲載としたものは、おもに縄文のみのものである。⑫はまとまって出土したもの(図V-2 上段左)。口縁を欠失する。結束第2種斜行縄文が施される。Ⅲ群A-2類の可能性もある。⑬は結束第2種羽状縄文がまばらに施される。口唇は丸形で、縄による縦の刻みが加えられる。平縁で、外・内面にまたがって貼付される粘土塊により小突起をなす。⑭は4か所の突起をもつ。二種二対の可能性もある。突起の内側が凹んでおり、中央部が薄くなる。突起下に縄の刻みがあるつまみ状の貼付が施される。口唇は丸形で、縄の縦の刻みが施される。地文は斜行縄文で結節がみられる。⑮は山形突起をもつ。外傾する切出状の口唇に棒状工具の斜位の刻みが加えられる。

#### Ⅲ群B類(図V-29-102~108、V-71、図版84)

**概要** 71点出土した。撚糸や櫛歯状工具による条痕が縦位に施されるものである。地文のみのものと、沈線が施されるものがある。口唇は丸形のものが多い。胎土には繊維・砂粒・小礫などが含まれる。器形がわかるものでは、胴部が張り出し、頸部がくびれる。層位別には、Va層から20点、Vb層から50点、Vi層から1点である。このうち7個体を図示した。

**分布状況** 調査区北西側のⅢ区のうち、南西側にややまとまって分布する。この他Ⅰ区の広範囲に少数が散在している。

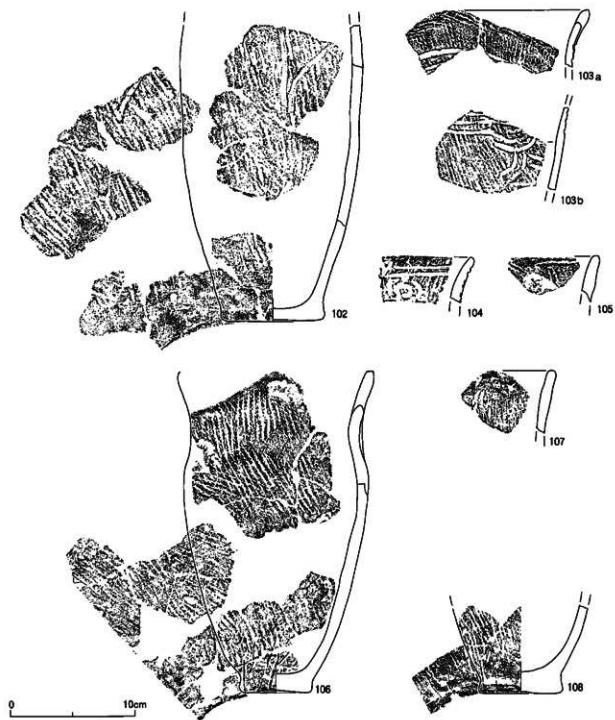
**掲載遺物** 102~104は沈線が施されるもの、105~108は地文のみのもの。地文は、107は櫛歯状工具による条痕が、これ以外は縦位の撚糸文が施される。102は胴部がやや張り出す器形。太い沈線による文様が施される。103は突起部の口唇がやや肥厚し、口唇直下に斜位の撚糸文が施される。104の口縁には渦巻状の沈線が描かれる。105は突起近くの破片。口唇直下に撚糸による縄線が加えられる。106は波状口縁の深鉢。縦位と斜位の撚糸文が施される。107は櫛歯状工具による条痕が施される突起部の破片。108は底部である。

#### IV群(図V-3、V-30~48-109~240、V-71、図版61~68、84~90)

31,159点出土した。内訳は、A類：前葉のもの30,784点、B類：中葉のもの43点、C類：後葉のもの332点である。

#### IV群A類(図V-3、V-30~46-109~223、V-71、図版61~67、84~90)

**概要** 30,784点出土した。出土土器の5割近くを占める。層位別にはⅢ層1点、Ⅳ・Ⅳa層10点、Ⅴ層1点、Va層12,012点、Vb層17,947点、Vc層7点、Vi層140点、VII層2点である。本来的な遺物包含層はVa・Vb層である。このうち34個体の器形を復原し、これらを含む115個体を図示した。なお、復原したもののうち図示していない2個体については、写真および掲載土器一覧表に記している。



図V-29 包含層の土器 (26)

無文地に沈線による文様が施されるものが多く、縄文地に沈線が施されるものもある。磨消縄文が施されるもの、櫛歯状沈線が施されるものが少数みられる。また、口縁部文様帯のみのもの、縄文のみのもの、無文のものも多い。口縁には波状口縁と平縁があり、双方とも「8の字」状の貼付が施されるものがある。器形は、深鉢には直線的なものと、胴部の中～上位が張り出し、頸部がややくびれるものがある。鉢には直線的なもの、胴部が緩やかに張り出し頸部がややくびれるもの、胴部の張り出し・頸部のくびれが強いものがある。器種は深鉢・鉢・壺があり、深鉢が最も多い。胎土には砂粒が多く含まれる。外傾する輪積み度が顕著に認められる。

分布状況 IV群A類の分布は調査区のほぼ全域に及ぶが、特にI-1・2区に集中しており、その範囲は後期の遺構集中区に重なる。他にIII-1区周辺にもやや集中する一方、II区の尾根状地形部分と、その西側の沢状地形部分では分布が希薄である。

掲載遺物 141・142は涌元式に相当するもの。141は縄線による文様が施される。142は折り返し口縁のもの。無節の縄文地に、口縁部には並行沈線とそれを縦断する蛇行沈線が施され、その下位には蛇行沈線と平行沈線が垂下する。

109～125・143～175・177～193は沈線による文様が施されるもの、126～128・176は磨消縄文が施されるもの、129・194～199は櫛歯状沈線が施されるもの、130～132・200～211は縄文のみのもの、133・212・213はタガ状の貼付が施されるもの、134～140・214～222は無文のものである。

沈線による文様が施されるもの

109～111・143～152は渦巻状の沈線が施されるもの。109のみ縄文地、他は無文地である。

109・111・143～148は渦巻状沈線を4～8か所に配し、その間を山形・くの字状などの沈線や、円形の沈線で充填したもの。109は文様が1段で、3本組沈線で描かれる。111・143・144・146～148は文様が2段施される。口縁には並行沈線が施され、143ではそれを結ぶ(く)状沈線が、144・146ではそれを縦断する蛇行沈線が加えられる。文様には143は2本組沈線が、他は単独の沈線が用いられる。143は6か所の突起をもつと推測され、渦巻状文の位置は突起に対応している。突起には8の字状の貼付が施され、上端は内面にまたがる。146は平縁に8か所と推測される8の字状貼付が加えられる。広範囲から同一個体の破片が多く出土しているが、破片が不足しており接合できなかった。148の口縁は折り返して、折り返し上に並行沈線が施される。突起に隙間のない8の字状の貼付が加えられる。145はこれらと同様の渦巻状沈線が施されると推測される胴部破片。アミの部分には赤色顔料が付着しており、アミの濃い部分では赤色顔料が被熱により黒変している(口絵3)。111は渦巻状沈線間に弧状の沈線が加えられる。沈線は3本組で描かれる。口縁は折り返して、折り返し上に長楕円形の沈線が加えられる。突起は6か所で、渦巻状沈線の位置と対応する。外面には炭化物が付着しており、内面の下半は黒色を呈する。器表は剝落が著しい。

110・149～152は小形で、1段の渦巻状沈線が施されるもの。149は縄文地、他は無文地である。110・150は単独の沈線が、151・152は2本組の沈線が用いられる。110は突起・渦巻状文は3か所である。口縁には並行沈線間に(く)状沈線が加えられる。149・150は口縁に8の字状貼付が加えられる。149はJ字形を呈する環状の沈線を2つ組み合わせて渦巻状をなす。環状沈線の内部に(く)状沈線が加えられる。150は口縁に平行沈線が施され、S字状の沈線がこれを縦断する。151・152は2本組の渦巻状沈線間にくの字状の沈線が充填される。151は口唇に刻みが加えられ、突起頂部では指頭状圧痕となる。

112・153～155・170は明瞭な縦位の区画があるもの。112は環状の沈線が施されるもの。4か所の突起をもち、突起下を縦長の長方形沈線と、縦に並ぶ三角形沈線により区画し、区画内には横長の長方



形沈線が規則的に配置される。隣接する沈線間は隆起帯となる。口縁は折り返しで、折り返し上に並行沈線が施される。器面の剥落が著しい。153は区画内にX字形の沈線と、隙間を埋める山形の沈線が描かれる。154は突起が剥落している。区画内には弧状の並行沈線が描かれる。155は突起下が蛇行沈線で区画され、区画内に不規則な沈線が描かれるようである。170は区画内に、平行沈線間に)(状沈線が加えられる文様が、斜位に連続して施される。突起には指頭状圧痕が加えられる。口縁部文様帯には、並行沈線間に連続する山形沈線が加えられる。

113~116・123・124・156~162・173・174は区画をもたない、あるいは不明瞭であり、幅の短い文様が、横方向に多数連続して施されるもの。113は壺。3か所の突起をもつ。口縁には突起間に長楕円形の沈線が施される。頸部~胴部には、二重の長楕円形沈線、横に連続する弧状の並行沈線、並行沈線と波状沈線などによる文様が描かれる。114は弧状の並行沈線が多重に施され、魚鱗状を呈するもの。沈線は半截竹管状工具による2本組と推測される。

115・123・157・158・174は山形の沈線が施されるもの。115は突起が5か所。山形沈線が2段施される。図の正面では、弧状と縦位の沈線が不規則に加えられる。157は突起に8の字状貼付が加えられる。山形沈線の位置は突起に対応する。123・158・174は小形の鉢。158は突起に斜位の刻み加えられる。123は対向する山形に施された弧状沈線間に)(状あるいは楕円形の沈線が加えられる。174の突起は2か所と思われ、指頭状圧痕の加えられる貼付が施される。

116・159は蛇行沈線が施されるもの。いずれも折り返し口縁である。116は縄文地に、口縁の折り返し上から連続する蛇行沈線が施される。下端は平行沈線と、連続する弧状沈線で区画される。沈線は半截竹管状工具による。159は折り返し部に並行沈線が加えられ、その下位から蛇行沈線が描かれる。突起には刻み加えられる。160は矢羽根状の沈線が施されるもの、161は縦位の並行沈線が施されるもの。156は沈線と竹管状工具の刺突による文様が施されるもの。124・162・173は、平行沈線間に)(状沈線が加えられた文様を単位とし、これが横方向に連続して施されるもの。162は折り返し口縁。沈線はためである。124・173は小形の鉢。124の突起は2か所である。173は折り返し口縁である。

125・162~169・171・172・175は横位に展開する文様が施されるもの、およびそれらとの共通点をもつもの。163・164は横位に展開する曲線的な沈線が施される。163は3本組沈線が用いられる。緩やかな突起部には弧状と山形の沈線が加えられる。164は突起頂部に指頭状の圧痕が加えられる。165~167は、横環する平行沈線により文様が構成されるもの。口縁部文様帯で多用される文様を胴部に施している。165は平行沈線を縦断する蛇行沈線が、166・167は平行沈線を結ぶ)(状沈線が加えられる。167は縄文地。折り返し口縁で、突起には3つの指頭状圧痕が加えられる。168・169・171・172はための沈線による文様が施されるもの。168は楕円形・弧状の沈線で文様が構成される。169は壺である。縦位の区画をもち、区画内に3本組の弧状の沈線と、その間を結ぶ)(状沈線が描かれる。棒状工具による刺突が加えられる。171は口縁部に曲線状の沈線が描かれる。胴部には縦位の区画をもつ。172は、170に類似する口縁部文様帯をもつ。

125・175は小形の鉢。平行沈線が施される。125の口縁には8の字状貼付の一部が残存している。175は縄文地で、竹管状工具による刺突が施される。

118・119・177~180は格子目状沈線が施されるもの。180のみ縄文地。118はつぶれた状態で出土したもの(図V-3 2段目)で、ほぼ完形に復原された。177・178は口縁に8の字状貼付が、180は突起下にボタン状の貼付が加えられる。119・179は、折り返し口縁で、格子目状沈線の上下端に区画をもたない。

117は壺形土器の頸部。4か所の橋状把手をもつ。頸部には隆起帯による文様が、胴部には沈線文が

施される。アミの薄い部分は赤色顔料が付着する部分、濃い部分は赤色顔料が被熱により黒変した部分である。赤色顔料は内面にも付着している。120は縄文地に不規則な細い沈線が施されるもの。

121・122・181～183・185は口縁部文様帯のみのもの。185には環状の、他には8の字状の貼付が加えられる。121・181・182・185は縄文地のもの、122・183は無文地のもの。121はまとめて出土したもの(図V-3 3段目)。平線で8の字状貼付は6か所である。122は屈曲の強い鉢。折り返し口縁で、貼付は2か所。口縁部文様帯の下位には横線する貼付帯が施される。181の貼付は6か所で、外面に炭化物が付着する。182は折り返し口縁。183は小形で、4か所の突起に8の字状貼付が加えられる。185は環状貼付が施され、口唇端部には沈線が加えられる。

184・186～192は口縁部の破片、193は底部の破片。184～188は突起部に貼付をもつもの。184はボタン状貼付をもち、口唇に長方形の圧痕が加えられる。186は縄文地に縦に並ぶ環状貼付が加えられ、突起頂部には指頭状圧痕が施される。187は突起が棒状に近く、縦長の貼付に円形の刺突が加えられる。多段の折り返しをもつ。188は小形で、突起部に棒状の貼付が加えられる。口縁部文様帯には並行沈線と、棒状貼付を囲む縦長の凸レンズ状沈線が施される。突起の頂部には指頭状の圧痕が加えられる。189は器壁が厚く、太めの縄文が密に施される。190は折り返し口縁で、折り返し上に沈線が施される。191は口縁に沿った沈線が施される突起部。192は縄文地に、並行沈線間に刻みが加えられた文様が施される。193は上げ底の底部。縄文地に沈線が施される。

磨消縄文・櫛歯状沈線が施されるもの

126～128・176は帯縄文が施されるもの。縁取りの沈線は太めである。126は4か所の突起をもち、突起下に縦位の区画が施される。区画内には磨消縄文により、X字形の文様が施される。突起部の口唇は肥厚し、5つの指頭状圧痕が加えられる。127・128・176は横位に展開する磨消縄文が施される。127・128は突起は4か所で、口縁部文様帯も磨消縄文で構成される。128は器面が部分的に磨耗しており、口縁部外面に炭化物が付着する。176は小形の鉢。突起の形態は左右不均等である。

129・194～199は櫛歯状沈線が施されるもの。縁取りの沈線は太めである。口唇直下は無文帯となるものが多い。129はH12区掘土からまとめて出土したもの(図V-3 上段右)。突起は5か所で、頂部に刻みが加えられる。口縁部文様帯には平行沈線に)状沈線が加えられ、突起下には竹管状工具の刺突とそれを結ぶ沈線が施される。胴部には横位に展開する不規則な櫛歯状沈線が施される。194・195は渦巻状文の間に山形文が充填されるもの。195の口縁部文様帯は櫛歯状沈線で構成される。突起部には刻みが加えられる。196・197は横位に展開する文様が施される。文様の構成は128に類似する。196の口縁部には平行沈線が施される。197は緩やかな突起をもち、口縁部文様帯は櫛歯状沈線で構成される。198は無文帯をはさんで櫛歯状沈線が並行して施される。口縁形態に沿った波状をなす。胎土には砂粒が多い。199は小形の鉢と推測される。横位に展開する櫛歯状沈線が施される。

縄文のみのもの

130～132・200～211は縄文のみが施されるもの。縄文は無節あるいは単節で、横走気味の縄文と斜行縄文がある。折り返し口縁が多くみられる。

130・131・201・203～205・208・209は単節の縄文が、132・200・206は無節の縄文が施される。また、131・132・200・203・205・206は横走気味の縄文が、130・201・204・208は斜行縄文が施される。202は複節の斜行縄文、207は斜行する捻糸文、209は単節の羽状縄文、211は横走する捻糸文が施される。130・132・203～208は折り返し口縁で、205・206・208は多段の折り返しをもつ。

130は爪による不規則な圧痕が加えられる。131は調整が粗雑で、突起部を形成した貼付の痕跡が残る。132は折り返し部に指頭の痕跡がある。外面に炭化物が付着する。200は突起部に内面にまたがる



図V-30 包含層の土器 (27)

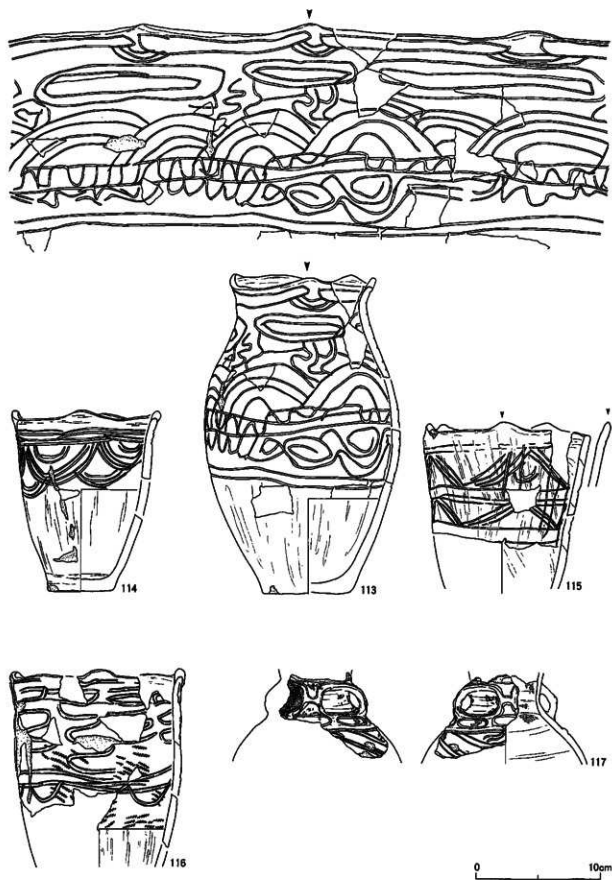
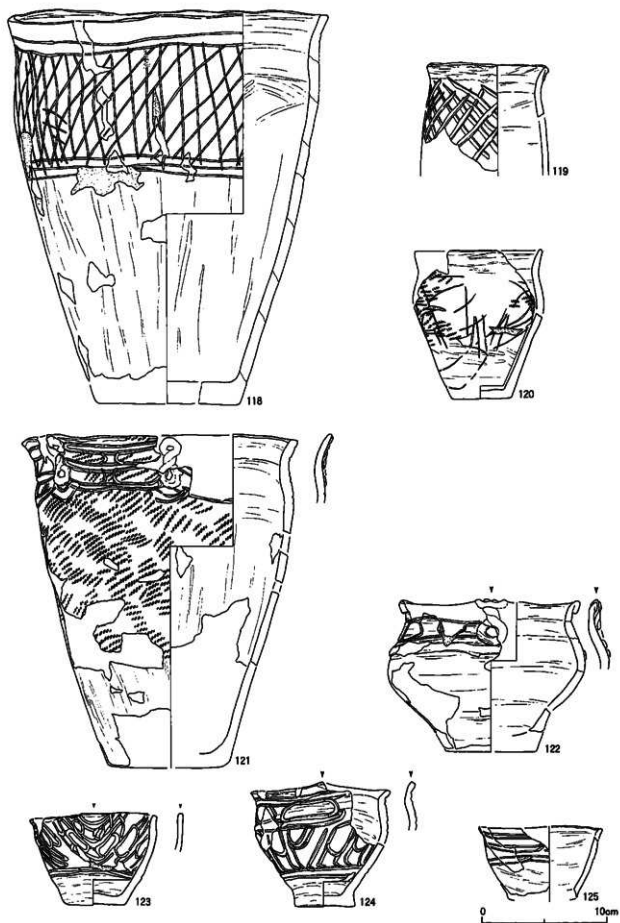
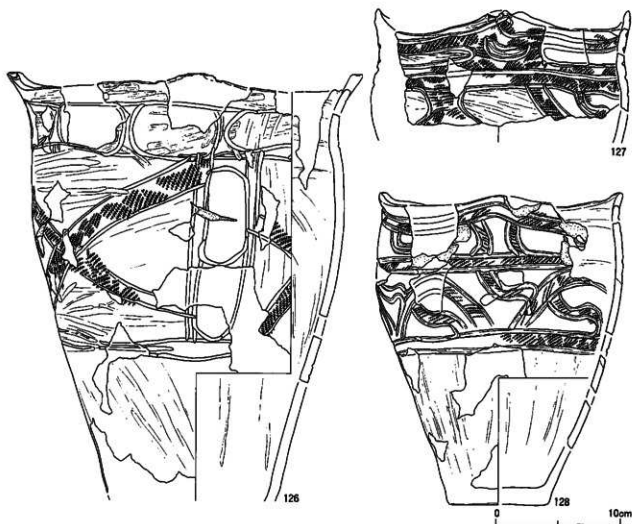


図 V-31 包含層の土器 (28)



図V-32 包含層の土器 (29)



図V-33 包含層の土器 (30)

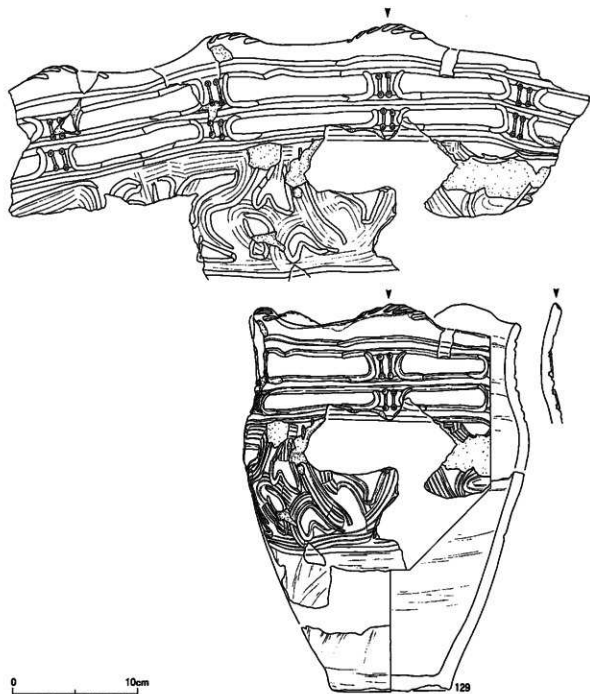
8の字状貼付が加えられ、貼付上にも縄文が施される。201は小形の突起上に刻みが加えられる。202は縄文が密で、口唇は角形、器壁は厚い。206は口唇に刻みが加えられる。208は多段の折り返しが顕著である。内面には明瞭な条痕がみられる。209・210は口唇直下に縄線が加えられる。209は1条。210は5条で、口唇にも縄線が施される。211は横走する燃糸文が施され、口唇直下は磨り消されている。口唇には燃糸による縄線が加えられる。

133・212・213はタガ状の貼付帯が施されるもの。口縁部に2～3条の貼付帯が施され、貼付帯間は無文となる。胴部と貼付帯上で原体の回転方向を変えることにより、羽状をなす。133・212では縦位の貼付が加えられる。口唇は角形で縄文が回転施文される。

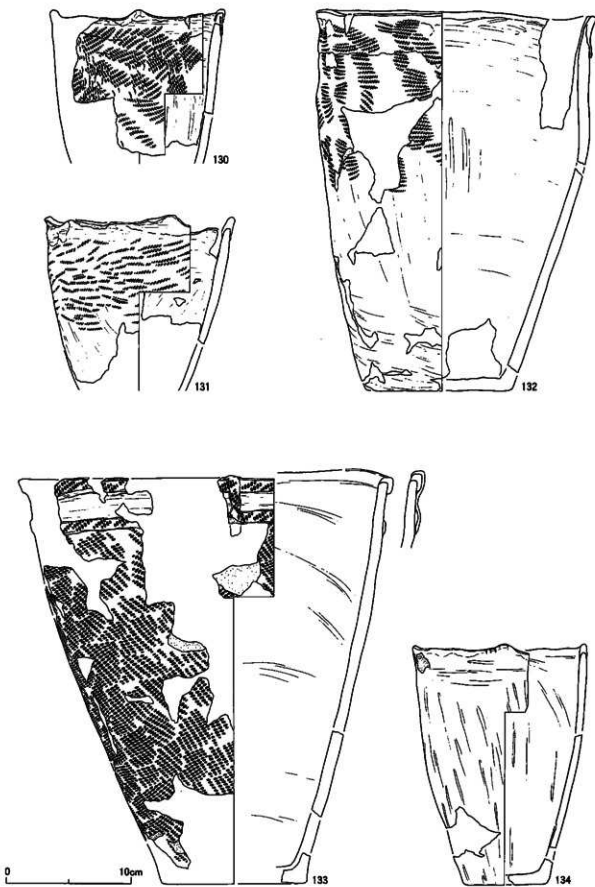
無文のもの

134～140・214～222は無文のもの。134～137は突起をもつもので、突起の数は、134は4か所、135は2あるいは4か所、136は3か所で、137は1か所しか残存しないため不明である。134は突起の1か所に刻みが加えられる。外・内面に炭化物が付着する。135は折り返し口縁である。136は胴部が張り出す器形で、突起には3つの指頭状圧痕が加えられる。138は平縁のもの。胎土に小礫が多く、外・内面に炭化物が付着する。139・140は口縁を欠失する。139は小形のもの、140は胴部が張り出す器形のものである。

214～216は口縁部。214・215は突起部に棒状貼付が加えられる。215は突起頂部が環状を呈するよう



図V-34 包含層の土器 (31)



図V-35 包含層の土器 (32)



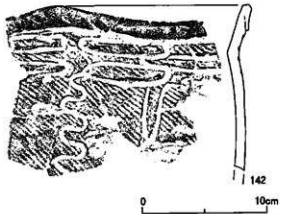
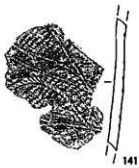
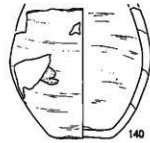
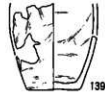
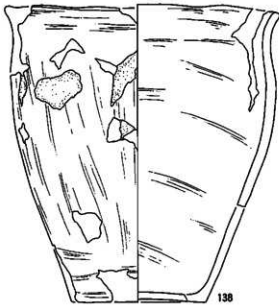
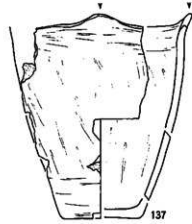
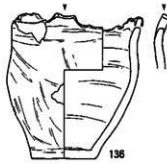


図 V-36 包含層の土器 (33)

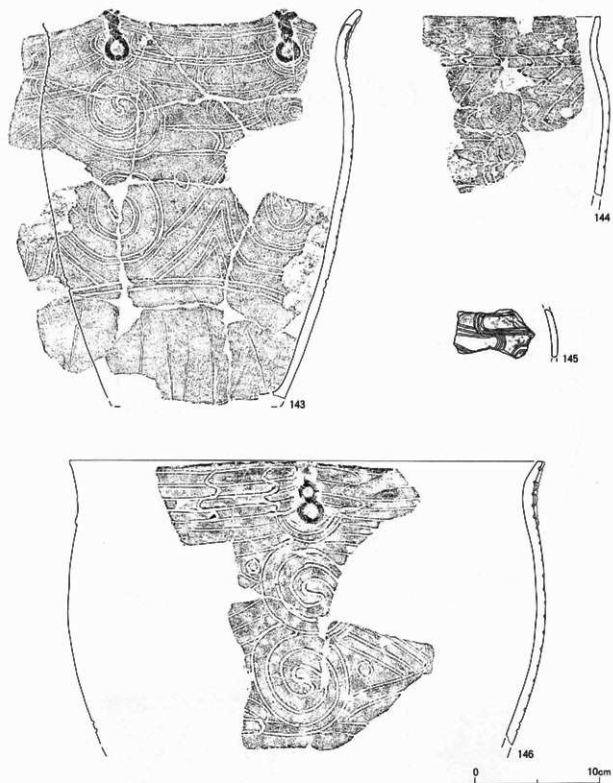
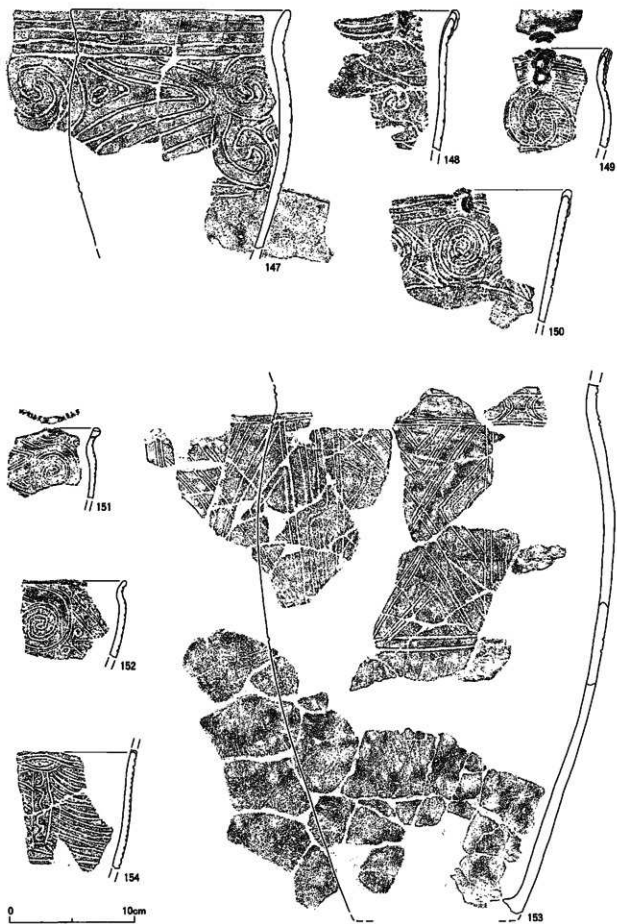
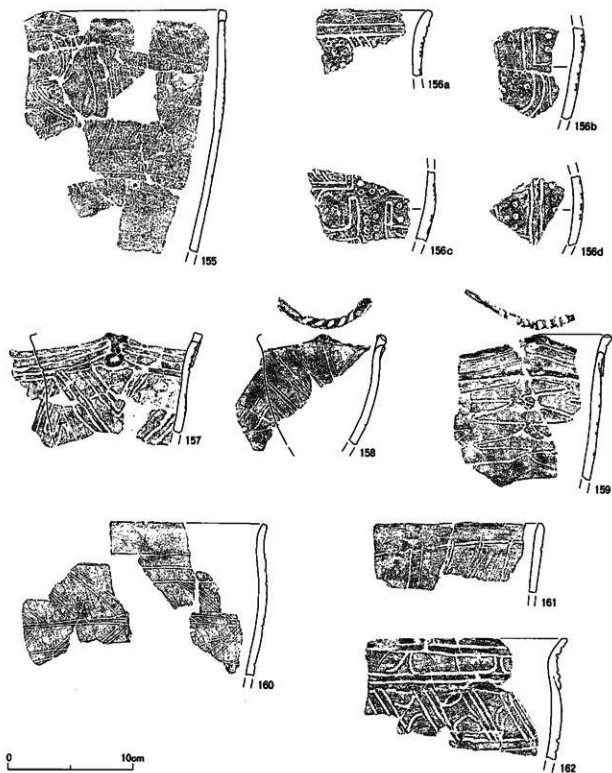


図 V-37 包含層の土器 (34)



図V-38 包含層の土器 (35)



図V-39 包含層の土器 (36)

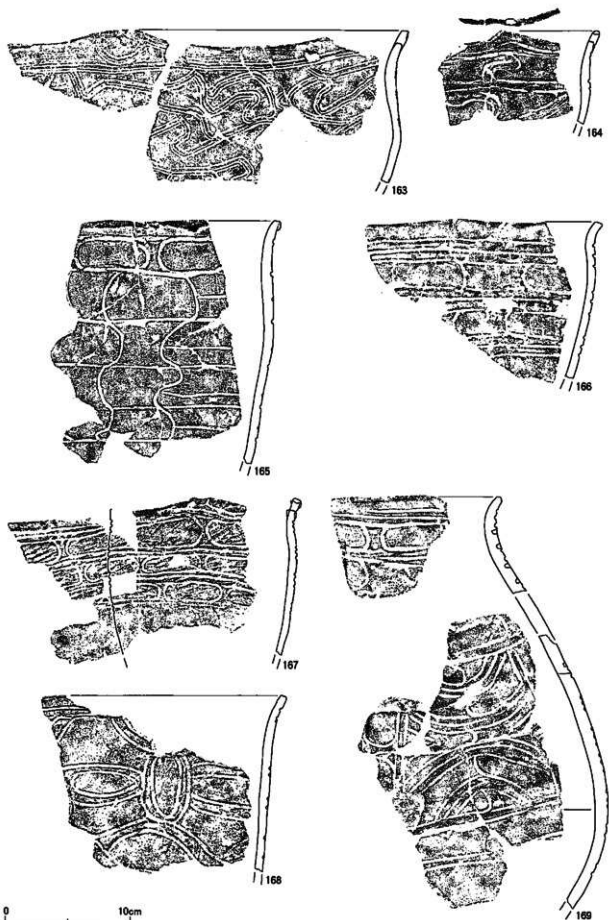


図 V-40 包含層の土器 (37)

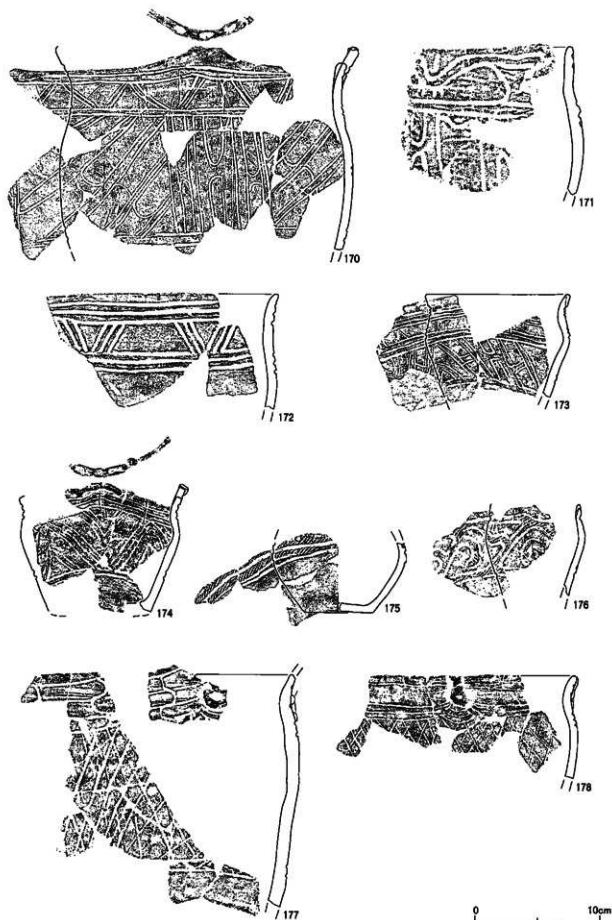


図 V-41 包含層の土器 (38)

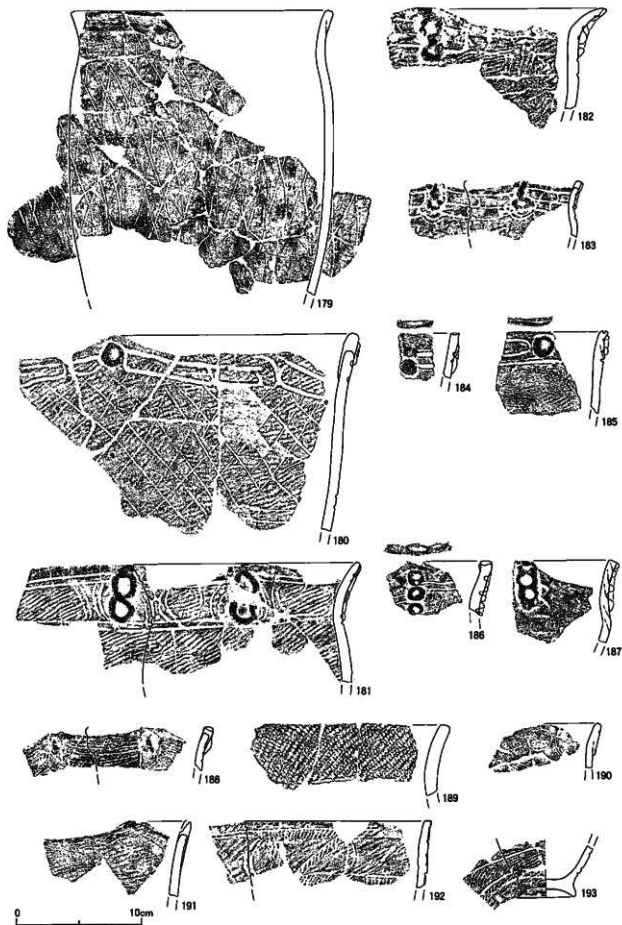
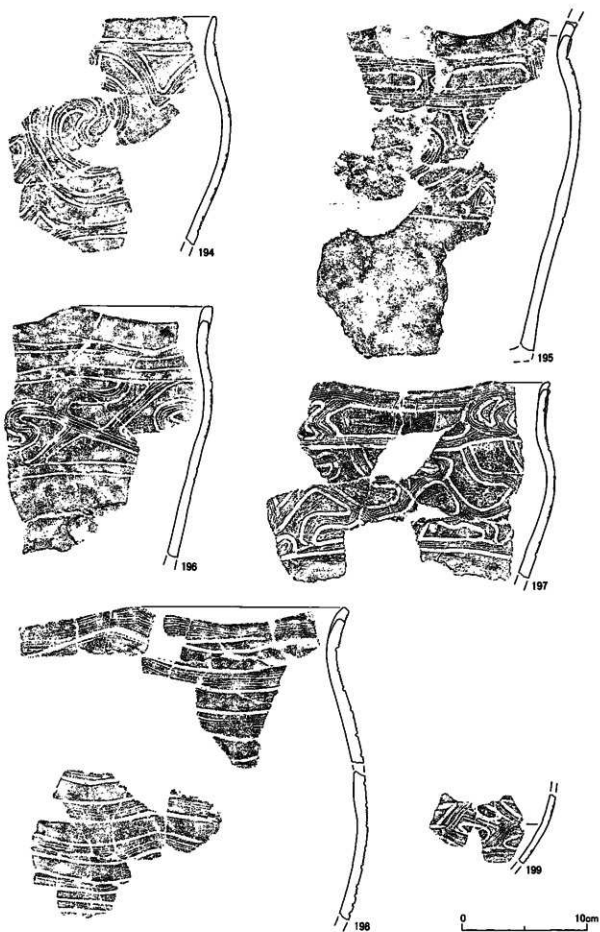
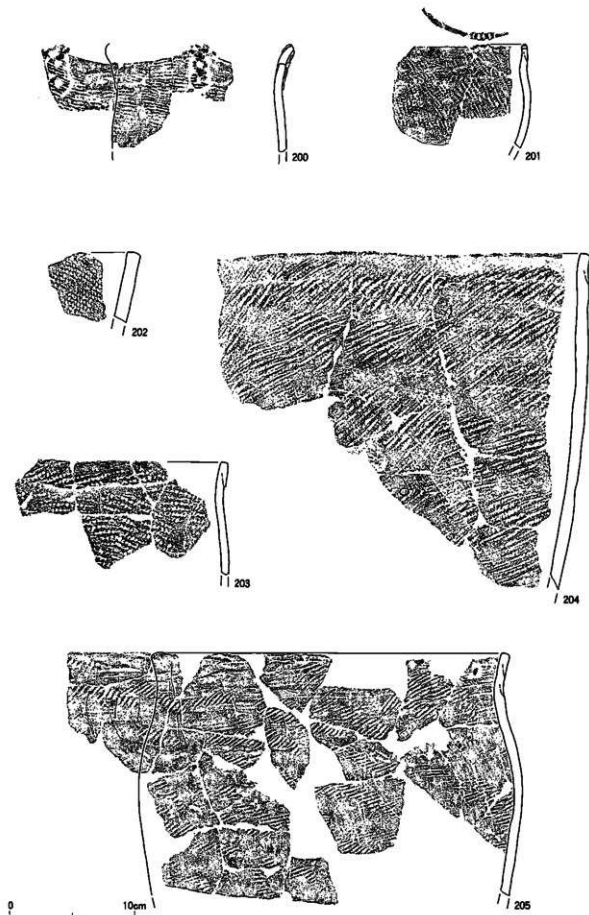


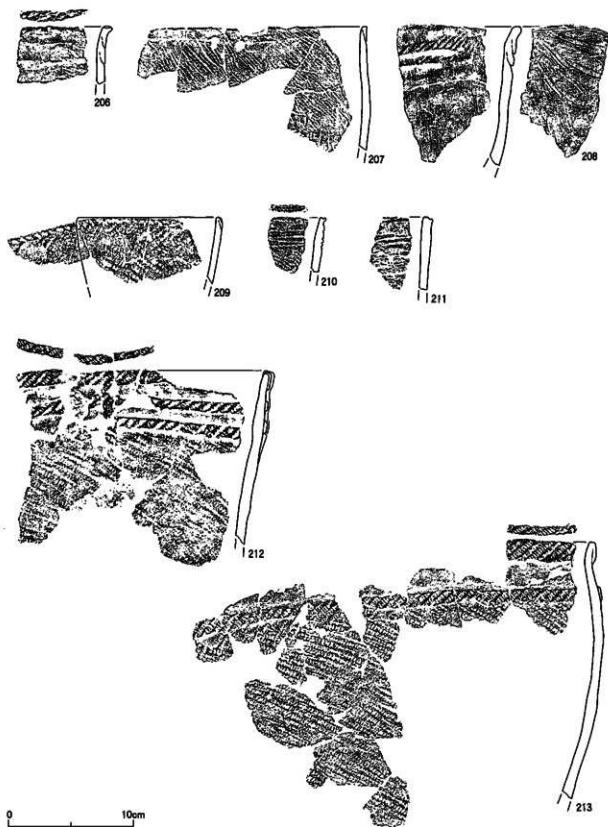
図 V-42 包含層の土器 (39)







図V-44 包含層の土器 (41)



図V-45 包含層の土器 (42)

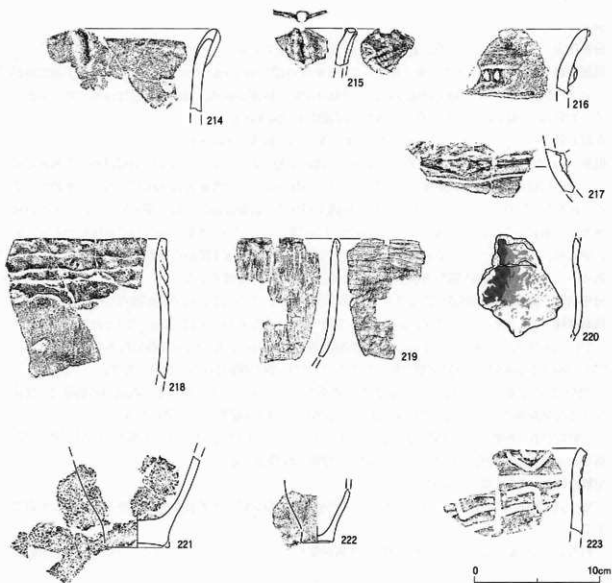


図 V-46 包含層の土器 (43)

に指頭状圧痕が加えられる。内面には単節の斜行縄文が施される。216は横環する貼付帯に刻みが施されるもの。破片の下端に沈線がみられる。器壁が厚い。217は壺形土器の頸部。沈線と隆帯が施される。隆帯上に剝落痕があり、橋状把手が施されると推測される。218は多段の折り返しをもつもの。折り返し部に指頭の痕跡がある。219は内面に条痕がみられるもの。条痕は貝殻による可能性がある。220は赤色顔料が付着する胴部の破片。アミの部分に赤色顔料が付着しており、アミの濃い部分は被熱のため黒変している（口絵3）。

221・222は底部。221は弱い上げ底で、底部が厚い。斜行縄文が施される。222は小形の底部。

223は大津Ⅶ群に相当するもの。太いZ字状沈線が施される。

写真掲載の⑯・⑰は底部。⑯は無文のもの。⑰は横走縄文が施される大形のもの。⑯は外・内面に、⑰は内面に炭化物が付着する。

Ⅳ群B類（図V-3、V-47-224・225、V-71、図版68）

概要 43点出土した。個体数は5個体程度である。層別別にはVa層から3点、Vb層から40点である。このうちL19・M18区から出土したものはそれぞれ同一個体である。この2個体の器形を復原、

図示した。

**分布状況** 大部分がⅠ区の際、L19・M18区から出土している。

**掲載遺物** 224は口縁が大きく開く鉢である。5か所の緩やかな突起をもつ。口唇は角形で丁寧に整形される。胴部中央に斜行縄文が施され、上下端は沈線で区画される。口縁部と底部は無文で、磨かれる。225は斜行縄文が施される底部。縄文は底部際まで施される。

Ⅳ群C類（図V-3、V-47・48-226~240、V-71、図版67・68・90）

**概要** 332点出土した。縄文のみのものも多く、沈線が施されるものは少ない。突起が加えられるものもある。口縁は平縁のものも多く、突起をもつものは少ない。口唇断面は切出状のものが多数を占める。地文は斜行縄文と、結束をもたない羽状縄文がある。器種は深鉢・鉢・壺あるいは注口・台付鉢がある。輪積みの痕跡は内傾する。個体数は、口縁部破片などから計数すると30個体程度である。層位別には、Ⅳ層から2点、Ⅴa層から113点、Ⅴb層から62点、Ⅴ1層から154点、排土・表採が1点である。このうち6個体の器形を復原し、これらを含む15個体を図示した。

**分布状況** 調査区北西側のⅢ区のうち北西側に集中する。この他Ⅰ区に少数が散在している。

**掲載遺物** 226・227・235~240は深鉢・鉢、229~233は壺あるいは注口、228・234は台付である。

235・236は沈線が施されるもの、226は突起が施されるもの、227・237は縄文のみのものである。238~240は小形の鉢。238は突起が施されるもの、239・240は縄文のみのものである。

229・230は、壺あるいは注口の口縁部から頸部である。231は小形の壺あるいは注口の胴部で、沈線による文様が施される。232・233は剥落した注口部。233はほぼ無文で、磨かれる。

228は台付の深鉢あるいは鉢である。まとめて出土したもの（図V-3 下段左）だが、薄手で剥落部分が多いため接合できなかった。234は台付鉢の台部分である。

Ⅵ群（図V-48-241、図版90）

恵山式に相当するものが1点のみ出土し、図示した。O50区の土石流堆積物中から出土したものである。

241は平行沈線が施される口縁~頸部。磨耗が著しい。

（柳瀬）

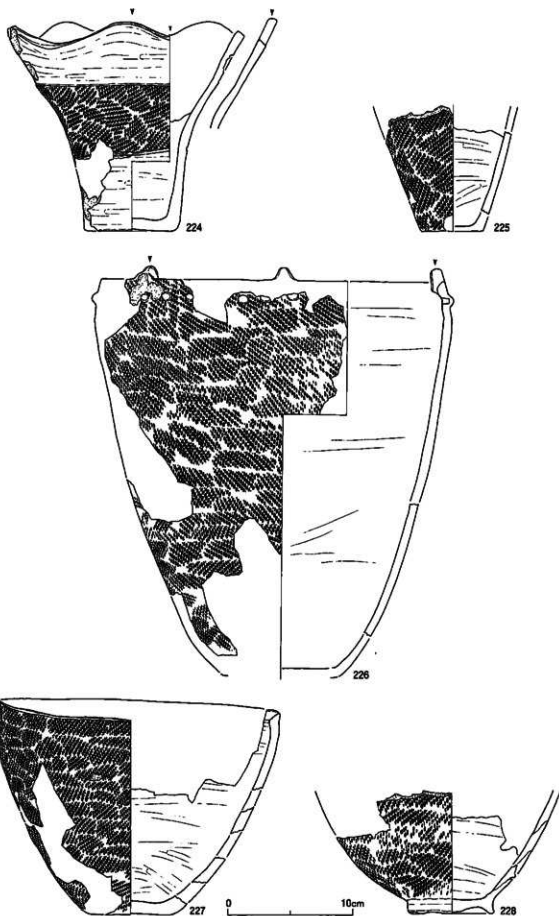
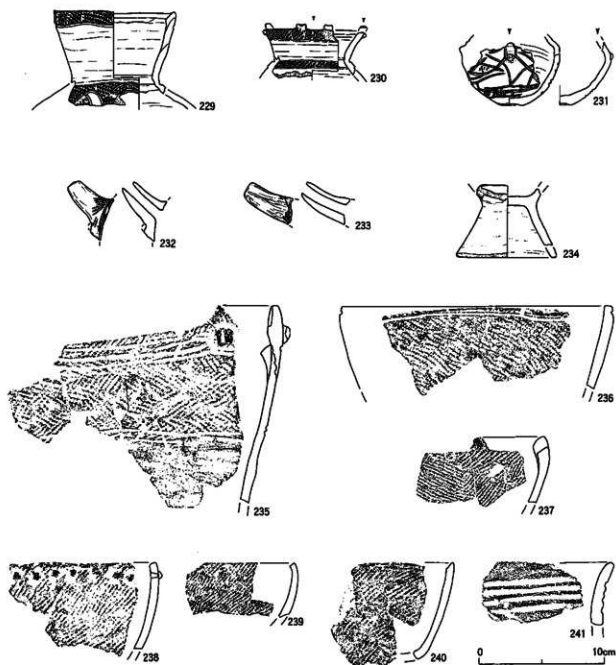


図 V-47 包含層の土器 (44)



図V-48 包含層の土器 (45)

### 3 石器

包含層の石器は、表面採集・排土資料を含め、5,030点が出土している。内訳は、剥片石器類(石核・剥片・原石を除く)で579点、10,500g、石斧関連資料(石斧・擦り切り残片)で153点、8,278g、礫石器類で751点、889,337g、原石・石核で70点、10,873g、フレイク(全石材)で3,466点、62,599gである。石斧関係資料153点の内、116点、76%は、残存率半以下の破片であり、個体数は集計点数より大幅に少ないことが考えられる。

器種別で数量的に多いものとして、剥片石器類ではRフレイク(184点、32%)、スクレイパー(156点、27%)、石鏃(107点、18%)、礫石器類では扁平打製石器・扁平打製石器原材(215点、29%)、北海道式石冠・北海道式石冠原材(182点、24%)、敲石(172点、23%)がある。

主体的な石材は、剥片石器類では頁岩(510点、88%)、石斧関連資料では緑色泥岩(78点、51%)と片岩(39点、25%)、礫石器類では安山岩(695点、93%)である。多くみられる器種と石材はほぼ相関関係にある。また、石器の生産・加工状況を示すフレイクの出土量は、安山岩(1,497点、52,402g)と頁岩(1,713点、8,547g)が最も多い。概して安山岩のフレイクは大型のものが多く、安山岩製石器の出土状況からみても、礫石器類の加工の際に産出されたものと考えられる。

石器全体の分布状況は、遺構、土器の分布状況と同様に、Ⅰ区：無名の沢に続く斜面と斜面の際、Ⅱ区：尾根状地形部分、Ⅲ区：倉知川に続く斜面際の大きく三つの範囲にまとまる。特に無名の沢付近からは、全体の7割近くがまとまって出土している。また器種、形態によっては、分布に特徴がみられるものもある。

#### フレイク(図V-72~74)

フレイクは調査区全体に分布するが、石材別でみると分布の偏りが認められる。以下、出土量の多かった5種類の石材のフレイクについて接合状況を含めた分布状況を述べる。

**頁岩**：全体で1,713点、8,548gが出土している。分布は調査区全体にみられるが、主なまとまりは、①Ⅱ-1区、②Ⅰ-1~2区にかけて、③Ⅰ-3区、④Ⅲ-1・2区に認められる。特に②には全体の7割以上が集中する。頁岩フレイクを含む剥離面接合資料は16個体あり、内13個体がⅠ区、3個体がⅢ区に分布する。また、Ⅰ区分布の資料はⅠ-1~2区にかけて分布するものがほとんどである。

**安山岩**：全体で1,497点、52,402gが出土している。分布は調査区全体にみられるが、主なまとまりは、Ⅰ-1~2区にかけての範囲、Ⅱ-1・2・3区、Ⅲ-1・2区である。特にⅠ区には全体の7割以上が集中する。接合作業はおこなっていない。

**メノウ**：全体で86点、666gが出土している。主な分布はⅠ-1・2区とⅢ-1・2区周辺である。メノウフレイクを含む剥離面接合資料は7個体あり、全てⅠ-1・2区に分布する。

**凝灰岩**：全体で58点、324gが出土している。分布はⅠ-1・2区にまとまる。剥離面接合資料は2個体ある。

**黒曜石**：全体で47点、28gが出土している。分布はⅠ-1・2区とⅢ-1区にまとまる。特に調査区J46には37点、8割近くがまとまっている。接合資料は得られなかった。肉眼による石質観察では、漆黒のもの、透明度の高いもの、細かな気泡や球顆が入るものなどの特徴が認められ、3個体以上の母岩が搬入されたようである。

石材別でみた分布内容を地区別に概観すると、次のように捉えられる。

Ⅰ-1・2区：縄文時代後期前葉の遺構と土器が多く、この時期に利用された区域である。各石材のまとまった分布が認められ、メノウ・凝灰岩の大多数がこの地区から出土する。主石材である頁岩と安山岩の出土量は他地区に比べ圧倒的に多く、Ⅰ-1・2区付近での頻繁な石器加工作業が考えられ

る。ただし、I-2区に関しては廃棄場の可能性がある。

I-3区：縄文時代中期前半の遺構と土器が多く、この時期に利用された区域である。安山岩と頁岩の分布が主である。加工作業は小規模なものであったと考えられる。

II-1区：縄文時代中期前半の遺構と土器が多く、この時期に利用された区域である。安山岩と頁岩が主に分布する。

III-1・2区：主に縄文時代後期前葉・後葉の土器が多く、この時期に利用されたとみられる区域である。頁岩、安山岩の他、メノウ、黒曜石の分布が認められる。加工作業は小規模なものであったと考えられる。

以上のような地区別の概観は、次のようにまとめられる。①縄文時代中期前半と後期前葉、無名の沢に続く斜面に面した範囲で比較的頻繁な石器加工作業がおこなわれた。②加工作業によって産出したフレイクは、中期から後期の間に斜面に投げ捨てられた可能性がある。③II・III区においても、小規模な石器加工の作業がおこなわれた。④中期、後期とも、主体的石材には頁岩と安山岩が利用されたようである。後期前半になってメノウや黒曜石などの客体的石材が、少数ながら使用された可能性がある。なお、これらの解釈の前提には、土器・石器の分布が一次的廃棄（製作・直接使用集団による廃棄）で、両者が共存することがあげられる。

石鏃（図V-49-1~34、V-74、図版104）

概要 石鏃は包含層で107点が出土し、内34点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が残存するもの103点、器体全体の2/3以下の欠損品が3点、不明1点である。先端・基部末端を僅かに破損するものが半数以上みられる。

層位別の出土状況は、Va層21点、Vb層79点、VIIa層1点である。図示したものは1がVIIa層で、他はVa・Vb層から出土している。

石材は頁岩92点、黒曜石11点、メノウ2点、安山岩2点で、頁岩が圧倒的に多い。図示した石器では6・19・21・26・34が黒曜石で、他は全て頁岩である。

アスファルト様のものが付着する石鏃は13点出土している。図では23・24・27~29・31・33が該当し、有茎鏃である。また、7・10の木葉形鏃には茶褐色のくすんだシミ状の付着物が認められる。付着物の範囲は図中では塗り潰しで表現している。

各形態別の出土点数は（括弧内は図番号）、長身鏃1点(1)、三角形鏃凹基7点（2~5）、三角形鏃平基2点(6)、薄手木葉形鏃8点（7~11）、木葉形有茎鏃19点（13~21）、三角形有茎鏃51点（内、長身のもの15点、短身のもの36点）（22~34）である。三角形有茎鏃が半数、木葉形有茎鏃が2割ほどを占める。石鏃形態から判断して、主に縄文時代中期~後期にかけて多数の石鏃が遺跡に遺されたかと推定できる。

分布状況 調査区全体に散発的に分布するが、I区（無名の沢付近）に比較的多くみられる。I区では調査区G13に4点、N7に3点がまとまり、石鏃の形態は、カエシが不明瞭な木葉形有茎のもので共通する。また、III区（倉知川付近）では、調査区J46に6点がまとまって出土し、形態はカエシが明瞭な三角形有茎のもので共通する。

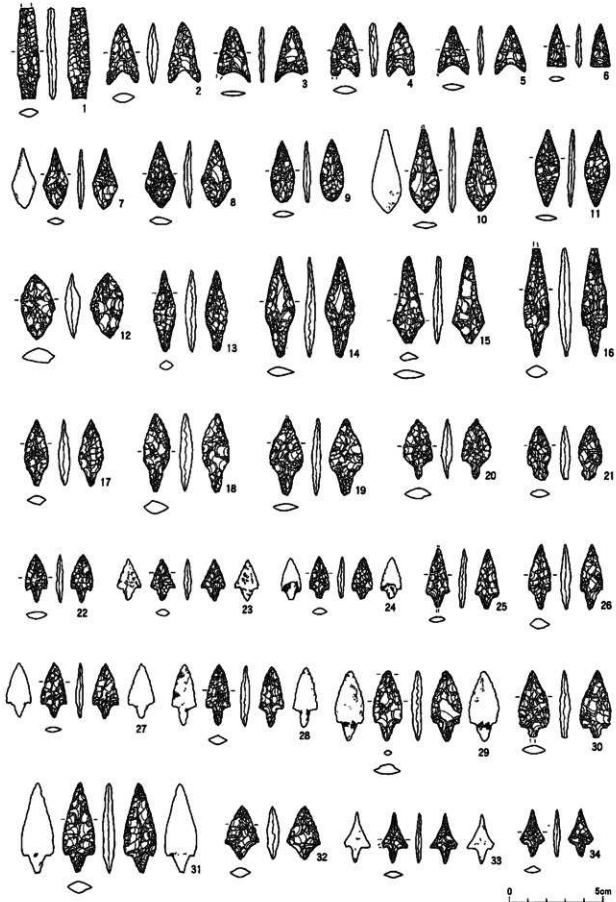
掲載石器 1は長手で薄手のものである。入念な斜行剝離が施されている。先端部が欠損している。

2~5は平面三角形で凹基のものである。器体横断面は薄い凸レンズ状である。

6は平面三角形で平基のものである。基部縁辺は薄く作り出されている。

7~11は木葉形で最大幅が器体中央から基部側に位置するものである。器体横断面は薄い凸レンズ状である。7・8・10・11は先端部側縁辺が極僅かに内湾し、尖頭部の調整が細かく、入念である。





図V-49 包含層の石器(1)

12は菱形を呈するが、調整が粗く、器体中央部に厚みが残り、側縁辺が鋸歯状となっている。

13～21は、有茎でカエシ部分が不明瞭なものである。体部は木葉形を呈する。13～16は長幅比（長さ／幅）が2.5以上の細身長身のもの、17～21は2.5以下の比較的幅広のものである。長身のもの、基部が器長の1/3以上を占めること、器体長軸に厚みを残すため横断面が厚い凸レンズ状となることが特徴である。14は被熱により、先端側から右半身の部分が黒褐色に変色しており、左半身から基部にかけて着柄されたまま被熱したと推測できる。20は器体中央に厚みを残しながらも、基部は細く薄く作出されている。21は全体に加工が粗く、基部は厚みを残したままである。

22～34は有茎でカエシが明瞭なもので体部は三角形を呈する。茎部長は器長の1/3以下である。アスファルト様物質の付着が目立つ。アスファルト様物質は、主に基部の根元付近に厚く付着している。33・34は先端部にかけての側縁が緩やかに内湾し、先端部と基部が細く丁寧に作出されている。また、器体は薄手である。

石槍（図V-50-35～38、V-74、図版104）

概要 石槍は包含層で7点が出土し、内4点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの4点、器体全体の2/3以下の欠損品3点である。

層位別の出土状況は、Va層が3点、Vb層が3点、VIIa層が1点である。図示したものは、35がVIIa層、他はVa・Vb層から出土している。

石材は頁岩3点、黒曜石4点で、図では35・36が頁岩、37・38が黒曜石である。

分布状況 I-2区およびII区尾根状部分の東側に散発的に分布している。

掲載石器 35・36は木葉形で、基部は35が突出し、36が平らになっている。35は上半部が厚く、下半部が薄く加工されている。36は全体的に薄く加工され、先端側の縁辺は直線的に作出されている。

37は有茎で、カエシは不明瞭である。加工は正面側に器体の厚みを残した粗いものである。石材は細かい球類が多く含まれる黒曜石で、こうした石質が細かな加工を阻害したとみられる。38は折れ部付近の両側縁にノッチ状の加工がみられる。

両面調整石器（図V-50-39～46、V-74、図版104）

概要 両面調整石器は包含層で20点・19個体が出土し、内8点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの16点、器体全体の2/3以下の欠損品3点、不明1点で、完形品が多数を占める。

層位別の出土状況は、Va層が4点、Vb層が12点、VIIa層が2点で、図では41・44がVIIa層、他はVa・Vb層から出土している。

石材は頁岩17点、黒曜石1点、メノウ1点、安山岩1点で、頁岩が多い。図では43が黒曜石で、他は全て頁岩である。

出土分布状況 I-1区からII-1区にかけて散発的にみられる。

掲載石器 39～42は、下端部に加工もしくは素材形状を利用するなどして、ヘラ状の縁辺を設定したもので、ヘラ状石器に分類できるものである。この報告では出土点数が少数で実態が明瞭でないため、両面調整石器とした。39はやや胴部が膨らむ短冊形で、器体中央部に厚みを持つ。下端部は長軸下方向からの剥離面により構成されている。左側縁は片面調整で縁辺が直線的に加工されているが、右側縁は粗い両面調整で、側縁辺はジグザグとなっている。40は下端部に最大幅を有す撥形である。下端部には素材の薄手部分を設定している。41はVIIa層出土である（図V-1）。粗い両面加工により側縁を調整し、短冊形に整形している。素材の薄手部分を下端部に設定し、更に裏面側には長軸下方向か

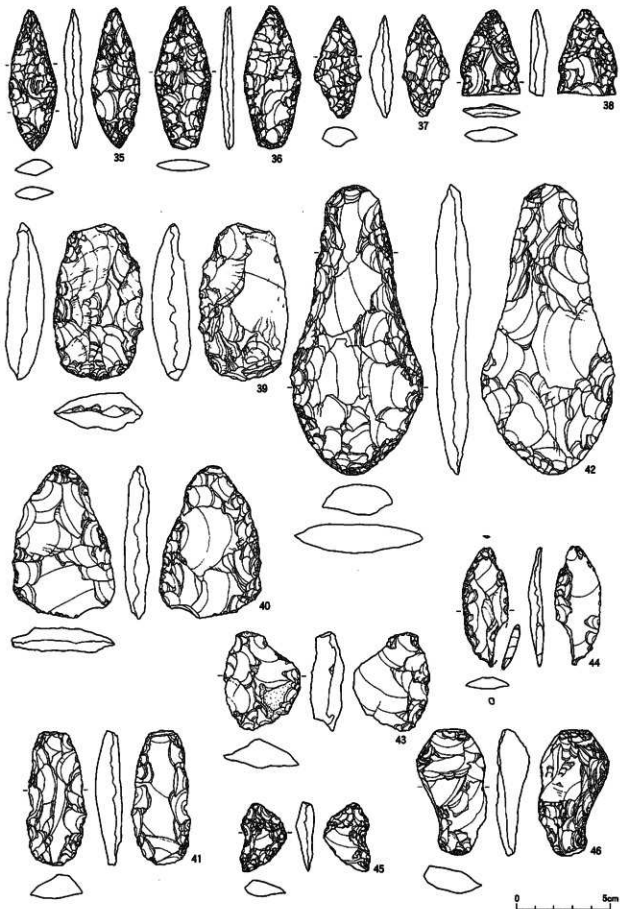


図 V-50 包含層の石器 (2)

らの複数の剥離が施されている。この剥離により、下端部縁辺は丸ノミ状を呈している。

43~46は不定形な両面調整石器である。43は粗い加工が施されている。44は縦長剥片を素材とし、軽微な加工で木葉形に整形されている。下端が欠損して突出部分が形成され、その先端が磨耗している。鉋として機能した可能性がある。45は左側縁がノッチ状に加工され、下端部が左寄りに突出するように整形されている。東北地方の後期前半にみられる嘴状石器に形態が類似している。46は主に左側縁の折れ面を打面として加工が施されているが、剥離は打面付近で、ステップフラクチャー（階段状剥離）もしくはヒンジフラクチャー（蝶番剥離）を起こして止まっている。これ以上の加工は困難と判断され、遺棄されたと推測される。

つまみ付きナイフ（図V-51・52-47~66、V-75、図版105）

概要 つまみ付きナイフは包含層で40点・39個体が出土し、内19点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が残存するもの37点、器体全体の2/3以下の欠損品1点、接合により完形になったもの2点（1個体）で、完形品が大多数を占める。

層位別の出土状況は、Va層が9点、Vb層27点、VIIa層1点で、図では47がVII層、他はVa・Vb層から出土している。

石材は頁岩39点、泥岩1点である。図では61が泥岩製で、他は全て頁岩製である。形態は縦長のもの38点、横長のもの2点である。アスファルト様物質が付着しているのは2点で、図の62・64が該当する。また、シミ状の付着物が65にみられる。付着物はつまみ部付近にみられる。付着物の範囲は図中では塗り潰しで表現している。

側縁付近に光沢が観察されるものは7点出土している。主に刃部裏面側に発生している。光沢は艶やかで明瞭なもの、鈍い不明瞭なものがある。図示したもので光沢を有するものは48~50・53・55・63で、光沢の範囲は「網掛け」によって示した。また、多数の裏面側縁辺には、微細剥離が不連続的に観察される。

分布状況 I-2区から3区にかけて、II-1区、III区の各範囲に散発的に認められる。

掲載石器 47~50は並行剥離によって背面側を覆い尽くすように加工したもので、縁辺はいずれも鋭利である。48の腹面右側縁下部が両面調整である他は、器体の加工は片面調整が主である。49・50は左側縁が外湾し、右側縁が緩やかに内湾する。調整は、左側縁が器体中心軸を超えるような大型の平坦剥離、右側縁が連続的な小型剥離で構成されている。光沢は腹面左側縁に認められる。また、器体が強くねじれ湾曲している。

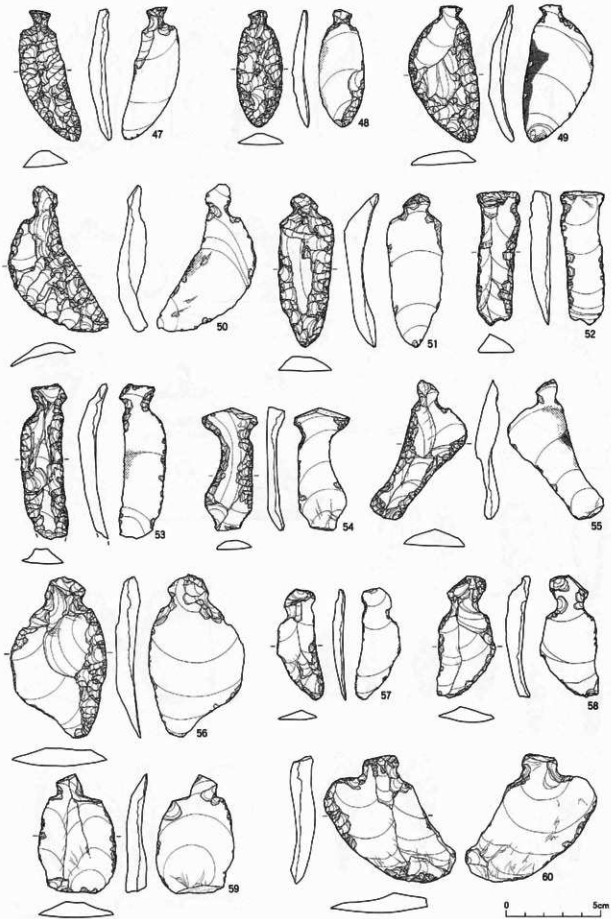
51~56は側縁を連続的に加工し、主に直線的な縁辺を形成しているものである。裏面側縁中央付近には微細剥離が認められる。55のつまみ部は、器体の中心軸に対し左側に作り出されている。

57~60は側縁調整が軽微なものである。剥離は使用により発生したものも含まれる可能性がある。

61・62はつまみ部が突出するように作出されているものである。62の裏面末端部には平坦剥離が施されている。

63~65は横長のものである。63・65は横長剥片を素材とし、打面部をつまみ部に、下端縁部を刃部に設定している。64は末端が切断された剥片を素材とし、素材左側縁をつまみ部、右側縁を刃部に設定している。63・64の刃部調整は、素材腹面側に施されている。65の刃部は両面調整によって形成され、ヘラ状となっている。また、つまみ部も突出するように作り出されている。東北から北海道南部の縄文時代中期から後期の遺跡にみられる、つまみ部を持つ小型のヘラ状石器（大石平型：青森県教育委員会1986）に類似するが、本遺跡では出土が1点で実態不明の為、つまみ付きナイフに含めた。

66は逆三角形を呈するもので、左側縁は両面調整となっている。



図V-51 包含層の石器 (3)

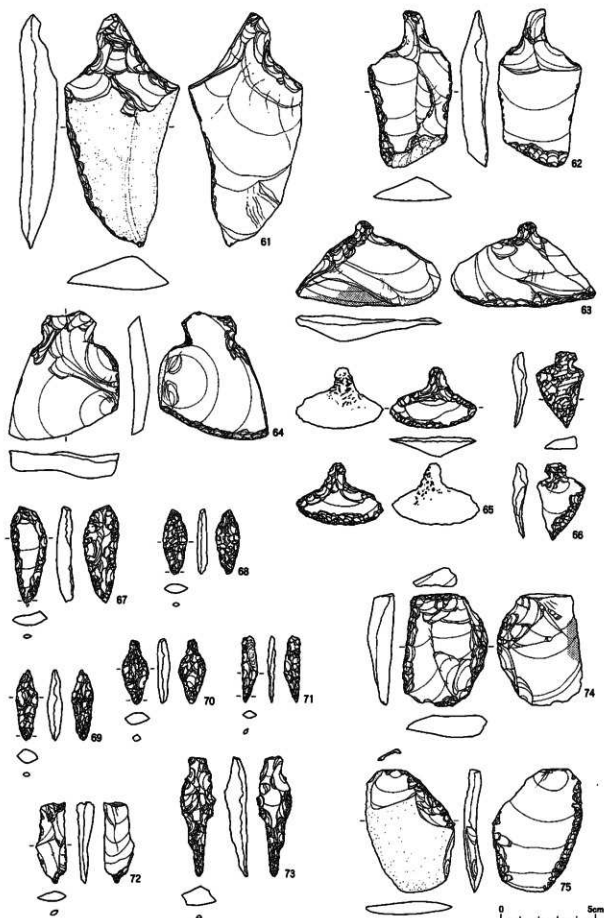


図 V-52 包含層の石器 (4)

### 錐形石器 (図V-52-67~73、V-75、図版106)

概要 錐形石器は包含層で16点が出土し、内7点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの15点、器体全体の2/3以下の欠損品1点である。

層別別の出土状況は、Va層8点、Vb層6点、VIIa層が1点で、図示したものでは、67がVIIa層(図V-1)、他はVa・Vb層から出土している。

石材は全て頁岩である。調整加工は、72を除き全て両面調整である。

分布状況 I-2区、II-1区、III-2区の3つの範囲に、大まかなまとまりが認められる。

掲載石器 67は錐部末端が欠損している。68~70は形態が石鏃に類似するものである。器体と尖頭部の横断面が分厚い凸レンズ状を呈し、尖頭部がやや磨耗することから錐形石器に分類した。71は細身で、被熱により器体が欠損している。72は機能部のみが加工されている。

スクレイパー (図V-52-55-74~100、V-75、図版106・107)

概要 スクレイパーは包含層で156点・148個体が出土し、内31点・27個体を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの110点、器体全体の2/3以下の欠損品29点、破損後再加工したものの10点、接合により完形となったものの5点、不明2点である。

層別別出土状況は、Va層49点、Vb層95点である。石材は頁岩142点、安山岩5点、メノウ4点、凝灰岩3点、チャート1点、石英1点で、頁岩が圧倒的に多い。図示したものは全て頁岩製である。

側縁に光沢が観察されるものは40点出土している。つまみ付きナイフと同様に光沢は艶やかで明瞭なもの、鈍い不明瞭なものが認められる。図で光沢を有するものは74・76~78・80~85・87・88・90・91・93・94・97・98で、光沢の範囲は「網掛け」によって示した。なお、光沢の性格については、野田生4遺跡出土のスクレイパーの金属顕微鏡を用いた観察(北埋調報171)によって、使用痕であることが確認されている。

分布状況 ①II-1区からI-3区にかけて、②II区周辺、③II区西側からIII区にかけての3つの範囲にみられる。②から③にかけては散発的な出土状況であるが、焼土F-1~4の付近にまとまっている。

掲載石器 74~79は片側縁に連続的な調整剝離が施され、対する片側縁にやや大型で粗雑な調整が加えられるものである。横長剥片素材の場合は、打面部と末端部が調整されている。連続的な調整剝離とその裏面とのなす角度は60度前後の鋭角で、縁辺は直線的で鋭利に作り出され、光沢も観察される。対するやや粗い加工部縁辺は、断面がくの字状となる特徴がある。前者は刃部調整、後者は器体調整と考えられる。75の刃部調整は腹面側に施され、背面側は自然面となっている。76の光沢は刃部中央部に発達している。77の光沢は背面側の調整剝離面周縁にも観察される。78の背面側の剝離は、薄く大きさが不規則で、使用により発生した可能性がある。これらの剝離は刃部中央部にまとまり、また光沢の発達も中央部で顕著である。79は拇指形で、下端部にはヘラ状の縁辺を有し、ヘラ状部分にはシミ状の付着物が観察される。

80~89は縦長剥片を素材とした平面短冊形のもので、縦横3mm前後の縁辺調整剝離が連続的に施されている。素材打面は長さ1cm前後、幅2cm前後の大型の平坦打面が主である。80~86は両側縁に、87~89は片側縁に調整が施されている。側縁は直線的なものが主だが、85・89はやや外湾、86はやや内湾している。光沢の範囲は長さ4cm前後、幅1cm前後で観察される。89の側縁調整は平坦剝離で、腹面側に不連続的な剝離がみられる。また、89の素材打面は複剝離打面である。

90~92は剥片、横長剥片を素材とし、縦横3mm前後の縁辺調整剝離が連続的に施されているもの

である。製品（刃部縁を石器長軸方向に据えた場合）の平面形態、側縁加工、光沢の点で、縦長剥片素材のものと同じ特徴を有す。90は素材打面周辺を平坦剝離によって調整し、横断面形がくの字状を呈す点で、74～79に類似する。

93・94は側縁加工が散発的なものである。93は背面左側縁に散発的な剝離、背面右側縁に80度を越える急角度の連続的な調整剝離が認められる。しかし、腹面側の微細剝離と鈍い光沢は左側縁側に観察され、僅かながら磨耗も認められる。よって、93はほぼ無加工である左側縁を刃部として使用したと捉えられる。94にも側縁の散発的な剝離の周囲に顕著な光沢が認められる。

95・96は縦長剥片を素材とし、調整縁辺が内湾するものである。腹面側には微細剝離が観察される。また、末端部に加工を施し、錐状の突出部を作り出している。

97・98は平坦・平行剝離により背面側を覆い尽くすように加工するものである。上端部が右側に傾くように整形されている。側縁辺は直線の且つ鋭利で、腹面側には顕著な光沢が観察される。また、98は背面側の二次調整面内にも光沢が認められる。

光沢に関しては刃部縁剝離面内には光沢が発生せず、その外側に発達する状況が認められた。98のように調整剝離面内にも光沢が認められるものもある。これらは、光沢発生後に剝離が生じ結果的に光沢部分が除去されたものと推測される。

99は平坦剝離により左側縁が尖るように整形されたものである。

100は分厚い剥片を素材とし、背面側の両側縁に急角度調整を加えたものである。器体平面は左側へ湾曲している。4か所折断され、各折断面に対し複数回の剝離が行われている。剝離は側面を打面として折れ面へ施されるもの、腹面を打面として折れ面から側面に施されるものがある。再加工もしくは、石核として小型剥片を剝離したことが考えられる。

ピエス・エスキュー (図V-55-101～103、V-75、図版106)

概要 ピエス・エスキューは包含層で36点が出土し、内3点を図示した。

層位別の出土状況は、Va層14点、Vb層が21点である。

石材は頁岩31点、黒曜石2点、メノウ2点、砂岩1点で、頁岩が多い。図示したものでは102が黒曜石で、101・103が頁岩である。

分布状況 I-2区、II-1区、III-2区の東側の、3つの範囲にまとまる。III-2区の東側は焼土F-2周辺である。

掲載石器 101は上端部に平坦面を有し、裏面左側縁には槌状剝離が観察される。102は下端部に平坦面を有し、器体の長軸上に槌状剝離が観察される。背面左側の一次剝離面は扁平なバルブ（打瘤）であり、これは両極剝離で発生する特徴的なものであると観察される。よって、101の素材自体も両極剝離技法によって生産されたものと捉えられる。103は分厚い素材を用い、下端部に平坦面を有す。横方向からの剝離も観察されることから、90度転回して使用したことが考えられる。

石核 (図V-55-56-104～111、V-76、図版107)

概要 石核は包含層で65点が出土し、内8点を図示した。

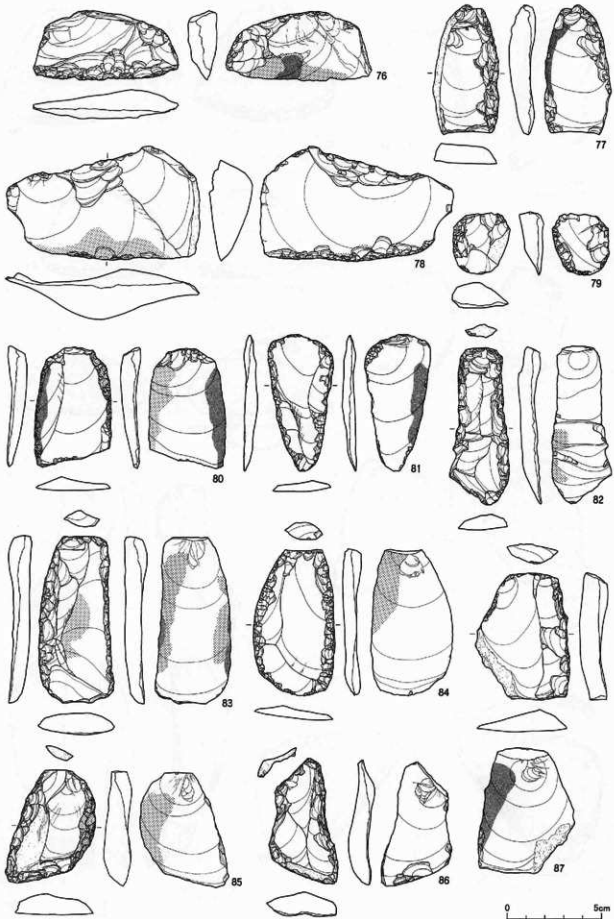
器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの51点、器体全体の2/3以下の欠損品7点、接合により完形になったもの5点、破損後再び作業をおこなったもの1点、不明1点である。

層位別の出土状況は、Va層が17点、Vb層が45点である。

石材は頁岩58点、黒曜石1点、メノウ3点、安山岩3点で、頁岩が圧倒的に多い。図では104が安山岩で、他は全て頁岩である。

分布状況 I-1・2・3区、III-2区にまとまってみられる。特にI-1からI-2区にかけて8





図V-53 包含層の石器(5)

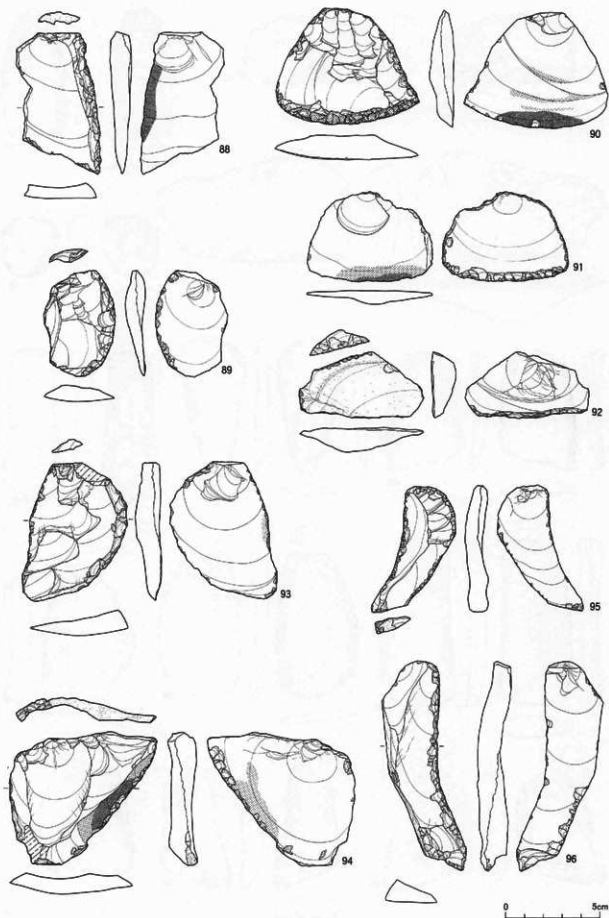


図 V-54 包含層の石器 (6)

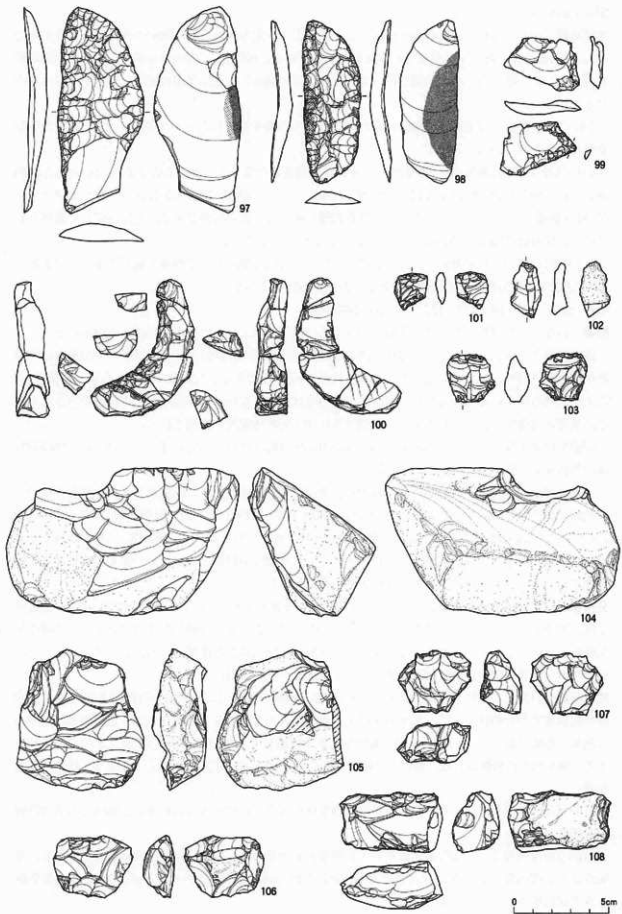


図 V-55 包含層の石器 (7)

割以上が集中して出土している。

**掲載石器** 104・105は背部自然面を打面とし、主に上下一定方向から剥片剥離作業をおこなうものである。104は最後に背部へ剥離を施し作業を終了している。105は上下方向の作業後、左側面の節理面を打面として、横方向からの剥離を行っている。裏面の剥離と正面作業面の剥離との新旧関係は判別できなかった。

106・107は打面と作業面を不規則に入れ替えながら作業を進行了したものである。2 cm 前後の小型剥片が生産されている。

108・109は上下に剥離面打面を設定し、主に正・裏面に作業をおこなうものである。108には左右側面にも正面側からの加撃による剥離が観察される。しかし、剥離のほとんどはステップフラクチャー（階段状剥離）、ヒンジフラクチャー（蝶番剥離）をおこした小剥離である。分厚い剥片を素材としている。109は作業面が正裏側面に及んでいる。また、小型である。

110・111は広い平坦剥離面や自然面を打面とし、不規則な剥離方向で作業を展開するものである。110は正面で一定方向からの比較的まとまった作業を行っている。

**石斧** (図V-56~58-112~127、V-76、図版108)

**概要** 石斧（石斧原材含む）は包含層で152点・142個体が出土し、内19点・16個体を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの17点、器体全体の2/3未満の欠損品が124点、接合により2/3以上となったもの11点（9個体）である。欠損品が多数を占め、器体の1/3以上が破壊されているものが多い。個体数が多いのは接合しなかった小型の破片資料が多いためである。基部が残存する資料は44点あり、実個体数は40~50個体程度と推測される。

層別別の出土状況は、Va層が24点、Vb層が107点、VIIa層が1点で、図示した石器では、114がVIIa層、他はVa・Vb層から出土している。

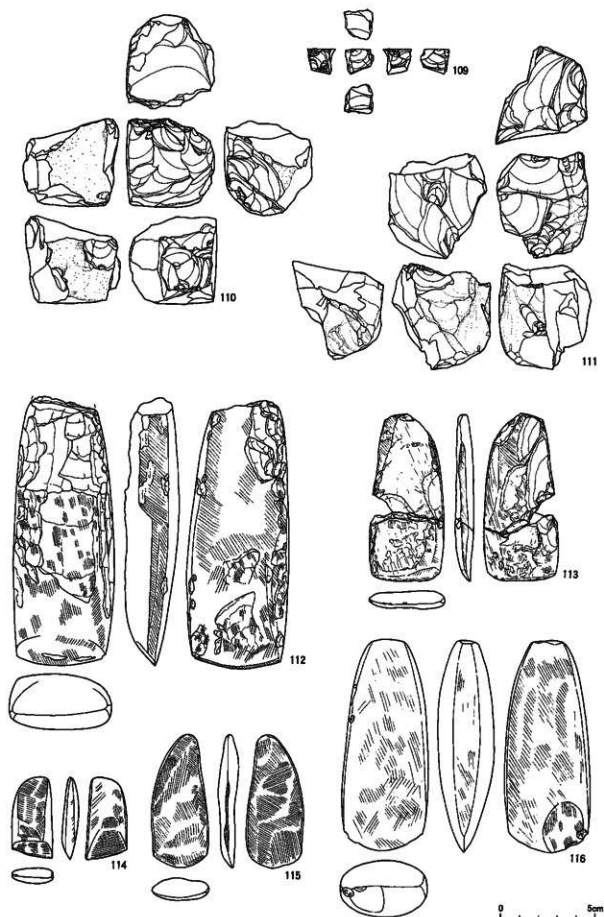
石材は緑色泥岩78点、片岩39点、泥岩19点、閃緑岩7点、砂岩4点、蛇紋岩3点、片麻岩1点で、緑色泥岩が多い。図示した石器は、116・117・119・120・122・125~127が緑色泥岩、112・121・123、124が片岩、114・115が蛇紋岩（従来「蛇紋岩」と呼ばれていたもの）、113が泥岩、118が砂岩である。114・115については、肉眼観察から「日高ヒスイ」の可能性が指摘されたため、蛍光X線による産地分析をおこなった。詳細についてはVI章3節に掲載している。

**分布状況** 調査区全体に散発的に分布しているが、主なまとまりは、①I-1~2区にかけて、②III-2区、焼土F-2~4の周辺にみられる。また、①には片岩、②には緑色泥岩のフレイクと小破片が比較的まとまって出土しており、このふたつの区域での加工作業が推測される。G14区Vb層からは石斧3点（図IV-57-118・119）がまとまって出土した（図版34）。

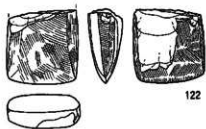
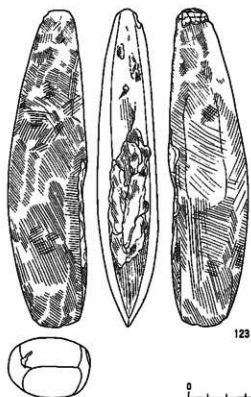
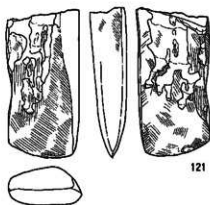
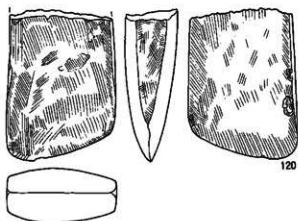
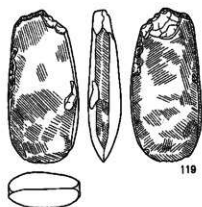
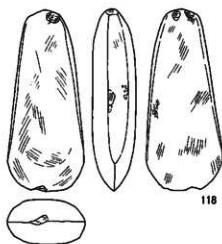
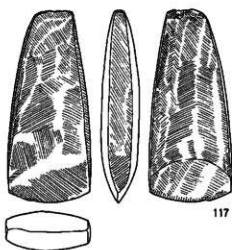
**掲載石器** 112~115は片刃石斧である。112は体部と刃部の稜線（以下、鑿）が明瞭に観察される。刃部平面は緩やかな弧状である。正面刃部付近と裏面は入念な研磨を受けているが、正面上端部を中心に再加工が施されている。113は直刃で器体が大きく損傷している。114は長さ4 cmほどの小型石斧である。鑿が両面に観察される。偏刃で直線的である。115は全身を丁寧に研磨しているが、器体の凹凸が激しい。

116~125は両刃石斧である。両刃石斧は器体全身を入念に研磨するものが多く、器体と刃部の研磨が連続的である。

116~119は円刃で、刃部に最大幅を有する撥形のものである。片刃石斧に比べ器体はやや厚く、横断面は主に楕円形を呈する。116は裏面刃部付近に円形の研磨範囲が認められるが、使用による衝撃剥離痕を研磨補修したものであろう。



図V-56 包含層の石器(8)



図V-57 包含層の石器(9)

120～122は刃部平面が直線的で、胴部と刃部の幅がほぼ同じ短冊形のものである。いずれも胴半部を欠損している。横断面はやや厚手の長方形を呈する。120・121は偏刃である。

123～125は円刃で、平面が胴部中央付近に最大幅を有する細身の短冊形のものである。分厚く、横断面は円形に近い。125・126は側縁に擦り切り痕が観察される。

127は石斧原材である。調整剥片が接合している。側縁調整を施して撥形に整形しているが、この調整剥離が器体を大きく破損させたため、刃部研磨されることなく遺棄されたと考えられる。

**敲石** (図V-58-128～137、V-77、図版109)

**概要** 敲石は包含層で172点が出土し、内10点を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの148点、器体全体の2/3以下の欠損品が21点、不明3点である。

層位別の出土状況は、Va層が37点、Vb層が124点、VIIa層2点である。

石材は安山岩153点、砂岩10点、泥岩7点で、安山岩が圧倒的に多い。図では128・131が泥岩、137が砂岩で、他は全て安山岩である。

**分布状況** 調査区全体に散発的にみられるが、I-1・2区、II-1区、III-2区周辺焼土F-2～4、石組炉S-1・2・11周辺の区域にまとまりがある。

**掲載石器** 128～131は礫長軸の上下端部に敲打痕が観察されるものである。いずれも円形から楕円形の分厚い礫を素材としている。128は全身を研磨されている。また131も若干研磨を受けている。130は縁辺部に敲打痕がまとまってみられる。

132は棒状礫の側縁に沿って敲打痕がみられる。敲打痕は上半部にまとまっている。

133～137は礫の広い平坦面に敲打痕が観察されるものである。133・134は正面、135～137は両面に敲打痕がみられる。133は扁平撥形礫を素材とし、幅広い上端部側に円形にまとまった敲打痕が観察される。134・135は楕円形礫の中心部付近に敲打痕がみられる。135の敲打痕は上下に広がっている。136・137は棒状礫の上半部、下半部に敲打痕のまとまりがみられるもので、素材幅が広い上端部の痕跡がより顕著である。

**すり石** (図V-59-138～146、V-77、図版110)

**概要** すり石は包含層で35点・33個体が出土し、内10点・9個体を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの27点、器体全体の2/3以下の欠損品が4点、接合して完形近く復元されたもの4点である。

層位別の出土状況は、Va層5点、Vb層20点、VIIa層9点である。図では142～146がVIIa層で他はVa・Vb層から出土している。

石材は安山岩32点、砂岩2点、かんらん岩1点で、安山岩が多い。図示したものでは144が砂岩で、他は全て安山岩である。なお、図ではすり面を「網掛け」で示した。

**分布状況** I-2区に主に分布している。調査区J・K・L12～14分布のすり石はVIIa層出土のもので、その付近には縄文時代早期I群A類土器のまとまりが認められる(図V-1)。

**掲載石器** 138～141は円形、長楕円形の礫を素材とし、平坦部にすり面が観察されるものである。すり面は片面にみられ、非常に滑らかである。

142～146は分厚い長楕円形、もしくは長方形礫の縁辺に沿って細長いすり面が観察されるものである。これらは出土層位と形態から、縄文時代早期に特徴的にみられる断面三角形のすり石と捉えられる。142～145はすり面が1面、146は2面観察される。すり面縁辺には小型の剥離面が断続的に観察される。また144以外の4点には、すり面に軽微な敲打痕がみられる。145はすり面の両端にまとまった

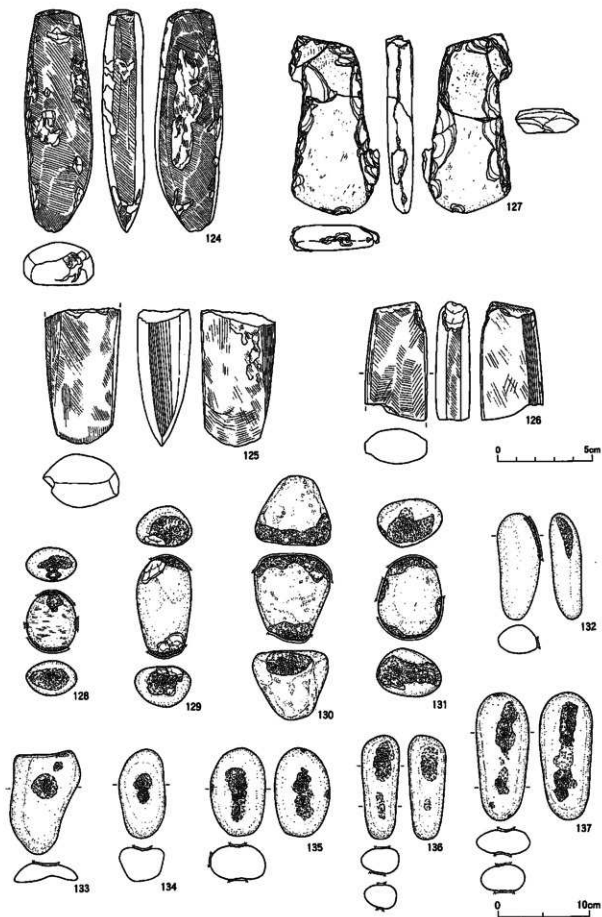


図 V-58 包含層の石器 (10)



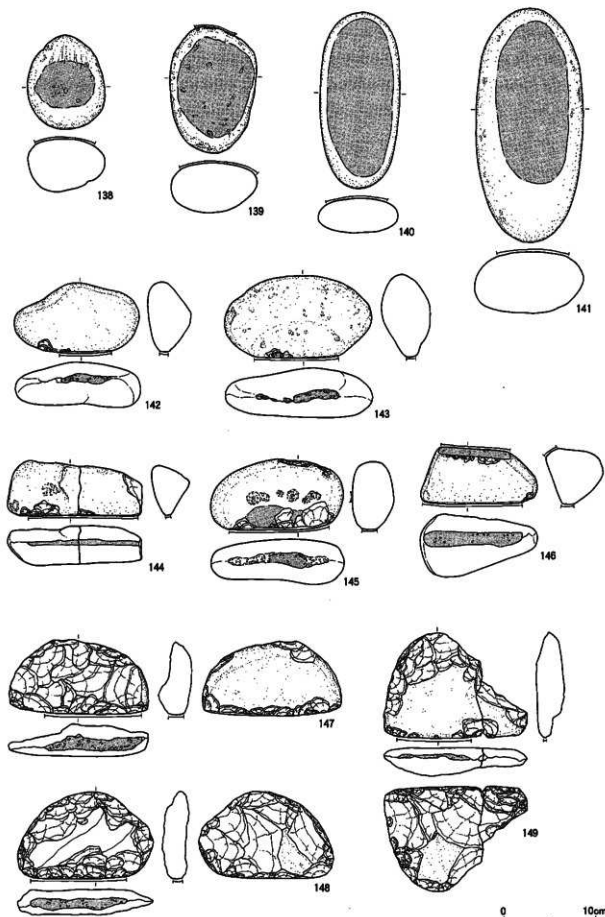


図 V-59 包含層の石器 (11)

敲打痕が観察される。

**扁平打製石器・扁平打製石器原材** (図V-59・60-147~156、V-77・79、図版111)

**概要** 扁平打製石器は包含層で182点・161個体が出土し、内11点・10個体を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの121点・118個体、器体全体の2/3以下の欠損品33点・31個体、欠損後再使用された痕跡があるもの1点、接合により完形近くまで復元されたもの26点・10個体、不明1点である。残存状況が良好な資料は129個体となる。

層位別の出土状況はVa層34点、Vb層138点である。石材は安山岩176点、砂岩4点、閃緑岩2点、安山岩が圧倒的に多い。図示したものは151が砂岩で、他は全て安山岩である。

また、扁平打製石器原材が33点出土している。器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの21点、器体全体の2/3以下の欠損品が10点、接合してほぼ完形になったもの2点である。層位別の出土状況は、Va層が8点、Vb層が24点である。石材は全て安山岩である。

全体の特徴として次の4点があげられる。①すり面は石器横軸と並走する直線的な平坦面で、縦断面形を観察すると石器長軸に対しほぼ直交する。②すり面平面は、ほとんどが直線的と捉えられる。③すり面縁辺には調整と捉えられる連続的な剥離と、剥離したような断続的な小型剥離が観察される。④すり面には不明瞭ながらも敲打痕がみられる。なお、図ではすり面を「網掛け」で示した。

**分布状況** I-2区から北側の斜面際にかけてと、II-1区に、主なまとまりがみられる。

折れ接合の分布は特徴的なものである。折れ接合資料は全部で18個体あり、グリッド間接合するものは12個体みられる。内容はI区斜面際から斜面で接合するもの4個体、I区斜面際同士で接合するもの4個体、II-1区付近で接合するもの3個体、II-2区付近で接合するもの1個体である。I区斜面の分布が多い。破損品は、主に無名の沢斜面と中期中葉の堅穴住居群付近に廃棄されたことが推測される。

**掲載石器** 147~152は器体平面を半円状に整形しているものである。調整剥離は片面もしくは両面を覆い尽くすように施されている。すり面幅は1cmを超える広いもの(147・148・150)と、0.5cm前後の狭いもの(149・151・152)がある。149は右側縁に破片が接合しているが、破片部にはすり面が形成されていない。整形時に破損したが、そのまま本体を使用したことが考えられる。152のすり面は左側にせりあがるように形成されているが、中央の直線的すり面と左側のすり面は断続している。

153~156は平面が台形もしくは長方形を呈するものである。調整はすり面縁辺にみられる他は、左右端部に打ち欠きを加える程度であり、素材の形状を大きく変化させていない。すり面幅は半円状のものと同様に、1cmを超える広いもの(154・155)と、0.5cm前後の狭いもの(153・156)がある。すり幅の差は、素材の形状と使用頻度に原因すると考えられる。

153は小型のもので、下縁のやや外湾した頂部に直線的なすり面が形成されている。156は上下両縁に左右に分かれたすり面が形成されている。上部縁の断続は中央部が若干内湾するためと考えられる。下縁部は裏面側への調整加工により、中央部のすり面が除去されたことが推測される。

**北海道式石冠・北海道式石冠原材** (図V-60~62-157~168、V-78・79、図版112・113)

**概要** 北海道式石冠は包含層で179点・137個体が出土し、内18点・11個体を図示した。

器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの48点・46個体、器体全体の2/3以下の欠損品が72点・64個体、接合により完形近くまで復元されたもの47点・18個体である。欠損後、再使用された痕跡があるものは12点・9個体で、破損とは判断し難いやや軽微な割れを含めれば、欠損後再使用されたものは20点認められる。残存状況の良好な資料は73個体となる。他の器種に比べ破損品の占める割合が非常に高い。

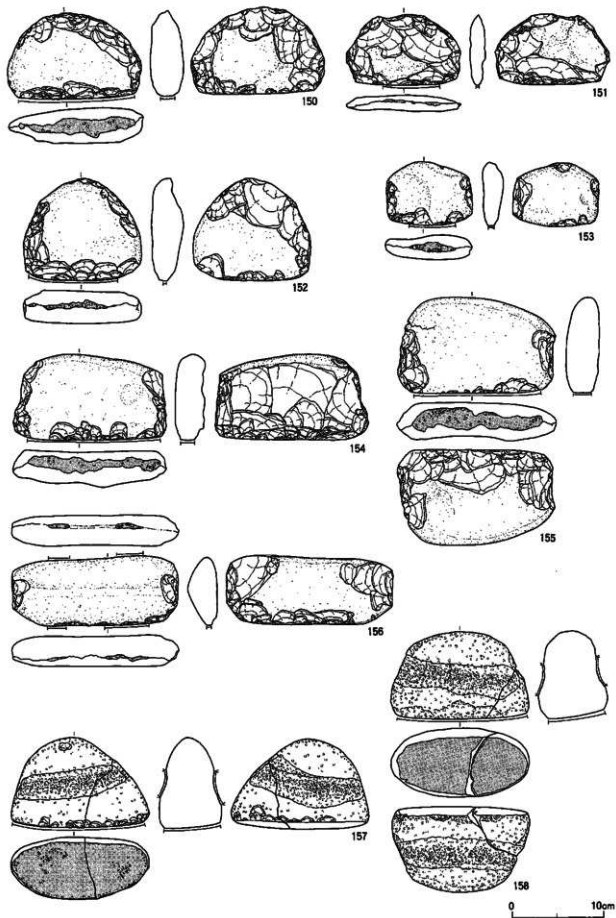


図 V-60 包含層の石器 (12)

層位別の出土状況は、Va層が29点、Vb層が140点である。石材は安山岩172点、閃緑岩3点、不明4点で、安山岩が圧倒的に多い。図示したものは全て安山岩である。

また、北海道式石冠原材が3点出土している。器物残存状況は全て完形品である。層位別の出土状況は、全てVb層である。石材は全て安山岩である。

全体的な特徴として次の2点があげられる。①すり面は正面・断面でみた場合、緩やかに湾曲し、さらに縦断面形を観察すると石器長軸に対し斜交する。②すり面縁辺には使用により剥落したような、断続的な小型剝離が観察される。なお、図のすり面は「網掛け」で示した。

分布状況 調査区全体にみられるが、I-2・3区、II-1区に、主なまとまりが認められる。調査区K17からは15点出土しているが、被熱等により破砕したもので、個体数は2個体程度である。

折れ接合の分布状況は特徴的なものである。折れ接合資料は全部で29個体あり、内、グリッド間接合するものは20個体みられる。内容は、I区斜面と斜面際で接合するものが9個体、I区斜面同士の接合2個体、I区斜面際同士の接合4個体、II区尾根状地形の接合5個体である。II区は離れて接合するものが多く、大きいもので45~50mの距離がある。これらは中期中葉の堅穴住居群と関係することが考えられる。また、II-1区には、破損後も再利用された資料8点の内5点がまとまってみられる。I区の斜面際と斜面の接合資料からは、破損品を斜面へ廃棄したことが推測される。

掲載石器 157~165は平面が半円形を呈し、器体中央に鉢巻状の敲打が施されるものである。

157~163は石器の長さとの厚さの比が2未満のものである。器体整形に関しては、158・159は丹念な敲打をおこなっているが、157・161~163などは軽微な敲打もしくは無加工で、素材礫の丸みを帯びた形状を利用している。

164・165は石器の長さとの厚さの比が2以上のものである。板状の礫を素材とし、裏表面は平坦である。164は敲打により入念に整形されているが、165は左端部を抉り入るよう整形するのみで、加工は軽微である。164は器体を半割するように破損して廃棄されている。

161~163はすり面が著しく正面側に傾き、すり面縁辺が、鉢巻状の敲打部に近接している。161は右端部破損後もさらに使用を継続し、すり面が大きく傾斜して擦り減った状況が理解できる。162・165には短軸方向に展開する3面のすり面が認められる。また、165は上面部に平滑な面を有するが、すり面であるかは判別できなかった。

166・167は形態が特徴的なものである。166は小型のものである。ほぼ無整形である。167は上部にフタコブラクダの背中のような突起が認められる。突起は敲打により丁寧に作り出されている。また、167には2面のすり面が観察される。

168は北海道式石冠原材である。下端には敲打により平坦面が形成されている。この下端平坦面は縦断面で観察すると、石器長軸に対しほぼ直交するように作られている。

砥石 (図V-62-169~176、V-78、図版114・115)

概要 砥石は包含層で20点・19個体が出土し、内9点・8個体を図示した。器物残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの11点、器体全体の2/3以下の欠損品が8点、不明1点である。層位別の出土状況は、Va層が12点、Vb層が6点、VIIa層2点である。図示した石器は全てVa・Vb層出土のものである。石材は安山岩2点、凝灰岩1点、軽石5点、砂岩12点で、多孔質なものや粒子の緻密なものなど、石質によって表面の状況が大きく異なる。図示したものでは169が泥岩、170~172が砂岩、173・174が安山岩、175・176が軽石である。なお、図のすり面は「網掛け」によって示した。出土分布状況 I-2区、III区の、沢沿いにまとまってみられる。

掲載石器 169~172は粒子が細かく緻密な石質のものである。169の表面は酸化が激しく、また細かく

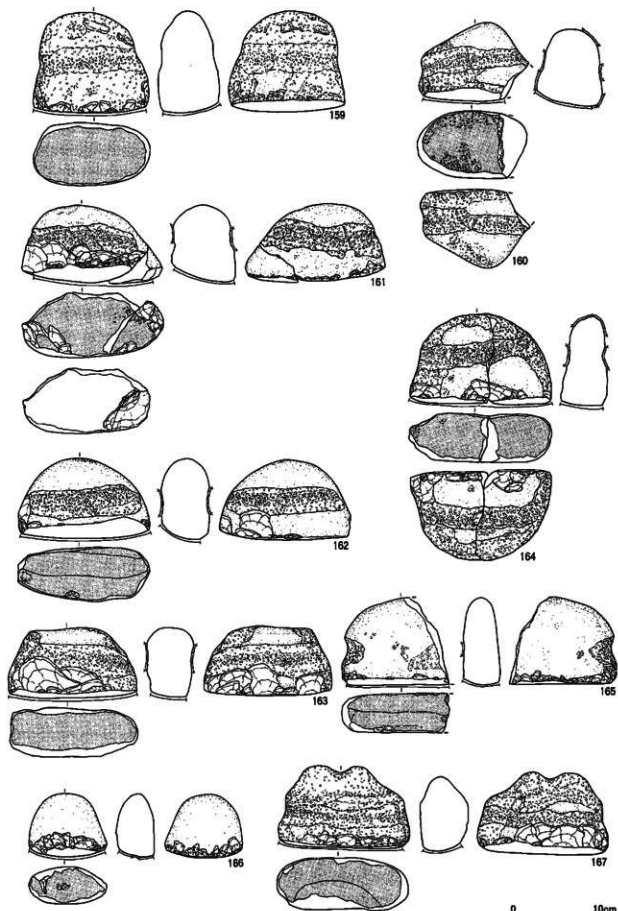


図 V-61 包含層の石器 (13)

凹凸し、節理面のようにである。すり面は極狭い範囲である。171は中央に向かって滑らか且つ著しく凹み、器厚の減じた中央部が破損している。172は中央部が最も滑らかで、若干凹んでいる。

173・174は粒子がやや粗い石質のものである。173は正面上部に敲打痕がみられる。また、173・174とも、下部右側欠損部に向かって器体が薄手となる。

175・176は多孔質のものである。175は両面のすり面とも中央で著しく凹んでおり、最も薄手となった部分から破損している。すり面は長楕円形を呈し、裏面の中央部には溝状の擦痕が長軸方向にままとまっている。176は正面・上面・側面がすり面となっている。各面とも一定方向に走る溝状の擦痕がままとまり、中心部が最も凹んだ長楕円形のすり面を形成している。

173～175は、平面楕円形で裏面が平坦になるような一定形状に整形された可能性がある。

台石・石皿 (図V-63～66-177～188、V-78、図版116・117)

**概要** 台石・石皿は包含層で78点・68個体が出土し、内15点・12個体を図示した。器体残存状況は、完形もしくは器体全体の2/3以上が現存するもの35点、器体全体の2/3以下の欠損品が29点、接合により完形近くまで復元されたもの13点、不明1点である。破損品が多数みられる。層位別の出土状況は、Va層13点、Vb層54点、VIIa層3点である。図示したものでは177・181がVIIa層出土で、他は全てVa・Vb層出土のものである。石材は全て安山岩である。なお、図のすり面は「網掛け」によって示した。  
**分布状況** 調査区全体に散発的に分布するが、II-1区(縄文時代中期中葉の遺構群が分布する範囲)には希薄である。主なまとまりは無名の沢沿いI-1区からI-2区にかけての範囲にみられる。台石・石皿は石組炉や配石に利用されているため、一次廃棄後の移動・再利用、つまり二次的遺棄・廃棄の可能性が考えられる。

**掲載石器** 177～180は使用痕跡が敲打痕のみ観察されるものである。286はややまばらな敲打痕のまとまりが、帯状に観察される。178～180は楕円形の敲打痕の広がりが観察されるもので、敲打面は平坦になっている。

181はすり面が中央部に向かい湾曲するものである。擦痕は不明瞭である。

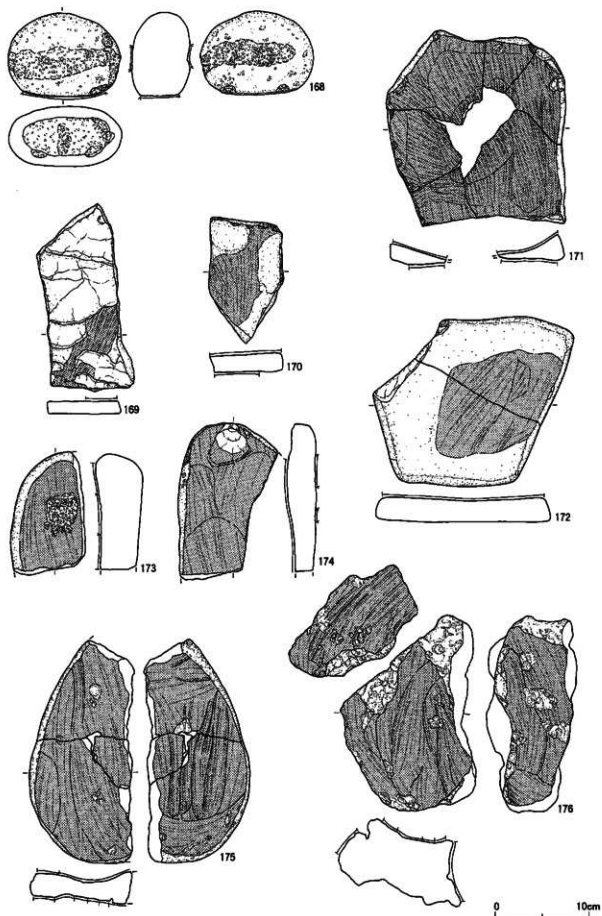
182～185は平滑なすり面が観察されるものである。すり面中央部に特に顕著なすり面が観察され、周囲に移行するにしたがって、擦痕が弱くなる傾向がある。185は敲打を伴い、擦痕がやや不明瞭である。

186～188はすり面が楕円形に凹むものである。すり面長軸方向の側縁に近い側が緩やかに、その反対側がやや強くせり上がる。また、長軸中央部からやや強くせり上がる側にかけての範囲が、最も擦痕が顕著で滑らかな部分となっている。緩やかな立ち上がりは素材縁辺部に続き、強くせり上がる方は、平坦なすり面に続く。186は楕円形のすり面が長軸方向を揃えて並列している。両すり面とも右側が敲打によって、強くせり上がるように作り出されている。188はやや粒子が細く緻密な石材で、すり面が非常に滑らかである。また、凹みの周囲には平坦なすり面が広がっている。

**接合資料** (図版118)

接合資料は、剝離面接合資料32個体(144点)、折れ面接合資料106個体(274点)が認められた。剝離面接合資料は石材が頁岩・メノウで、フレイクと石核の接合資料が8割近くを占める。ここでは良好に接合し、特徴的な剝片剝離技術を示す2個体の資料について記載する。なお、これらは写真図版にのみ掲載した。

**接合資料29** スクレイパー1点、Rフレイク1点、縦長剝片2点が接合している。凝灰岩製である。平坦打面を設定し、一定方向から縦長剝片を連続的に剝離している。背面側が自然面に覆われることから、剝離作業の初期段階と考えられる。打面は長さ1cm・幅2.5cmを越える大型のもので、バルブ



図V-62 包含層の石器 (14)

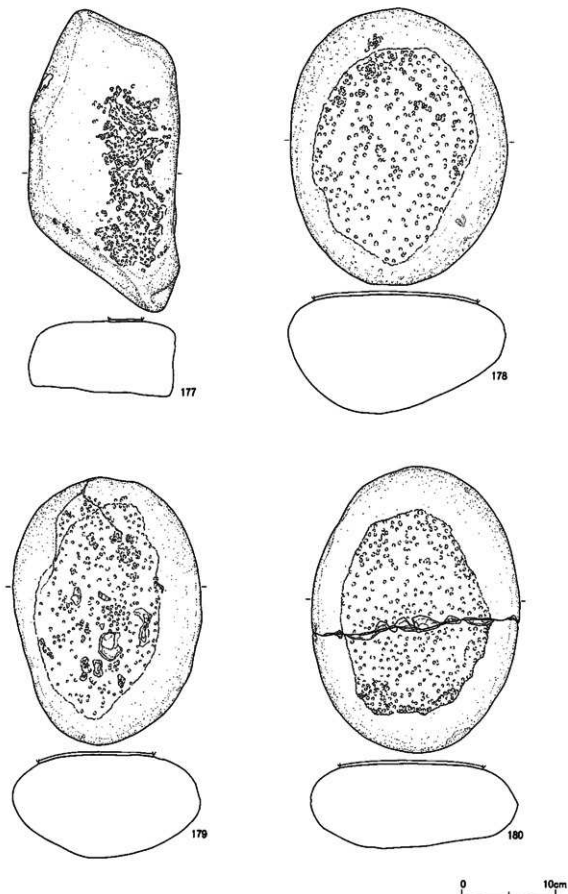


図 V-63 包含層の石器 (15)



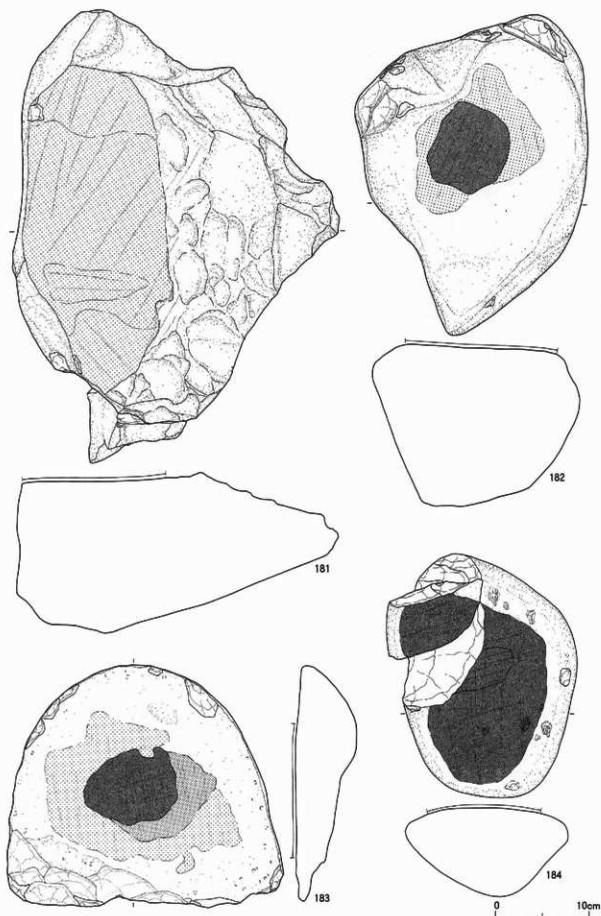


図 V-64 包含層の石器 (16)

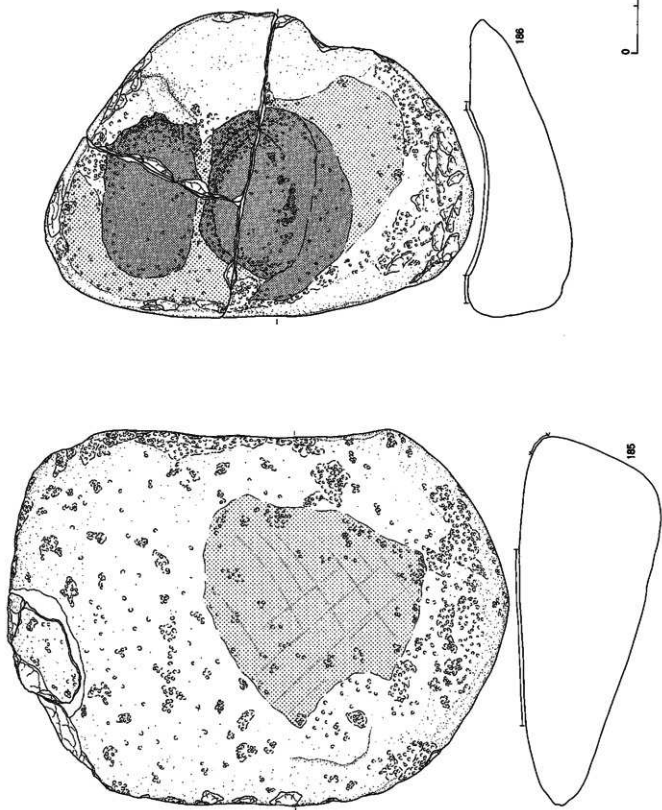


図 V-65 包含層の石器 (17)

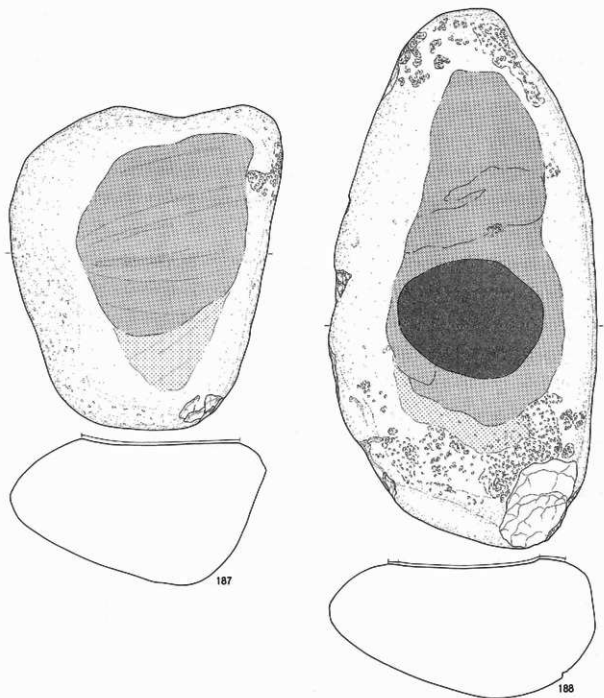


図 V-66 包含層の石器 (18)

(打瘤)、バルバースカー(打瘤裂傷)の発達が著しい。硬質の敲石を用いた直接打撃による剝離の可能性がある。

接合資料35 剥片20点、石核3点(個体数)が接合している。頁岩製である。部分的に空隙がみられるが、素材原石の形状を復元することができた。素材は拳大より若干大きい程度のやや扁平な亜角礫である。自然面の平坦面を打面、稜線を作業面に利用して、剝離作業を開始している。縦長剥片を数点剝離後、分厚い剥片を剝離し、これを石核として剥片剝離をおこなっている。剥片素材の石核は、4～5回の剝離の後、打面を90°転移して逆方向から小型剥片を剝離し、最終的に剥片剝離の加撃が石核を大きく破損させ、作業を終了している。一方、礫素材の石核は、分厚い剥片剝離後も、扁平礫の両面に作業を進行している。ウートゥーラパッセ(内反剝離)により形成された作業面末端の平坦面に打面を転移し、当初設定された自然面打面の逆方向から剝離を行っている。「作業面末端部と裏面側のなす角度」を「打面と作業面のなす角度」に利用したものであろう。最終的には、自然面打面からの剝離によって石核の1/3ほどが破損し、更に継続された作業によって石核が半割され、作業を終了している。1～4.5cmほどの小型の剥片を30点ほど生産しており、内、数点は石器素材に利用され、遺跡外に持ち出された可能性がある。(坂本)

#### 4 土製品(図V-67-1～17、V-78、図版119)

概要 35点出土した。土偶5点(2個体)・土玉・鐔形土製品(2個体)・三角形土製品・ミニチュア土器・焼成粘土塊・その他の土製品がある。Va・Vb層および掘上土から出土している。これらのうち17点を図示した。Ⅲ群A類土器に伴うものと、Ⅳ群A類土器に伴うものがある。

分布状況 調査区北西側、I-1・2区に集中する。遺構の集中範囲には少なく、集中範囲の外周に分布している。

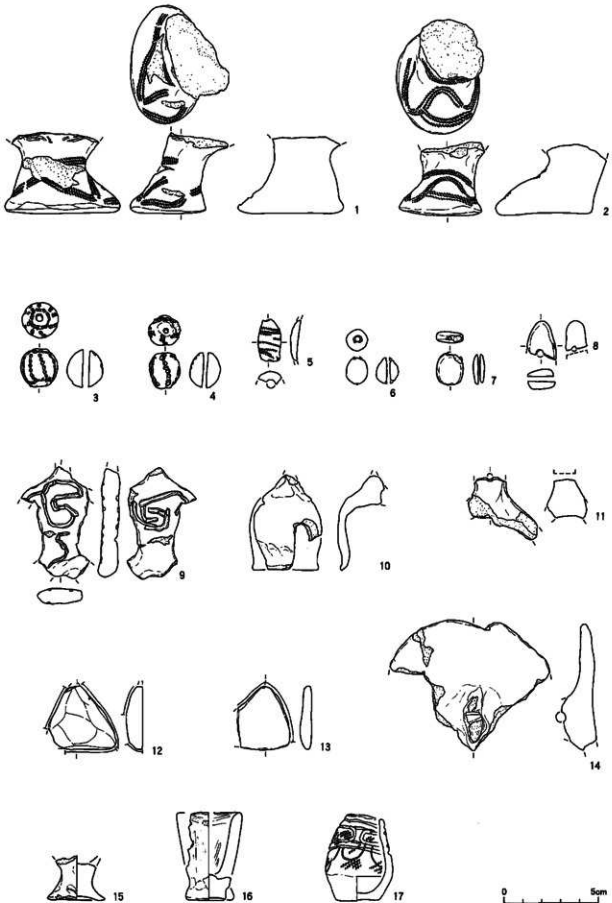
掲載土製品 胎土・文様から判断すると、1・2・5・15・16はⅢ群A類土器に伴うもの、9～14・17はⅣ群A類土器に伴うもの、3・4・6～8はⅣ群A類土器に伴う可能性が高いものである。

##### Ⅲ群A類土器に伴うもの

1・2は土偶である。「足」と推測されるもの。同一方向に傾いている。下面は平坦で、磨かれる。上面の剝落面は平坦。三本組の縄線が施されることと、胎土に繊維と海綿骨針を多く含むことから、Ⅲ群A-2類土器に伴うものである。一対をなすものと推測される。5は土玉。半分ほどの破片である。横環する縄線が施される。15・16はミニチュア土器。15は付け土器の白部分。

##### Ⅳ群A類土器に伴うもの

9は土偶。板状で、表裏に沈線による文様が施される。「股」にあたる部分は、ひねるようにして成形されている。上半部は、図V-34-129と同じ掘上土から出土した。3・4・6～8は土玉。3・4は球形で、貫通孔と同方向に竹管状工具による刺突列が施される。6～8は文様が施されないもので、6は球形のもの、7は楕円形を呈する扁平なもの。8は図の左右・前後方向の2つの貫通孔をもち、中央で交差している。14のようなものの鈕などの可能性もある。10・11は鐔形土製品。同一グリッドから出土した。10は3点が接合したもの。鈕部には貫通孔はない。11は貫通孔をもつ鈕部を含む破片。12・13は三角形土製品。無文の土器片を研磨し、三角形に整形している。14は壺状の土製品。板状で、中央に鈕あるいは把手状の貼付が剝落した痕跡がある。断面図に示したように、剝落部分に貫通孔の痕跡を有する。裏面の中央付近はやや凹む。調整は粗雑で、凹凸やひび割れがみられる。17はミニチュア土器。壺形で、胴部下半が張り出し、屈曲する。縄文地に沈線による文様が描かれる。口縁部に並行沈線とそれを結ぶ)状沈線が施され、その下位に細い弧状沈線が連続する。(柳瀬)



図V-67 包含層の土製品

## 5 石製品 (図V-68-1~7、V-78、図版120)

**概要** 石製品は包含層で26点が出土し、内8点・7個体を図示した。層別別の出土状況は、Va層が11点、Vb層が14点である。石製品には自然作用によって形成されたと考えられる、穴あき石、碗状の礫、スタンプ形の礫などを含んで分類している。石材は軽石10点、凝灰岩7点、安山岩3点、砂岩3点、頁岩2点、黒曜石1点である。

**出土分布状況** I-1区に主にみられる。縄文時代後期前葉の配石遺構・フラスコ状土坑群の周囲に分布する。

**掲載石製品** 1~5は軽石を研磨した石製品である。出土点数は10点(9個体)で、出土位置は全て配石・土坑群の周囲である。平面が方形から楕円形を呈するものが主で、厚さは1cm前後から2.5cmを越えるものまでみられる。1・4には上下端や側面にも平坦面が形成されている。5は板状に整形したものの上端付近に穿孔している。

6は板状薄片を素材とし、下端側縁に刻線が施されるものである。出土点数は1点である。刻線は側縁に対し直交方向に連続的に施されている。石鋸様の形態を呈し、側縁は正面・下面とも直線的で、断面はV字を呈する。また、正・裏面には下端側縁に沿って線状痕が観察される。石材は砂岩である。

7は薄片を素材に剝離加工したもので、背面側周縁にやや急角度に施されている。頁岩製である。

(坂本)

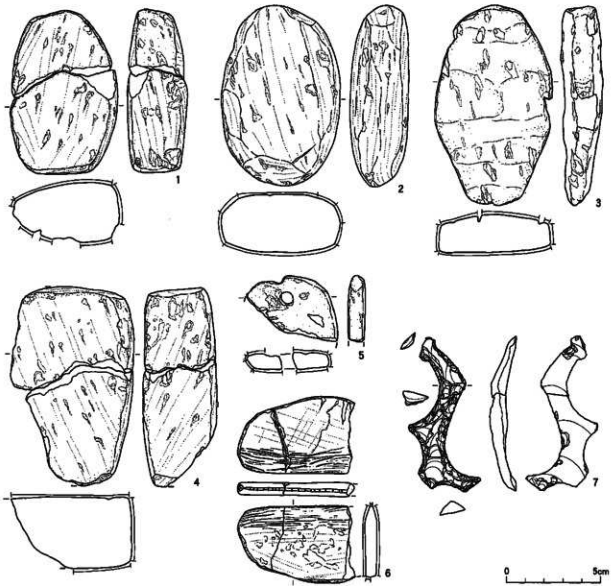
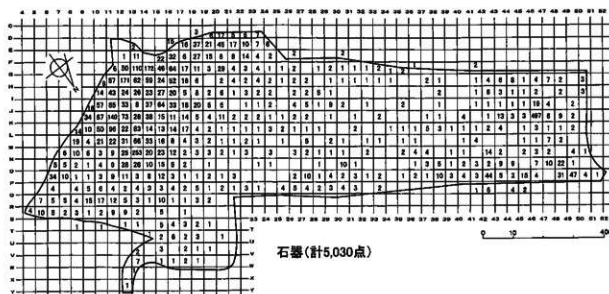
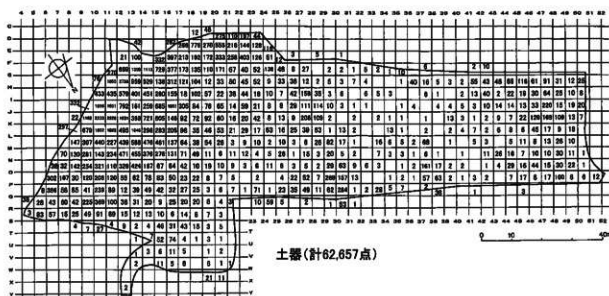
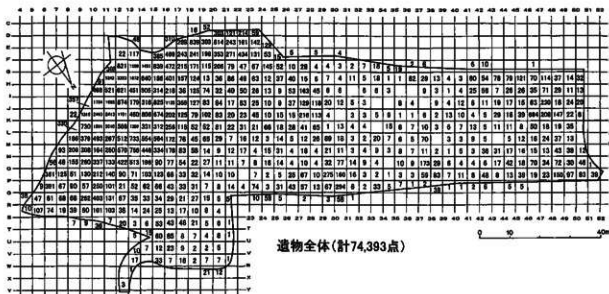
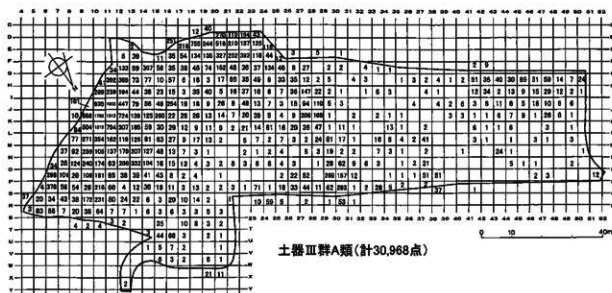
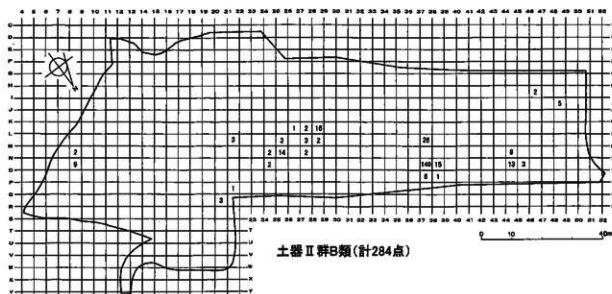
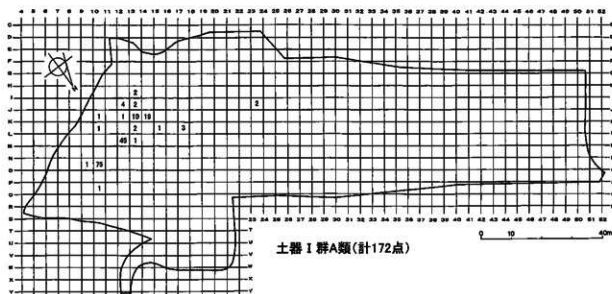


図 V-68 包含層の石製品

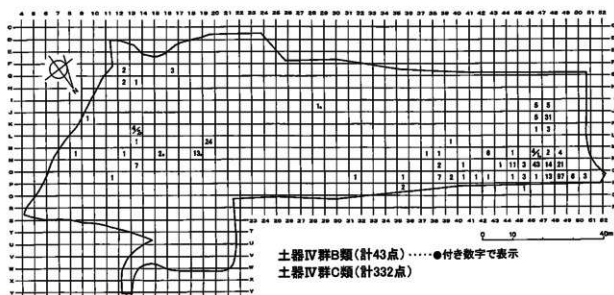
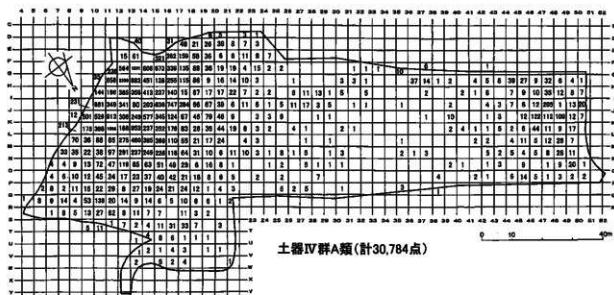
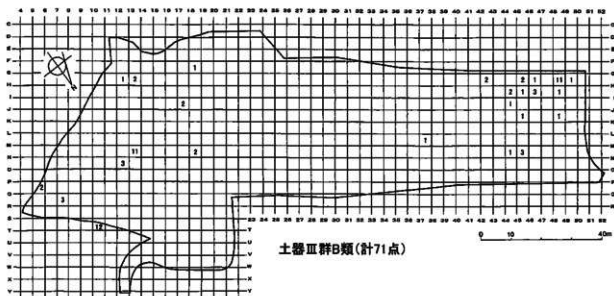


図V-69 出土分布(1)

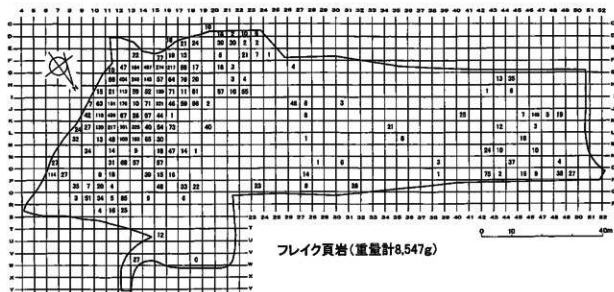
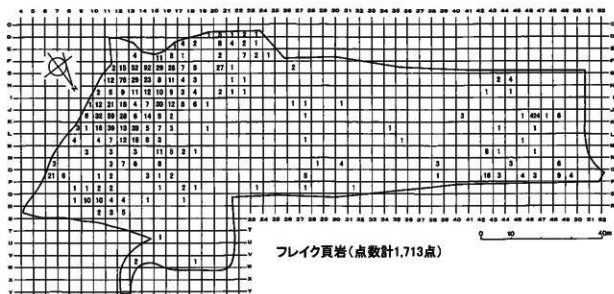
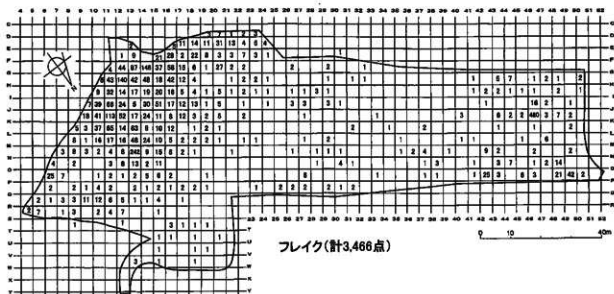




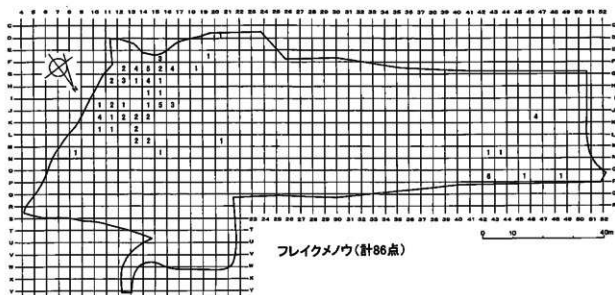
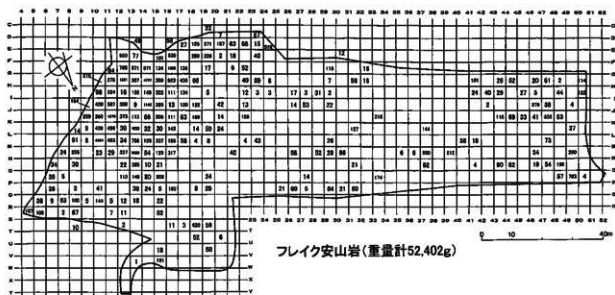
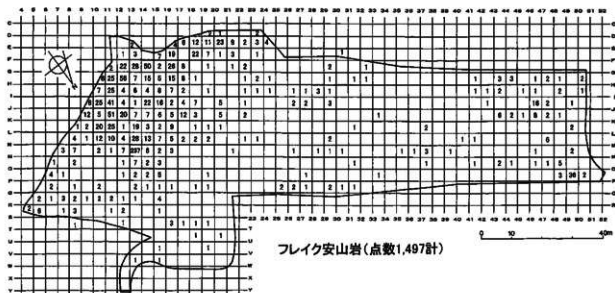
図V-70 出土分布(2) 土器 I



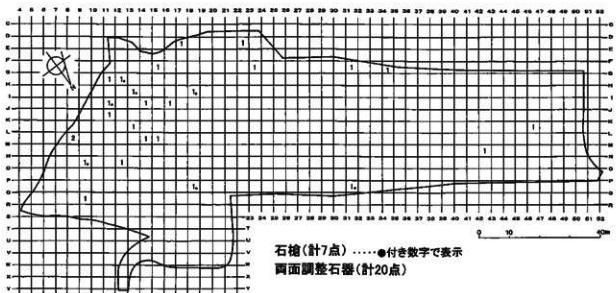
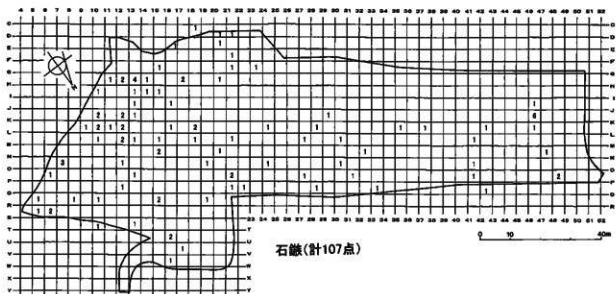
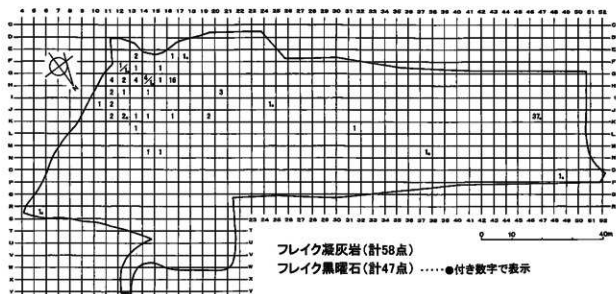
図V-71 出土分布(3) 土器2



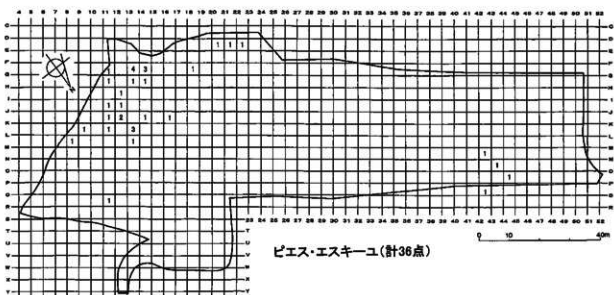
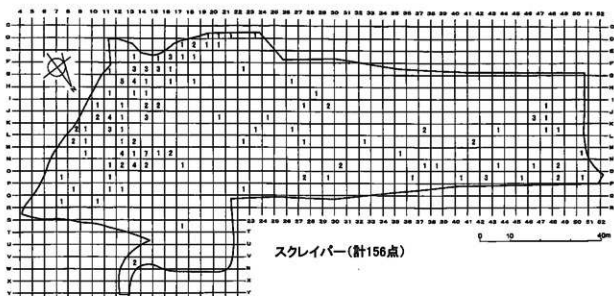
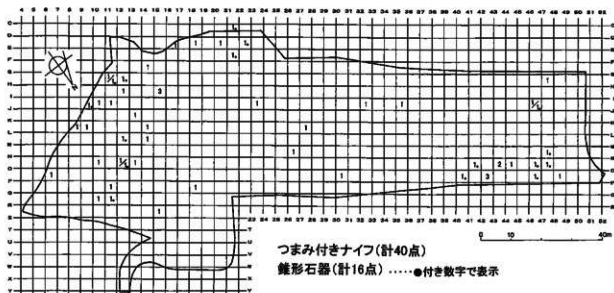
図V-72 出土分布(4) 石器1



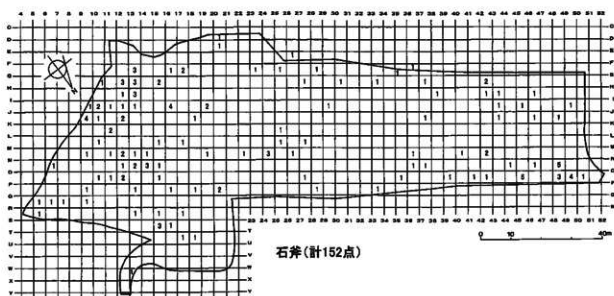
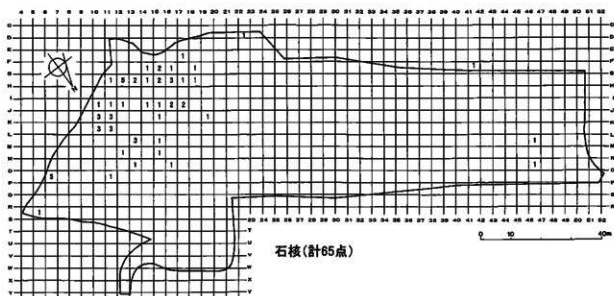
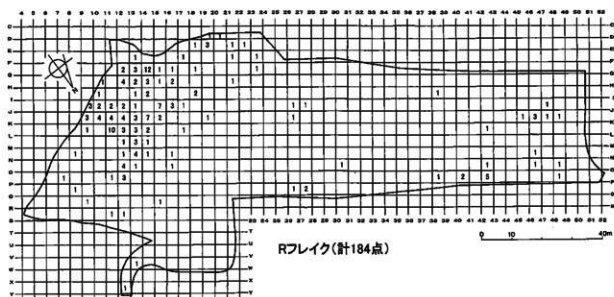
図V-73 出土分布(5) 石器2



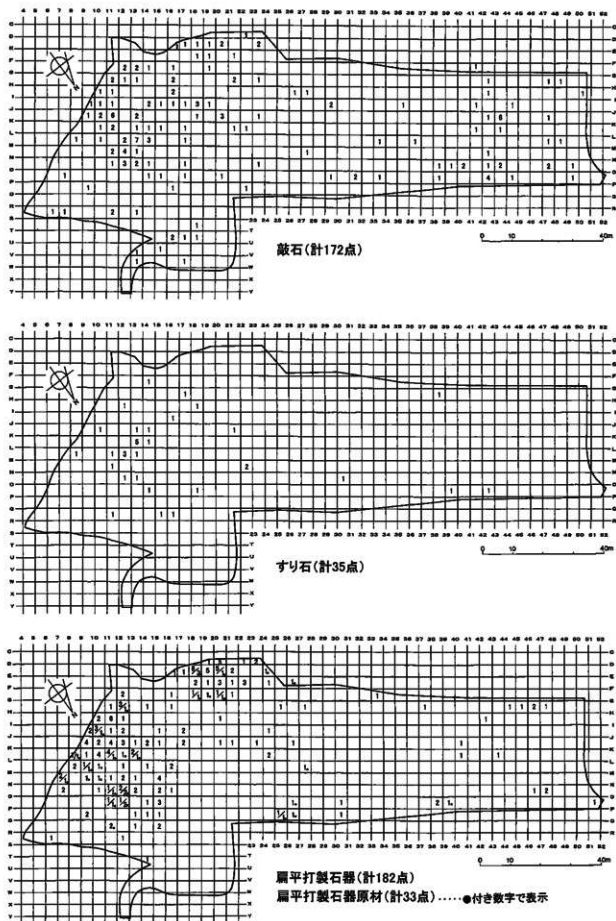
図V-74 出土分布(6) 石器3



図V-75 出土分布(7) 石器4

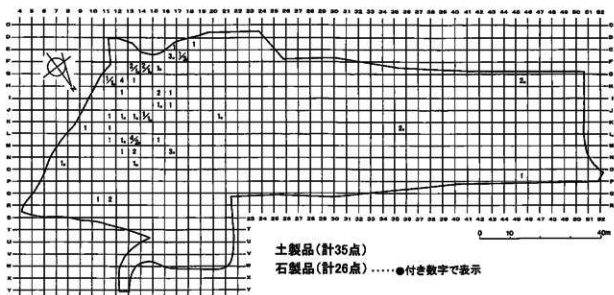
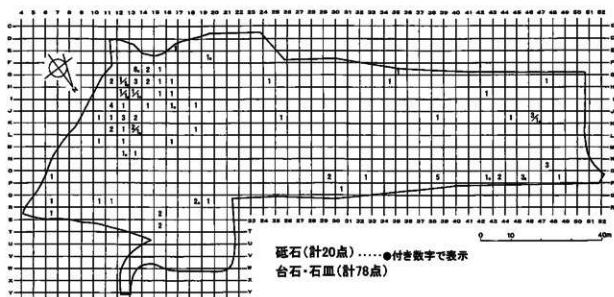
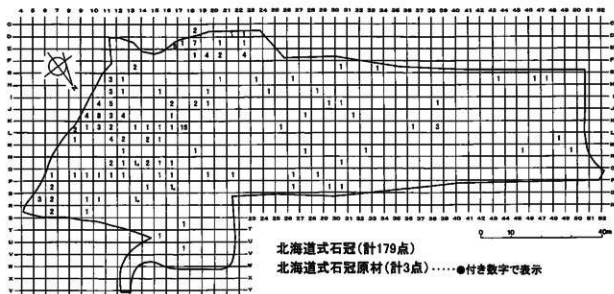


図V-76 出土分布(8) 石器5



図V-77 出土分布(9) 石器6





図V-78 出土分布(10) 石器7・土製品・石製品

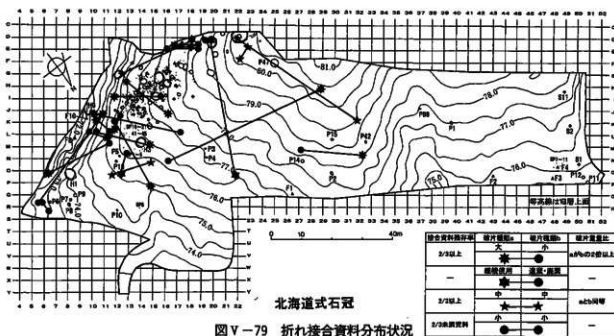
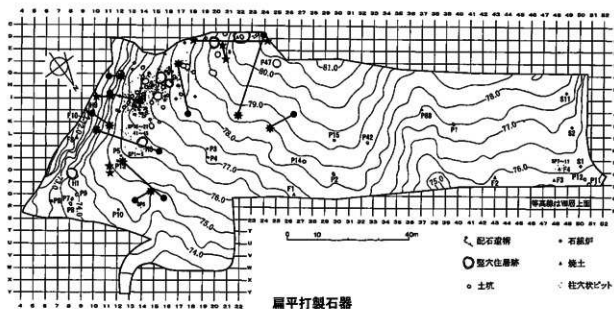


図 V-79 折れ接合資料分布状況

表 V-1 接合資料器種別点数

器種名	接合種類			総計
	折れ面接合	割断面接合	同一母岩非接合資料	
両面磨製石器		2		2
つまみ付きナイフ	2			2
スクレイパー	15	1		16
片フレイク	25			25
片フレイク	1			1
フレイク	41	100	3	144
石	2	16		18
石弁・石弁原料	16	7		23
礫	14			14
すり石	4			4
扁平打製石器	38			38
北海道式石冠	64			64
砥石	11			11
磨石・石皿	15			15
石製品	4			4
総計	252	128	3	381

## VI 自然科学的手法による分析結果

## 1 放射性炭素年代測定

地球科学研究所

## 報告内容の説明

- 14C age (y BP)** : 14C年代 "measured radiocarbon age"  
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。  
半減期はリビーの5568年を用いた。
- 補正14C age (y BP)** : 補正14C年代 "conventional radiocarbon age"  
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り  
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。  
試料の 13C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。  
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。
- δ 13C (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)  
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)_{\text{[試料]}} - (13C/12C)_{\text{[標準]}}}{(13C/12C)_{\text{[標準]}}} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372である。

- 暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3))により約19000yBPまでの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Taima and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pg 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

## 測定方法などに關するデータ

**測定方法** AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

**処理・調製・その他** : 試料の前処理、調製などの情報

**前処理** acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調製・その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理  
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出  
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

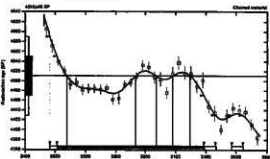
**分析機関**

BETA ANALYTIC INC.  
4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

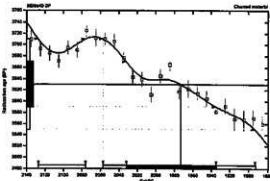
表 VI-1-1 <sup>14</sup>C年代測定結果

試料番号	<sup>14</sup> C年代 (BP)	標準偏差 (1σ)	校正後 <sup>14</sup> C年代 (Cal BP)
試料番号	測定方法	測定標準	測定標準
Beta-174483	AMS	Standard	Standard
試料名 (1868) K9A-1	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174484	AMS	Standard	Standard
試料名 (1870) K9A-2	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174485	AMS	Standard	Standard
試料名 (1871) K9A-3	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174486	AMS	Standard	Standard
試料名 (1872) K9A-4	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174487	AMS	Standard	Standard
試料名 (1873) K9A-5	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174488	AMS	Standard	Standard
試料名 (1874) K9A-6	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174489	AMS	Standard	Standard
試料名 (1875) K9A-7	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174490	AMS	Standard	Standard
試料名 (1876) K9A-8	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard
Beta-174491	AMS	Standard	Standard
試料名 (1877) K9A-9	測定方法, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard
試料名, 施設	AMS-Standard	AMS-Standard	AMS-Standard

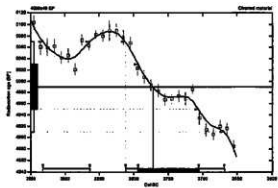
(Value: C13C12=26.1‰, wst=1)  
 Laboratory number: Beta-174483  
 Conventional radiocarbon age: 4336±40 BP  
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3340 to 3060 (Cal BP 3310 to 3030) and (95% probability)  
 Interscept date  
 Interscept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3310 (Cal BP 3280) and Cal BC 3160 (Cal BP 3100) and Cal BC 3130 (Cal BP 3080)  
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3310 to 3190 (Cal BP 3280 to 3050)



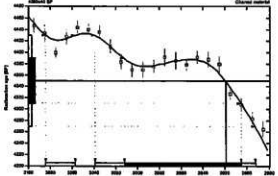
(Value: C13C12=-28.1‰, wst=1)  
 Laboratory number: Beta-174484  
 Conventional radiocarbon age: 4326±40 BP  
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3340 to 3060 (Cal BP 3310 to 3030) and (95% probability)  
 Interscept date  
 Interscept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3310 (Cal BP 3280) and Cal BC 3160 (Cal BP 3100) and Cal BC 3130 (Cal BP 3080)



(Value: C13C12=-26.7‰, wst=1)  
 Laboratory number: Beta-174484  
 Conventional radiocarbon age: 4995±40 BP  
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3730 to 3460 (Cal BP 3680 to 3410) and (95% probability)  
 Interscept date  
 Interscept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 3730 (Cal BP 3710)  
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3730 to 3710 (Cal BP 3740 to 3680)



(Value: C13C12=-24.5‰, wst=1)  
 Laboratory number: Beta-174483  
 Conventional radiocarbon age: 4386±40 BP  
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 3080 to 2860 (Cal BP 3030 to 2810) and (95% probability)  
 Interscept date  
 Interscept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 2930 (Cal BP 2810)  
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 3010 to 2960 (Cal BP 2980 to 2860)



(Value: C13C12=-23.6‰, wst=1)  
 Laboratory number: Beta-174466  
 Conventional radiocarbon age: 3626±40 BP  
 2 Sigma calibrated result: Cal BC 2310 to 2090 (Cal BP 2270 to 2050) and (95% probability)  
 Interscept date  
 Interscept of radiocarbon age with calibration curve: Cal BC 1960 (Cal BP 3910)  
 1 Sigma calibrated result: Cal BC 2090 to 1920 (Cal BP 3980 to 3270)

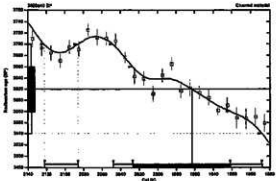
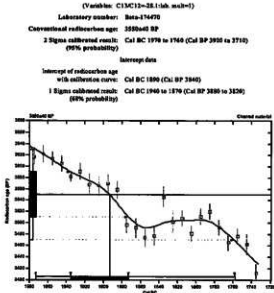
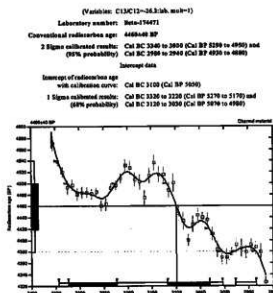
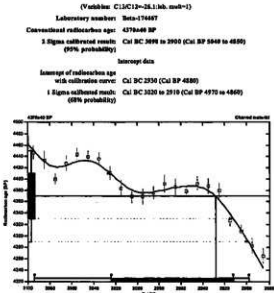
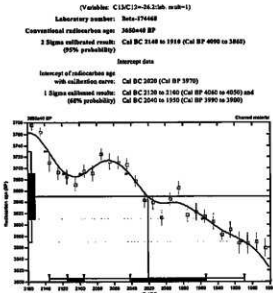


図 VI-1-1 <sup>14</sup>C年代の暦年代校正 (1)



BP2CAL Radiocarbon Age Calibration  
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.817-830  
 Methodology  
 A Simple Approach to Calibrating C14 Dates  
 Stuiver, M., et al., 1998, Radiocarbon 40(2), p.817-830

図VI-1-2 <sup>14</sup>C年代の暦年代較正(2)表VI-1-2 <sup>14</sup>C年代測定試料一覧

測定番号	試料番号	試料種類	測定法	採取地点	採取品名	採取地点の性格	出土遺物の時期	重量(g)	140年代(±BP)	暦正140年代(±BP)	暦年代	
											交点	1σ(50%probability)
Beta-17448	KRA-1	炭化物	AMS	H-1	土器埋没層内	壺式土器群	縄文時代中層中葉	0.31	4340±40	4330±40	Cal BC 2920	Cal BC 3010 to 2800
Beta-17446	KRA-2	炭化物	AMS	H-2	壺式土器群内	壺式土器群	縄文時代後層前期	0.03	5020±40	4990±40	Cal BC 3770	Cal BC 3780 to 3710
Beta-17448	KRA-3	炭化物	AMS	10-B	灰層	壺式土器群	縄文時代中層中葉	0.31	4330±40	4310±40	Cal BC 3350 and Cal BC 3230 and Cal BC 3180 and Cal BC 3150 and Cal BC 3130	Cal BC 3350 to 3150
Beta-17448	KRA-4	炭化物	AMS	H-10	壺式土器群内	壺式土器群	縄文時代後層前期	0.33	3630±40	3620±40	Cal BC 1980	Cal BC 2030 to 1820
Beta-17447	KRA-5	炭化物	AMS	P-17	灰層	土坑(墓)	縄文時代中層前期	0.06	4390±40	4370±40	Cal BC 2930	Cal BC 3080 to 2910
Beta-17448	KRA-6	炭化物	AMS	P-21	灰口色の粘土	土坑(墓)	縄文時代後層前期	0.17	3870±40	3850±40	Cal BC 2020	Cal BC 3120 to 3100 and Cal BC 3040 to 1950
Beta-17448	KRA-7	炭化物	AMS	P-51	壺土中層土	土坑(墓)	縄文時代後層前期	0.07	3690±40	3690±40	Cal BC 1970	Cal BC 2020 to 1840
Beta-17470	KRA-6	炭化物	AMS	P-53	壺土中層土	土坑(墓)	縄文時代後層前期	0.08	3000±40	3000±40	Cal BC 1690	Cal BC 1940 to 1670
Beta-17447	KRA-9	炭化物	AMS	P-68	灰層	土坑(墓)	縄文時代中層前期	0.07	4440±40	4440±40	Cal BC 3100	Cal BC 3320 to 3220 and Cal BC 3120 to 3030

※試料は全て、遺物の壺土、灰層、灰層から採取した炭化物である。

## 2 土壤理化学分析、種実遺体選別・同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

倉知川右岸遺跡（北海道茅部郡森町字栗ヶ丘に所在）は、南西側の山地から続く緩斜面に位置し、北西側を倉知川に、南東側を無名の沢によって区切られるとされる。これまでの発掘調査により、無名の沢側の斜面際から斜面にかけて縄文時代後期前葉の配石遺構・フラスコ状土坑・柱穴状ピットが、尾根状地形部分の山側で縄文時代中期前半の竪穴住居跡などが検出されている。

今回、墓坑とみられる土坑について検証するために土壤理化学分析を、また当時の植物利用について検証するために遺構等から出土した炭化物の同定を行う。

### (1) 墓坑の検討

#### ① 試料

墓坑と想定されている土坑の中で今回分析の対象とした土坑は、P-30、P-37、P-51、P-53、P-89の5基である。

P-30は、径約120cm前後、深さ約80cm、覆土上部に大型の礫が認められる円形土坑であり、坑底および礫直下の2か所が遺体埋納箇所として想定されている。1～8層に分層された覆土の内、礫下の8層から9点（試料番号1～9）の土壤試料を採取した。この内、試料番号4・9を除く7点について分析を実施する。

P-37は、径約90cm、深さ約70cmの円形土坑であり、坑底が遺体埋納箇所として想定されている。1～3層に分層された覆土の内、3層から2点（試料番号1・2）、4層から7点（試料番号3～9）、その外側のa層から1点（試料番号10）、遺構脇の基本土層Ⅶ層から1点（試料番号11）、合計11点の土壤試料を採取した。分析は、試料番号1・3・5・7～11の8点について実施する。

P-51は、調査区内で最も深い土坑で、底部に小ピットも確認され、内部にロームが貼り付けられて土坑として再整形されたような痕跡も認められるとされている。覆土は、10～30cm程度の礫が出土しており、この中に壁に立てかけるように設置された直径30cmほどの扁平な円形な礫も認められるとされる。坑底と再整形された坑底が、遺体埋納箇所として想定されている。試料は、遺構覆土から25点（試料番号1～25）、遺構脇の基本土層から26点（試料番号1～26）、合計51点を採取した。分析は、遺構覆土から採取された試料番号1・2・4～12・14・18・20・21・23～25、遺構脇基本土層で造成土とみられているb層・c層から採取した試料番号4・6、合計20点について実施する。

P-53は、径約90～100cmの円形土坑であるが、一部張り出した部分のみられ、立石が検出される。また、覆土上部で土器底片が、下部で礫2点が出土している。坑底でKo-gが確認されており、これを覆う黒色土は遺体が埋納された層位とみられている。1～9層に分層された覆土の内、5・7・8層および坑底にみられたKo-gより各1点、合計4点（試料番号1～4）の土壤試料を採取した。これら全点について分析を行う。

P-89は、4基検出された竪穴状土坑の中の1基であり、径約260cmを測り、上部に焼土が認められている。覆土は、上部が黒褐色～暗褐色土、坑底付近がロームの強い灰黄褐色土よりなるとされ、坑底付近が遺体埋納箇所として想定されている。試料は、遺構覆土坑底付近の灰黄褐色土から平面的に24点（試料番号1～24）を採取した。また、遺構脇の基本土層Ⅲ・Va・Vb層の各層1点の計3点を採取した。分析は、遺構覆土から採取した試料番号2・3・10・11・13～15・23・24、基本土層から採取された3点、計12点について実施する。

## ② 分析方法

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を行う。中でもリン酸は、土壤中に固定されやすいため、遺体が埋葬されると土壤中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解—バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解—原子吸光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った(土壤養分測定法委員会、1981)。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105°C、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφの篩を全通させる(微粉砕試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸( $P_2O_5$ )濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量( $P_2O_5$ mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

また、微粉砕試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

## ③ 結果

結果を表1に示す。以下、遺構ごとに結果を示す。

P-30覆土試料では、腐植含量が4.52~7.86%、リン酸含量が2.28~3.90 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量が9.31~12.72CaOmg/gを示す。試料番号6で腐植含量・リン酸含量が高く、試料番号3でカルシウム含量が高い。

P-37覆土および遺構脇の試料では、腐植含量が0.75~7.10%、リン酸含量が0.34~3.62 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量が5.99~13.08CaOmg/gを示す。試料番号10で腐植含量・リン酸含量が高く、試料番号11でカルシウム含量が高い。

P-51覆土およびb・c層試料では、腐植含量が0.55~6.90%、リン酸含量が1.02~5.98 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量が6.76~11.84CaOmg/gを示す。基本土層の試料番号4で腐植含量が最も高く、覆土採取の試料番号7でリン酸含量・カルシウム含量が高い。

P-53覆土試料では、腐植含量が1.36~6.48%、リン酸含量が1.22~5.88 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量が6.04~9.24CaOmg/gを示す。試料番号3で腐植含量・リン酸含量が高く、試料番号4でカルシウム含量が高い。

P-89覆土および基本土層試料では、腐植含量0.93~16.48%、リン酸含量が0.44~5.52 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量が6.26~18.51CaOmg/gを示す。基本土層Ⅴa層で腐植含量・カルシウム含量が高く、基本土層Ⅲ層でリン酸含量が高い。

## ④ 考察

骨の主成分の一つであるカルシウムが土壤中に含まれる量は、 $5.99 \sim 18.51 \text{CaOmg/g}$ であった。カルシウムが土壤中に普通に含まれる量、すなわち天然賦存量は普通  $1 \sim 50 \text{CaOmg/g}$  とされ（藤貫、1979）、含量幅が大きい傾向にある。これは、土壤中で移動・拡散しやすいことに由来する。今回の測定値は、天然賦存量の範囲内にあり、これを逸脱する試料がみられない。よって、カルシウムの含量については補足的に扱うことにする。

リン酸含量は、 $0.34 \sim 5.98 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  まで変化する。リン酸の天然賦存量については、Bowen (1983)、Bolt & Bruggenwert (1980)、天野ほか (1991)、川崎ほか (1991) などの調査事例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約  $3.0 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  程度である（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここでは全て  $\text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  に統一している）。この観点からみると、P-89 脇で採取した基本土層Ⅲ層およびVa層のリン酸含量は、上記の天然賦存量の上限を大きく上回っている。ただし、下位に向かいリン酸含量が減少していることから、ここでのリン酸の富化は施肥など後代の影響に由来すると考えられる。一方、P-37 脇のⅣ層、P-51 脇の b・d 層、P-89 脇の Vb' 層の測定値から判断すると、本遺跡周辺の土壤が持つリン酸含量は、天然賦存量の上限値に近い約  $2 \sim 3 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  程度と推定される。これらの値を著しく越える土壤では、人為的影響など外的要因によるリン酸成分の富化を指摘できると考えられる。

ここで、土壤腐植の影響を差し引いてもリン酸含量が高い試料を抽出するため、腐植含量とリン酸含量の相関関係を調べ、次に最小二乗法による回帰直線を求め、正の方向に逸脱する試料を調べてみることにした（図1）。この図をみると、まずP-89は、リン酸含量が低く、遺構内での偏もなく、回帰直線よりも下位に位置する。このことから、P-89では、外的要因によるリン酸の富化を認めることができない。また、P-30・P-37ともリン酸含量が  $3.0 \text{P}_2\text{O}_5 \text{mg/g}$  を越える試料が存在する。しかし、P-30は、いずれの試料も回帰直線付近に位置し、遺構内での偏も少ない。P-37は、遺構覆土外のa層から採取された試料でリン酸含量が高く、他試料のリン酸含量が極めて低い。これらのことから、P-30・P-37におけるリン酸は、土壤腐植の影響を強く受けている可能性がある。P-89脇の基本土層Ⅲ・Va層のリン酸含量を考慮すると、P-30およびP-37の内部には、後代の影響を受けた土壤が混入していることも考えられる。いずれにしても、これらの遺構では、動物遺体埋納を裏付ける根拠を得ることができない。

一方、P-51およびP-53では、同一遺構内でもリン酸含量が偏在しており、しかも回帰直線より正の方向に逸脱する試料が存在する。しかも、その試料のリン酸含量は、P-98脇の基本土層Ⅲ・Va層よりも高い測定値である。このことは、両遺構の内部に土壤腐植以外に由来するリン酸が遺構内に富化されていると考えられる。したがって、P-51およびP-53とも遺体埋納施設として利用されており、P-51が遺構中位の再整形された坑底付近を中心に、P-53が遺構底部付近に遺体が埋納されていた可能性がある。これらの点は、今後、残留脂肪酸の分布・偏在状況などを明らかにするなど（例えば、小山、1995）、多角的な調査を行った上で複合的に検証を試みたい。

## (2) 植物利用状況

## ① 試料

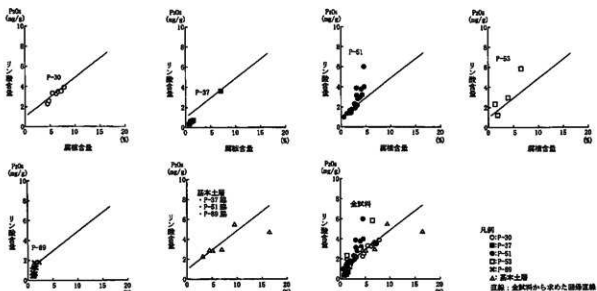
試料は、住居跡や土坑などの遺構覆土から、水洗選別等によって得られた229点である。試料は1～117の通し番号が付されている。このうち、試料番号107～110、117の5点は発掘中に取り上げられた試料、他は水洗選別によって得られた試料である。



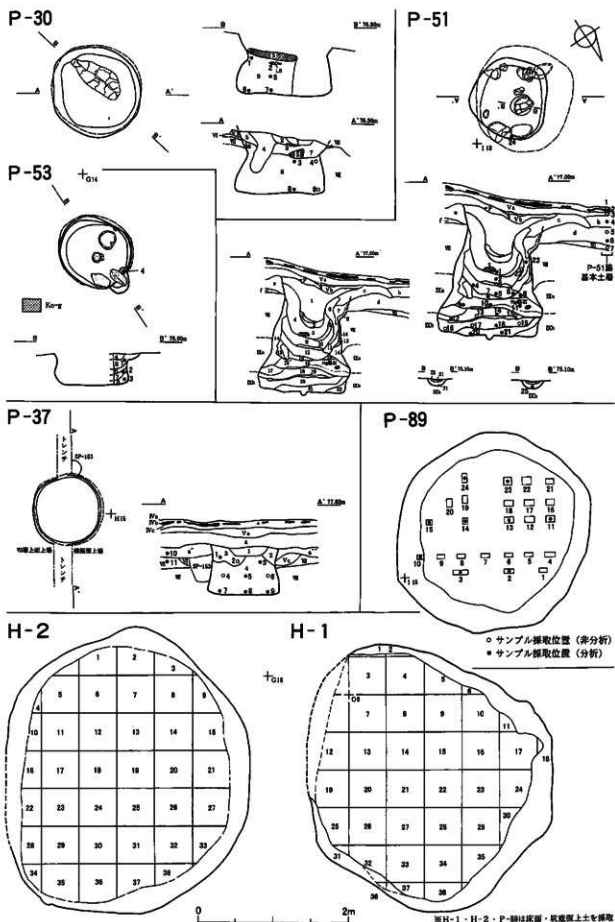
表VI-2-1 土壌化学分析結果

調査	番号	層位	土壌	土色	腐植含量(%)	P205(mg/g)	CaO(mg/g)	備考
P-30	1	8号上層	CL 10191/1	黒	7.23	3.41	15.31	
	2	8号中層	CL 10192/1	黒	4.25	2.34	19.11	
	3	8号下層	CL 10193/1	黒	6.97	3.30	18.72	
	5	18号中層	CL 10191/2	黒	6.72	3.46	19.37	
	6	18号下層	CL 10191/3	黒	5.86	3.30	20.28	
	7	18号底層	CL 10191/4	黒	5.26	2.94	20.56	
	8	8号底層	CL 10191/1	黒	4.53	2.23	19.68	
	1	3号層	CL 10194/2	灰褐色	1.55	0.71	7.59	
	2	3号層	CL 10194/2	C.多い腐植	1.55	0.74	8.20	
3	4号層	CL 10194/2	C.多い腐植	0.75	0.34	4.99		
7	4号底層	CL 10194/2	C.多い腐植	1.55	0.72	7.97		
8	4号底層	CL 10194/2	C.多い腐植	1.55	0.74	8.08		
9	4号底層	CL 10194/2	C.多い腐植	1.39	0.64	7.39		
10	4号層	CL 10191/2	黒	7.10	3.53	19.15		
基本土層(予-37層)								
11	1号層	CL 10192/2	黒腐	3.12	2.28	13.08		
1	4号層	CL 10192/1	黒	3.10	3.15	8.35		
2	9号層	CL 10192/1	黒	3.42	2.45	9.90		
4	13号層	CL 10192/2	黒腐	3.77	1.85	9.13		
5	13号層	CL 10192/2	黒腐	3.50	1.78	9.18		
6	13号層	CL 10192/2	黒腐	3.12	2.89	9.39		
7	13号層	CL 10192/1	黒	4.52	3.38	11.84		
8	13号層	CL 10192/2	黒腐	4.58	3.92	9.68		
9	13号層	CL 10192/2	黒腐	1.95	1.55	9.09		
10	13号層	CL 10192/2	黒腐	3.88	1.43	7.35		
11	13号層	L.I.C 10192/2	黒腐	3.17	2.16	8.29		
12	13号層	L.I.C 10192/1	黒	3.49	3.35	11.09		
14	13号層	L.I.C 10192/1	黒	4.25	3.14	9.71		
18	22号層	L.I.C 10192/1	黒	4.22	3.24	9.59		
20	21号層	CL 10193/2	黒腐	1.39	1.39	8.09		
21	21号層	CL 10193/2	黒腐	1.90	1.97	8.47		
23	8号層	L. 2, 3, 3, 3	暗オリーブ層	1.89	1.45	8.78	暗腐層付	
24	8号層	CL 10193/2	暗オリーブ層	3.77	2.98	8.73	土質部付	
25	21号層	L. 2, 3, 3, 3	暗オリーブ層	0.55	1.02	8.01	暗腐層付	
基本土層(予-51層)								
4	1b号層	CL 10192/1	黒	6.90	3.03	8.23		
6	15号層	CL 10192/1	黒	4.52	2.92	9.38		
7	15号層	L.I.C 10192/2	黒腐	3.93	2.89	7.18		
3	7号層	CL 10193/2	黒腐	1.89	1.22	8.54		
3	5号層	CL 10191/1	黒	6.48	5.38	7.40		
4	K.ロー層	SL 10193/2	黒腐	1.30	2.35	8.24	土質部	
2	2号底層付	L.I.C 10192/2	黒腐	1.25	8.49	8.38	暗腐層付	
3	2号底層付	CL 10193/2	暗腐	0.97	0.76	8.55	暗腐層付	
10	10号底層付	L. 10193/2	暗腐	1.21	1.29	8.16	暗腐層付	
11	10号底層付	L. 10193/4	暗腐	1.36	1.25	8.54	暗腐層付	
12	10号底層付	L. 10193/4	暗腐	1.29	8.81	8.53	暗腐層付	
14	10号底層付	L. 10193/4	暗腐	1.42	8.81	7.81	暗腐層付	
15	10号底層付	L. 10193/4	暗腐	1.31	1.78	8.15	暗腐層付	
23	23号底層付	L.I.C 2, 3, 3, 3	暗オリーブ層	0.93	6.44	7.61	暗腐層付	
24	24号底層付	L.I.C 10192/2	黒腐	3.17	1.99	8.75	暗腐層付	
基本土層(予-60層)								
1	V.層	L.I.C 10191/1	黒	16.48	4.77	13.51		
1	V.S.層	CL 10192/1	黒	5.10	2.84	10.60		
統計値					最小値	0.55	0.34	5.99
					最大値	16.48	5.98	13.51
					平均値	3.52	2.33	8.89
					標準偏差	2.88	1.45	3.14
					分散	8.31	2.11	4.89

凡1) 土色: マンセル染色法に準じた明暗度(明暗度)と土色(色相)と土質部(明暗度)とを、(M)に記す。  
 凡2) 土色: 土質部(明暗度)と土質部(色相)とを、(M)に記す。  
 1. 腐植: (腐植)→腐植, シルト層→腐植, 砂層→腐植  
 2. 腐植: (腐植)→腐植, シルト層→腐植, 砂層→腐植  
 3. 腐植: (腐植)→腐植, シルト層→腐植, 砂層→腐植  
 4. 腐植: (腐植)→腐植, シルト層→腐植, 砂層→腐植  
 5. 腐植: (腐植)→腐植, シルト層→腐植, 砂層→腐植



図VI-2-1 腐植とリン酸の相関図



図VI-2-2 分析用サンプル採取地点

水洗選別試料は未分類であり、土壌や炭化物などを多量に含む。試料の詳細に関しては添付資料の情報を一部抜粋し、結果と併せて表に示す。

### ② 分析方法

まず試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、炭化物を抽出する。抽出された炭化物を種類毎に分類・同定し、乾燥剤の入った瓶に保存する。

### ③ 結果

結果を表2に示す。試料中に含まれる炭化物のほとんどは炭化材である。また、比較的多くの試料から認められる菌核は、外生菌根菌の休眠体組織と考えられ、1～数mmの黒色球状体である。種実遺体は、非常に少なく、クリ、オニグルミなど数種が検出されている程度である。さらに保存状態が悪いために、「科」や「近似種」として同定される個体も多い。なお、テンツキ属近似種とアカザ科は炭化していない、また陸産微小貝類も加熱の痕跡が見られない。

この他、骨片や貝類が検出される。骨片は、魚類鱗鱗片、椎骨片、小型獣骨片などである。これらの骨片は、いずれも白色～灰黒色を呈している。貝類は、マイマイ類といった陸産微小貝類などの他、破片が検出される。さらに極めて保存の良い昆虫遺体は水洗作業等中に混入したと考えられ、同定・分類の対象としていない。

以下、検出された種実遺体の形態的特徴を記す。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の細片が検出された。数mm程度の破片で、完全に炭化しており黒色である。木質であるが、木材にみられるような組織はない。子葉の入っていたくぼみ付近の破片とみられ、内側が湾曲している。

・クマシデ属近似種 (cf. *Carpinus*) カバノキ科

果実が検出された。炭化しており、黒色。全体の半分程度が破損しているが、推定される形状は涙型で、大きさは4mm程度。果皮表面は平滑で、薄くて堅い。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

炭化した果実片と子葉が検出された。果実片は3～5mm程度のものがほとんどである。薄くて湾曲しており、内側に内果皮(いわゆる渋皮)が付着している個体もある。子葉は破片が多いが、完形のものも存在する。完形のもの、1.5cm程度。一面は扁平で、反対側は湾曲し、荒いしわ状の模様全体を覆っている。なお、試料の中には細片化し、同定根拠となる特徴に乏しい個体もあったが、これらについてもクリの子葉として扱っている。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

核(内果皮)が検出された。炭化しており、半横広卵形でやや偏平。長さ5mm、幅3mm程度。種皮は厚く硬い。表面には浅く細かい網目模様があり、ざらつく。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子が検出された。灰褐色、広倒卵形、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ4mm、幅3mm程度。背面にきじ状の凹みがある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。なお、腹面の一部のみ検出されているものは、他のブドウ科との区別ができないことから、ブドウ科としてある。

・エゴノキ属近似種 (cf. *Stryax*) エゴノキ科

種子の破片が同定された。炭化しており、大きさは5mm程度。側面の一部とみられ、種皮は厚く(1mm程度)硬い。表面はざらつき、縦溝が走ることから、エゴノキ属と思われるが、保存が悪いこ

とから、明瞭ではなく、近似種とした。

・イネ科 (Gramineae)

炭化した胚乳が検出された。楕円形で、大きさは1mm程度。一端に「へそ」があり、U字形の窪みとして確認できる。イヌビエなどの胚乳に似るが、1個体しか検出されておらず、穎も残っていないことなどからイネ科とした。

・テンツキ属近似種 (*Fimbristylis*) カヤツリグサ科

果実が検出された。灰褐色、広卵形で、大きさは1.5mm程度。果皮表面は亀甲状の窪みが密に配列し、ざらつく。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、円盤状でやや扁平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様で同心円状に配列し、光沢が強い。

④ 考察

検出された試料のうち、オニグルミ、クリ、ブドウ属は可食植物であり、当時の利用が推測される。オニグルミは、微細な破片が2試料から検出されたにすぎない。一方、クリは、P-17、S-1等から検出される。クリは可食部位である子葉を含むが、出土量は少なく、多量の炭化材や焼土を伴っていることから、生活残渣の一部が燃料材と共に燃やされたなどが考えられる。クリとオニグルミは生食可能で収量が多く、貯蔵も利く。このため、古くから植物質食料として利用されてきた種類で、遺跡からの検出例も多い(渡辺、1984など)。現在の分布をみると、オニグルミは北海道全域に広く分布し、クリは道南の沿岸部に分布する(倉田、1964)。おそらく、これらは当時遺跡周辺で入手しやすい有用植物のひとつであったと考えられる。特にクリは有用材で種実は食用にもなることから、古くから管理・保護されてきたと考えられており、その歴史は縄文時代にまでさかのぼるともいわれている(千野、1983;1991)。また、青森県三内丸山遺跡では縄文時代にクリ林が作られ、栽培が行われていたとの指摘もある(安田、1995)。本遺跡を含め、道内の遺跡出土するクリが採取によるものか、栽培によるものかについては今後の課題である。なお、山田・柴内(1997)によると、クリは、縄文時代前期後半になって北海道の津軽海峡に面した地域に持ち込まれ、人間の関与のもとに時代とともに次第にその分布域を北に拡大し、中期末までに北海道中央部西南の登別市付近に、後期中葉までに小樽から石狩郡地帯までの北海道中央部に達したとされている。今回の結果は、これに調和する結果と言えよう。

ところで、道南の縄文時代後期の古植生変遷は、ミズナラ林を中心としたものであったことが推定されている(星野、1998)。おそらく、本遺跡周辺には多くのミズナラが生育していたと考えられるが、今回の試料には含まれていない。ミズナラの種実は「あく抜き」をしないと食用にならない。渡辺(1984)によれば、ドングリのあく抜きの技術は、縄文時代中期にさかのぼる可能性を指摘しているが、北海道ではその技術がいつから存在したかが、今後の課題として残される。

クマシダ属、キハダ、エゴノキ属に関しては、周辺植生に由来すると思われ、燃料とした木材についていた可能性もある。今回多量に炭化材が検出されたが、これらは炉や焼土付近で量が多く、当時の燃料材に由来すると思われる。これらの樹種同定を行うことによって、当時の植物利用や周辺植生に関する情報が得られるものと期待される。

検出されたイネ科に関しては、栽培されている雑穀類(アワ・ヒエなど)に比べて小型で細長く、イヌビエなどの雑草類に似ることから、燃料材の一部であった可能性がある。だが、道南ではヒエ属種実の検出は縄文時代前期にまで遡るとされ、これらは栽培種とも野生種とも異なる形態を持つこと

などから、栽培されていた可能性が指摘されている(吉崎, 1992)。今回は1点のみの検出であることから詳細な議論はできないが、今後一か所から多くのイネ科炭化種実が検出されるなどすれば、植物利用や栽培などの可能性が出てくることから、注目しておきたい。

未炭化の種実(アカザ科、テンツキ属近似種)は、現在でも周辺の山野にみられる種実であるが、いずれも炭化していない。炭化していない種実は、低湿地遺跡でない限りは遺構内では残りにくく、後代からの混入の可能性が高いことが指摘されている(吉崎, 1992)。おそらく、今回検出された種実は、後代の落ち込みなどによるものと考えられ、当時の古植生を反映しているとは考えにくい。

また、マイマイ類といった陸産微小貝類は、遺構が埋積する過程において周辺から混入したと考えられる。一方、出土した骨片は、白色～灰黒色を呈しており、焼骨である。検出された骨類は、魚類鱗鱗片、椎体片、小型獣骨片などである。おそらく当時、本遺跡で利用されていたものの残滓であり、人為的に焼かれた後、遺構内に投棄された可能性がある。今後これら覆土中に含まれる動物骨片の種類を調べることで、当時の動物利用の一端が明らかにされることが期待される。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H.J.M. (1983) 「環境無機化学—元素の循環と生化学—」, 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M. (1980) 「土壤の化学」, 岩田進午・三輪啓太郎・井上隆弘・陽捷行訳, p.235-236, 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY].
- 千野裕道 (1983) 縄文時代のクリと集落周辺植生。東京都埋蔵文化財センター研究論集II, p.27-42.
- 千野裕道 (1991) 縄文時代に二次林はあったか—遺跡出土の植物性遺物からの検討—。東京都埋蔵文化財センター研究論集X, p.215-249.
- 土壤養分測定法委員会編 (1981) 「土壤養分分析法」, 440p., 養賢堂。
- 藤賀 正 (1979) カルシウム。地質調査所化学分析法, 52, p.57-61, 地質調査所。
- 星野フサ (1998) 北海道の植生史(2) 南北海道。「図説 日本列島植生史」, 安田喜憲・三好教夫 編, p.51-61, 朝倉書店。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 小山陽造 (1995) 東北地方の脂肪酸分析結果。考古学ジャーナル, 386, p.17-21.
- 倉田 悟 (1964) 「原色日本林業樹木図鑑 1」, 331p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 「新版標準土色帖」。
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 「土壤調査ハンドブック」, 156p., 博友社。
- 渡辺 誠 (1984) 縄文時代の植物食(増補), 187p., 雄山閣。
- 山田悟郎・柴内佐知子 (1997) 北海道の縄文時代遺跡から出土した堅果類—クリについて—。北海道開拓記念館研究紀要, 25, p.17-30.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出。考古学ジャーナル, 355, p.2-14.
- 安田喜憲 (1995) クリ林が支えた高度な文化。「縄文文明の発見」, 梅原 猛・安田喜憲編著, p.118-153, PHP.

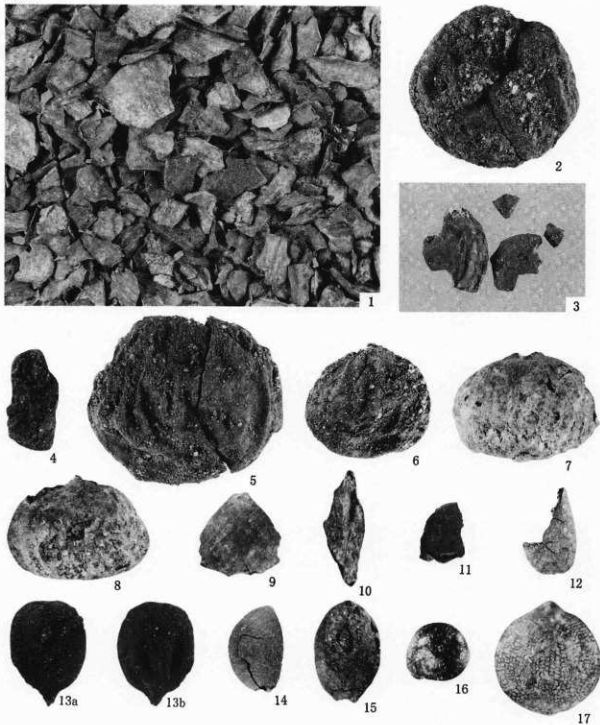
表VI-2-2 (1)

調査区・遺構	採取地点	層位	総遺物量		調査項目												
			種類	No.	重量	オニグルミ	クマシデ属近縁類	クリ	キハダ	ブドウ属	ブドウ科	エゾノキ属近縁類	イネ科	ナンソク属近縁類	アカザ科	蕁麻	炭化材
H-1	01	表層直上	3100	3	1	39.2	-	-	-	-	-	-	-	-	3	多	-
H-1	02	表層直上	1140	1.2	2	10.1	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-
H-1	03	表層直上	10150	11	3	50.1	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-
H-1	04	表層直上	3030	3.1	4	19.7	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-
H-1	05	表層直上	940	0.8	5	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-
H-1	06	表層直上	190	0.2	6	0.5	-	-	-	-	-	-	-	-	14+	-	-
H-1	07	表層直上	3900	3.5	7	21	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-	-
H-1	08	表層直上	4200	4	8	35.4	-	-	-	-	-	-	-	1	25	多	-
H-1	09	表層直上	3650	3.5	9	30.2	-	-	-	-	-	-	-	-	34+	多	-
H-1	10	表層直上	2550	2.5	10	18.9	-	-	-	-	-	-	-	-	14	多	-
H-1	11	表層直上	1800	2	11	22.4	-	-	-	-	-	-	-	-	15	32+	不明(+)
H-1	12	表層直上	1900	2.1	12	14	-	-	-	-	-	-	-	-	5	2	多
H-1	13	表層直上	1950	2.1	13	15.6	-	-	-	-	-	-	-	-	7	多	-
H-1	14	表層直上	5250	5.6	14	27.1	-	-	-	-	-	-	-	-	67+	多	-
H-1	15	表層直上	4700	4.7	15	29.1	-	-	-	-	-	-	-	-	9	多	-
H-1	16	表層直上	1150	1.1	16	8.2	-	-	-	-	-	-	-	-	7	22+	多
H-1	17	表層直上	1700	1.8	17	17	-	-	-	-	-	-	-	-	26	60+	多
H-1	18	表層直上	1400	1.4	18	8.6	-	-	-	-	-	-	-	-	30+	48+	多
H-1	19	表層直上	5260	5.4	19	26.6	-	-	-	-	-	-	-	-	5	多	-
H-1	20	表層直上	1030	1	20	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	2	多	-
H-1	21	表層直上	6950	6.9	21	57.6	-	-	-	-	-	-	-	-	54+	多	不明(+)
H-1	22	表層直上	7250	7.3	22	61.7	-	-	-	-	-	-	-	-	85+	多	-
H-1	23	表層直上	1550	1.6	23	26.5	-	-	-	-	-	-	-	-	4	70+	多
H-1	24	表層直上	2000	2.2	24	24.9	-	-	-	-	-	-	-	-	4	74+	多
H-1	25	表層直上	980	1.1	25	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	43+	不明(+)
H-1	26	表層直上	1300	1.4	26	3.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	不明(+)
H-1	27	表層直上	6650	7	27	40.9	-	-	-	-	-	-	-	1	-	多	不明(+)
H-1	28	表層直上	8100	7.8	28	79.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-1	29	表層直上	5850	5.9	29	86.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-1	30	表層直上	1900	1.9	30	27.6	-	-	-	-	-	-	-	-	52+	多	-
H-1	31	表層直上	420	0.4	31	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	24+	不明(+)
H-1	32	表層直上	6950	6	32	36.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27+	不明(+)
H-1	33	表層直上	6250	6.2	33	69.7	-	-	-	-	-	-	-	-	40+	多	不明(+)
H-1	34	表層直上	6800	6.8	34	62.1	-	-	-	-	-	-	-	-	35+	多	不明(+)
H-1	35	表層直上	4800	4.7	35	46.1	-	-	-	-	-	-	-	-	15	多	不明(+)
H-1	36	表層直上	750	0.7	36	2.6	-	-	-	-	-	-	-	-	8	多	-
H-1	37	表層直上	1600	1.9	37	11.4	-	-	-	-	-	-	-	-	9	多	不明(+)
H-1	38	表層直上	4200	4.3	38	26.7	-	-	-	-	-	-	-	-	1	多	-
H-1	39	増設土層外の込土	1340	1.3	39	21.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-1	39	増設土層外の込土	2490	2.6	40	29.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-1	39	増設土層内	740	0.9	41	35.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-2	01	表層直上	650	0.6	42	5.3	-	-	-	-	-	-	-	-	15+	多	頁(7)
H-2	02	表層直上	3900	3.6	43	21.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	頁(1)
H-2	03	表層直上	2000	2.6	44	16.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	71+	多
H-2	04	表層直上	1000	1	45	17.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	頁(2)
H-2	06	表層直上	4050	4.2	46	38.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	不明(+)
H-2	06	表層直上	5000	5.2	47	51.3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	多	-
H-2	07	表層直上	4100	4.5	48	44.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	多	-
H-2	08	表層直上	3550	3.9	49	38.2	-	-	-	-	-	-	-	-	5	多	頁(1)
H-2	09	表層直上	6500	7.4	50	79.6	-	-	-	-	-	-	-	-	79+	多	-
H-2	10	表層直上	2200	2.4	51	31.4	-	-	-	-	-	-	-	-	6	62+	多
H-2	11	表層直上	5300	5.4	52	48.3	-	-	-	-	-	-	-	-	25	84+	多
H-2	12	表層直上	2800	2.8	53	21.6	-	-	-	-	-	-	-	-	19	多	-
H-2	13	表層直上	4900	5.2	54	66	-	-	-	-	-	-	-	-	34	多	-
H-2	14	表層直上	3700	4.8	55	28.7	-	-	-	-	-	-	-	-	7	多	-
H-2	15	表層直上	7600	9.4	56	104.1	-	-	-	-	-	-	-	-	35	多	不明(+)
H-2	16	表層直上	1200	1.2	57	14.8	-	-	-	-	-	-	-	-	3	65+	多
H-2	17	表層直上	2900	3.1	58	41.6	-	-	-	-	-	-	-	-	5	多	不明(+)
H-2	18	表層直上	3300	3.5	59	43	-	-	-	-	-	-	-	-	7	多	頁(1)
H-2	19	表層直上	8200	9.3	60	100.3	-	-	-	-	-	-	-	-	37+	多	頁(1)

+ : 破片などを含めたい正確な個数が不明なもの 多 : 100 個体以上の検出



図版VI-2-1



- |                       |                        |
|-----------------------|------------------------|
| 1. クリ(P-17;89H)       | 2. クリ(Grid 0-27;117)   |
| 3. クリ(S-1;107)        | 4. クリ(S-1;108)         |
| 5. クリ(S-1;109)        | 6. クリ(S-1;110)         |
| 7. クリ(P-17;90L)       | 8. クリ(P-17;90L)        |
| 9. エゴノキ属近似種(P-21;92H) | 10. オニグルミ(P-17;89H)    |
| 11. オニグルミ(S-1;106L)   | 12. クマシデ属近似種(P-20;91L) |
| 13. ブドウ属(S-1;106L)    | 14. キハダ(S-1;106H)      |
| 15. イネ科(P-21;92L)     | 16. アカザ科(H-1;15L)      |
| 17. テンツキ属近似種(H-1;27L) |                        |



### 3 「ヒスイ」製遺物の産地分析

栗科哲男（京都大学原子炉実験所）

#### (1) はじめに

玉類の観察は、一般的に肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。岩石製では玉類の原材料として硬玉、滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどで、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこかの産地の原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となる。遺跡から出土する勾玉、管玉など玉類の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何か所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）とか碧玉の原産地うち、どこかの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法<sup>1)</sup>および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法<sup>2)3)4)</sup>が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例<sup>5)</sup>が報告されている。石器など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えたと考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏と考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った北海道茅部郡森町に位置する倉知川右岸遺跡出土の縄文時代早期と中・後期の「ヒスイ」製磨製石斧2個について産地分析結果が得られたので報告する。

#### (2) 非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合せ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多く、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している<sup>6)</sup>非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗して、試料ホルダーに置くだけの完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの

違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類は ESR 法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて産地分析に利用した<sup>9)</sup>。

### (3) ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では①新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、②軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産<sup>9)</sup>、③鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、④岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、⑤長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに⑥西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、⑦兵庫県養父郡大屋町からの原石、⑧北海道旭川市神居町の神居コタン産、⑨岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる⑩長崎県西彼杵郡大瀬戸町萱浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これではぼつくとされていると思われる。これら原石の原産地を図 1 に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

### (4) ヒスイ試料の蛍光 X 線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム (Na)、アルミニウム (Al)、珪素 (Si) などの軽元素<sup>7)</sup>で、次いで比較的含有量の多いカルシウム (Ca)、鉄 (Fe)、ストロンチウム (Sr) である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム (K)、チタニウム (Ti)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、ルビジウム (Rb)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr)、ニオブウム (Nb)、バリウム (Ba)、ランタニウム (La)、セリウム (Ce) の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源の X 線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光 X 線分析で Na 元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなからうか。各原産地の原石のなかで、確実に Na 元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na 元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石は Sr のピークが Fe のピークに比べて相当大きく、また Zr の隣に非常に小さな Nb のピークが見られ、Ba のピークも大きく、糸魚川産では見られない La、Ce のピークが観測されている。この Ce のピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これら Ce を含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するとき有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Ti の含有量が多く、Y のピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Ca ピークに比べて Ti と K、また Fe ピークに比べて Sr などのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判定基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zr のピークが全く見られな

いため、糸魚川産などの Sr、Zr を含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素 (As) のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のもの、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。マンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

#### (5) ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表1に各原産地の原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイでは Sr/Fe の比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表2の判定基準(2)には Cr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ce の各元素の蛍光 X 線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析して Ba のピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

図2はヒスイ原石の Sr/Fe の比の値と Sr/Zr の比の値の分布を原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はマンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とマンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、マンマーと糸魚川が区別される部分が Sr/Fe の値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればマンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物に Ba の蛍光 X 線スペクトルのピークが見られなかった

場合、表2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および\*印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより(図3)、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより(図4)、遺物がどの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

#### (6) 倉知川右岸遺跡出土の石斧の分析結果

出土石斧の比重が2.9(アルキメデス法)で、硬玉より少し軽くまた、硬玉の主成分であるナトリウムの含有量も非常に少ないことから軟玉系と推測される。この石斧の分析できた含有元素の結果を表3に示した。

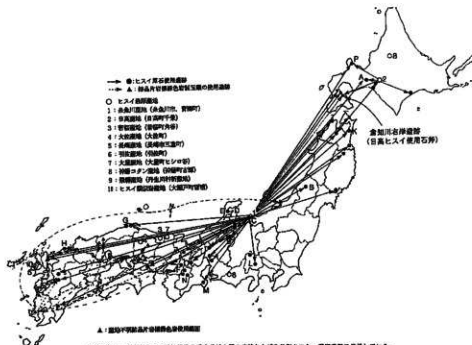
この石斧の原産地を明らかにするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量Sr/Fe対Zr/Srの分布範囲と比較すると、石斧1は日高、飛騨、引佐の範囲に、石斧2は日高の範囲にのみ入り、それぞれ入った産地のヒスイの可能性を示す(図2)。また、Sr/Fe対Ca/Siでは石斧1は日高、飛騨で、石斧2は日高産の範囲にのみ入った(図3)。またNa/Si対Mg/Siの判定図4では、石斧1、2とも日高、飛騨の重なる範囲に入っている。これら判定図と判定基準表1の比重の範囲およびBa元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を満たした玉の産地として、日高産ヒスイを使用した石斧と同定し、結果を表4に示した。

#### (7) 結論

今回分析した倉知川右岸遺跡出土の石斧1、2は比重が日高ヒスイでも、軽い部類に入り、比重に重点を置いて厳密に判定すれば、比較的比重の重い宝石としての半透明様の日高ヒスイとは異なる。判定図2、3、4で共通して入る元素比分布範囲は、石斧1は日高、飛騨ヒスイで、石斧2は日高産地のみで、石斧1のNi/Feの含有量を見ると、0.040で日高と飛騨産ヒスイの平均値からのズレは0.89 $\sigma$ と1.7 $\sigma$ で、日高産ヒスイ系により近いと言える。これら判定条件に従えば、石斧1、2は日高ヒスイにともなって生成された変成岩と推測し、図1に示した。

#### 参考文献

- 1) 茅原一也(1964), 長者ヶ原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報), 長者ヶ原, 新潟県糸魚川市教育委員会: 63-73
- 2) 薬科哲男・東村武信(1987), ヒスイの産地分析, 富山市考古資料館紀要6: 1-18
- 3) 薬科哲男・東村武信(1990), 奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析, 橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』, 14: 95-109
- 4) 薬科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析, 考古学と自然科学, 16: 59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992), Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF, Journal of Archaeological Science 19: 357-373
- 6) 番場猛夫(1967), 北海道日高産軟玉ヒスイ, 調査研究報告会講演要旨録No.18: 11-15
- 7) 河野義礼(1939), 本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質, 岩石礦物鉱床学雑誌22: 195-201



注：糸島川、香取川ヒスイは神奈川県糸島川上流と成野および糸取町マヤマー調整湖に産出している。

図VI-3-1 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類の原材料使用分布圖

表VI-3-1 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準 (1)

原産地名	分析 順番	管光玉線画による先跡片の管光					
		比値	X/Ca	Y/Ca	Ir/Fe	Ir/Sr	Ca/Si
糸島川産	41	5.00-7.26	0.91-0.17	0.61-0.36	0.10-10	0.09-1.94	0.72-17.6
香取産	12	2.12-2.29	0.84-0.51	0.60-0.50	2.49-47	0.09-0.25	6.22-62.4
大宮産	20	1.82-2.17	0.91-0.7	0.90-1.31	2.10-41	0.09-11.4	2.47-12.6
会津産	2	3.14-2.32	0.91-0.14	1.17-1.22	0.02-0.10	0.20-11.6	
伊豆産	21	1.90-2.29	0.60-0.61	0.80-0.30	0.09-0.17	0.09-0.263	0.92-61.6
伊勢産	8	3.10-2.26	0.74-0.64	0.50-0.20	0.03-0.10	0.09-0.519	16.3-61.9
大宮産	18	2.10-2.19	0.62-0.26	0.70-0.16	1.02-79	0.02-0.40	0.15-6.31
伊豆コタン産	6	2.02-2.11	0.62-0.40	0.63-0.17	0.60-0.32	0.10-0.65	1.02-11.2
香取産	40	2.02-2.18	0.61-0.34	0.62-0.60	0.02-0.10	0.04-1.14	12.1-11.6
ヒョウマ産	10	1.15-2.04	0.62-0.14	0.21-0.16	0.20-2.5	0.01-7.0	
伊豆産	1	3.00	0.60	0.0	0.0	0.0	

注：伊豆産片以下の管光

表VI-3-2 ヒスイ製遺物の原産地の判定基準 (2)

原産地名	管光玉線画による先跡片の管光							
	Cr	Mn	Y	Fe	Ca	Si	Ir	Ce
糸島川産	210	50	350	30	120	200	30	30
香取産	80	100	100	1000	1000	470	570	
大宮産	80	80	440	80	200	1000	470	570
会津産	80	80	1000	1000	1000	1000	1000	
伊豆産	11	11	80	80	80	11	10	10
伊勢産	800	700	80	80	80	80	80	80
大宮産	11	11	210	80	80	800	1000	1000
伊豆コタン産	80	1000	210	1000	80	600	20	80
香取産	1000	1000	80	80	80	80	80	80
ヒョウマ産	100	40	80	80	80	210	80	80
伊豆産	11	11	80	80	80	80	80	80

注：数値欄以下 11：濃縮値

表VI-3-3 倉知川右岸遺跡出土の「ヒスイ」製石斧の元素分析値と比値の結果

試 料	分析 順番	元素分析値の比値									
		Si/Sr	Ca/Sr	Al/Sr	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Ba/Fe	Ir/Fe	Ir/Fe
石斧1	21485	0.944	2.109	5.01	0.62	17.796	0.31	0.089	0.047	0.040	0.203
石斧2	21486	0.606	0.360	0.33	0.62	15.649	0.31	0.203	0.040	0.203	0.209
注1)		0.620	0.100	0.00	1.21	3.077	0.18	0.303	0.011	0.300	0.481

注) 標準試料: Aefu-A, Orsavae, N. Oberst, T. Talska, E. (1974), 1974 compilation of data on the 625 geochemical reference samples 10-1 granulite and 20-1 basalt, Geochemical Journal, Vol. 8, 175-182.

表VI-3-4 倉知川右岸遺跡出土の「ヒスイ」製石斧の原料産地分析結果

試 料	分析 順番	各分析値等による判定				総合判定
		管光判定	線画判定	管光判定	管光判定	
石斧1	21485	既、既、18	既、既	既、既	既、既、既、既、既	糸島川
石斧2	21486	既	既	既、既	既、既、既、既、既	糸島川

注1) 糸島川 既; 香取 既; 大宮 既; 会津 既; 伊豆 既; 伊勢 既; 大宮 既; 伊豆コタン 既; 香取 既  
 注2) Ir/Fe比値は高値を示す及び線画判定時に使用された他の分析結果  
 (濃縮値) 4.2 倍の平均値(標準誤差) Ir/Fe=0.091±0.004  
 (注3) 濃縮値は、1.4 倍の平均値(標準誤差) Ir/Fe=0.041±0.003  
 注4) 糸島川産: 糸島川11、香取産等3、伊豆: 香取(糸島川産)  
 注5) 糸島川産: 糸島川11、香取産等3、伊豆: V a 産 (糸島川産)



図VI-3-2 分析試料



#### 4 北海道森町倉知川右岸遺跡のタヌキ溜糞と推定された灰状堆積物から検出された小哺乳類の同定および寄生蠕虫類虫卵検査について

浅川満彦・的場洋平・佐鹿万里子

〒069-8501

北海道江別市文京台緑町582-1

酪農学園大学野生動物医学センター／同・獣医学部寄生虫学教室（野生動物学）

#### 序

財団法人北海道埋蔵文化財センターは、平成14年、北海道森町・倉知川右岸遺跡（主に縄文時代中期前半～後期前葉）の埋蔵文化財発掘調査を行なっているが（北海道埋蔵文化財センター、2003）、その際に、遺跡の「無名の沢」に続く急斜面際の平坦面に、乳白色の灰状の堆積物の小哺乳類の歯・骨および陸棲貝類を多量に含んでいた堆積層を認めた。これは西暦1000年以前の比較的近年に堆積したとされ、周辺状況からタヌキ *Nyctereutes procyonoides* の溜糞跡と推定された（北海道埋蔵文化財センター、2004）。我々は、その検証作業の一環として、堆積物に認められた小哺乳類の同定と寄生蠕虫の虫卵検査を依頼されたので報告する。

#### 材料と方法

1) 小哺乳類の分類学的検討 序で記した平坦面III層除去後の乳白色灰状堆積物から、2002年9月13日および25日に採集された小哺乳類の歯および骨を検査材料とした。なお、この検査材料は、土壌から水洗選別によって抽出され、現地で採集日および作業単位別に保存された標本のうちの一部で、瓶に保存された11サンプル、すなわち水洗選別作業番号70/L、71/H、72/H、89/H、89/L、90/H、91/H（2本あったので便宜上aおよびbとする）、91/L、92/H、92/Lであった。これらについて、文献（藤巻ら、1976；阿部、2000；阿部ら、1994）ならびに酪農学園大学野生動物医学センターおよび獣医学部寄生虫学教室（野生動物学）に保存されている哺乳類学標本を用い、実体顕微鏡下で形態比較を行ない、必要に応じて顕微鏡写真撮影を行なった。

2) 蠕虫類の寄生虫学的検討 タヌキ寄生の蠕虫類の存在を確かめるために、前述した灰状堆積物のうち、30.3g（電子天秤にて秤量）について虫卵検査を試みた。方法は、堆積物を水道水で溶かし、市販の茶漉しを用いて沈渣を得、比重1.20の蔗糖液にて浮遊させ、浮遊した浮遊物を18mm×18mmのカバーグラスに附着させて、光学顕微鏡で観察するウイスコンシン法変法を用いた（今井ら、2003）。

#### 結果

1) 小哺乳類の分類学的検討 検討の結果、3種類の哺乳類、すなわちハタネズミ亜科のタイリクヤチネズミ *Clethrionomys rufocanus* (Sundevall, 1846) (略号 Cr)、ネズミ亜科のアカネズミ *Apodemus speciosus* (Temminck, 1844) (略号 As) および *A. argentus* (Temminck, 1844) (略号 Aa) が同定された（図版VI-4-1 1～6）。11サンプルにおける各種の検出状況（略号で示す）と同定根拠とされた体部は次のようなものであった：70/L (Cr, As, Aa：上・下顎骨および第三臼歯)；71/H (Cr, As, Aa：下顎骨および臼歯)；72/H (Cr, As, Aa：下顎骨および臼歯)；89/H (Cr, As：下顎骨および臼歯)；89/L (As：上顎骨)；90/H (Cr, As：下顎骨および臼歯)；91/H-a (不明：堆骨)；91/H-b (Cr, As：臼歯)；91/L (Asか？：臼歯)；92/H (Cr, As, Aa：上・下顎骨)、92/L (Cr：下顎骨および臼歯)。

2) 蟻虫類の寄生虫学的検討 島倉(1973)の図譜から、ユリ科(ヤブカンゾウやニッコウキスゲなど)と考えられる花粉 $104\sim 107\mu\text{m}\times 71\sim 75\mu\text{m}$ が3個検出されたのみで、蟻虫卵は検出されなかった。

### 考察

今回の材料が哺乳類の糞であるのなら、北海道で普通種のタイリクヤチネズミとアカネズミ属2種を食べる肉食性哺乳類である可能性が高い。また、北海道における調査は少ないが、本州や国外に移入されたタヌキでは、野ネズミ類が主要な餌資源の一部を構成していることが報告されているので(山本, 1994; Kauhala et al., 1998)、タヌキの可能性もある。しかし、タヌキとするならば、他の主要な餌資源である昆虫や果実などの遺物も発見されるはずだが見つかっていない。消失した可能性もあるが、今回の結果だけをもって、タヌキの糞と特定することは出来なかった。

タヌキには多数の蟻虫類が普通に寄生するが(長谷川・浅川, 1999; 的場ら, 2002)、野外の糞から虫卵が検出されたとしても、形態からだけでは、その糞の動物種を特定することは難しい。まして、過去の遺構について調査する場合は、かなりの困難さが予想される(たとえば、福本, 1998)。確かに、虫卵密度が極度に高いと目される遺構では、寄生虫学的検査の応用もある程度、有効であろうが(金原, 1997)、応用には前段の実験が必要である。たとえば、現生タヌキの溜糞における虫卵密度の検討、数年〜数十年経過した材料を用いた虫卵検出精度の比較、石灰質が浸透し糞石化した生試料の調製技術の向上などである。特に、今回は現生試料の方法を用いた方法であったが、微小な考古学的試料(たとえば、花粉や渦巻毛虫など)の検査法の応用(日本第四紀学会, 1993)は検討の余地がある。

今回の結果で、検査試料をタヌキの溜糞とするのは根拠として十分ではなかった。出土した周辺状況に加え、化学分析的な手法(日本第四紀学会, 1993)などを併用して、慎重に再検討すべきであろう。

北海道からは野ネズミ類の化石がまったく出土していない(太田・小林, 1984)。今回のように比較的近年ではあっても、過去の材料の検討を蓄積させることは、北海道の哺乳類相の研究上、重要なことであろう。

### 引用文献

- 阿部 永, 2000. 日本産哺乳類頭骨図説. 野ネズミ類の研究, 北海道図書刊行会, 札幌: pp.279.
- 阿部 永・石井信夫・金子之史・前田嘉四雄・三浦慎吾・米田政明, 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会, 東京.
- 藤巻裕蔵・水島俊一・出羽 寛, 1976. アカネズミ2種の齢査定. 日本生態学会誌, 26: 19-23.
- 福本真一郎, 1998. ユカンボシE7遺跡北大式期墓寄生虫卵分析結果. (北海道埋蔵文化財センター編) 恵庭市ユカンボシE7遺跡. 北海道埋蔵文化財センター, 江別市: 383.
- 長谷川英男・浅川満彦, 1999. 陸上動物の寄生虫相. (亀谷 了・大鶴正満・林 滋生 監) 日本における寄生虫学の研究 第6巻, 目黒寄生虫館, 東京: 129-146.
- 北海道埋蔵文化財センター(編), 2003. 調査年報15. 北海道埋蔵文化財センター, 江別市: pp.88.
- 北海道埋蔵文化財センター(編), 2004. 森町 倉知川右岸遺跡. 北海道埋蔵文化財センター, 江別市: (印刷中).
- 今井壮一・神谷正男・平 詔亨・芽根士郎, 2003. 獣医寄生虫学検査マニュアル, 2刷, 文永堂出版.



東京：pp.306.

Kauhala, K., Laukkanen, P. and Rege, I. 1998. Summer food composition and food niche overlap of the raccoon dog, red fox and badger in Finland. *Ecography*, 21: 457-463.

金原正明. 1997. 自然科学的研究からみたトイレ文化. (大田区立郷土博物館 編) トイレの考古学. 東京美術, 東京: 197-216.

的場洋平・坂田金正・浅川満彦. 2002. 新潟県佐渡島産タヌキの内部寄生蠕虫相. *日本生物地理学会報*, 57: 31-36.

日本第四紀学会(編). 1993. 第四紀試料分析法. 2. 研究対象別分析法, 東京大学出版会, 東京: pp. 553.

太田嘉四夫・小林恒明. 1984. 北海道産野ネズミ類の由来. (太田嘉四夫 編) 北海道産野ネズミ類の研究. 北海道図書刊行会, 札幌: 19-46.

島倉巳三郎. 1973. 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館, 大阪.

山本祐治. 1994. 長野県入笠山におけるテン、キツネ、アナグマ、タヌキの食性比較分析. *自然環境科学研究*, 7: 45-52.

#### 図の説明

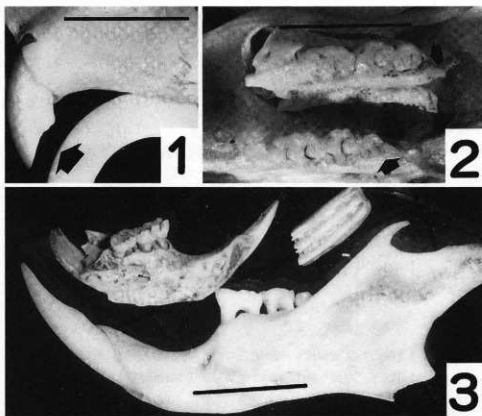
図1～3 倉知川右岸遺跡の灰状堆積物から検出された小哺乳類の遺物(その1)(バー=5mm)。

1. 水洗選別作業番号(以下、同様)70L、アカネズミの上顎骨前部(左側面)と切歯。一見、ハツカネズミ *Mus musculus* の切歯のごとく切れ込み(矢印)が深い標本
2. 70L、アカネズミの上顎骨左側臼歯列を含む骨片。第三臼歯(矢印)の摩滅面から3～10か月齢と推測された個体。写真下の臼歯列は現生の比較標本(1982年野幌採集、仮番号No.222)
3. 71L、ヒメネズミ(写真左上)とアカネズミ(同・下)の下顎骨およびヤチネズミの臼歯(同・上右)。歯根を形成した臼歯の形態などから大小のネズミ亜科の骨と判定できる。ヤチネズミでは老熟個体以外歯根は形成しない

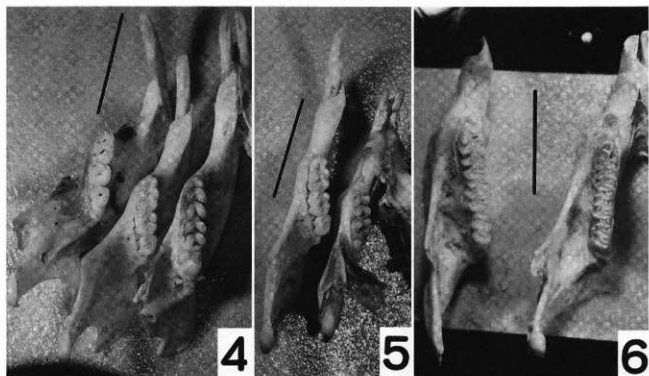
図4～6 倉知川右岸遺跡の灰状堆積物から検出された小哺乳類の遺物(その2)(バー=5mm)。

4. 70L、ヒメネズミ(写真中央)の左側下顎骨。比較標本として、現生のヒメネズミ(同・左:1982年野幌採集、仮番号No.324、推定10～18か月齢の個体)とアカネズミ(同・右:1982年野幌採集、仮番号No.147、推定1か月齢未満の個体;第3臼歯が萌出しかかっていることから、アカネズミは幼若でもヒメネズミの老熟個体よりも、臼歯列が明らかに長大であることを示す)を示す
5. 70L、ヒメネズミ(写真左)の左側下顎骨(図4と同じもの)。比較標本として、現生のハツカネズミ(同・右:1999年中国新疆採集、AS No.1514;ハツカネズミの下顎骨はヒメネズミのそれより明らかに小さい)を示す。
6. 70L、ヤチネズミ(写真左)の左側下顎骨。比較標本として、現生のヤチネズミ(同・右:1983年小樽市採集、仮番号Otamoi No.21)を示す。

図版 VI - 4 - 1



倉知川右岸遺跡の灰状堆積物から検出された小哺乳類の遺物（その1）（バー= 5 mm）



倉知川右岸遺跡の灰状堆積物から検出された小哺乳類の遺物（その2）（バー= 5 mm）

## VII 成果と課題

### 1 遺構

#### (1) 配石遺構について

##### ① 倉知川右岸遺跡の配石遺構と遺構集中区

倉知川右岸遺跡で確認したのは、西側に開くコ字形に礫を配した配石遺構で、短軸方向はN-20°-Eで2m、長軸方向はN-70°-Wで5mの規模である。配石は、長軸に角柱状の礫を東側に傾斜するように配置した立石が6個、長軸及び南北の両短軸に角柱状の礫を横位に配置したものが各2個、扁平で円形の礫を水平に配置したものが短軸南側に2個、短軸北側に1個からなる。

このほかにコ字形の配石から東側に約2mの地点に水平配置礫が3個、立石が1個、西側に約3mの地点に横位立石が1個見られた。さらにI14・I15・H14・H15・G15区の礫も関連があるとみられ、大きく方形の区画をなしていた可能性も考えられる(図I-6)。また、その外周にも礫は点在し、石組炉と共にフラスコ状土坑群を取り囲むような配置を呈する。

配石周辺では自然堆積層のVb層(黒色土)、VI層(漸移層)、VII層(Ko-g)が見られず、黒色土に軽石粒やローム粒を多く含む人為的に攪乱された土層(「造成土」)が確認されたが、地形が大きく改変された状況ではない(図I-9)。また、コ字形配石があるI13区では、周辺のグリッドと比べるとH-2が位置するG15区と同じように局地的に遺物が少なかった。以上からすると、配石の設置に当たっては、Vb層～VII層までを耕すように攪乱し、包含していた土器や石器等を極力除去するという「造成」を行っていたとみられる。この「造成」は、遺構集中区において広く確認されたが、土層に含まれる遺物の除去はコ字形配石周辺に限られていた。このように聖域確保とも取れる造成の後、礫の位置を決め、礫設置坑を掘った後、礫が配置されたものと考えられる。

コ字形配石には、1本の木柱も伴っていたとみられる。木柱痕(SP-62)は長軸中央で立石に挟まれるように確認された。掘り込みを確認したIV層から深さ50cm近くあり、土層を見ると直径10cmほどの棒状のものを立てた後、ロームブロックで根固めをしている。さらに木柱痕の西側(コ字形配石の内側)に隣接するように焼土が見られた。後述するように配石の内側から、木柱の方向には夏至の日の出を望めた可能性がある。

この配石には、ほかにも小柱穴や不明瞭な土坑は重複するものの、フラスコ状土坑とは重複しなかった(図I-5)。土坑同士が重複するものは、P-35とP-68だけであった。したがって、この遺構集中区においては各土坑の場所は新たな土坑を掘り込む際に明瞭であったと推測される。これら土坑の覆土はいずれも埋め戻しによる人為堆積土とみられ、土坑墓と推定される。土器のほかにも副葬品らしいものは少なく、埋土中に台石・石皿を含む礫が配される状況が多かった。フラスコ状土坑の分布は、G14、H13～15、I12～14、J14区(I群)と、F16～17、G16、H17、I15区(II群)の2つに分けることができる。I群の範囲は、「造成土」が分布する範囲にあたり、はじめに配石遺構とともに設定された区域と推定される。なお、P-69はH-10より新しいのでII群に含まれるものとした。また、I群の土坑は石組炉S-8・10・6・9・4・5・14・3を結んだ範囲に、II群の土坑はS-7・12・13・15を結んだ範囲に収まるように構築されたようである。I群周囲の石組炉については、K14杭周辺に近代の攪乱が存在し、他の石組炉の位置からすると、この攪乱付近にもう1基の石組炉があった可能性がある。さらに、I群の土坑は配列されたように見え、小柱穴やほかの土坑が密集しているのに対し、II群の範囲には遺構の分布も散漫になる。

遺構集中区の西側にはH-2・10という竪穴住居跡が検出されている。H-10はH-2より長軸・

短軸とも1mほど規模が小さいが、構造は同じである。両住居跡は隣接しており上屋構造を考えると並存ではなく、新旧関係があるものと推測される。小牧野遺跡でも環状列石外帯から30m離れて堅穴住居跡が2軒確認されており、環状列石の維持・管理を行っていた集団の存在が考えられている。

以上をまとめると、今回倉知川右岸遺跡で確認された配石遺構と遺構集中区は、「造成」による聖域確保の後、配石と石組炉で区画し、区画の中でフラスコ状を呈する土坑墓が構築された、「区画墓」の一種とみられる。

## ② 北海道における配石遺構の変遷から見た倉知川右岸遺跡

配石遺構、即ち墓とみられる土坑の坑口に組石や積石が残るものや、礫を列状に配することで区画する列石は、北海道の縄文時代後期・晩期の遺跡の内60か所まで確認できる。昭和63年まで類例は25遺跡を挙げるに過ぎなかったが、平成10年以降、発見が相次ぎ類例が増加した。また西崎山環状列石、忍路環状列石、地鎮山巨石記念物では範囲確認調査が行われ、過去に調査された配石遺構の再検討もなされた。以下、時期別に類例、分布を見ていく。

後期前葉（天祐寺～大津・白坂3式期）：前葉では遺跡毎に形態は多様性に富んでいる。列石は、松前町東山遺跡、福島町豊浜遺跡、知内町湯の里5遺跡、上磯町館野遺跡、戸井町浜町A遺跡、八雲町野田生1遺跡で確認されている。環状列石が多く、列状のもの、方形のものもある。組石は、松前町大津遺跡、知内町湯の里1遺跡、森町石倉3遺跡、上台1遺跡、八雲町栄浜1遺跡で確認されている。土坑上部に組石するものが多く、組石に立石を伴うもの、組石の下に砂利が伴うもの、土坑上部を縁取るように円形に配石するものなどがある。

前葉後半のトリサキ～白坂3式期には組石をもつ土坑墓群に区画として列石を伴うものが出現する。森町鷺ノ木5遺跡では環状列石に隣接して「堅穴墓域」が構築されている。八雲町浜松5遺跡の全貌は明らかではないが、環状列石の南側に列状の列石が見られ、その間に土坑群が分布し、さらに環状の列石の北側には土坑群と組石を持つ土坑群が検出されている。函館市石倉貝塚は区画が環状盛土に転化された例で、その内部に配石、土坑、掘建柱建物跡などが中央の広場を囲んで密集している。なお、倉知川右岸遺跡の例はこの時期にあたる。

後期前葉の配石遺構の地理的分布は渡島半島津軽海峡沿岸から内浦湾沿岸の遊楽部川までである。

後期中葉（ウサクマイC・手稲・鯨潤式期）：中葉では組石をもつ土坑墓群に区画としての列石が伴うものが増える。その内、ウサクマイC式期とされる森町鷺ノ木4遺跡では丘陵裾を列状の列石で区画し、丘陵斜面に土坑群、尾根に組石を伴う土坑を配したものである。また手稲式期とされる仁木町モンガクB遺跡では、立石をもつ土坑を環状に配し、その内部に土坑を構築するものもある。

さらに手稲式期とみられる余市町西崎山1区の例は、土坑上部を縁取るように立石と置石を巡らせ、その内部に敷石する組石複数を列石で区画したものである。ニセコ町滝台環状列石、北栄環状列石、深川市音江環状列石北側、礼文町船泊遺跡でも同様の組石がみられる。ほかに、西崎山3区の例は、土坑上部の立石を中心に敷石する日時計形の組石複数を列石と堅穴により区画するものである。余市町西崎山2区、八幡山遺跡、警察裏山遺跡でも同様の組石が見られる。なお、小樽市忍路環状列石は、列石内部の様子が不詳であるが、恐らく複数土坑墓を有するものと考えられている。

鯨潤式期になると、方形の土坑の底面及び上面に敷石を施し、その周囲を立石などにより環状に区画するものが盛行する。類例として函館市日吉遺跡、南茅部町白尻小学校遺跡、八木B遺跡、八雲町浜松2遺跡、小樽市地鎮山巨石記念物で確認されている。深川市音江環状列石南側もこれらに近い構造をしているが、複数の土坑の周囲を「土堤」で区画している。なお、旭川市神居古潭ストーンサークルは、地鎮山と音江北側との中間的なものであろう。

ほかに列石だけのものは南茅部町磨光B遺跡で、集石状のものは小樽市忍路土場遺跡、南茅部町磨光B遺跡で知られる。

後期中葉の地理的分布は、渡島半島から小樽・余市周辺、石狩川上流、礼文島へと広がりを見せる。

後期後葉（堂林・三ツ谷・御殿山式期）：堂林式期になると石狩低地帯を中心に内陸部とオホーツク海側では周堤墓が盛行する。そのうち、恵庭市柏木B遺跡、千歳市末広遺跡、斜里町朱円環状土壘、芦別市野花南環状土壘といった一部の周堤墓内の土坑墓上部において組石・積石が見られる。ただ、それらは、周堤墓の類例にあつては新しい時期に属する。周堤墓の墓標については藤原氏（道埋文センター1999）によれば大半は、土坑墓の一端ないし両端に石柱や木柱が立てられもので、古い時期にはなく、木柱→立石、土坑の内→外への変遷が捉えられている。一方で列石は斜里町オクシベツ川遺跡、芦別市野花南熊の沢遺跡にみられ、数は少ないものの内陸部やオホーツク海側の周堤墓の地理的分布と重なる。

末葉には、土坑上部を縁取るように磔を配した内側に積石がなされるものが北海道全域に広がる。類例として乙部町小茂内遺跡、北檜山町生淵遺跡、新冠町緑丘遺跡、静内町御殿山遺跡、三ツ石町ホロケ遺跡がある。集石状のものは、根室市初田牛20遺跡で確認されている。

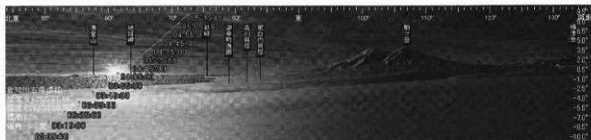
晩期：蘭越町港大照寺遺跡、余市町大川遺跡、上磯町礼刃遺跡、常呂町常呂川河口遺跡、富良野市無頭川遺跡、芦別市滝里安井遺跡、虻田町高砂貝塚などで、土坑上部に積石がなされるものが盛行する。積石は砂利数きとなるものもあり、恵山文化に引き継がれる。

以上、縄文時代後期・晩期の配石遺構の様相を概観した。まとめると、後期初頭に多様な配石遺構が渡島半島に現れるが、前葉のトリサキ式期の段階で土坑墓に区画として列石が伴うものが出現したとみられる。ただ区画内部に墓域を形成するものは少なく、区画外側に隣接して墓域が形成されるものも存在する。それが、後期中葉では、分布を小樽・余市周辺、内陸部、礼文島へ拡大する形で立石や土壘、堅穴などによる区画内部に組石をもつ墓域が形成されるようになる。さらに後期後葉では周堤墓という区画墓が石狩低地帯を中心に盛行し、後期末葉～晩期にかけて積石墓が北海道の広い範囲に広がる。

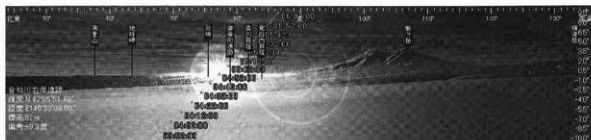
このように後期の特徴的な墓制の変遷の中にあつて、倉知川右岸遺跡で確認された配石遺構と遺構集中区は、「区画墓」の初期のものと捉えることができる。

### ③ 倉知川右岸遺跡から見た日昇

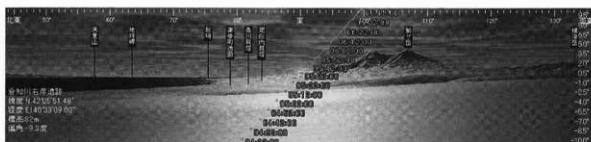
三次元景観CG作成などが行えるコンピューターソフト「カシミール3D」を用いて、遺跡からの日昇、日没をシュミレーションしてみた。結果、日没は背後の丘陵に日が没するため特に特徴的なことはなかったが、日昇に関しては地形的に目標となる地点から日が昇る日が複数確認できた。具体的には、夏至（6・21）では地球岬付近、処暑（8・23）及び穀雨（4・20）では砂崎付近、春分（3・20）及び秋分（9・23）では駒ヶ岳山頂と砂崎の中間地点、霜降（10・23）及び雨水（2・19）では駒ヶ岳山頂付近、冬至（12・21）では駒ヶ岳と横津岳両山頂の中間地点から日が昇ることが確認できた。調査をする中で感じた季節感からすると、4月20日頃は霜が終わり、タンポポや山桜が咲き出す頃、8月23日頃は夏が終わり、大雨の降る頃、10月23日頃は初霜が降り、雪虫が飛び始め、駒ヶ岳や横津岳が初冠雪する頃である。現状では植林された杉が存在し、遺跡からは必ずしもすべてを望むことはできなかった。また、コ字形配石の短軸方向はN20°Eで、西側は砂崎、東側は乙部岳方面を向き、長軸方向はN-70°-Wで、南側は函館山方面、北側は湯ノ崎方面を向いている。（福井）



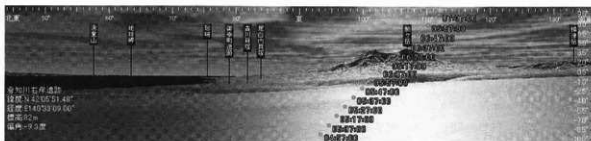
1. 夏至の日昇



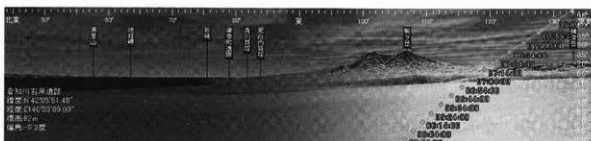
2. 処暑及び穀雨の日昇 (図は穀雨)



3. 春分及び秋分の日昇 (図は秋分)



4. 霜降及び雨水の日昇 (図は霜降)



5. 冬至の日昇

図Ⅶ-1 倉知川右岸遺跡から見た日昇 (「カシミール3D」を用いて作成)

## (2) 縄文後期前葉の竪穴住居跡について

倉知川右岸遺跡では、無名の沢に面した斜面際の範囲で、後期前葉（トリサキ式期）に形成された遺構群が確認された。そこには特徴的な2軒の竪穴住居跡があり、その周囲には配石遺構、プラスチック土坑、土坑、柱穴状ピット、石組炉、焼土などがある。ここでは、この2軒の住居跡(H-2、H-10)の特徴をとりまとめ、類似例と比較検討したい。なお、出入口構造については、(成田2000)の基準を参考とした。

### ① 倉知川右岸遺跡の竪穴住居の構造

- A) 形状・規模 円形および楕円形を呈する。長径は4m以下である。H-10は長径2.7mで、成人2名が横臥したら床面をほぼ覆ってしまうほどの広さでしかない。
- B) 掘り込み・床 掘り込みは構築面からおおよそ20cm、ロームを僅かに掘り込む程度である。H-2の床面、斜面の低い側約3分の2の範囲は、脆弱なKo-g層の上部に貼り床が施されている。床面はH-2が水平・平坦であるのに対し、H-10は明瞭な段差を有している。
- C) 炉 立石を伴う地床炉である。立石は太い棒状で、上端は折断され平面となっている。炉の位置は中央から斜面の低い側の壁寄りである。H-10は立石も出入口側に配置される。
- D) 柱穴状ピット 壁際を巡るように配された小型・丸棒状のもの（壁柱穴）と、床面に構築されるもの（主柱穴、支柱穴）に分けられる。壁柱穴は住居の内側に向かって傾斜する特徴があり、また斜面の低い側に分布しない部分がある。柱穴状ピットは斜面の高い側が深く、低い側が浅く構築される傾向がある。床面に構築される主柱穴は3基もしくは4基で、各点を結んで形成される形状は三角形・台形で、斜面の低い側が広い底辺となる。
- E) 出入口構造 明瞭な出入口施設はみられないが、壁柱穴がない部分と捉えられる。この出入口口と想定されるところには楕円形のピットが1ないし2基ある。このピット長軸は、住居長軸に並行している。

以上をまとめれば、平面が円形もしくは楕円形で、出入口・立石・炉の順序で長軸上に配置されることが特徴として指摘できる。

### ② 道南地域の後期前葉の竪穴住居

道南地域の後期前葉の集落跡は、八雲町コタン温泉遺跡、浜松5遺跡、栄浜1遺跡、森町濁川左岸遺跡、登別市川上B遺跡等で報告されている。これら遺跡の住居構造を以下の項目について観察した。各遺跡の括弧内の数字は類例の住居軒数である。

#### A) 平面形

- ・円形・不整形円形40例……コタン温泉遺跡(7)・浜松5遺跡(8)・栄浜1遺跡(3)・濁川左岸遺跡(3)川上B遺跡(3)
- ・楕円形14例……………コタン温泉遺跡(3)・川上B遺跡(1)
- ・方形・長方形8例……………川上B遺跡(8)

#### B) 規模

- ・4m未満17例……………コタン温泉遺跡(3)・栄浜1遺跡(2)・川上B遺跡(2)
- ・4～4.5m未満15例……コタン温泉遺跡(2)・浜松5遺跡(1)・栄浜1遺跡(1)・濁川左岸遺跡(1)川上B遺跡(0)
- ・4.5～5m未満13例……コタン温泉遺跡(2)・浜松5遺跡(3)・栄浜1遺跡(2)・濁川左岸遺跡(3)川上B遺跡(3)
- ・5m以上28例……………コタン温泉遺跡(5)・浜松5遺跡(6)・栄浜1遺跡(2)・川上B遺跡(1)

## C) 炉形態

- ・石組炉51例……………コタン温泉遺跡(7)・浜松5遺跡(9)・栄浜1遺跡(5)・濁川左岸遺跡(3)  
川上B遺跡(7)
- ・地床炉26例……………コタン温泉遺跡(4)・川上B遺跡(2)

## D) 炉配置

- ・ほぼ中央部11例……………コタン温泉遺跡(3)・栄浜1遺跡(1)・濁川左岸遺跡(1)・川上B遺跡(6)
- ・出入口寄り4例……………浜松5遺跡(4)
- ・中央から偏る34例……………コタン温泉遺跡(7)・浜松5遺跡(5)・濁川左岸遺跡(3)・川上B遺跡(19)

## E) 出入口構造

- ・出入口ロピット4例……………浜松5遺跡(4)
- ・マウンド状構造1例……………浜松5遺跡(1)
- ・なし34例……………コタン温泉遺跡(6)・浜松5遺跡(3)・栄浜1遺跡(2)・川上B遺跡(24)

## F) 壁深さ

- ・30cm以下51例……………浜松5遺跡(6)・栄浜1遺跡(3)・濁川左岸遺跡(4)・川上B遺跡(3)
- ・40cm以上17例……………浜松5遺跡(3)・栄浜1遺跡(1)・川上B遺跡(1)

平面形は円形ものが多数で、他に楕円形などがある。川上B遺跡では方形のものもある。規模は5m以上のものが多いが、4.5m未満のものも多数存在する。5m以上の大型住居はコタン温泉遺跡、浜松5遺跡、川上B遺跡に多くみられる。出入口構造が明瞭な例は浜松5遺跡のみで、他の遺跡は入り口構造を持たないもので占められる。炉形態は石組炉が一般的で、配置は住居の中央部から壁側に偏るものが多い。偏る方向は、周辺地形の斜面の低い側に寄って位置するものが4割ほど(浜松5遺跡5例、濁川左岸遺跡3例、川上B遺跡5例)みられる。浜松5遺跡の入り口構造が明瞭な住居は、炉が入り口側寄りに位置する傾向がある。壁の深さは30cm以下のものが多数を占める。

まとめれば、①平面円形で規模は小型(4m未満)から大型(5m以上)のものがある。②炉は石組炉が多く住居の中央から壁・出入口寄りに位置する。③入り口構造はないものが多い。④深さ30cm以下の浅いものが多い。などが特徴としてあげられる。ほとんどの内容が倉知川右岸遺跡の住居の特徴と合致する。また、倉知川右岸遺跡でみられた壁柱穴も浜松5遺跡(6・8住居)に認められる。倉知川右岸遺跡の住居は、道南の後期前葉の例と比較して同様な特徴を有しながらも、炉に立石を伴うことが特異である。

道内における後期前葉の竪穴住居で、石組炉・地床炉に立石を伴う明確な出土例はない。浜松5遺跡のトリサキ式期の住居では石組炉の出入口側の礫が炉側に倒れかかるように斜めに置かれている例がある。野田生1遺跡の報告者は、浜松5遺跡のような例が立石に発展した可能性を指摘している(福井・北埋調報183集)。また、炉の近辺に配石される例が、濁川左岸遺跡の涌元式期の住居に複数認められる。これらは、出入口構造が不明瞭であるが、炉から出入口が想定される間の範囲に一对となる板状礫の立石がみられる。この立石が石組炉に関係するものか、出入口構造に関係するものかは明らかではない。川上B遺跡CH-17では、炉には伴わないが、加工した棒状礫が床面に斜めに立石する例がみられる。

倉知川右岸遺跡でトリサキ式期の住居に明瞭な立石炉が確認されたことから、少なくとも浜松5遺跡のような礫配置が立石に発展したのではないことが考えられる。

## ③ 道外の立石を伴う炉の類例(図VII-2)

立石を伴う炉の出土例を本州に求めると、青森県では六ヶ所村大石平遺跡(Ⅱ区第3・4・5・8



住居、Ⅳ-1区第5号住居、Ⅶ区第3号住居)、同沖附(2)遺跡(第3号住居)、同沖附(1)遺跡(屋外炉)、八戸市田面水平遺跡(4・7・10・13・33号住居)、同丹後谷地遺跡(第28・36・58・59・63・64・65号住居)、同鶴登遺跡(第1号住居)、同鴨平(2)遺跡(第2号住居)、岩手県では軽米町若成田Ⅳ遺跡(F39住居)、同吠屋敷Ⅰa遺跡(GⅠ-1)、秋田県では森吉町炬ヶ岱C遺跡(第2号)、同日廻岱B遺跡(SI2005・2007・2025・2134)、同漆下遺跡(SI326・331・332・333・353)、上小阿仁村小袋岱遺跡(屋外炉SR114・169、SNR122・132・145・147・151・159・175)など、東北北部地域で認められた。大石平遺跡では立石を伴う炉のほか、住居内の土坑に設置された立石がみられ、礫形状が倉知川のものと同様に上部平坦な立方体状となっている。秋田県の類型は埋設土器炉に伴うことが特徴的である。吠屋敷Ⅰa遺跡以外は、全て後期初頭から前葉に属するものである。また、全体的な特徴として、立石の位置は出入り口側、もしくは住居周辺地形の斜面の低い側に限定されることがあげられる。青森県では後期前葉に入り、中期中葉以降の石組炉が減少し、代わって地床炉・立石炉が多くなる特徴が指摘されている(八戸市教育委員会1986『丹後谷地遺跡』)。

青森県の後期初頭から前葉には、4m未満の小型、4.5m以内の中型の竪穴住居が多数現れることが、大石平遺跡、田面水平遺跡、丹後谷地遺跡、牛ヶ沢(3)遺跡、中ノ沢西張遺跡、一ノ渡遺跡、妻の神遺跡、鶴登遺跡の例から確認されている(青森県教育委員会1985『大石平遺跡』)。そして4.5m以内の小・中型、5m以上の大型住居が、一つのグループに組み合わされて集落を構成すると指摘されている(青森県教育委員会1986『沖附(2)』)。

#### ④ 道南地域の立石を伴う炉の類例(図Ⅶ-2・3)

立石を伴う炉を有する住居の道南地域での類例は、木古内町新道4遺跡(CH-2)、戸井町釜谷2遺跡(2・3・5・8・9・15・18・19・21・27~31・34・37・40・42・50号住居)、南茅部町磨光B遺跡(H-1・2・6)、南茅部町垣ノ島A遺跡(H-9)、八雲町野田生1遺跡(AH-3・4・5・6・14、MP-3)などにあり、時期は後期中葉の甕淵式期以降のものである。とりわけ釜谷2遺跡、野田生1遺跡はまとまった検出例である。以下、これらの諸例について倉知川右岸遺跡と同様の項目で比較していく。なお、釜谷2遺跡では、炉に伴う立石の呼称を、「風除石」としている。

また、立石を伴う炉は有しないが、甕淵式期の住居が報告されている南茅部町白尻小学校、八雲町浜松2遺跡の例も比較材料に加える。

##### A) 規模

長径4m以上のものが大多数を占める。4m未満のものは野田生1遺跡(AH-20・MP-7)、釜谷2遺跡(50号住居)にある。野田生1遺跡の4m未満の住居は、立石がなく出入り口構造が不明瞭なものである。

浜松2遺跡(1~3号住居)、白尻小学校遺跡(4・5号住居)の竪穴住居の規模は全て4m以上である。

##### B) 掘り込み・床

構築面が不明なものがあるが、釜谷2遺跡、磨光B遺跡、野田生1遺跡では、最大深で50cm以上掘り込むものが多数を占める。40cm未満のものは、釜谷2遺跡(34・37号住居)、野田生1遺跡(BH-23、CH-29・30・33・41)にある。しかし、野田生1遺跡における壁高40cm未満の住居の炉は立石を伴っていない。

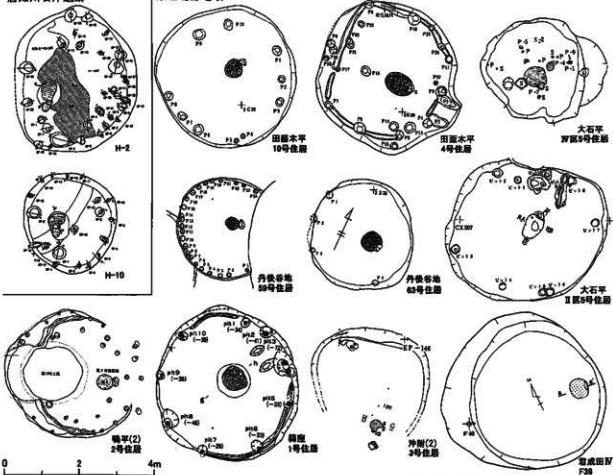
床面は平坦なもので占められ、段差を有するものはみられない。

##### C) 炉

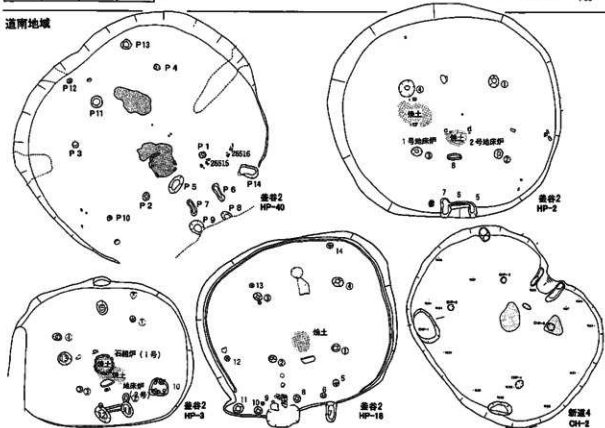
床面中央から出入り口寄りに配置されるものが多数を占める。それ以外は住居周辺地形の斜面の低

倉知川右岸遺跡

東北部地域



道南地域



図VII-2 立石を伴う炉をもつ住居(1)



い側に位置する。形態は「立石+地床炉」と「立石+石組み炉」がある。後者は釜谷2遺跡(3・5・19・27・31・40・50号住居)でみられる。また、表Ⅶ-1に示した様に、立石の抜き取り行為を推定できるものがみられる。

新道4遺跡の立石を伴う炉を有する住居はCH-2である。炉の傍ら、住居の出入り口側に楕円形ピットがあるが、報告書中には立石・風除石などの記載はない。釜谷2遺跡の報告書(釜谷2)では釜谷2遺跡の出土例と比較して、新道2遺跡CH-2の炉傍の楕円形ピットを立石抜き取り痕と判断し、「風除石の痕跡ある住居址」として扱っている。

#### D) 柱穴状ピット

・主柱穴 4基で構成されるものが多い。野田生1遺跡では2基構成のものも多くみられる。主柱穴の深さは、10cm前後の浅いものから60cmを超える深いものまで様々である。また、主柱穴がないものも認められる。

2基構成 7例……釜谷2遺跡(50号住居)、野田生1遺跡(AH-2・4・13・14・17、MP-5)

3基構成 1例……野田生1遺跡(AH-16)

4基構成 32例……釜谷2遺跡(2・3・6・8・13・16・18・19~21・23・25・27~31・34?・37?・38・40~42・46・49号住居)

磨光B遺跡(H-2・6)

野田生1遺跡(AH-1・3・5・7・)

新道4遺跡(CH-2)

5基以上 1例……釜谷2遺跡(9号住居)

主柱穴なし 5例……磨光B遺跡(1号住居)、野田生1遺跡(AH-10・11・18・20)

・壁柱穴 立石を伴う炉を有し、且つ壁柱穴が巡るものは、釜谷2遺跡(8・29・30号住居)、磨光B遺跡(H-2)でみられる。これらはほぼ直立するように構築されるもので、倉知川右岸の斜めに傾くものとはやや異なる。なかでも、磨光B遺跡の焼失住居(H-2)については、壁に張り巡らした樹皮を固定するためのものと報告されている。また、壁外に小柱穴が巡るものが磨光B遺跡(H-1・3・6)、野田生1遺跡(MP-1)にあり、これらは上屋構造に関係するものと推測されている。

#### E) 出入り口構造

溝状の出入り口ピットやマウンド状構造など、明瞭な出入り口施設が多数に認められる。

出入り口ピット……釜谷2遺跡(2・3・5・8・9・15・16・18・19・29・31・34・38・40・49号)

野田生1遺跡(AH-1・14・17・18、MP-3)

マウンド状構造……釜谷2遺跡(27号住居)

野田生1遺跡(AH-13、CH-30、MP-1・5)

両方あるもの……釜谷2遺跡(30号住居)

野田生1遺跡(AH-4・5・6・12・15)

以上、道南地域後期中葉の立石を伴う炉を有する住居と、倉知川右岸遺跡の住居を比較して、幾つかの共通点と小異点を認めることができた。住居の形状・柱穴などは共通点、住居規模・壁の深さ・出入り口構造の有無・立石の抜き取り痕跡の有無などは異なる点として捉えられる。上記のように、4m未満の小型住居は、立石炉を有する後期中葉縄文期の住居にはほとんどみられない。しかし、後期前葉の東北北部から道南地域では多数が存在し、東北北部地域では同時期住居形態の特徴の一つと捉えられている。倉知川右岸遺跡でみられた小型の住居規模は、後期前葉の特色と考えられる。

## ⑥ まとめ

以上、検討結果をまとめると次の3点があげられる。

- (ア) 倉知川右岸遺跡の竪穴住居は道南地域・東北部地域にみられる後期前葉の住居の特徴を有す。  
 (イ) 立石を伴う炉は道南地域では後期前葉には存在し後期中葉で増加するものと考えられ、現在倉知川右岸遺跡の例が最も古い。  
 (ウ) 後期前葉の立石炉の類例は、道南部にはなく、東北部地域に求めることができる。

倉知川右岸遺跡の立石を伴う炉は東北部地域からの影響を受け、道南地域後期前葉の特徴を持つ住居に作られたと考えられる。

「立石を伴う炉」の特徴をまとめると、①立石は炉の出入り口側もしくは斜面の低い側に位置する。②炉は地床炉と組み合わされる例が道南地域、東北部地域共に7割以上を占める。③抜き取り痕跡を示すものは道南地方の後期中葉以降の住居でのみ報告されている。などがあげられる。

炉に伴う立石の性格について、釜谷2遺跡では立石の形状と配置、遺跡の立地条件から風除石と推測された。しかし、野田生1遺跡では多様性に富む立石の形態と設置方法の出土例から、風除石には否定的な見解が得られている。倉知川右岸遺跡を含めた各遺跡の立石は被熱しており、炉と共に機能したことだけは確実である。また、立石の位置は、出入り口側もしくは斜面の低い方の壁側にあることで東北部・道南地域とも共通する。青森県の類例では、出入り口施設が存在する場合、斜面の低い側に位置する特徴が指摘されており(成田2000)、出入り口・立石・炉の位置関係は規格性の強いものと考えられる。立石の性格については、遺跡の立地、住居内他施設との位置関係、立石の形態、炉・出入り口施設形態の変遷などの細かな内容を検討し、時期差・地域差の中での共通点や異なる点を把握した上で考察する必要があるだろう。今後の課題とした。

倉知川右岸遺跡の配石遺構、竪穴住居、土坑の構築順序は明確には判断できないが、三者は同時期に利用された可能性がある。2軒の住居は近接しており、上屋構造を考えれば並存はなく、1軒単独で存在したと判断される。住居の細かな性格については不明だが、配石遺構・土坑に近接して単独で建てられた、特徴的なものであることを指摘しておきたい。(坂本)

## (3) フラスコ状土坑

今回の調査では、フラスコ状土坑が18基検出された。すべて調査区南東側、無名の沢へ続く斜面の際に広がる、縄文時代後期前葉の遺構集中区に位置している。これらのフラスコ状土坑について、用途および特徴を明らかにするために、分布・規模・形態・覆土の堆積状況・出土遺物などについて検討する。

フラスコ状土坑の所属時期は、縄文時代後期前葉のものが15基、縄文時代後期の可能性があるものが2基、縄文時代中期のものが1基である。用途は、墓あるいは墓の可能性のあるものが16基、貯蔵穴が1基、不明が1基である。このうち、縄文時代後期前葉に属する可能性があり、かつ土坑墓の可能性のある17基を検討の対象とする。なお、規模・形態等の観察については、坑口は崩落の影響を受けている可能性があるため、構築時の規模・形態を保持していると考えられる坑底を対象とした。分布

フラスコ状土坑の分布は後期前葉の遺構集中区に収まる。遺構集中区の東端近くに配石遺構が位置しており、P-40を除く16基は配石遺構の西側に位置する。これらはⅦ章1節で述べたように、大きく二つの分布域を形成している。I群は、遺構集中範囲の中でも特に遺構の密集する範囲に位置するもので、P-20・26・30・34・35・36・37・40・49・51・53・68の12基からなる。II群は、I群の北側～西

側、遺構の分布が比較的少ない範囲に位置するもので、P-21・23・27・59・69の5基からなる。I群の分布は造成土の範囲と重複しており、石組炉S-8・10・6・9・15・4・5・14・3を結んだ範囲とも対応する。II群は、同じくS-15（あるいは4・5）・13・12・7を結んだ範囲の中にある。

#### 規模

規模はおおむね、小形：底径1.0m未満・深さ0.6m未満、中形：底径1.0～1.2m・深さ0.6～1.0m、大形：底径1.21～1.6m・深さ0.7m以上、特大形：底径2.0m以上、に分けられる。大形のもは7基で、I群の中でも配石遺構に近接するものが多く、中形・小形のもはI群の周縁部とII群に分布している。特大形はP-27のみで、II区に位置する。なお、深さは、検出面の違いによる差を緩和するため、造成土の上面や中位において掘り込み面が確認できたものについても、VII層あるいはVIII層上面からの深さを計測した。

#### 形態と構造

坑底の形態は円形のもの11基、楕円形のもの5基、隅丸長方形のもの1基ある。I群に属するものは隅丸長方形のP-51以外は円形で、II群に属するものはすべて楕円形を呈する。

坑口部・壁の屈曲部の平面形態と坑底の形態を比較すると、坑底形態が円形の場合は、坑口・屈曲部もおおむね同心円状を呈する。とりわけP-30・35・37・49では坑底・坑口・壁の屈曲部の形態が良く対応しており、崩落がないあるいは少なく、構築時の形態をほぼ保持しているものと推測される。一方、坑底形態が楕円形を呈するものは坑口も楕円形を呈する場合が多いが、互いに長軸方向が異なるものもあり、全般に形態がやや不均整である。

断面形態は、以下の3つに分けられる。

- ① 明瞭なフラスコ状を呈するもの：坑底と壁のなす角度が鋭角で、壁が強く屈曲して坑口が開くか、あるいは壁は屈曲せず坑口が強くすぼまるもの。
- ② 緩やかなフラスコ状を呈するもの：坑底と壁のなす角度がやや鋭角で、壁が緩やかに屈曲して坑口が開くもの。
- ③ 円筒形に近いもの：坑底と壁のなす角度が直角で、壁の屈曲が弱い、あるいはほとんどないもの。

I・II群ともにすべての形態がみられる。I群では、明瞭なフラスコ状を呈するものは配石遺構に近接しており、緩やかなフラスコ状を呈するものはI群全体に、円筒形に近いものは周縁部に位置する。II群では、明瞭なフラスコ状を呈し大形のP-27が配石遺構から最も離れた位置に、緩やかなフラスコ状を呈するP-21が配石遺構より、円筒形に近い2基はその間に位置する。例外はあるが、配石遺構に近接するものほど、フラスコ状の形態が明瞭である。

坑底はVIII層に構築されるものが多く、15基がこれに該当する。P-27はVIII層を掘りぬいてIXa層中に、P-51はVIII・IXa層を掘りぬいてIXb層中に構築される。VIII層のローム層、IXa層のNg軽石層は堅固で、安定した坑底を構築できるが、IXb層であるNgの砂粒大粒子の火山灰層は脆弱である。P-51では、坑底から小ピット状の窪みが検出された。埋土は土坑本体の埋土と共通している。

#### 覆土の堆積状況

覆土はすべてのものに、埋め戻しによる人為堆積土、あるいはその可能性のある土層が認められる。埋め戻しは、覆土下半のみである場合と、土坑の上位まで及ぶ場合がある。埋め戻し層は、a：ローム主体の層、b：黒～褐色土主体でロームやKo-g・Ngを多く含む層からなる。aとbが互層をなしている場合と、どちらかの土層が土坑上位まで堆積している場合がある。互層をなす場合は、土を選択して埋め戻したものと推測される。

**覆土上位にみられる特徴的な土層** 覆土の中には、白色を呈する粘土あるいはローム、ローム質の黄褐色土、土坑外から持ち込まれた焼土など、特徴的な土層がみられる場合がある。これらは覆土の上位に堆積している場合が多く、P-21・27・30・35・40・51・53の7基でみられた。このうちP-30・35・40・51・53の5基がI群に属するもの、P-21・27の2基がII群に属するものである。

P-21：白色の粘土が埋め戻し土の上面を被うように検出され、その下位の土層に焼骨片やベンガラ状粒子が含まれる。

P-27：3つの焼土が覆土上位に形成される。

P-30：検出面の軽石を多く含むロームの直下に、焼土ブロックを含む層がみられる。

P-40：ローム質黄褐色土が埋め戻し土の上面に、断面がU字形をなすように大きく窪んで堆積。

P-53：白色味の強いロームと焼土が覆土上位に堆積。

P-21・40・53など覆土上面に堆積したものは、埋め戻しの最終土層として選別して置かれた、あるいは撤かれたものと推測される。また焼土には他から持ち込まれたと考えられるものが多く、これも意図的に置かれたものであろう。

P-51では、混入物を含まないロームからなる、自然堆積のⅧ層との見分けが困難な土層が見られた。この土層は縦方向に堆積しており、これに接するように焼骨片を含有する焼土が検出されている。このことから、P-51については、埋め戻しの途中で「土坑状」の形状を意図的に成形した可能性がある。

これら特徴的な土層が見られるもののうち5基には、土器の出土や配石が認められる。

#### 土器と配石

副葬品と判断できる遺物が伴う例は少ない。一方、礫や台石・石皿が、意図的に配置された状況で出土した例が多い。P-34・53では礫と土器がともに出土している。

**土器** 副葬品と判断できる遺物が出土したのはP-20・21・26・34・40・53の6基である。すべて土器で、底部破片が多い。P-20・26・34・40・53はI群に、P-21はII群に属する。また、P-21・40・53の土器は、特徴的な土層との関連がみられる。

土器底部は、P-20で1個体、P-21で3個体、P-53で1個体が出土している。また、石組炉S-15に隣接して1個体が出土している。P-21の3個体のうちの1個体は、ほぼ完形の1個体、口縁から底部までの多くの破片が残存する別の1個体とともに、埋め戻し土の上面に堆積している白色粘土の直下から出土している。P-53でも同様に、坑口付近に堆積する焼土の直下から出土している。

P-34では坑口から礫とともに大形の鉢の破片が出土し、周辺の包含層から出土したものと接合した。P-26では小形土器が埋め戻し土の上面から、P-40では土器の細片が埋め戻し土の最上部に集中して出土した。

このほか、P-21からは土製品・石製品が出土しているが、P-21周辺は遺構集中区の縁辺部にあたり、土製品・石製品が多く出土する区域であるため、混入の可能性がある。

**配石** 人為的に礫や台石・石皿が配置されたと判断される出土例は、P-20・27・30・34・35・36・51・53の8基にみられる。P-27はII群に、それ以外はI群に属する。またP-27・30・35・51・53は先述した特徴的な土層がみられる土坑である。

P-20：覆土下位に礫が環状に配置される。

P-34：配石遺構で用いられる礫と近似する大きさのものが、坑口から複数個出土。

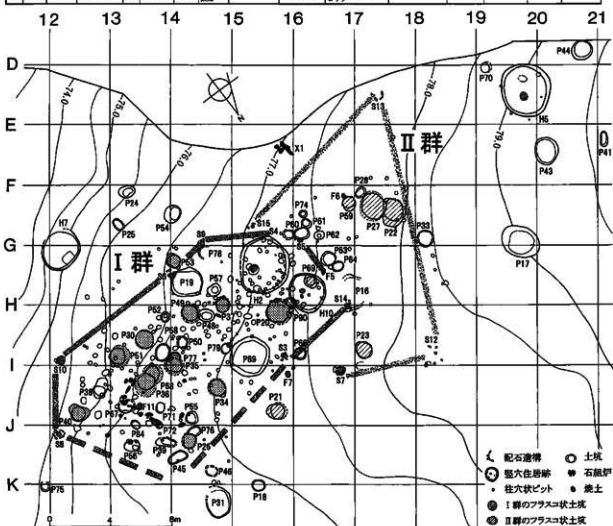
P-30：長さ78cm、重さ48kgの大形の礫が覆土上位から出土。

P-51：扁平で円形に近い台石・石皿が、覆土上位で壁際に立った状態で出土。

P-53：やや扁平な台石・石皿が坑口の立石として用いられていた。

表Ⅶ-2 フラスコ状土坑属性一覧

遺構名	調査時期	調査経緯	経度 北緯 (m)	経度 東経 (m)	深さ	時期	造成土との関係	層土	層土内容	特徴的な土器	用途	層としての層		土を出土層別	
												層の厚さ	層の深さ	土層 (層別)	層
P-20	10. 5	円	層中かワラスコ状	1.58	1.34	大型	後期前葉	埋め戻し	アサギの灰	高一層褐色土主体、 ローム・灰の土	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し
P-21	7. 8	円	層中かワラスコ状	0.88	0.92(埋め戻し)	小型	後期前葉	埋め戻し	高一層褐色土主体、 ローム・灰の土	土坑蓋	埋め戻し	4 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-22	20. 6	円	埋め戻し	1.48	1.16	中型前葉	前期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-23	12. 6	円	埋め戻し	1.50	0.92	中型	後期前葉	埋め戻し	高一層褐色土主体、 ローム・灰の土	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-24	3. 6	円	埋め戻し	0.50	0.50	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-27	19. 1	円	埋め戻し	2.60	1.07	特大	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-30	4. 7	円	埋め戻し	1.22	0.84	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-34	4. 2	円	埋め戻し	1.14	0.72(埋め戻し)	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-36	3. 1	円	埋め戻し	0.90	0.92(埋め戻し)	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-38	2. 0	円	埋め戻し	1.48	1.38	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-37	8. 0	円	埋め戻し	0.90	0.92(埋め戻し)	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-46	5. 1	円	埋め戻し	0.91	0.73	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-48	6. 7	円	埋め戻し	1.20	0.77	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-41	4. 2	円	埋め戻し	1.36	1.48(埋め戻し)	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-50	9. 6	円	埋め戻し	0.83	0.58	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-59	18. 2	円	埋め戻し	0.60	0.64	小型	中葉前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-58	2. 4	円	埋め戻し	1.34	1.11	大型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	
P-49	12. 9	円	埋め戻し	0.82	0.38	小型	後期前葉	埋め戻し	埋め戻し	土坑蓋	埋め戻し	1 (埋め戻し)	埋め戻し	埋め戻し	



図Ⅶ-5 後期前葉の遺構集中区



## まとめ

これらを総合すると、今回検出されたフラスコ状土坑は、覆土の堆積状況、遺物や礫の出土状況から、土坑墓であると判断できる。分布はⅠ群・Ⅱ群に分かれ、それぞれ以下のような特徴がある。

Ⅰ群は、配石遺構から主に南西方向に、他の小土坑や柱穴状ピットなどとともに密集して分布する。規模・形態は、中形で緩やかなフラスコ状を呈するものと、大形で均整のとれた、明瞭あるいは緩やかなフラスコ状を呈するものが多い。中でも大形のものには配石遺構に近接している。副葬品が見られたのはP-20・26・34・40・53である。このうち、P-40・53は位置・形態の点でⅠ群の中では例外的なものである。このほかには、礫あるいは台石・石皿が配置されるものがあり、大形のものや明瞭なフラスコ状を呈するものに多くみられる。Ⅰ群に属するフラスコ状土坑は、比較的共同性がみられ、その配置は、造成土・石組炉などによる区画や配石遺構との位置関係によって規制されている。

Ⅱ群はⅠ群の北側～西側に分布する。中形で緩やかなフラスコ状を呈するものと、小形で円筒形に近いもの、大形で明瞭なフラスコ状を呈するものがある。形態は不均整なものが多い。副葬品や礫の配置が認められるものは、複数個体の土器が副葬されたP-21のみである。P-21は今回検出されたフラスコ状土坑の中でもとりわけ副葬品が多い。P-27は極端に平面規模が大きく、配石遺構から最も離れて位置している。Ⅱ群に属するフラスコ状土坑は、共同性が少なく、今回検出されたフラスコ状土坑の中ではやや特異なものが多くみられる。(柳瀬)

## 2 土器

土器は、遺構・包含層あわせて67,266点出土した。多数を占めるのはⅢ群A類：縄文時代中期前半のもの、Ⅳ群A類：縄文時代後期前葉のもので、それぞれ出土点数の5割近い。このうちⅣ群A類土器について、特徴を観察し、同時期の土器が出土している八雲町浜松5遺跡・青森市小牧野遺跡との比較を行う。

### (1) 出土土器の特徴

#### 1) 共通する特徴

今回出土したⅣ群A類土器は、そのほとんどがトリサキ式に含まれるものと考えられる。これらに共通して、次のような特徴が認められた。

器種 深鉢・鉢・壺がある。深鉢が最も多い。

器形 深鉢には直線的に立ち上がるものと、胴部上半がやや張り出し、頸部がややくびれて口縁が外反するものがある。直線的な器形のものには比較的小形のものに多い。鉢は小形で、直線的な器形のもの、胴部上半が張り出し、頸部がくびれて口縁が外反するものがある。壺は全体の器形がわかるものは少ないが、胴部の中ほどが張り出して頸部が明瞭にくびれるもの、胴部の上半が大きく張り出して頸部が極端にくびれるものがあるようである。前者は比較的小形のものに、後者は比較的大形のものにみられる。

口唇の形態 丸形のもの、角形のものがある。丸形としたものには、面を意識して成形され、角形に近いものもある。折り返し口縁のものは少なく、主に角形のものにみられる。口唇端部に縄文を回転施文するものが少量ある。

口縁の形態 波状口縁が多く、平縁はやや少ない。「8の字状」あるいはそれに類する貼付は、波状口縁・平縁ともにみられるが、全体数は少ない。貼付は、波状口縁のものでは突起部に、平縁のものでは6あるいは8単位で施される。貼付が外面のみに収まるものと、8の字の上端が内面にまたがるも

のがある。

地文 無文のものと同文が施されるものがある。胴部に文様をもつものは無文地のものが圧倒的に多い。縄文は単節のものと同節のものがあり、複節のものや燃糸によるものがまれに見られる。糸は斜行するもの、横走するものがある。撚りの方向は単節ではLR、無節ではLが多い。縄文の有無による施文手法・文様構成の違いは認められなかった。

胎土 胎土は比較的緻密で、砂粒を多く含むものが多い。角閃石と思われる黒色の結晶が多くみられる。

輪積み痕 輪積み位置で割れが起こっている場合が多く、外傾する輪積みの痕跡が顕著に認められる。

## 2) 胴部の文様の違いによる特徴の差異

胴部に施される文様の施文手法および構成の違いによって、以下の6つに細分した。この分類による特徴の差異を検討するため、口縁の形態・口縁部文様帯などについて比較する。

### ① 沈線による文様が施されるもの

#### a 規格性のある渦巻状文が施されるもの

渦巻状文が4～8か所に配置され、その隙間が山形文・くの字状文などで充填されるものである。渦巻状文は、波状口縁の場合は突起に対応した位置に配される。沈線は3本組のものが多く、2本組、単独のものもある。「渦巻」の描き方は、外周から中心に向かって進み、中心で折り返して再び外周へ向かうことにより渦巻状をなすものが多い。波状口縁と平縁があり、波状口縁の突起部の形態は尖り気味である。頂部に指頭状圧痕の加えられる貼付をもつものが1例(P-89-2)ある。8の字状貼付をもつものがある。折り返し口縁をもつものは1例(包含層111)である。口縁部文様帯は、並行沈線に( )状沈線が加えられるものが多く、並行沈線のみのも、縦位の蛇行沈線が加えられるものは少ない。無文地が多く、縄文地のものもある。包含層111やP-34-2は、渦巻の描き方が異なるが、渦巻とその間を充填する文様の構成をとっているため、ここに含めた。

#### b 蛇行文・弧状文・山形文などが横方向に多数連続して施されるもの

区画をもたないものがほとんどで、単位となる文様が横方向に連続して施される。沈線は2～4本組のものが多く、深鉢は、復原できたものはすべて波状口縁である。突起の形態はやや緩やかな山形で、頂部に刻みが加えられるものもある。鉢は波状口縁と平縁があり、頂部に指頭状圧痕の加えられる貼付をもつものもある。8の字状の貼付はみられない。折り返し口縁は1例(包含層116)で、折り返し上から連続して蛇行沈線が垂下する。口縁部文様帯をもつものは少なく、並行沈線や長楕円形沈線が施される。包含層112とP-21-2は区画をもつが、便宜的にここに含めた。

#### c 横位に展開する文様が施されるもの

直線的な文様と曲線的な文様がある。直線的なものは、口縁部文様帯で用いられているような、並行沈線間に( )状沈線や蛇行沈線が加えられる文様が胴部にも施される。同様の文様が斜位に施されるものもある。曲線的なものは3本組の沈線が用いられ、後述する磨消縄文・柳歯状沈線が施されるものと共通するモチーフをもつ。深鉢には波状口縁・平縁があり、波状口縁の突起は緩やかな山形のもの、指頭状圧痕が加えられる貼付をもつものがある。折り返し口縁のものはない。

### ② 磨消縄文が施されるもの

横位に展開する曲線的な文様が施されるものが多いが、直線的な文様が施されるものも1例ある(包含層126)。波状口縁で、突起は4か所のものが多く、3か所のものもみられる。深鉢・壺の突起は山形で、刻みが加えられるものが多い。折り返し口縁はない。縄文を録取る沈線は、3～4mmと太めである。口縁部文様帯は、磨消縄文で構成されるものと沈線で構成されるものがある。突起下に環状

の貼付が加えられるものがある。

### ③ 櫛歯状沈線が施されるもの

復原できたのは1個体のみで、横位に展開する不規則な曲線的な文様が施される。破片資料では、渦巻状文が施されるもの、横位に展開する曲線的な文様が施されるもの、波状の並行文が施されるものがある。波状口縁と平縁がある。波状口縁の突起の形態は山形で、刻みや指頭状の圧痕が加えられるものがある。口縁部文様帯は沈線で構成されるものと櫛歯状沈線で構成されるものがある。折り返し口縁はみられず、口唇直下の2cmほどが無文帯となることが多い。櫛歯状沈線を縁取る沈線は、磨消縄文の場合と同様3～4mmと太めである。直線的な器形はみられず、口縁の外反の度合いが強いものがある。

### ④ いわゆる粗製土器

格子目状沈線が施されるもの、口縁部文様帯のみが施されるもの、縄文のみのもの、無文のものがあつた。格子目状の擦糸文が施されるものは、破片が数点出土したのみである。

以上の細分したもののうち、①c・②・③は、文様の施文手法は異なるが、文様構成・波状口縁の突起の形態・装飾、沈線の太さなどの点で共通点が多く認められる。

## (2) 出土状況

IV群A類土器は、主に図III-1に示したI-1・2区およびIII区で多く出土している。このうち、器形がわかる個体は、I-1・2区のうち遺構集中区の周縁部と、III-1区から出土している。これら出土地点間あるいは出土地点内における、(1)でみた細分による偏りは認められなかった。

## (3) 他遺跡との比較

今回出土した土器の特徴を、八雲町浜松5遺跡・青森市小牧野遺跡から出土した同時期の土器と比較する。

### 1) 八雲町浜松5遺跡出土土器

8号住居址の覆土から一括で、多数の復原個体が得られている。これらを概観すると、以下のような特徴が認められた。

- A 胴部に文様帯をもつものでは、沈線によるものがほとんどで、磨消縄文によるものは1個体のみ、櫛歯状沈線によるものはみられない。
- B 沈線による文様が施されるものでは、渦巻状文をもつものは少なく、単位となる文様が横位に連続するものや、文様が横位に展開するものが多い。
- C 渦巻状文をもつものでは、2本組あるいは3本組沈線のものが多い。波状口縁の突起の位置と渦巻状文が対応しないものや、渦巻状文の間に充填される文様が簡略化されたものが目立つ。
- D 波状口縁の突起の形態は山形のものが多く、刻みが加えられるものもみられる。
- E 口縁部の貼付は、環状のものや、「8の字」の上位にさらに貼付が加えられるもの、また貼付が内面にまでまたがるものが目立つ。
- F 口縁部文様帯は、平行沈線とそれを縦断する蛇行沈線によるものも多く、()状沈線が加えられるものは少ない。

### 2) 青森市小牧野遺跡出土土器との対比

倉知川右岸遺跡と浜松5遺跡の土器について、小牧野遺跡出土土器に基づいて児玉大成が作成した東北地方の十腰内I式の変遷図(児玉1999、青森市教育委員会2003)と対比する。

a 倉知川右岸遺跡出土の土器 今回出土した土器のうち、①aについては、2～4本組、特に3本組の沈線が用いられるものが多いことから、「小牧野遺跡4～5期」に相当すると考えられる。①c・②・③については、文様が横位に展開すること、磨消縄文・櫛歯状沈線が施されるものがあることか

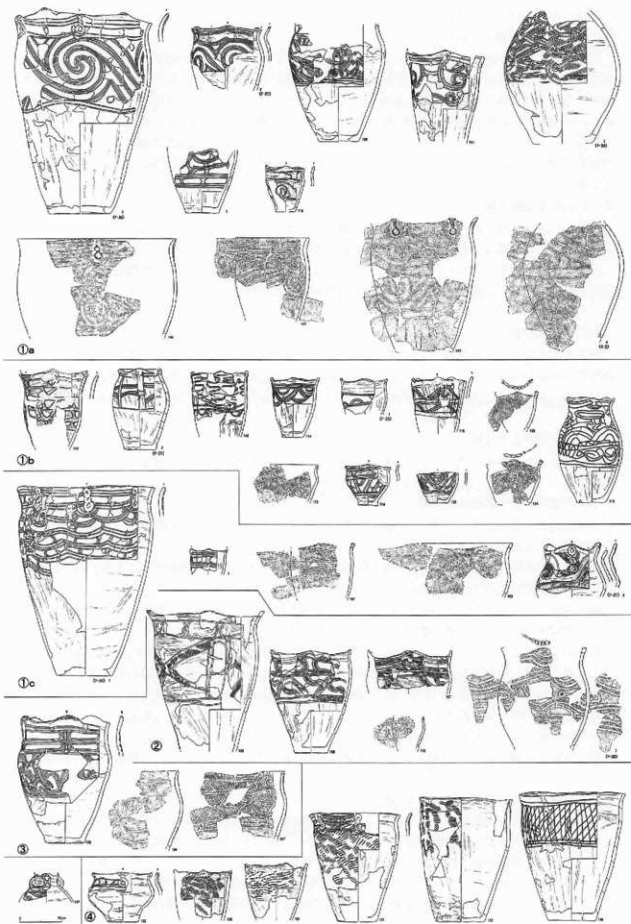


图 VII-6 倉知川右岸遺跡出土土器集成

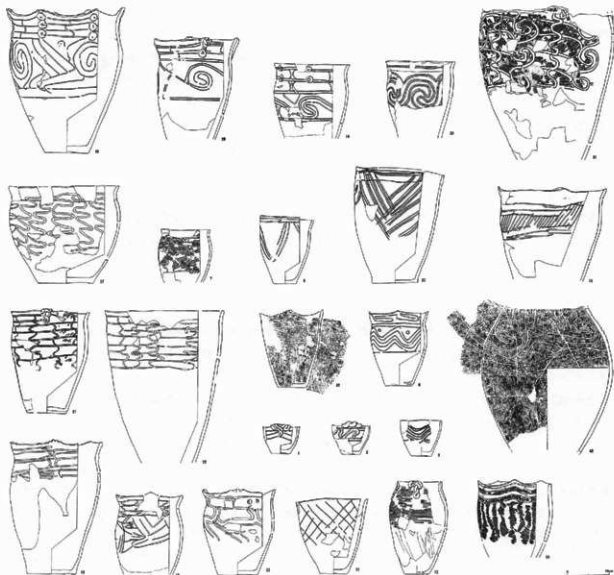
ら、同「5期」に近いものと考えられる。

b 浜松5遺跡8号住居址出土土器 横位に展開する文様が多いこと、渦巻状文が簡略化されていることなどから、「5期に近い様相」と考えられる（大泰司・北埋調査175）。

まとめ

以上の検討から、今回出土したⅣ群A類については、以下のように位置付けられる。

①aについては「小牧野遺跡4～5期」に、①c・②・③については「小牧野遺跡5期」に相当する。同様に浜松5遺跡8号住居址出土土器は「小牧野遺跡5期」に近い様相であることから、①aは浜松5遺跡例より古いもの、①c・②・③はこれとほぼ同時期のものである可能性がある。①bについては、小牧野遺跡変遷図での例はみられないが、浜松5遺跡の出土例に含まれることから、①c・②・③に伴うものと考えられる。さらに、浜松5遺跡8号住居址出土土器について「トリサキ式の範疇で新しいものと判断」されていることから（大泰司前掲書）、倉知川右岸遺跡出土土器については、トリサキ式のうち新しいものと、それよりやや古いものがあると言える。しかしながら、トリサキ式については、今回の例を含め、共伴関係を層位的に確認できる資料が少ないのが現状である。今後、層位的資料の増加を待って、さらに検討したい。（柳瀬）



図Ⅶ-7 八雲町浜松5遺跡8号住居址出土土器

### 3 石器

#### (1) 出土点数・重量・石材

石器は遺構・包含層等をあわせ5,552点が出土した。遺構出土は522点、包含層出土は5,030点で、このうち製品（使用もしくは加工されたもの）は1,686点、約30%を占める。

器種別で多数出土したものは、剥片石器類では石鏃（114点・製品の7%）、スクレイパー（181点・11%）、Rフレイク（209点・12%）、礫石器類では敲石（189点・11%）、扁平打製石器（201点・12%）、北海道式石冠（200点・12%）、台石・石皿（121点・7%）がある。円筒土器文化に特徴的に伴う扁平打製石器と北海道式石冠が多数みられることが指摘できる。

製品の石材は、剥片石器では頁岩が、礫石器では安山岩が9割以上を占める。フレイクは3,775点が出土している。フレイクの石材は頁岩（1858点・9617g）と安山岩（1624点・57170g）が多数を占める。安山岩フレイクは主に扁平打製石器・北海道式石冠・敲石の、製作・使用の際に発生したものと捉えられる。

#### (2) 器種別の特徴

以下、属性観察結果により認められた、各器種の特徴について述べる。また、特にスクレイパー、扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿については、機能方法に関しての分析をおこなった。

##### 石鏃

形態に多様性が認められるが、特に有茎木葉形鏃（22点・19%）と有茎三角形鏃（53点・46%）が多く出土している。土器の出土状況と照し合せて、主に縄文時代中期から後期にかけて多数が遺されたと推定できる。アスファルト状物質の付着する資料は13点みられ、全て三角形有茎鏃である。

##### 両面調整石器

撥形・短冊形を呈す末端ヘラ状のものがみられる。これらは縄文時代早期および後期に特徴的にみられる寛状石器に類似している。

##### つまみ付きナイフ

縦型が大多数を占める。刃部調整はⅠ類：並行剥離により薄い縁辺を形成するもの、Ⅱ類：連続的縁辺加工によるもの、Ⅲ類：軽微な加工のものがある（図Ⅶ-8-1）。Ⅰ・Ⅱ類には加工縁辺の裏面に光沢が観察されるものが7点ある。また、つまみ部にアスファルト様物質の付着する資料が2点みられる。

##### スクレイパー

平面形態・側縁加工による細分類が可能で、両者の組み合わせによる類型の中には、数量的に多数を占める特徴的な形態が認められる。以下、「光沢」の項目を含めた観察を行い、どのようなものが主体を占めるのかを検討する。

平面形態）石器長軸を加工側縁と並行するように（両側縁加工の場合は二側縁間の中心線に）設定したとき、Ⅰ類：縦長・短冊形のもの（縦横比1.5以上）、Ⅱ類：撥形・三角形のもの、Ⅲ類：円・正方形に近いもの、Ⅳ類：不明・その他のものに区分できる（図Ⅶ-8-2）。出土数量はⅠ類89点（54%）、Ⅱ類15点（9%）、Ⅲ類17点（16%）、Ⅳ類45点（27%）でⅠ類が半数以上を占める。

刃部調整）図Ⅶ-8-3のように分類した。a類：連続的縁辺加工、b類：並行剥離加工、c類：軽微な加工、d類：粗雑な加工、e類：平坦剥離加工がある。出土数量はa類92点（55%）、b類6点（4%）、c類36点（22%）、d類17点（10%）、e類16点（10%）で、a類とc類が多数を占める。

平面形と側縁加工の組み合わせ状況を観察すると、Ⅰ-a類が53点（32%）、Ⅰ-c類が14点（8%）

と多数みられる(表Ⅶ-3)。図示したものでは、I-a類(図Ⅳ-24-23~25、63-6、71-8、73-3、74-3、V-52~54-74・75・77・78・80~88・91・92)、I-c類(図Ⅳ-101-6、V-54-95)が該当する。また、I-a類には片側縁に粗い加工を施して断面く字状に整形するものが含まれる。

刃部角度) 側縁調整部と裏面とのなす角度を5°毎に切れ目をいれた厚紙を用いて計測した。計測部位により値にばらつきがある場合は、平均的な値を採用した。a類は50°~70°の間に約9割が分布し、特に60°前後に6割がまとまる。c類は50°と60°にそれぞれ3割程度がみられる。

光沢) 光沢を有する資料は40点(側縁単位では45例)確認された。うち24例がI-a類の資料で、形態・加工との結びつきが強い。光沢の長さや幅については図Ⅶ-8-4の箇所を計測し、図Ⅶ-8-5のように認められた。長さにはばらつきがあるものの、幅は0.8~1.4cmに大多数がまとまる。また光沢は刃部の表裏面に認められるが、裏面側の発達が顕著である。

時期) I-aおよび光沢のあるスクレイパーの時期は、H-6の出土例を参考にすると、縄文時代中期前半と推測される。

### 石斧

器体残存率2/3未満の破損品が8割以上を占める。基部が残存する資料は44点あり、個体数は44~50個体程度と推測される。破損品の内、刃部破片が45点あり、使用により破損したものが多数含まれると理解できる。また、破損後も剝離・研磨により再生し、継続使用された痕跡を持つ資料が2点認められる。石材は緑色泥岩が5割、片岩が3割、泥岩が1~2割程度である。以下、石器平面・刃部・加工法について観察し、どのようなものが主体を占めるのかを検討する。

石器平面形態) 図Ⅶ-8-6のように分類した。I類:撥形、II類:短冊形(刃部と胴部、基部の幅がほぼ同じもの)、III類:紡錘形(刃部と基部の幅が狭く、胴部中央に最大幅を有す細身のもの)がある。I類7点、II類26点、III類6点で短冊形が多くみられる。

石斧の刃部) 図Ⅶ-8-7・8のように分類した。A類:両刃(40点)、B類:片刃(6点)があり、A類の両刃が多数である。刃部平面はa類:円刃(9点)、b類:緩やかな弧状(18点)、c類:直刃(13点)が認められ、b類の緩やかな弧状を呈するものが多い。各石器平面形態からみた刃部形態との関係は、I類とb類(I類中71%)、II類とb類(II類中46%)、III類とc類(III類中67%)の結びつきが強い(表Ⅶ-4)。各類型の図示したものはI-A-b類(図Ⅴ-56・57-116・119)、II-A-b類(図Ⅳ-6-4、101-7、V-57-117)、III-A-c類(図Ⅴ-57-123)がある。

以上、各類型をまとめれば、I-A類(短冊形・両刃)の資料が60%(38点中23点)と過半を占め、その中でb類(緩やかな弧状)のものが多く存在すると捉えられる。

器体加工法) 剝離によるもの41点、剝離と敲打によるもの2点、敲打によるもの6点、擦り切り技法の痕跡を有するもの3点が認められる。多数の資料が剝離整形を多用したことが推測される。また、全体を入念に研磨した資料がほとんどである。

時期) 石斧の出土は主にI-1・2区(無名の沢斜面から斜面際)、III-2区(倉知川に面した平坦部)、竪穴住居跡からみられ、遺構の時期・土器の分布から判断すると主に縄文時代中期中葉、後期前葉、後期後葉に遺されたものと推測される。

### すり石

やや扁平な円礫の緩やかに湾曲した平面にすり面が観察されるものが特徴的である。すり面は顕著で非常に滑らかである。また、Ⅶa層出土のすり石は、板状・棒状礫の直線的な縁辺にすり面が観察されるもので、早期貝殻文土器にともなう「断面三角形すり石」と同様のものと考えられる。

## 扁平打製石器

すり面形状を主とした以下の項目について観察し、機能についての検討を加える。

- ① 石器平面形態 図Ⅷ-8-9・10のように分類した。Ⅰ類：三角形・半円形を呈すもの（98点・61%）が過半を占め、Ⅱ類：長方形を呈すもの、Ⅲ類：方形を呈すものがそれぞれ2割程度認められる。また、正面中心軸で左右非対称なものが、各形態とも半数程度存在する。
- ② 整形加工状況 加工は図Ⅷ-8-11のように分類した。A類：覆い尽くすように加工するもの（58点・37%）、B類：縁辺のほぼ全周を連続的に加工するもの（24点・15%）、C類：左右端部を打ち欠くもの（33点・21%）、D類：部分的で粗雑な加工のもの（28点・18%）、E類：無加工のもの（12点・8%）がある。平面形態との関係は、A・B・D類がⅠ類と、C類がⅡ類と7割程度以上が結びつく。半円形・三角形の形状は、加工および素材選択による規格的なものと理解される。また、Ⅱ-C類は、長方形の隙を選択し、最小限の加工で製作していると観察される。
- ③ すり面正面形状 正面から観察したすり面の形状である。平坦な面に接地させて確認した（図Ⅷ-8-12）。基本的にすり面部分の観察だが、Ⅳ類については内湾部の稜部も対象に含めた。
  - 1類：直線状を呈するもの（87点・48%）、2類：僅かに外湾するもの（65点・36%）、3類：外湾するもの（7点・4%）、4類：内湾するもの（19点・11%）がある。2類は中央部が直線的で、両末端部で緩やかに湾曲するものである。1・2類が8割以上を占め、ほとんどが直線的なものと捉えられる。平坦な面に対して擦り合わされて形成されたすり面であると理解でき、すり面には力・頻度がほぼ均等に配されたと推測される。また、原材もⅠ・Ⅱ類が多数を占め、製作段階から直線的形状が求められているとみられる。
- ④ すり面下面形状 すり面下面の形状は154点・96%が直線的なものであった。素材選択、下縁辺調整の段階から直線形状を意識したことが推測される。
- ⑤ すり面分布位置 下面のなかでのすり面の分布状況を観察した。a類：中央部（17点・12%）、b類：左右端部（21点・15%）、c類：中央部から端部（16点・11%）、d類：全面（89点・62%）がある（図Ⅷ-8-13）。a類には、すり面正面形状Ⅰ・Ⅱ類が、ほぼ対応している。bの内訳は片端部5点、両端部16点である。b類で両端部にすり面が分かれるものはⅣ類が主に対応し、部分的・断続的な機能面の接地状況であっても使用されたことが理解できる。c類のすり面以外の部分は剝離稜線となっており、形成されたすり面を除去するように、部分的に調整を施して稜を再生しているのがみられる。d類の9割は、すり面正面形状Ⅰ・Ⅱ類と結びつき、直線的なすり面が下面に広がることが理解できる。また、d類にはⅢ（外湾）・Ⅳ（内湾）類のものが少数含まれ、すり面の接する面が湾曲する場合もあると推測される。
- ⑥ すり面の大きさ すり面の長幅を計測した（図Ⅲ-7・Ⅷ-8-14）。長さは断続的なものでも、すり面の左右末端部間の距離を計測した。幅は最大幅を採用した。長さは2~14cmの間にほぼ万遍なく分布し、数量的なピークは8~12cmの間に70%が認められる。幅は0.3~3.5cmの間に分布し、0.3~2cmの間に万遍なくみられる。数量的ピークは0.7~1.4cmの間に70%近くが認められる。2cmを超えるものは3点・2%程度である。すり面の長幅とも、広範囲に万遍なく計測値が分布することは、使用により発生した漸移的な変化を表すためと捉えられる（図Ⅷ-8-15）。
 

長さから、主に8~12cmを超える範囲に対して機能したことが推測される。幅からは、0.3~1.4cmの間で主に機能し、0.7cmを超えるものから叙々に廃棄対象となり、2cm以上ではほとんど機能しなかったことが考えられる。
- ⑦ すり面と石器軸のなす角度 計測は、方眼紙上で石器軸（図Ⅲ-7）を確定し、プラスチック製



のプロトラクターを用いておこなった。幅0.6cm以上のすり面を有する資料を対象とした。結果は、90°から前後2°の間に129点・87%がまとまり、石器軸に対しほぼ直交するようにすり面が形成されていると認められる。10°以上傾くものは2点のみで、これらはすり面端部などがねじれるように形成されている特異なものである。断面三角形のやや厚手の礫を素材としている。

石器軸に対しすり面が直交することから、石器はすり面の接する面に対し垂直方向を保ちながら機能したことが理解できる。

⑧ 石器の長さ 石器長は3.4～17.6cmの間に分布し、7～11cmの間に131点・85%がまとまる。これらは7～11cm間に万遍なく分布しており、使用による漸移的变化を示していると推測される。また、7cmを境に極端に数量が減少する。扁平打製石器に対して原材の高さは全て8.4cm以上に認められる。

石器は主に長さ7～11cmの間で機能し、7cmを下回ると機能しづらくなることが考えられる。

使用により起こる形態変化のひとつに、石器の長さ(高さ)の減少があげられ、この形態変化が機能低下の原因となったことが推測される。使い減りにより一定以下の長さとなったものが廃棄対象とされた可能性を指摘しておきたい。

⑨ まとめ 以上、扁平打製石器は、平面が主に半円形・三角形、下面が正面・側面直線状となるように製作された石器で、すり面の接する面に縦軸垂直方向を保ちながら、8～12cmを超える範囲に対して機能した石器と捉えられる。また、すり面は主に幅2cm未満で機能したものである。すり面下面が直線状であることから、すり面長軸方向に運動したと推測できる。機能時にすり面と接する面は、(ア)すり面の側面(石器正・裏面)に擦り痕跡が観察されないこと、(イ)すり面の形状から、平坦面であったと考えられる。廃棄の原因にはすり面幅の他に石器の長さ(高さ)の変化が関係したことが推測される。

#### 北海道式石冠

すり面形状を主とした以下の項目について観察し、機能について検討を加えた。

① 石器の大きさ 長さ、幅、厚さについて観察した。幅・厚さについては、ほぼ同数値であるすり面の長・幅を用いた。長さ(高さ)は3.9～14.2cmの間に分布し、8～11cmの間に78点・86%が存在する。幅は8～14.8cmの間に万遍なく分布し、11cm前後に30点・48%程度がまとまる。実際の石器の幅は2cmほどを足した13cm前後に求められるだろう。厚さは1.7～8.3cmの間に分布し、4～6.5cmの間に80点・79%が、更に5～6cmの間に46点・46%がまとまる。

長さ・幅にはやや多様性がみられるものの、長さ10cm前後、幅13cm前後、厚さ5cm前後のものが主と捉えられる。

② すり面の大きさ すり面の計測は、傾いて斜めに磨り減っているものの場合、斜距離を計測した。すり面の大きさは上記したように、長さ11cm前後、幅5～6cmほどのものが多数を占めている。

③ すり面正面形状 正面から観察した場合のすり面の形状である。平坦な面に接地させて確認した(図Ⅶ-8-12)。直線的なもの56点・51%、若干外湾するもの46点・42%で、おおむね直線的なもので大多数が占められる。

④ すり面縦断面形状 縦断面でみた、すり面の減り方である。図Ⅶ-8-16のように分類した。a類:石器軸に対し直交方向にすり面が形成されるもの(25点・21%)、b類:緩やかに傾き斜交するもの(31点・26%)、c類:強く傾き斜交するもの(61点・52%)がある。8割程度が石器軸に斜交するように、(片面に傾くように)磨り減っていることが理解できる。

a・b・c類にはそれぞれ直線的なもの、外湾するものが認められる。a類は19点・8割ほどが直線的

なものである。b類は外湾するものが19点・6割程度を占める。c類は41点・7割以上が外湾するものである。すり面の傾き(斜交の角度)が増すと、外湾曲するものが増加する状況が理解できる。

傾きの角度と外湾の状況は多様であるが、これらは使用の頻度を表すものであり、a→b→cの順序ですり面形態の変化が起こり、並行して直線的なものから外湾するものへと漸移的に変化することが推測される。また、c類にはすり面が敲打による鉢巻状加工部に食い込むものがみられ、使用の進行したものであることが観察できる。

使用方法については、すり面の接する面に対し石器軸を正・裏面倒の一方に傾けるようにして運動させたと捉えられる。また、すり面縦断面が湾曲する状況からは、ア)軸の傾けを連続的な使用のさなかに漸移的になした、イ)軸の傾けを一回の運動のなかに組み込みこれを連続させた、ウ)内湾曲した面に磨りつけた、などの行為が考えられる。

少数の磨り減りの進行したものには、稜線が発生し複数の面を形成するものがある。これらについては作業の進行により、段階的に角度を変化させたことが推測できる。

⑤ 破損状況 北海道式石冠は破損品が7割近くを占める。破損の状況を図Ⅶ-8-17のように分類し、どのような状況での破損が多いのかを検討した。

破損状況別の出土点数は、A類：左右端部破損(片側61点/両側5点・47%)、B類：中央部で半割(28点・20%)、C類：上下に破損(6点・4%)、D類：袈裟懸け状に破損(7点・5%)、E類：縦割れ(13点・9%)、F類：不明(21点・15%)で、左右端部の破損するものが半数近くみられる。また、破損後再使用されたものはすべてaの破損品を用いたものであり、これを加えれば52%に及ぶ。破損後に継続使用されたものの存在は、故意に破壊したものではなく、事故的に破損したものであることを示すだろう。

⑥ すり面の敲打痕 明らかにすり面を切って敲打痕が形成されている資料56点について、敲打痕の発生位置を観察した。位置は縦・横各方向に5分割(3区分)した範囲を設定した(図Ⅶ-8-18)。

敲打痕は横方向では1：中央部(24点・43%)と3：末端部(14点・25%)に多くみられる。縦方向では中央部(28点・56%)に多くみられ、端に向かい観察される個体数が減少する。縦・横を組み合わせた範囲では、1-1(11点・22%)、2-1(8点・16%)、1-3(12点・24%)に多くみられた。また、このほかに、散発的なものが6点みられた。

北海道式石冠は1/3以上の資料にすり面を切る敲打痕が観察され、下面は磨りと敲打の機能を有していたと理解できる。敲打はすり面の中央部、左右末端の中央を主に用いたと観察される。破損状況a・bが多くみられることは、敲打の使用が破損の原因となったことが推測される。実際の資料の中にも、折れ面と敲打痕が同位置で発生しているものが数個体みられ、このような推測を肯定的に捉えられる。

⑦ まとめ 以上、北海道式石冠は、大きさが長さ10cm前後・幅13cm前後・厚さ5cm前後、機能については、平坦面・内湾曲した面に接地し、石器軸を正・裏面の片側に傾けながら11×6cmを超える範囲を運動させて使用した石器で、敲打の機能も有したものと捉えられる。また、磨り減り、敲打が原因の破損によって次第に小型化してゆくことがあげられ、機能時の石器の大きさは上記した値よりも幾分か大きいことが推定される。

#### 台石・石皿

すり面、敲打痕の状況から次の6つに分類できる(図Ⅶ-8-19)。

I類：楕円形に凹むすり面を有するもの

II類：平滑で顕著なすり面が部分的な範囲にみられるもの。中～弱のすり面が顕著なすり面を取り囲むように広がる。

Ⅲ類：すり面が広範囲に広がり平坦なもの。

Ⅳ類：すり面が広範囲に広がり緩やかに凹むもの。

Ⅴ類：顕著な敲打痕が面的に広がるもの。

Ⅵ類：やや散発的な敲打痕のみがみられるもの。

Ⅶ類：すり痕、敲打痕が散発的にみられるもの。

縄文時代早期前半に属する(Ⅶa層出土)ものは、Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ類が各1ずつ出土している。石質は緻密でやや硬質なものが選択されている。すり痕は軽微なものである。

縄文時代前期以降、主に中期前半または後期前葉に属する(遺構・Ⅶ層上位の包含層出土)とみられるものは、Ⅰ類10点、Ⅱ類13点、Ⅲ類27点、Ⅳ類6点、Ⅴ類13点、Ⅵ類17点、Ⅶ類12点が出土している。Ⅲ類は多数出土しているが、すり面が顕著なものから軽微なものまで多様性がある。Ⅳ・Ⅵ類は面的には捉えられない軽微で散発的な痕跡のものである。以下、特徴的な類型であるⅠ・Ⅱ・Ⅴ類について使用面を中心とした観察をおこない、組み合わせられる石器など、使用の方法について検討する。

Ⅰ類(図Ⅳ-42-4・5、53-3、72-11、84-5、Ⅴ-66-186~188)

Ⅰ類は10点の出土であるが、楕円形すり面は16面認められ、この内15例を良好に計測することができた。

① 楕円形すり面の数 楕円形のすり面は1個体に対し、1か所のもの7点、2か所のもの2点、4か所のもの1点がある。2か所のは同一面に、4か所のは片面2か所が表裏にみられるものである。複数すり面がみられるものは、2つのすり面が並列する特徴がある。両者は近接しており、切り合うものは1例みられる。

② 楕円形すり面の配置 すり面は16例中15例(94%)が、素材側縁に近接する位置に設定されている。楕円形長軸の片端部が側縁に接する。すり面の接する側縁は、内湾～ほぼ直線的な形状を呈しており、折断により整形されたものも2点みられる。

直線的側縁と楕円形すり面長軸とのなす角度を計測すると(図Ⅶ-8-20)、79°~102°の間に分布し、15例中12例(80%)が90°の前後10°以内にまとまる。楕円形すり面は直線的な側縁とおおむね直交方向に形成されていると捉えられる。

③ 楕円形すり面の大きさ 楕円形すり面の長さ(長径)と幅(短径)を計測した。長さは15~20cmに分布し、17cm前後に12例(80%)がまとまる。幅は7~15cmの間に分布し、9~12cmの間に11例(79%)がまとまる。長幅のピークに分布する資料は同一のものであり、「長さ17cm前後・幅10cm前後」の規格性が認められる。すり面の深さは0.5~3.1cmの間に分布し、1.4cm前後に6点(40%)がまとまる。しかし、1cm未満にも3点、2cm以上に4点が存在しており、浅いものから深いものまでが存在する。使用により生じた深さの差であると推測される。しかし、深いものには敲打を伴い窪められた痕跡があるものも認められる。

④ すり面の線断面形状 全ての資料が直線状側縁から緩やかに傾斜し、逆側縁側でやや急に立ち上がる特徴を有する。よって、逆側縁側の立ち上がり付近が最深部となり、すり痕跡も顕著である。また、逆側縁側に若干傾斜する平坦なすり面が連続するものが12例(80%)みられる。平坦なすり面は楕円形すり面を1~5cm程度の幅で取り囲むように形成されている。

⑤ 敲打痕 敲打痕が散発的にみられるものが8例みられる。

⑥ 素材・石質 素材は全て亜角礫・亜円礫の分厚いものを使用しており、石質は多孔質なものを選択されている。

⑦ まとめ I類は分厚い礫を素材とし、素材礫の直線的な縁辺に接する、長さ17cm、幅10cm前後の楕円形の範囲に主に限定して使用されたものである。散発的な敲打痕を伴う。

I類の属する時期は、P-17・25の出土例から縄文時代中期前半と判断される。同様の特徴を有する石皿の類例は、函館市権現台遺跡(27号住居跡)、白老町虎杖浜4遺跡(5号住居跡)、余市町フグベ貝塚(FH-12・16、FP-23・40、包含層)にみられる。

I類のすり面の観察から、使用方法については、能動的加工具(すり石類)との組み合わせにより機能する受動的加工具との前提にたち、次のように推測される。

- 石器使用者は楕円形すり面の近接する直線的側縁側に位置する。
- すり石類を楕円形長軸方向に奥に押し込むような、規則的な運動をする。
- すり石類のすり面は、湾曲し大きさは長17×幅10cmより小型で、この数値に近いものである。倉知川右岸遺跡のP-17では、扁平打製石器が台石・石皿の直上に乗った状態で出土している。しかし、扁平打製石器の直線的なすり面とI類の湾曲したすり面の形状と大きさを比較する限り、両者が組み合わせられて使用されたものとは捉え難い。

II類(図IV-3-1、29-9、35-1、36-1、40-1・2、43-1、V-64-182・183)

① すり面の数・大きさ・形状 顕著なすり面は1個体に一か所である。範囲は長径8~17cm、短径7~14cmの間にみられ、12例(92%)がほぼ円形を呈する。顕著なすり面は平滑なものであるが、僅かに凹むものも1例みられる。また、顕著な円形すり面の周囲を取り囲むように、すり痕跡の中~弱なすり面が広がるものが10例(77%)みられる。

② すり面の位置 顕著なすり面の位置は、中央からやや素材側縁側にみられるものが9点(75%)を占める。

③ 敲打痕 敲打痕を伴うものは5例と半数程度である。

④ 素材・石質 素材は亜角礫・亜円礫の分厚いものが7点と半数以上を占める。亜角礫のものが多い。また、亜円礫で扁平なものも3点認められる。石質は緻密なものが選択されている。

⑤ まとめ II類は、主に分厚い礫を素材とし、素材の平面の中央部付近、10~15cmほどの円形の範囲に平滑で顕著な使用面が限定されるすり石である。

II類の属する時期は、H-8、P-7・15・18・43の出土状況から判断して、縄文中期前半である。

II類の使用法については、顕著なすり面の大きさから、すり石の主な運動範囲は10~15cm程度と捉えられる。同規模程度のすり面を有するすり石を、小刻みなストロークで運動させた可能性がある。また、II類すり面は平坦であり、直線的すり面の扁平打製石器との組み合わせも推測できる。

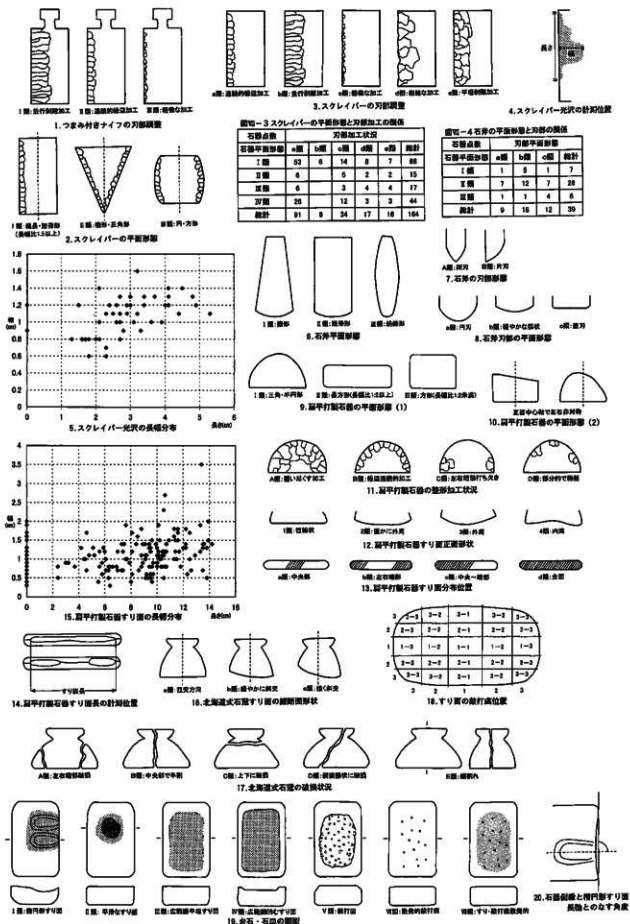
V類(図IV-73-5、101-8、V-178~180)

① 敲打面の大きさ 長径17~24cm、短径12~21cmに分布し、長径20cm前後、短径16cm前後の楕円形のもの半数以上を占める。またその他のものは、長径:短径が10:7ほどの楕円形を呈するものである。しかし、敲打面は素材平坦面のほとんどを覆うように形成されており、敲打面の大きさは、選択された素材礫の大きさに強く規制されている。

② 敲打面 敲打面は万遍なく均一に敲打痕が広がり、平坦な面を形成している。あたかもオロシガネ状の面を形成したように観察される。

③ 素材・石質 多孔質でやや厚手の円礫を素材とするものが、10点(77%)を占める。礫の大きさは長径35~25cmほどのものが選択されている。

④ まとめ V類は、大きさ30cm前後、多孔質でやや厚手の円礫を素材とし、均一な敲打を面的に施したものである。敲打面は平坦でオロシガネ状の面を形成している。



図Ⅶ-8 石器の形態分類と観察結果

V類の属する時期はP-53や配石遺構などの出土例から、縄文時代後期前葉に属する可能性があるが、後期前葉の遺構群は中期前半に遺された礫石器を使用した痕跡が認められるため、断定できない。中期前半と後期前葉の可能性はある。

I・II・V類は無名の沢に続く斜面際I-1・2に多く分布している。中期前半の遺構群が分布するII-1区にはほとんどみられない。これは、台石・石皿を使用する作業が、無名の沢の付近で行われたこと、もしくは後期前葉の集団が、中期前半の集団が遺した台石・石皿を移動し、配石や石組炉などに再利用したことが推測できる。

なお、各類型の台石・石皿とすり石類(すり石・扁平打製石器・北海道式石冠)との組み合わせ関係については他遺跡の状況などを広く検討する必要があるため、今後の課題としたい。(坂本)

#### 4 アスファルト付着遺物について

アスファルトの明瞭な付着は、遺構出土(P-21・27)のスクレイパー2点、包含層出土の石鏝13点、つまみ付きナイフ2点にみられた。石鏝の付着率は107点中の12%である。

近隣の遺跡では、森町瀧川左岸遺跡、オニウシ遺跡、鷺ノ木4遺跡、八雲町山崎4遺跡、栄浜1遺跡、浜松2遺跡、野田生4遺跡、野田生2遺跡、野田生1遺跡、コタン温泉遺跡、浜松5遺跡などでアスファルト付着遺物が確認されている。

アスファルトは地表に漏れ出した原油中の揮発成分が失われて残った不揮発性の物質であるため、油田が分布する地域で産出するものである。北海道においても渡島半島の木古内・森・八雲、日高～石狩～羽幌～天北～サハリンにかけて石油やガスが湧出する油田や油徴地が知られる。森町域では、鷺ノ木と瀧川盆地に油徴地が知られる。瀧川については、賽の河原と呼ばれるいわゆる地獄谷で、鷺ノ木については桂川の中流でそれぞれ石油の湧出が伝えられている。現地を確認した所、瀧川では油徴を確認することができなかったが、鷺ノ木では鷺ノ木4遺跡前面の桂川川岸に石油の湧出により褐色に変色した部分を確認することができた。ほかに近隣においてアスファルトが採取された可能性が高いのは八雲町山越の油徴地である。ここでは、明治6～8年に道内の地質調査を行ったライマンがアスファルト1.5トンを確認している。また近接する野田生1遺跡の石器のアスファルト付着率は高率で、秋田県や新潟県の油田に近い遺跡のものと比較できる付着率である。

倉知川右岸遺跡出土石鏝のアスファルト付着率も、道内の例から見ると高率である。点数から見ても石鏝のアスファルト付着点数が10点を超える北海道内の遺跡には以下がある。木古内町新道4遺跡32点(晩期中葉か)、札苅遺跡73点(晩期中葉)、上磯町茂別遺跡15点(縄文時代中期式器)、添山遺跡59点(晩期中葉)、七飯町聖山遺跡150点(晩期中葉)、戸井町戸井貝塚99点(後期初頭)、八雲町野田生1遺跡57点(後期中葉)、礼文町船泊遺跡20点(後期中葉か)。上記の遺跡は、木古内町釜谷、八雲町山越、天北地域という石油湧出地に近い遺跡で、いずれも身近な産地からアスファルトを得ていたものと推定できる。また北海道内のアスファルトの利用は松前町松城遺跡、函館市権現台場遺跡、恵山町日野の浜砂丘遺跡などにおいて縄文時代中期から確認できるが、後期前葉以降になるとアスファルト付着遺物が出土する遺跡が増加する。(福井)

#### 5 自然科学的分析結果について

##### (1) 放射性炭素年代測定結果

9点の試料について測定を行った。試料の内訳は、縄文時代中期中葉の遺構のもの4点(竪穴住居跡:2点、土坑:2点)、縄文時代後期前葉の遺構のもの5点(竪穴住居跡:2点、土坑:3点)であ

る。試料は、遺構の覆土や床面・坑底から採取した土壌のフローテーション作業によって得られた炭化物を用いた。

中期前半の遺構は、Ⅲ群A-3類土器（サイベ沢Ⅷ式・見晴町式）の時期に属すると判断したものである。測定の結果、4350±40yBP(H-1)、4510±40yBP(H-8)、4370±40yBP(P-17)、4460±40yBP(P-89)の値が得られた。4510~4350±40yBPの間にまとまる。サイベ沢Ⅷ式~見晴町の時期の放射性炭素年代測定値は、近隣の八雲町山崎4遺跡・山越2遺跡・山越4遺跡・野田生1遺跡・野田生2遺跡・野田生4遺跡でも測定され、4560~4340±40yBPの結果が得られている(Beta-150574・150575・150580・150582・160079~160081・163031・163032・163035・163045・163046~163050・174472・174473・174482・174485・174486)。今回の測定結果はこれらの値と矛盾しない。

後期前葉遺構は、Ⅳ群A類土器のうちトリサキ式の時期に属すると判断したものである。測定の結果、4980±40yBP(H-2)、3630±40yBP(H-10)、3650±40yBP(P-21)、3630±40yBP(P-51)、3550±40yBP(P-53)の値が得られた。H-2以外の4点については、3630~3550±40yBPの間にまとまる。トリサキ式の時期の放射性炭素年代測定は八雲町栄浜1遺跡で行われている。3600±40yBPの値が得られており、今回の結果とほぼ一致する。H-2については、炉から出土した土器から判断して後期前葉の遺構であることが確実なため、試料は何らかの混入によるものと推測される。

(柳瀬)

## (2) 土壌理化学分析

墓と判断した5基の土坑から採取した試料について、遺体が埋葬された痕跡を確認するため、リン酸およびカルシウムの含量を測定した。対象としたのは、縄文時代中期前半に属するP-89、および縄文時代後期前葉に属するP-30・37・51・53である。P-89は窪穴状を呈する土坑、後期前葉の4基はフラスコ状を呈するもので、配石遺構に関係すると推測される土坑である。

土壌中のリン酸が富化する要因には、動物遺体の存在のほか、植物由来のものや現代の施肥の影響が考えられる。植物由来のものについては、リン酸と同時に腐植含量を測定することで判定できるという(バリノサーヴェイ2003)。また、今回の調査範囲は長期間にわたり畑地として利用されていたため、現代の施肥の影響を受けている可能性は考えられた。しかし、耕作土と遺物包含層の間には平均1.5mほどにもなるKo-dが堆積していたことから、施肥の影響は小さいと予想した。

分析の結果、基本層序ではP-89層で採取した土壌について、リン酸の富化が認められた。これについては、下位に向かいリン酸が減少していることから、施肥など後代の影響に由来していると指摘されている。遺構内の土壌では、P-51・53についてリン酸の富化が認められ、遺体埋納施設として利用された可能性が指摘された。しかし一方で、P-89についてはリン酸の富化が認められず、P-30・37についてはリン酸の若干の富化が認められるが、土壌腐植の影響を強く受けている可能性があると考えられた。

P-51は堆積状況から、土坑を埋め戻す過程で、ロームを張ることで壁・床を形成し、土坑状に再形成した可能性を考えた土坑である。リン酸の富化が認められた土層は、埋め戻し過程で形成された「土坑」の坑底直下の層であり、堆積状況からも遺体の存在が想定できる。P-53は、坑口に立石を伴う土坑である。リン酸の富化が認められたのは坑底直上の層である。この土層は、坑底のうち立石のある方向に偏って分布しており、またこの直下では人為的に置かれたと推測されるKo-gが検出されている。これらのことから、堆積状況からも遺体の存在を想定できる層である。以上、P-51・53については、リン酸の富化が認められた土層は、堆積状況からも遺体の存在が想定できる土層であり、調査所

見と整合する結果が得られた。

P-30・37・89については、リン酸の富化が認められなかった原因には、リン酸の富化に必要な有機物が存在しなかったか、土性がリンの保持に適さなかった可能性が考えられる。あるいは、この3基はP-51・53とは異なり、堆積状況から遺体の存在を想定できる層の特定はできなかったため、本来遺体が存在した位置の土壌を試料として採取できなかった可能性もある。(柳瀬)

### (3) 「ヒスイ」製造物の産地分析

2点の石斧の石材について、産地同定を行った。内訳は、Ⅷ層から出土した縄文時代早期のもの1点(図V-56-114)、Ⅴa層から出土した縄文時代中期あるいは後期の可能性のあるもの1点(同115)である。114は全体に薄く緑がかかった灰白色(2.5GY8/1)を呈し、部分的に緑色が強い部分が見られる。115は青〜緑がかかった灰色(10GY8/1)を呈し、青あるいは緑色の強い部分や、やや色調の暗い部分が見られる。いずれも片状構造が認められ、肉眼では「蛇紋岩」と判断されるものに近いが、その色調から「日高ヒスイ」の可能性が想定された。

分析の結果、元素比は「日高ヒスイ」に類似するが、比重がやや軽いため、「日高ヒスイ」に伴って生成された変成岩の可能性が高いとされた。

「日高ヒスイ」と呼ばれるものは、クロムを1%含む透輝石で、蛇紋岩とロジン岩との境界に沿って生成される。その確認は、1966年、日高町千栄(ちさか)を流れる、沙流川支流千露呂(ちろろ)川のさらに支流、ペンケユクトラシナイ川でなされた。クロム透輝石は、北海道ではこの他に旭川市神居古潭においてもみられるという。「日高ヒスイ」とは異なる軟玉(ネフライト)は、北海道内では穂別町鷄川上流や三石町に、ヒスイ輝石(ジェダイト)は北海道では旭川市神居古潭に産する。

これまで藁科氏の分析によって「日高ヒスイ」製とされた遺物は、余市町大川遺跡で晩期前葉の勾玉1点、千歳市美々4遺跡で後期中葉の垂飾2点、青森市三内丸山遺跡で北盛土出土の中期の垂飾1点、青森市朝日山遺跡で晩期の勾玉2点、浦幌町平和遺跡で早期の石斧形垂飾1点が確認されている。

今回分析した以外にも、肉眼観察で白色地に緑色の部分が見られ、片状構造を持つ石材を用いた磨製石斧は複数みられる。管見では、今年度報告される鷄川町宮戸4遺跡や恵庭市柏木川13遺跡、既報告の中野A遺跡など、いずれも早期の遺跡で出土している。鷄川町宮戸4遺跡出土品については藁科氏に分析を依頼し、倉知川右岸遺跡出土品と同様の結果が出ている。柏木川13遺跡出土品については、アースサイエンス株式会社の加藤孝幸氏の肉眼鑑定により、クロム透輝石を含むロジン岩の可能性が指摘されている。また、(株)第四紀地質研究所によるエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いた元素分析により、蛇紋岩ではなく、肉眼観察では安山岩質の凝灰岩が変成した緑色岩の可能性があるとされた。滝里4遺跡出土の早期中葉の「蛇紋岩」製石斧80点については、藁科氏に分析を依頼したところ、マグネシウム、カルシウム、鉄を主とする石材であるとされ、成分組成では透輝閃石に近いものと思われる。

これまで挙げてきた磨製石斧の石材は、従来道内の遺跡報告書の多くにおいて「蛇紋岩」とされてきたものの一部である。しかし今回の結果から、「蛇紋岩」とされてきた石材の大部分は岩石学的には蛇紋岩ではなく、透輝石、ロジン岩、角閃石、透閃石、透緑閃石など、結晶片岩の範疇に入る複数種の石材が含まれている可能性がある。

従来「蛇紋岩」とされてきた石材については、今後上記の問題を踏まえた石材同定を行うことが必要であろう。それにより、石斧における石材選択の意義や、石材の原産地および流通について、さらに明らかとできるものと考えられる。(福井・柳瀬)



#### (4) 土坑覆土中の焼土検出動物遺存体について

P-20・53の覆土上部の焼土、P-51の覆土中位の焼土、P-21の覆土中位から焼骨が検出された。焼骨は、水洗選別により得られたものである。各遺構は後期前葉の土坑墓とみられ、いずれもプラスチック状を呈する。焼土は二次堆積物であり、P-21の焼骨は土器とともに散在していた。

これら試料について、金子浩昌氏に同定していただいたところ、P-21試料は鳥骨片11点、鳥類(アビ大) 基節骨遠位端1点、サケ歯骨片2点、ニシン椎体片1点、魚骨片2点、魚類鱗棘・肋骨多数、P-51試料は魚骨片5点、鳥骨片1点、P-53試料はサケ?椎骨片1点と判明した。

土坑墓とみられる土坑の坑口に焼土が見られる例は各時期に類例が知られる。今回のように動物遺体が検出される例も多いと思われるが、積極的な水洗選別により類例の増加が期待される。(福井)

#### 付編 八雲町野田生1遺跡における「環状を成す可能性のある礫群」について

八雲町野田生1遺跡は平成12、13年に発掘調査が行われ、14年度に当センターより報告書が刊行された遺跡である(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第183集)。調査結果において縄文時代後期中葉を主体とする集落跡が確認され、竪穴住居跡から完形の赤彩土器や漆塗りの櫛などが出土したことで、その良好な保存状況が目された。

調査は噴火湾に面して突きだした海岸段丘を東西に横切ったちで行われたため、後期の遺構が集中する緩斜面部分と遺構、遺物の少ない上部平坦面との差が明瞭にあらわれるという結果が見られた。

この中で「環状を成す可能性のある礫群」は遺構、遺物の少ない上部平坦面において確認された。その分布範囲は調査区J~Q-67~72グリッド周辺で、約40m四方の範囲内に分布する。調査当初においてはその分布状態にまともや強い傾向も認められず、さらに遺物包含層の堆積が薄く、最近の攪乱による移動の可能性が考えられたため、配石として明確な位置づけができなかった。結果的に報告書での掲載を控えたが、刊行後に道南地区で環状列石や配石遺構の出土例が数多く報告されるに及び、「可能性」の段階であるが二次的な資料として利用可能な面があると考え、このようなかたちでの報告となった。

この「礫群」は2種類のタイプに分類することが考えられる。1つは直径約10mの円形をかたちづくよう配置されたと考えられるもので、調査区L~N-68~71グリッド内に位置する一か所である(A)。これは後期中葉の竪穴住居跡BH23を中心にして半径5mの円を描くようにして配されたと考えられるもので、推定範囲の東半分には礫群が集中し、西半分にはほとんど残っていない。さらにもう一つは明瞭な円形を示すものではないが、直径1~5mの範囲内に3~5点ほどの礫が集中するタイプで、これはAの礫群を取り巻くように10か所以上で確認された。

いずれのタイプの「礫群」も大半が長径0.5~1mほどの安山岩の長円礫から構成され、割れたかたちを呈するものが多く見られた。また、その下部においても明瞭な掘り込みなどを確認することができなかった。具体的な時期については周辺の包含層の遺物分布状況、遺構分布などから判断して、縄文後期中葉「トリサキ式」期の可能性が考えられる。

この「礫群」の位置づけについては、縄文後期中葉の遺構、遺物が少ない平坦面部分に立地することから、後期前葉の時期に配石がなされ、周辺にいくつかの土墳墓(CP76、CP77など)が築かれた後、後期中葉以降においても集落の中の広場にあたる空間として利用されていたものと考えられる。

(藤井)



## 引用・参考文献

## 論文等

- 秋元信夫 1999 「遺構研究 環状列石」『縄文時代』第10号
- 阿部朝衛 1985 「縄文時代石器研究の視点と方法」法政考古学第10集 法政考古学会
- 阿部千春 1999 「北海道におけるアスファルト利用」『月刊考古学ジャーナル』No.452 ニュー・サイエンス社
- 乾 芳宏 2000 「八幡山ストーンサークルについて」『余市水産博物館研究報告』第3号
- 大谷敏三 1975 「北海道縄文後晩期における墓制について(1)―その編年的研究―」『先史』第9号
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻 第4号  
日本考古学会
- 大場利夫 1961 「北海道式石冠の用途と意義」考古学雑誌第46巻第4号 日本考古学会
- 大場利夫・重松和男 1977 「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡4区調査報告」『北海道考古学』第13輯
- 大森司統 2001 「北海道の石冠―田川賢蔵氏採集の石冠―」『北海道考古学』第37輯
- 荻野幸男 2003 「鷺ノ木4遺跡の配石遺構について」『南北海道考古学情報』第12号
- 加藤邦雄 1992 「墓制論(北海道を中心に)」『縄文時代』第3号
- 河田弘幸 2004 「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について」『研究紀要』第18号 秋田県埋蔵文化財センター
- 河野広道・腰 雅夫 1952 「カムイコタンストーンサークル」『考古学雑誌』第38巻5・6号
- 河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』第46巻第4号
- 藤澤好博・柳井清治・助川剛・古森康晴 1992 「西南北海道亀田半島の更新世後期―完新世火山の火山噴火史」松本  
信夫教授記念論文集
- 小島朋夏 1999 「北海道式石冠の分布とその意義」『北海道考古学』第35輯 北海道考古学会
- 小杉 康 1995 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立―「葬祭制」の構造と機能―」『駿台史学』第93号
- 2001 「巨大記念物の謎を探る」『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』北海道新聞社
- 児玉大成 1999 「小牧野遺跡における環状列石の構築時期」『青森県考古学』第11号 青森県考古学会
- 坂本真弓 2002 「深部型複式炉の現在」『市川金丸先生古希記念献呈論文集 海と考古学とロマン』市川金丸先生古希  
を祝う会
- 佐藤剛・長谷山隆博 2002 「野花南周堤墓群詳細測量調査の報告」『北海道考古学』第38輯
- 重松和男 1971 「北海道の古墳墓についてI」『北方文化研究』第5号
- 1972 「北海道の古墳墓についてII」『北方文化研究』第6号
- 瀬川拓郎 1983 「縄文後期～統縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』第19輯
- 高橋正勝 1966 「函館市見晴町遺跡の資料」『北海道青年人類科学研究会会誌』北海道青年人類科学研究会事務局
- 1971 「北海道における擦石・石冠について」北海道の文化22 北海道文化財保護協会
- 1986 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器II (株) 雄山閣出版
- 田才雅彦・青木誠・乾芳宏 1999 「西崎山ストーンサークルの調査について」『余市水産博物館研究報告』第2号
- 谷岡康孝 2003 「松前町東山遺跡発掘調査の概要について」『南北海道考古学情報』第12号
- 千代軍・落合治彦 1963 「北海道上磯町浜山遺跡調査略報」『北海道の文化 特集号』北海道文化財保護協会
- 橋本勝雄 1984 「特殊な筈状石器についての一考察(その一)―「段間型筈状石器」の提唱―」『大平代臺史意』第3  
号 大塚書店
- 成田滋彦 2000 「縄文時代住居跡の出入りロー―青森県の事例を中心として―」『研究紀要』第5号 青森県埋蔵文化財  
センター
- 新美倫子 1990 「縄文時代の北海道における海獣狩猟」東京大学文学部 考古学研究室研究紀要
- 羽賀寛二 1983 「北海道式石冠」『縄文文化の研究』第7巻 道具と技術 朝倉山閣出版
- 藤田 登 2003 「鷺ノ木5遺跡の環状列石」『南北海道考古学情報』第12号
- 2004 「環状列石と竪穴墓域」『月刊文化財』485号
- 藤本英夫 1960 「日高における縄文時代末期の墳墓」『北海道考古学誌』第1巻第1号

- 1961 「御殿山ケールン群墳墓遺跡について」『民族学研究』vol.21No.1  
 1964 「北海道三石町ホロケ台地墳墓群遺跡」『考古学雑誌』第49巻第4号  
 藤本英夫・愛下淳 1963 「新冠郡新冠町字緑丘の墳墓遺跡について」『北海道の文化 特集号』北海道文化財保護協会  
 峰山巖・久保武夫 1965 「西崎山」郷土研究 No.7 余市町郷土研究会  
 村越 潔 1976 「円筒土器に伴う特殊な石器」『東北考古学の諸問題』  
 矢吹俊男 1986 「北海道の配石遺構」『北奥古代文化』第17号  
 1988 「配石遺構」『北海道考古学』第24輯  
 柳井清治・藤澤好博・古森康晴 1992 「最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層序と分布」『地質学雑誌』第98巻 第2号  
 山本暉久 1999 「遺構研究 配石遺構」『縄文時代』第10号  
 渡部清志 1997 「東北地方北半における配石墓の成立と展開 (上)」『古代文化』第49巻第2号  
 1997 「東北地方北半における配石墓の成立と展開 (下)」『古代文化』第49巻第3号

### シンポジウム資料集

- 日本考古学協会 1997 「日本考古学協会1997年度大会研究発表要旨」  
 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会 1997 『縄文時代の集落と環状列石』  
 日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会 1999 『シンポジウム海峽と北の考古学』資料集II  
 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会 1999 『北日本における縄文時代の墓制資料集』  
 海峽土器編年研究会 2003 『第1回東北・北海道の十層内1式再検討シンポジウム資料』

### 単行本

- 石田正夫 1990 「石油・可燃性天然ガス」『日本の地質 I 北海道地方』共立出版  
 宇田川洋編 1981 『河野広遺ノート〈考古篇1〉』北海道出版企画センター  
 大川清・鈴木公雄・工藤善通 1996 『日本土器事典』朝雄山閣出版  
 葛西 勲 2002 『再葬土器棺墓の研究』『再葬土器棺墓の研究』刊行会  
 勝井義雄・佐々木龍男ほか 1982 『北海道の火山灰』北海道火山灰命名委員会  
 加藤碩一・藤田浩二編 2001 『地質学ハンドブック』朝倉書店  
 旧石器文化談話会編 2001 『増補改訂旧石器考古学辞典』学生社  
 小井田武・高木崇世芝 1982 『森町の歴史散歩』森地方史研究会  
 小林達雄・小川忠博 1989 『縄文土器大観』1 草創期 早期 前期 小学館  
 1989 『縄文土器大観』4 後期 晩期 続縄文 小学館  
 小林達雄編 2002 『縄文ランドスケープ』ジョーモネスクジャパン機構  
 駒井和愛 1959 『音江』慶友社  
 小山正忠・竹原秀雄 2002 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社  
 芹沢長介・坪井清足 1981 『縄文土器大成 2—中期』朝陽館社  
 1981 『縄文土器大成 3—後期』朝陽館社  
 佐原 真 1994 『弁の文化史』考古学選書(6) 勉東京大学出版会  
 札幌市教育委員会編 1989 『新札幌市史 第1巻通史一』  
 堆積学研究会 1998 『堆積学辞典』朝倉書店  
 高橋正樹・小林哲夫編 1998 『北海道の火山』  
 竹岡俊樹 1984 『石器研究法』言叢者  
 地学団体研究会・新版地学事典編集委員会 1996 『新版 地学事典』朝平凡社  
 町田貞・井口正男・貝塚真平・佐藤正・榎根真・小野有五編 1981 『地形学辞典』二宮書店  
 地質調査所 1957 『日本鉱産誌 BV-b 主として燃料になる鉱石—石油および可燃性天然ガス—』東京地学協会  
 戸苅賢二・土屋直 2000 『北海道の石』北海道大学図書刊行会  
 戸沢充則 1994 『縄文時代研究事典』朝東京堂出版

- 日本第四紀学会第四紀属頂集編集委員会 1996 『第四紀属頂集—日本のテフラ』 日本第四紀学会  
 日本ペドロロジー学会編 1997 『土壌調査ハンドブック改訂版』 博友社  
 原田準平・針谷青 1984 『北海道鉱物誌』 北海道立地下資源調査所  
 文化庁文化財部監修 2004 『月刊文化財』 485号  
 北海道開拓記念館 1980 『熊野喜藏氏資料目録・II』 北海道開拓記念館—拓資料目録第13集  
 M.-L. Inizan・H. Roche・J. Tixier (大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保共訳) 1998 『石器研究入門』 クバプロ  
 町田洋・新井房夫 1992 『火山灰アトラス』 東京大学出版会  
 南茅部町教育委員会 1972 『北海道南茅部の先史』  
 森町 1980 『森町史』  
 小井田武 2003 『北海道駒ヶ岳噴火史』 森町  
 山内清男 1979 『日本先史土器の縄文』 先史考古学会  
 山田秀三 1984 『北海道の地名』 北海道新聞社  
 吉川虎雄・杉村新・貝塚真平ほか 1973 『新編日本地形論』 財東京大学出版会  
 ライマン B. S. 1875 『北海道山越内石油地方略測報文』 (1936年刊『新撰 北海道史』第6巻所収)  
 1875 『鷲ノ木石油地方略測報文』 (1936年刊『新撰 北海道史』第6巻所収)  
 来受 1877 『北海道地質総論』 開拓使

## 報告書

- 青森県教育委員会 1976 『白山登道跡 妻の神遺跡調査報告書』  
 1982 『鶴窪遺跡発掘調査報告書』  
 1983 『鴨平(2)遺跡発掘調査報告書』  
 1984 『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』  
 1984 『牛ヶ沢(3)遺跡発掘調査報告書』  
 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』  
 1986 『沖附(1)遺跡発掘調査報告書』  
 1986 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』  
 1986 『大石平遺跡II発掘調査報告書』  
 1987 『大石平遺跡II発掘調査報告書』  
 青森市教育委員会 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』  
 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書II』  
 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書III』  
 1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書IV』  
 2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書V』  
 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書VI』  
 2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書VII』  
 2003 『小牧野遺跡発掘調査報告書VIII』  
 秋田県教育委員会 1997 『池内遺跡』  
 1999 『小袋岱遺跡』  
 1999 『伊勢堂岱遺跡』  
 旭川市教育委員会 1990 『神居古潭ストーンサークル遺跡調査報告書』  
 芦別市教育委員会 1987 『芦別市野花南熊の沢遺跡』  
 恵庭市教育委員会 1981 『柏木B遺跡』  
 小樽市教育委員会 1999 『忍路環状列石』  
 小樽市教育委員会 2001 『忍路環状列石II』  
 鹿角市教育委員会 1985 『大海環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)』

- 1986 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』
- 1987 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(3)』
- 1988 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(4)』
- 1989 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(5)』
- 1990 『大湯環状列石発掘調査報告書(6)』
- 1991 『大湯環状列石発掘調査報告書(7)』
- 1992 『大湯環状列石発掘調査報告書(8)』
- 1993 『大湯環状列石発掘調査報告書(9)』
- 1994 『大湯環状列石発掘調査報告書(10)』
- 1995 『大湯環状列石発掘調査報告書(11)』
- 1996 『大湯環状列石発掘調査報告書(12)』
- 1997 『大湯環状列石発掘調査報告書(13)』
- 1998 『大湯環状列石発掘調査報告書(14)』
- 1999 『大湯環状列石発掘調査報告書(15)』
- 2000 『大湯環状列石発掘調査報告書(16)』
- 2001 『大湯環状列石発掘調査報告書(17)』
- 2001 『大湯環状列石発掘調査報告書(18)』

上磯町教育委員会 1983 『浜山』

木古内町教育委員会 1974 『札河遺跡』

北上市教育委員会 1990 『樺山遺跡』

1996 『樺山遺跡』

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

1981 『社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡・千歳 4 遺跡・富岸遺跡』(北埋調報 1)

1983 『川上 B 遺跡』(北埋調報13)

1985 『湯の里遺跡群』(北埋調報18)

1987 『木古内町 建川 2・新道 4 遺跡』(北埋調報43)

1988 『函館市石川 1 遺跡』(北埋調報45)

1988 『木古内町 新道 4 遺跡』(北埋調報52)

1989 『小樽市忍路土場遺跡・忍路 5 遺跡』(北埋調報53)

1991 『余市町フゴッペ貝塚』(北埋調報72)

1994 『七飯町鳴川右岸遺跡』(北埋調報87)

1998 『茂別遺跡』(北埋調報121)

1999 『花岡 2 遺跡・花岡 3 遺跡』(北埋調報139)

1999 『千歳市キウス 4 遺跡(5)』(北埋調報144)

2001 『千歳市キウス 4 遺跡(8)』(北埋調報157)

2001 『八雲町 山崎 4 遺跡』(北埋調報162)

2001 『八雲町 山越 2 遺跡』(北埋調報163)

2001 『八雲町 野田生 5 遺跡』(北埋調報164)

2001 『八雲町 山越 3 遺跡・山越 4 遺跡』(北埋調報166)

2002 『八雲町 野田生 2 遺跡』(北埋調報167)

2002 『八雲町 野田生 4 遺跡』(北埋調報171)

2002 『八雲町 栄浜 1 遺跡』(北埋調報175)

2003 『八雲町 野田生 1 遺跡』(北埋調報183)

2003 『千歳市キウス 4 遺跡(10)』(北埋調報187)

2003 『森町濁川左岸遺跡—B 地区—』(北埋調報190)

札幌医科大学解剖学第二講座 1987 『高砂貝塚』

- 財団法人岩手県埋蔵文化財センター 1983 『叭屋敷 I a 遺跡発掘調査報告書』  
1983 『碧成田 IV 遺跡発掘調査報告書』
- 知内町教育委員会 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』
- 市立函館博物館 1971 『函館市日吉遺跡発掘報告書』
- 斜里町教育委員会 1980 『オクシリベツ川遺跡』
- 鷹巣町教育委員会 2000 『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書(3)』  
2002 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書 I』  
2002 『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書 II』
- 伊達市教育委員会 1998 『国指定史跡 北黄金貝塚発掘調査報告書—水場遺構の調査—』
- 戸井町教育委員会 1990 『浜町 A 遺跡 I』  
1991 『浜町 A 遺跡 II』  
1993 『戸井貝塚 III』  
1988 『釜谷 2 遺跡 I』  
1988 『釜谷 2 遺跡 II』
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1997 『柏原 5 遺跡』
- 七飯町教育委員会 1979 『聖山』  
1979 『峠下聖山遺跡』
- 仁木町教育委員会 1998 『モンガク B 遺跡』
- 函館市教育委員会 1979 『見晴町 B 遺跡発掘調査報告書』  
1981 『権現台場遺跡発掘調査報告書』  
1999 『函館市石倉貝塚』  
1990 『権現台場遺跡—宅地造成工事に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 八戸市教育委員会 1986 『丹後谷地遺跡』  
1988 『田面木平遺跡(1)』
- 北海道開拓記念館 1976 『札幌』
- 北海道立埋蔵文化財センター 2001 『西崎山ストーンサークル』
- 松前町教育委員会 1974 『松前町大津遺跡発掘報告書』  
1974 『松前町高野遺跡発掘報告』
- 南茅部町教育委員会 1978 『白尻 B 遺跡発掘調査概報』  
1979 『白尻 B 遺跡発掘調査報告』  
1980 『白尻小学校遺跡』  
1992 『八木 B 遺跡』  
1995 『ハマナス野遺跡 vol.XV』  
1996 『磨光 B 遺跡』
- 南茅部町埋蔵文化財調査団 2002 『垣ノ島 A 遺跡八苦調査概要報告書』
- 森町教育委員会 1977 『森町オニウシ遺跡発掘調査報告』  
1985 『御幸町』  
2003 『鷲ノ木 4 遺跡』
- 八雲町教育委員会 1983 『栄浜』  
1989 『浜松 2 遺跡』  
1991 『浜松 2 遺跡』  
1992 『コタン温泉遺跡』  
1995 『浜松 5 遺跡』  
1998 『栄浜 1 遺跡 IV』
- 蘭越町教育委員会・小樽市博物館 1973 『港大照寺遺跡調査報告書』
- 礼文町教育委員会 2000 『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書』

表1 遺構一覧(1)

遺構名	グリッド	構造部位	形状	幅 (cm)	長軸方向	時期	主な出土遺物	備考
遺構1	1・13・14	Y	コ字溝	15.67(0.30)×0.97(1.47)	N-37°-W	縄文時代前期前半	倉石・石皿 勾玉・石管	大塚遺跡群?
H-1	W・O・18	Yb	溝	12.46(2.30)×0.33(0.28)×0.50	N-5°-E	縄文時代中期前半		
H-2		Yb	溝	8.0×0.20×0.18				
H-3		Yb	溝	10.20(0.00)×0.18				
H-4		Yb	溝	10.24(0.12)×0.17				
H-5		Yb	溝	10.24(0.00)×0.13				
H-6	F・G13	Yb上層	半環形溝	13.30(2.50)×(1.30)(2.70)×0.30	N-49°-E	縄文時代前期後半		
H-7		溝	溝	0.80×0.80×0.80				
H-8		溝	溝	0.10(0.10)×0.10				
H-9		溝	溝	0.10(0.10)×0.10				
H-10		溝	溝	0.20(0.10)×0.20				
H-11		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-12		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-13		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-14		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-15		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-16		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-17		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-18		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-19		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-20		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-21		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-22		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-23		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-24		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-25		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-26		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-27		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-28		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-29		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-30		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-31		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-32		溝	溝	0.17(0.00)×0.12				
H-33	13J・14	溝	溝	13.82(2.47)×0.66(2.32)×0.18	N-72°-E	縄文時代中期後半		
H-4						瓦葺		
H-5	G19・20	Yb, W	溝	13.40(2.10)×0.36(2.00)×0.51	N-37°-E	縄文時代中期後半	第三から第八土層 多数、土玉	P-跡に位置
H-6		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-7		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-8		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-9		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-10		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-11		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-12		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-13		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-14		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-15		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-16		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-17		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-18		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-19		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-20		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-21		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-22		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-23		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-24		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-25		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-26		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-27		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-28		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-29		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-30		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-31		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-32		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-33		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-1	F・G11・12	Yb	溝	12.70(2.50)×(1.30)(2.10)×0.42	N-29°-E	縄文時代中期後半		
H-2		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-3		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-4		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-5		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-6		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-7		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-8		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-9	1・J 8	溝	溝	12.46(2.18)×(-/)-×0.10		縄文時代中期後半		
H-10		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-11	G15・16, H14	Yb	溝	12.70(2.37)×(2.48)(2.20)×0.18	N-40°-W	縄文時代前期後半		>P-40
H-12		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-13		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-14		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-15		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-16		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-17		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-18		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-19		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-20		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-21		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-22		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-23		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-24		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-25		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-26		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-27		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-28		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-29		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-30		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-31		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				
H-32		溝	溝	0.30(0.00)×0.20				



表1 遺構一覧(2)

遺構名	グランド	遺構詳細	形状	規模(m)	長軸方向	時期	主な出土遺物	新>旧	備考
H1-P13		床	円形	(0.66/0.65)×0.30	-	-	-	-	-
H1-P14		床	円形	(0.16/0.84)×0.34	-	-	-	-	-
H1-P15		床	円形	(0.11/0.60)×0.28	-	-	-	-	-
H1-P16		床	円形	(0.13/0.60)×0.69	-	-	-	-	-
H1-P17		床	円形	(0.18/0.30)×0.69	-	-	-	-	-
H1-P18		床	楕円形	(0.32/0.31)×(0.14/0.69)×0.16	-	-	-	-	-
H1-P19		床	円形	(0.17/0.62)×0.18	-	-	-	-	-
P-01	Y・X30	Yb	楕円形	(1.66/0.87)×(0.64/0.49)×0.42	N-4°E	縄文時代前期-後期	-	-	-
P-02	O20	W	楕円形	(1.14/0.96)×(0.62/0.46)×0.14	N-8°W	縄文時代前期	土器・土器片	-	-
P-03	H12	W	円形	(0.66/0.49)×(0.59/0.46)×0.39	N-50°E	縄文時代	-	-	-
P-04	M19	W	楕円形	(0.66/0.49)×(0.59/0.46)×0.39	N-5°E	縄文時代前期-後期	土器・土器片	台石・石盤・土器	-
P-05	H12	W	円形	(0.62/0.50)×(0.58/0.46)×0.39	N-8°E	縄文時代前期	-	-	-
P-06	Q 6	W	円形	(0.74/0.51)×(0.66/0.48)×0.18	-	縄文時代前期前半	-	-	-
P-07	Q 8	W	楕円形	(1.18/0.79)×(0.63/0.31)×0.19	N-42°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-08	Q 9	W	半圓形	(0.84/0.58)×(0.62/0.54)×0.28	N-11°W	縄文時代前期後半	台石・石盤	-	-
P-09	P・Q 8	V	円形	(0.92/0.38)×(0.36/0.35)×0.46	N-52°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-10	H11・12	W	円形	(0.46/0.32)×(0.39/0.29)×0.18	N-24°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-11	O60	W	円形	(1.94/0.92)×(0.92/0.86)×0.42	N-2°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-12	O・P50	W	円形または楕円形	(1.14/0.87)×(0.7-1)×0.66	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	-	-
P-13	N11・12	Yb	円形	(0.85/0.49)×(0.84/0.49)×0.31	N-39°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-14	N12	W	円形	(1.18/0.65)×(1.05/0.49)×0.41	N-79°E	縄文時代前期-後期	土器・土器片	土器・石盤	-
P-15	L16	W	楕円形	(0.78/0.58)×(0.71/0.53)×0.29	N-32°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-16	G・H12-17	W	不明	(0.41/0.36)×(1.32/0.70)×0.18	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-17	P・O15-20	V	楕円形	(2.48/1.49)×(0.76/0.50)×0.14	N-30°W	縄文時代前期後半	土器・土器片	台石・石盤	-
P-18	G・H15	W	楕円形	(0.66/0.74)×(0.74/0.49)×0.28	N-22°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-19	G14	Yb	半圓形	(2.04/1.88)×(0.32/1.49)×0.46	N-38°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-20	G・H15	W	円形	(1.56/1.58)×(1.56/1.49)×1.34	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-21	H15	Yb	楕円形	(1.56/1.58)×(1.29/1.12)×1.52	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-22	P17	W	半圓形	(1.86/1.49)×(1.45/1.10)×1.18	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-23	H17	W	半圓形	(1.17/1.50)×(0.94/0.62)×0.62	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-24	P13	W	楕円形	(1.66/0.49)×(0.79/0.49)×0.42	N-72°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-25	P13	W	楕円形	(2.48/0.75)×(0.58/0.59)×0.13	N-1°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-26	H14	Yb	円形	(0.81/0.50)×(0.74/0.50)×0.68	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-27	P17	W	半圓形	(1.74/2.06)×(1.56/1.49)×1.07	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-28	P17	W	楕円形	(0.76/0.57)×(0.62/0.42)×0.32	N-13°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-29					支那				
P-30	H13	Yb	円形	(1.28/1.22)×(1.16/1.18)×0.84	-	縄文時代前期後半	土器	-	-
P-31	K14	W	半圓形	(2.08/1.82)×(1.62/1.50)×1.32	N-39°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-32	R20	W	円形	(0.75/0.41)×(0.48/0.39)×0.16	N-59°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-33	P18	W	円形	(1.18/0.86)×(1.06/0.84)×0.19	N-25°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-34	H14	Yb	円形	(1.28/1.18)×(0.96/1.18)×0.68	-	縄文時代前期後半	土器	-	-
P-35	H・H13・14	Yb	円形	(1.14/1.39)×(0.11/1.33)×1.18	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-36	H13	Yb	円形	(1.94/1.49)×(0.93/1.45)×1.32	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-37	G・H14	W	円形	(0.96/0.92)×(0.87/0.83)×0.68	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-38	H12	W	楕円形	(1.41/0.96)×(0.52/0.77)×0.41	N-63°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-39	H13・14	W	楕円形	(1.32/0.94)×(0.64/0.39)×0.19	N-45°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-40	H12	Yb	円形	(1.94/0.91)×(1.60/0.89)×0.73	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-41	K21	W	楕円形	(1.62/0.83)×(0.51/0.43)×0.19	N-31°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-42	L32	W	楕円形	(0.84/0.54)×(0.72/0.33)×0.36	N-51°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-43	K19・20	W	円形	(1.68/1.51)×(1.68/1.34)×0.34	N-50°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-44	C20	W	円形	(1.37/1.11)×(1.28/1.00)×0.33	N-60°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-45	H13・14	W	楕円形	(1.38/0.73)×(0.64/0.58)×0.29	N-25°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-46	H14	W	楕円形	(0.84)×(0.74)×(0.68/0.64)×0.21	N-45°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-47	G・H24・25	W	半圓形	(0.46/2.18)×(0.16/2.14)×0.46	N-48°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-48	H14	W	楕円形	(1.48/0.70)×(0.48/0.31)×0.25	N-132°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-49	G・H14	W	円形	(1.24/1.26)×(1.43/1.20)×0.77	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-50	H14	W	半圓形	(0.78/0.71)×(0.78/0.84)×0.31	N-42°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-51	H12・13	Yb	楕円形	(0.84/1.38)×(0.82/1.26)×1.77	N-49°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-52	H13	W	楕円形	(0.65/0.37)×(0.56/0.35)×0.13	N-38°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-53	H13・14	W	楕円形	(0.86/0.83)×(0.88/0.79)×0.30	N-31°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-54	P13・14	W	楕円形	(1.14/0.96)×(1.06/0.82)×0.46	N-38°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-55	H14	Yb	楕円形	(0.62/0.64)×(0.72/0.37)×0.31	N-30°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-56	H14	W	楕円形	(0.65/0.41)×(0.58/0.39)×0.13	N-43°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-57	G14	W	円形	(0.81/0.46)×(0.92/0.36)×0.44	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-58	H13	W	楕円形	(1.18/0.64)×(0.87/0.83)×0.31	N-39°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-59	H16・17	W	楕円形	(0.92/0.60)×(0.86/0.79)×0.44	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-60	P16	Yb	楕円形	(1.26/0.84)×(0.76/0.52)×0.26	N-55°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-61	P16	Yb	半圓形	(0.62/0.38)×(0.54/0.52)×0.40	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-62	P16	Yb	半圓形	(0.66/0.31)×(0.62/0.23)×0.64	-	縄文時代前期後半	-	-	-
P-63	G16	W	楕円形	(0.96/0.78)×(0.86/0.74)×0.39	N-79°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-64	G16	W	楕円形	(0.78/0.72)×(0.78/0.80)×0.14	N-72°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-65					支那				
P-66	H16	W	円形	(0.78/0.69)×(0.78/0.63)×0.19	N-22°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-67	H12	W	楕円形	(1.17/1.30)×(1.02/0.94)×0.19	N-69°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-68	H13	Yb	円形	(0.92/0.34)×(0.64/0.59)×1.11	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-69	G16	H-100高	半楕円形	(1.12/0.62)×(0.87/0.82)×0.50	-	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-70	G・D19	W	円形	(0.84/0.73)×(0.56/0.72)×0.42	N-18°E	縄文時代前期後半	土器・土器片	土器・石盤	-
P-71	H12	W	楕円形	(0.72/0.74)×(0.53/0.47)×0.30	N-42°E	縄文時代前期後半	-	-	-
P-72	H・H13	W	楕円形	(0.81/0.71)×(0.58/0.39)×0.18	N-11°W	縄文時代前期後半	-	-	-
P-73					支那				
P-74	P16	Yb	円形	(0.48/0.37)×(0.49/0.38)×0.14	-	縄文時代前期後半	-	-	-

表1 遺構一覧(3)

遺構名	グッド	経緯度	形状	規模(m)	長短方向	時期	主な出土遺物	新>旧	備考
P-75	H-111	瓦	竪形跡	(0.46)/(0.56) × (0.49/0.41) × 0.39	N-30-E	縄文時代中期前半～ 後期前半	土人・F土器片、土 器破片石片		
P-76	H14	瓦	竪形跡	(0.66)/(0.66) × (0.64/0.56) × 0.29	N-30-E	縄文時代中期前半	土器		
P-77	H14	瓦	竪形跡?	(0.35/0.44) × (0.44)/(0.40) × 0.12	N-32-W	縄文時代中期前半		<P-76	
P-78	G14	瓦	不明	(0.50)/(0.51) × (-)/- × 0.11	-	縄文時代後期前半?			
P-79	H14	瓦	竪形跡	(0.49/0.61) × (0.59/0.49) × 0.18	N-29-E	縄文時代後期前半?		<SP-127	
P-81						土器			SP-221に由来
P-82						土器			SP-224に由来
P-83						土器			SP-229に由来
P-84						土器			SP-231に由来
P-85						土器			SP-231に由来
P-86						土器			SP-232に由来
P-87	C21・22・ 29	H-6竪土中	竪形跡	(1.66/1.48) × (1.32/1.00) × 0.54	N-8-E	縄文時代中期前半	土人土器4體(片・ 土器片)、榊打割 石剣、土器破片石片	>H-6	
P-88	D6	瓦	竪形跡	(0.35/0.40) × (0.64/0.47) × 0.26	N-3-W	縄文時代			
P-89	H-114・15	Yb	円形	(0.70/0.87) × (0.52/0.46) × 0.44	-	縄文時代中期前半			H-4から由来
P-90	G-H15・16	瓦	円形	(0.69/0.54) × (0.56/0.46) × 0.19	-	縄文時代後期前半 以降		<P-20	
S-01	N48	Yb	平敷形跡	(1.14/1.17) × (-)/- (1.23/0.81) × 0.90	N-8-E	縄文時代後期前半			
S-02	K-49	Yb	円形?	(0.62/0.46) × (-)/- (0.31) × (0.19) × 0.60	N-17-E	縄文時代後期前半			
S-03	H15	Yb	円形?	(0.62/0.48) × (0.34/0.37) (0.38) × 0.31 × 0.50	-	縄文時代後期前半			
S-04	F15・16	Yb	円形跡	(0.43/0.48) × (0.35/0.40)	-	縄文時代後期前半			
S-05	F16	Yb	不明	(0.54/0.56) × (0.35/-) 径不明(径×)	-	縄文時代後期前半			
S-06	G-13・14	Yb	円形?	(0.73/0.48) × (-)/- (0.39) × 0.30 × 0.12	-	縄文時代後期前半		>P-16	
S-07	I16	Yb	円形	(0.47/0.47) × (0.43/0.44) (- × 0.65)	-	縄文時代後期前半			
S-08	J12	Yb	竪形跡	(0.44/0.57) × (0.56/0.42) (0.34) × 0.31 × 0.44	N-40-W	縄文時代後期前半			
S-09	F・G14	Yb	不明	(-)/- × (-)/- (0.38) × (0.28) × 0.09	-	縄文時代後期前半		>P-76	
S-10	H12	Yb	円形	(0.75/0.43) × (-)/- (0.42) × (0.30) × 0.19	-	縄文時代後期前半			
S-11	N48	Y	コ字跡	(0.64/0.30) × (0.54/0.49)	N-7-E	縄文時代後期前半			
S-12	H-118	Yb	平敷跡	(1.32/-) × (1.24/-)	-	縄文時代後期前半			
S-13	D17	Yb	円形?	(0.82/0.48) × (0.66/0.56) (0.59/0.46) × (0.50/0.34)	-	縄文時代後期前半			
S-14	G-H16	Yb	不明	(0.38) × 0.28 × 0.12	-	縄文時代後期前半			
S-15	F15	Yb	平敷跡	(0.58/0.49) × (0.28/0.18) (0.25) × 0.21 × 0.41	N-92-E	縄文時代後期前半			F-20から発見、破は 小粒 K=0直下
F-01	F・Q20	F=V=Va	不明	1.18 × 0.34	-	江戸時代			
F-02	Q4	Yb	円形	0.47 × 0.27 × 0.47	-	縄文時代後期前半 または後期後半 または後期前半			
F-03	Q47	Yb	平敷形跡	1.38 × 0.41 × 0.49	-	縄文時代後期前半			
F-04	N49	Yb	不明	0.47 × 0.45 × 0.44	-	縄文時代後期前半			SP-7～Hと重
F-05	G16	Yb	平敷形跡	0.49 × 0.38 × 0.46	-	縄文時代後期前半?			
F-06	F15	Yb	土層	0.38 × 0.30 × 0.44	-	縄文時代後期前半?			>P-80
F-07	I15	Yb	土層	0.38 × 0.34 × 0.47	-	縄文時代後期前半?			長刀ノ上土層
F-08	L-8	瓦	不明	0.38 × 0.28 × 0.23	-	縄文時代中期前半			高麗土のローム上
F-09	C-D21	H-5竪土中	竪形跡	0.98 × 0.48 × 0.46	-	縄文時代中期前半 以降			>H-6
F-10	J-3	瓦	平敷形跡	0.74 × 0.66 × 0.49	-	縄文時代中期前半?			
F-11	I12	Yb	平敷形跡	0.49 × 0.41 × 0.47	-	縄文時代後期前半			掘削跡 タテナ層下?
K-01	Q15・16	Y	-	1.17/0.95 × 0.16	-	P-7m 土層			

遺構名	グッド	経緯度	形状	規模(m)	時期	主な出土遺物	新>旧	備考
SP-001	M17	瓦	竪形跡	(0.14/0.16) × 0.20	縄文時代中期前半?			
SP-002	M13	瓦	竪形跡	(0.26/0.12) × 0.18	縄文時代中期前半?			
SP-003	M14	瓦	竪形跡	(0.14/0.09) × 0.24	縄文時代中期前半?			
SP-004	M14	瓦	竪形跡	(0.26/0.28) × 0.28	縄文時代中期前半?			
SP-005	M13	瓦	竪形跡	(0.24/0.18) × 0.26	縄文時代中期前半?			
SP-006	M13	瓦	竪形跡	(0.14/0.14) × 0.18	縄文時代中期前半?			
SP-007	M17	瓦	竪形跡	(0.22/0.12) × 0.16	縄文時代中期前半?			P-4・SP-7～Hと重
SP-008	M16	瓦	竪形跡	(0.18/0.12) × 0.12	縄文時代後期前半			P-4・SP-7～Hと重
SP-009	M16	瓦	竪形跡	(0.26/0.14) × 0.18	縄文時代後期前半			P-4・SP-7～Hと重
SP-010	M16	瓦	竪形跡	(0.26/0.13) × 0.14	縄文時代後期前半			P-4・SP-7～Hと重
SP-011	M16	瓦	竪形跡	(0.26/0.09) × 0.20	縄文時代後期前半			P-4・SP-7～Hと重
SP-012	M13	瓦	竪形跡	(0.21/0.09) × 0.24	縄文時代後期前半			F=土層上
SP-013	G18	瓦	竪形跡	(0.22/0.12) × 0.18	縄文時代後期前半?			
SP-014	G18	瓦	竪形跡	(0.16/0.08) × 0.14	縄文時代後期前半?			
SP-015	G18	瓦	竪形跡	(0.22/0.20) × 0.20	縄文時代後期前半			
SP-016	L12	瓦	竪形跡	(0.24/0.12) × 0.25	縄文時代中期前半			
SP-017	L12	瓦	竪形跡	(0.26/0.14) × 0.18	縄文時代中期前半			
SP-018	L12	瓦	竪形跡	(0.24/0.14) × 0.18	縄文時代中期前半			
SP-019	L13	瓦	竪形跡	(0.24/0.14) × 0.18	縄文時代中期前半			
SP-020	L12	瓦	竪形跡	(0.22/0.16) × 0.22	縄文時代中期前半			
SP-021	K12	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.24	縄文時代早期前半			I土層上
SP-022	H-113	瓦	竪形跡	(0.22/0.06) × 0.13	縄文時代後期前半			
SP-023	H14	瓦	竪形跡	(0.26/0.20) × 0.20	縄文時代後期前半			
SP-024	H14	瓦	竪形跡	(0.14/0.07) × 0.12	縄文時代後期前半			
SP-025	H14	瓦	竪形跡	(0.26/0.22) × 0.24	縄文時代後期前半			
SP-026	H14	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.20	縄文時代後期前半			
SP-027	H12	瓦	竪形跡	(0.22/0.20) × 0.25	縄文時代後期前半			
SP-028	H14	瓦	竪形跡	(0.26/0.22) × 0.25	縄文時代後期前半			>P-80
SP-029	M13	瓦	竪形跡	(0.16/0.10) × 0.13	縄文時代後期前半			P=I土層
SP-030	I13	瓦	竪形跡	(0.25/0.18) × 0.13	縄文時代後期前半?			
SP-031	J13	瓦	竪形跡	(0.25/0.17) × 0.16	縄文時代後期前半?			
SP-032	G16	瓦	竪形跡	(0.46/0.30) × 0.42	縄文時代後期前半?			>P-43-44
SP-033	H4	瓦	竪形跡	(0.23/0.12) × 0.14	縄文時代後期前半?			スライ バ、遺 石
SP-034	H4	瓦	竪形跡	(0.26/0.15) × 0.22	縄文時代後期前半?			
SP-035	H4	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.29	縄文時代後期前半?			
SP-036	H4	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.42	縄文時代後期前半?			
SP-037	H4	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.42	縄文時代後期前半?			
SP-038	H4	瓦	竪形跡	(0.27/0.20) × 0.28	縄文時代後期前半?			
SP-039	H4	瓦	竪形跡	(0.17/0.09) × 0.16	縄文時代後期前半?			
SP-040	H4	瓦	竪形跡	(0.26/0.18) × 0.18	縄文時代後期前半?			
SP-041	K12	瓦	竪形跡	(0.16/0.08) × 0.14	縄文時代中期前半 または後期前半			
SP-042	K12	瓦	竪形跡	(0.24/0.16) × 0.08	縄文時代中期前半 または後期前半			
SP-043	K12	瓦	竪形跡	(0.24/0.14) × 0.06	縄文時代中期前半 または後期前半			
SP-044	K12	瓦	竪形跡	(0.28/0.18) × 0.12	縄文時代中期前半 または後期前半			
SP-045	L13	瓦	竪形跡	(0.26/0.12) × 0.14	縄文時代中期前半 または後期前半			
SP-046	F15	瓦	竪形跡	(0.28/0.08) × 0.12	縄文時代後期前半			
SP-047	F15	瓦	竪形跡	(0.14/0.08) × 0.22	縄文時代後期前半			
SP-048	F15	瓦	竪形跡	(0.14/0.08) × 0.08	縄文時代後期前半			
SP-049	F15	瓦	竪形跡	(0.19/0.08) × 0.13	縄文時代後期前半			
SP-050	F15	瓦	竪形跡	(0.18/0.08) × 0.14	縄文時代後期前半			
SP-051	F16	瓦	竪形跡	(0.16/0.06) × 0.06	縄文時代後期前半			>P-82
SP-052	F16	瓦	竪形跡	(0.28/0.14) × 0.46	縄文時代後期前半			
SP-053	F16	瓦	竪形跡	(0.16/0.07) × 0.12	縄文時代後期前半			
SP-054	F16	瓦	竪形跡	(0.21/0.08) × 0.14	縄文時代後期前半			

表1 遺構一覧(4)

遺構名	グループ	遺構位置	規模(m)	時期	主な出土品	新・旧	備考	遺構名	グループ	遺構位置	規模(m)	時期	主な出土品	新・旧	備考
SP-056	F17	Ⅱ	(9.54, 14.0) × 8.26	縄文時代前期前半				SP-144	H13	Ⅱ	(9.29, 21.1) × 9.11	縄文時代前期後半			
SP-056	F14	Ⅱ	(9.54, 14.0) × 8.26	縄文時代前期後半		P-海上遺構		SP-145	H13	Ⅱ	(9.27, 21.1) × 9.26	縄文時代前期後半			
SP-057	H2	Ⅱ	(9.23, 16.30) × 6.12	縄文時代前期後半				SP-146	H-102	Ⅱ	(9.13, 16.15) × 9.26	縄文時代前期後半			
SP-058	H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 8.29	縄文時代前期後半				SP-147	H12	Ⅱ	(9.25, 16.1) × 9.68	縄文時代前期後半			
SP-059	H2	Ⅱ	(9.19, 18.13) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-148	H13	Ⅱ	(9.44, 26.1) × 9.29	縄文時代前期後半			
SP-060	F14	Ⅱ	(9.29, 16.2) × 9.21	縄文時代前期後半		>P-新		SP-149	H12	Ⅱ	(9.26, 20.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-061	H2	Ⅱ	(9.29, 17.1) × 8.26	縄文時代前期後半				SP-150	H13	Ⅱ	(9.23, 20.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-062	H2	Ⅱ	(9.26, 16.30) × 6.48	縄文時代前期後半				SP-151	H2	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.13	縄文時代前期後半			
SP-063	H2	Ⅱ	(9.11, 18.1) × 8.15	縄文時代前期後半			遺構位置不詳	SP-152	H12	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-064	H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.17	縄文時代前期後半				SP-153	G16	Ⅱ	(9.09, 22.0) × 9.16) × 8.26	縄文時代前期後半		<P-27	
SP-065	H1+H2	Ⅱ	(9.29, 17.1) × 8.11	縄文時代前期後半				SP-154	G14	Ⅱ	(9.24, 14.1) × 9.12	縄文時代前期後半		<P-27	
SP-066	H1+H2	Ⅱ	(9.29, 17.1) × 8.11	縄文時代前期後半				SP-155	G14	Ⅱ	(9.18, 20.1) × 9.18	縄文時代前期後半			
SP-067	H2	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-156	G14	Ⅱ	(9.20, 16.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-068	H2	Ⅱ	(9.27, 16.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-157	G14	Ⅱ	(9.22, 16.1) × 9.08	縄文時代前期後半			
SP-069	H2	Ⅱ	(9.26, 16.30) × 6.25	縄文時代前期後半				SP-158	G14	Ⅱ	(9.09, 22.0) × 9.16) × 8.26	縄文時代前期後半		<P-19	
SP-070	H2	Ⅱ	(9.11, 18.1) × 8.15	縄文時代前期後半				SP-159	G14	Ⅱ	(9.12, 19.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-071	H2	Ⅱ	(9.29, 17.1) × 8.11	縄文時代前期後半				SP-160	G14	Ⅱ	(9.42, 20.1) × 9.22	縄文時代前期後半			
SP-072	H2	Ⅱ	(9.25, 17.1) × 8.11	縄文時代前期後半				SP-161	G14	Ⅱ	(9.20, 17.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-073	F-1, H2	Ⅱ	(9.11, 18.1) × 8.15	縄文時代前期後半				SP-162	G14	Ⅱ	(9.12, 16.1) × 9.08	縄文時代前期後半			
SP-074	H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.29	縄文時代前期後半		台石・石垣	遺石	SP-163	G12	Ⅱ	(9.21, 17.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-075	H1+H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-164	G12	Ⅱ	(9.21, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-076	H4	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-165	G13	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-077	G1+H2	Ⅱ	(9.42, 20.1) × 9.22	縄文時代前期後半		台石・石垣		SP-166	G13	Ⅱ	(9.22, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-078	H2	Ⅱ	(9.14, 16.1) × 9.15	縄文時代前期後半				SP-167	G13	Ⅱ	(9.22, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-079	H4	Ⅱ	(9.15, 16.1) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-168							大溝
SP-080	H4	Ⅱ	(9.17, 16.1) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-169	H4	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.26	縄文時代前期後半			P-73から変更
SP-081	H4	Ⅱ	(9.17, 16.1) × 9.11	縄文時代前期後半				SP-170	H4	Ⅱ	(9.27, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-082	H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.12	縄文時代前期後半				SP-171	G13	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-083	H4	Ⅱ	(9.15, 16.1) × 9.06	縄文時代前期後半				SP-172	G14	Ⅱ	(9.26, 14.1) × 9.14	縄文時代前期後半			SP-73から変更
SP-084	H5	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-173	G14	Ⅱ	(9.26, 14.1) × 9.10	縄文時代前期後半			
SP-085	H3	Ⅱ	(9.29, 17.1) × 8.21	縄文時代前期後半				SP-174	G15	Ⅱ	(9.27, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-086	H2	Ⅱ	(9.11, 18.1) × 8.15	縄文時代前期後半				SP-175	G15	Ⅱ	(9.12, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-087	H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.29	縄文時代前期後半				SP-176	G15	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-088	F17	Ⅱ	(9.18, 16.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-177	G15	Ⅱ	(9.18, 16.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-089	F17	Ⅱ	(9.18, 16.1) × 9.14	縄文時代前期後半				SP-178	G15	Ⅱ	(9.17, 16.1) × 9.15	縄文時代前期後半			
SP-090	F17	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-179	G16	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.26	縄文時代前期後半			
SP-091	F17	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-180	H1+H2	Ⅱ	(9.26, 16.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-092	F17	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-181							注9 壁・1に変更
SP-093	F17	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-182	H15	Ⅱ	(9.48, 14.1) × 9.26	縄文時代前期後半			
SP-094	H4	Ⅱ	(9.15, 14.1) × 9.16	縄文時代前期後半		P-341遺構		SP-183	G15	Ⅱ	(9.27, 17.1) × 9.12	縄文時代前期後半			P-201遺構
SP-095	G15	Ⅱ	(9.15, 16.1) × 9.18	縄文時代前期後半				SP-184	G14	Ⅱ	(9.16, 16.1) × 9.18	縄文時代前期後半			
SP-096	G15	Ⅱ	(9.12, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半				SP-185	G14	Ⅱ	(9.22, 17.1) × 9.18	縄文時代前期後半			<SP-6
SP-097	G15	Ⅱ	(9.12, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半				SP-186	G14	Ⅱ	(9.24, 17.1) × 9.18	縄文時代前期後半			>SP-6
SP-098	H15	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-187	H15	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半			遺構位置で修正
SP-099	H15	Ⅱ	(9.26, 20.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-188	H15	Ⅱ	(9.16, 16.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-100	H15	Ⅱ	(9.26, 20.1) × 9.14	縄文時代前期後半				SP-189	H15	Ⅱ	(9.17, 16.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-101	H15	Ⅱ	(9.18, 16.1) × 9.08	縄文時代前期後半				SP-190	G15+H6	Ⅱ	(9.27, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-102	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-191	G15	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.26	縄文時代前期後半			P-201遺構
SP-103	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-192	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半			遺構位置で修正
SP-104	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.15	縄文時代前期後半				SP-193	H15	Ⅱ	(9.24, 16.1) × 9.13	縄文時代前期後半			
SP-105	H15	Ⅱ	(9.18, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半				SP-194	H12+H3	Ⅱ	(9.21, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半			
SP-106	H14	Ⅱ	(9.20, 20.1) × 9.12	縄文時代前期後半				SP-195	H14	Ⅱ	(9.17, 17.1) × 9.09	縄文時代前期後半			
SP-107	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.15	縄文時代前期後半				SP-196	H13	Ⅱ	(9.21, 16.1) × 9.24	縄文時代前期後半			P-6・北遺構
SP-108	H1+H2	Ⅱ	(9.29, 18.1) × 9.15	縄文時代前期後半				SP-197	H12+H4	Ⅱ	(9.28, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半			P-201遺構
SP-109	H15	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.16	縄文時代前期後半				SP-198	H15	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半			
SP-110	H15	Ⅱ	(9.29, 14.1) × 9.24	縄文時代前期後半				SP-199	H13	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-111	H15	Ⅱ	(9.18, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半				SP-200	H+H3	Ⅱ	(9.18, 17.1) × 9.23	縄文時代前期後半			
SP-112	H15	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.14	縄文時代前期後半				SP-201	H12	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半			
SP-113	G15	Ⅱ	(9.29, 14.1) × 9.24	縄文時代前期後半				SP-202	H14	Ⅱ	(9.18, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半			
SP-114	G15	Ⅱ	(9.26, 16.1) × 9.26	縄文時代前期後半				SP-203	H15	Ⅱ	(9.14, 16.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-115	G15	Ⅱ	(9.16, 16.1) × 9.16	縄文時代前期後半				SP-204	H15	Ⅱ	(9.22, 16.1) × 9.24	縄文時代前期後半			
SP-116	G15	Ⅱ	(9.18, 16.1) × 9.12	縄文時代前期後半				SP-205	H15	Ⅱ	(9.27, 17.1) × 9.23	縄文時代前期後半			
SP-117	F16	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-206	G18	Ⅱ	(9.17, 17.1) × 9.24	縄文時代前期後半			
SP-118	F16	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-207	H17	Ⅱ	(9.28, 18.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-119	G15	Ⅱ	(9.14, 14.1) × 9.14	縄文時代前期後半				SP-208	E17	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.26	縄文時代前期後半			
SP-120	H15	Ⅱ	(9.26, 16.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-209	E17	Ⅱ	(9.19, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半			
SP-121	H15	Ⅱ	(9.24, 18.1) × 9.18	縄文時代前期後半				SP-210	G16	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-122	F15	Ⅱ	(9.18, 18.1) × 9.16	縄文時代前期後半				SP-211	G15	Ⅱ	(9.25, 18.1) × 9.24	縄文時代前期後半			
SP-123	F16	Ⅱ	(9.22, 14.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-212	G15	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-124	F16	Ⅱ	(9.22, 14.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-213	H15	Ⅱ	(9.16, 16.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-125	F15	Ⅱ	(9.22, 14.1) × 9.04	縄文時代前期後半				SP-214	H14	Ⅱ	(9.16, 17.1) × 9.07	縄文時代前期後半			
SP-126	F15	Ⅱ	(9.14, 16.1) × 9.06	縄文時代前期後半				SP-215	H14	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-127	H14	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-216	H14	Ⅱ	(9.16, 16.1) × 9.28	縄文時代前期後半			
SP-128	H14	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-217	H14	Ⅱ	(9.20, 18.1) × 9.14	縄文時代前期後半			
SP-129	H14	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-218	H14	Ⅱ	(9.18, 14.1) × 9.18	縄文時代前期後半			
SP-130	H14	Ⅱ	(9.22, 18.1) × 9.21	縄文時代前期後半				SP-219	H12	Ⅱ	(9.17, 17.1) × 9.19	縄文時代前期後半			
SP-131	H14	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-220	H12	Ⅱ	(9.19, 16.1) × 9.12	縄文時代前期後半			
SP-132	H14	Ⅱ	(9.27, 18.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-221	H+H7	Ⅱ	(9.46, 30.1) × 9.28	縄文時代前期後半			台石・石垣
SP-133	H14	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-222	H12	Ⅱ	(9.24, 22.1) × 9.18	縄文時代前期後半			
SP-134	H14	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-223	H14	Ⅱ	(9.24, 18.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-135	H14	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-224	F14	Ⅱ	(9.25, 17.1) × 9.17	縄文時代前期後半			
SP-136	H14	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-225	H16+H7	Ⅱ	(9.24, 18.1) × 9.16	縄文時代前期後半			
SP-137	H14	Ⅱ	(9.26, 17.1) × 9.13	縄文時代前期後半				SP-226	G+H17	Ⅱ	(9.18, 18.1) × 9.15	縄文時代前期後半			
SP-138	H14	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半				SP-227	E2	Ⅱ	(9.49, 22.1) × 9.16	縄文時代前期後半			P-6から変更
SP-139	H15	Ⅱ	(9.26, 18.1) × 9.08	縄文時代前期後半				SP-228	E2	Ⅱ	(9.44, 20.1) × 9.18	縄文時代前期後半			P-42から変更
SP-140	H15	Ⅱ	(9.												





















表6 遺構出土掲載復元土器一覧(1)

図版	図号	器名	形状	高さ	口径	底径	容積	特徴	出土	口部	土質	口部	底径	容積	
P-5	36	1	P-1	1	10	10	5	P.A-1	土器製作中の土器。口縁文見出し部は、器底面も大半は磨き出し、底文は不明。内面も磨き。内面7cmは磨きで、磨きの裏の位置	E.L.陶文		-	-	-	
				2	10	10	5								
P-10	38	1	P-2	1	10	10	5	P.A.		磨	丸形	伊勢多+	15.5	26.8	9.5
				2	10	10	5								
P-19	38	1	P-2	3	10	10	5	P.A.	内面に磨き出し付。内面7cm	磨	丸形	伊勢、磨	8.5	15.0	-
				4	10	10	5								
P-14	38	1	P-3	1	10	10	5	P.A-2	内・外周とも磨き出しあり	E.L.磨行	丸形	伊勢多+不透明付	12.0	25.8	6.4
				2	10	10	5								
P-14	38	2	P-3	1	10	10	5	P.A-2	ソコ付付	E.L.磨行	-	磨き少+磨	10.0	21.0	7.2
				2	10	10	5								
P-15	38	3	P-5	1	10	10	5	P.A-2	内面に磨き。内面7cm	E.L.磨行	丸形	伊勢多+	11.0	24.0	-
				2	10	10	5								
P-15	38	4	P-5	1	10	10	5	P.A-2	内面に磨き。内面7cm	E.L.磨行	丸形	伊勢多+	11.0	24.0	-
				2	10	10	5								
P-17	38	5	P-5	1	10	10	5	P.A-2	2層+口縁の先化。磨き少+。口縁部から先化付付。	E.L.磨行	丸形	伊勢多+	12.5	26.3	7.0
				2	10	10	5								
P-17	38	6	P-5	1	10	10	5	P.A-2	磨。1.5cm。口縁部から先化付付。	磨	丸形	伊勢多+	11.0	23.2	7.6
				2	10	10	5								
P-22	40	2	P-4	1	10	10	5	P.A-2	内面に磨き。内面7cm	E.L.磨行	丸形	伊勢多+	11.0	23.8	8.6
				2	10	10	5								
P-22	40	4	P-4	1	10	10	5	P.A-2	内面に磨き。内面7cm	E.L.磨行	-	磨き少+磨	11.0	24.0	11.0
				2	10	10	5								
P-23	40	5	P-6	1	10	10	5	P.A-2	丸形陶文	丸形陶文	丸形	伊勢	12.5	27.5	-
				2	10	10	5								
P-11	41	1	P-9	1	10	10	5	P.A-1	磨文のみ	磨文	丸形	伊勢多+	12.0	24.2	13.3
				2	10	10	5								
P-34	41	1	P-1	1	10	10	5	P.A.	小磨	磨	-	磨き少+磨	-	10.0	21.0
				2	10	10	5								
P-33	41	1	P-2	1	10	10	5	P.A-2	内・外周とも磨き出し付	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-33	41	1	P-2	2	10	10	5	P.A.	内・外周とも磨き出し付	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-44	41	1	P-19	1	10	10	5	P.A.	小磨	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-45	41	1	P-19	1	10	10	5	P.A.	内・外周とも磨き出し付	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-45	41	1	P-19	2	10	10	5	P.A.	内・外周とも磨き出し付	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-46	41	1	P-20	1	10	10	5	P.A.	磨	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9
P-46	41	1	P-20	2	10	10	5	P.A.	磨	磨	丸形	磨き少+磨	11.5	24.8	7.9

※計測値( ) 付き数字は、口径・底径では推定値、器高では現存値。



表6 遺構出土掘載復原土器一覽(3)

発掘	図号	番号	遺構名	層	器-75+7	器種	口径	底径	全高	器形	用途	電文	口部	胎土	口径	底径	器高			
F-09	44	2	P-25	18B	3A	器類	1号陶器類、8号宇治焼付、赤地に丹色7号陶器文、3号紫雲紋	黒	内面	器類	(18.8)	46.1	14.3	K01	Fa	14				
														K02	Fa	20				
														K03	Fa	20				
														K04	Fa	1				
														K05	Fa	2				
														K06	Fa	2				
														K07	Fa	2				
														K08	Fa	2				
														K09	Fa	2				
														K10	Fa	2				
														K11	Fa	1				
														K12	Fa	10				
														K13	Fa	14				
														K14	Fa	5				
														K15	Fa	5				
														K16	Fa	1				
														K17	Fa	1				
														K18	Fa	1				
														K19	Fa	1				
														K20	Fa	1				
														K21	Fa	1				
														K22	Fa	1				
														K23	Fa	1				
														K24	Fa	1				
														K25	Fa	1				
														K26	Fa	1				
														K27	Fa	1				
														K28	Fa	1				
														K29	Fa	1				
														K30	Fa	1				
														K31	Fa	1				
														K32	Fa	1				
K33	Fa	1																		
K34	Fa	1																		
K35	Fa	1																		
K36	Fa	1																		
K37	Fa	1																		
K38	Fa	1																		
K39	Fa	1																		
K40	Fa	1																		
K41	Fa	1																		
K42	Fa	1																		
K43	Fa	1																		
K44	Fa	1																		
K45	Fa	1																		
K46	Fa	1																		
K47	Fa	1																		
K48	Fa	1																		
K49	Fa	1																		
K50	Fa	1																		
K51	Fa	1																		
K52	Fa	1																		
K53	Fa	1																		
K54	Fa	1																		
K55	Fa	1																		
K56	Fa	1																		
K57	Fa	1																		
K58	Fa	1																		
K59	Fa	1																		
K60	Fa	1																		
K61	Fa	1																		
K62	Fa	1																		
K63	Fa	1																		
K64	Fa	1																		
K65	Fa	1																		
K66	Fa	1																		
K67	Fa	1																		
K68	Fa	1																		
K69	Fa	1																		
K70	Fa	1																		
K71	Fa	1																		
K72	Fa	1																		
K73	Fa	1																		
K74	Fa	1																		
K75	Fa	1																		
K76	Fa	1																		
K77	Fa	1																		
K78	Fa	1																		
K79	Fa	1																		
K80	Fa	1																		
K81	Fa	1																		
K82	Fa	1																		
K83	Fa	1																		
K84	Fa	1																		
K85	Fa	1																		
K86	Fa	1																		
K87	Fa	1																		
K88	Fa	1																		
K89	Fa	1																		
K90	Fa	1																		
K91	Fa	1																		
K92	Fa	1																		
K93	Fa	1																		
K94	Fa	1																		
K95	Fa	1																		
K96	Fa	1																		
K97	Fa	1																		
K98	Fa	1																		
K99	Fa	1																		
K100	Fa	1																		
K101	Fa	1																		
K102	Fa	1																		
K103	Fa	1																		
K104	Fa	1																		
K105	Fa	1																		
K106	Fa	1																		
K107	Fa	1																		
K108	Fa	1																		
K109	Fa	1																		
K110	Fa	1																		
K111	Fa	1																		
K112	Fa	1																		
K113	Fa	1																		
K114	Fa	1																		
K115	Fa	1																		
K116	Fa	1																		
K117	Fa	1																		
K118	Fa	1																		
K119	Fa	1																		
K120	Fa	1																		
K121	Fa	1																		
K122	Fa	1																		
K123	Fa	1																		
K124	Fa	1																		
K125	Fa	1																		
K126	Fa	1																		
K127	Fa	1																		
K128	Fa	1																		
K129	Fa	1																		
K130	Fa	1																		
K131	Fa	1																		
K132	Fa	1																		
K133	Fa	1																		
K134	Fa	1																		
K135	Fa	1																		
K136	Fa	1																		
K137	Fa	1																		
K138	Fa	1																		
K139	Fa	1																		
K140	Fa	1																		
K141	Fa	1																		
K142	Fa	1																		
K143	Fa	1																		
K144	Fa	1																		
K145	Fa	1																		
K146	Fa	1																		
K147	Fa	1																		
K148	Fa	1																		
K149	Fa	1																		
K150	Fa	1																		
K151	Fa	1																		
K152	Fa	1																		
K153	Fa	1																		
K154	Fa	1																		
K155	Fa	1																		
K156	Fa	1																		
K157	Fa	1																		
K158	Fa	1																		
K159	Fa	1																		
K160	Fa	1																		
K161	Fa	1																		
K162	Fa	1																		
K163	Fa	1																		
K164	Fa	1																		
K165	Fa	1																		
K166	Fa	1																		
K167	Fa	1																		
K168	Fa	1																		
K169	Fa	1																		
K170	Fa	1																		
K171	Fa	1																		
K172	Fa	1																		
K173	Fa	1																		
K174	Fa	1																		
K175	Fa	1																		
K176	Fa	1																		
K177	Fa	1																		
K178	Fa	1																		
K179	Fa	1																		
K180	Fa	1																		
K181	Fa	1																		
K182	Fa	1																		
K183	Fa	1																		
K184	Fa	1																		
K185	Fa	1																		
K186	Fa	1																		
K187	Fa	1																		
K188	Fa	1																		
K189	Fa	1																		
K190	Fa	1																		
K191	Fa	1																		
K192	Fa	1																		
K193	Fa	1																		
K194	Fa	1																		
K195	Fa	1																		
K196	Fa	1																		
K197	Fa	1																		
K198	Fa	1																		
K199	Fa	1																		
K200	Fa	1																		
K201	Fa	1																		
K202	Fa	1																		
K203	Fa	1																		
K204	Fa	1																		
K205	Fa	1																		
K206	Fa	1																		
K207	Fa	1																		
K208	Fa	1																		
K209	Fa	1																		
K210	Fa	1																		
K211	Fa	1																		
K212	Fa	1																		
K213	Fa	1																		
K214	Fa	1																		
K215	Fa	1																		
K216	Fa	1																		
K217	Fa	1																		
K218	Fa	1																		
K219	Fa	1																		
K220	Fa	1																		
K221	Fa	1																		
K222	Fa	1																		
K223	Fa	1																		
K224	Fa	1																		
K225	Fa	1																		
K226	Fa	1																		
K227	Fa	1																		
K228	Fa	1																		
K229	Fa	1																		
K230	Fa	1																		
K231	Fa	1																		
K232	Fa	1																		
K233	Fa	1																		
K234	Fa	1																		
K235	Fa	1																		
K236	Fa	1																		
K237	Fa	1																		
K238	Fa	1																		
K239	Fa	1																		
K240	Fa	1																		

表7 遺構出土掲載破片土器・土製品一覧(1)

探検	年度	発見	遺構名	位置・組合	器種・グループ	器位	数量	種点数	分類	特徴	地文	口部	出土					
N-6	69	1	H-1		H-1	甌土2	1	1	ⅡA-3	甌土のみ	L.R. 斜行	内形	扇形唇・小器少					
N-10	69	3	H-2	Ⅱ	H-2	甌土	4	5	ⅡA	3本組炊飯	-	丸~内形						
					F15	Va	1	1										
					F16	Va	1	1										
					F17	Va	27	30										
N-10	69	4	H-2	Ⅱ	F18	Va	1	7	ⅡA	Ⅱ、3本組炊飯	-	-	砂粒少					
					G13	Vb	2											
					G17	Va	2											
					I10	Vb	1											
					I17	Vb	1											
					M15	Vb	1											
					H-2	甌土	1							1				
F15	Vb	5	5															
N-10	69	5	H-2	Ⅱ	H-2	甌土	1	1	ⅡA	Ⅱ、単色顔付付	Ⅱ	-	器入物少					
N-10	69	6	H-2	Ⅱ	F15	Vb	3	4	ⅡA	4区画炊飯	扇形L斜行	内形						
					F16	Va	1											
					F18	Va	1											
					H18	Va	1											
N-10	69	7	H-2	a	H15	Va	1	5	ⅡA	蛇行沈積	無層V斜行	丸形						
					K15	Vb	1											
					H-2	甌土	1											
					G18	Vb	1											
					K15	Vb	1											
N-10	69	8	H-2	Ⅱ	H18	Va	1	5	ⅡA	16の字貼付	-	○字内形	砂粒・扇形唇					
					M-2	甌土	4											
					F15	Vb	1											
					G17	Vb	2											
N-11	69	9	H-2	a	H15	Va	1	6	ⅡA	野原陶文(原層L1、SP-154と同一層位) (器V-101-3)	Ⅱ	内形						
					H18	Vb	2											
					F18	Va	1											
					L14	Vb	1											
					N15	Va	1											
					b	H-2	甌土							1	2			
						H15	Vb							1	1			
						P-20	甌土							1	1			
					Ⅱ	F14	Vb							1	12			
						H13	Vb							1				
						H18	Va							1				
						I12	Vb							1				
						J9	Va							1				
						J9	Vb							1				
						J20	Vb							1				
K9	Vb	1																
L14	Va	1																
H-2	甌土	1	2															
G18	Vb	1	2															
H-2	甌土	3	3															
N-11	69	11	H-2	Ⅱ	H-2	甌土	2	2	ⅡA	口縁部	-	内形						
					H-2	甌土	1	1										
					G13	Va	1	12										
					G13	Vb	1											
					G14	Va	4											
					G14	Vb	2											
					G14	-	2											
					G11	Vb	1							ⅡA	平縁に3単位の子貼付、P-21・24と同一層位(N-69-6)	L.R. 横定気取	内形	砂粒少
					G11	Va	2											
					G12	Va	1											
					G12	Vb	1											
					G13	Vb	8											
					G14	Va	1											
					G14	Vb	2											
					H12	Vb	1											
H12	Va	1																
J9	Va	1																
I10	Vb	1																
I14	Vb	1																
I15	Va	1																
J20	Vb	1																
K11	Va	1																
L17	Va	1																
N-11	69	13	H-2	Ⅱ	H-2	甌土	1	24	ⅡA	7の字貼付	L.R. 扇形斜行	内形						
					SP-154	甌土	1											
					G15	Va	2											
					G16	Vb	6											
					I17	Va	2											
					H-2	甌土	2											
					H-2	甌土	1							80				
					H-2(H-F-3)	甌土	1											
					F15	Vb	15											
					G15	Va	1											
G16	Vb	25																
K9	Va	1																
K10	Va	1																
M15	Vb	1																
N-13	70	1	H-3		H-3	甌土	1	1	ⅡA-3		扇形口縁	丸~内形、筒の断面						
					SP-154	甌土	1	1										
N-17	70	7	H-5		H-5	甌土	1	1	ⅡA-3	丸形器	-	丸~内形、筒の断面						
N-17	70	8	H-5		H-5	甌土	1	1	ⅡA-3	沈積	L.R. 斜行	丸~内形、筒の断面・扇形口						
					H-5	甌土	1	1										
N-17	70	9	H-5		I20	Vb	4	13										
					O11	Va	1											
					O11	Vb	24											
					O21	Vb	1											



表7 遺構出土掲載破片土器・土製品一覧(2)

調査年	調査区	遺構番号	遺構・層位	器種・タイプ	数量	数量	数量	分類	特徴	出土	口部	胎土
R-17	70	9	H-5	G19	Y-A	1	4	H-A-3	陶製瓦葺きのみ残片のある貼付	H.L. 剥行	丸底、口部直下外周に黒の施見み	胎土・平腹・胎筋の存在
				G22	Y-B	1						
				G23	Y-B	1						
				G20	Y-B	1						
				G22	Y-B	1						
				G22	Y-B	1						
R-18	70	10	H-5	H-5	黒土5	2	H-A-3	陶製器にのみ貼付	L.L. 剥行、部分的に剥離方向を異なる、羽状	丸形、胎筋残		
				G20	Y-B	1						
				G25	Y-B	1						
R-19	70	11	H-5	H-5	黒土5	31	H-A-3	陶文のみ	縦長型貼付状	片割する羽形、黒の施の施見み	平手内腹する羽状	
				H-5	黒土5	42						
R-19	70	12	H-5	H-5	黒土5	1	H-A-3	口部直下貼付と口部周りに沈着	H.L. 剥行?			
R-19	70	17	H-5	H-5	黒土5	1	土器	長方形、全面剥離付、石1.5×1.5×1.5cm				
R-22	70	1	H-6	H-6	黒土	2	H-A-2	平腹竹筒付引	-		片割する羽状、黒の施見	
R-22	70	2	H-6	H-6	黒土2	4	H-A-2	陶文のみ	H.L. 剥行、部分的に剥離	丸形、胎筋残	片割する羽状、胎筋の施見	
				H-6	黒土2	7						
				H-6	黒土3	3						
				G25	黒土2	2						
				H-6	黒土1	3						
				H-6	黒土2	1						
				H-6	黒土3	5						
				H-6	黒土	1						
				H-6	黒土2	2						
				H-6	黒土	1						
				H-6	黒土	1						
				H-6	黒土	1						
R-23	70	6	H-6	a	黒土2	1	H-A-3	陶文の施土器による文様	-		胎土黒が貼付された。丸形、胎筋の施見	胎土少
				b	H-6	1						
				H-6	黒土	2						
				H-6	黒土	1						
R-23	71	7	H-6	H-6	黒土	1	H-A-3	陶製器に貼付・剥離	L.L. 剥行?	-		
				H-6	黒土2	1						
				H-6	黒土	6						
				H-6	黒土5	7						
R-23	71	8	H-6	H-6	黒土5	1	H-A-3	陶製器に貼付	H.L. 剥行	丸形		
				H-6	黒土1	1						
R-23	71	9	H-6	H-6	黒土	1	H-A-3	陶製器貼付	-	-		
				H-6	黒土1	1						
R-23	71	10	H-6	H-6	黒土2	11	H-A-3	陶文のみ	縦長型貼付状	丸形、胎筋残	片割する羽状、胎筋の施土器による文様	
				H-6	黒土	1						
				H-6	黒土2	1						
				H-6	黒土	5						
				H-6	黒土2	5						
				H-6	黒土	1						
R-23	71	11	H-6	H-6	黒土	7	H-A-3	陶文の少	H.L. 剥行	丸形、胎筋の施見	胎土少	胎土少
				H-6	黒土1	1						
R-24	71	12	H-6	H-6	黒土	2	H-A-3	陶文のみ	H.L. 剥行?			
R-24	70	13	H-6	H-6	黒土	1	H-A-3	見取形式	H.L. 剥行	丸形	胎土少	
				H-6	黒土	1						
R-24	70	14	H-6	H-6	黒土	2	H-A-3?	流行段階に平腹竹筒付引	-		胎土少	
R-24	70	15	H-6	H-6	黒土	2	H-A-3	丸形、胎土による文様	H.L. 剥行?		内腹する羽状	
R-24	71	16	H-6	H-6	黒土	2	H-A-3	小形	丸	丸形		
				H-6	黒土	11						
R-24	71	17	H-6	H-6	黒土	1	H-A-3	小形	丸	-	-	
				H-6	黒土	1						
R-26	71	20	H-6	H-6	黒土3	1	土器	結核形、縦長型 2.3×0.8×0.4cm				
R-26	71	40	H-6	H-6	黒土	1	陶製器貼付	縦長型 2.3×0.4×1.2cm				
R-26	71	41	H-6	H-6	黒土	1	陶製器貼付	縦長型 2.3×0.4×1.2cm				
R-29	71	1	H-8	H-8	黒土	7	H-A-2	丸形、胎筋の施見	胎土の施見	丸形のある羽状	胎土の施見	
R-29	71	2	H-8	H-8	黒土	1	H-A-3	丸形、胎筋の施見	胎土の施見	丸形のある羽状	胎土の施見	
R-30	71	1	H-7	H-7	黒土	1	H-A-2	丸形、胎筋の施見	胎土の施見	丸形のある羽状	胎土の施見	
R-30	71	2	H-7	H-7	黒土	2	H-A-2	丸形、胎筋の施見	胎土の施見	丸形のある羽状	胎土の施見	
R-30	71	2	H-7	G16	Y-B	2	H-A-3	陶文のみ	H.L. 剥行	丸形、胎筋の施見		
R-30	71	2	H-7	K9	Y-B	2	H-A-3	陶文のみ	H.L. 剥行	丸形、胎筋の施見		
R-30	71	2	H-7	H-7	黒土	1	H-A-2	陶文のみ	胎土	丸形		
R-31	71	2	H-9	H-9	黒土	1	H-A-3	丸い底盤	L.L. 剥行?		片割する羽状、胎筋の施見	
R-33	71	1	H-10	H-10	黒土	2	H-A	2・3本底沈着、口部に5字状沈着	丸	丸形		
				H-10	黒土	6						
				H-10	黒土	1						
				H-10	黒土	1						
R-33	71	2	H-10	F13	Y-B	1	H-A	沈着、P-9と同一形状(図R-77-1)	-	-	胎土の施見	
				F13	Y-B	1						
R-36	72	1	P-16	P-16	黒土	1	H-A	丸形	H.L. 剥行?	-	-	
				P-16	黒土	3						
				G16	Y-B	5						
				P-16	黒土	31						
				G16	Y-B	5						
				G16	Y-B	2						
R-39	72	1	P-16	P-16	黒土	3	H-A	丸形	丸形	胎土少		
				G16	Y-B	5						
				P-16	黒土	31						
				G16	Y-B	2						
				G16	Y-B	2						
				G16	Y-B	2						
R-39	72	2	P-16	P-16	黒土	5	H-A	80字7貼付	丸	丸形	胎土少	
				G16	Y-B	7						
R-39	72	3	P-16	P-16	黒土	1	H-A	丸形口部に丸形貼付・胎土貼付	-	-	-	
				P-16	黒土	3						
R-39	72	4	P-16	P-16	黒土	3	H-A	小形の丸、胎筋残(丸筋)	-	-	-	
				P-16	黒土	3						
R-39	72	5	P-16	H1	Y-B	1	H-A	胎土沈着沈着、丸筋に胎筋残	-	-	丸形	
				O10	Y-B	1						
				H1	Y-B	1						



表7 遺構出土埋藏破片土器・土製品一覧(4)

採掘	遺構	発掘	遺構名	状況・層合	調査P+F	部位	点数	検出数	分類	特徴	地文	口部	胎土
F-54	74	2	P-26			J14	Yb	7					
						J15	Yb	2					
						K13	Yb	1					
						K16	Yb	1					
F-54	74	3	P-26			L14	Ya	1	F/A	小形、胴部縁で方形。P-26・29(遺F-54-3、42-2)と同一体。	無	-	
						P-26	胎土	1					
						P-26	胎土	1					
						P-26	胎土	1					
F-54	74	1	P-30			P-30	胎土	1	F/A	折り返し口縁	無	-	
						P-30	胎土	1					
F-54	74	2	P-30			P-30	胎土	1	F/A	折り返し口縁	無	-	
						P-30	胎土	1					
F-55	74	1	P-32			P-32	胎土	3	F/A-2	側面部	L&R斜行	丸形、胴の縁・胎土	丸形、胴の縁・胎土
						P-32	胎土	3					
F-57	74	3	P-34			P-34	胎土	1	F/A	2本線状縁、胎子欠?	無	-	胎土
						P-34	胎土	1					
F-57	74	4	P-34			P-34	Yb	1	F/A	口縁部、P-31と同一体(遺F-101-4)	-	-	胎土
						P-35	胎土	1					
						P-35	胎土	1					
						P-35	胎土	1					
F-59	74	1	P-35			P-35	胎土	1	F/A-2	胎文の胎土胎の残存、片割に胎文物	-	-	外縁する切込状、胎土胎痕ある胎文物
						P-35	胎土	1					
						P-35	胎土	1					
F-59	74	3	P-35			P-35	胎土	1	F/A	胎文物縁。遺F-38-181と同一体	無	-	丹波する丸形、胎の胎土
						P-35	胎土	1					
F-59	74	4	P-35			P-35	胎土	1	F/A	小形、胴部縁。P-26・29(遺F-54-3、42-2)と同一体	無	-	胎土丸形
						P-35	胎土	1					
						P-35	胎土	1					
F-59	74	5	P-35			P-35	胎土	1	F/A	胎子母状状縁	-	-	丸形
						P-35	胎土	1					
F-59	74	7	P-35			P-35	胎土	2	F/A	折り返し口縁	-	-	丸形
						P-35	胎土	2					
F-61	75	1	P-36			P-36	胎土下	2	F/A	3本線帯状状縁。P-40(遺F-63-2)と同一体?	無	-	-
						P-36	胎土下	2					
F-61	75	2	P-36			P-36	胎土下	1	F/A	口縁部	-	-	丸形
						P-36	胎土下	1					
F-61	75	1	P-39			P-39	胎土	3	F/A	小形、胴部縁。P-26・29(遺F-54-3、42-2)と同一体	無	-	丸形、胎土胎に胎の胎土
						P-39	胎土	3					
F-63	75	1	P-40			P-40	胎土	2	F/A	胎文、下縁の胎文物状縁	無	-	-
						P-40	胎土	4					
						J10	Yb	4					
						J11	Yb	2					
F-63	75	2	P-40			J12	Yb	2	F/A	2本線帯状状縁	無	-	-
						P-40	胎土	6					
						H14	Yb	1					
						J11	Yb	7					
						J11	W	1					
						J12	Yb	9					
						J9	Ya	1					
						J9	Yb	1					
						K10	Yb	1					
						P-40	胎土	3					
						L8	Ya	1					
						L10	Yb	3					
F-63	75	3	P-40			J11	Yb	4	F/A	口縁部文様のみ、胎土太い	無	内形	-
						J11	Yb	4					
						P-40	胎土	16					
F-63	75	4	P-40			J11	Yb	3	F/A	非線合破片のみ、口縁部文様のみ。	胎土上縁、胎土胎、平周部	-	-
						P-40	胎土	123					
F-63	75	1	P-40			P-40	胎土	1	F/A	折り返し口縁、突起に胎の胎土	胎土胎上縁、胎土胎、平周部	-	-
						J11	Yb	3					
F-63	75	5	P-40			J12	Yb	1	F/A	折り返し口縁、突起に胎の胎土	胎土胎上縁、胎土胎、平周部	丸形	-
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
						J12	Yb	1					
F-65	75	2	P-43			P-43	胎土	5	F/A-2	突起に胎内胎の胎土胎	L&R斜行	外縁する切込状、胎の胎土	-
						P-43	胎土	5					
F-65	75	3	P-43			P-43	胎	1	F/A-2	口縁部	L&R斜行	外縁する切込状、胎の胎土	-
						P-43	胎	1					
F-65	75	4	P-43			J20	Ya	1	F/A-3	長脚町式、突起に胎った胎土胎、線線状口縁	L&R斜行、部分的にL&R	切込状、胎土胎の胎土胎、胎土胎のある胎土胎	-
						J20	Yb	1					
						J22	Ya	1					
						J22	Yb	2					
						J20	Yb	1					
						P-43	胎	1					
						P-43	胎	1					
						P-43	胎	1					
						C20	Yb	4					
						J22	Yb	1					
						J22	Yb	1					
						J24	Yb	1					
						J24	Yb	1					
						J24	Yb	1					
						H-2	胎土	1					
						C20	Yb	1					
F-66	76	1	P-44			P-44	胎土	1	F/A-2	長脚町式	胎土胎上縁	丸みきつ切込状	-
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
						P-44	胎土	1					
F-66	76	2	P-44			P-44	胎土	2	F/A-2	胎縁	L&R斜行	丸形、胎の胎土	-
						P-44	胎土	5					
						J15	Ya	1					
						J15	Ya	1					
						J15	Ya	1					
						J15	Ya	1					
F-67	76	1	P-46			P-46	胎土	1	F/A-2	胎土胎痕による文様、胎土上に胎土、胎土胎痕	胎土胎上縁	丸みきつ切込状、胎土胎痕	-
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
F-67	76	2	P-46			P-46	胎土	2	F/A-2	胎文のみ	胎土胎上縁	胎土胎痕による文様、胎土上に胎土、胎土胎痕	丸みきつ切込状、胎土胎痕
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
						J14	Yb	1					
F-68	76	1	P-48			P-48	胎土	1	F/A	胎縁	胎土胎上縁	-	-
						P-48	胎土	2					

表7 遺構出土掲載破片土器・土製品一覧(5)

図面	図号	遺構名	遺器・製品名	遺器・製品名	形状	数量	分類	特徴	地文	口形	土質											
F-49	76	1	F-49	片 (破命)	F-49 破片	1	71															
					J12 Yb 1																	
					J15 Ya 1																	
					J15 Yb 1																	
					M13 Ya 2																	
					M13 Yb 4																	
					M14 Yb 1																	
					M15 Yb 2																	
					M16 Yb 1																	
					N13 Ya 1																	
					N13 Yb 18																	
					N13 黒磁土 2																	
					N14 Ya 1																	
					N14 Yb 1																	
					N15 Yb 1																	
					N16 Yb 1																	
					O12 Yb 9																	
					O13 黒磁土 7																	
					O14 Ya 1																	
					O15 Yb 1																	
					O15 黒																	
					P14 Ya 1																	
					P14 Yb 3																	
					J18 Yb 1																	
					J14 Yb 1																	
					J15 Yb 2																	
					J16 Yb 1																	
					J17 Yb 1																	
					L13 Ya 1																	
					L13 Yb 1																	
					M12 Ya 1																	
					M13 Ya 12																	
					M14 Yb 1																	
					M15 Yb 3																	
					M15 黒																	
					N13 Yb 4																	
					N13 黒磁土 1																	
					N14 Ya 2																	
					N14 Yb 3																	
					N15 Yb 4																	
					N16 Yb 2																	
					N16 Yb 1																	
					N16 黒																	
					O13 黒磁土 2																	
					O14 黒磁土 1																	
					O16 Yb 1																	
					P14 Ya 1																	
					P15 Yb 1																	
					P15 黒磁土 1																	
					Q16 Yb 1																	
					L17 Yb 1																	
					L13 Yb 1																	
					J12 Yb 2																	
					K11 Yb 2																	
					K11 黒																	
					K12 Ya 2																	
					K12 Yb 5																	
					K15 Yb 1																	
					M13 Ya 1																	
					M13 Yb 9																	
					M14 Yb 1																	
					M15 Yb 1																	
					N12 Yb 1																	
					N13 Ya 5																	
					N13 Yb 11																	
					N14 Ya 3																	
					N14 Yb 1																	
					F-49	76						2	F-49		F-49 黒土	1	2	F A	後部付足	-	-	
															F-49 黒磁土 1							
					F-51	76						1	F-51	片	F15 Yb 1	4	81 A-2	突起部があるが接合せず、黒色底層のある胎付磁	-	丸形、直下に粘土層、同位の胎付		
															K14 Ya 1							
															K15 Ya 1							
															L15 Yb 1							
															L15 Ya 5							
															L15 Yb 5							
															J15 Yb 1							
															J15 Yb 3							
															J16 Yb 1							
															K14 Ya 1							
															K15 Ya 1							
															K16 Yb 2							
															L16 Yb 6							
															G14 Yb 5							
															F-51 黒土 2							
															F13 Ya 1							
															F14 Ya 1							
															F14 Yb 1							
					G14 Yb 2																	
					F11 Yb 1																	
					F12 Yb 1																	
					F13 Yb 2																	
					F15 Yb 1																	
					G12 Yb 1																	
					G13 Yb 1																	
					G14 Yb 3																	
					F-51	76						2	F-51	片	F-51 黒土 2	9	10	F A	折り返し口縁部に比べ、突起部形状は付 無		角形	
															N12 Yb 1							
															N19 Yb 4							
															N12 Ya 1							
															M17 Ya 1							
N14 Yb 1																						
F-51	76	3	F-51	片			F-51 黒土 2	1	7													
							N12 Yb 1															
							N19 Yb 4															
							N12 Ya 1															
					M17 Ya 1																	
					N14 Yb 1																	

表7 遺構出土掲載破片土器・土製品一覧(6)

群	図版	番号	遺構名	数量・組合	器種・形状	部位	点数	組合数	分類	特徴	地文	口部	胎土
F-71	76	3	F-51	■	F-51	肩土	3		B	袋状、胎壁薄い	■	内部	胎土多い
					F-51	肩土2	2						
					F-51	肩土3	1						
					F-51	肩土4	1						
					F-51	肩土4	2						
					G16	Vb	1						
					F16	Vb	1						
					G11	Va	1						
					H19	Va	1						
					H19	Vb	2						
					H11	Va	1						
					H11	Vb	5						
					I18	Vb	5						
					I11	Va	1						
					I19	Va	2						
					I18	Vb	1						
					J	Va	1						
					J11	Va	1						
					J11	Vb	1						
					K9	Vb	1						
K11	Va	1											
L14	Vb	1											
M11	Va	1											
M12	Vb	1											
M12	Vb	1											
N12	Vb	1											
O11	Va	1											
O12	Vb	1											
F-71	76	4	F-51	■	P-51	肩土2	2	2	■A	肩の残存状況	L.R. 斜行	内部	
F-71	76	5	F-51	■	P-51	肩土4	3	3	■A	口縁部	L.R. 斜行	内部	
F-71	76	6	F-51	■	P-51	肩土4	2	3	■A	口縁部	L.R. 斜行	内部	
F-71	76	6	F-51	■	P-51	肩土4	1	3	■A	小形の柄、地文、口縁内側	■	内一丸形、先細り	
F-71	76	1	F-51	■	P-51	肩土1	2	2	■A	器底残存部	■		
F-71	76	1	F-54	■	P-54	肩土1	1	1	■A	胎壁、胎壁薄い	■	斜行	
F-71	76	2	F-54	■	P-54	肩土2	1	1	■A-2	胎壁	■		
F-71	77	1	F-55	■	P-55	Vb	1	1	■A-2	胎底部、胎底正成のある胎土層・内胎部	■		
F-71	77	1	F-55	■	P-55	Vb	1	2	■A	胎底付底、H-19と同一体形(器F-33-5)	■		
F-71	77	1	F-55	■	F14	Va	1	2	■A	胎底付底、胎底のある胎土層、H-9(器F-33-5)と同一体形	■		
F-71	77	2	F-70	■	a	P-70	底	1	1	■A-3	胎底部、胎底のある胎土層、H-9(器F-33-5)と同一体形	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行
F-71	77	2	F-70	■	b	P-70	底	5	5				
F-71	77	2	F-70	■	c	P-70	底	3	3				
F-71	77	2	F-70	■		H-6	肩土1	4		■A-3	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行
F-71	77	2	F-70	■		H-6	肩土2	1					
F-71	77	2	F-70	■		H-6	肩土3	1	21				
F-71	77	3	F-70	■		P-70	底	11		■A	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行
F-71	77	3	F-70	■		H-5	肩土3	1					
F-71	77	3	F-70	■		H-5	肩土4	1					
F-82	77	4	F-87	■	H-6	肩土1	1	15	■A-2	胎底付底、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-82	77	5	F-87	■	P-87	肩土2	1	1	■A-3	口縁部	L.R. 斜行	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-82	77	6	F-87	■	P-87	肩土2	3	3	■A	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-82	77	6	F-87	■	P-89	肩土2	10	10	■A	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-84	77	1	F-89	■	P-89	肩土	1		■A-2	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-84	77	1	F-89	■	P-89	肩土1	18	27					
F-84	77	1	F-89	■	P-89	肩土2	15						
F-84	77	1	F-89	■	P-89	肩土3	5						
F-84	77	3	F-89	■	P-89	肩土	1	1	■A	胎底付底	■	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-84	77	4	F-89	■	P-89	肩土	1	2	■A	口縁部	L. 斜行	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-84	77	4	F-89	■	I17	Vb	1	1	■A	胎底部	L. 斜行	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-84	77	6	F-89	■	P-89	肩土	1	1	土五	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	胎底付底	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-181	77	1	SP-21	■	SP-21	胎土	1	24	I A	内胎胎底部	■	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-181	77	1	SP-21	■	L12	胎土	8						
F-181	77	1	SP-21	■	P-89	胎土	15						
F-181	77	1	SP-21	■	胎土	5	24						
F-181	77	2	SP-22	■	L12	胎土	4		■A	口縁部	■	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-181	77	2	SP-22	■	胎土	1	1						
F-181	77	3	SP-156	■	SP-156	胎土	2	2	■A	胎底部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	■	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	
F-181	77	4	SP-214	■	SP-214	胎土	1	1	■A	口縁部、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	■	胎底のある胎土層、胎底のある胎土層、胎底付底、内胎にも胎行	

表8 遺構出土掲載石器・石製品一覧(1)

種別	図版	番号	遺構・調査区画	小ゾウツツノ高	形状	遺構番号	器種名	長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	欠損率	補助	発掘	総合調査	備考		
図版	9	93	1	敷石1	円石	9	台石・石皿	53.4	29.3	18.6	4200	火山岩	0						
図版	9	94	2	H1	環状石	13	石皿	2.9	1.2	0.5	1.2	頁岩	0	1					
図版	9	95	4	H1	環状石	44	石皿	11.0	5.7	3.5	360	頁岩	0						
図版	9	96	5	H1	環状石	40	石皿(環状石)	8.0	13.7	7.0	1040	カンラン岩?	0						
図版	12	97	14	H2	環状石	317	石皿	3.3	12.6	0.4	1.3	頁岩	0						
図版	12	98	15	H2	環状石	231	スタレイベー	5.7	6.1	1.3	56	頁岩	4					光沢あり	
図版	12	99	16	H2	環状石	68	石皿	7.1	6.1	3.5	131.9	頁岩	0						
図版	12	100	17	H2	環状石	20	石皿	19.20	4.2	2.9	17.4	緑色地質	1						
図版	12	101	18	H2	環状石	1	石皿	10.7	4.5	2.5	200	閃緑岩?	0						
図版	12	102	19	H2	環状石	18	石皿	9.4	4.9	2.6	142	緑色地質	4						
図版	12	103	20	H2	環状石	338	磁石	7.0	4.8	3.0	142	火山岩	0						
図版	12	104	21	H2	環状石	290	すり石	8.0	13.2	5.3	952	火山岩	0						
図版	18	105	13	H5	環状石	40	すり石	8.6	8.2	7.5	622	火山岩	0						
図版	18	106	14	H5	環状石	33	扁平打製石皿	9.2	14.1	3.6	552	火山岩	0						
図版	18	107	15	H5	環状石	36	北極産式石皿	13.0	9.4	6.4	1125	火山岩	1						
図版	18	108	16	H5	環状石	35	北極産式石皿	12.5	15.5	16.3	272	火山岩	2						
図版	18	109	17	H5	環状石	39	北極産式石皿	10.0	12.2	16.3	272	火山岩	1						
図版	18	110	18	O	21	円石	7	北極産式石皿	-	-	-	2256	火山岩	(4)					
図版	24	111	18	H6	環状石	95	石皿	3.8	1.4	0.5	3.9	頁岩	0						
図版	24	112	19	H6	環状石	208	石皿	(5.3)	3.1	1.0	31.4	玄武岩	0						
図版	24	113	20	H6	環状石	122	磨製石皿	4.9	1.6	0.3	5.3	頁岩	0						
図版	24	114	21	H6	環状石	441	磨製石皿	5.2	1.7	1.0	5.3	頁岩	0						
図版	24	115	22	H6	環状石	478	スタレイベー	11.2	3.2	1.2	40.1	頁岩	0						光沢あり
図版	24	116	23	H6	環状石	613	スタレイベー	7.1	4.3	1.3	36.8	頁岩	0						光沢あり
図版	24	117	24	H6	環状石	609	スタレイベー	6.6	4.2	1.7	31.6	頁岩	0						
図版	24	118	25	H6	環状石	409	スタレイベー	6.3	4.0	1.2	34	頁岩	0						
図版	24	119	26	H6	環状石	451	スタレイベー	6.6	4.0	2.0	35	頁岩	0						
図版	25	120	27	H6	環状石	612	スタレイベー	4.8	4.4	1.9	25.1	頁岩	4						
図版	25	121	28	H6	環状石	646	磁石	4.3	4.3	1.5	28.3	頁岩	4						
図版	25	122	29	H6	環状石	366	磁石	7.9	10.2	5.9	570	頁岩	1						
図版	25	123	30	H6	環状石	392	石皿	8.0	4.4	2.7	170.4	緑色地質	0						
図版	25	124	31	H6	環状石	501	石皿	9.2	5.9	2.7	248.5	緑色地質	5						
図版	25	125	32	H6	環状石	640	扁平打製石皿	10.1	14.0	2.9	514	火山岩	0						
図版	25	126	33	H6	環状石	150	扁平打製石皿	7.4	14.0	2.8	350	火山岩	4						
図版	25	127	34	H6	環状石	664	扁平打製石皿	11.8	14.7	3.8	792	火山岩	0						
図版	25	128	35	H6	環状石	112	扁平打製石皿	7.8	(6.0)	1.3	91.4	火山岩	3						
図版	25	129	36	H6	環状石	472	扁平打製石皿	9.7	13.9	2.6	232	火山岩	0						
図版	25	130	37	H6	環状石	411	扁平打製石皿	11.1	13.0	3.1	409	火山岩	0						
図版	25	131	38	H6	環状石	542	北極産式石皿	2.4	15.8	8.4	512	火山岩	(6)						新 317c-Vb-1と整合
図版	25	132	39	J	31	円石	1	北極産式石皿	-	-	-	930	火山岩	(6)					新 Hc-Nb-442
図版	29	133	3	H8	環状石	23	石皿	3.0	1.4	0.5	2	頁岩	0						
図版	29	134	4	H8	環状石	6	石皿	(0.33)	4.0	1.2	11.9	玄武岩	(1)						新 Hc-Nb-34、Hc-Nb-17と整合
図版	29	135	4	H8	環状石	34	石皿	-	-	-	24	玄武岩	(1)						新 Hc-Nb-4、Hc-Nb-17と整合
図版	29	136	4	H8	環状石	17	石皿	-	-	-	7.9	玄武岩	(11)						新 Hc-Nb-34、Hc-Nb-44と整合
図版	29	137	4	H8	環状石	200	フレタ	-	-	-	6.4	玄武岩	-						新 断面図
図版	29	138	5	H8	環状石	30	石皿	(6.1)	(4.0)	1.5	29	頁岩	2						
図版	29	139	6	H8	環状石	9	扁平打製石皿	9.1	(11.4)	3.9	320	火山岩	1						
図版	29	140	7	H8	環状石	18	北極産式石皿	10.8	14.8	4.2	960	火山岩	0						
図版	29	141	8	H8	環状石	29	磁石	(10.40)	(13.10)	3.1	284	磁石	3						
図版	29	142	9	H8	環状石	27	台石・石皿	28.8	26.8	7.5	9000	火山岩	0						
図版	30	143	4	H7	環状石	20	磨製石皿	9.5	2.1	1.3	28.5	頁岩	0						
図版	31	144	5	H7	環状石	1	扁平打製石皿	11.5	17.0	3.4	730	火山岩	0						
図版	31	145	6	H7	環状石	2	北極産式石皿	10.0	15.1	6.0	510	火山岩	2						新 317c-Vb-1と整合
図版	31	146	6	D	18	b	Vb	12	北極産式石皿	9.8	9.7	6.0	272	火山岩	4				
図版	31	147	3	H9	環状石	17	台石・石皿	33.8	20.7	7.8	10540	火山岩	0						
図版	31	148	3	H9	環状石	15	フレタ	-	-	-	22.9	火山岩	-						
図版	31	149	3	H9	環状石	16	フレタ	-	-	-	21.3	火山岩	-						
図版	39	150	1	P	4	成石	3	台石・石皿	51.4	29.3	21.7	41200	火山岩	0	1				
図版	39	151	2	P	4	成石	1	台石・石皿	97.2	22.6	13.3	7490	火山岩	(6)					新 Hc-Nb-2と整合
図版	39	152	3	P	4	成石	2	台石・石皿	-	-	-	6840	火山岩	(6)					新 Hc-Nb-2と整合
図版	39	153	4	P	7	環状石	46.7	24.0	22.0	20500	火山岩	0							
図版	39	154	1	P	10	環状石	1	北極産式石皿	10.4	13.0	6.6	1300	火山岩	0					
図版	39	155	2	P	10	環状石	2	北極産式石皿	9.6	13.2	(6.1)	980	火山岩	1					
図版	39	156	1	P	14	環状石	2	北極産式石皿	9.1	(10.0)	5.2	605	火山岩	2					
図版	39	157	2	P	16	環状石	27	磁石	(6.2)	4.9	2.9	125	火山岩	2					
図版	40	158	1	P	15	環状石	3	台石・石皿	34.2	29.5	18.7	13020	火山岩	0					
図版	40	159	2	P	15	環状石	2	台石・石皿	41.0	21.4	14.8	22000	火山岩	0					
図版	41	160	3	P	17	環状石	19	扁平打製石皿	9.9	17.5	3.9	804	火山岩	0					
図版	42	161	4	P	17	環状石	21	台石・石皿	42.3	35.2	14.5	27500	火山岩	0					
図版	42	162	5	P	17	環状石	30	台石・石皿	39.1	33.1	15.1	21000	火山岩	0					
図版	43	163	1	P	18	成石	3	台石・石皿	30.3	30.6	14.2	20000	火山岩	0					
図版	44	164	5	P	19	環状石	39	石皿	5.0	5.3	1.7	36.8	頁岩	0					
図版	44	165	6	P	19	環状石	31	石皿	7.3	4.4	2.2	144	緑色地質	4					
図版	44	166	7	P	19	環状石	40	台石・石皿	22.4	15.5	8.2	4000	火山岩	0					
図版	46	167	8	P	20	環状石	109	扁平打製石皿	8.0	14.4	2.9	438	火山岩	0	1				
図版	50	168	10	P	21	環状石	58	スタレイベー	6.2	7.8	1.8	58.5	頁岩	0					
図版	52	169	3	P	22	成石	3	磁石	(4.3)	3.0	1.4	15.2	頁岩	2	1				
図版	53	170	2	P	23	成石	4	磁石	11.7	10.4	8.0	198	火山岩	0					
図版	53	171	3	P	23	成石	3	台石・石皿	29.7	26.5	11.9	13000	火山岩	0					

断面内番号はのとおりである。

欠損率=0: 欠損なし 1: 全体の2/3以上欠損 2: 半分の程度欠損 3: 全体の2/3未満欠損 4: 欠損割合なし ( ) 付き数字は断面により判断されたものである。

新 1: 新発見 付番号: 1: アスファルト 補助番号: 3: 付番号不明のもの 総合調査: 新 1: 新発見調査 新 2: 新発見調査

表8 遺構出土掲載石器・石製品一覧(2)

調査	図号	発掘・調査 図名	小道具 種別	用途	遺物番号	器種名	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	欠損率	状態	付着 物	整合 関係	備考	
調査	54	180	3	P	28	燧石	26	つまみ付きナイフ	7.0	3.2	1.2	21.5	貫石	0			
調査	56	180	5	P	24	Yb	14	倉石・石皿	29.3	28.5	11.6	18300	貫山岳	1	1		
調査	58	180	8	P	25	燧石	24	磨平行腕石	8.0	12.9	2.2	241	貫山岳	0			
調査	61	180	2	P	26	燧石	4	石	3.25	4.0	2.6	24.4	貫石	0			
調査	61	180	4	P	26	燧石	56	磨石	10.5	7.4	7.2	812	貫山岳	0			
調査	61	180	7	P	26	燧石	15	磨平行腕石	9.7	12.1	2.2	282	貫山岳	4		計 H11-c-Yb-2と整合	
調査	61	180	1	H	11	b	Yb	8	磨平行腕石	10.4	16.6	2.2	48	貫山岳	3		計 P-36-77-アと整合
調査	61	180	2	P	26	燧石	2	磨平行腕石	10.0	14.3	4.2	640	貫山岳	0			
調査	61	180	3	P	26	燧石	13	磨平行腕石	9.7	(16.5)	3.3	266	貫山岳	0			
調査	60	180	6	P	29	燧石	103	スタレイバー	3.4	5.5	1.2	22.5	貫石	0			
調査	60	180	5	P	43	燧石1	3	倉石・石皿	27.4	32.2	12.2	26000	貫山岳	0			
調査	60	180	2	P	44	燧石2	1	倉石・石皿	(22.2)	(16.6)	6.1	3200	貫山岳	2			
調査	60	180	3	P	49	燧石3	3	スタレイバー	4.8	5.9	1.6	24.2	貫石	0			
調査	71	101	7	P	51	燧石2	55	石	(2.5)	1.5	0.4	3.4	貫石	1			
調査	71	101	8	P	51	燧石3	87	スタレイバー	5.0	2.7	1.2	16.7	貫石	4			
調査	71	101	9	P	51	燧石4	44	片フリタ	6.2	4.7	2.0	24.6	貫石	0			
調査	71	101	16	P	51	燧石5	94	磨石	12.7	9.1	6.8	1825	貫山岳	0			
調査	72	101	11	P	51	燧石3	65	倉石・石皿	25.2	20.6	10.8	14550	貫山岳	0			
調査	73	180	3	P	23	燧石4	47	スタレイバー	6.9	3.4	1.4	24	貫石	0		欠状あり	
調査	73	180	4	P	23	燧石4	46	磨石	28.2	19.0	2.5	1620	貫石	0			
調査	73	180	5	P	23	燧石1	44	倉石・石皿	21.2	26.7	11.2	10920	貫山岳	0			
調査	74	180	3	P	54	燧石	28	スタレイバー	7.5	3.8	1.5	28.2	貫石	0			
調査	78	180	3	P	79	和鎧	19	磨平行腕石	10.5	12.6	2.7	640	貫山岳	0			
調査	79	180	2	P	76	燧石	3	石	3.8	1.1	0.4	3.2	貫石	0			
調査	80	180	2	P	87	燧石	2	石	(4.4)	3.0	1.3	17.1	貫石	2		E6風 8477474750H-2と整合	
調査	82	180	8	P	87	燧石	4	磨平行腕石	7.4	(7.4)	2.0	138	貫山岳	2			
調査	82	180	9	P	87	燧石10	116	芯軸通式石	8.2	11.0	8.4	964	貫山岳	1			
調査	84	180	5	P	89	燧石2	86	倉石・石皿	46.2	29.7	12.4	22500	貫山岳	0			
調査	87	180	1	S	3	Yb	1	倉石・石皿	(20.2)	21.5	11.7	4700	貫山岳	2			
調査	87	180	1	S	4	Yb	16	倉石・石皿	(19.4)	(20.4)	(11.5)	4200	貫山岳	2	1		
調査	101	180	5	SP	33	燧石	3	スタレイバー	6.4	5.8	1.1	32	貫石	0		欠状あり	
調査	101	180	6	SP	37	燧石1	1	スタレイバー	7.8	5.7	1.8	64	貫石	0		欠状あり	
調査	101	180	7	SP	40	燧石	1	石	13.3	4.2	2.2	108	緑色磨石 (0)		計 G10-c-Yb-4と整合		
調査	101	180	7	G	10	c	Yb	4	石	-	-	104.3	緑色磨石 (0)		計 SP-60-77-1と整合		
調査	101	180	8	SP	27	燧石	2	倉石・石皿	26.2	24.1	14.8	11300	貫山岳	0	1		

調査内容は次のとおりである。

欠損率-0:完形 1:全体の2/3以上残存 2:半分程度残存 3:全体の1/3程度残存 4:欠損数調査 ( ) 付着物数調査により判断されたものである。

整合-1:腕石調査 付着物-1:アスファルト層調査 2:付着物不明のもの 整合関係-1:製鋼関係 計:計の調査





表9 包含層出土掲載復原土器一覧(2)

群	図版	番号	器種・ブレイク	形状	点数	高さ	分類	群	特徴	地文	口部	胎土	口径	器高	器径													
V-8	48	19	類	J12	Vb	1	2	ⅡA-2	小形、胎土の変色のある胎土器。丸形口縁部、陶器	結晶第1層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒・黒石	14.8	(15.2)	-													
				J11	Vb	1																						
				Q9	Va	18																						
V-8	48	20	類	Q10	Va	1	4	ⅡA-2	小形、胎土の変色のある胎土器。丸形口縁部、陶器。底面あり。突起に貫通孔。胴部下半が張り出す。文様等下部に散見	結晶第1層状	外縁する角形、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒・黒石	(16.1)	(17.2)	-													
				Q9	Vb	4																						
				J10	Vb	2																						
V-8	49	21	類	J10	Vb	2	2	ⅡA-2	小形、胎土の変色のある胎土器。丸形口縁部、陶器。底面あり。突起に貫通孔。胴部下半が張り出す。文様等下部に散見	結晶第1層状	外縁する角形、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒・黒石	(16.1)	(17.2)	-													
				J11	Va	11																						
				J12	Vb	1																						
V-8	49	22	類	J9	Vb	1	14	ⅡA-2	小形、胎土の変色のある胎土器。丸形口縁部、陶器。底面あり。突起に貫通孔。胴部下半が張り出す。文様等下部に散見	結晶第1層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒・小粒	13.6	(14.8)	-													
				J11	Vb	8																						
				K10	Vb	5																						
V-9	49	23	類	M11	Va	1	66	ⅡA-2	胎土の変色のある胎土器。半筒状竹管状工具刺孔、底縁、下半筒状。突起に貫通孔。左右に突起部。文様等下部に散見	結晶第1層状	外縁する角形、突起の胎土	織織・小粒多い	25.3	(29.7)	-													
				M12	Va	14																						
				M13	Va	15																						
				M13	Vb	7																						
				N12	Vb	4																						
				N13	Vb	7																						
				K10	Vb	2																						
				M11	Va	2																						
				M11	Vb	2																						
				M12	Va	2																						
				M12	Vb	2																						
				M13	Va	1																						
				M13	Vb	1																						
				N13	Vb	1																						
				J10	Vb	2																						
				V-9	49	24										類	K10	Vb	11	48	ⅡA-2	矢筒状の胎土の変色のある胎土器。つまみ状の胎土	結晶第一層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒多い	(28.5)	34.3	14.4
																	K10	Vb	1									
K10	Vb	1																										
V-9	49	24	類	K10	Vb	11	3	ⅡA-2	矢筒状の胎土の変色のある胎土器。つまみ状の胎土	結晶第一層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒多い	(28.5)	34.3	14.4													
				K10	Vb	1																						
				K10	Vb	1																						
V-10	50	25	類	J10	Vb	1	56	ⅡA-2	突起に貫通孔。胎土の変色のある胎土器。竹筒の半筒状竹管状工具による刺孔・押引	結晶第1層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒	25.7	28.6	19.8													
				J11	Va	12																						
				J11	Vb	1																						
V-10	50	26	類	H10	Va	1	30	ⅡA-2	突起に貫通孔。胎土の変色のある胎土器。竹筒の半筒状竹管状工具による刺孔・押引	結晶第1層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織・砂粒	25.7	28.6	19.8													
				H10	Vb	2																						
				J10	Vb	4																						
				J11	Va	7																						
				J12	Vb	6																						
				J10	Vb	1																						
				J11	Va	2																						
				J11	Vb	3																						
				J12	Vb	1																						
				J11	Va	1																						
				J11	Vb	1																						
V-10	50	27	類	J9	Va	1	74	ⅡA-2	突起に貫通孔。胎土の変色のある胎土器。竹筒の半筒状竹管状工具による刺孔・押引	結晶第1層状	外縁する切出状、胎土の変色のある胎土器	織織多い、砂粒・黒石	30.9	29.9	18.5													
				J9	Vb	1																						
				J10	Vb	1																						
				J10	Vb	1																						
				J13	Va	1																						
				K9	Va	1																						
				K9	Vb	12																						
				K10	Vb	21																						
				K10	Vb	5																						
				K10	Vb	1																						
				L10	Vb	1																						
L10	Vb	1																										
L12	Va	1																										
L14	Va	2																										
M11	Vb	1																										
不明	Vb	5																										
V-11	51	28	類	H11	Vb	24	37	ⅡA-2	40程度の織状胎土、胎土上に突起の高脚形突起と突起。底面に突起	結晶第1層状	外縁する切出状、半筒状竹管の押引	織織・砂粒・黒石	22.5	27.2	18.5													
				J9	Va	1																						
				J11	Vb	2																						
V-11	50	29	類	G11	Va	1	11	ⅡA-2	胎土の小形	無	外縁する切出状	織織・黒石粒、砂粒少量	11.1	12.1	(5.3)													
				H10	Va	1																						
				H11	Vb	2																						
V-11	50	30	類	H12	Vb	4	4	ⅡA-2	手づくぬ、小形の筒形	無	尖り気味	織織多い、砂粒・黒石	5.7	3.3	-													
				J10	Vb	2																						
				J10	Vb	4																						
V-11	51	31	類	H4	Vb	1	5	ⅡA-2	三日月、6稜状の刺突孔	無	丸形。外縁に磨る	砂粒多い	(21.7)	器底(4.7)	(20.1)													
				K9	Vb	1																						
				K9	Vb	1																						
V-11	51	32	類	L9	Va	1	17	ⅡA-2	三日月、6稜状の刺突孔	無	丸形。外縁に磨る	砂粒多い	(21.7)	器底(4.7)	(20.1)													
				L9	Vb	1																						
				L9	Vb	1																						

※計測値( ) 付き数字は、口径・器径では推定値、器高では現存値。

表9 包含層出土持載復原土器一覧(3)

群別	図面	番号	坑	遺物・ブレイク	層位	点数	検出数	分類	群別	特徴	地文	口唇	胎土	口徑	底径	高さ		
V-11	51	32	Ⅷ	L10	Va	1	4	ⅧA-2	土器付 土層	中平不揃いで器風 第1部破片	-	-	胎土、砂粒、骨 粒	-	(15.4)	(7.7) 台部分		
				L11	Vb	10												
				L12	Vb	1												
V-11	51	33	Ⅷ	N4	Va	1	12	ⅧA-2	台つぎ	-	-	-	陶器少量、砂粒・ 骨粒が多い	-	(6.4)	(21.6) 台部分		
				N5	Vb	7												
				N6	Vb	1												
V-16	55	47	Ⅷ	K9	Vb	85	35	ⅧA-2	群別	群別に近い花縁の平腹式文 様(横又文様)。胎土粘付性	平腹型が特徴	-	-	胎土のみ	-	(24.4)	11.0	
				K10	Vb	9	3											
V-16	55	48	Ⅷ	G41	Vb	26	20	ⅧA-2	群別	群別類似の赤の砂粒、赤地に黒 系圧痕、黒文の胎土類による文様	L土移行	-	-	胎土のみ	-	(16.3)	(18.7)	-
				G42	Vb	6	6											
V-17	55	49	Ⅷ	D50	Vb	1	46	ⅧA-3	群別	群別類似の明褐色、レンズ 状文様、十字文様付は、赤 系圧痕口縁にむかって胎付等	L土移行	-	-	胎土のみ	-	(19.4)	(26.3)	9.0
				D51	Vb	1												
				D52	Vb	6												
				D53	Vb	6												
				F18	Vb	1												
				F22	Vb	4												
				F25	Vb	4												
				G41	Va	5												
				G42	Vb	2												
				G43	Vb	2												
				H38	Vb	1												
				H39	Vb	1												
				I2	Vb	1												
				I3	Vb	1												
				I4	Vb	1												
				K22	Vb	1												
				J19	Vb	1												
				K19	Vb	1												
				E21	Vb	1												
				E22	Vb	2												
				F21	Vb	1												
				F21	Vb	1												
				F2	Vb	1												
V-17	36	50	Ⅷ	I19	Va	1	55	ⅧA-3	群別	3部作りの突起。突起下に部 小凹のある胎付。レンズ 状文様	L土移行文、胎 文	-	-	胎土のみ	-	(22.0)	27.7	-
				I20	Vb	6												
				I21	Vb	8												
				I22	Vb	8												
				I23	Vb	1												
				I24	Vb	1												
				I25	Vb	1												
				I27	Va	17												
				I27	Vb	17												
				I27	Vb	4												
				I27	Vb	2												
V-18	56	51	Ⅷ	I27	Va	1	44	ⅧA-3	群別	4ヶ所山形突起、貫通孔。突 起下に窪の跡みのある胎付 胎付。平行胎文	胎土移行	-	-	胎土のみ	-	(24.0)	34.9	(10.0)
				I28	Vb	1												
				D18	Va	3												
				D19	Va	15												
				D19	Vb	5												
				E18	Va	1												
				E18	Vb	1												
				E19	Va	10												
				E19	Vb	2												
				O18	Vb	1												
				D19	Va	1												
V-18	56	52	Ⅷ	I27	Va	1	62	ⅧA-3	群別	口縁部は胴上取戻。山形突 起、突起下に胎付胎付。2本 組胎文	胎土のみ移行	-	-	胎土のみ	-	(21.0)	(27.7) 測定	10.8
				I27	Vb	1												
				I27	Vb	1												
				J28	Va	3												
				J28	Vb	44												
				P27	Vb	4												
				F28	Vb	1												
				F28	Vb	16												
				F27	Vb	5												
				G28	Vb	8												
				G27	Vb	9												
V-18	56	53	Ⅷ	L28	Vb	1	40	ⅧA-3	群別	胴中か山形突起。正面の 小凹下に胎付、平腹型な 胎文	L土移行、胎縁部 あり	-	-	胎土のみ	-	(19.7)	23.0	-
				L29	Vb	2												
				L30	Vb	4												
				M29	Vb	1												
				F28	Vb	2												
				G28	Vb	1												
				H28	Vb	1												
V-18	57	54	Ⅷ	D28	Vb	74	74	ⅧA-3	群別	4部作りの胎付、腹付付の胎 土層の赤系胎土類(胎土類)の 胎付	L土移行	-	-	胎土のみ	-	21.9	(26.5)	8.1
				D29	Vb	4	4											
				D30	Vb	9	9											
				D31	Vb	1	1											
V-19	57	55	Ⅷ	D34	Va	1	53	ⅧA-3	群別	4部作りの胎付突起、突起下に 3部作りの胎付、平腹型な レンズ状胎文	L土移行、胎縁部 の胎土類とし胎付 となる	-	-	胎土のみ	-	24.5	41.7	8.5
				D34	Vb	31												
				G21	Vb	1												
				H21	Vb	2												
				H22	Vb	11												
				H23	Va	1												
				H23	Vb	1												
				J22	Vb	3												
				J23	Vb	3												

※計測値( ) 付き数字は、口径・底径では推定値、器高では現存値。

表9 包含層出土掲載復原土器一覧(4)

発掘	図番	番号	器種	遺跡・ブレイク	部位	点数	検出数	分類	形状	特徴	地名	口唇	胎土	口径	高さ	器高	器径			
V-19	37	55	■	遺跡・ブレイク	F11	Vb	1	16												
					F12	Va	1													
					G14	Va	1													
					G15	Vb	2													
V-19	37	56	■	遺跡・ブレイク	G16	Vb	2	31	ⅡA-3	陶文のみ、平縁に4か所輪状胎付	飯塚遺跡南側	外縁する切出状、口唇部に凸出筋あり、一面に胎文。	■	15.6	17.0	6.8				
					G18	Vb	2													
					M15	Vb	2													
					M16	Vb	4													
V-19	37	57	■	遺跡・ブレイク	G18	Vb	2	60	ⅡA-3	陶文のみ、窪凹状の突起、輪状突起下にボタン状胎付	飯塚行、船目あり	丸形、皿下に窪の斜筋あり	■	13.8	24.0	7.7				
					F25	Vb	2													
					F27	Va	2													
					H17	Vb	26													
V-19	38	58	■	遺跡・ブレイク	H17	Vb	1	38	ⅡA-3	2か所の縁状突起が残り、突起下に胎付。胴部下位が張り出す	不規則な切出状	口唇部下の胎付により、肥厚する切出状。腹部に凸筋陶文	■	(14.1)	12.6	6.3				
					G19	Vb	1													
					F29	Va	1													
					F30	Vb	1													
V-20	58	59	■	遺跡・ブレイク	F12	Vb	1	42	ⅡA-3	4軒住の山形突起、突起部に輪筋のある胎付	飯塚行	外縁し丸みのある切出状。腹の腹筋あり	■	18.8	23.7	9.0				
					G11	Vb	1													
					G12	Vb	2													
					G13	Vb	3													
V-20	58	60	■	遺跡・ブレイク	N19	Va	1	33	ⅡA-3	山形突起、窪凹孔、ボタン状突起。口縁一部は口口状に外縁	飯塚行	丸形、腹の腹筋あり	■	15.3	(13.8)	-				
					N19	Vb	1													
					N19	Va	1													
					N19	Vb	17													
V-20	58	61	■	遺跡・ブレイク	G19	Vc	1	38	ⅡA-3	縁部部分の胎文のみ、胎文が深い	L縁部部分胎文	外縁する切出状、腹の腹筋あり	■	22.7	24.2	9.6				
					F30	Va	2													
					G19	Vb	6													
					M19	Vb	1													
V-20	58	62	■	遺跡・ブレイク	F11	Vb	1	19	ⅡA-3	小形、陶文のみ。3か所の山形突起。突起は腹筋の突起方向を突く、胎付	飯塚行	丸形、腹の腹筋あり	■	10.5	9.7	3.3				
					L10	Vb	4													
					L11	Vb	2													
					L14	Vb	1													
V-20	59	63	■	遺跡・ブレイク	Q13	Vb	5	15	ⅡA-3	小形、陶文のみ	まばらなL縁付、胎筋あり	丸～切出状、腹の腹筋あり	■	8.2	7.7	4.9				
					Q13	Va	1													
					Q13	Vb	6													
					Q13	Vb	5													
V-20	59	64	■	遺跡・ブレイク	J1	Vb	4	17	ⅡA-3	小形、陶文のみ	飯塚行	外縁する切出状	■	(8.9)	9.1	4.2				
					J1	Va	2													
					J1	Vb	4													
					J1	Vb	4													
V-21	59	65	■	遺跡・ブレイク	F13	Vb	14	47	ⅡA	小形、陶文のみ 長方形の突起、窪凹状の突起、窪凹状の突起、窪凹状の突起、窪凹状の突起	飯塚行	丸形、腹筋あり	■	(7.4)	7.9	4.4				
					H19	Vb	46													
					N19	Va	3													
					N19	Vb	4													
V-22	59	67	■	遺跡・ブレイク	H19	Vb	4	21	ⅡA	東北地方の形等類似、口縁部ケリバー型。陶文の口縁部文様等に胎付あり	飯塚行	丸形、腹の腹筋あり	■	(14.8)	17.3	6.9				
					H19	Va	1													
					H19	Vb	1													
					H19	Vb	1													
V-30	61	109	■	遺跡・ブレイク	K11	Vb	12	74	ⅡA	縄文地に胎付状突起	胎筋と胎文	丸形	■	-	(27.6)	9.6				
					K11	Va	2													
					K11	Vb	47													
					K11	Va	2													
V-30	61	110	■	遺跡・ブレイク	K11	Vb	1	17	ⅡA	狭巻状突起、突起部あり	胎筋	丸形	■	9.4	10.8	(4.5)				
					K11	Va	3													
					K11	Vb	11													
					K11	Va	1													
V-30	61	111	■	遺跡・ブレイク	147	Vb	42	43	ⅡA	方型突起、窪凹状突起、突起部あり。窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起	胎筋	丸形、折り直し	■	18.9	(21.2)	-				
					147	Vb	17													
					147	Vb	16													
					147	Vb	8													
V-30	62	112	■	遺跡・ブレイク	L18	Vb	6	32	ⅡA	縁状突起、窪凹状突起、突起部あり。窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起、窪凹状突起	胎筋	丸形、折り直し	■	(18.1)	(18.1)	-				
					L18	Va	2													
					L18	Vb	1													
					L18	Vb	1													
V-31	62	113	■	遺跡・ブレイク	J45	Vb	1	61	ⅡA	突起部あり。長方形部、突起・胎付・突起の胎付、外縁に胎付状突起あり	胎筋	丸形	■	11.4	25.1	7.0				
					J45	Va	29													
					J45	Vb	21													
					J45	Vb	1													

■計測値 ( ) 付き数字は、口径・底径では推定値、器高では現存値。

表9 包含層出土掲載復土器一覧(5)

層別	図面	番号	種別・ブレード	器位	点数	検出数	分類	形状	特徴	地文	口径	口径	高さ	直径	
V-31	42	114	K17	Va	2	14	NA	鏃跡	突起4ヶ所、器位は器でうらさく状文。早期竹管状工具による2本筋状跡	Ⅲ	内形	砂粒多い、礫石散	11.4	14.3	5.2
				Vb	4										
				Vc	4										
				Vd	4										
V-31	42	115	G11	Va	18	18	NA	鏃跡	突起6ヶ所、下4ヶ所の突起は器位器具、突起5ヶ所の突起は器位器具	Ⅲ	内形	砂粒、小礫	13.4	(12.7)	-
				Vb	18										
				Vc	18										
				Vd	18										
V-31	42	116	H15	Va	3	13	NA	鏃跡	突起4ヶ所、新り直し口跡、早期竹管状工具による2本筋状跡	Ⅲ(疑)	内形	砂粒多	(13.8)	(15.5)	-
				Vb	3										
				Vc	3										
				Vd	3										
V-31	42	117	K16	Va	7	7	NA	鏃跡	突起4ヶ所、4ヶ所内径とも、4ヶ所の突起あり、器位は器位器具	Ⅲ	-	砂粒・小礫多	-	(6.4)	-
				Vb	7										
				Vc	7										
				Vd	7										
V-31	42	118	H16	Va	126	126	NA	鏃跡	特子状状跡	Ⅲ	内形	砂粒・器位跡付あり	25.2	31.9	11.3
				Vb	126										
				Vc	126										
				Vd	126										
V-32	43	119	H17	Va	2	10	NA	鏃跡	小形、器子目状状跡	Ⅲ	内形、折返し	砂粒・小礫	9.5	(8.9)	-
				Vb	2										
				Vc	2										
				Vd	2										
V-32	43	120	K18	Va	2	10	NA	鏃跡	小形、器い・突起4ヶ所状跡	Ⅲ(疑)	丸形	砂粒・器位跡付	(10.1)	11.2	2.7
				Vb	2										
				Vc	2										
				Vd	2										
V-32	44	121	G12	Va	15	15	NA	鏃跡	器位地に口跡・器位遺棄の跡、6ヶ所の突起状跡付	Ⅲ(疑)	内形	砂粒	21.7	26.0	(9.5)
				Vb	15										
				Vc	15										
				Vd	15										
				Ve	15										
				Vf	15										
				Vg	15										
				Vh	15										
				Vi	15										
				Vj	15										
V-32	45	122	F13	Va	4	4	NA-2	鏃跡	口跡状文様跡のみ、器位跡付、2ヶ所の突起状跡付	Ⅲ	丸形、折り返し	砂粒多	(14.0)	(11.9)	(7.8)
				Vb	4										
				Vc	4										
				Vd	4										
V-32	43	123	F14	Va	4	11	NA	鏃跡	小形の鏃、片内する器位の平行状跡・口跡ありは器位跡付	Ⅲ	内形	小礫多	10.0	7.3	4.8
				Vb	4										
				Vc	4										
				Vd	4										
V-32	43	124	G12	Va	15	15	NA	鏃跡	小形の鏃、器位跡付、突起2ヶ所、器位一帯は器位の平行状跡・(伏状跡)の文様が器位跡付	Ⅲ	内形	砂粒多	(11.0)	10.6	4.8
				Vb	15										
				Vc	15										
				Vd	15										
V-32	44	125	F15	Va	13	13	NA	鏃跡	小形、器位跡付、器位跡付有肉状文(器位跡付)、口跡あり、器位内に文字跡、突起4ヶ所、突起跡に器位跡付	Ⅲ	内形	砂粒多	(9.7)	(5.7)	(4.2)
				Vb	13										
				Vc	13										
				Vd	13										
V-32	44	126	F16	Va	44	48	NA	鏃跡	小形、器位跡付、器位跡付有肉状文(器位跡付)、口跡あり、器位内に文字跡、突起4ヶ所、突起跡に器位跡付	Ⅲ	内形	砂粒多	28.4	(33.5)	-
				Vb	44										
				Vc	44										
				Vd	44										
V-32	44	127	H18	Va	1	16	NA	鏃跡	器位跡文(口跡)、器位跡付、突起4ヶ所	Ⅲ	内形	砂粒	20.1	(9.0)	-
				Vb	1										
				Vc	1										
				Vd	1										
				Ve	1										
				Vf	1										
				Vg	1										
				Vh	1										
				Vi	1										
				Vj	1										
V-32	44	128	G13	Va	22	29	NA	鏃跡	器位跡文(器位跡付)、器位跡付、器位跡付有肉状文、外壁上半部は器位の器位跡付、内径口跡付に器位跡付	Ⅲ	内形	砂粒(特に灰色器位)多	17.9	24.5	7.5
				Vb	22										
				Vc	22										
				Vd	22										
				Ve	22										
				Vf	22										
				Vg	22										
				Vh	22										
				Vi	22										
				Vj	22										
V-34	45	129	H19	Va	34	44	NA	鏃跡	器位跡状跡、突起4ヶ所、口跡付、器位跡付有肉状文、器位跡付有肉状文	Ⅲ	内形	砂粒・小礫多	21.6	(20.3)	9.7
				Vb	34										
				Vc	34										
				Vd	34										
V-35	45	130	G11	Va	4	7	NA	鏃跡	器位跡のみ、平頭状口跡付	Ⅲ(疑)	内形、折り返し	砂粒・小礫少	13.9	(11.5)	-
				Vb	4										
				Vc	4										
				Vd	4										
V-36	46	131	H20	Va	2	8	NA	鏃跡	器位跡のみ、突起の器位跡付	Ⅲ(疑)	内形	砂粒	13.1	(13.2)	-
				Vb	2										
				Vc	2										
				Vd	2										
V-36	46	132	K19	Va	48	55	NA	鏃跡	器位跡のみ、折り返し器位跡付	Ⅲ(疑)	丸形、折り返し	砂粒多	22.0	25.0	10.6
				Vb	48										
				Vc	48										
				Vd	48										
				Ve	48										
				Vf	48										
				Vg	48										
				Vh	48										
				Vi	48										
				Vj	48										
V-36	46	133	M12	Va	21	27	NA	鏃跡	ナガ状付、6ヶ所の器位跡付	Ⅲ(疑)	内形、器位跡付	砂粒多い、器位跡・器位跡付	(25.7)	32.2	(11.6)
				Vb	21										
				Vc	21										
				Vd	21										
				Ve	21										
				Vf	21										
				Vg	21										
				Vh	21										
				Vi	21										
				Vj	21										
V-36	46	134	H21	Va	21	28	NA	鏃跡	器位跡、突起4ヶ所、1ヶ所に突起あり、内径上半と内径下半に突起状跡付、突起の器位跡付	Ⅲ	筒筒状内形	砂粒	(13.8)	19.0	5.5
				Vb	21										
				Vc	21										
				Vd	21										
V-36	45	135	L45	Va	2	19	NA	鏃跡	器位跡のみ、突起4ヶ所の突起あり	Ⅲ	内形、折り返し	砂粒多ざらつく	9.8	11.7	5.2
				Vb	2										
				Vc	2										
				Vd	2										
V-36	46	136	H22	Va	3	7	NA	鏃跡	器位跡、突起4ヶ所、突起跡に3ヶ所の器位跡付	Ⅲ	内形	砂粒多い	10.7	11.4	5.0
				Vb	3										
				Vc	3										
				Vd	3										
V-36	46	137	L46	Va	1	1	NA	鏃跡	器位跡のみ、突起4ヶ所の突起あり	Ⅲ	内形	砂粒	11.0	11.0	5.0
				Vb	1										
				Vc	1										
				Vd	1										

※計測値( ) 付き数字は、口径・底径では推定値、器高では現存値。

表9 包含層出土掲載復原土器一覧(6)

押部	図版	番号	種	器名・フリップ	部位	点数	数量	分類	形状	特徴	地文	口縁	胎土	口径	器高	原径
V-36	66	137	■	L33	Vb	13	21	B/A	群輪	英文	黒	高部	砂粒多	14.4	16.1	4.3
				F37	Va	4										
				G36	Va	20										
V-36	67	138	■	G36	Vb	14	41	B/A	群輪	英文、外周と半と内周口縁 行間に表裏割付	黒	内側	小砂多、砂粒	16.5	23.4	10.30
				G36	Vb	1										
				G37	Va	13										
V-36	66	136	■	D17	Vb	10	15	B/A	群輪	小形の器文	黒	-	砂粒・微石粒	-	56.0	4.3
				F37	Vb	1										
				G37	Vb	4										
V-36	67	140	■	G12	Va	5	11	B/A	群輪?	英文、脚部周りに出す	黒	-	砂粒・小砂多	-	10.20	4.7
				G12	Vb	6										
				L49	Vb	24										
V-47	68	224	■	M18	Vb	13	19	B/B	群輪	口縁に付く、仕向線との距離 距離、器文直徑間まで	L2群行	高部	砂粒・角粒多	16.4	26.7	7.0
				M18	Vb	13										
V-47	68	225	■	J47	Vb	2	50	B/C	群輪	所屬、部みのある突起、外 部に輪帯の付く器	L2群行、器部付近 のみ羽状文	内傾する切出状	砂粒多	13.4	13.4	8.4
				J48	Vb	1										
				J47	Va	10										
				J47	Vb	7										
				N47	V1	2										
				N48	V1	3										
				O48	V1	0										
				J46	Vb	1										
				J47	Va	2										
				J47	Vb	2										
				N46	Va	3										
				O48	Vb	1										
				O48	V1	6										
				M48	Va	3										
				M46	Vb	1										
V-47	68	227	■	N46	Va	1	53	B/C	群輪	器文のみ、器高面に輪帯の 付く器	L2群行	内傾する切出状	砂粒多	22.5	17.0	8.3
				N46	Va	20										
				N46	Vb	4										
				N48	V1	4										
				O47	V1	6										
				N48	Va	2										
				O48	V1	2										
V-47	68	228	■	O48	V1	27	27	B/C	-	-	-	-	-	-	-	-
				O48	V1	30										
				J48	Vb	3										
V-48	68	229	■	J47	Va	3	16	B/C	群輪or 器口	表あるいは仕口、磨り筋し 器文による文様	L2群行	内傾する切出状	砂粒少	9.2	17.3	-
				J47	Vb	5										
				M42	Va	2										
				M42	Va	2										
				M42	Vb	1										
V-48	68	230	■	J47	Vb	2	6	B/C	群輪or 器口	表あるいは仕口の器部	L2群行	内傾する切出状	砂粒少	8.2	14.2	-
				K47	Va	3										
				M44	Va	1										
				M47	Va	1										
				M47	Vb	1										
V-48	68	231	■	N44	Va	1	8	B/C	群輪or 器口	小形の器あるいは仕口、器 部文様3単位	L2群行	-	-	-	-	-
				N45	Va	1										
				O48	Va	3										
				O49	V1	1										
				O49	V1	1										
V-48	68	234	■	F36	Vb	1	3	B/C	-	-	-	-	-	-	-	-
				F38	Va	2										
				K9	Va	3										
				O9	Va	14										
				O9	Vb	22										
				O10	Va	17										
				O10	Vb	15										
				N9	Va	16										
				O9	Va	4										
				O9	Vb	14										
写真 掲載	53	1	■	O10	Vb	15	21	B/A-2	群輪	中央突起(4ヶ所、貫通孔あ り、口縁に付いた肩帯状文 様)	器部裏面器口状	やや肥厚し、丸み を帯びた外傾する 切出状、矢羽状の 器文文様	細砂・砂粒・小 砂	24.5	28.8	13.00 11.00
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
				O10	Vb	1										
写真 掲載	51	2	■	F33	Vb	25	25	B/A-2	群輪	器文のみ	器部裏面器口状	丸形、器口の縁 線跡あり	細砂少、砂粒・小 砂	16.7	13.9	-
				F33	Va	1										
				F33	Vb	2										
				F33	Vb	2										
				F33	Vb	2										
写真 掲載	52	3	■	F9	Va	1	54	B/A-2	群輪	地文地に、器文部のある 取土部、器脚、中輪竹管状 工具の押引	器部裏面器口状、器 脚して高さあり、割 行風	外傾する切出状、 器文部のある器 口状	細砂・砂粒・細 砂	-	17.0	8.8
				F9	Va	2										
				F9	Vb	9										
				O9	Va	1										
				O9	Vb	7										
				O10	Va	3										
				O10	Vb	15										
				K9	Va	3										
				K9	Vb	6										
				K10	Va	4										
				R10	Vb	45										
				F9	Vb	2										
				K9	Vb	1										
				K9	Vb	1										
				R10	Vb	7										
写真 掲載	52	4	■	M7	Va	7	83	B/A-2	群輪	器文のみ、貫通孔のある非 器口部	器部裏面器口状	外傾する切出状、 器文部のある器 口状	-	-	-	-
				M7	Vb	1										
				M8	Vb	22										
				M10	Vb	2										
				N8	Vb	2										
				M4	Va	4										
				M4	Vb	4										
				M8	Vb	3										
				N8	Vb	2										
				N8	Vb	2										
写真 掲載	52	5	■	111	V1	1	37	B/A-2	群輪	器文のみ、平輪、大形	器部裏面器口状、器 脚して高さあり、割 行風	丸形、器文部 のある器口状	細砂少、砂粒・小 砂	29.8	47.5	12.4
				111	V1	1										
				111	Vb	24										
				111	Vb	2										
				111	Vb	14										

■計割値( ) 付き数字は、口径・底径では推定値、器高では現存値。

表9 包含層出土掲載復原土器一覧(7)

調査年度	調査区画	発掘番号	土器-フリップ	層位	点数	総点数	分類	形状	特徴	本文	口径	胎土	口径	高さ	備註												
写真掲載	53	6	H27	Vb	1	56	ⅡA-2	深鉢	縄文のみ、平縁	紅土胎土質1種制作	外縁する切出状、底縁のみある形状残存	小鉢少、縁部	22.6	(21.3)	-												
			N27	Va	2																						
			N27	Vb	6																						
			O26	Va	1																						
			O27	Va	43																						
			O27	Vb	2																						
			I10	Vb	1																						
			K20	Va	15																						
			K20	Vb	18																						
			K11	Vb	1																						
写真掲載	53	7	L10	Va	1	56	ⅡA-2	深鉢	弁状突起4ヶ所、縄文のみ	紅土胎土質1種制作	外縁する切出状、底縁縄文	縁部多、砂粒	(22.5)	(20.3)	-												
			L10	Vb	2																						
			K2	Va	1																						
			K2	Vb	4																						
			L2	Va	1																						
			L11	Va	1																						
			L11	Vb	1																						
			I2	Va	3																						
			I2	Vb	4																						
			I2	Va	4																						
写真掲載	53	8	H10	Va	18	45	ⅡA-2	深鉢	縄文のみ、平縁	紅土胎土質1種制作	外縁する切出状、底縁縄文	縁部多、砂粒	19.4	23.1	6.6												
			H10	Vb	4																						
			H11	Va	1																						
			H11	Vb	1																						
			M12	Va	1																						
			M12	Vb	1																						
			-11	Va	1																						
			-11	Vb	1																						
			J11	Va	1																						
			J11	Vb	1																						
写真掲載	53	9	H10	Va	6	27	ⅡA-2	深鉢	縄文のみ、弁状突起4ヶ所	紅土胎土質1種制作	先端りの丸形	縁部・砂粒	27.2	(27.3)	-												
			H10	Vb	18																						
			H11	Va	1																						
			H11	Vb	1																						
			M11	Va	1																						
			M11	Vb	1																						
			I10	Va	2																						
			I10	Vb	2																						
			G11	Va	1																						
			J1	Va	1																						
写真掲載	54	10	J10	Va	9	44	ⅡA-2	深鉢	縄文のみ、平縁	紅土胎土質1種制作	先端りの丸形	縁部・砂粒	(22.6)	25.2	9.5												
			J10	Vb	19																						
			J11	Va	5																						
			J11	Vb	18																						
			G11	Va	1																						
			J11	Va	1																						
			L11	Va	1																						
			L10	Va	7																						
			L11	Va	1																						
			J11	Va	12																						
写真掲載	54	11	H11	Va	28	63	ⅡA-2	深鉢	縄文、弁状突起4ヶ所	黒	丸形	縁部・砂粒	25.5	37.5	(19.3)												
			H11	Vb	1																						
			J11	Va	12																						
			H11	Vb	28																						
			J12	Va	12																						
			K11	Va	1																						
			K11	Vb	1																						
			K12	Va	1																						
			K12	Vb	5																						
			L10	Va	1																						
写真掲載	60	12	H2	Va	2	172	ⅡA	深鉢								-	(41.7)	12.9									
			H2	Vb	97																						
			O20	Va	1																						
			P20	Va	1																						
			P20	Vb	1																						
			P20	Va	1																						
			P20	Vb	13																						
			P20	Va	2																						
			P20	Vb	2																						
			O21	Va	1																						
写真掲載	60	13	P20	Va	1	77	ⅡA-3	深鉢	縄文のみ、平縁に胎行による小突起	紅土胎土質1種制作、また紅土	丸形、縁の底縁のみ	縁部・砂粒	(26.6)	27.6	10.7												
			P20	Vb	1																						
			P20	Va	1																						
			P20	Vb	13																						
			P20	Va	2																						
			P20	Vb	2																						
			O21	Va	1																						
			O21	Vb	1																						
			O21	Va	2																						
			O21	Vb	30																						
写真掲載	60	14	E25	Va	3	82	ⅡA-2	深鉢	縄文のみ、突起4ヶ所、2線2対?突型内縁部む	紅土胎行、縁部胎行	丸形、縁の底縁のみ	縁部少、砂粒	(26.0)	26.1	6.7												
			E25	Vb	3																						
			G24	Va	1																						
			H19	Va	2																						
			H22	Va	1																						
			H24	Va	1																						
			I15	Va	1																						
			I21	Va	2																						
			I21	Vb	2																						
			J20	Va	1																						
写真掲載	60	15	J20	Va	3	33	ⅡA-5	深鉢	縄文のみ、山形突起	紅土胎行	外縁する切出状、縁の底縁のみ	砂粒・縁部砂粒	-	22.3	7.5												
			J20	Vb	1																						
			K19	Va	2																						
			K21	Va	3																						
			K21	Vb	1																						
			K22	Va	1																						
			K22	Vb	3																						
			F22	Va	1																						
			F22	Vb	1																						
			M14	Va	1																						
写真掲載	67	16	O21	Va	3	4	ⅡA-5	深鉢	縄文のみ、山形突起	紅土胎行	外縁する切出状、縁の底縁のみ	砂粒・縁部砂粒	-	22.3	7.5												
			O20	Va	20																						
			K20	Va	3																						
			K20	Vb	1																						
			H14	Va	17																						
			I14	Va	2																						
			I10	Va	4																						
			I10	Vb	2																						
			J11	Va	7																						
			J11	Vb	7																						
写真掲載	67	17	H14	Va	17	14	ⅡA	-	底縁、縄文、外・内面に炭化物付着	黒	-	砂粒多い、磁石磁や中々ない	-	(14.6)	9.9												
			I10	Va	4																						
			I10	Vb	2																						
			J11	Va	7																						
			J11	Vb	7																						
			写真掲載	67	17											H14	Va	17	14	ⅡA	-	底縁、大形、内面に炭化物付着	L土胎行	-	-	(14.2)	(15.6)
																I10	Va	4									
																I10	Vb	2									
																J11	Va	7									
																J11	Vb	7									

※計測値( )付き数字は、口径・底径では推定値、高さでは現存値。

表10 包含層出土掲載破片土器一覧(1)

時期	図版	番号	状態・組合せ	登録 番号	部位	点数	總点数	分類	特徴	地文	口部	胎土			
V-4	78	5	既(組合-写実)	N18	Wa	3	3	I A	貝類線縁縁部文・地紋状文、尖底?	貝類線縁縁部 状文	内面、内・外側 に彫み状の地紋 状文	砂粒多い			
				L12	Wa	5	5								
				N19	Wa	2	9								
V-4	78	6	既	K12	Vb	1	5	I A	貝類線縁縁部状文、平底?	貝類線縁縁部 状文	先端りの丸形	砂粒			
				N19	Wa	2									
				L12	Wa	1									
V-4	78	7		L12	Wa	1	1	I A	貝類?系底	貝類?	角部	砂粒			
V-4	78	8		L14	Wa	1	1	I A	尖底?系底	貝類?系底	角部	砂粒			
V-5	78	9	既(組合)	a	K37	Vb	1	113	II B	網線による口縁部文様等	網線の網文	先端りの丸形	網線多、砂粒		
					G07	Vg	1							3	
					G07	Vb	1							3	
				b	K37	Vb	6							6	
					K37	Vb	17							20	
					K38	Vb	3							23	
				c	K37	Vb	17							18	
					K37	Vb	1							19	
					K38	Vb	1							20	
				既	M13	Va	4							24	
					M20	Vb	1							25	
					N32	Vb	84							109	
					N38	Vb	13							122	
N44	Vb	1	123												
N45	Va	1	124												
N45	Vb	2	126												
V-5	78	10	既	a	K38	Vb	4	37	II B	準網線文、口縁部網線状等	網線裏?網、準網 の網文	先端りの丸形	網線多、砂粒		
					L25	Vb	1							5	
					L27	Va	2							7	
				b	L28	Vb	1							8	
					M24	Vb	2							10	
					M25	W	1							11	
				c	M25	Va	2							13	
					K50	Vb	1							14	
					K77	Vb	2							16	
				既	K78	Vb	10							26	
					M	W	1							27	
					L25	Vb	2							29	
					L27	Vb	2							31	
L28	Vb	2	33												
M25	Vb	1	34												
M25	W	1	35												
V-5	78	11	既	a	L37	Vb	3	17	II B	直線、直線にも網文	網糸状底文	-	網線少、砂粒・ 陶器片		
					b	K38	Vb							5	8
					既	L37	Vb							17	17
V-5	78	13	既	a	M8	Vb	1	3	II B	突起、J字突起付、口縁部文様帯形、網線、網線正 直、突起?あるが組合せず	-	角形、凹線状	網線・砂粒		
					b	N4	Vb							2	2
V-12	54	34	既	a	Q0	Vb	5	47	III A-2	網糸のある瓶土器、網線、半軟竹管状工具押引	網糸裏?網線付	丸みを帯び外縁 する凹出状、網 糸底文	網線少、砂粒		
					Q0	Va	2							7	
					Q0	Vb	23							30	
				b	Q0	Vc	2							32	
					Q10	Va	3							35	
					Q10	Va	4							39	
				既	K9	Va	1							40	
					M10	Vb	1							41	
					P8	Vb	1							42	
					Q0	Vb	5							47	
					Q0	Vb	13							60	
					Q10	Va	4							64	
					Q10	Vb	1							65	
V-12	78	35	既	a	Q0	Vb	3	4	III A-2	小形、平縁	網位の網糸裏? 網線状	丸形、網糸底文			
					Q0	Vb	1							4	
V-12	78	36	既	a	K8	Vb	1	7	III A-2	網線による文様	網糸裏?網線付	丸形、網糸底文、 突起部?平縁	陶器片多		
					K10	Vb	6							7	
V-12	54	37	既	a	K9	Vb	1	25	III A-2	小形、平縁、隅文のみ	網糸裏?網線付	尖り凹部、外縁 起厚、網糸底文			
					K10	Va	1							2	
					K10	Va	1							3	
				b	N10	Vb	3							6	
					N12	Vb	17							23	
					O11	Va	1							24	
				既	O11	Vb	1							25	
					Q10	Va	4							29	
					Q10	Vb	1							30	
					M10	Vb	1							31	
					N11	Va	1							32	
					N11	Vb	3							35	
					N12	Vb	2							37	
V-13	78	38	既(組合-写実)	a	L10	Vb	1	6	III A-2	突起に凹溝付、つまみ状付付、爪による割みのある瓶 土器、半軟竹管状工具の押引	網糸裏?網線付	丸形、丸割み のある網線状付			
					L11	Vb	1							2	
既	L11	Vb	1	3											
	L11	Vb	2	5											
	L11	Vb	1	6											
	L11	Vb	1	7											
	L12	Vb	5	12											
	L12	Vb	1	13											
	L12	Vb	1	14											

表10 包含層出土掲載破片土器一覽(2)

押部	図面	番号	数量・割合	分類・タイプ	形状	点数	總点数	分類	特徴	地名	口部	胎土	
Y-13	70	39	残 (割合)	残	P18	Vb	13	13	ⅡA-2	突起部等に把手状突起、文様帯の胎土層に黒赤土層の有無あり、平縁竹管の押引	稲東第1層切取	外縁する切出状、黒赤土層のある胎土層の胎土	
					P19	Vb	8	8					
					K9	Vb	1	1					
					K10	Vb	7	7					
					L11	Vb	2	2					
Y-13	70	40	残	残	K10	Vb	2	12	ⅡA-2	黒赤土層のある胎土層、平縁竹管の押引	-	外縁する切出状、口縁輪郭下部に黒赤土層のある胎土層	
					K11	Vb	1						1
					L11	Vb	1						1
					M11	Va	1						1
					M11	Vb	1						1
					M12	Vb	1						1
					-	-	2						2
					-	-	1						1
					J9	Vb	3						3
					J10	Vb	2						2
Y-14	80	41	残 (割合)	残	a	110	黒赤土	12	ⅡA-2	縄文のみ、筒状胎付	稲東第1層切取	外縁する切出状、胎土層のある胎土層	
					J11	Va	2						2
					J11	Vb	7						7
					J9	Va	1						1
					J9	Vb	1						1
					J9	Vb	2						2
					J9	Vb	2						2
					J10	黒赤土	1						1
					J11	Va	1						1
					J11	Vb	4						4
Y-14	80	41	残 (割合)	残	b	J9	Va	18	ⅡA-2	縄文のみ、筒状胎付	稲東第1層切取	外縁する切出状、胎土層のある胎土層	
					J9	Vb	1						1
					J9	Vb	2						2
					J9	Vb	2						2
					J10	黒赤土	1						1
					J11	Va	1						1
					J11	Vb	4						4
					K9	Va	1						1
					K9	Vb	2						2
					J10	Va	1						1
J10	Vb	1	1										
Y-14	79	42	残 (割合)	残	a	J11	Va	9	ⅡA-2	縄文の胎土層、平縁竹管の押引。H-7と同一種類(ⅡA-20-1)	筒状	丸形	
					J11	Vb	1						1
					K10	Vb	1						1
					K11	Vb	1						1
					L11	Vb	1						1
					M	Va	1						1
					M	Va	1						1
					J9	Vb	3						3
					J9	Vb	1						1
					J11	Va	1						1
Y-14	80	43	残 (割合)	残	J11	Vb	2	2	ⅡA-2	縄文のみ、突起に貫通孔と胎付	稲東第1層切取	突起、口縁直下に縄文の破片胎付	
					D16	Vb	4						4
					D17	Va	1						1
					D18	Vb	5						5
					D16	Vb	1						1
					D17	Vb	4						4
					D18	Va	12						12
					D16	Vb	1						1
					D18	Vb	1						1
					D17	Va	1						1
Y-15	79	44	残 (割合)	残	a	D16	Vb	13	ⅡA-2	縄文地に、切縁縄文のある胎付	稲東第1層切取	外縁する切出状、胎土層のある胎土層	
					D17	Va	1						1
					D18	Vb	1						1
					D17	Va	1						1
					D18	Vb	8						8
					D17	Vb	1						1
					D18	Vb	7						7
					D18	Vb	9						9
					J12	Va	1						1
					J12	Vb	1						1
Y-15	80	45	残 (割合)	残	J12	Va	7	ⅡA-2	突起に貫通孔、縄文地に、黒赤土層のある胎土層	稲東第1層切取	把手する丸形		
					J11	Vb						1	1
					J12	Vb						5	5
					M11	Va						1	1
					M11	Vb						1	1
					M12	Vb						4	4
					K12	Vb						6	6
					O12	Vb						2	2
					M11	Va						1	1
					M11	Vc						1	1
Y-15	55	46	残 (割合)	残	M12	Vb	3	ⅡA-2	縄文のみ	稲東第1層切取	外縁する切出状、胎土層		
					G11	Vb						17	17
					G11	Vb						2	2
					G11	Vb						1	1
					H10	Vb						1	1
					J10	Va						1	1
					J11	Va						1	1
					J12	Va						1	1
					K34	Va						3	3
					Y-23	80						59	残 (割合)
K34	Vb	4	4										
L33	Vb	1	1										
L33	Vb	1	1										
K34	Va	4	4										
K34	Vb	2	2										
L33	Vb	2	2										
L34	Vb	2	2										
M34	-	1	1										
J25	Va	1	1										
Y-23	80	70	残 (割合)	残	b	J25	Vb	3	ⅡA-3	山形突起14面のみ残存、7面のレンズ状胎付	L2胎付、両端開口	丸形、口の斜向き、底丁に胎付	
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1
					K32	Vb	1						1



表10 包含層出土掲載破片土器一覧(3)

調査年度	調査区画	調査番号	表層・包含層	発掘位置	層位	形状	点数	縄文層	分類	特徴	地名	口唇	出土	
V-23	80	70	瓦	J12	Vb	2		9						
				J13	Va	1								
				J14	Vb	1								
V-24	81	71	瓦(集合)	K12	Ⅱ	1			ⅡA-3	「つ山」状突起、突起下に胎付刺痕。レンズ状破片	I&II新行、破部	電土層移行により、底層する角形。底の割れ目		
				a	E20	Vb	2							10
				b	F10	Vb	2							2
				F12	Vb	2	2							
				G20	Vb	1	2							
V-24	81	72	瓦	H27	Vb	17	20		ⅡA-3	胎状突起、胎状胎付。半条竹管によるレンズ状破片	I&II新行、破部	胎土層移行により、底層する角形。口唇部には胎の痕跡あり。胎付による割れ目あり。		
				I27	Vb	3	3							
				J27	Vb	20	20							
V-24	81	73	瓦	K-4	層上1	1			ⅡA-3	小形。山形突起。レンズ状破片、胎付刺痕	I&II新行	角形、胎状胎文		
				K20	Va	1	3							
				K20	Vb	6	8							
V-24	81	74	瓦(集合)	L20	Vb	1	1		ⅡA-2	レンズ状破片	胎状第1層胎状	外層する可出状。底の割れ目		
				L20	Vb	2	2							
				L24	Vb	9	11							
V-24	81	75	瓦(集合)	M14	Vb	17	17		ⅡA-3	半条竹管の本破片。方形。尖点に胎付。突刺刺痕	I&II新行	丸形、底の破れ目	少部多	
				M14	Va	2	14							
				M14	Vb	14	14							
V-24	81	76	瓦	N17	Vb	3	3		ⅡA-3	半行化線	-	切出状。底の割れ目		
				N17	Vb	6	6							
V-24	81	77	a	O4	胎状	15	15		ⅡA-3	胎部のみ。本条胎状線	I&II新行	-		
				b	O6	胎状	6							6
				c	O6	胎状	7							9
V-25	81	78	瓦(集合)	O6	胎状	7	7		ⅡA-3	3層2層の突起。山形突起に胎付。口唇に本条胎状線	I&II新行	角形、底の破れ目	多い	
				O6	胎状	183	183							
				P20	Vb	5	5							
V-25	82	79	瓦	Q2	Vb	1	1		ⅡA-3	山形突起周辺に刺痕のある胎付	I&II新行	角形、底の破れ目		
				Q2	Vb	6	7							
V-25	82	80		R14	Vb	6	6	ⅡA-3	刺文のみ。平輪に電状胎付	胎状第2層胎状	底層する可出状。底の割れ目			
V-25	82	81	a	O2	Vb	1	1		ⅡA-3	「つ山」状突起、突起下に胎状胎付	I&II新行、破部	切出状。底の割れ目	胎部針多	
				O2	Vb	1	1							
				P20	Va	1	1							
				P20	Va	1	1							
				Q2	Vb	2	2							
				Q2	Vb	2	2							
				P20	Vb	1	1							
				P20	Vb	1	1							
				Q2	Vb	4	4							
				Q2	Va	6	6							
				Q2	Vb	18	18							
				Q2	Va	7	7							
				Q2	Vb	15	15							
				P20	Va	6	6							
				P20	Vb	5	5							
P20	Va	1	1											
V-25	82	82	瓦	R14	-	1	2		ⅡA-3	外～内面にまたがる胎土層移行による突起。突起下に胎付	I&II新行	角形、胎状刺文・底の破れ目		
				R18	Va	2	3							
				P20	Vb	30	38							
V-26	82	83	瓦(集合・厚面)	Q2	Vb	6	6		ⅡA-3	刺文のみ。舟状突起、貫通孔	胎状第2層胎状	角形、胎状線部の割れ目		
				P20	Vb	17	17							
				P20	Vb	21	42							
V-26	82	84	瓦	Q2	Vb	19	19		ⅡA-3	刺文のみ。唇台部に刺痕あり。張り出す	胎状第1層胎状	丸形、半条竹管の挿入跡あり		
				G21	Va	7	7							
				G21	Vb	5	10							
V-26	82	85	瓦(集合・厚面)	Q4	Ⅱ	4	4		ⅡA-3	刺文のみ	胎状第1層胎状	丸形、底の割れ目	胎部少量、胎部多い	
				Q4	Ⅱ	5	5							
				Q4	Ⅱ	2	2							
V-26	82	86	瓦	Q2	Va	1	1		ⅡA-3	胎状胎文	I&II新行	角形、胎状胎文		
				C20	Vb	2	3							
				C20	Vb	1	2							
V-26	83	87		H20	Vb	1	1	ⅡA-3	胎状胎文	胎状胎文	切出状。半条竹管付	胎部・胎状		
V-25	83	88	a	I27	Vb	1	2		ⅡA-3	胎状胎文、底層	胎状胎文	-	少部多	
				J12	Vb	1	2							
V-27	83	89	a	I11	Vb	1	1		ⅡA-3	胎状胎文	胎状胎文	切出状。底の割れ目	胎部・胎状・胎部付	
				I11	Vb	1	1							
				I11	Va	1	1							
				I17	Vb	1	3							
				I18	Vb	1	1							
				I18	Vb	4	4							
				I17	Vb	3	8							
				K13	Va	1	1							
				I12	Vb	1	1							
				I11	Va	1	1							
				I11	Vb	1	6							
				I12	Vb	1	1							
				K12	Vb	2	4							
				I12	Vb	2	2							
				I11	Vb	2	4							
I17	Va	2	2											
I11	Vb	1	1											

表10 包含層出土掲載破片土器一覧(4)

時期	図版	番号	形状・器名	発見・ブランク	部位	点数	検出数	分類	特徴	地文	口形	胎土
Y-27	83	88	瓦	H16	Vb	1	11					
				F17	Vb	2						
				H11	Vb	4						
Y-27	82	90	瓦	C29	Vb	1	1	ⅡA-3	突起部	L状斜行?	-	
				D13	Vb	1						
Y-27	82	91	瓦	E23	Vb	1	1	ⅡA-3	突起部	L状突起部同斜行	-	
				E21	Vb	1						
Y-27	82	92	瓦	O27	Vb	1	1	ⅡA-3	突起部、貫通孔	-		
				F26	Va	1						
Y-27	82	93		L20	Vb	1	1	ⅡA-3	突起部、突起部付断面合わせ、立体割			
Y-28	83	94		K6	Vb	3	5	ⅡA-3	瓦割形式。山形突起に当たった胎付、外・内面にまたがった胎付	L状斜行	丸形、底の斜形あり	
				O16	Va	1						
Y-28	83	95		N9	W	1	1	ⅡA-3	瓦割形式。口唇に微細部取付胎付、突起に外周・内面にまたがった胎付。口唇に当たった胎付	L状斜行	-	
Y-28	83	96		C28	Va	1	1	ⅡA-3	瓦割形式。沈線文	L状斜行	切出状、実い種の胎形あり	
				D16	Va	1						
Y-28	83	97		D16	Va	1	3	ⅡA-3	瓦割形式。口唇に当たった沈線	L状斜行	底面する切出状、沈線	
Y-28	83	98	瓦	K8	Va	9	8	ⅡA-3	瓦割形式。突起部口唇に沈線	L状斜行	切出状、実い種の胎形あり	
				K8	Va	6						
Y-28	81	99		H12	W	1	5	ⅡA-3	瓦割形式。大形の三日月形突起部、突起部取付に当たった胎付	L状斜行	切出状、実い種の胎形あり	
				F12	Va	2						
				F12	Vb	1						
				L8	Va	1						
				J18	Va	1						
				J27	Va	2						
				J27	Vb	2						
Y-28	82	100	横(縁合-等厚)	M33	Vb	1	3	ⅡA-3?	口縁折り返しあるいは胎付、胎付による突起	L状斜行	縁のある切出状、細線文	
				J17	Vb	1						
				K17	Vb	1						
				K17	Vb	1						
Y-28	83	101		G11	Vb	1	1	ⅡA-3?	突起部、一列の貫通孔	斜	細い、底面平坦	
				G4	Va	2						
				G48	Vb	3						
				G49	Vb	2						
				G50	Va	2						
Y-29	84	102	瓦	H48	Vb	1	11	ⅡB	沈線文	縁位の胎本文	-	小器多く、胎い
				H49	Vb	2						
				H50	Vb	4						
				G45	Vb	1						
				G47	Vb	3						
				G47	Vb	3						
				H48	Vb	1						
				H48	Vb	1						
				H48	Vb	1						
				H48	Vb	1						
				H48	Vb	1						
Y-29	84	103	a	G56	Va	1	3	ⅡB	波状口縁、沈線文	縁位の胎本文	丸形、突起部やや肥厚、底下に胎本	
				G47	Vb	1						
				G47	Vb	1						
Y-29	84	104	b	M45	Va	1	2	ⅡB	平縁、沈線文	縁位の胎本文	丸形	
				M45	Vb	1						
Y-29	84	105		G44	Vb	1	1	ⅡB	縁文のみ	縁位の胎本文	丸形、底下に胎本による突起	
				G45	異胎本	1						
Y-29	84	106	瓦	G44	Vb	9	22	ⅡB	波状口縁、縁文のみ	縁位の胎本文	丸形	
				G45	Vb	12						
				G44	Vb	3						
				G45	Vb	4						
Y-29	84	107	瓦	H41	Vb	1	1	ⅡB	突起部	縁位の胎本文	丸形	
				G45	Vb	7						
Y-29	84	108	瓦	G47	Va	1	8	ⅡB	突起部	縁位の胎本文	-	
				G45	Vb	3						
Y-30	84	141	瓦	D18	Vb	2	2	ⅡA	焼戻式。折り返し口縁、波線文	L状斜行	-	小器多
				C29	異胎本	1						
				S17	Va	9						
				S17	Vb	1						
Y-30	84	142	瓦	S17	Va	3	10	ⅡA	焼戻式。折り返し口縁、波線文	異斜行	角形	胎器多
				S17	Va	3						
				S17	Vb	16						
				S17	Vb	1						
Y-32	84	143	瓦	H11	Va	12	12	ⅡA	2段の筒巻状沈線。60°折戻部・80°胎付	斜	丸形	胎器多い
				H11	Va	1						
Y-32	85	144	瓦	F13	Vb	6	6	ⅡA	筒巻状沈線、2段、やや肥厚	斜	角形	胎器多
				F13	Vb	4						
Y-32	85	145	瓦	K15	Vb	1	2	ⅡA	筒巻状沈線、赤色顔料付	-	-	
				H12	W	1						
				H12	Vb	4						
				K13	Va	1						
				H14	異胎本	2						
				H14	Vb	1						
				H13	Va	1						
				H13	Vb	5						
				H13	W	1						
				K13	Va	1						
				K14	Va	1						
				K14	Vb	1						
				K15	Vb	1						
				K17	Va	2						
				K18	Vb	2						
				Y-32	85	146						
H16	Vb	1										
H12	Vb	12										
H12	Vb	1										

表10 包含層出土掲載破片土器一覧(5)

博物館	図版	番号	技術・器名	器種・ 形状・Y	部位	点数	総点数	分類	特徴	地文	口縁	胎土
Y-37	85	146	残	82	Vb	2	39					
				109	Vb	2						
				111	Va	1						
				112	Va	2						
				114	Vb	1						
				116	Va	1						
				K13	Va	1						
				K14	Va	4						
				K14	Vb	2						
				K15	Vb	2						
				K17	Vb	1						
K14	Va	1										
K15	Vb	1										
OK	Vb	1										
Y-30	85	147		F14	Va	8	5	WA	3段の浅鉢状土器	黒	丸形	
Y-30	85	148		246	Vb	8	5	WA	2段の浅鉢状土器、浅縁のある折り返し口縁			
			残	245	Vb	6	6					
				177	Vb	2	2					
Y-30	85	149		138	Vb	1	2	WA	浅鉢状土器、深れた8の字底付	黒	丸形	
			残	137	V	1	1					
Y-30	88	150		G12	Vb	1	3	WA	陶文面に横線状文様、8の字底付	1段底付	角形	
Y-30	85	151		K10	Vb	1	1	WA	小形、浅鉢状土器、F-30と同一器種(図P-18-1)	黒	角形、別み	
Y-30	85	152		112	Vb	1	1	WA	浅鉢状土器	黒	丸形	
				116	Va	1						
				116	Vb	33						
				115	Vb	1	56					
				116	Vb	1						
Y-30	86	153		116	Va	2	3					
			残(器名)	116	Va	2						
				G13	Vb	1						
				115	Va	9		WA	器位の区画明確、区画内にX字彫・山形文様	黒		
				116	Va	2						
				116	Vb	49	68					
				115	Vb	2						
				118	Va	3						
				115	Vb	1						
Y-30	86	154		M16	Va	1		WA	器位の区画明確、区画内に横線の並行文様、突縁付	黒	角形	
				K46	Vb	1	3					
				K47	Vb	1						
				K46	Va	12	21					
Y-30	86	155		K46	Vb	9		WA	突縁下に器位の区画明確、区画内不規則文様	黒	丸形	
			残	G43	Vb	1	13					
				148	Vb	1						
				147	Va	6						
				K46	Va	1						
				K46	Vb	1						
				O44	Vb	1						
				243	Va	3	5					
Y-30	87	156		242	Va	1	2	WA	浅鉢も竹管状工具の痕跡、F-26・36から同一器種が出土(図掲載)	黒	丸形	
			残	F14	Vb	1						
				c	F14	Vb	2					
				d	F14	Vb	1					
				F14	Vb	1						
			残	F14	Vb	1	2					
Y-30	86	157		K12	Vb	7	12	WA	突縁に8の字底付、突縁上端平直、突縁に付着する山形片縁	黒	角形	
				K13	Va	5						
Y-30	87	158		K15	Va	2	3	WA	浅鉢状土器、突縁に別み	黒	角形	
				159	Vb	2						
Y-30	87	159		160	Vb	8	9	WA	短行浅鉢、並行浅縁のある折り返し口縁、突縁に別み	黒	角形	
			残	116	Vb	1	3					
				118	Va	1						
				118	Vb	1						
				118	Va	1						
				159	Va	1						
Y-30	87	160		160	Vb	2	8	WA	矢羽根状土器	黒	角形	
				K20	Va	1						
				K20	Va	1						
				120	Va	1						
				119	Va	1	2					
Y-30	87	161		118	Va	1	2	WA	器位の並行文様	黒	角形	
			残	111	Va	2	4					
				111	Vb	2						
				118	Vb	2						
				118	Va	2						
				K12	Va	1	7					
				K12	Vb	1						
				8	Vb	2						
Y-30	87	162		8	Vb	1		WA	斜紋並行文様に11段文様の文様を器位に並記	黒	丸形、折り返し	
			残	119	Vb	1						
				119	Vb	1						
				111	Vb	1						
				K11	Va	1	11					
				K11	Va	1						
				K12	Vb	3						
				K13	Va	1						
				O10	Va	1						
				F15	Vb	2	11					
Y-40	87	163		115	Va	2	11	WA	器位器縁の3年級土器、器やかな突縁に浅鉢・山形土器	黒	角形	
			残	116	Vb	7						
				115	Va	1						
				116	Vb	3	5					
				O11	Va	1						
				F14	Va	1						
				F14	Vb	1	3					
				K15	Va	1						
				F15	Va	1						
Y-40	87	164		112	Vb	1		WA	突縁に扇形浅鉢	黒	角形	
			残	K14	Va	1						
				K15	Va	3	9					

表10 包含層出土掲載破片土器一覧(6)

種別	図版	番号	枚数・組合数	表層・ブレイク	用途	点検	総点検	分類	特徴	出土	口部	胎土
V-40	87	164	瓶	K10	Vb	1		WA	縦線する平行比線・蛇行状線による文様	瓶	内形	
				K11	Vb	1						
				K12	Vb	2						
				K13	Va	1						
V-40	87	165	瓶	F10	Vb	6	6	WA	縦線する平行比線・蛇行状線による文様	瓶	内形	
				F11	Vb	1						
				F12	Va	2						
				F13	Vb	9						
V-40	87	166	瓶	K10	Va	3	24	WA	縦線する平行比線・蛇行状線による文様	瓶	内形	
				K11	Va	1						
				K12	Vb	1						
				K13	Va	15						
V-40	88	167	瓶	H5	Vb	2	4	WA	縦線する平行比線・蛇行状線による文様。折り返し口縁、突起上に指環状圧痕	L1.斜行	内形、折り返し	
				H6	Va	1						
V-40	88	168	瓶	F10	Vb	5	5	WA	太めの斜門部・指環状線	瓶	内形	
				H12	Vb	1						
V-40	88	169	瓶	J4	Va	1	7	WA	瓶、太めの枕線、縦線の区画、区画内に向背する斜状枕線、網罟	瓶	内形	
				J14	Vb	1						
				K13	Va	2						
				K14	Va	1						
				M13	Va	1						
				M7	Va	1						
				J15	Va	2						
				K12	Va	2						
				K14	Va	2						
				L30	Vb	1						
				H18	Vb	1						
				V-41	88	170						
K11	Vb	1										
K11	Vb	2										
K11	Vb	2										
V-41	88	171	瓶	H18	Vb	6	6	WA	太の枕線、口縁部に魚鱗、網罟等付着あり	L1.直線状	内形	
				J9	Va	1						
V-41	88	172	瓶	H9	Vb	1	2	WA	口縁部山形枕線	瓶	内形	
				K6	Vb	1						
V-41	87	173	瓶	K8	Vb	1	2	WA	小形の鉢、屈曲部、平行状線間・直線の文様が口部に連続	瓶	内形、折り返し	
				G18	Vb	1						
V-41	87	174	瓶	G18	Vb	2	7	WA	小形の鉢、屈曲部、山形枕線、突起上に指環状線のある胎付	瓶	内形	
				G16	Va	1						
				G17	Vb	4						
				G17	Vb	1						
V-41	88	175	瓶(組合)	F13	Va	4	4	WA	小形の鉢、縦文地に平行状線、竹管状工具による刻印	L1.斜行	-	
				F13	Va	2						
V-41	88	176	瓶	F13	Va	2	2	WA	小形の鉢、扇形区画(L1.直線状)	瓶	内形	
				K11	Vb	1						
				K12	Va	2						
				K14	Vb	1						
				L11	Vb	1						
				L12	Va	1						
				M12	Va	1						
				M13	Va	4						
				M14	Va	1						
				M15	Vb	1						
				F10	Vb	1						
				G15	Vb	1						
				H5	Va	1						
				H9	Va	1						
				H2	Vb	2						
				H9	Vb	1						
				H19	Va	2						
				G15	Va	4						
				K12	Vb	2						
				K14	Va	15						
				L13	Va	1						
				L13	Vb	2						
				L14	Va	1						
				L14	Vb	7						
L15	Va	1										
L16	Vb	2										
L16	Va	1										
M13	Va	3										
M15	Va	1										
K12	Vb	1										
H19	Vb	1										
V-41	87	177	瓶	H19	Va	1	28	WA	種子目状枕線、突起にHの字輪付	瓶	内形	
				H11	Vb	1						
				H11	Vb	1						
				H11	Vb	1						
				H12	Vb	1						
				H11	Vb	1						
				H12	Vb	1						
				H12	Va	1						
				F12	Vb	1						
				H11	Vb	1						
V-42	88	179	瓶	F11	Va	30	26	WA	種子目状枕線、上下とも底面きれない	瓶	内形、折り返し	
				F11	Vb	6						
V-42	88	180	瓶(組合)	F11	Va	22	1	WA	縦文地に種子目状枕線、突起にボタン状胎付	L1.直線状	内形	
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						
				F11	Va	2						



表10 包含層出土掲載破片土器一覧(8)

時期	図版	番号	様式・器名	器種・フリット	層位	点数	検出点	分類	特徴	地文	口径	胎土
Y-43	89		瓦	R12	Va	1						
				R14	Va	1						
				N16	Va	1						
				N16	Vb	1						
				O15	Vb	2						
				O16	Va	2						
Y-43	89	199	瓦	G14	Vb	4	4	FA	器底状縁部、横筋脚	瓦	-	
				G14	Vb	3	3					
Y-44	89	200	瓦	J9	Va	1	3	FA	横文のみ、突起に8の字状筋付	新装し焼成	内部	
				J9	Vb	1	3					
Y-44	89	201	瓦	G10	Va	2	3	FA	横文のみ、肩みのある小形突起	R12斜行	丸形	
				G10	Va	1	3					
Y-44	89	202	瓦	H20	Va	1	1	FA	横文のみ、肩壁付、突起部	R12斜行斜行	丸形	
				H20	Va	1	1					
				H20	Va	1	1					
Y-44	89	203	瓦	G44	Vb	3	5	FA	横文のみ	L2横走	丸形、折り返し	砂较多
				G44	Vb	1	2					
				L49	Vb	1	2					
				F12	Va	1						
Y-44	89	204	瓦	G12	Va	8	10	FA	横文のみ	L2斜行	丸形、折り返し	
				G12	Vb	2						
				G12	Vb	2						
				G12	Vb	2						
				J9	Vb	1	7					
				K18	Va	1						
				K18	Vb	1						
Y-44	89	205	瓦	G13	Va	6	35	FA	横文のみ、多岐の折り返し	L2横走	丸形、折り返し	
				F14	Va	11						
				F14	Vb	14						
				G13	Vb	1						
				G14	Va	1						
				G14	Vb	1						
				F13	Vb	1						
				F14	Vb	5						
				G13	Va	3						
				G12	Vb	10	44					
				G14	Va	7						
				G14	Vb	17						
				H13	Vb	1						
Y-45	90	206	瓦	H12	横上瓦	2		FA	横文のみ、多岐の折り返し	焼成し	丸形、肩み	
				K14	Va	1	4					
				S19	Va	1						
				F13	Vb	1						
Y-45	90	207	瓦	G13	Va	1	5	FA	横文のみ	新行する器本文	丸形、折り返し	
				G12	Vb	3						
				G14	Vb	2						
Y-45	90	208	瓦	J1	Vb	1	2	FA	横文のみ、多岐の折り返し、内面に多岐	L2斜行	丸形	
				H16	Vb	2	2					
Y-45	90	209	瓦	K18	Va	1	4	FA	横文のみ、口径直下に横筋	刃状	丸形	
				K10	Vb	1						
				K10	Va	1	2					
Y-45	90	210	瓦	K14	Vb	1	1	FA	横文のみ、口径直下縁部	L2斜行	丸形、縁部	
				H44	Va	1	1					
Y-45	90	211	瓦	M13	Vb	4	4	FA	横文のみ、器本文、口径直下筋付	横走する器本文	丸形、器本文による横筋	
				L10	Vb	11	11					
Y-45	90	212	瓦	J9	Va	1		FA	Fが状態付存	L2横筋斜行、筋付等では横筋無し、刃状をなす	内部、縁部破文	
				K9	Va	2						
				K9	Vb	1						
				K9	Va	3						
				K9	Vb	3						
				K9	Vb	9						
				K10	Vb	3						
				K10	Vb	1						
Y-45	90	213	瓦	K13	Va	7	22	FA	Fが状態付存	L2横筋斜行、筋付等では横筋無し、刃状をなす	内部、縁部破文	
				K9	Vb	1						
				K9	Va	3						
				K9	Vb	3						
				K11	横筋本	15						
				J9	Va	1						
				J9	Vb	2						
				J10	Vb	1						
				K9	Vb	9						
				K10	Va	20	91					
Y-46	90	214	瓦	H1	Va	1	7	FA	横文の口縁部、突起部に縁筋付	瓦	丸形	
				J11	Vb	19	20					
Y-46	90	215	瓦	G12	Va	1	1	FA	横文の口縁部、突起部に縁筋付、突起部直上縁部は器底	瓦、内面にL2斜行	内部	
				G12	Vb	1	1					
Y-46	90	216	瓦	G43	Vb	1	1	FA	横文の口縁部、肩みのある小形突起、肩壁付	瓦	-	
				J9	Vb	1	2	FA	器の縁部、器底、器底に平筋部?	瓦	-	
Y-46	90	218	瓦	J10	Vb	5	5	FA	横文、多岐の折り返し、折り返し部に横筋筋	瓦	丸形	
				J10	Va	4	4					
Y-46	90	219	瓦	G16	Vb	1	3	FA	横文、内面に肩壁?による横筋	瓦	角筒する器底状	
				J16	Vb	3						
				K13	Va	1						
Y-46	90	220	瓦	L33	Vb	1	2	FA	横文の胴部、赤色顔料付着	瓦	-	
				K12	Va	1	1					

表10 包含層出土土掲載破片土器一覧(9)

期別	図版	番号	材質・包含層	形状・ブレイク	部位	点数	総点数	分類	特徴	底文	口唇	胎土	
V-46	90	221	黄	G40	Vb	4	5	ⅡA	底縁、唇上付蓋、厚い	L18新行	-	小器多	
				G41	Vb	1							
				G42	Vb	1							
				G43	Vb	1							
				G44	Vb	2							
V-46	90	222	黄	K10	Va	1	1	ⅡA	小形の蓋縁、底文	黄	-		
				K10	Va	1							
				K10	Va	1							
				K10	Va	1							
				K10	Va	1							
V-46	90	223	黄	N20	Va	1	3	ⅡA	大形平底、Z字状底縁	黄	片縁する切出状		
				N20	Va	1							
				N20	Va	1							
				N20	Va	1							
				N20	Va	1							
V-46	90	232	黄	N40	Va	1	1	ⅡC	底口部				
				N40	Va	1							
				N40	Va	1							
				N40	Va	1							
				N40	Va	1							
V-46	99	235	黄	N28	Vb	1	18	ⅡC	底縁文	羽状		内縁する切出状	
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
V-46	90	236	黄(融合・厚灰)	K10	Va	2	5	ⅡC	底、口縁に溝状底縁	羽状		角形	
				K10	Va	2							
				K10	Va	2							
				K10	Va	2							
				K10	Va	2							
V-46	90	237	黄	N47	Va	1	2	ⅡC	底文のみ、美貼	羽状		内縁する切出状	
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
V-46	90	238	黄	N48	Vb	2	3	ⅡC	小形の縁、美貼	L18新行		内縁する角形	
				N48	Vb	2							
				N48	Vb	2							
				N48	Vb	2							
				N48	Vb	2							
V-46	90	239	黄	N48	Vb	5	8	ⅡC	小形の縁、底文のみ	L18新行		内縁する切出状	
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
				N48	Vb	1							
V-46	90	240	黄	N47	Va	1	3	ⅡC	小形の縁、底文のみ	L18新行		内縁する切出状	
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
				N47	Va	1							
V-46	90	241	黄	O40	M	1	1	Ⅱ	裏面付、裏付底縁、裏縁直しい	-	角一丸形	砂質・小器多	
				O40	M	1							

表11 包含層出土土掲載石器・石製品一覧(1)

期別	図版	番号	製造地名	小ブレイク	形状	図版番号	名称	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	欠損率	経年	付帯物	包含層	備考	
ⅡV	49	104	1	K	24	黄	39	石鏃	14.3	1.2	0.4	2.6	黄砂	1				
ⅡV	49	104	2	L	42	黄	3	石鏃	3.1	1.7	0.5	1.9	黄砂	0				
ⅡV	49	104	3	T	18	黄	53	石鏃	2.9	1.7	0.3	1.1	黄砂	0				
ⅡV	49	104	4	O	13	黄	47	石鏃	2.8	1.5	0.4	1.2	黄砂	0				
ⅡV	49	104	5	Q	19	黄	9	石鏃	2.5	1.6	0.3	0.9	黄砂	0				
ⅡV	49	104	6	Q	15	黄	6	石鏃	2.2	1.0	0.3	0.6	黄砂	0				
ⅡV	49	104	7	V	24	黄	3	石鏃	3.2	1.3	0.3	0.9	黄砂	0		2		
ⅡV	49	104	8	K	18	黄	47	石鏃	3.5	1.6	0.4	1.6	黄砂	0				
ⅡV	49	104	9	S	13	黄	3	石鏃	3.3	1.3	0.4	1.1	黄砂	0				
ⅡV	49	104	10	M	15	黄	273	石鏃	4.4	1.6	0.4	2.2	黄砂	0	3			
ⅡV	49	104	11	K	38	黄	47	石鏃	4.0	1.3	0.3	1.4	黄砂	0				
ⅡV	49	104	12	C	13	黄	358	石鏃	3.4	1.8	0.8	2.7	黄砂	0				
ⅡV	49	104	13	C	20	黄	31	石鏃	4.2	1.1	0.5	2.1	黄砂	0				
ⅡV	49	104	14	R	6	黄	42	石鏃	5.2	1.6	0.6	3.1	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	15	Q	19	黄	12	石鏃	4.3	1.7	0.5	1.9	黄砂	0				
ⅡV	49	104	16	K	11	d	12	石鏃	15.0	1.4	0.7	2.7	黄砂	1				
ⅡV	49	104	17	K	48	黄	38	石鏃	3.4	1.3	0.8	2	黄砂	0				
ⅡV	49	104	18	K	27	黄	9	石鏃	4.0	1.4	0.7	2.9	黄砂	0				
ⅡV	49	104	19	L	12	黄	181	石鏃	4.0	1.7	0.5	2.2	黄砂	0				
ⅡV	49	104	20	I	12	黄	182	石鏃	3.1	1.5	0.6	1.8	黄砂	0				
ⅡV	49	104	21	E	23	a	7	石鏃	2.8	1.2	0.5	1.5	黄砂	0				
ⅡV	49	104	22	Q	6	黄	25	石鏃	2.5	1.2	0.4	0.8	黄砂	0				
ⅡV	49	104	23	U	17	黄	86	石鏃	2.1	1.3	0.4	0.7	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	24	F	15	黄	384	石鏃	2.1	1.0	0.4	0.6	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	25	M	47	黄	13	石鏃	3.1	1.2	0.4	0.8	黄砂	0				
ⅡV	49	104	26	K	12	c	7	石鏃	3.4	1.2	0.5	1.4	黄砂	0				
ⅡV	49	104	27	H	15	黄	5	石鏃	2.9	1.4	0.4	0.9	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	28	G	17	黄	18	石鏃	3.2	1.1	0.5	1.2	黄砂	0				
ⅡV	49	104	29	J	10	b	1	石鏃	3.7	1.5	0.8	2.5	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	30	K	9	c	14	石鏃	3.5	1.6	0.6	2.4	黄砂	0				
ⅡV	49	104	31	K	18	b	11	石鏃	4.7	1.7	0.7	4	黄砂	0	1			
ⅡV	49	104	32	O	40	V1	47	石鏃	2.8	1.7	0.6	22	黄砂	0				
ⅡV	49	104	33	K	16	黄	13	石鏃	2.6	1.0	0.2	0.6	黄砂	0				
ⅡV	49	104	34	O	21	黄	6	石鏃	2.5	1.3	0.4	0.6	黄砂	0				
ⅡV	50	104	35	P	18	黄	28	石鏃	7.3	2.5	0.9	14.2	黄砂	0				
ⅡV	50	104	36	P	20	黄	7	石鏃	7.8	3.0	0.7	18	黄砂	0				
ⅡV	50	104	37	I	11	d	17	石鏃	8.8	2.4	1.1	10.2	黄砂	0				
ⅡV	50	104	38	H	18	黄	5	石鏃	4.2	3.1	1.0	11.7	黄砂	0				
ⅡV	50	104	39	G	11	c	13	黄砂	8.2	4.7	2.1	84	黄砂	0				
ⅡV	50	104	40	I	14	黄	175	黄砂	8.0	8.5	1.4	52.9	黄砂	1				
ⅡV	50	104	41	K	13	黄	477	黄砂	7.1	5.1	1.4	29.3	黄砂	0				
ⅡV	50	104	42	F	31	d	1	黄砂	16.2	7.0	2.0	181.1	黄砂	0				
ⅡV	50	104	43	L	15	黄	227	黄砂	5.1	4.0	1.7	27.4	黄砂	0				
ⅡV	50	104	44	D	22	黄	6	黄砂	6.3	2.4	0.8	9.4	黄砂	1				
ⅡV	50	104	45	K	48	黄	1	黄砂	3.6	2.5	0.9	6.2	黄砂	0				

縦横内容は次のとおりである。

欠損率-0:完全 1:全体の1/3以上欠損 2:半片程度欠損 3:全体の2/3未満欠損 4:欠損後再生 ( ) 付帯物:融合により埋められたものである。

黄 黄-1:黄砂 黄砂-1:アスファルト製付帯物 2:付帯物不明のもの 融合-1:融合 融合-2:融合 融合-3:黄砂融合





表11 包含層出土掲載石器・石製品一覧(3)

時期	図録番号	調査区名	小プラッタ番号	層位	図録番号	器種名	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	欠陥部	製作	検出	備考
Ⅴ	58	106	127	A	46	Va	5	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	106	127	N	44	Va	25	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	106	127	N	44	Vb	38	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	106	127	O	45	Vb	34	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	128	J	13	Vb	323	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	129	E	21	d	Vb	6	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	129	J	28	Vb	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	131	N	11	Vb	99	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	132	L	13	Va	132	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	133	O	49	Vj	45	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	134	J	20	b	Vb	6	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	135	J	13	Vb	324	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	136	C	22	b	Vb	12	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	109	137	O	44	Vb	13	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	138	O	36	Vb	25	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	139	G	38	Vb	2	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	140	L	11	c	Va	6	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	141	K	14	Va	171	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	142	K	13	Vba	429	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	143	K	13	Vba	431	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	144	K	13	Vba	432	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	144	L	12	Vba	229	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	145	L	13	Vba	230	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	110	146	J	14	Vba	268	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	147	E	21	c	Vb	3	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	148	H	16	d	Vb	8	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	149	J	9	d	Va	7	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	149	J	11	a	Vb	15	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	150	C	22	b	Vb	1	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	151	N	15	Vb	70	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	152	O	35	Va	28	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	153	M	12	Va	51	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	154	N	7	Vb	23	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	155	F	12	b	Vb	23	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	111	156	J	9	d	Vb	3	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	157	J	16	a	Vb	4	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	157	G	12	Vb	9	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	158	J	10	d	Vb	1	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	158	O	5	Va	25	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	159	F	13	c	Vb	41	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	160	L	14	Vb	315	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	161	M	12	N	42	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	161	O	12	Va	87	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	162	L	13	b	Vb	7	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	163	O	5	Va	28	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	164	N	14	Va	149	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	164	O	11	Va	81	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	165	J	10	b	Vb	20	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	166	E	22	a	Vb	8	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	167	K	15	Vb	125	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	112	168	L	8	b	Va	2	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	114	169	J	46	Vb	168	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	114	170	E	19	a	Vb	2	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	114	171	F	13	b	Va	16	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	114	172	G	12	c	Va	45	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	115	173	K	13	b	Va	14	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	115	174	L	16	b	Vb	6	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	115	175	O	45	Va	26	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	115	175	O	45	Va	27	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	115	176	O	45	Va	17	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	177	L	12	Vb	232	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	178	J	12	Vb	870	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	179	F	19	Vb	543	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	180	N	47	Vj	25	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	180	N	47	Va	28	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	181	K	13	Vb	435	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	116	182	K	11	Vb	494	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	183	N	47	Vj	22	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	184	H	12	Vb	28	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	184	L	18	Vb	188	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	185	O	43	Vb	7	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	186	O	29	Vb	120	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	186	O	29	Vb	133	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	186	F	30	Vb	21	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	187	L	11	a	Vb	28	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	117	188	G	15	準-222	123	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	1	E	16	d	Va	18	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	2	L	12	a	Va	3	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	3	L	13	Vb	569	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	4	E	16	a	Va	111	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	4	M	16	Va	111	—	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	5	F	12	b	Vb	5	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	6	G	45	a	Vb	4	—	—	—	—	—	—	—
Ⅴ	58	120	7	K	25	Vb	5	—	—	—	—	—	—	—	—

図録内容は次のとおりである。

欠陥部——○：両面；△：全体0/2以上露出；□：平均程度露出；◇：全体0/2未満露出；△：欠陥露出なし；（ ）：付着部は露出に限り開示したものである。

製法——○：打製石器；付着部——1：アスファルト製付着；2：付着部無し；製法不明——1：製法不明；製法不明——2：製法不明

表12 包含層出土掲載土製品一覧

種別	図版	番号	図体 番号	図章・ 接合状	遺構・ グラフ	層位	点数	総点数	分類	特徴	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
V-67	119	1	422		Q10	Vb	1	2	土偶	足? 3本組繩縁。2と同一方向に傾斜	(4.3)	(5.2)	(5.6)
						Q11	Vb						
V-67	119	2	421		Q11	Va	1	1	土偶	足? 3本組繩縁。1と同一方向に傾斜	(3.8)	(4.6)	(5.2)
						Vb	1						
V-67	119	3	425		H15	Vb	1	1	土玉	球形、竹管剛尖列。	2.0	1.9	1.9
V-67	119	4	426		F13	Va	1	1	土玉	球形、竹管剛尖列。	1.9	1.7	1.6
V-67	119	5	424		K11	Va	1	1	土玉	紡錘形、赤赤任痕	(2.2)	(1.2)	(0.7)
V-67	119	6	423		H15	Vb	1	1	土玉	球形、無文	1.4	1.1	1.1
V-67	119	7	428		I12	Vb	1	1	土玉	楕円、扁平。	1.7	1.4	0.5
V-67	119	8	427		L15	Va	1	1	土玉	紡錘形? 貫通孔2方向。つまみ部の可能性も有り。	(2.0)	1.6	1.1
V-67	119	9	429		G12	Vb	1	2	土偶	板状。表面に枕線文	(5.9)	(3.6)	1.0
						H12	Va						
V-67	119	10	431		G11	Va	1	3	鏝形土製品	無文。組部貫通孔無し。	(5.0)	(3.5)	(2.5)
						G12	Vb						
						G13	Va						
V-67	119	11	432		G12	Va	1	1	鏝形土製品	無文。組部貫通孔あり。	(3.3)	(3.7)	(2.6)
						Vb	2						
V-67	119	12	433		H16	Vb	1	1	三角形土製品	無文土薄片を研磨	(3.4)	(3.6)	0.9
V-67	119	13	434		E17	Va	1	1	三角形土製品	無文土薄片を研磨	3.4	(2.8)	0.6
V-67	119	14	435		F14	Vb	2	2	土製品	蓋形。貫通孔のある突起?をもつ。調査相違	(6.9)	(6.5)	(1.6)
V-67	119	15	410		E22	Vb	1	1	皿Aミニチュア	台付きの台部分。	(2.1)	(2.3)	3.1
V-67	119	16	411		E20	Va	1	2	皿Aミニチュア	無文	(3.4)	4.7	2.4
						E21	Va						
V-67	119	17	132		I16	Vb	1	1	皿Aミニチュア	楕形	2.1	4.6	2.3

表13 包含層出土石器接合資料一覧

図版 番号	接合資料 番号	調査区名	小グ リッド 名	層位	遺物番号	器種	点数	重量 (g)	石材	欠損	備 考
118	35	接合状應計					27	376.2	頁岩		
		N	6	Vb	6	フレイク	1	8.7			
		N	6	Vb	8	フレイク	1	6.6			
		N	6	Vb	14	フレイク	1	12.1			
		O	6	Vb	46	フレイク	1	1.9			
		O	6	Vb	55	石核	1	69.2	(0)		
		O	6	Vb	56	石核	1	51.8	(0)		
		O	6	Vb	59	フレイク	1	11.4			
		O	6	Vb	60	フレイク	1	4.6			
		O	6	Vb	61	フレイク	1	4.5			
		O	6	Vb	62	フレイク	1	9.5			
		O	6	Vb	63	フレイク	1	1.8			
		O	6	Vb	64	石核	1	62.2	(0)		
		O	6	Vb	65	フレイク	1	25.4			
		O	6	Vb	66	フレイク	1	13.1			
		O	6	Vb	67	石核	1	24.5	(0)		
		O	6	Vb	68	フレイク	1	2.2			
		O	6	Vb	70	フレイク	1	10.7			
		O	6	Vb	71	フレイク	1	2.2			
		O	6	Vb	72	フレイク	1	4.4			
		O	6	Vb	73	フレイク	1	3.8			
		O	6	Vb	95	フレイク	1	2.0			
		O	6	風倒木痕	112	フレイク	1	1.2			
		O	6	Vb	113	フレイク	1	0.8			
		O	6	風倒木痕	115	石核	1	36.9	(0)		
		O	6	風倒木痕	116	フレイク	1	1.7			
O	6	Vb	120	フレイク	1	2.0					
O	7	Vb	74	フレイク	1	1.0					
118	29	接合状應計					4	135.0	凝灰岩		
		G	11	b	Vb	4	フレイク	1	41.0		
		G	12	c	Vb	33	スクレイパー	1	33.5	0	
		K	13	Va	310	Rフレイク	1	33.1			
K	13	Vb	369	フレイク	1	27.4					

図表内容は次のとおりである。

欠損率……0：完形 1：全体の2/3以上残存 2：半分程度残存 3：全体の2/3未満残存 4：欠損後再欠

( ) 付き数字は接合により判断されたものである。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	もりまち くらちがわうがん いせき							
書名	森町 倉知川右岸遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報196）							
シリーズ番号	第196集							
編著者名	種市幸生・菊池慈人・藤井浩・新家水奈・坂本尚史・福井淳一・柳瀬由佳							
編集機関	北海道埋蔵文化財センター（http://www.domaibun.or.jp）							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL(011)386-3231							
発行年月日	西暦 2004年 3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
倉知川右岸遺跡	北海道森町 字栗ヶ丘 7、11-1・2	01345	B-15-25	42° 06′ 02″	140° 32′ 09″	20020507～ 20021031	9,350m <sup>2</sup>	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
倉知川右岸遺跡	集落跡	縄文時代中期前半 後期前葉		配石遺構 竪穴住居跡 フラスコ状土坑 土坑 石組炉 柱穴状ピット 焼土		土器 貝殻文土器 円筒土器上層式 サイベ沢Ⅶ式 トリサキ式  石器 石鏃 スクレイパー 北海道式石冠 扁平打製石器 台石・石皿  土製品・石製品 土偶 鐔形土製品 石冠椽石器 軽石製石製品		縄文時代後期前葉の配石遺構と墓域  土坑覆土より魚類・鳥類の焼骨  土石流堆積物

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第196集

## 森町 倉知川右岸遺跡

平成16 (2004) 年 3 月31日

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
〒069-0832 江別市西野幌685番地 1  
TEL (011)386-3231 FAX (011)386-3238  
<http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社アイワード  
〒060-0033 札幌市中央区北 3 条東 5 丁目 5-91  
TEL (011)241-9341 FAX (011)207-6178  
URL <http://www.iword.co.jp>